

群馬県高崎市大八木町

Ōyagi, Takasaki, Gunma

熊野堂遺跡 第Ⅲ地区

District III of Kumanodō Site

雨壺遺跡

Ametsubo Site

県道柏木沢・高崎線改良に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県高崎市大八木町

熊野堂遺跡 第Ⅲ地区 雨壺遺跡

県道柏木沢・高崎線改良に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1984年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



熊野堂遺跡第Ⅲ地区13号住居址出土 円面碗



熊野堂遺跡第Ⅲ地区 館址状遺構群全景（西より）



雨壺遺跡Ⅳ区62号住居址出土 深鉢形土器



雨壺遺跡出土 青磁・緑釉・灰釉陶器片





遺跡周辺航空写真

序

昭和58年10月、群馬県で開催された「あかぎ国体」は、大きな成果をおさめて終了しました。「あかぎ国体」開催にあたっては、各種競技会場の整備と共に、会場に通ずる道路の整備も実施されました。ここに報告します熊野堂遺跡第III地区と兩壺遺跡は、高崎市に新設の「浜川運動公園」へ通ずる道路として計画された一般県道柏木沢高崎線改良工事の一環として、埋蔵文化財の発掘調査を実施してきたものです。

近年、兩遺跡周辺の地域に近接して流れる井野川流域で、熊野堂遺跡第I・II地区をはじめとして同道遺跡・御布呂遺跡・芦田貝戸遺跡などの調査が続き、平安時代・古墳時代・弥生時代と各期の水田・畠跡が発見されており、この地域が当時から農耕地帯として活用され、重要な生産基盤としての役割を果たしていた様子が解明されつつあります。

兩遺跡は、古墳時代・弥生時代の水田・畠跡が発見された熊野堂遺跡第I・II地区に隣接する台地上にあつて、縄文時代から平安時代にかけての住居が数多く発見され、周辺の耕地と居住地との関係を解明する上で多くの手がかりを与えてくれました。

本遺跡の発掘調査や整理が共に限られた期間の中で遂行し得たのも、関係各機関の方々の御協力と、調査や整理に直接携っていただいた担当者をはじめとする多くの方々の努力の賜物であり、厚く感謝の意を表します。

本報告書が多くの方々の目にとまり、本県古代史の解明の上で有意義に活用されることを願って序といたします。

昭和59年2月29日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. この報告書は、群馬県高崎市大八木町における一般県道柏木沢高崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この報告書は、事業年度等の関係から限定された期間内での、迅速な刊行を基本的編集方針として作成された。発見された遺構・遺物量に比して整理・報告書作成にあてられた期間は短かく満足な整理は困難であったが、上記方針に基いて可能な限りの整理迅速化を行った。そのため埋蔵文化財の記録保存にとつて、この報告書に記された記録がかなり不十分なものであることは否定できず、最低限の事実報告に止めざるを得なかった。
3. 発掘調査地所在地番

熊野堂遺跡Ⅲ地区 高崎市大八木町熊野堂362, 365, 368, 372, 373, 376, 381, 386, 387, 388番地

雨壺遺跡 同 上 字雨壺503, 504, 506, 516, 517, 518番地

同 上 字伊勢廻556, 557, 558, 560, 562, 578, 579番地

群馬郡群馬町大字福島字東浦428番地

4. 発掘調査期間 第1次調査 昭和56年12月7日～57年3月27日 4,200㎡
試掘調査 昭和57年9月27日～9月28日 1,302㎡
第2次調査 昭和57年11月4日～58年1月8日 2,000㎡
5. 事業主体者 群馬県土木部
6. 調査主体者 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
7. 調査組織 事務担当 小林起久治(常務理事)、沢井良之助(事務局長)、白石保三郎(同左)、井上唯雄(調査研究部長)、松本浩一(同左)、近藤平志(庶務課長)、国定均(主事)、笠原秀樹(主事)、山本朋子(主事)、吉田有光(主事)、柳岡良宏(主事)、野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子
調査担当 第1次調査 長谷部達雄 調査研究第2課長 主任調査研究員(昭和58年4月転出)
坂井 隆 調査研究員
小安 和順 調査研究員(昭和58年4月転出)
試掘調査 西田 健彦 群馬県教育委員会文化財保護課文化財保護主事
第2次調査 飯塚 卓二 主任調査研究員
女屋和志雄 調査研究員
井川 達雄 調査研究員
宮下万喜子 囃子員
新井 順二 囃子員
8. 調査協力者 群馬県文化財保護審議委員 山崎 一氏
9. 調査参加者 相沢綱代、青木清子、青木チエ子、青木富子、青木友明、青木初枝、青木栄(五十音順) 青木ユリ子、新井由利子、横川秀明、飯塚麻枝、飯塚スエ、飯塚ソノ、石井美津恵、磯田美子、植杉妃代子、植原徳子、生方茂、江積久子、岡田サカエ、岡田フサ、岡田好文

大沢トリ, 大塚敏子, 大塚富子, 大森ヤエ子, 小田切豊吉, 小野関晴美, 岸修一, 岸トヨ子
岸ノブ江, 木村知恵子, 桑原美子, 小池弘美, 小池巻枝, 小池雅子, 小山藤江, 斉藤昭子
斉藤キク, 斉藤キシ子, 斉藤テル子, 斉藤ナカ子, 斉藤ハツエ, 斉藤ハルエ, 斉藤久子, 斉藤フサ
斉藤マサ江, 斉藤美知子, 斉藤睦子, 斉藤茂平, 斉藤八重子, 坂井もん, 桜井都巳子, 桜沢順子
桜沢セン, 静シズ, 清水健夫, 鈴木千里, 関根幸子, 高尾ハル, 高尾優子, 高木真左男
高橋キクエ, 高橋二郎, 滝沢千恵子, 田島キク, 田島トクエ, 田島文代, 田島百合江, 只木良美
田村絹子, 田村トミ子, 塚越澄江, 塚越ハツエ, 塚越昭美子, 角田ゆき, 砥柄ハツエ, 富田澄枝
友松ハマ江, 友松ヒデ子, 中沢八千代, 中島シズエ, 中村宗太郎, 南雲三代子, 根岸ツナ子
羽島勝, 花田たか子, 樋口伊勢生, 福島朝子, 福島亀寿, 福島キン子, 福島フミ子, 福島松代
福田京子, 福田琴江, 福田登喜江, 福田満寿美, 宮沢愛子, 茂木ナツ子, 矢島トミエ, 矢島みさお
山口仁一, 山内久子, 吉田イネコ, 吉田よし枝

10. 整理・報告書作成期間 基本整理 昭和57年度 報告書作成 昭和58年4月1日～59年2月29日
11. 整理組織 事務担当 小林起久治(常務理事), 白石保三郎(事務局長), 松本浩一(調査研究部長),
大沢秋良(管理部長), 秋池 武(調査研究第2課長), 国定 均(主事),
笠原秀樹(主事), 山本朋子(主事), 吉田有光(主事), 柳岡良宏(主事)
野島のお江, 吉田恵子, 吉田笑子, 並木綾子, 今井もと子
- 整理担当 編集・整理統括責任者 坂井 隆(調査研究員)
- 遺物整理担当 福島恵理子
- 遺構図整理担当 須田まさ江
- 整理班員 石井弘子, 霜田恵子, 須田幸子, 関口貴子, 永井真由美,
山田光子, 吉本千保(五十音順)
- 遺物写真 佐藤 元彦
- 保存処理 関 邦一, 宮沢 健二

12. 本書の作成にあたり下記の各氏よりご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表する。(敬称略)
- 新井悦子, 飯田陽一, 石坂 茂, 石塚久則, 石守 晃, 岩崎泰一, 大江正行, 大西雅広, 神谷佳明,
坂口 一, 鈴木幹子, 田口一郎, 辻口敏子, 徳江秀夫, 中沢 悟, 原 雅信, 平野進一, 藤巻幸男,
柳沢清一, 山口逸弘, 綿貫邦男(五十音順)

13. 執筆担当者

本書執筆は、発掘調査担当者である長谷部・坂井・小安・飯塚・女屋・井川・宮下・新井が共同して行った。各遺構本文は調査各担当が執筆し、文末に名を記して調査責任を明らかにした。遺物観察表は、新井(縄文), 飯塚(弥生・古式土師器), 女屋・井川・宮下(古墳・古代), 坂井(中世・金属器)が各分担執筆を行い、新井・飯塚・女屋・坂井が成果のまとめを行った。ただし用語の統一などの点で全て坂井が加筆・修正をした。そのため上記各記述の文責は、坂井にある。

その他に次の各氏に執筆をお願いした。多忙の中、快く執筆して頂いた各氏に感謝の意を表する。

- | | | |
|--------------|-------|--------------|
| 第V章第1節 本文・図版 | 麻生敏隆氏 | 本事業団調査研究員 |
| 第V章第4節(3) 本文 | 大江正行氏 | 本事業団主任調査研究員 |
| 第V章第5節 本文・図版 | 山崎 一氏 | 群馬県文化財保護審議委員 |

14. 出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 本書は、例言第2項に記した基本方針内で、調査により検出された遺構・遺物を最大限分かりやすく記録することに務めて作成した。
2. 本書は、熊野堂遺跡Ⅲ地区と雨壺遺跡の両遺跡の報告であるが、各遺跡の遺構・遺物の記述は、それぞれⅢ章・Ⅳ章に分け、経過(第Ⅰ章)・遺跡の立地と調査方法(第Ⅱ章)・調査のまとめ(第Ⅴ章)は、両遺跡の内容を併せた。
3. 遺構 平面図・断面図の記録のあるものも全て掲載し、出土遺物より縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代(奈良・平安時代)・中世・時期不明の順に節を設けた。ただし各時代の概念は、厳密ではなく便宜的なものであり、境界に属すると思われるものを中心に、読者の批判を受けたい。また各節内の順序は、竪穴住居址・掘立柱建物址・溝・土塚・その他の各遺構ごとに遺構番号順配列を原則としたが、明瞭な時期差のある場合や断面の都合により、必ずしも整然とはしていない。遺構の検索には、巻末の遺構索引ならびに各節文頭の遺構分布図及び別刷全体図を利用されたい。なお住居址掘り方図は省略した。
4. 各遺構の配列 遺構実測図・本文・遺物実測図・遺物観察表の順に並べることを原則としたが、紙面の都合で例外がある。巻末の遺構索引で検索されたい。
5. 遺構の略称 竪穴住居址→住 掘立柱建物址→掘立 竪穴状遺構→竪穴
6. 遺構に伴う遺物の認定 竪穴住居址の場合は、平面・立面の記録があり、カマド/炉内もしくは床面に近いものを原則とした。次に掘り方出土のものを使い、覆土出土のみ記録されているものは、上記出土のものと同種・同形の場合併記することを原則とした。その他の遺構の場合は、明瞭な流入遺物と考えられるもの以外は、覆土中のもも取り上げた。観察表出土状態を参照されたい。(ただし遺感ながらこの原則を完全には貫徹していない。)
7. 遺構計測値 掘りこみの計測値は、下場計測を原則とした。
8. 主軸方位 竪穴住居址の場合は、カマドを持つものは、カマドのある辺の走向に対し垂直な線の座標北に対する角度をもってNx'Eのように表現した。末尾のE/Wは、カマドのある辺を示す。カマドのないものは、長辺に対して平行な主柱穴を結ぶ線の座標北に対する角度の平均値をもってNx'Wのように表現した。末尾のE/Wは、鋭角方位を示す。その他の遺構も後者に準ずる。なお調査・整理上の誤認により、本書で使用した全ての方位記号の北方向は、座標北より3°西偏して記されている。
9. 土層 第Ⅱ章第3節に記した基本土層は、第④層のように表現した。しかし遺構覆土等は必ずしもこれに対応していないため、第3層のように表現し説明を併記した。
10. 遺物 Ⅲ章・Ⅳ章各第6節に記したように、両遺跡合計で遺物収納箱101箱の出土遺物のうち、実測を行ったのは計1,748個体で、その4割を第5項に基づいて遺構に伴う遺物として報告し、残りの遺物は遺構外出土遺物としたが、紙面の都合で掲載できたのは全実測遺物の5割である。(871個体)
11. 上記遺物には、雨壺遺跡Ⅲ区・Ⅳ区で行われた試掘調査による出土遺物は、含まれていない。
12. 遺物実測図 主体を占める土器類については、可能な限り表現方法の統一をはかって、成形・調整技法を表すようにしたが、専門観察者による実測が不可能であったため徹底しておらず、また観察表記述との差も除去し得なかった。以下径しか残存してなく、径推定が不可能なものは、中心線部分を空白にして示した。縮尺は、原則として実物の $\frac{1}{2}$ にしたが、大きさに応じて実物大から $\frac{1}{4}$ までに変えたもの








もある。これらについては、その縮尺率を明示した。(1/2の場合は、明示していない。)

13. **土器の呼称** 土器類の過半は、古代に属するものであり、そのうち平安時代のものについては、器種・器形の呼称について「清里・陣馬遺跡」(本事業団、1981年)に基本的に準じた。ただし炭素吸着により黒色処理された土器については、これにとらわれず「黒色土器」とした。しかしこれは、便宜的呼称であり、今後の読者の批判を待ちたい。
14. **色調呼称** 【新版標準土色帖】(農林省農林水産技術会議事務局監修、1976年)に準じたが、色標番号は省略した。
15. **実測図透写製図** 遺構図・遺物図ともに下記業者に委託した。
遺構図 (株) 富永調査事務所 遺物図 (株) 測研
16. **写真図版** 原則として本文の順序に従って遺構写真と出土遺物写真の併置を試みた。遺物写真番号は、実測図番号と対応している。巻末の遺構索引には、写真図版番号も併記してあるので、検索に利用されたい。
17. **調査成果のまとめ** 例言第2項の基本方針に従って、本書では十分な考察を行っていない。個々の問題点の所在を一部明らかにする程度にとどまっており、今後本書の積極的利用・批判によって岡遺跡地域の過去の生活像の復元を読者に期したい。
なお熊野堂遺跡は、上越新幹線用地の群馬町内が第I地区、高崎市内在が第II地区であり、本書の第III地区と併せて3地区でこれまで発掘調査がなされた。第I地区の報告書(現在印刷中)も本書と同様に第I地区のみの問題点を指摘するだけで、熊野堂遺跡の全体像については第II地区の報告書(1990年刊行計画)で展開される予定である。
18. 遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーンは、下記の内容の表現である。

遺 構 実 測 図

	調査範囲外		地山
	焼土		榛名山FA火山灰
	浅間山B・C軽石		石
	灰		粘土
	炭化物		

遺 物 実 測 図

	釉		黒色処理(有研磨)
	黒色処理(無研磨)		中性炎焼成
	煤附着部分		2次焼成部分
	石器・石製品の使用痕		

目 次

序	
卷頭図版	
例 言	
凡 例	

第I章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過	3
第2節 調 査 経 過	4

第II章 遺跡の立地と調査方法

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境	5
第2節 調 査 方 法	12
第3節 基 本 土 層	17

第III章 熊野堂遺跡第III地区

第1節 弥生時代の遺構	18
第2節 古墳時代の遺構	27
第3節 古代の遺構	47
第4節 中世の遺構	78
第5節 時期不明の遺構	93
第6節 遺構外出土の遺物	102

第IV章 雨 壺 遺 跡

第1節 縄文時代の遺構	109
第2節 弥生時代の遺構	123
第3節 古墳時代の遺構	149
第4節 古代の遺構	156
第5節 時期不明の遺構	279
第6節 遺構外出土の遺物	305

第V章 調査のまとめ

第1節 旧石器時代	麻生敏隆	321
第2節 縄文時代		322
第3節 弥生時代		323
第4節 古墳時代・古代		325
(1) 集落変遷について		325
(2) 出土円面硯について		331
(3) 出土古瓦について	大江正行	332
(4) 出土置きカマド・甕について		333
第5節 中世館址状遺構群の性格について	山崎 一	335
附 録 遺構索引		342

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の地形図	6	第 56 図	5・6号竪立、柱穴列、12号土	第107図	49号住、27号土坑平面図	130	
第 2 図	周辺の遺跡①縄文～古墳時代	7	坂平面図	70	第108図	49号住出土遺物①	130	
第 3 図	周辺の遺跡②古代～中世	8	第 57 図	5・6号竪立出土遺物図	71	第109図	49号住 # (2)	131
第 4 図	調査範囲及び小字名図	13	第 58 図	柱穴列出土遺物図	72	第110図	53・72号住平面図	132
第 5 図	基本土層断面模式図	15	第 59 図	7号竪立平面図	73	第111図	53号住出土遺物図	132
			第 60 図	7号竪立出土遺物図	74	第112図	57号住平面図	133
			第 61 図	9・15号溝出土遺物図	74	第113図	57号住出土遺物図	134
			第 62 図	8・9・15号溝平面図	75	第114図	69号住平面図	134
			第 63 図	水田址、17号土坑平面図	77	第115図	69号住出土遺物図	135
			第 64 図	中世遺構分布概念図	78	第116図	3号竪穴平面図及び出土遺物	135
			第 65 図	館址状遺構群断面図	80			
			第 66 図	館址状遺構群平面図	81	第117図	71号住出土遺物図①	136
			第 67 図	館址状遺構群出土遺物図①	86	第118図	71号住平面図	137
			第 68 図	館址状遺構群 # (2)	87	第119図	71号住出土遺物図②	138
			第 69 図	14号溝平面図	89	第120図	84号住平面図	139
			第 70 図	14号溝出土遺物図	90	第121図	84号住出土遺物図	140
			第 71 図	1号竪立出土遺物図	91	第122図	86号住出土遺物図	141
			第 72 図	1号竪立平面図	92	第123図	86号住平面図	142
			第 73 図	時期不明遺構分布概念図	93	第124図	90号住平面図	143
			第 74 図	18号住平面図	94	第125図	90号住遺物出土状態図	144
			第 75 図	20号住平面図	94	第126図	90号住出土遺物図①	145
			第 76 図	22号住平面図	95	第127図	90号住 # (2)	146
			第 77 図	9号土坑平面図	95	第128図	不明遺構平面図	147
			第 78 図	4号竪立平面図	97	第129図	不明遺構出土遺物図	148
			第 79 図	8号竪立平面図	98	第130図	古墳時代遺構分布概念図	149
			第 80 図	9号竪立平面図	99	第131図	1号住平面図	150
			第 81 図	3・4号溝平面図	101	第132図	61号住出土遺物図	150
			第 82 図	縄文・弥生時代遺構外出土遺物	102	第133図	85号住出土遺物図	151
			第 83 図	古墳時代・古代遺構外出土遺物①	104	第134図	85号住平面図	152
			第 84 図	古墳時代・古代 # (2)	105	第135図	80号住平面図	153
			第 85 図	中世遺構外出土遺物図	108	第136図	80号住出土遺物図	153
						第137図	4・5・7号溝平面図	154
						第138図	5・7号溝出土遺物図	155
						第139図	古代遺構分布概念図	156
						第140図	1号住平面図	157
						第141図	1号住出土遺物図	158
						第142図	2号住平面図	159
						第143図	2号住出土遺物図	160
						第144図	3号住、7号土坑平面図	162
						第145図	3号住出土遺物図	163
						第146図	4・6号住、8号土坑平面図	164
						第147図	4・6号住出土遺物図	165
						第148図	7・8号住平面図	166
						第149図	7・8号住出土遺物図	167
						第150図	10号住、2号溝土坑平面図	169
						第151図	10号住出土遺物図	170
						第152図	11・12・34号住平面図	172
						第153図	11・34号住出土遺物図	173
						第154図	13号住平面図	174
						第155図	13号住出土遺物図	175
						第156図	14～16号住、12号土坑平面図	176
						第157図	14・15号住、12号土坑出土遺物	177
						第158図	14号住出土遺物図②	178
						第159図	17号住平面図	179
						第160図	17号住出土遺物図	179
						第161図	19号住平面図	180

兩 臺 遺 跡

第 32 図	古代遺構分布概念図	46	第 86 図	縄文時代遺構分布概念図	109
第 33 図	4号住平面図	48	第 87 図	22号住平面図	110
第 34 図	4号住出土遺物図	49	第 88 図	22号住出土遺物図	112
第 35 図	11号住、3号井戸平面図	50	第 89 図	62号住平面図	113
第 36 図	11号住出土遺物図	50	第 90 図	62号住出土遺物図①	114
第 37 図	13号住平面図	51	第 91 図	62号住 # (2)	115
第 38 図	13号住出土遺物図	52	第 92 図	83号住平面図	117
第 39 図	14・17号住平面図	53	第 93 図	83号住出土遺物図	118
第 40 図	14号住出土遺物図	55	第 94 図	2号竪穴、43号土坑平面図	119
第 41 図	15号住平面図	55	第 95 図	2号竪穴、43号土坑出土遺物	119
第 42 図	15号住出土遺物図①	56	第 96 図	14・15号溝、14号土坑、1号	120
第 43 図	15号住 # (2)	57	ピット群平面図	120	
第 44 図	16号住平面図	60	第 97 図	14号溝出土遺物図	121
第 45 図	16号住出土遺物図	60	第 98 図	28・33号土坑平面図	122
第 46 図	1号住平面図	61	第 99 図	28・33号土坑出土遺物図	122
第 47 図	1号住出土遺物図①	62	第100図	弥生時代遺構分布概念図	123
第 48 図	1号住 # (2)	62	第101図	67号住平面図	124
第 49 図	12号住平面図	63	第102図	67号住出土遺物図	125
第 50 図	12号住出土遺物図	64	第103図	47号住平面図	127
第 51 図	12号住誤入遺物図	65	第104図	47号住出土遺物図	127
第 52 図	10号住平面図	66	第105図	48号住平面図	128
第 53 図	10号住出土遺物図	67	第106図	48号住出土遺物図	128
第 54 図	2・3号竪立平面図	68			
第 55 図	2号竪立出土遺物図	69			

第162回	19号住出土遺物	181	第211回	55・56号住出土遺物	228	第260回	21・35・37・38号土坑出土遺物	278
第163回	23号住平断面	182	第212回	58号住、24号土坑平断面	230	第261回	時期不明遺構分布概念	279
第164回	23号住出土遺物(1)	183	第213回	24号土坑出土遺物	230	第262回	5号住平断面	280
第165回	23号住 # (2)	184	第214回	58号住出土遺物	231	第263回	18号住平断面	280
第166回	23号住 # (3)	185	第215回	59・63号住平断面	232	第264回	20号住平断面	281
第167回	23号住 # (4)	186	第216回	59号住出土遺物	233	第265回	21号住、13号土坑平断面	281
第168回	24号住平断面	189	第217回	63号住出土遺物	234	第266回	39号住平断面	282
第169回	24号住出土遺物	190	第218回	60号住平断面	234	第267回	43号住平断面	283
第170回	25・26号住、45号土坑平断面	191	第219回	60号住出土遺物	235	第268回	87号住平断面	283
		192	第220回	64号住平断面	235	第269回	89号住平断面	284
第171回	25・26号住出土遺物(1)	192	第221回	64号住出土遺物	236	第270回	1号竪立平断面	285
第172回	25・26号住 # (2)	193	第222回	68号住平断面	236	第271回	5号竪立平断面	286
第173回	27・28号住平断面	194	第223回	68号住出土遺物	237	第272回	8号竪立平断面	286
第174回	27・28号住出土遺物(1)	195	第224回	74・78号住平断面	239	第273回	9号竪立平断面	287
第175回	28号住出土遺物(2)	196	第225回	74・78号住出土遺物	240	第274回	2号ロット群・柱穴列平断面	292
第176回	29号住、15号土坑平断面	197	第226回	73・75号住平断面	242	第275回	1・2・6号溝平断面	293
第177回	29号住出土遺物(1)	198	第227回	75号住出土遺物	243	第276回	12号溝平断面	295
第178回	29号住 # (2)	199	第228回	76・77号住、平断面	244	第277回	3号堀土平断面	295
第179回	30号住平断面	202	第229回	76・77号住出土遺物	245	第278回	3・8号溝、47号土坑平断面	296
第180回	30号住出土遺物(1)	202	第230回	79・88号住出土遺物	246	第279回	17号溝平断面	298
第181回	30号住 # (2)	203	第231回	79・88号住平断面	247	第280回	18・25・31・40号土坑平断面	300
第182回	31号住平断面	203	第232回	81号住平断面	248	第281回	19・29・30・34号土坑平断面	301
第183回	31号住出土遺物	204	第233回	81号住出土遺物	248	第282回	19号溝平断面	302
第184回	33号住出土遺物	204	第234回	2号竪立出土遺物	249	第283回	1号竪穴・1号土坑平断面	303
第185回	33号住平断面	205	第235回	2号竪立・11号土坑平断面	250	第284回	配石平断面	304
第186回	35・36号住平断面	206	第236回	3号竪立平断面	251	第285回	縄文時代遺構外出土遺物(1)	305
第187回	35・36号住出土遺物	207	第237回	3号竪立出土遺物	252	第286回	縄文時代遺構外出土遺物(2)	307
第188回	37号住平断面	208	第238回	4号竪立平断面	252	第287回	弥生時代遺構外出土遺物及び不明石製品	309
第189回	37号住出土遺物	209	第239回	4号竪立出土遺物	253	第288回	古墳時代・古代遺構外出土遺物(1)	311
第190回	38・45号住、22号土坑平断面	211	第240回	6号竪立出土遺物	257	第289回	古墳時代・古代 # (2)	312
		212	第241回	6号竪立平断面	257	第290回	古墳時代・古代 # (3)	313
第191回	45号住出土遺物	212	第242回	7号竪立平断面	255	第291回	古墳時代・古代 # (4)	314
第192回	40・41号住平断面	212	第243回	7号竪立出土遺物	256	第292回	中世遺構外出土遺物	319
第193回	41号住出土遺物	213	第244回	1号竪立平断面	256	第293回	金属遺構外出土遺物	320
第194回	42号住平断面	213	第245回	1号堀土出土遺物	256	第294回	石造遺構外出土遺物	320
第195回	42号住出土遺物	213	第246回	9・10・11号溝平断面	257	第295回	石造遺構外出土遺物	321
第196回	44号住平断面	214	第247回	9号溝出土遺物(1)	259	第296回	他遺跡出土神佛円面硯	331
第197回	44号住出土遺物	215	第248回	9号溝 # (2)	260	第297回	他遺跡出土土器カマド・甕	334
第198回	46・66号住平断面	216	第249回	10号溝出土遺物(1)	262	第298回	熊野堂址推定	337
第199回	46号住出土遺物(1)	217	第250回	10号溝 # (2)	263	第299回	高峠附近中世環濠遺構分布図	340
第200回	46号住 # (2)	218	第251回	13・16号溝、18号土坑平断面	265	付 図 1	熊野堂跡跡地・熊野遺跡跡地	別冊
第201回	66号住出土遺物	220	第252回	13・16号溝断面	266	付 図 2	熊野堂跡跡地地区館址遺構跡地地形	別冊
第202回	50・82号住平断面	222	第253回	13・16号溝出土遺物	267			
第203回	50号住出土遺物	222	第254回	18号土坑出土遺物	269			
第204回	54号住平断面	223	第255回	18・23・25号溝平断面	270			
第205回	54号住出土遺物	223	第256回	23号溝出土遺物	271			
第206回	51・65号住平断面	224	第257回	20・22・24号溝平断面	272			
第207回	51号住出土遺物	225	第258回	20・21・24号溝、道路状遺構	274			
第208回	52号住平断面	226		出土遺物				
第209回	52号住出土遺物	226	第259回	20・21・35~38号土坑平断面	276			
第210回	55・56号住平断面	227						

表 目 次

熊野堂遺跡第Ⅲ地区		第54表 53号住居址出土遺物觀察表	132	第114表 68号住居址出土遺物觀察表(1)	237
第1表 5号住居址遺物觀察表	21	第55表 57号住居址	134	第115表 68号住居址	(2) 238
第2表 8号住居址	23	第56表 69号住居址	135	第116表 74・78号住居址	241
第3表 21号住居址	25	第57表 3号竪穴	136	第117表 75号住居址	243
第4表 11号土壇	26	第58表 71号住居址	138	第118表 76・77号住居址	(1) 245
第5表 9号住居址	31	第59表 84号住居址	141	第119表 77号住居址	(2) 245
第6表 2号住居址	33	第60表 86号住居址	141	第120表 79・88号住居址	246
第7表 6号土壇	34	第61表 90号住居址	146	第121表 81号住居址	249
第8表 6号住居址	(1) 37	第62表 不明遺構	147	第122表 2号獨立柱建物址	249
第9表 6号住居址	(2) 38	第63表 61号住居址	151	第123表 3号獨立柱建物址	251
第10表 3号住居址	41	第64表 85号住居址	153	第124表 4号獨立柱建物址	253
第11表 19号住居址	43	第65表 80号住居址	153	第125表 6号獨立柱建物址	253
第12表 7・16号溝	46	第66表 5・7号溝	155	第126表 7号獨立柱建物址	256
第13表 4号住居址	49	第67表 1号住居址	158	第127表 1号焼土	256
第14表 11号住居址	50	第68表 2号住居址	161	第128表 9号溝	(1) 260
第15表 13号住居址	(1) 52	第69表 3号住居址	163	第129表 9号溝	(2) 261
第16表 13号住居址	(2) 53	第70表 4・6号住居址	165	第130表 10号溝	(1) 263
第17表 14号住居址	54	第71表 7・8号住居址	168	第131表 10号溝	(2) 264
第18表 15号住居址	57	第72表 10号住居址	171	第132表 13・16号溝	268
第19表 16号住居址	59	第73表 11・34号住居址	173	第133表 18号土壇	269
第20表 1号住居址	62	第74表 13号住居址	175	第134表 23号溝	271
第21表 12号住居址	65	第75表 14・15号住居址、12号土壇	178	第135表 20・21・24号溝	275
第22表 10号住居址	67	第77表 17号住居址	179	第136表 21・35・37・38号土壇	278
第23表 2号獨立柱建物址	69	第78表 19号住居址	181	第137表 37号土壇金屬器	278
第24表 5・6号獨立柱建物址	72	第79表 23号住居址	(1) 183	第138表 獨立柱建物址遺構表(1)	287
第25表 柱穴列	72	第80表 23号住居址	(2) 186	第139表 獨立柱建物址遺構表(2)	288
第26表 7号獨立柱建物址	74	第81表 23号住居址	(3) 187	第140表 竪穴住居址遺構表(1)	288
第27表 9・15号溝	76	第82表 23号住居址	(4) 188	第141表 竪穴住居址遺構表(2)	289
第28表 竪穴遺構群	87	第83表 24号住居址	190	第142表 竪穴住居址遺構表(3)	290
第29表 竪穴遺構群	(2) 88	第84表 25・26号住居址	193	第143表 竪穴住居址遺構表(4)	291
第30表 14号溝	(1) 91	第85表 27・28号住居址	(1) 196	第144表 竪穴遺構群外出土遺物觀察表	306
第31表 14号溝金屬器	(2) 91	第86表 28号住居址	(2) 196	第145表 織文石器	308
第32表 1号獨立柱建物址	91	第87表 29号住居址	(1) 200	第146表 弥生時代	310
第33表 竪穴住居址表	96	第88表 29号住居址	(2) 201	第147表 古墳時代・古代	(1) 314
第34表 獨立柱建物址表	100	第89号 29号住居址	(3) 201	第148表 古墳時代・古代	(2) 315
第35表 織文石器遺構群外出土遺物觀察表	103	第90表 30号住居址	203	第149表 古墳時代・古代	(3) 316
第36表 弥生時代	103	第91表 31号住居址	204	第150表 古墳時代・古代	(4) 317
第37表 古墳時代・古代	(1) 106	第92表 33号住居址	204	第151表 古墳時代・古代	(5) 318
第38表 古墳時代・古代	(2) 107	第93表 35・36号住居址	(1) 207	第152表 中世	319
第39表 中世	108	第94表 35・36号住居址	(2) 208	第153表 金屬器	320
第40表 金屬器	108	第95表 37号住居址	210	第154表 銅鏡	320
兩 卷 遺 跡		第96表 45号住居址	212	第155表 弥生時代遺構分布表	324
第41表 22号住居址出土遺物觀察表(1)	111	第97表 41号住居址	213	第156表 古墳時代・古代遺構分布表	325
第42表 22号住居址	(2) 112	第98表 42号住居址	214	第157表 出土金屬器一覽表	328
第43表 62号住居址	(1) 116	第99表 44号住居址	215	第158表 熊野堂Ⅲ古代住居址遺物組成表	328
第44表 62号住居址	(2) 117	第100表 46号住居址	(1) 218	第159表 兩卷古代住居址遺物組成表(1)	329
第45表 83号住居址	117	第101表 46号住居址	(2) 219	第160表 兩卷古代住居址遺物組成表(2)	330
第46表 2号竪穴遺構・43号土壇	119	第102表 66号住居址	221	第161表 出土墓室土器一覽表	331
第47表 14号溝出土遺物觀察表	121	第103表 50号住居址	223	第162表 出土古瓦一覽表	332
第48表 28・33号土壇	122	第104表 54号住居址	225	第163表 周辺區域龍鏡調查一覽表	341
第49表 67号住居址	126	第105表 51号住居址	226		
第50表 47号住居址	127	第106表 52号住居址	225		
第51表 48号住居址	129	第107表 55・56号住居址	229		
第52表 49号住居址	(1) 131	第108表 58号住居址・24号土壇出土	231		
第53表 49号住居址出土遺物觀察表(2)	132	第109表 59号住居址	(1) 233		
		第110表 59号住居址	(2) 234		
		第111表 63号住居址	234		
		第112表 60号住居址	235		
		第113表 64号住居址	236		

写真図版目次

巻頭図版1	熊野堂遺跡第Ⅲ地区13号住居址出土 円面硯 熊野堂遺跡第Ⅲ地区 館址状遺構群全景(西より)
巻頭図版2	雨倉遺跡Ⅳ区62号住居址出土 深鉢形土器 雨倉遺跡出土 青磁・緑釉・灰釉陶器片
巻頭図版3	遺跡周辺航空写真

熊野堂遺跡第Ⅲ地区

図版 1	調査範囲西端より井野川低地を臨む 中央部東向き上がり状況
図版 2	4・5・7号住居址重複状態(西より) 21号住居址掘り方(南より)
図版 3	5・8・21号住居址出土遺物
図版 4	9号住居址全景(東より) 9号住居址遺物出土状態
図版 5	9号住居址出土遺物
図版 6	6号住居址(西より) 3号住居址遺物出土状態
図版 7	2・3・6・19号住居址出土遺物
図版 8	4号住居址遺物出土状態(西より) 4号住居址カマド遺物出土状態
図版 9	13号住居址遺物出土状態 15号住居址カマド土層断面
図版 10	4・11・13・14・15・16号住居址出土遺物
図版 11	10号住居址カマド遺物出土状態 10号住居址出土遺物
図版 12	1・10号住居址出土遺物 浅間川稲石下水田址(北東より)
図版 13	5・6号竪立柱建物址、柱穴列(南より) 7号竪立柱建物址(西より)
図版 14	12号住居址、7号竪立柱建物址、15号溝出土遺物
図版 15	館址状遺構群(西より) 館址状遺構群(東より、手前は唐沢川)
図版 16	5号溝と1号竪穴状遺構(南より) 5号溝(北より)
図版 17	2号ピット群と4号竪穴状遺構(南東より) 3号ピット群と3号竪穴状遺構(南西より)
図版 18	6号溝屈曲部(北西より、左は2号竪穴状遺構) 1号井戸址(西より)
図版 19	2号竪穴状遺構 2号竪穴状遺構土層堆積状態
図版 20	14号溝(南より) 館址状遺構群及び中世遺構出土遺物
図版 21	遺構外出土遺物

雨倉遺跡

図版 22	熊野堂遺跡館址状遺構群(西)から臨む雨倉遺跡 Ⅲ・Ⅳ区より西を臨む
図版 23	I区全景(東より) II区全景(西より)
図版 24	Ⅲ～V区全景(西より) Ⅳ区全景(東より)
図版 25	V区全景(東より) 調査風景
図版 26	22号住居址全景 22号住居址遺物出土状態
図版 27	62号住居址全景(南東より) 62号住居址遺物出土状態
図版 28	22・62号住居址出土遺物
図版 29	67号住居址遺物出土状態(北東より) 67号住居址遺物出土状態

図版 30	47号住居址遺物出土状態(東より) 48号住居址遺物出土状態
図版 31	48・67号住居址出土遺物
図版 32	49号住居址遺物出土状態(東より) 49号住居址焼土
図版 33	57号住居址(東より) 71号住居址全景(東より)
図版 34	84号住居址全景(南より) 84号住居址遺物出土状態
図版 35	49・69・71・84・86号住居址、不明遺構出土遺物
図版 36	90号住居址全景(南西より) 90号住居址遺物出土状態①
図版 37	90号住居址遺物出土状態② 不明遺構遺物出土状態(東より)
図版 38	90号住居址出土遺物
図版 39	61号住居址全景(南西より) 61号住居址土層堆積状態
図版 40	85号住居址全景(北より) 61・80・85号住居址出土遺物
図版 41	1号住居址カマド附近 2号住居址遺物出土状態
図版 42	1・2・4・7・10号住居址出土遺物
図版 43	13号住居址遺物出土状態(西より) 13号住居址カマド及び貯蔵穴
図版 44	13・14・19・34号住居址出土遺物
図版 45	23号住居址遺物出土状態(西より) 23号住居址カマド
図版 46	23号住居址出土遺物
図版 47	25・26号住居址遺物出土状態(西より) 25号住居址カマド
図版 48	24・25・26号住居址出土遺物
図版 49	29・30号住居址遺物出土状態(西より) 29号住居址カマド
図版 50	27・28・29・33号住居址出土遺物
図版 51	35号住居址カマド 35号住居址出土遺物
図版 52	36・37号住居址カマド
図版 53	37・54・55・56号住居址出土遺物
図版 54	46号住居址カマド 46号住居址貯蔵穴
図版 55	44・46・50・58・59・63・64号住居址出土遺物
図版 56	74・78号住居址 74号住居址カマド
図版 57	51・60・66・68・74・81・88号住居址、24号土坑 出土遺物
図版 58	77号住居址(西より) 77号住居址出土遺物
図版 59	1・2号竪立柱建物址
図版 60	5号竪立柱建物址(西から) 6号竪立柱建物址(東から)
図版 61	10号溝遺物出土状態(南より)
図版 62	10号溝出土遺物
図版 63	道路状遺構、21・24号溝(南より) 道路状遺構土層断面
図版 64	8号溝北側土層断面 17号溝(北より)
図版 65	18号土坑遺物出土状態(西より) 配石遺構(南より)
図版 66	9・13・20・23号溝、18・21・37号土坑、道路状 遺構、1号坑出土遺物
図版 67	遺構外出土遺物①
図版 68	遺構外出土遺物②

熊野堂遺跡 第Ⅲ地区
雨壺遺跡

第I章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過

昭和58年度に実施された「あかぎ国体」は無事終了した。高崎市には3競技の会場として、同市浜川町に「浜川運動公園」を新設した。このための交通手段の確保として、県は県道高崎一渋川線・柏木沢一高崎線を結ぶ道路の新設を計画した。高崎市大八木町地内の550mの区間である。

この計画発表にあたり、県土木部道路建設課は県教育委員会に対して、埋蔵文化財包蔵地の有無について諮問がなされ、県教育委員会では、上越新幹線建設事業に伴う発掘調査、あるいは東電の鉄塔移動に伴う発掘調査の結果に基づいて、遺跡の分布範囲を指摘した。

その結果、県土木部では、路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施するための予算的措置をとった。そして、事業を直接実施する高崎土木事務所と調整に入った。計画では昭和55年度発掘調査の実施予定であったが、用地買収・調査体制に問題があり、次年度に発掘調査を実施するに至った。昭和56年度5月に入って調査の具体的調整が始まった。

県教育委員会はこの段階で、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下 群埋文）を調査主体者として実施する方針をとり、群埋文に調査依頼をした。県土木部道路建設課は県教育委員会あてに調査依頼をし、さらに県教育委員会から群埋文に正式依頼が提出された。しかしこれに対して、群埋文では多くの発掘調査をかかえ調整がつかず回答を保留した。9月26日に本調査の受託を決定し、調査の計画・経費積算書の送付を行い、県教育委員会に調整を委ねた。その結果、具体的に調査の打合せを高崎土木事務所と行い、次のような調整結果となった。

1. 調査は昭和56年度事業とし昭和56年11月以降に実施すること、但し調査範囲内東側に住宅が存在していることから、その範囲については西側の発掘調査の結果と残存状況を確認した後に実施すること。
2. 整理については、当該年度は不可能なので後年度に実施することとし、費用は発掘調査経費についてのみ当該年度配分を受ける。
3. 整理費については、11月24日付の覚書で確認する。

これに基づいて、11月28日群埋文と群馬県（土木部道路建設課）との間で委託契約を締結し、12月1日より発掘調査が実施された。さらに昭和57年度は前年度調査の整理事業を実施する計画であったが、未調査であった住宅地部分の住宅解体・移築が完了したため、前回の調査成果を踏まえて試掘調査を行なった。その結果、遺跡を確認し残存状況が良好であることが判明して、発掘調査を実施することになった。

県教育委員会からの整理事業を変更し、昭和57年10月18日県教育委員会の発掘調査実施の依頼を受け、11月1日から調査を開始した。（長谷部）

第2節 調査経過(概要)

- 第1次調査** (熊野堂遺跡第Ⅲ地区, 雨査遺跡Ⅰ・Ⅱ区) 1981年12月7日～82年3月27日
- 12月7日 現場調査事務所設置, 器材搬入開始
- 10日 重機により熊野堂遺跡の表土掘削作業開始(～17日)。
- 14日 熊野堂遺跡, 西端より遺構確認作業開始。水田址調査(～16日)。
- 16日 熊野堂1～6号住調査(～2月9日)。
- 24日 館址状遺構群調査(～1月28日)。
- 1月8日 熊野堂杭打ち作業(～12日)。
- 19日 熊野堂8～10号住調査(～2月10日)。
- 22日 熊野堂11～13号住調査(～2月10日)。
- 29日 熊野堂14～17号住調査(～2月19日)。山崎 一氏, 館址状遺構群について指導。
- 2月2日 重機により雨査遺跡の表土掘削作業開始(～9日), 遺構確認作業開始。
- 6日 熊野堂1～9号掘立調査(～25日)。
- 13日 熊野堂19～21号住調査(～23日)。
- 15日 雨査1～3号住調査(～3月6日)。
- 17日 雨査4～6号住調査(～3月2日)。
- 26日 雨査7～12号住調査(～3月16日)。熊野堂調査終了。
- 3月2日 雨査13～17号住, 9～12号溝調査(～3月19日)。
- 3月6日 雨査18～23号住調査(～19日)。
- 10日 雨査24～32号住調査(～25日)。
- 17日 雨査33・34号住, 1・2号掘立調査(～18日)。
- 25日 雨査調査終了, 器材搬出(～27日)。館址状遺構群周辺地形測量(外注～31日)。
- 27日 第1次調査終了
- 試掘調査** (雨査遺跡Ⅲ～Ⅴ区) 1982年9月27日～28日
- 第2次調査** (雨査遺跡Ⅲ～Ⅴ区) 1982年11月4日～83年1月8日
- 11月4日 重機により表土掘削作業開始(～10日)。
- 9日 遺構確認作業開始。
- 15日 雨査35～46号住, 3～7号掘立調査(～12月3日)。
- 16日 雨査47～55号住調査(～12月6日)。
- 19日 雨査56～60号住調査(～12月9日)。
- 24日 雨査61～67号住調査(～12月8日)。
- 12月1日 雨査68～79号住調査(～20日)。
- 6日 雨査80～86号住調査(～21日)。
- 13日 雨査87・88号住, 17号溝調査(～16日)。
- 16日 雨査89・90号住調査(～24日)。
- 18日 雨査21・24号溝, 道路状遺構調査(～1月6日)。
- 1月8日 第2次調査終了。

第II章 遺跡の立地と調査方法

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境

群馬県は関東地方の西北部に位置し、浅間・榛名・赤城等の第4紀火山が連なっている。本調査両遺跡は、これらの火山の一つである榛名山の東南麓、前橋台地との接点に位置している。

榛名山はカルデラ形成直前の噴火によって、白川火砕流と呼ばれる軽石・泥流を東南麓に流下させ、現在の扇状地形をほぼ完成させた。その末端附近に位置する本遺跡周辺は、かつては台地縁辺からの湧水が多く、集落址・水田址等の遺跡が密集している。

前橋台地には東から牛池川・染谷川・唐沢川・井野川・榛名白川などの中小河川が東南方向へと流れている。いずれも榛名山麓に水源を持ち、高崎市街地の東南で烏川に合流している。現在ではこれらの河川による洪水の被害はほとんど無くなったが、かつては井野川や榛名白川はたびたび氾濫し、附近の田畑に被害を及ぼすことも少なくはなかった。

旧石器時代の石器が箕郷町和田山と高崎市剣崎町の台地上で採集されているが、発掘調査例はない。縄文時代に入ると前期では黒浜・諸磯B、中期では阿玉台・勝坂・五領ヶ台式期の遺跡の一部が調査されている。後期では若田遺跡において敷石住居址2軒の発見例がある。いずれも低丘陵・低台地上に立地している。

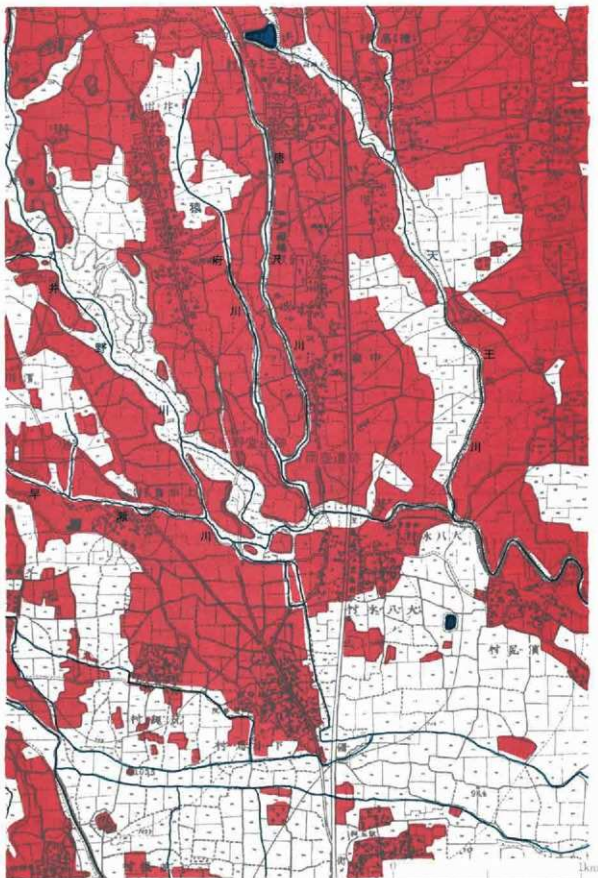
榛名山東南麓の箕郷町中善地や全敷平では、弥生時代中期前半の岩櫃山式土器が出土している。しかし本遺跡周辺では、現在のところこの時期の遺跡は発見されていない。中期後半になると、利根川以西の北関東は中部高地千曲川流域に生成した栗林系土器が進出してくる。この時期の遺跡は、山間部やこれに接する平野の台地上に発見例が多い。前橋市清里庚申塚遺跡においては、集落とそれをめぐる環濠が調査されている。後期になると遺跡数は増大し、発掘調査例も多く、低地に接する微高地上に大規模な集落が形成される傾向が強い。

次の古墳時代になると、本遺跡周辺にも古墳がつくられてくる。熊野堂遺跡第II地区の小形前方後方墳は4世紀半ば前後降下とされる浅間C軽石によって埋没している。井野川上流域においては、現在のところ4世紀後半～5世紀半ば前後の古墳は確認されていないが、6世紀前半を中心とする時期には、井野川上流域に保渡田古墳群〔舟形石棺を持つ大形前方後円墳愛宕塚(93m)、八幡塚(102m)、薬師塚(70m)で構成〕が形成される。三ツ寺I遺跡において発見された豪族の居館址といわれる遺構も、また三ツ寺II・III、保渡田遺跡で調査されている鬼高期の住居址群も、保渡田古墳群と同時期であることから、強い関連性が指摘されている。

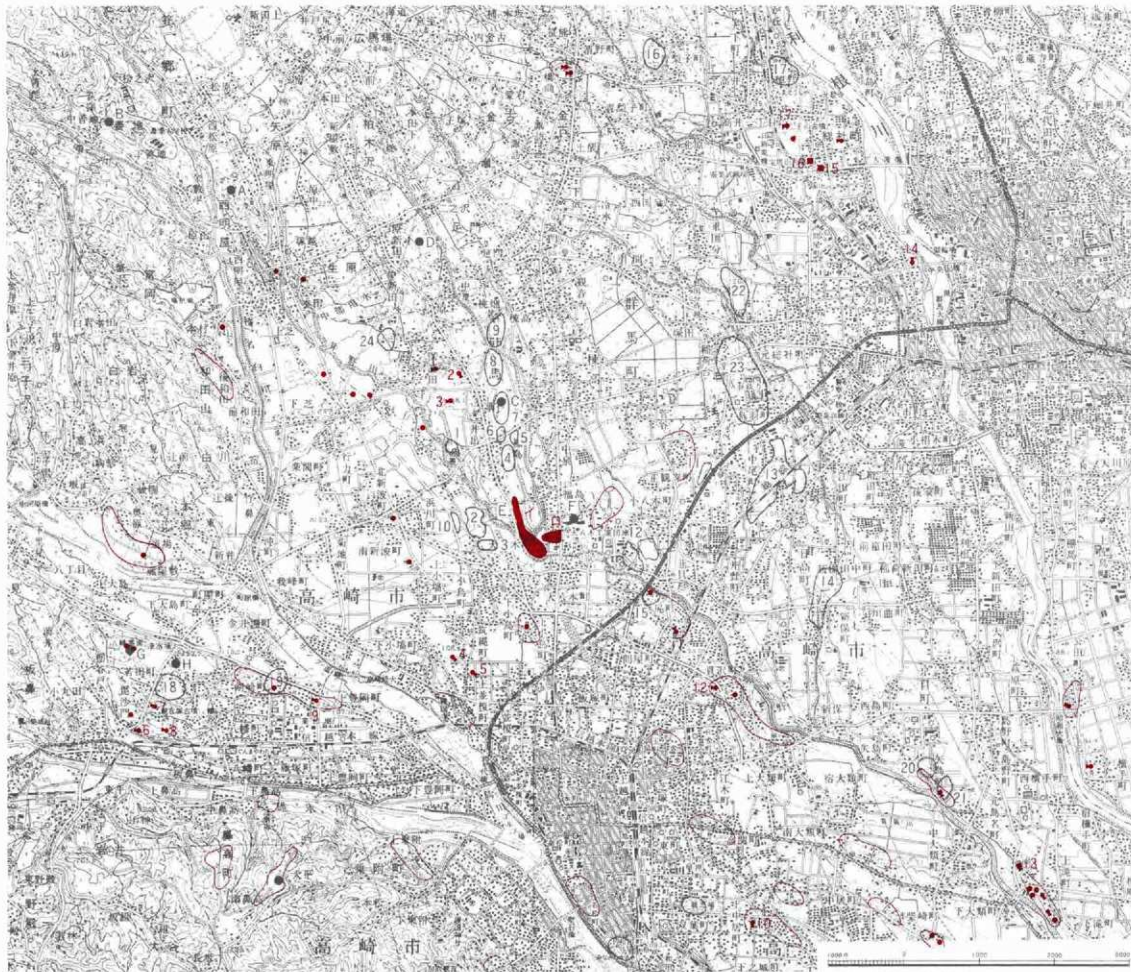
奈良時代に入ると中央集権体制が確立し、郡県制が施された。倭名類聚抄によると、上野国群馬郡は長野・井出・八木・小野・佐沼・上郊・鳥名・畔切・群馬・桃井・有馬・利刈・白位の13郷が記されている。本遺跡周辺は、井出郷と八木郷の境界附近であった可能性が大きく、井野川を境にして分かれていたのかもしれない。奈良時代から平安時代にかけての集落及び平安時代末に降下したとされる浅間B軽石に埋没した水田址は、周辺での発見が相次いでいる。

延喜式には東山道と呼ばれる官道が通っていたことが記されているが、熊野堂遺跡第I地区の道路状遺構は金坂清則氏によって東山道と推定されているものである。中世には関東管領上杉憲政の家臣であり、箕輪城を本拠とした長野家臣の勢力範囲であった。本遺跡周辺には長野氏関連と推定される居館址・砦址が多く、矢島館址・寺ノ内館址等、発掘調査された居館址も少なくない。

(飯塚)



第1図 周辺地形図 (『第1軍管地方迅速測図』明治17年参謀本部陸軍部測量局編製 による)



イ、熊野堂遺跡
 □、雨壺遺跡

第2図 周辺の遺跡(1) 縄文～古墳時代 (国土地理院五万分の一地形図より銀塚・女屋作図)



イ、熊野堂遺跡
 ロ、雨窓遺跡

第3図 周辺の遺跡(2)古代-中世 (国土地理院五万分の一地形図より坂井作図)

縄文時代遺跡

- A 城山(箕輪町) 群馬大:『群大教育学部尾崎研調査報告』第3輯, 1961
- B 中善地(#) 同上
- C 三ツ寺II(群馬町) 県埋文事業団:『三ツ寺遺跡現地説明会資料』, 1981
- D 保護田II(#) 群馬町教委:『保護田II遺跡』, 1982
- E 熊野堂I(#) 県埋文事業団:『熊野堂遺跡第1地区』, 1984
- F 大八木箱田池(高崎市) 高崎市教委:『大八木箱田池遺跡』, 1983
- G 若田(#) # :『高崎市の文化財』, 1972
- H 大島原(#) 文献なし
- I 大平台(#) 県教委:『大平台遺跡調査概報』, 1974

主要古墳(赤字番号)

- 1 葉師塚(群馬町) 文献なし
- 2 八幡塚(#) 群馬県:『史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯, 1932他
- 3 受宮塚(#) 後藤守一:『上野国受宮塚』, 『考古学雑誌』, 第39巻第1号, 1953
- 4 小星山(高崎市) 文献なし
- 5 稲荷山(#) 文献なし
- 6 平塚(#) 日本考古学協会:『年報10』, 1963
- 7 観音塚(#) 県教委:『上野国八幡観音塚古墳』, 1963
- 8 二子塚(#) 文献なし
- 9 天神山(#) 外山和夫:『石製模造品を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって』, 『考古学雑誌』, 第62巻第2号, 1976
- 10 越後塚(#) 文献なし
- 11 天王山(#) 日本考古学協会:『年報8』, 1959
- 12 五雲神社(#) 文献なし
- 13 将軍塚(#) 高崎市教委:『元島名将軍塚古墳』, 1981
- 14 王山(前橋市) 前橋市教委:『文化財調査報告書第5集』, 1975
- 15 蛇穴山(#) # :『蛇穴山古墳調査概報』, 1976
- 16 宝塔山(#) # :『宝塔山古墳調査概報』, 1968
- 17 総社二子山(#) 日本古文化研究所:『報告第4』, 1937

弥生・古墳時代遺跡

- 1 同道(群馬町) 県埋文事業団:『同道遺跡』, 1984
- 2 御市呂(高崎市) 高崎市教委:『御市呂遺跡』, 1980他
- 3 芦田貝戸(#) # :『芦田貝戸遺跡』, 1979他
- 4 井出村東(群馬町) 同道跡調査会:『井出村東遺跡』, 1983
- 5 中林(#) 群馬町教委:『中林遺跡』, 1982
- 6 三ツ寺I(#) 県埋文事業団:『三ツ寺遺跡現地説明会資料』, 1981他
- 7 三ツ寺II(#) 同上
- 8 三ツ寺III(#) 県教委:『上越新幹線概報VI』, 1980 本報告1985年刊行予定
- 9 保護田(#) 同上
- 10 寺の内(高崎市) 高崎市教委:『寺ノ内遺跡』, 1979
- 11 正観寺(#) # :『正観寺遺跡群』, 1979他
- 12 小八木(#) # :『小八木遺跡』, 1979
- 13 日高(#) # :『日高遺跡』, 1979~82他
- 14 新保(#) 県教委:『関越道概報V』, 1979
- 15 浜尻(#) 高崎市教委:『浜尻遺跡』, 1981
- 16 元島名(#) # :『元島名遺跡』, 1979
- 17 鈴ノ宮(#) # :『鈴ノ宮遺跡』, 1978
- 18 八幡中原(#) # :『八幡中原遺跡』, 1982
- 19 引間(#) # :『引間遺跡』, 1979
- 20 鳥羽(前橋市) 県埋文事業団:『年報2』, 1983他
- 21 函分寺中間地域(群馬町) # :『年報1』, 1982他
- 22 板ヶ丘(前橋市) 尾崎喜左雄:『前橋市史』, 第1巻, 1971
- 23 清里庚神塚(#) 県埋文事業団:『清里庚神塚遺跡』, 1981
- 24 保護田III(群馬町) 群馬町教委:『保護田III遺跡』, 1983
- 25 観馬場(高崎市) 東京考古学会:『考古学』, 10巻10号, 1939
- 26 竜見町(#) 同上

第II章 遺跡の立地と調査方法

古代遺跡

- 1 鈴の宮(高崎市) 高崎市教委:『鈴の宮遺跡』,1978
- 2 上滝(#) 県埋文事業団:『八幡原A・B 上滝 元島名A』,1981
- 3 元島名B(#) 県教委:『関越道概報IV』,1978
- 4 新保(#) # :『関越道概報V-VI』,1979-80
- 5 中尾(#) 県埋文事業団:『中尾 遺構編』,1983
- 6 鳥羽(前橋市) # :『鳥羽I現地説明会資料』,1982
- 7 国分寺中間地域(群馬町) 県埋文事業団:『年報1・2』,1982・83
- 8 国分境(#) # : 同 上
- 9 清里南部遺跡群(前橋市) 前橋市教委:『富田・西大室・清里南部遺跡群』,1980他
- 10 清里庚申塚(#) 県埋文事業団:『清里庚申塚遺跡』,1982
- 11 正観寺遺跡群(高崎市) 高崎市教委:『正観寺遺跡群』,1981
- 12 菅谷(群馬町) 群馬町教委:『菅谷遺跡』,1980
- 13 日高(高崎市) 高崎市教委:『日高遺跡』,1982他
- 14 同道(群馬町) 県埋文事業団:『同道遺跡』,1984
- 15 小八木(高崎市) 高崎市教委:『小八木遺跡』,1980他
- 16 芦田貝戸(#) # :『芦田貝戸遺跡』,1980他
- 17 大八木箱田池(#) # :『大八木箱田池遺跡』,1983
- 18 八幡中原(#) # :『八幡中原遺跡』,1982他
- 19 引間(#) # :『引間遺跡』,1979
- 20 奥原(榛名町) 県埋文事業団:『奥原古墳群』,1983
- 21 榛名木戸神社廃寺(#) : 同 上
- 22 下之城(高崎市) # :『下之城糸里遺構の調査』,1981
- 23 菊地(#) 高崎市教委:『菊地遺跡群』,1982他
- 24 北新波(#) # :『北新波遺跡群』,1982他
- 25 天王前(#) # :『天王前遺跡』,1982
- 26 北原A(群馬町) 群馬町教委:『北原遺跡』,1983
- 27 上野園分僧寺址(#) 県教委:『史跡上野園分寺跡発掘調査報告1~3』,1980~82他
- 28 上野園分尼寺址(#) # :『上野園分尼寺跡発掘調査報告書』,1970
- 29 山王廃寺(前橋市) 前橋市教委:『山王廃寺発掘調査報告』,1982他
- 30 上野園府址(#) # :『上野園府跡発掘調査概報』,1968他
- 31 小林(群馬町) 群馬町教委:『小林遺跡』,1983他
- 32 保護田III(#) # :『保護田III遺跡』,1983
- 33 下東西(#) 文献なし
- 34 融通寺(高崎市) 県埋文事業団:『年報2』,1983他
- 35 下小島(#) 県教委:『上越新幹線概報1』,1975
- 36 保護田(群馬町) # :『 # VI』,1980
- 37 三ツ寺III(#) # : 同 上
- 38 三ツ寺II(#) 県埋文事業団:『年報1』,1982
- 39 井出村東(#) 同遺跡調査会:『井出村東遺跡』,1983
- 40 大八木水田(高崎市) 高崎市教委:『大八木水田遺跡』,1979
- 41 生原飯森(箕野町) 箕野町教委:『生原飯森遺跡』,1984

道路

- A 推定東山道 県教委:『歴史の道16東山道』,1983他
- B 三國街道 # :『 # 3三國街道』,1980
- C 信州街道 # :『 # 5信州街道』,1980
- D あづま道 # :『 # 16東山道』,1983他
- E 推定鎌倉街道 # :『 # 17鎌倉街道』,1983
- F 中山道 # :『 # 11中山道』,1982
- G 国府道 高崎市教委:『日高遺跡』,1979~82他

中近世城館址(山崎 一:『群馬県古城址の研究』,1979, 80による。それ以外の文献あるもののみ併記)
一(赤字番号)

- 1 萩原城址(高崎市)
- 2 元島名城址(#) 高崎市教委:『元島名遺跡』1979他
- 3 大野館址(#)
- 4 大野城址(#)
- 5 半人原敷址(#)
- 6 大野寄居址(#)
- 7 降照屋敷址(#)
- 8 矢島館址(#) 高崎市教委:『矢島遺跡・御布呂遺跡』,1979他
- 9 乙美館址(#)
- 10 浜川館址(#)
- 11 新波砦址(#)
- 12 北瓜砦址(#)
- 13 寺の内館址(#) 高崎市教委:『寺の内遺跡』,1979
- 14 箕輪城址(箕郷町) 県教委:『箕輪城跡』,1982
- 15 白川砦址(榛名町)
- 16 住吉城址(高崎市)
- 17 保護田城址(群馬町)
- 18 高井屋敷址(高崎市)
- 19 反町屋敷址(#)
- 20 中居砦址(#)
- 21 下中居塚遺址群(#)
- 22 下之城城址(#) 県埋文事業団:『下之城各里遺構の調査』,1981
- 23 金尾城址(前橋市) # :『中尾 遺構編』,1983
- 24 三ツ寺日館址(群馬町) # :『年報1』,1982
- 25 大八木瀬通寺館址(高崎市) 県教委:『上越新幹線概報II』,1975
- 26 蒼海城址(前橋市)
- 27 石倉砦址(#)
- 28 胡橋/前橋城址(#)
- 29 村山館址(#)
- 30 大友館址(#)
- 31 青梨子砦址(#)
- 32 勝山城址(#)
- 33 総社城址(#)
- 34 八日市場城址(#)
- 35 絵田城址(#)
- 36 和田/高崎城址(高崎市)
- 37 栗附城址(#)
- 38 新井若狭屋敷址(#)
- 39 与五右衛門屋敷址(#)
- 40 井野屋敷址(#)
- 41 上並榎城址(#)
- 42 中尾城址(#) 県教委:『関越道概報V』,1979
- 43 鼻高砦址(#)
- 44 福田屋敷址(#)
- 45 鉤崎小路城址(#)
- 46 八幡館址(#)
- 47 乗附屋敷址(#)
- 48 菅谷城址(群馬町)
- 49 金古城址(#)
- 50 引間城址(#)
- 51 中泉砦址(#)
- 52 生原砦址(箕郷町)
- 53 上芝砦址(#)
- 54 下芝砦址(#)
- 55 富岡砦址(#)
- 56 和田山屋敷址(#)
- 57 松之沢砦址(#)
- 58 下善地砦址(#)
- 59 上善地砦址(#)
- 60 御門城址(榛名町)
- 61 七曲り砦址(#)
- 62 高浜砦址(#)
- 63 板鼻城址(安中市)
- 64 県立文書館遺跡館址(前橋市) 県埋文事業団:報告書近刊
- 65 上日高屋敷址(高崎市)
- 66 湯浅屋敷址(#)
- 67 青木屋敷址(#)
- 68 与平屋敷址(#)
- 69 高田屋敷址(#)
- 70 長町屋敷址(#)
- 71 上飯塚城址(#)
- 72 下並榎砦址(#)
- 73 根津陣屋址(#)
- 74 井草屋敷址(#)
- 75 串田屋敷址(#)
- 76 深沢屋敷址(#)
- 77 阿久沢屋敷址(#)
- 78 青柳寄居址(前橋市)
- 79 鳥羽館址(#) 県埋文事業団:『鳥羽1遺跡現地説明会資料』,1982
- 80 花城寺館址(群馬町)
- 81 元井出館址(#)
- 82 同道館址(#) 県埋文事業団:『同道遺跡』,1984

第2節 調査方法

遺跡の区分

調査範囲は、座標北に対しN89°Eの方位をとる工事中線に対し、幅14m・長さ580mの東西方向に長い短冊状をなす。西から250mの地点には唐沢川が南北に流れ、東西を分けている。西側は、高崎市大八木町字熊野堂で、当初熊野堂遺跡A区として調査を行った。その後、高崎市・群馬郡群馬町を含めた上越新幹線地域遺跡との連続性を考えて、熊野堂遺跡第III地区と改称した。唐沢川以東は西より410mの地点に旧三国街道の市道が南北に走り、この市道より西側が第1次調査、東側が第2次調査の対象範囲であった。西側は大八木町字雨壺、東側は大八木町字伊勢廻と小字が異なるが、内容的に同一の遺跡であるため、第1次調査の雨壺遺跡の名称を第2次調査分にまで範囲を拡大した。

調査区の設定

第1次調査では、遺跡として東西に区分されたため、それぞれにさらに小範囲の調査区は設定しなかった。第2次調査では、調査範囲を南北方向に走る2本の道路をもって西より1～3区に区分した。同次とも、遺構確認面まで重機により表土層の掘削を行った。また、工事中線を基準に、5m方眼の調査杭を打ち、平面測量の基準とした。なお、熊野堂遺跡第III地区の上越新幹線との交差部分は、熊野堂遺跡第II地区区とし、これに連続する1号灌漑用井戸状遺構は、本報告では扱わない。雨壺遺跡の第1次調査範囲では幅20mと3mの2箇所の旧地権者による採土のための攪乱箇所があった。第2次調査範囲では、道路敷下の調査は行っていない。また東端の3区では攪乱がひどいことと、県教委文化財保護課の指導により遺跡の延長が充分想定されたが、調査を行ったのは範囲内の $\frac{1}{2}$ 以下である。(本報告では、雨壺遺跡を攪乱箇所及び道路によって西よりI～V区とする。2次調査1区はIII区に、2区はIV区に、3区はV区となる。)

遺構発掘の方法

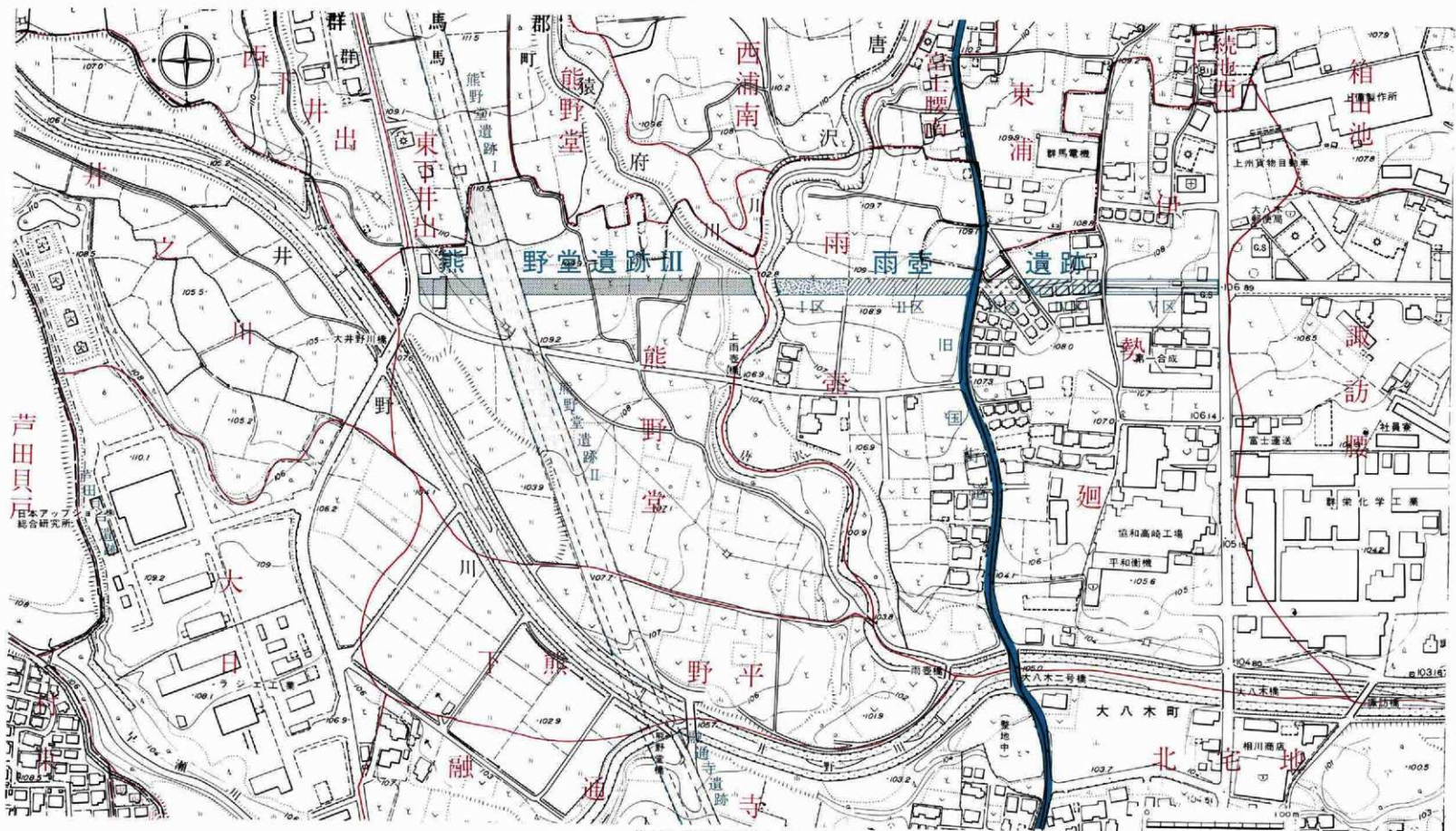
- 1、プラン確認のなされた遺構は、土層断面ベルトを残して掘り下げた。
- 2、住居址については、床精査後、原則として床をはずし、掘り方調査を行った。その平面・断面記録については顕著な特徴が見られた場合を除いて本報告では割愛した。

遺物

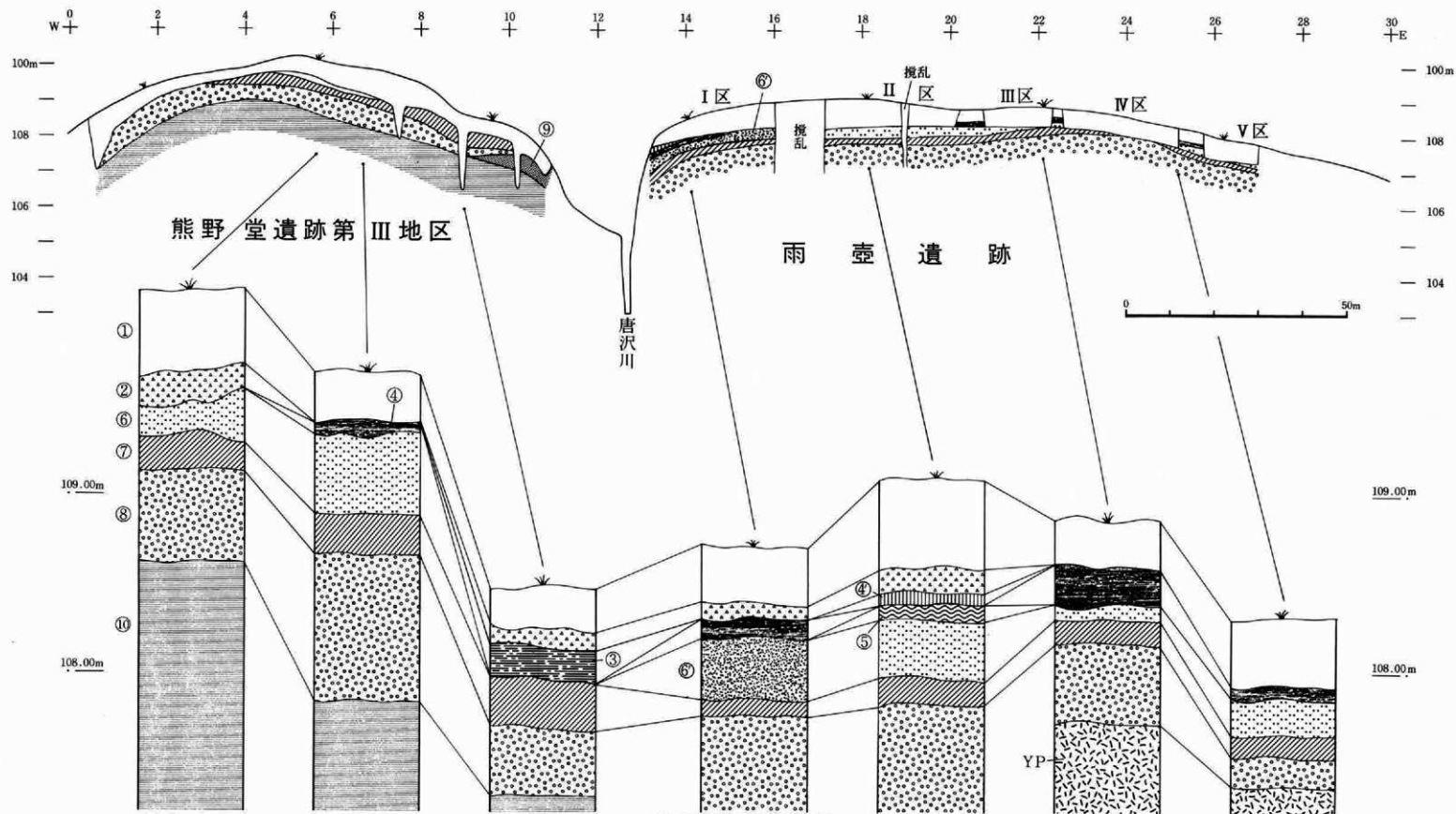
- 1、遺構調査中に検出した遺物は、重要なものについてののみ取り上げ時点で平面・垂直位置の記録をとった。それ以外のものは、各遺構覆土出土として記録した。
- 2、遺構に伴わない遺物は、平面・垂直位置の正確な記録はとっていない。

実測図の作製

- 1、遺構平面図及び遺跡全体図は、平板測量で作製した。
- 2、遺構図は、平面・土層断面・立面各図の実測を原則として $\frac{1}{50}$ 縮尺で行い、細部は $\frac{1}{100}$ 縮尺でも作図した。
- 3、以上各実測は、高崎土木事務所を設置した工事中線杭及び水準杭に基づいている。
- 4、熊野堂遺跡第III地区の簡址状遺構群については、遺構図(縮尺 $\frac{1}{50}$)と周辺地形図(縮尺 $\frac{1}{500}$)の作図を、(株)富永調査事務所に委託した。(坂井)



第4図 調査範囲及小字名図 (高崎市都市計画図・農林統計協会耕地地図による)



第5图 基本土层堆积模式图

第3節 基本土層

熊野堂遺跡第Ⅲ地区及び雨壺遺跡共に、概ね南北方向に走る台地を東西方向に切って調査したため、調査範囲内の土層堆積は、曲線状になっている。また遺構確認面も傾斜する地形に制約されたこともあって、場所によって層がかなり異った。このような場合、調査時に計画的な土層観察が行われねばならないが、遺憾ながら、必ずしも十分な観察が、特に熊野堂遺跡第Ⅲ地区ではなされなかった。そのため、推定を少からず混じえて、下記のような基本土層を把握した。

第①層	耕作土	浅間A軽石を含む。	
第②層	茶褐色砂質土	浅間B軽石を含む。	
第③層	暗茶褐色砂質土	浅間B軽石を含む。	熊野堂遺跡第Ⅲ地区のみ
第④層	黄茶褐色粘質土	榛名F A火山灰を含む。	雨壺遺跡西側のみ
第⑤層	暗褐色粘質土	浅間C軽石を含む。	
第⑥層	浅間C軽石純層		雨壺遺跡の一部
第⑦層	黒茶褐色粘質土		
第⑧層	黒茶褐色粘質土	第⑥層に鉄分混入	雨壺遺跡西側のみ
第⑨層	茶褐色粘質土	ローム漸移層	
第⑩層	黄褐色粘質土	上部ローム層、浅間Y P軽石層を含む	
第⑪層	暗青色粘質土	白色シルト粒塊を含む。	熊野堂遺跡第Ⅲ地区東端のみ
第⑫層	白黄褐色シルト質土		雨壺遺跡では未確認

各層の厚さ及び推定堆積状況は、次頁の第5図に記した。

古代の竪穴住居址は、第⑥層及び第⑦層までの掘りこみのものが多い。しかし雨壺遺跡東側の同層の堆積の薄い部分では、第⑧層近くまで掘られた住居址もある。掘りこみ面は、第⑦層及び第④層である。古墳時代の住居址は、第④層から掘りこまれ、第⑦層あるいは第⑧層まで掘られている。特に古墳時代前期のものは第⑧層まで達している。弥生時代の住居址は、第④層から掘られ、やはり第⑦層あるいは第⑧層まで掘られている。縄文時代の住居址は、第⑥層あるいは第⑦層から掘られ、第⑦層あるいは第⑧層まで達している。

熊野堂遺跡第Ⅲ地区東端の中世の溝は、第③層より掘られ、第⑨層まで達しており、雨壺遺跡で最も深く多くの層を貫いた掘りこみである。この部分の東寄りには第⑩層が見られ、雨壺遺跡の西側には第⑩層・第⑪層が広がる。確実な証拠はないが、これらの形成は、唐沢川の氾濫に関係していると思われる。

火山噴出物では、浅間A・B軽石は、純層堆積は、一部の遺構覆土を除いて全く見られなかった。榛名F A火山灰は、第④層中に2～5cm程度の塊状になって含まれている。この層も雨壺遺跡の西側にしか見られず、唐沢川氾濫による2次堆積と思われる。浅間C軽石は、雨壺遺跡中央部分に一部5cm程度の厚さで、第⑥層として純層堆積していた。他の部分では、第④層に吸収されているのだろう。浅間Y P軽石は、第⑧層中に普遍的に見られた。しかし全体を通しての十分な観察は行えなかった。

起伏は、熊野堂遺跡第Ⅲ地区が大きく3mほどの比較差があるが、雨壺遺跡では2mほどしかない。

確認面は第5図のように多層にまたがっており、調査時には分層発掘は、時間的制約によって行えなかった。そのため検出した遺構の平面分布は、遺憾ながら絶対に確実であるとは言い難い。(坂井)

第三章 熊野堂遺跡第三地区

第1節 弥生時代の遺構

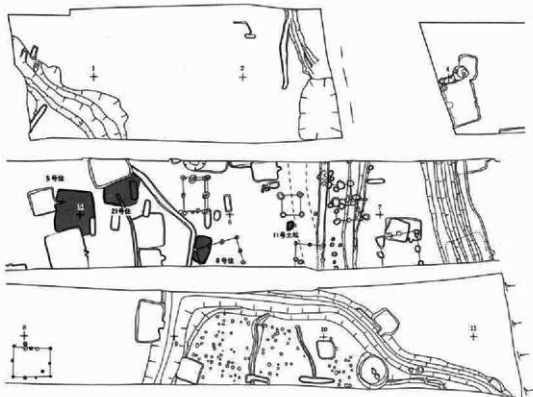
弥生時代と考えられる遺構は、次のものがある。

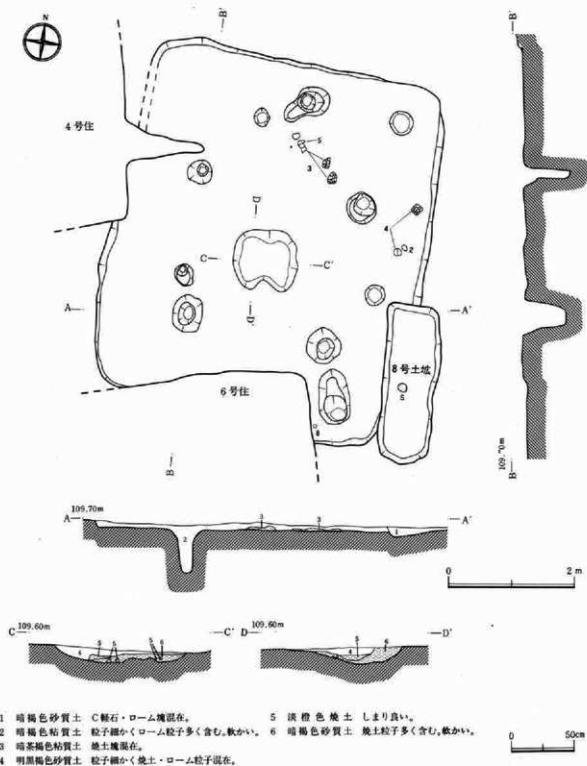
住居址 計3軒 5号住、8号住、21号住

土 塚 計1基 11号土塚

なお、時期不明の5・7・8各号の土塚を、本節に併記した。

第6図 弥生時代遺構分布概念図





第7図 5号住居址、8号土壇平面図

5号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。4・6号住居址、8号土壇により切断されている。5.2×5.8mの規模で、南北が長い楕丸長方形を呈す。主軸はN2°Eを測る。壁は45°ほどの開きで直線的に立ち上がり、壁高15cmと浅い。床面は褐色土を踏み固めている。4本主柱穴で不整ながら対置関係にある。

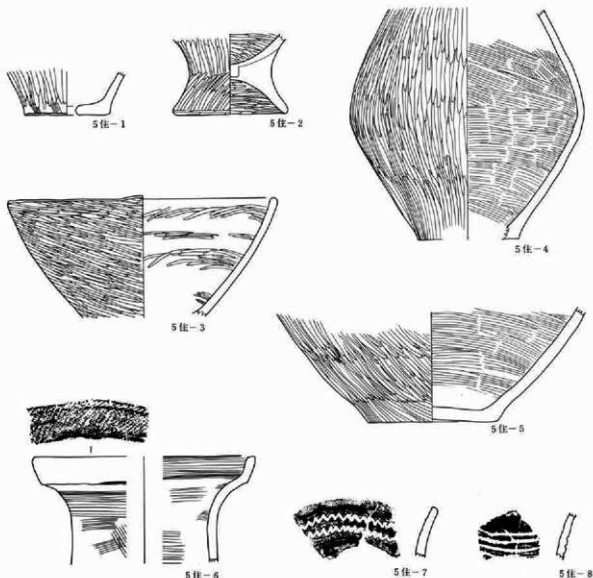
炉はほぼ住居中央に位置し、八字形を呈するような浅い皿状の掘り方で、炉床は部分的に焼土化している。本住居に伴う7個のピットが確認された。

出土遺物は土器で、壺片(4・5)、鉢片(3)、高坏脚部(2)等が床面より若干浮いた状態で、壺(6)が掘り方覆土より出土している。覆土中からは、鉄滓も1点見られた。

8号土坑

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。5号住と重複するが本土坑が新しい。長軸2.3m、短軸0.7m、深さ8cmを測り、N1°Eの長軸をもつ隅丸長方形プランを呈する。土坑底は若干の高低差はあるが、ほぼ平坦である。壁は内反ぎみに緩く立ち上がるが、北壁はかなり緩やかである。

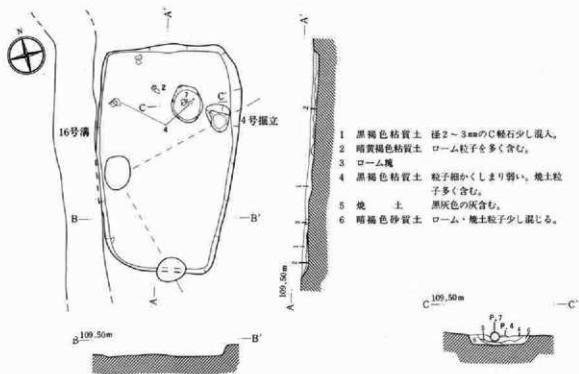
覆土は暗褐色砂質土1層で、浅間C軽石・ローム塊が混在する。遺物は出土しないが、こぶし大の自然石が底面密着で検出された。(小安)



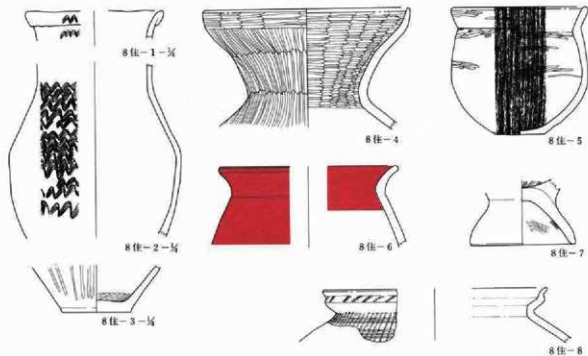
第8図 5号住居址出土遺物図

第1表 5号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕 弥生土器	覆土 底部	5住 -1	底径 7.0	底部中央に焼成後穿孔された孔がある。	外：ハケ調整後横ヘラミガキ。 内：横ヘラミガキ、底部指ナデ。	砂粒を含む 良好、硬質。 淡黄褐色。	
高坏 弥生土器	床より1cm 脚部	5住 -2	底径 9.0	坏部短く、ハ字状に開く。	外：坏部縦ヘラミガキ、脚部斜めヘラミガキ。 内：坏部横ヘラミガキ、脚部横ヘラミガキ。	小砂僅かに含む。 良好、硬質。 淡黄褐色。	
鉢 弥生土器	床より4cm 底	5住 -3	口径 21.5	内反しながら大きく開く。	外：横ナデ後斜めヘラミガキ。 内：横ナデ後横ヘラミガキ。	砂粒含む。 良好、暗黄褐色。	内外面に黒斑。
甕 弥生土器	床より3cm 底	5住 -4	胴径 19.0 底径 8.0	胴中に最大径。	外：全面縦ヘラミガキ、外面上半斜めハケメ、下半横ハケメ。	砂粒含む。 良好。 黄褐色。	胴下半に黒斑。
甕 弥生土器	床より4cm 底部	5住 -5	底径 10.5		外：斜めヘラミガキ。 内：指ナデ後横ハケメ、底部内面は粗い指ナデ。	砂粒を含む。 良好、硬質。 黄褐色。	外面黒斑。
甕 弥生土器	掘り方覆土 口縁部	5住 -6	口径 17.8	頸部は直立から大きく外反し、稜をもってほぼ垂直に立ち上がり口縁部となる。	外：横ナデ、ハケ調整後、横ヘラミガキ。 内：横ハケ後横ヘラミガキ。 口縁部外面・口唇部縄文。	砂粒含む。 良好、硬質。 灰褐色。	
甕 弥生土器	覆土上層 以下	5住 -7	口径 14.0		口唇部縄文押捺、口縁部外面横指ナデ、口縁部内面横指ナデ後、波状比線文、頸部内面横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好、軟質。 暗褐色。	内外面黒斑。
甕 弥生土器	床より2cm 頸部以下	5住 -8			外：頸部縄文押捺後、平行比線文。比線に区画された部分を除きヘラミガキ。 内：磨滅のため不明。	砂粒を含む。 良好、硬質。 淡褐色。	



第9図 8号住居址平面断面図



第10図 8号住居址出土遺物図

8号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。16号溝と4号掘立により切断されている。

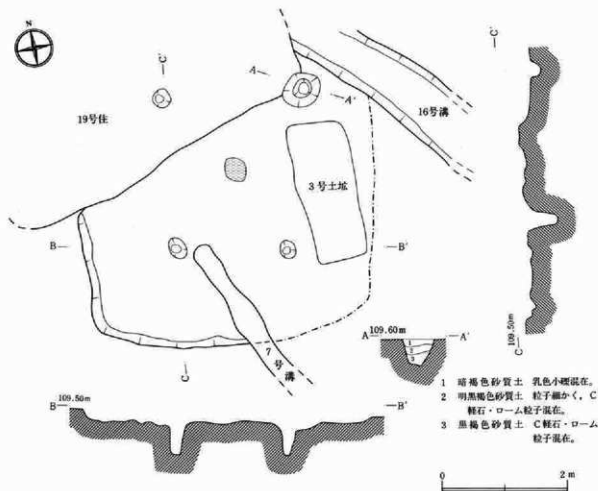
推定規模は3.4×2.2mと小形で南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈す。長軸はN16°Eの方位を測る。東壁はやや急で直線的、南壁は45°ほどの開きをもって直線的に、北壁はやや急だが内反的にそれぞれ立ち上がりをもち、壁高は12~20cmと浅い。床面はほとんど平坦で、暗褐色土を踏み固めているが全体に軟弱である。

炉は北壁より60cm、東壁より40cmに位置する。50×55cm、深さ7cmの槽形を呈す。床面をタライ状に掘りくぼめ、ローム塊混入の暗褐色土で固めて炉床をつくっており、しっかりした掘り方である。炉内には焼土粒と黒灰色灰が多量に入っており、炉床中心部分は焼土化している。炉と東壁の間に40×40cm、深さ40cmのピットが確認されたが、覆土より4号掘立のピットである。柱穴等は確認されない。

出土遺物は土器で、ほぼ炉床直上より甕台部(7)、床面より若干浮いた状態で甕胴部片(2)が出土し、また炉内と床面(若干浮いている)より検出された壺片(4)の接合が確認されている。覆土上層の床より約20cmのレベルでS字口縁壺片(8)が見られた。(小安)

第2表 8号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕 弥生土器	覆土上層 口縁片以下	8住 -1	口径 14.5	緩やかに外反。	口縁端部折り返し。外：櫛状工具による波状文。内：横ヘラミガキ。	砂粒多く含む。 やや不良。 赤褐色。	
甕 弥生土器	床より2cm 以下	8住 -2	胴径 18.0	胴部中位に最大径。	成形不明。 内：胴上半部ヘラミガキ。	砂粒多く含む。 良好。 暗赤褐色。	
甕 弥生土器	覆土上層 以下	8住 -3	底径 7.5	—————	外：縦ヘラミガキ。	砂粒多く含む。 良好。 暗赤褐色。	№2と同一個体の可能性あり。
壺 弥生土器	床より1cm 以下	8住 -4	口径 16.5	口縁部はやや緩やかに外反し、口唇部は垂直に立ち上がる。	成形不明。 外：縦ヘラミガキ、口唇部横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。 良好。 暗黄褐色。	
小形甕弥 生土器	覆土上層	8住 -5	口径 11.0 胴径 11.0 底径 4.0 器高 10.0	最大径胴部やや下位。 口縁部は、く字状に立ち上がる。	頸部に口縁の接合痕が外面に横として残る。外：縦ヘラ調整横ヘラミガキ。内：横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好、硬質。 黒色。	
壺 弥生土器	周辺	8住 -6	口径 14.5	口縁部く字状に外反。	内外面横ヘラミガキ。外面・内面口縁部赤色塗彩。	粒子細かく、砂粒含まず。 良好、硬質。 黄褐色。	
台付甕 (台部) 弥生土器	床より2cm 以下	8住 -7	底径 8.5	甕は内反りぞみに転がる。	台部形成後に胴部を作る。 接地部外面横ナゲ。外：ハケ調整横ナゲ。内：ハケ調整後上部ヘラケズリ。	砂粒含む。 良好。 灰黄色。	
甕 弥生土器	覆土上層 口縁部	8住 -8	—————	口縁部は上、下両段とも外反するが上段は短い。明確な縁をもっており、先端はやや尖る。	口縁上段に4本単位の華曲文。胴部縦ハケ後、平行横線文、内面横ナゲ。	砂粒を含む。 良好、硬質。 淡黄色。	



第11図 21号住居址平面断面図

21号住居址

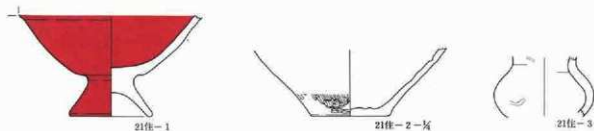
本住居址は第⑦層赤褐色粘質土面で確認された。しかしこの確認面は床よりも低いレベルであり、検出できた部分は掘り方に相当する。19号住・7号溝・16号溝・3号土壇と重複するが、それらの遺構は全て本住居より新しい。東西辺は約4.4mを測り、南北辺は5.1～5.4mを推定できる。平面形は、主軸をN83°Wにとる各辺が内反した長方形と思われる。覆土堆積状況は、上述の確認時の問題があったため不明である。

壁・床面も同様の理由により不明だが、南西角周辺のみは、15～20cmほどの高さの掘り方の壁がかるうじて認められた。柱穴は、本住居内に3箇所、19号住掘り方面に1箇所の計4箇所が検出された。いずれも径は約25～30cmを測り、確認面の海拔109.44mから深さを測れば、それぞれ70～76cmで取まる。4箇所の柱穴の位置は、平面的には方形ではなく、南東側の柱穴が30cmほど西に偏した台形状を呈している。周溝は全く検出されていない。

これらの柱穴間を結ぶ対角線のほぼ交点に、30×40cmの楕円形状に焼土が見られた。しかし堆積は薄く1cm以下で、明瞭な掘り込みは認められなかった。炉の掘り方と考えられる。

遺構確認時において、かなりの遺物が見られたが、その時点では本住居のプランは確定してなく、本住居と結びつけずに取り上げた。確認後にはほとんど遺物の出土がなかったため、確認前のものについて図に示した。そのため、これらの遺物は厳密には本住居と直接結びつけられない。(坂井)

第12図 21号住居址出土遺物図



第3表 21号住居址出土遺物観察表

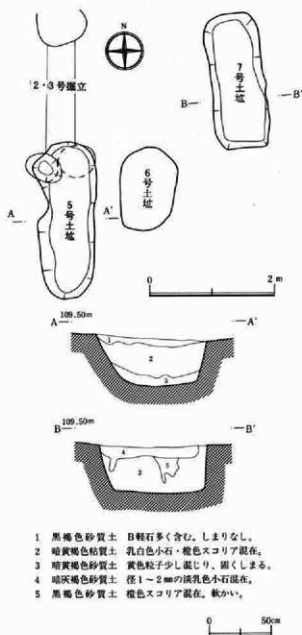
器種	出土遺存状態	番号	法址 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高 弥生土器	覆土 片	21住 -1	—	坏部は下端で縁をもち 内反ぎみに開く。脚部 は、ハツ状に開く。	坏部内外面：脚部外面赤色塗 彩後横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。 良好、硬質。 暗黄褐色裏地に赤 色塗彩。	
壺 弥生土器	覆土 片	21住 -2	底径 6.0	底部から胴部へとぼぼ 直線状に立ち上がる。	外：ヘラケズリ後縦ヘラミガ キ。内：風化、含有小石の取 れた痕跡多くあり。	砂粒・小石やや多 く含む。 内面焼成不良、軟 質。	
壺 (手把)	覆土	21住 -3	胴径 8.0	手把。	外：指ナデ後部分的にヘラミ ガキ。内：横指ナデ。	小砂含む。 良好、硬質。 赤褐色。	



第13図 11号土坑平面図及び出土遺物図

11号土坑

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。底の大きさが40×94cm、確認面からの深さが35cmほどのやや歪んだ長方形プランを持つ土坑である。覆土中より弥生土器破片10数点が出土し、拓影を示した甕口縁片が顕著な遺物である。その他に、土師器片1点が見られた。(坂井)



- 1 黒褐色砂質土 B軽石多く含む。しまりなし。
- 2 暗黄褐色粘質土 乳白色小石・橙色スコリア混在。
- 3 暗黄褐色砂質土 黄色粒子少し混じり、固くしめる。
- 4 暗灰褐色砂質土 径1～2mmの淡乳色小石混在。
- 5 黒褐色砂質土 橙色スコリア混在。軟かい。

第14図 5・7号土壇平面断面図

5号土壇

本土壇は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。隅丸長方形プランを呈し、北西角南で2・3号掘立のピットを切断している。主軸方位N0°で長軸2.3m、短軸0.7m、最深部40cmを測る。土壇底は東側に傾斜するが、ほぼ平坦である。壁はスリパチ状にやや緩く立ち上がる。

覆土は暗黄褐色土・黒褐色砂質土が堆積し、径2mmほどの乳白色の小石が混在する。弥生土器・土師器・須恵器各小破片が10数点出土。(小安)

7号土壇

本土壇は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。長軸1.9m、短軸0.7m、最深部40cmを測り、N4°Eの長軸をもつ隅丸長方形プランを呈する。土壇底はやや固く、高低差が見られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上面でやや外側に開く。

覆土は暗黄褐色土・暗灰褐色砂質土が堆積し、径2mmほどの乳白色の小石が混在する。遺物は出土しない。(小安)

第4表 11号土壇出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕 弥生土器	覆土 口縁部	11E -1	口径 8.0	口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇部内反。	外：指ナゲ後、簾状文・波状文施文。口縁部立ち上がり部に波状文施文後、横指ナゲ、外面横指ナゲ。	砂粒少量含む。良好、硬質。暗褐色。	外面煤付着。
甕 弥生土器	覆土 口縁部	11E -2	口径 14.0	口縁部内反。	外：横へつまミガキ後、口縁上平及び口唇部波状文。内：横へつまミガキ。	砂粒多量に含む。良好、軟質。暗褐色。	外面煤付着。

第2節 古墳時代の遺構

古墳時代と考えられる遺構は、次のものがある。

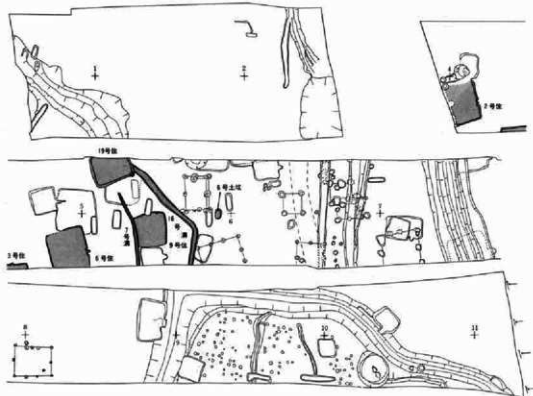
住居址 計5軒 9号住, 2号住, 6号住, 3号住, 19号住

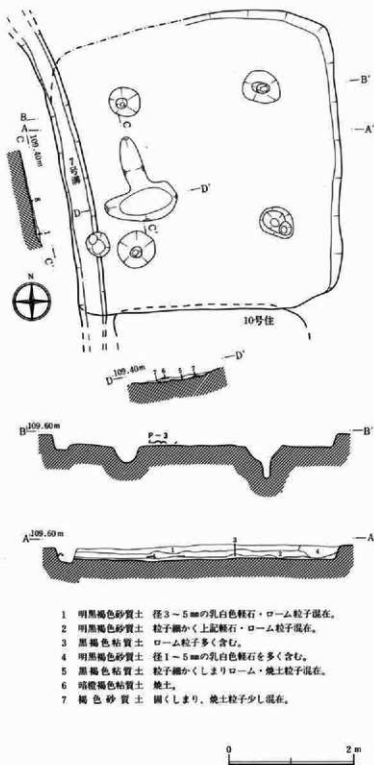
溝 計2条 7号溝, 16号溝

土 塚 計1基 6号土塚

なお、時期不明の1・2・3各号の土塚を、本節に併記した。

第15図 古墳時代遺構分布概念図





第16図 9号住居址平面断面図

cm浮いて (11) の高環、炉址内東側で5cm浮いて (12) の器台、小形手捏の壺 (9) 2片 (床+7~12cm) が推定西壁際で検出され、その距離は1.4mを測り接合する。また (10) の不明土製品も4cm浮いた状態で推定西壁際より出土している。本址の大部分の土器は、床より3~5cmのレベルで出土している。覆土中には、黒曜石剥片や緑泥片岩製石製品も見られた。

(小安)

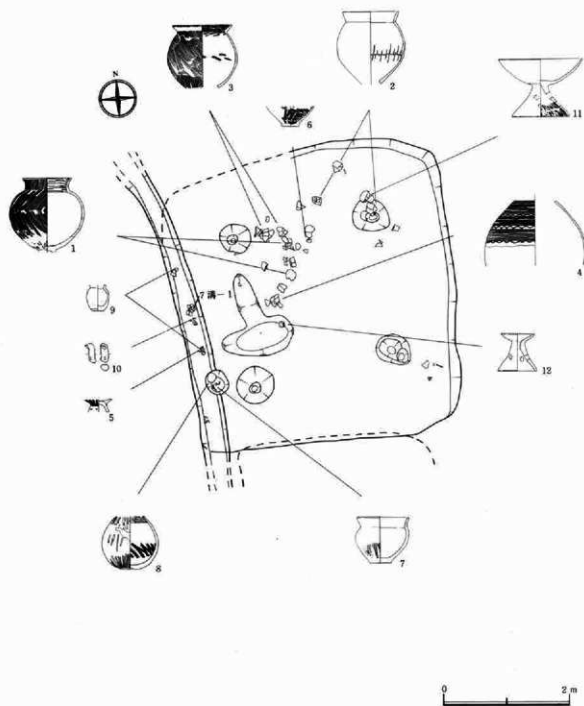
9号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。7号溝に切れ、また10号住にも切断されている。

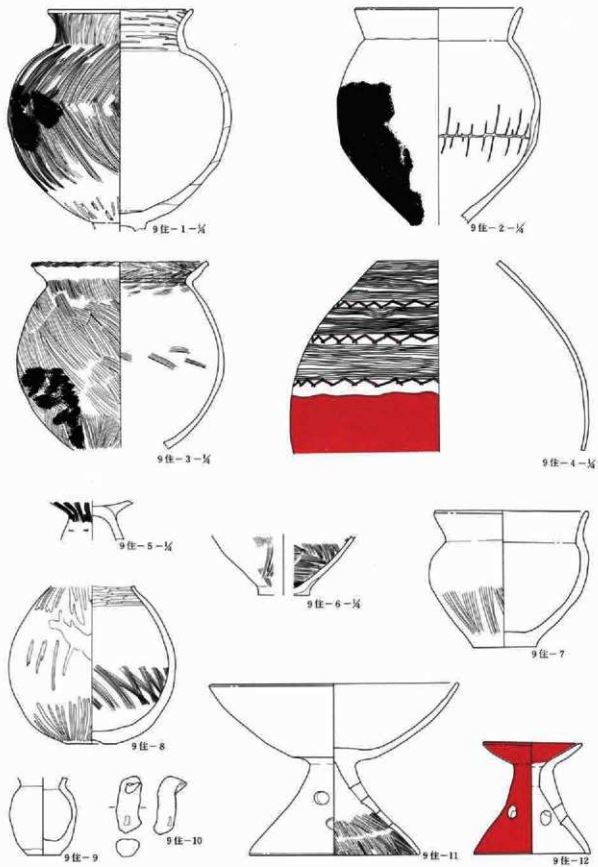
7号溝の掘り込みは、本住居の床よりも浅かったが、精査にもかかわらず明瞭な本住居の西壁は確認できなかった。一応、7号溝西壁を本住居西壁と考える。4.3×4.6mの不整形プランを呈する。長辺の方位はN9°Wを測る。壁はやや急な立ち上りをもち、北東角から東壁が現存しており、壁高は東壁で25cmを測る。床面はほとんど平坦で、暗褐色土を踏み固めているが、全体に軟弱である。柱穴は4本で対置関係にあり、各柱穴間・柱穴の大きさ・深さがほとんど等しく、覆土はローム塊混入の黒褐色であり、炉址1層と同じ土である。

炉は住居西側の柱穴間に位置し、T字形を呈する。5cmほど浅く皿状に掘りくぼめ、暗褐色土を固めて炉床をつくっており、火熱のため掘り方まで焼土化している。南側西柱穴と推定西壁との間に30×40cm、深さ5cmのピットが確認された。

出土遺物は土器で、炉址から北側の柱穴間にかけてまとまって出土している。北側西柱穴の東側より (3)、東柱穴周辺より (2) の壺片が3~4cm浮いた状態で、ピット上面より (7) の壺、炉址北東側より台付壺 (1)、壺 (4) ピット上面より (8) の壺片が、それぞれ3~4cm浮いて、北側東柱穴上3



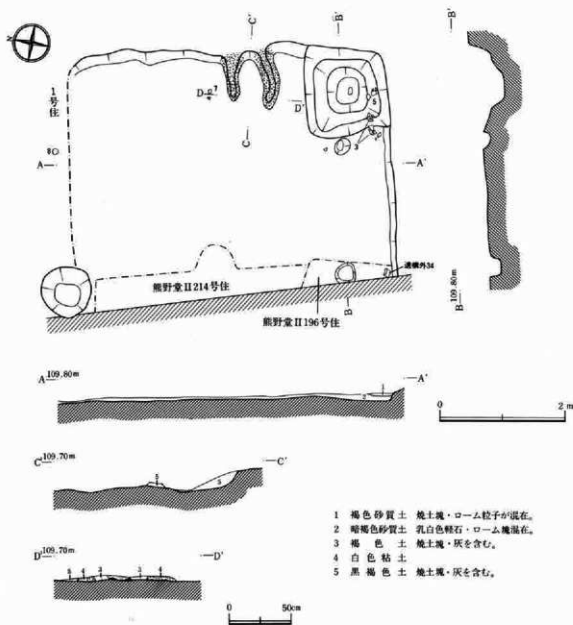
第17図 9号住居址遺物出土状態図



第18图 9号住居址出土遺物図

第5表 9号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
台付 土器	床より3cm 欠。	9住 -1	口径 15.5 胴最大径 24.0	口縁部は、く字状に外反。 胴部は上半部に最大径をもち球形。	内外面：輪横板。 外：胴上～中8本単位の斜めハケメ、下ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内：口縁ヘラケズリ後横ヘラミガキ、胴横ヘラミガキ。	砂粒含む。 硬質。 淡赤褐色。	外面胴部二次焼成により煤付着。
土器	床より2cm 欠	9住 -2	口径 18.0 胴最大径 21.5	口縁部はほぼ直線的に外反。 胴部は中位やや下方に最大径。	口縁、胴部外面、胴部内面に輪横板。 外：中不定方向横ナデ、下部斜ヘラナデ。内：口縁横ナデ、胴上斜め筋ナデ。	粒子細かく、砂粒を含む。 良好。 淡黄褐色。	外面胴部煤付着。
土器	床より4cm 欠	9住 -3	口径 19.0 胴径 22.0	口縁部は、く字状に外反。胴部最大径中位やや上。	口唇部縄文押捺。外：胴部斜ハケメ。 内：口縁部横ハケメ、胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好。 暗黄褐色。	胴下半煤付着
土器	床より3cm 欠	9住 -4	胴最大径 32.0	胴部やや下位に最大径	外：胴部ヘラミガキ。 外面の文様帯は櫛状工具で三段に平行線を描きその間をヘラ掻き刷毛文で充満。	砂粒含む。 硬質。 淡黄褐色。	胴部文部及び胴下半赤色塗彩。
台付 土器	床より5cm 台部欠。	9住 -5	—	—	台上部に粘土を貼り付けて胴部を作る。外面9本単位の縦ハケメ、台部指押さえ。	砂粒含む。 良好。 淡黄褐色。	台部内面煤付着。
土器	床より4cm 欠	9住 -6	底径 5.5	胴部は内反しながら立ち上がる。	底部縁辺貼り付け。外：斜ハケ調整後縦ハケメ。内：斜ハケメ、底部附近横ハケメ。	砂粒含む。 良好、硬質。 黒褐色。	
土器	床面直上 欠	9住 -7	口径 12.5 胴径 12.5 器高 10.7	胴最大径はやや上位にあり、口径と等しい。 口縁部は、く字状に外反するが、屈曲の大きい部分と小さい部分がある。	外：口縁部、胴上半横指ナデ 胴下半は縦ヘラケズリ後、縦ハケメ。 内：胴部全面ヘラケズリ。胴上半部ヘラケズリ後横指ナデ。	砂粒多く含む。 良好、硬質。 淡黄褐色。	
小形 土器	床より3cm 欠	9住 -8	胴径 13.5 底径 4.0	胴下半部に最大径をもち球形。 底部上庇底。	外：胴部縦ヘラミガキ。 内：胴部横ヘラナデ、胴部斜ハケメ。	砂粒含む。 硬質。 淡褐色。	胴部煤付着。
壺 (手控) 土器	床より12cm 欠	9住 -9	胴径 8.5 底径 2.7	胴部最大径は中位やや上、底部近くで横、やや内反して底部へ。	全体に指ナデ、胴下半部附近指横ナデ。内：指横ナデ痕明瞭に残る。	砂粒少量。 良好。 淡黄褐色。	胴部黒灰。底部ケール状物質付着。
不明 土製品	床より4cm ほぼ完存	9住 -10	長さ 4.5	断面不整半円形。	棒状の粘土紐を折り曲げた手捏成形。末端をつまみ出し、折り返す。	砂粒少量含む。 良好、硬質。 淡黄褐色。	
高 土器	床より3cm ほぼ完存	9住 -11	口径 20.0 底径 13.5 器高 13.5	坏部下方に横、やや内反して外反、脚部に孔2個1組3箇所。	坏部内外面・胴部外面ヘラミガキ、脚内面斜ハケメ。穿孔はハケ調整後。	砂粒を少量含む。 良好。 淡黄褐色。	接合部附近煤付着。
器 土器	床より5cm 完存	9住 -12	上径 7.7 底径 9.2 器高 8.7	脚部は上半やや開き、中位より内反しながら開きが大きくなる。透し孔4個。	内面調整後穿孔。穿孔後台部外面上半縦ヘラミガキ、下半横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好。 赤地淡褐色、赤色塗彩。	器受部内外面・台部外面赤色塗彩。



第19図 2号住居址平面断面図

2号住居址

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。西壁側は熊野堂遺跡第Ⅱ地区に入り、同地区196号住及び214号住により切断されている。

耕作等の攪乱を受けており、北壁は検出されないが、東壁からの角がまわることにより、南北推定約5mを測る。平面形は推定方形で、軸はN75°Eを呈する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は13~24cmを測る。床面は大部分とばされて、ローム下のYP軽石が露出しており、部分的に強固なローム張り床が確認された。比較的浅い柱穴が、南壁より80cmの所に2本検出され、柱穴間は2.1mである。

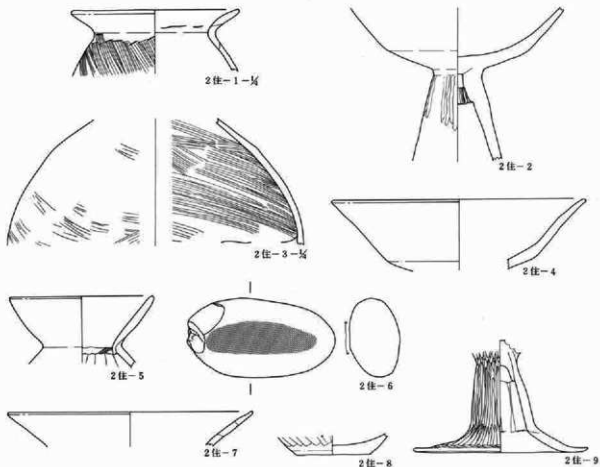
カマドは東壁中央部からやや南寄りに位置するが、遺存状態は非常に悪い。袖は白色粘質土を使用しており、遺存高さ3~12cmである。煙道は壁外に出ない。焚口幅40cmを測る。焚口より約30cmで燃烧部がはじまり、浅く皿状に掘りくぼめている。貯蔵穴は東南角部にあり1.4×1.3mとほぼ正方形に近く、底は楕円形を

呈し深さ35cmで二段掘り方を有する。

出土遺物は、床面密着の土師器甕片(8)、土師器壺口縁(7)や、貯蔵穴覆土内出土と接合する土師器壺片(3)がある。貯蔵穴覆土内に床面よりの流れ込みと思われる土師器壺口縁(5)がある。また覆土中で土師器高坏(2・9)が出土している。覆土中には、流入した弥生土器片が多数見られた。(小安)

第6表 2号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
壺 土 師 器	覆土 口縁部~胴部 以下残存	2住 —1	口径 17.9	胴部は大きく、く字状に外反。胴部へはやや内反ぎみに下がる。	内面及び断面に輪襷み痕残る。口縁部内外面：横ナデ、胴部外面軽いハケメ調整。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 灰茶褐色。	
高 坏 土 師 器	覆土 坏部~脚部写 残存	2住 —2	—	高さ比べ口径が大きく外面中に稜を持つ。坏部と、直線状に僅かに外斜する胴部が接合。坏部内稜なし。	脚部内面絞り痕、円筒状座間あり。外：坏部へラ調整後軽い横ナデ、胴部へラナデ。内：坏部へラ調整後横ナデ、脚部へラ調整。	砂粒を少量含む。 やや軟質、酸化。 鈍い褐色。	
壺 土 師 器	貯蔵穴内 胴部以下残 存	2住 —3	—	全体に大きく内反。球形状胴部形成。外面上位輪襷痕厚部、やや傾斜減る。	外面上位に輪襷み痕の肥厚部があり、内面下端には接合痕。外：ノハケメ後、磨り消すナデ。内：ノ右回りハケメ。	砂粒を多く含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
高 坏 土 師 器	カマド覆土 坏部写残存	2住 —4	口径 20.4	平底状の底部から、体部は強く外反する。口唇部は鋭い。	外：縦ナデ後、横ナデ。内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
壺 土 師 器	貯蔵穴内 口縁部~胴部 写残存	2住 —5	—	やや内反ぎみに開く受口状口縁が急にせばまり、く字状胴部をなし胴部に至る。	胴部内面舌状の接合痕。胴部内面に指押さえ痕。外：ナデ後→ナデ。内：口縁→横ナデ、接合部ハケメ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
甕	貯蔵穴内	2住 —6	長さ 11.8 幅 6.2 厚さ 4.0	平面は長円形、断面もやや角ばった楕円形を呈する。下部に自然剝離面が見られる以外は、全体に磨滅。			
壺 土 師 器	床面直上 口縁以下	2住 —7	—	直線状に薄手の口縁が大きく外傾。口唇部内に内傾し内面に軽い稜。	内外面へラナデ。	砂粒を多く含む。 気泡あり。軟質、酸化。 鈍い褐色。	
壺 土 師 器	床より3cm 底面	2住 —8	底径 7.8	底面周辺僅かに外反後はほぼ直線的に外傾し胴部に向かう。	外：脚部にかけて、斜へラケズリが始まる。内：→ナデ。	砂粒を多く含む。 軟質、酸化。 鈍い褐色。	
高 坏 土 師 器	覆土 脚部写残存	2住 —9	脚底径14.0	やや下方に開く円筒状の脚に、極めて扁平で先端の少し反った底部が付く。	脚：環接合部凹形のヘソ、内面・底面接合痕。外：1へラミガキ、底面周縁へラミガキ。内：脚部指ナデ痕。底面へラナデ。	砂粒をやや多く含む。 やや軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	



第20図 2号住居址出土遺物図



- 1 黒褐色砂質土 ローム・黄色粒子混在。軟かい。
- 2 暗黄褐色砂質土 乳白色軽石多く含み、褐色粒子も混在。

第21図 6号土壇断面及び出土遺物図

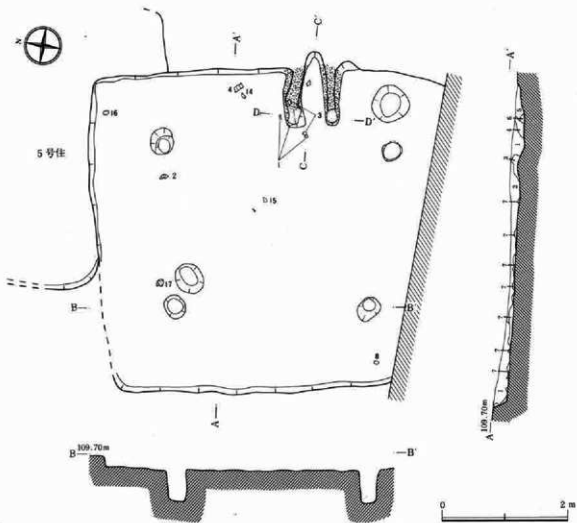
6号土壇

本土壇は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。9号住と重複するが、本土壇が新しい。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ30cmを測りN7°Eの長軸をもつ小判形プランを呈する。土壇底はやや固く、壁隙が若干高くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁は垂直である。

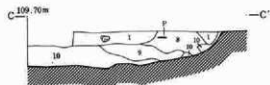
第7表 6号土壇出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
土師器	甕土 胴部	6城 -1			外：横ハケメ。 内：ヘクミガキ。	砂粒少量含む。 良好、硬質。 暗褐色。	外面煤付着。

覆土は暗黄褐色土・黒褐色土が堆積し、径2mmほどの乳白色の小石が混在する。遺物は暗黄褐色土中より、土師器薬片(1)が出土している。他に弥生土器小破片が3点出土。(小安)



- 1 暗灰褐色砂質土 乳白色軽石・ローム粒子少し混じる。
- 2 暗灰褐色砂質土 1層より暗い。
- 3 暗茶褐色粘質土 堆土・ローム粒子混在。
- 4 暗黄褐色粘質土 ローム粒子多く含み、乳白色軽石混在。硬い。
- 5 暗茶褐色粘質土 堆土塊多く含み軟かい。
- 6 暗黄褐色粘質土 堆土・ローム粒子多く含み軟かい。
- 7 暗黄褐色粘質土 黄色強く、ロームと2層の混在土。
- 8 暗茶褐色粘質土 粘土・堆土粒子混在。
- 9 暗茶褐色粘質土 軽石混じり、しまり強い。
- 10 黄茶褐色粘質土 ロームとの漸移層。



第22図 6号住居址平断面図

6号住居址

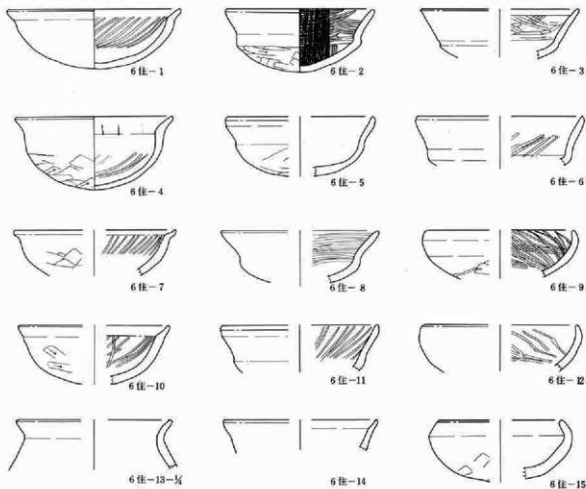
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。5号住居址を切断して構築されている。

南壁側は調査範囲外のため不明である。東西5.0mを測り、南北が長い長方形プランと推定される。主軸はN74°Eを測る。壁はやや急な立ち上がりをもち、壁高は20cmと浅い。床面はロームの直床であり、ほとんど平坦である。柱穴は4本主柱穴で、不整ながら対置関係にある。

カマドは東壁に構築されており、南壁不明であるが東壁中央部からやや南寄りに位置すると推定される。遺存状態は悪い。袖は白色粘質土を使用しているが、火熱のため表面は焼土化しており、先端には長さ25cm、幅17cm、厚さ23cmの粘質土の四角柱が置かれており、これも火熱のためレンガ状に変質している。焚口幅35cmを測る。燃焼部は若干掘りくぼめており、床面は焼土化している。煙道は壁外へ20cmほど突出する。貯蔵穴はカマド南にあり、60cmの円形を呈し、深さ50cmである。北西柱穴の東側に40×50cm、深さ50cmの楕円形のピットが確認された。

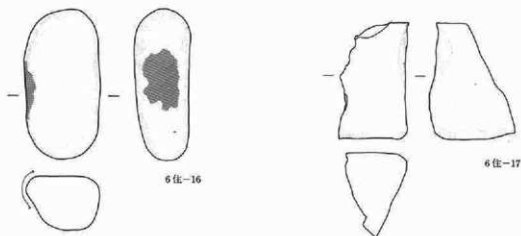
出土遺物はカマド内と周辺が多く、カマド内覆土より土師器坏(1・5・6・14)が、床面より若干浮いた状態で土師器坏(2・3・4・8・15)が、貯蔵穴覆土内より土師器坏(11)、覆土より土師器坏片(13)、土師器坏片(9・10)が出土している。

(小安)



第23図 6号住居址出土遺物図(1)

第24図 6号住居址出土土物図(2)

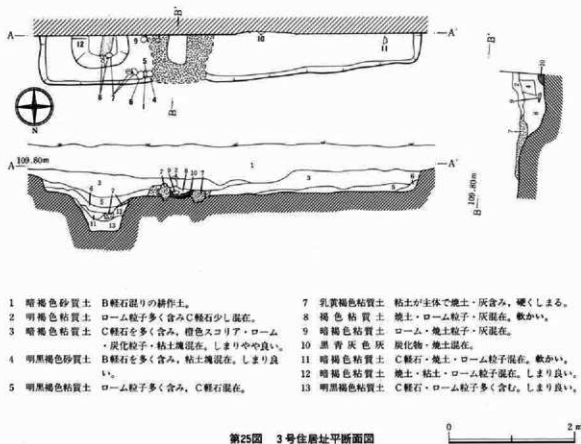


第8表 6号住居址出土土物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土器	床面直上ほぼ完存	6住-1	口径 器高	13.8 4.7	頸部附近に厚みを持つ。体部はやや球形を呈し内縁を持つ。口唇部は鋭い。	外：口縁横ナデ。体部へ底部不定ヘラケズリ。内：口縁横ナデ、体部横ナデ後↓放射状ミガキ、底部ヘラアテ痕。	砂粒を含む。硬質，酸化。赤褐色。	
坏土器	床より3cm 口縁部へ底部欠残存	6住-2	口径 器高	11.8 5.0	厚み均一、口縁下半指頭直で括れ。緩やかに外反、やや深みあり。口唇は丸みを持つ。	外：口縁部横ナデ、体部へヘラケズリ。内：口縁部一、体部ミガキ。	砂粒をやや多く含む。硬質，酸化。褐色。	内黒。
坏土器	床より2cm 口縁部へ体部欠残存	6住-3	口径	12.7	体部は扁平で、口縁部は長く外反する。頸部へラ部比縁1条。	外：口縁横ナデ。体部ヘラケズリ。内：口縁横ナデ後、ミガキ、頸部横ナデ、底部ヘラアテ痕。	砂粒を少量含む。硬質，酸化。赤褐色。	
坏土器	床より3cm 口縁部へ底部欠残存	6住-4	口径 器高	12.7 5.8	頸部附近厚み、底部薄い。全体に深み。口縁直線状立ちり緩やかに外反。口唇鋭い。	外：口縁部横ナデ、体部へヘラケズリ。内：口縁部横ナデ体部横ナデ後、ミガキ、頸部内縁ヘラアテ痕。	砂粒をやや多く含む。硬質，酸化。赤褐色。	
坏土器	カマド内覆土 口縁部へ底部欠残存	6住-5	口径 器高	11.8 4.8	口縁中央指頭直で括れ。後外反。底部器壁厚く深み。口唇鋭い。	外：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内：口縁部横ナデ、体部ナデ。	砂粒を含む。硬質，酸化。赤褐色。	
坏土器	カマド内覆土 口縁部へ体部欠残存	6住-6	口径	13.2	口縁部下半が一旦括れ緩やかに外反する。	外：口縁部一横ナデ。内：口縁部横ナデ後、頸部から上ノミガキ。	砂粒を少量含む。硬質，酸化。赤褐色。	
坏土器	覆土上層 口縁部へ体部欠残存	6住-7	口径	12.9	頸部はく字状に屈曲し内縁。口縁短く口唇直立。	外：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内：口縁横ナデ、体部横ナデ後、ミガキ。	砂粒を含む。硬質，酸化。明赤褐色。	
坏土器	床より2cm 口縁部へ体部欠残存	6住-8	口径	12.5	口縁部下半で括れ、緩やかに外反する。ほぼ一定の器壁を持つ。	外：口縁横ナデ、体部ヘラケズリ。内：ナデ後ミガキ。口縁体部へミガキ。	砂粒を少量含む。硬質，酸化。赤褐色。	

第9表 6号住居址出土物観察表(2)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
坏 土 部 器	覆土 口縁部～体部 片残存	6住 —9	口径 11.6	頸部附近に厚みを持つ。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は内反。	外：口縁部横ナデ、体部不定ヘラケズリ。 内：ナデ後底部よりヘミガキ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 赤褐色。	
坏 土 部 器	掘り方覆土 口縁部～底部 片残存	6住 —10	口径 12.0 器高 4.7	頸部附近に厚み。口縁は体部より緩やかに立ち上がり、僅かに外反内縁あり。口唇鋭い。	外：口縁部横ナデ、体部主にヘラケズリ。 内：口縁部横ナデ、体部ナデ後、↑放射状ミガキ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 赤褐色。	
坏 土 部 器	貯蔵穴内 口縁部～体部 片以下残存	6住 —11	口径 12.4	口縁部下半が滑面版により幅広く括れ、緩やかに外反する。	外：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内：口縁部～体部ナデ後、ノミガキ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 赤褐色。	
坏 土 部 器	覆土上層 口縁部～体部 片残存	6住 —12	口径 12.1	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は内反する。	外：口縁部横ナデ、体部ナデ後、↑ヘラケズリ。内：口縁部横ナデ後、体部上ヘミガキ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 茶褐色。	
壺 土 部 器	覆土 口縁部～胴部 片残存	6住 —13	口径 16.3	胴部器壁一定、口縁やや薄い。胴部膨らみ、口縁外反。頸部に内縁口唇平滑、断面輪積痕。	外：胴部↑ヘラケズリ後、口縁横ナデ。内：口縁横ナデ後胴部輪積み痕を消す。不定方向のナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	
坏 土 部 器	床より1cm 口縁部片残存	6住 —14	口径 12.3	器壁一定、緩やかに外反、口唇直立鋭い。	口縁部内外：横ナデ。	砂粒少量含む。硬質酸化。明赤褐色。	
坏 土 部 器	床より2cm 口縁部～底部 片残存	6住 —15	口径 9.8 器高 4.9	体部の膨らみは弱く、口縁部は体部との境で強く曲がり更に内反。底部丸底で器壁厚い。	外：口縁部横ナデ、体部↑ヘラケズリ。 内：底部ナデ後、体部上半へ口縁部に横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	口縁部に黒斑あり。
礎	床より4cm	6住 —16	長さ 11.9 幅 5.9 厚さ 4.2	直方体を呈し、断面は不整形形状。対をなす側面に敲打痕があり、両側端にもその痕跡が見られる。側面は磨減している。			
不 明 石 製 品	底より2cm	6住 —17	長さ 9.1 幅 5.2 厚さ 6.7	直方体状の破砕礎。側面や側端に一部磨耗痕あり。			



3号住居址

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。大部分が調査範囲外で、確認は北壁側のみである。

規模は東西6.1mを測るが南北は不明である。主軸はN4°Wを呈する。壁はやや急に立ち上がり、壁高は16~25cmを測る。床面は黒褐色土を20cmほど全体に敷き、ほぼ平坦によく踏み固めている。

カマドは北壁中央部より東側に構築され、浅く皿状に掘りくぼめ、一部を除いて淡黄褐色粘質土で固めて基底部をつくる。袖も淡黄褐色粘質土を使用しており、部分的に焼土化し、先端部は調査範囲外のため不明である。袖基底部外側には、暗褐色土（袖と同じ粘質土が若干混在し固くしまっている）があり、袖の固定をさらに強化した可能性が強い。調査範囲内で本址のみが確実に北カマドをもつ。貯蔵穴はカマド東側にあり、約北半分が確認された。東西90cm、深さ55cmあり、プランは隅丸長方形を呈すると推定される。

出土遺物は、土師器杯5個体（1・4・5・6・7）が、北壁とカマド右袖が交わる部分よりまとまって検出された。このうち床面密着は（5）で、（1）が重なって出土した。（11）の土師器甗片、（10）の土師器甗片も床面密着で検出されている。また貯蔵穴内より、四面体状に加工された長さ32.5cm、幅20.5cm、厚さ15cmの砂岩（12）が出土しており、カマド使用に関連があるものと推定される。覆土中からは、鉄滓が6点検出された他に、流入遺物の弥生土器片・須恵器片が多数、陶器片が数点見られた。（小安）

第三章 熊野宮遺跡第Ⅲ地区



3住-1



3住-2



3住-3



3住-4



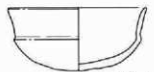
3住-5



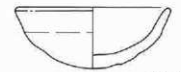
3住-6



3住-7



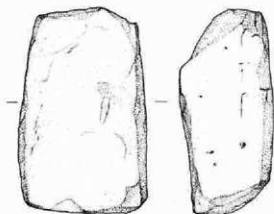
3住-8



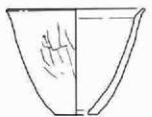
3住-9



3住-10-1/2



3住-12-1/2



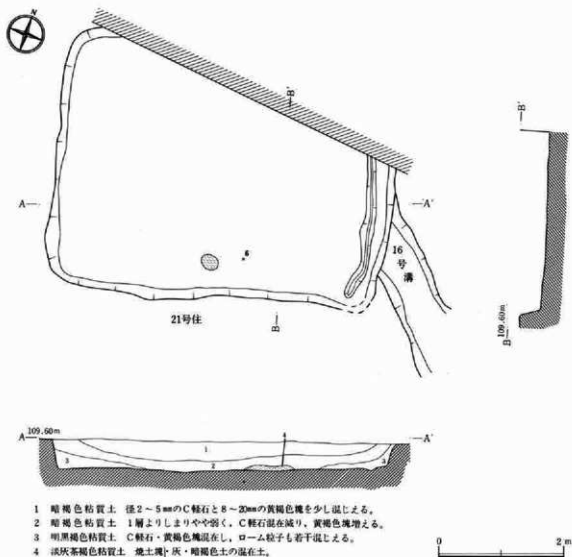
3住-11-1/2



第26图 3号住居址出土遺物图

第10表 3号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土器器	床より10cm 宛存	3住 -1	口径 12.0 器高 5.0	底部丸底、口縁僅かに 括れ外反。胴部ヘラ描 き浅い沈線、外縁あり。	外：口縁部横ナデ、体部↓ ヘラケズリ。 内：横ナデ、底部ヘラアテ痕。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 褐色。	
坏土器器	覆土 口縁部～底部 片残存	3住 -2	口径 11.8 器高 4.6	体部は扁平ぎみでやや 薄い。口縁部は外反。 器壁の厚さは一定。胴 部に外縁を持つ。	内外面：全体に研磨良好。 外：口縁横ナデ後、→底部。 中央←、周縁へ、各ミガキ。 内：口縁←、底部↑→ミガキ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土器器	覆土 口縁部～体部 片残存	3住 -3	口径 13.8 器高 6.0	大形、深み。口縁長く ほぼ直立、口唇平滑。 胴部ヘラ描き明瞭な横	外：口縁部横ナデ、体部→ ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
坏土器器	床より9cm 宛存	3住 -4	口径 11.6 器高 5.1	体部やや扁平、口縁内 反。胴部ヘラナデによる 割レ痕。	外：口縁部横ナデ、底部→ ヘラケズリ。周縁→ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 褐色。	底部外面に大 きな黒斑あり。
坏土器器	床面直上 宛存	3住 -5	口径 12.2 器高 4.7	口縁外傾し口唇僅かに 内反ぎみで薄い。胴部 に明瞭な横、底部丸底。	外：口縁部横ナデ、底部へ体 部不定方向ヘラケズリ。 内：全体に横ナデ後、口縁へ 放射状ミガキ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 明褐色。	
坏土器器	床より6cm 宛存	3住 -6	口径 12.2 器高 5.0	口縁部～底部にかけて 緩やかな丸みを持つ。 器壁は全体に厚みがあり 、胴部附近厚厚する。	外：口縁部→横ナデ、底部ヘ ラナデ、周縁ヘラケズリ。 内：口縁横ナデ後、ノ縁らな ミガキ。底部ヘラアテ痕。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	口唇部に黒斑 あり。
坏土器器	床より3cm 宛存	3住 -7	口径 12.4 器高 4.6	体部は扁平で薄い。口 縁部は長く外反する。 胴部にはヘラによる沈 線あり。	外：口縁横ナデ、底部→ヘラ ケズリ後、周縁ヘラケズリ。 内：口縁横ナデ後、→ミガキ 底部横ナデ・ヘラアテ痕。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
坏土器器	床より3cm ほぼ宛存	3住 -8	口径 11.0 器高 5.0	底部やや平底、体部縦 やかな丸みで直線状に 外反する口縁に狭く。 胴部ヘラ描き横線。	外：口縁部横ナデ、底部不定 方向ヘラケズリ。 内：口縁部横ナデ、底部弱 ヘラアテ痕残る。	砂粒を多く含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土器器	床より2cm 口縁部～底部 片残存	3住 -9	口径 12.3 器高 4.8	全体に厚みを持つ。扁 平ぎみの底部から外反 して口縁部が付く。	外：口縁部横ナデ、体部～底 部指節によるナデ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	体部外面に黒 斑あり。
要土器器	床面直上 口縁部～胴部 片残存	3住 -10	口径 17.5	口縁部はく字状に外反 し、内縁を持つ。器壁 は中厚手一定。	外：口縁部横ナデ、胴部↓ ヘラケズリ。内：口縁部横ナデ 胴部→ノナデ。	大粒の砂粒を含む。 硬質、酸化。 黄褐色。	
甗土器器	床面直上 口縁部～底部 片残存	3住 -11	口径 14.6 底径 4.7 器高 11.2	底部周縁僅かの括れ。直 線状立ち上がり、口縁 短く僅か外反。底部厚 く口縁にかけ薄い。	孔焼成前ヘラ調整。 外：口縁横ナデ、胴上位↑ヘ ラケズリ後、下位ヘラケズ リ。内：口縁～胴上位横ナデ、 下位ヘラナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 黄褐色。	
石製品 砂岩	貯蔵穴内 片残存	3住 -12	長さ 32.5 幅 20.5 厚さ 15.0	直方体状に加工されている 砂岩切石。右側面及び正面 中央部に加工された状態が 良く残る。側縁部は割落 がひどく旧状を失う。		軟弱。	



第27図 19号住居址平面断面図

19号住居址

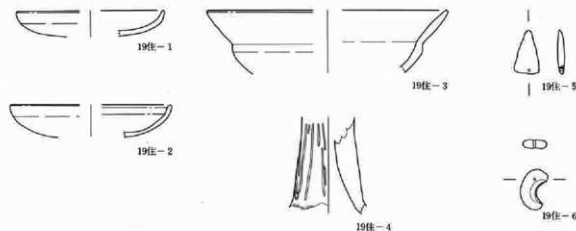
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東辺で16号溝、南辺で21号住と重複するが、いずれも本住居に切られる。東西は最大5.1m、南北は3.9mを測り、平面形はやや隅丸ぎみの長方形と思われ、主軸はN71°Eを測る。土層堆積状況では、北側を中心にして10~15cmの厚さで焼土・灰の混在層が床面まで見られる。壁近くではこの堆積は見られないため、本住居の廃絶後初期埋没が壁際で起きてからカマドが倒壊して流れ出た部分と思われる。

壁は、調査範囲内では床より確認面まで30~50cmの高さを比較的急傾斜で立ち上がっている。床は、ローム地山に2~10cmの厚さで茶褐色土を張って均様にしてあり、表面は全体にかなり硬化して明瞭に床と認定できた。柱穴は全く確認できなかったが、東辺では上幅12~20cm、深さ約10cmの周溝が見られた。この周溝は、東壁下端より約20cm内側を走っている。なお南側壁近くの床面には、20×30cmの広さで薄く(5mm以下)焼土が付着していた。

カマドは、調査範囲からは検出されていない。調査範囲外にそれを求めれば、東辺は位置的にかなり無理

と思われるので、北辺が考えられる。北側にやや片寄って見られた覆土中の焼土・灰の分布状況も、その傍証となりうるだろう。

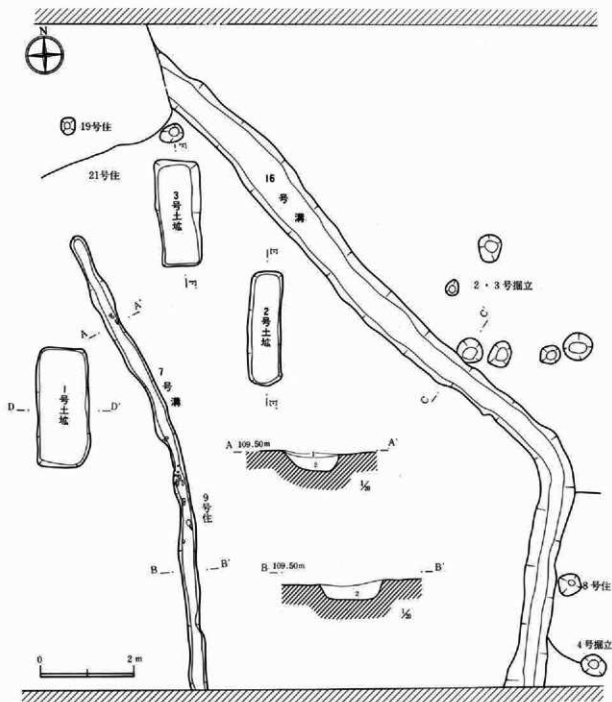
規模・深さに比べて、本住居の遺物は極めて少ない。床面近くで見られたのは、土師器甕胴部小破片が北東側で出土した以外には、南側中央壁より滑石製勾玉(6)があるだけである。図示したものは、いずれも覆土中の遺物で、他の小破片も土師器12点、須恵器1点しかなかった。(坂井)



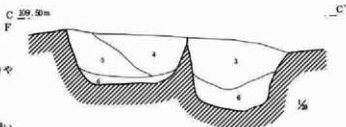
第28図 19号住居址出土遺物図

第11表 19号住居址出土遺物観察表

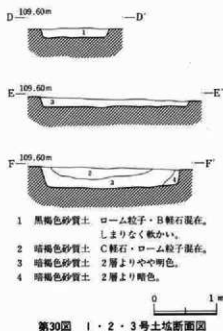
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	覆土 口縁部～底部 片残存	19住 —1	口径 11.9	全体に扁平、体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部は短い。	外：口縁部横ナデ、底部不足方向へラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土師器	覆土 口縁部～底部 片残存	19住 —2	—	全体に浅め、器壁は薄く一定、口縁部短い。	外：口縁部横ナデ、体部～底部へラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い橙色。	
高坏土師器	覆土 口縁部片残存	19住 —3	—	高坏の坏部。比較的深めで、体部はやや膨らみを持ち縁がある。	外：口縁部横ナデ、体部へラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 赤褐色。	
高坏土師器	覆土 胴部片残存	19住 —4	—	坏部との接合部が確かに括れ、下方が少し開く円柱状、頸部が付く。	外：ナゲ後1線らなミガキ、裾部との接合部にハケメ。 内：上位に絞リ溝、下端に絞りを消すような横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	
削石製模造品	覆土 完存	19住 —5	長さ 3.4 幅 2.0 厚さ 1.1	両面：縁がなく板状基部に片面穿孔1、裏面からの未通孔1。	三方の側面の一部を研磨。	滑石。	
勾玉	床面直上 完存	19住 —6	長さ 3.2 幅 1.9 厚さ 0.65	扁平板状、研磨で側部丸み形成。挟り明瞭、C字状を呈す。	孔は上位に片面穿孔で1箇所。	滑石。	



- 1 小礫層 径1~8mmの小礫が主体を占め、F P軽石も混在。
- 2 暗褐色砂質土 粒子細かく、ローム粒子混在。
- 3 茶褐色粘質土 粒子細かく、C軽石混在。しまりやや弱い。
- 4 茶褐色粘質土 3層より粒子やや粗い。
- 5 茶褐色粘質土 4層中にローム粒子混在。
- 6 黄茶褐色粘質土 微小のローム粒子混在。しまり強い。



第29図 7・16号溝、1・2・3号土壇平面断面図



第30図 1・2・3号土坑断面図

7号溝

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。9号住と21号住を切断して、10号住に近接する。21号住内よりはじまり、N27°Wの走向で約5.0m走り、9号住北西角附近から南へ走向を変え、N5°Wの走向により5.0mで調査範囲外へ達する。上幅40cm、深さ10cm、緩いU字状断面を呈し、緩やかに立ち上がるが、9号住内東側の立ち上がりは不明瞭であった。

覆土は暗褐色土で、ローム粒が混在する。部分的に砂利層が上面に堆積する。遺物は北西からの走向が南へ変わる近くで出土を見るが、ほとんどが9号住の遺物で、高坏脚部(1)のみが、本溝の遺物と考えられる。覆土中には、土師器の小破片が多数見られた。(小安)

16号溝

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で検出された。南側で8号住・4号掘立と、中央で2・3号掘立と、北側で19・21号住と重複する。これらの遺構のうち本溝より古いものは8・21号住であり、新しいものは19号住である。2・3号掘立及び4号掘立との層的な明確な新旧関係は、不明である。

上幅は0.6~1m、下幅は0.15~0.7mで、断面形は北側はU字形、南側はV字形に近い。確認面よりやや上の海拔109.60mから測った深さは35~55cmで、北西から南に次第に低くなる。走向は極めて特徴的で、南からN8°Eの方向で進んできてから、調査範囲内中央やや南寄りの地点で突然向きを北西に変えて、N46°Wの方で直進して行く。

遺物は出土量が少なく、図示したものと共に10数点の土師器片が、覆土中より検出されただけである。

本溝は走向の変化に最も大きな特徴が見られる。しかも断面形が、屈曲部より北側と南側では若干の差が認められる。なお、北側の走向がそのまま直線的に続くと、上越新幹線用地の熊野堂遺跡第II地区と交差するが、同地区の調査時に、本溝の延長と思われる溝が検出されている。(坂井)

1号土坑

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。プランは隅丸長方形を呈し、主軸方位N0°の長軸は2.4m、短軸1.0m、深さ15cmを測る。土坑底はほぼ平坦でやや圓い。壁は内反しながら緩く立ち上がる。覆土は黒褐色砂質土の一層で、浅間B軽石を多量に含み、ローム塊が若干混在。鉄滓片が覆土より出土。

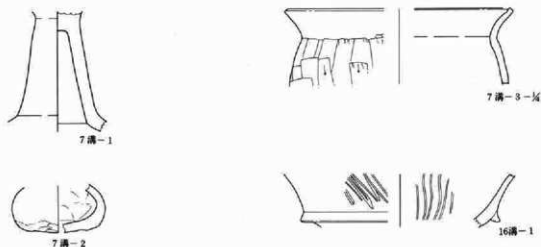
(小安)

2号土坑

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。9号住と重複するが、本土坑が新しい。長方形プランを呈し、主軸方位N1°Eの長軸は2.3m、短軸0.6m、深さ10cmを測る。土坑底はほぼ平坦であるが、壁際に向かって少しずつ高くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土で、浅間C軽石・ローム塊が混在する。遺物は出土しない。(小安)

3号土坑

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。21号住と重複するが、本土坑が新しい。長方形プランを呈し、主軸方位N5°Wの長軸2.1m、短軸0.7m、深さ25cmを測る。土坑底は底中央より南が若干高くなり、やや固い。壁は内反ぎみにやや急に立ち上がるが、南壁はやや緩い。覆土は暗褐色土で浅間C軽石・ローム塊が混在する。弥生土器・土師器小破片及び中世陶器片1点が出土。(小安)



第31図 7・16号溝出土遺物図

第12表 7・16号溝出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法址 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高坏土師器	底直上 脚部	7溝-1	—	器壁の厚い、ほぼ直線的に接地面へ延がる脚部。	外：ヘラナデ。 内：ヘラ調整痕あり。	石英・雲母・砂粒を含む。酸化。鈍い褐色。	二次焼成の煤付着。
小形甕土師器	覆土 体部～底部	7溝-2	—	体部～底部にかけて、強く丸みを持つ。	体部外：ナデ。底部ヘラケズリ。 内：ヘラケズリ。	黒色紅物・砂粒含む。酸化。明黄褐色。	
壺土師器	覆土 口縁～胴部	7溝-3	—	口縁部強く外反し、口脛部は反りを持つ。	口縁外：横ナデ。胴部粗い横ヘラケズリ。胴部縦ヘラケズリ。 内：全体にナデ。	砂粒含む。酸化。明赤褐色。	
高坏土師器	覆土 坏部以下	16溝-1	—	高坏か器台の坏部。体部に凸部が入る。	外：凸部の上は横ナデ後にヘラミガキ、暗文あり。内：横ナデ後ヘラミガキ、暗文あり。	砂粒含む。やや硬質。酸化。明赤褐色。	

第3節 古代の遺構

古代と考えられる遺構は、次のものがある。

住居址 計9軒 4号住, 11号住, 13号住, 14号住, 15号住, 16号住, 1号住,
10号住, 12号住

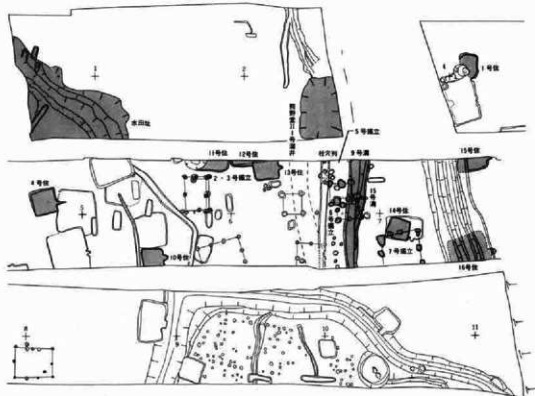
掘立柱建物址 計6棟 2・3号掘立, 5・6号掘立, 7号掘立, 柱穴列

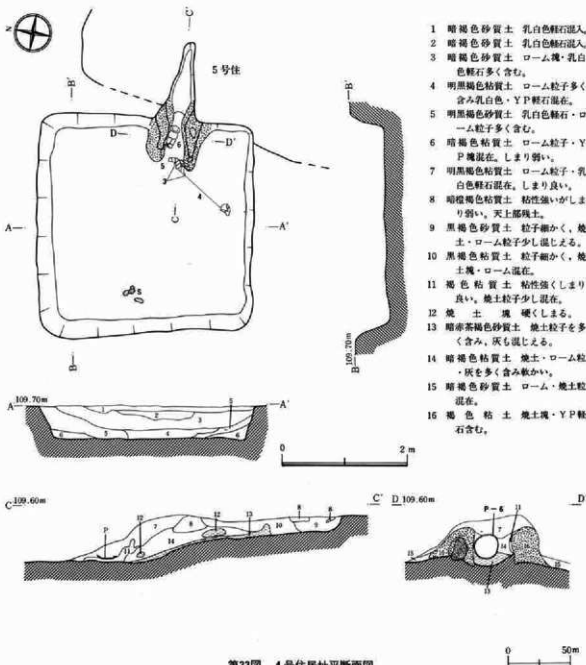
溝 計3条 8号溝, 9号溝, 15号溝

水田址 計1箇所

なお、時期不明の17号住, 3号井戸, 8号溝, 12・17号土壇を、本節に併記した。

第32図 古代遺構分布概念図





第33図 4号住居址平面断面図

4号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘土面で検出された。5号住居址を切断して構築されている。

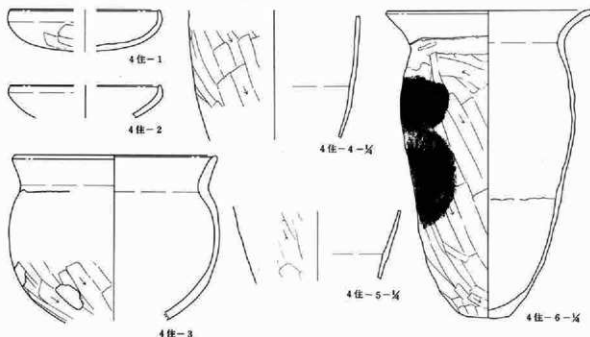
1辺3mの正方形を呈す。主軸はN77°Eを示す。壁はやや急な立ち上がりをもつが、40cmあたりから外側に開く様相を呈し、壁高55cmと高い。床面はローム直床であり、よく踏み固められている。

カマドは東壁中央部からやや南寄りに位置し、袖は人頭大ほどの自然石（角閃石安山岩）を右袖に3個、左袖に2個並べ、外側より暗褐色土を貼りつけ固定させ、褐色粘質土で覆い袖をつくる。部分的に焼土化している。焚口幅30cmを測る。燃焼部は浅く掘りくぼめてあり、ゆっくりと立ち上がりながら煙道部へ続き、壁外へ1.3mほど長く突き出ている。柱穴・貯蔵穴等は確認されなかった。

出土遺物はカマド内に多く、倒れたと推定される土師器長甕（6）が燃焼部床より5cm浮いた状態で検出された。土師器小形甕片（3）、土師器甕片（4）は床面密着で出土している。土師器坏片（1・2）もカマド覆土内より出土している。覆土中からは、鉄滓が約40片検出され、また多数の土師器片が見られた。

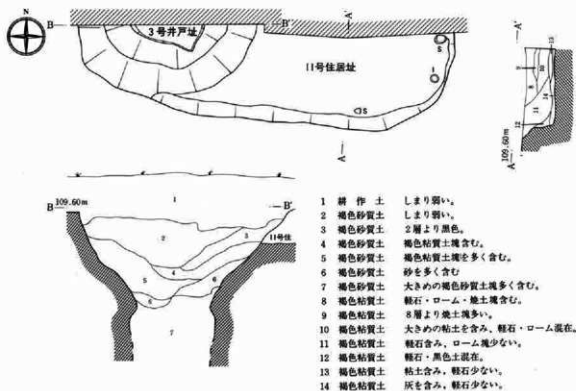
(小安)

第34図 4号住居址出土遺物図



第13表 4号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
坏 土師器	カマド内 口縁部～底部 片残存	4住 —1	口径 12.0 器高 3.3	口縁部は短く内反す る。器体は浅く、底部 は平皿。	外：口縁部横ナデ、底部ヘラ ケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	
坏 土師器	カマド内 口縁部以下 残存	4住 —2	口径 12.0	器体は浅く、口縁部は く字状に内反。	口縁部内外：横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	
小形 土師器	床面直上 口縁部～胴部 片残存	4住 —3	口径 16.0	口縁部く、く字状に外 反。胴部球形、頸部ナ デによる横線。	外：口縁部横ナデ、胴部↓後 下半へヘラケズリ。 内：口縁・胴部横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
長 壺 土師器	床面直上胴部 片以下残存	4住 —4	—	器壁は薄く一定の厚さ を持つ。内面に接合痕。	外：ヘラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を含む。硬 質、酸化。褐色。	
長 壺 土師器	床面直上胴部 片以下残存	4住 —5	—	器壁は薄く一定の厚さ を持つ。内面に接合痕。	外：ヘラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を含む。硬 質、酸化。赤褐色。	外面張付着。
長 壺 土師器	カマド内 完存	4住 —6	口径 21.9 底径 4.4 器高 32.6	口縁部は、く字状に外 反し、頸部にはヘラア テ風の横線。器壁薄く 同じ厚さで底部に至 る。胴部中央に接合痕、 最大径をなす。	外：口縁部横ナデ、胴部上位 へヘラケズリ。底部にかけて ヘラケズリ。底部周縁不定 方向ヘラケズリ。底磨線。 内：口縁部横ナデ、胴部横ナ デ、ヘラアテ風。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	胴部外面黒斑 及び張付着。



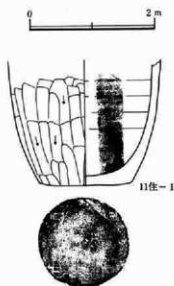
第35図 11号住居址、3号井戸址平面断面図

11号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。大半は調査範囲外にあり、さらに東南角部も3号井戸址によって破壊されている。また南側では2・3号掘立と、東側では11号住に接している。規模・平面形は不明であるが、南辺の走向はN88°Wを測る。

壁高は約50cmあり、上部壁はくずれた状況が観察できる。床面は掘り方の凹凸を解消するために粘質土・褐色土を用いた張り床である。カマドの位置については不明であるが、境界面土層断面の観察から東壁側に焼土塊・焼土粒子、カマドに使用したと考えられる粘質土があり、東壁側に設置しているものと推定できる。

出土遺物としては、東南角部に須惠器壺(1)が床面密着で出土している。覆土中からは、土師器小破片多数が出土。(長谷部)



第36図 11号住居址出土遺物図

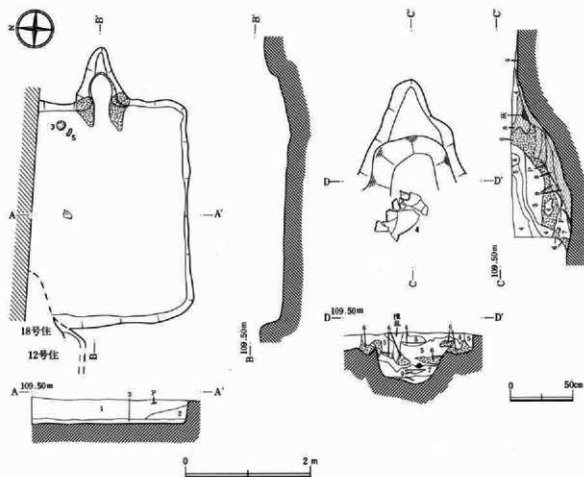
第14表 11号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺須惠器	床面直上 割部〜底部	11住 -1	底径 7.4	割部は、膨らみを持って立ち上がる。	外：割部平行状クマキ後、ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ調整。内：回転軸ナダ。	胎砂を含む。 硬質。還元。 灰色。	

3号井戸址

本井戸址も北側半分が調査範囲外にあり、11号住と同じく第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。11号住を切っている。西側では、20号住を切っている可能性が大きい。詳細は不明であるが、上部平面形は直径2.8mの円形を呈し、次第にスリ鉢状になり、上面から1.0mで方形になる。本井戸の6層の土層は大形の褐色粘質土塊で構成されていることから、上部平面形はもともと方形のプランであったと考える。方形部の長辺は、N73°Wの走向をもつ。深さは少なくとも確認面より2.0m以上ある。

覆土中からは、土師器環3点以上、須恵器甕片他に小破片が見られたが、いずれも流れ込みと思われる。また形状不明な径1～5cmの鉄滓大小43点も検出された。(長谷部)



- | | | | |
|---------|----------------------|---------|--------------------|
| 1 褐色粘質土 | 焼土・粘土・ローム塊、炭化物・軽石混入。 | 6 褐色粘土 | |
| 2 褐色粘質土 | 軽石含み、ローム塊混入。 | 7 褐色砂質土 | 灰を多く含み、焼土塊混在。 |
| 3 褐色粘質土 | 焼土・ローム塊・灰混在。 | 8 焼土塊 | |
| 4 褐色粘質土 | 軽石含み粘土・焼土粒子混在。 | 9 焼土 | 青灰色の灰・炭化物が混在。しり弱い。 |
| 5 褐色粘質土 | 4層と同じだが混入物少ない。 | | |

第37図 13号住居址平面断面図

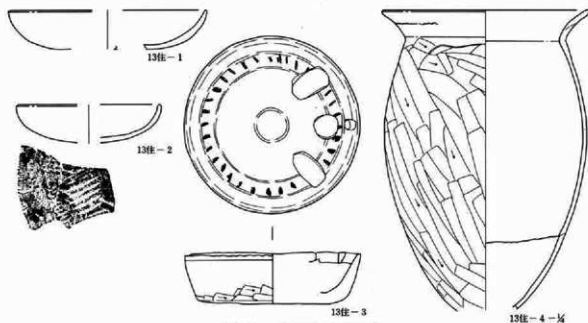
13号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。12・18号住と重複関係にあり、本住居は18号住より新しく、12号住より古い。北側約3分の1は調査範囲外にあり、平面形は方形もしくは長方形が推定でき、東西辺は約3.3mである。主軸方位はN84°Eを測る。

壁高は約30～35cmで、壁面及び床面は良好である。柱穴・壁周溝は存在しない。

カマドは上部はつぶれているが、残存の良い方である。東壁の南寄りに設置されたものと考えられる。両袖とも粘土で築かれ、ローム土は残っていない。煙道部入口は一段と高くなり、全体に二等辺三角形にプラン外に約80cm張り出している。貯蔵穴はつくられていない。

出土遺物はカマド左袖北側に床面密着の状態で、硯と考えられる須恵器の完存品一点(3)、さらに、カマド本体部底面より底部のみ欠損した土師器の長甕(4)が出土している。覆土中からは、土師器小破片が多数検出された。(長谷部)



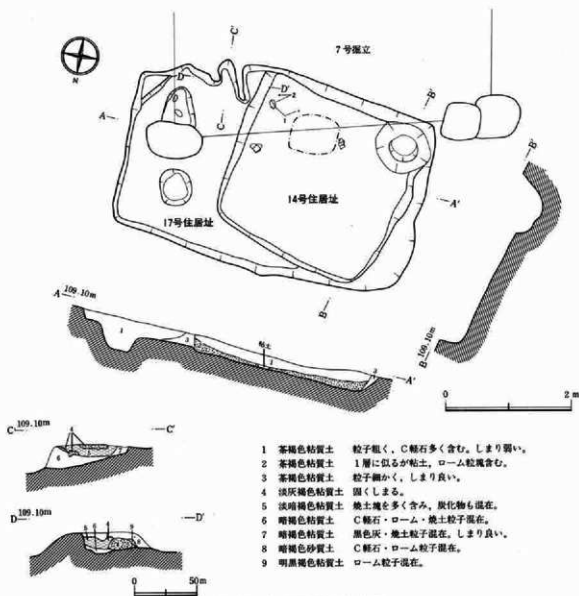
第38図 13号住居址出土遺物図

第15表 13号住居址出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	覆土 口縁部～底部 欠残存	13E -1		底部は平坦に近く、緩やかに立ち上がり、口縁部は少し内反。底部下側の器壁やや厚い。	外：口縁部横ナデ、底部下部～底部までへラケズリ。 内：口縁部横ナデ、底部へラケナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 赤褐色。	
土師器	覆土 口縁部～底部 欠残存	13E -2	口径 11.4	底部は平坦に近く、緩やかな丸みを持って立ち上がる。口縁部は直立きみで、僅かに内反。	外：口縁部横ナデ、底部へラケズリ(格子目状)。 内：口縁部横ナデ、底部へラケナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 赤褐色。	

第16表 13号住居址出土遺物観察表(2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
円形須恵器	床面直上 完存	13住 -3	上面径13.9 底径 11.5 器高 4.5	坏に平板状の蓋をした器形。上面の片側に寄せて中央に大小2個の円孔と両側対称の位置に長方形の孔が穿けられている。穿孔は施文後。	上：回転横ナデ後、端部ヘラアテ洗い凹線、内側縁部刻突文、中央部平滑研削、体部外：回転横ナデ後、下位ヘラケズリ、底部手持ヘラケズリ調整。内：回転横ナデ。	砂粒を含む。硬質、還元。青灰色。	
長土師器	カマド内 口縁部へ底部 瓦残存	13住 -4	口径 22.0 胴径 21.5	胴部緩やかな丸みを持ち長胴。口縁は、く字状外反内縁あり、器壁薄く一定、胴部内面に接合痕。	外：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ、頸部、底部ヘラケズリ。 内：口縁横ナデ、胴部ヘラナデ。	微砂粒を含む。軟質、酸化。赤褐色。	



第39図 14・17号住居址平断面図

14・17号住居址

14・17号住居址共に第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。7号掘立の柱穴が両住居と重複しているが、土層状況より、17号住→7号掘立→14号住の新旧関係が認められる。14号住は、約2.6×2.6mで南北辺はN105°Eを測りほぼ正方形を呈する。17号住は、東辺が約2.3m、中央部分での南北辺間の幅は約2.9mを測り、北辺に直交する軸はN8°Eを呈し、東西幅は3m以上あると思われる。17号住は、西半分を14号住に切られているため正確な形状は把握できない。ただ17号住の南東角附近は、三角形の段とそれに続く張り出しがあり、この張り出し部分を角と考えると、17号住の形状はかなり不整形になる。

14号住の壁は、西辺がややあまくなっているが、他辺はいずれもかなり急角度で立ち上がっている。17号住の壁は、確認面から床面が約15～20cmと浅いこともあって、ほぼ垂直に上がっている。床面は、14号住ではほぼ均一のレベルを持っており、中央部分では7号掘立の柱穴の覆土の上に張り床がなされている。17号住の床は10cm以上の高低差があり、南東角の段上部分と北側の床との高さはほぼ等しく、全体にかなり不均一である。柱穴・周溝は、両住居共に確認されなかった。

カマドは、14号住では平面的には全く認められなかったが、南東角の床部分から壁にかけて僅かに灰の堆積が見られた。17号住では南辺に地山を不整形に削り出して袖とするカマド状の部分が見られる。粘土はないが、覆土中に焼土・炭化物が検出された。14号住南西角には、径約80cm、深さ約20cmの掘り込みがある。17号住は東側に3個の落ち込みがあるが、中央は7号掘立の柱穴で、残りは深さ10cm程度で浅く、性格不明。

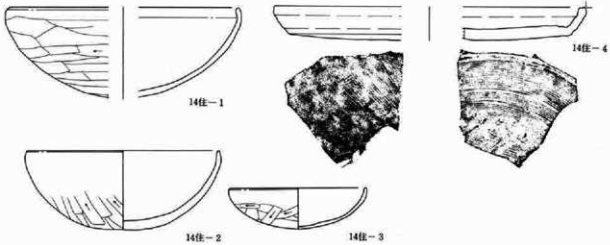
遺物は、14号住では、南東角の床面の灰直上で破片が2個体(1・2)出土している。覆土中からは、土師器杯(3)、須恵器盤(4)があり、小破片では、甕・坏片を主体とした土師器片が多数あり、他に須恵器片約10点見られた。17号住は遺物なし。

以上より、14号住は通常の竪穴住居とは性格が異なるが、住居址であることは確実と思われる。しかし17号住では、カマド状の遺構があって人間の生活の跡であることは確かだが、住居址であるかは確言しがたい。

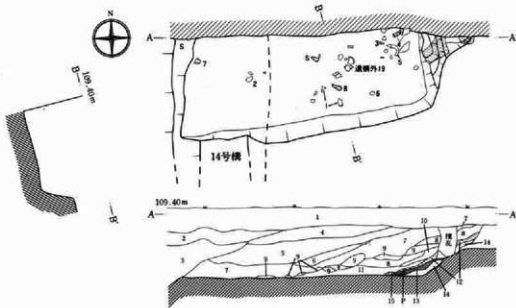
(坂井)

第17表 14号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
塊土師器	床面直上 口縁部～底部 片残存	14住 -1	口径 18.5 器高 7.2	大形深み、底部中央やや平坦丸みで立ち上がる。口縁部がやや内傾、体部も扁平。	外：体部～底部へラケズリ 底部格子状ヘラケズリ、口縁横ナデ。内：底部～体部不定ナデ後、回転横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 赤褐色。	
塊土師器	床面直上 口縁部～底部 片残存	14住 -2	口径 15.5 器高 6.2	大形深み、底部中央やや平坦丸みで立ち上がる。口縁直立やや内反、器壁底部厚く、口縁深い。	外：口縁部へラケズリ後、ナデ、底部へラケズリ。 内：へラケナデ、口縁部附近器壁剥落。	砂粒をやや多く含む。 軟質、酸化。 赤褐色。	
坏土師器	覆土 口縁部～底部 片残存	14住 -3	口径 10.0 器高 3.2	底部中央やや平坦緩く立ち上る。口縁短く内反、器壁口縁厚く底部薄い。	外：口縁体部へラケズリ後横ナデ、底部へラケズリ。 内：口縁横ナデ、底部横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 赤褐色。	
盤須恵器	覆土 口縁部～底部 片残存	14住 -4	器高 1.9	底部は少し上げ底状、口縁部短く、緩く開いて立ち上がる。	外：口縁部横ナデ、底部カキメ後、中央周縁へラケナデ。 内：口縁横ナデ、底部カキメ後、中央ナデ調整。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰白色。	



第40図 14号住居址出土遺物図



- 1 耕作土
- 2 灰茶褐色砂質土 粒子粗く、B礫石混在、しまり弱い。
- 3 灰茶褐色砂質土 2層より粘性あり弱い。
- 4 茶褐色粘質土 粒子粗く、C礫石混在。しまり良い。
- 5 茶褐色粘質土 4層中にローム粒子混入。
- 6 茶褐色粘質土 上下面に白色粘土。中に5層をはさむ。
- 7 暗茶褐色粘質土 粒子細かく、C礫石・ローム粒子混在。
- 8 暗茶褐色粘質土 7層中に粘土・地土粒子混在。
- 9 白質褐色粘質土 粒子細かく、ローム粒子含む。しまり良い。
- 10 白質褐色粘質土 9層中に地土が混在。
- 11 暗茶褐色粘質土 ローム粒塊・地土粒子を含む。
- 12 赤褐色粘質土 焼土
- 13 青灰色砂質土 しまり弱い灰層。
- 14 茶褐色粘質土 上面灰層。地土粒子混在。しまり弱い。
- 15 白褐色粘土 しまり良い。

第41図 15号住居址断面図



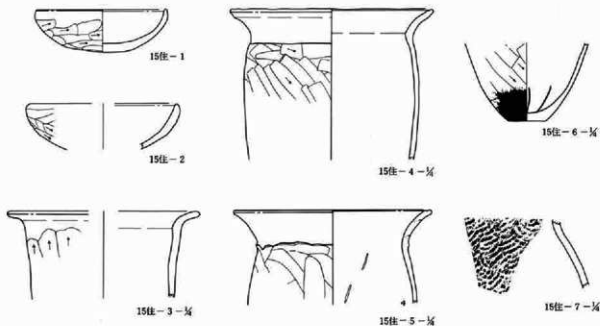
15号住居址

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土上面で確認された。14号溝と重複しており、土層断面より14号溝が新しいことは明瞭だが、14号溝の立ち上がりが傾斜しているため、本住居の床面はかなり残っている。東西辺は、推定約4mであり、主軸方向はN75°E。平面形は、方形もしくは長方形と思われる。埋没過程でカマドを構成したと思われる粘土塊が崩壊して床面中央付近まで流れこんでいる状況が、断面にはっきり見られる。

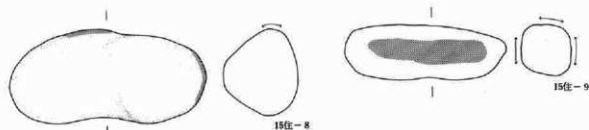
壁は、床面より確認面まで80~90cmの高さをかなりの急傾斜で立ち上がっている。南壁西端は、14号溝に切られて、次第に残存部分は低くなり、西壁は全く残っていない。床は、ローム地山の上に10cm以上の浅間C軽石混じりの黄茶褐色粘質土の張り床をつくっており、全体に硬質である。調査範囲内では、柱穴・周溝は確認できなかった。

カマドは、東壁のやや南寄りに位置する。壁外に、正三角形形状に約1m張り出して煙道をつくり、燃焼部より僅かに段を持ちながらかなりの急勾配で立ち上がる。壁面より内側へ約60cm、高さ約10cmのしまりの弱い黄色粘土の右側の袖が残っていた。燃焼部はその内側で、3~10cmの灰の堆積が見られ、壺片等の遺物をそこから検出している。焼土の残存も比較的多く、燃焼部灰の上より煙道端に至るまで5~10cmの厚さでかなり良好に残っていた。貯蔵穴等は、検出されていない。

遺物の残存状態は、カマド燃焼部内・床面中央・床面やや西寄りと大きく3箇所に見られる。燃焼部内では、土師器長壺口縁(4)が床より5~10cmのレベルで見られる。この個体の胴部と思われる破片が、床より5cm以内のレベルで散っていた。床面中央では、坏・壺等の土師器片が散乱していた。坏・壺片等床より最高30cm近くの高さまで浮いているものもあるが(1・3・5・6・8)、カマド内の破片と接合する個体もあり、土層断面に見られるようにカマド崩落埋没時に、カマドから流れたものと考えられる。この部分で円筒状石製品(8)1個が、床より10cmで見られた。西側の床面近くでは、須恵器壺片(7)は、床より約4cm、その他土師器壺・坏片(2)は床直上である。覆土中からは、多数の土師器壺・坏片が出土したが、須恵器片は5点のみである。
(坂井)



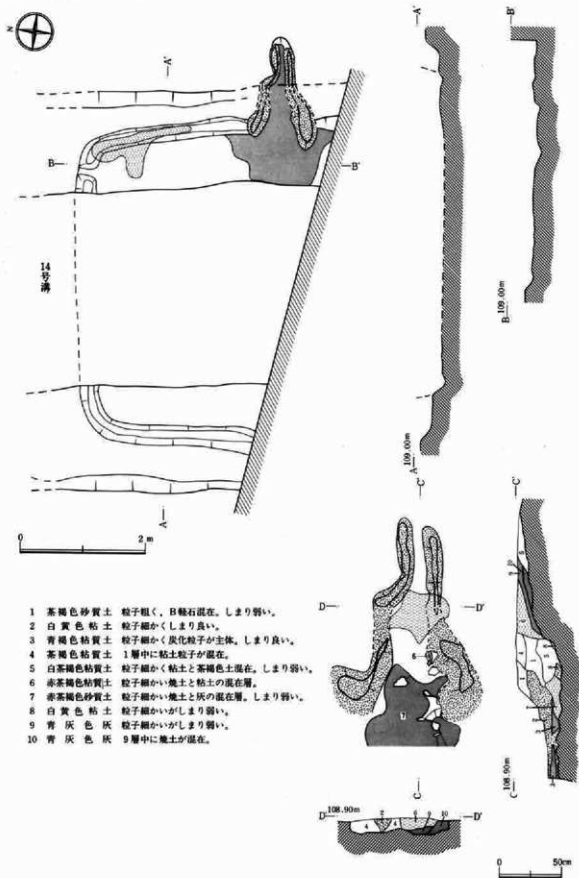
第42図 15号住居址出土遺物図(1)



第43図 15号住居址出土遺物図(2)

第18表 15号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	床より2cm 口縁部の一部を欠く	15住-1	口径 10.4 器高 2.4	底部に厚みを持ち、緩い丸みの立ち上がり。口縁部は短く少し内反。	外：口縁部横ナデ、体部→ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を少量含む。軟質、酸化。鈍い赤褐色。	外面に淡い黒斑。
坏土師器	床面直上 口縁部へ体部片残存	15住-2	口径 11.8	緩やかな丸みを持つ。	外：口縁部横ナデ、体部上位→ヘラケズリ後、ヘラケズリ。内：横ナデ。	微砂粒を含む。軟質、酸化。赤褐色。	体部外面黒斑。
甗土師器	床より2cm 口縁部へ胴部片残存	15住-3	口径 20.4	直立ぎみに立ち上がる胴部から、口縁部は、く字状に外反、器壁は一定しているが厚い。	外：口縁部横ナデ、胴部→ヘラケズリ。 内：口縁部横ナデ、胴部へナデ。	砂粒をやや多く含む。硬質、酸化。鈍い赤褐色。	
長甗土師器	カマド内床より5cm 口縁部へ胴部片残存	15住-4	口径 21.5	口縁部は、く字状に外反し、胴部は緩やかに膨らむ。	外：口縁部横ナデ、胴部→ヘラケズリ後、胴部四辺をヘラナデ。内：口縁、胴部横ナデ、強いヘラアテ痕。	砂粒をやや多く含む。軟質、酸化。褐色。	
甗土師器	床より5cm 口縁部へ胴部片残存	15住-5	口径 21.0	口縁部は緩い、く字状外反。器壁の厚さはほぼ一定。口唇部ヘラアテ状痕。	外：口縁部横ナデ、胴部へヘラケズリ、胴部ヘラアテ痕。 内：口縁横ナデ、胴部横ナデ、ヘラアテ痕。	砂粒を含む。軟質、酸化。鈍い赤褐色。	
長甗土師器	床より29cm 底部片残存	15住-6	底径 3.9	胴部下位から内反して小さな平底の底部に至る。器壁は薄い。	外：ヘラケズリ、底部周縁ヘラケズリで底部八角形。 内：ヘラ調整後、ナデ。	砂粒を含む。軟質、酸化。褐色→暗褐色。	外面に煤付痕。
裏面志器	床より4cm 胴部破片	15住-7	———	強く屈曲する頸部から大きく肩を張る器形。	外：格子目状タキキ後、一回いナデ、頸部に強いナデ。 内：背面直文、一回いナデ。	白色微砂粒を少量含む。硬質、還元。灰色。	
甗	床より10cm	15住-8	長さ 15.7 幅 7.0 厚さ 5.95	平面ソラ豆形、断面隅丸三角形を呈す。表裏両面の対称的な位置に、それぞれ平坦部があり、磨滅している。			
甗	掘り方覆土	15住-9	長さ 12.8 幅 4.1 厚さ 3.9	直方体状、断面隅丸方形を呈する。上下両端は丸みを帯び、上下及び両側面は平坦で、上下二面は磨滅しており、上面には、敲打痕の凹みあり。			



第44図 16号住居址平断面図

16号住居址

本住居址は14号溝の上段テラス部分のローム層及び第⑦層茶褐色粘質土上面において確認された。14号溝とはほぼ完全に重複しており、カマド煙道部のみがずれている。14号溝の上段テラス部分の掘り込みが浅かったため、その下の本住居のカマド下部と周溝が残されていた。東西の周溝の上場外側間の距離は、6.1～6.2mを測る。平面形は、やや隅丸ぎみの正方形と思われ、主軸方位はN74°Eである。

壁・床面・柱穴は、全く検出されていない。しかし床面は、14号溝のテラス面の状況より考えて、海拔108.65mのレベルあたりに構築されていた、と推定できる。周溝は、下場だけは使用当時の状況を残していると思われるが、西側は東側に比べて4～8cmほど低い。なお周溝の北東角付近には、薄く焼土の堆積が見られた。

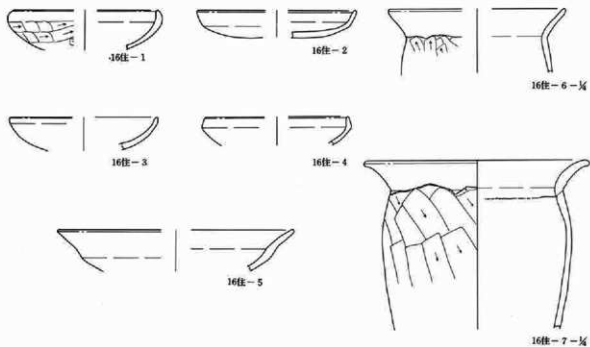
カマドは、粘土で袖・天上を構築し、煙道は周溝外へ約1.1m 鋭角に張り出している。袖は、残存していたのは壁外面から20～40cmほどだけで、白黄色の粘土が残っていた。袖前面には、焼土・炭化物を混じえた張床が少し残っていた。燃焼部から煙道にかけて5～10cmの厚さで灰が堆積していたが、焼土層はそれほど顕著ではない。

明らかな遺物は、カマド内出土のものが中心である。土師器壺片(6・7)は、いずれもカマド燃焼部内の灰の直上である。これらと同一個体と思われる破片も見られた。本住居のものとして他に取り上げた遺物は極めて少ないが、14号溝の覆土中の土師器・須恵器片は、本住居と関係があるだろう。(坂井)

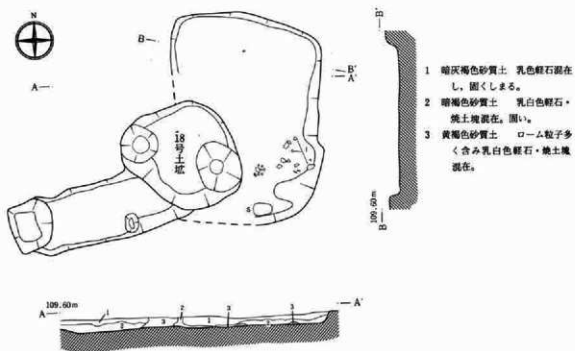
第19表 16号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	カマド内 口縁部～体部 片残存	16往 —1	口径 10.8	体部緩やかな丸みで立ち上り、肩部附近に厚み口縁短かく内反。	外：口縁部横ナデ、体部へラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土師器	カマド内 口縁部～底部 片残存	16往 —2	口径 12.8	やや扁平ぎみの底部から、短い口縁部が少し開いて立ち上がる。	外：口縁部横ナデ、体部～底部不定方向へラケズリ。 内：口縁部～体部横ナデ後、底部へラナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土師器	カマド内 口縁部～体部 片残存	16往 —3	口径 11.8	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は短かく、少し内反する。	外：口縁部横ナデ、体部へラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土師器	カマド内 口縁部～体部 片残存	16往 —4	口径 10.6	体部は緩やかに立ち上がり、肩部附近に厚み持つ、口縁短かく内反。	外：口縁部横ナデ、体部横方向へラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏土師器	覆土 カマド内 口縁部～体部	16往 —5	口径 18.9	大形で深みのある土器。体部は緩やかに立ち上がり、口縁大きく外反。	外：口縁部一横ナデ、体部へラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
壺土師器	カマド底より 2cm、口縁部 ～胴部片残存	16往 —6	口径 18.8	胴部は、く字状に屈曲し、口縁部は外反する。	外：口縁部横ナデ、胴部へラケズリ、肩部へラ反。 内：口縁横ナデ、胴部ナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い褐色。	胴部内面炭化物付着。
壺土師器	カマド直面上。 口縁部 ～胴部片残存	16往 —7	口径 24.0	頸部、く字状屈曲。口縁外反。口径水平ぎみに開く。肩部接合痕	外：口縁部横ナデ、胴部へラケズリ。 内：口縁部横ナデ、胴部ナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 褐色。	

第三章 熊野堂遺跡第Ⅱ地区



第45図 16号住居址出土遺物図



第46図 1号住居址断面図

1号住居址

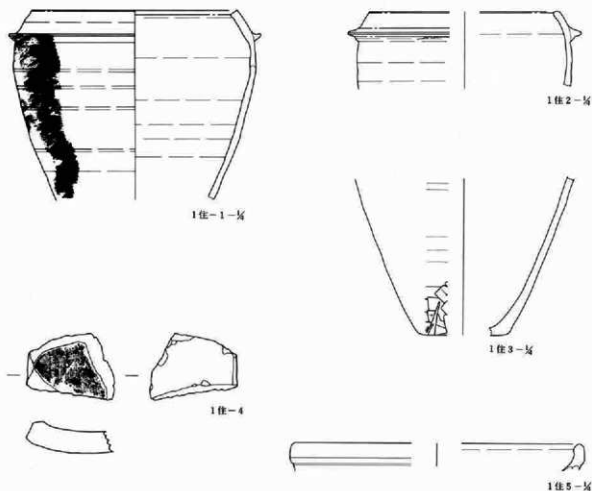
本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。時期不明の溝状遺構・18号土壇により西南部分を切断されている。溝状遺構は18号土壇に切られる。

耕作等の擾乱を受けており南壁は検出できないが、東壁からの角がまわることにより規模は2.4×3.3mで、南北が長い不整形長方形を呈する。壁は緩く立ち上がるがやや不明瞭で、壁高は東壁で約18cmを測る。主軸はN91°Eを呈する。床面はとばされていたが北側で一部確認でき、ローム直床でありよく踏み固められている。柱穴・壁周溝・貯蔵穴は検出されない。

カマドは東壁中央部より南寄りに構築されているが、遺存状態は非常に悪い。袖部は右袖の残骸がわずかに確認され、約80cm離れた南に所々火熱を受けた30×20cmの自然石があり、袖石として使用された可能性が強い。燃焼部床は、床面より2～3cm掘りくぼめている。

出土遺物は、カマド内やその周辺にまよって出土し、羽釜片（1）がやや浮いた状態でカマド内より検出されている。また覆土中より平瓦片（4）1片が出土している。覆土中には、多数の弥生土器片と10数点の陶磁器片の流入が見られた。

(小安)



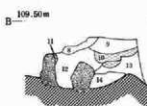
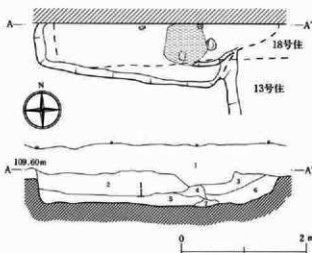
第47図 1号住居址出土遺物図(1)



第48図 1号住居址出土遺物図(2)

第20表 1号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
羽 釜	床より3cm 口縁部~胴部 互残存	1住 -1	口径 22.0	胴部上位最大径。口縁 短く強く内反。口唇少 し平滑やや内傾。蹄断 面三角形。輪痕痕。	内外面共に、ロクロ成形痕を よく残す。	砂粒をやや多く含む。 硬質、還元。 鈍い黄褐色。	胴部内外面に 煤付着。
羽 釜	覆土 口縁部~胴部 互残存	1住 -2	口径 20.2	胴部上位最大径。口縁 短く内反。口唇平滑。 蹄断面三角形。	内外：回転横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、還元。 灰白色。	
羽 釜	床より3cm 胴部~底部互 残存	1住 -3	底径 9.0	胴部僅かに膨み。器壁 中厚手で一定。胴部に 輪痕痕。	外：回転横ナデ。底部附近へ ラケズリ。底部ヘラケズリ。 内：回転横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 軟質、還元。 灰白色。	内面に煤付着。
平 瓦	覆土 約互以下	1住 -4	厚さ 1.7		表面布目痕。裏面の側面に白 然軸。側面の一部に当初の面 が残り。アテは割れ口。側面 に縦方向ヘラナゲ痕あり。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰白色。	
鉢 土師器	覆土 口縁部	1住 -5		浅い器形。器壁は厚い。 口縁部は短く、下位に 稜を持つ。口唇は丸い。	内外：回転横ナデ。 外：稜の下位にヘラアテ後。 洗ひ沈線一帯が走る。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	体部外面に煤 付着。
埴 土師質土器	覆土 口縁部~底部 互残存	1住 -6	口径 12.6 底径 6.5 器高 4.1	体部中位僅か丸み。底 部回転未切り後、高台 貼付し、指頭でのナデ。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。 底部指頭によるナデ上げ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 黄褐色。	
埴 須恵器	覆土 口縁部~体部 互残存	1住 -7	口径 14.0	全体に深みがある。ほ ぼ直線上に外反。口唇 部が更に開く。	高台部接合痕残る。 内外：ロクロ右回転による横 ナデ。	砂粒をやや多く含む。 軟質、還元。 灰白色。	



- 1 耕作土
粒子やや粗く、しまり弱く、C軽石混入。
- 2 茶褐色土
2層にローム粒子混入。
- 3 茶褐色土
2層に粘土粒塊混在。
- 4 白黄褐色土
粘性あり、しまり弱く、C軽石少ない。
- 5 茶褐色土
粘性あり、焼土・炭化粒子混入。
- 6 茶褐色土
粒子細かく、しまり弱く、ローム・炭化
粒子混入。
- 7 暗茶褐色土
粘土・軽石含む。
- 8 褐色土
粘土塊含む。
- 9 褐色土
粘土塊含む。
- 10 雑土
- 11 灰白色粘土
- 12 褐色土
粘土・軽石含む。
- 13 褐色土
粘土塊含む。
- 14 黒色土
C軽石多く含む。

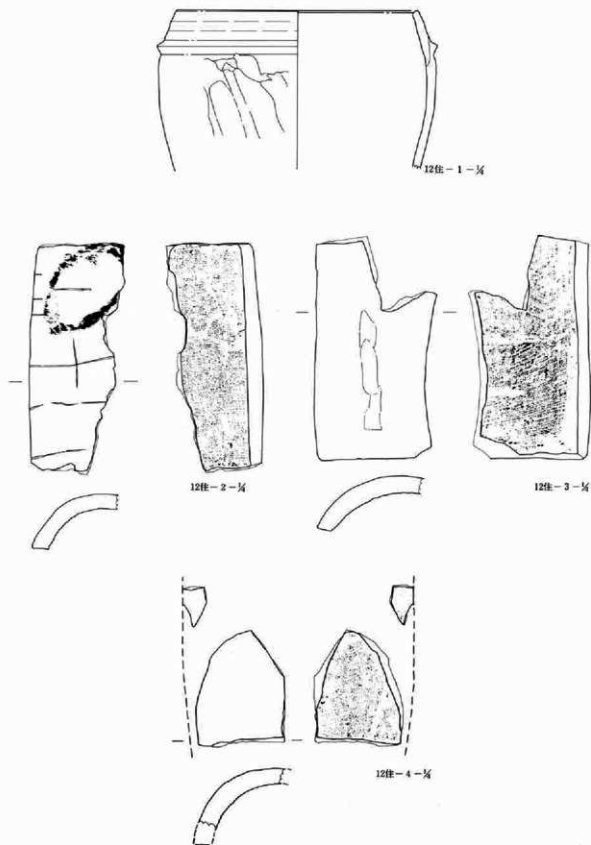
第49図 12号住居址平断面図

12号住居址

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側で13号住、18号住を切断しており、西側では11号住に接している。本住居は約3分の2が調査範囲外であるが、全体の形状は方形もしくは長方形と推定できる。南辺の長さは2.8mで、主軸はN 97° Eを測る。壁高は約40cmだが、柱穴・周溝は検出できなかった。

カマドは東南角部東壁に設置されているが、残存状況は悪い。袖部は瓦・河原石を袖内に埋め込み、白色粘土を使用してつくられている。

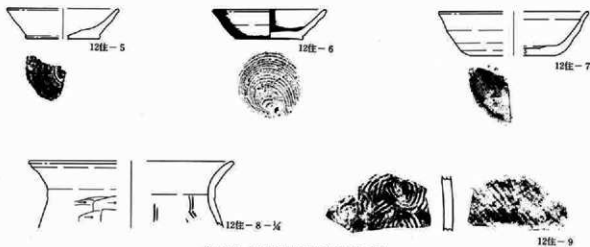
出土遺物としては、羽釜(1)、カマド粘土補強に使用した瓦(2・3・4)が、いずれもカマド内を中心に出土した。また混入遺物と考えられるものには、土師質土器小皿(5・6)、須惠器環(7)、須惠器甕片(9)、土師器壺口縁部(8)がある。覆土中には土師器小破片が多数見られた。(長谷部)



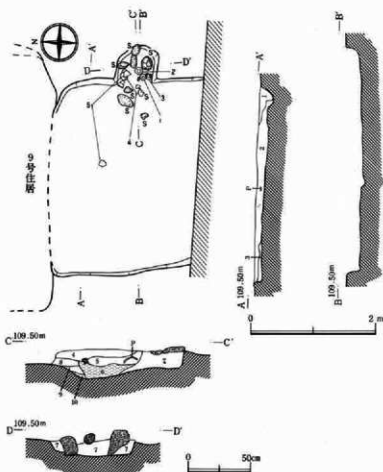
第50图 12号住居址出土遺物图 (I)

第21表 12号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
羽 釜	カマド底より 5cm 口縁部→胴部 片残存	12住 -1	口径 25.6	胴部上位に最大径を持ち、口縁部は内反する。胴の断面は三角形。口唇部断面は平滑。	外：口縁部横ナデ、胴部横ナデ後、1ヘラケズリ。 内：口縁部ヨココナデ、胴部幅広い単位の横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、還元。 鈍い赤褐色。	
丸 瓦	カマド底より 3cm 片残存	12住 -2	厚さ 1.7		丸瓦で表面素文、横ナデ調整工具による横位と縦位の浅い沈線が見られる。裏面布目痕アテ。側面にヘラ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	
丸 瓦	カマド底より 21cm 片残存	12住 -3	厚さ 2.0		表面素文、横ナデ、裏面布目痕、布の垂れ痕あり。アテは割れ口。側面はヘラ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	
平 瓦	カマド底より 19cm 片残存	12住 -4	厚さ 1.9		表面素文、幅広い単位の横ナデ、中央部に縦方向ヘラナデ、裏面布目痕、アテ。側面ともにヘラ調整。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 褐色～鈍い橙色	
小 皿 土質土器	カマド 口縁部→底部 片残存	12住 -5	口径 9.0 底径 5.8 器高 2.4	全体の浅め、体部下位で一旦少し括れ外反する。	底部、回転糸切り後ヘラナデ、内外：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、還元。 鈍い黄褐色。	
小 皿 土質土器	カマド ほぼ完存	12住 -6	口径 9.1 底径 5.4 器高 2.3	全体に浅め、体部は外反、口唇部更に少し開く。	底部、右回転糸切り痕。内外：クロコ回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、還元。 鈍い黄褐色。	内外面に煤付着。
坏 須 恵 器	カマド 口縁部→底部 片残存	12住 -7	口径 12.0 底径 7.0 器高 3.5	底部の器壁は厚く、口唇部にかけて薄くなる。体部緩やかに立ち上る。	底部、回転ヘラケズリ調整。内外面に回転横ナデ、底部接合部附近ヘラケズリ。	細砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	
糜 土 器	カマド 口縁部片残存	12住 -8	口径 11.8	口縁部は緩い、く字状に外反する。器壁の厚さは、ほぼ一定している。	外：口縁部横ナデ、胴部→ヘラケズリ。 内：口縁部横ナデ、胴部→ヘラケズリ、ヘラアテ痕。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 橙色。	
糜 須 恵 器	カマド 胴部破片	12住 -9	厚さ 0.7	緩い丸みを持つ。	外：平行タタキ痕により格子目状。内：背海紋文	砂粒を少量含む。 硬質、還元、灰色。	



第51図 12号住居址混入遺物図 (2)



- 1 暗灰褐色砂質土 粒子細く粘性なし、径2～5mmの乳白色軽石とローム粒子混在。
- 2 明黒褐色砂質土 粘性なく、径2～5mmの乳白色軽石とローム粒子混在。
- 3 明黒褐色粘質土 粘性やや強く、ロームの混入。
- 4 暗灰褐色粘質土 粘性やや強く、ローム粒子を多く含む、焼土粒子も少し混じえる。
- 5 暗褐色粘質土 粘性やや強く、ローム粒子を多く含む、焼土粒子も少し混じえる。
- 6 暗褐色粘質土 5層よりも明るく、灰と焼土粒子を全体に多く含む。しまり強い。
- 7 暗褐色粘質土 5層と色調が同じで、粒子細かく粘性やや強い。焼土粒子・ローム粒子を少し混じえる。
- 8 暗灰褐色粘質土 粘性やや強く、ローム粒子を全体に多く含む。
- 9 明黒褐色粘質土 粒子細かく粘性あり、焼土粒子を少し混じえる。
- 10 暗灰褐色粘質土 粘性あり、多量のローム粒子を含む。

第52図 10号住居址平面断面図

10号住居址

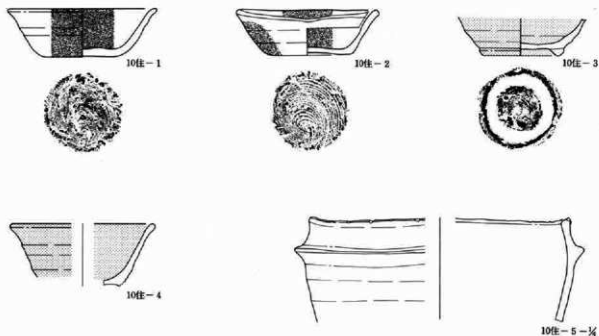
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。9号住居を切断して構築されており、カマドより80cm南側は調査範囲外となり不明である。

東西2.8mを測り、主軸はN83°Eを呈する。

壁は急な立ち上りをもち壁高12cmを測る。床面はほぼ平坦で、黄褐色土をよく踏み固めてある。

カマドは東壁北角近くに構築されており、遺存状態は悪い。袖は確認されず、カマド内と周辺より角閃石安山岩軽石(大きいもので30×15cm、小さいもので10×10cm)8個が検出され、軽石を使用した石組みカマドの可能性もある。クライ状に15cm掘りくぼめ、暗褐色土を固めて基底部をつくり、この際軽石を若干埋め込んで、火熱を受ける面が外側に開くよう、うまく斜めに立てている。柱穴・貯蔵穴等は確認されない。

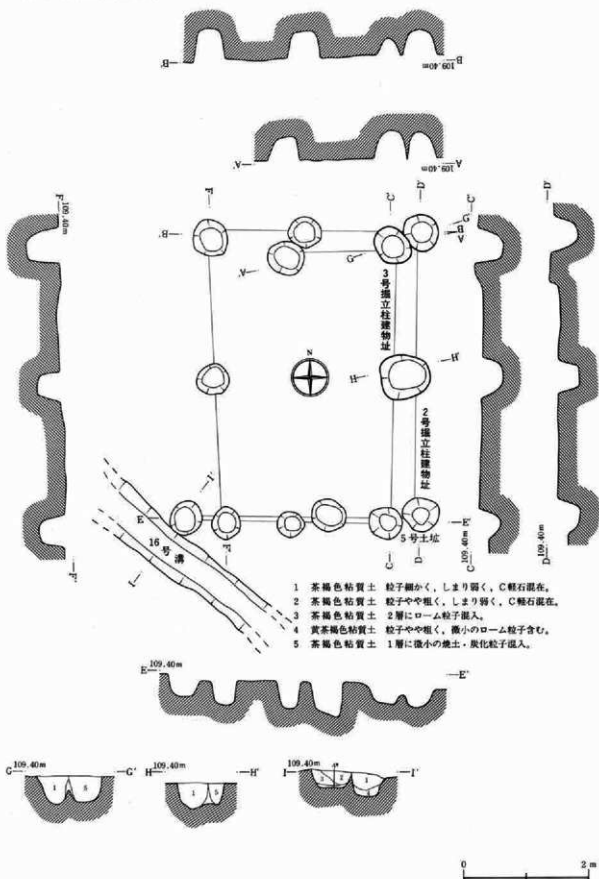
出土遺物は土器で、カマド内より多くが出土した。黒色土器片(1・2)、須恵器塊(3・4)、羽釜片(5)がカマド内より浮いた状態(9～17cm)で、同じ(5)の羽釜片が床面密着で検出されている。覆土中より青磁片も見られた。(小安)



第53図 10号住居址出土遺物図

第22表 10号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏 黒色土器	床より9cm 完存	10住 -1	口径 12.0 底径 6.0 器高 3.8	底部準か上げ底。体部 緩やかな丸み。口縁少 し外反。口唇丸い。	底部左回転糸切り痕。体部内 外面右回転横ナデ。黒色処理。	砂粒をやや多く含 む。軟質、酸化。 黒褐色。	
坏 黒色土器	床より12cm 完存	10住 -2	口径 12.0 底径 6.6 器高 3.4	底部は上げ底。体部は 膨らみがなく、口縁部 少し外反。口唇丸い。	底部右回転糸切り痕。体部内 外面右回転横ナデ。内面黒色 処理。	砂粒をやや多く含 む。軟質、酸化。 灰黄褐色。	
埴 須 器	床より10cm 体部～底部写 残存	10住 -3	底径 6.0	ナデ付け高台。体部緩 やかな丸みを持って立 ち上がり。器壁は薄い。	底部左回転糸切り痕。体部内 外面右回転横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、中性炎。 暗褐色。	
埴 須 器	床より13cm 口縁部～体部 写残存	10住 -4	口径 11.6	高台部剥落。体部は膨 らみがなく、口縁部は 少し外反し肥厚する。	底部回転糸切り痕、付け高台。 体部内外面右回転横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、中性炎。 鈍い黄褐色。	
羽 釜	床面直上 口縁部～頸部 写残存	10住 -5	口径 27.8	最大径は頸部附近。口 縁やや内反。口唇平滑 内傾。頸断面三角形。 胴外面輪痕。	外：口縁部、体部回転横ナデ。 口唇部にはナデ後、へう状工 具により不定間隔のキズミあ り。内：外面と同じ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 暗褐色。	黒斑あり。



第54図 2・3号独立柱建物址平断面図

2・3号掘立柱建物址

本掘立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。南東側で5号土壇、南西側で16号溝と重複している。5号土壇は、確実に本掘立より新しいが、16号溝との関係は確定しがたい。

2号掘立は、2×2間、辺長は、東辺4.4m、南辺3.1m、西辺4.5m、北辺3.4mである。全体としては、やや台形ぎみの長方形であり、主軸はN6°Wである。3号掘立は、推定2×2間で、東辺が4.3m、南辺が3.3mを測るが、北西角の柱穴が検出できなかったため北辺と西辺の長さは不明である。そのため3号掘立の正確な形状は知りえないが、一応主軸をN2°Wとする2号掘立と同様の平面形を推定した。なお両掘立は、北東側で完全に重複しているが、明瞭な新旧関係を示す断面は検出できなかった。

各柱穴の底径は、2号掘立では30～36cmが大半で、南辺中央の柱穴が32×44cmやや大きい。3号掘立では、24～42cmと少し差が大きい。確認面よりやや上の海拔109.40mから測った各柱穴の深さは、次の通りである。2号掘立では、東辺49～54cm、南辺53～61cm、西辺45～53cm、北辺46～50cmを測る。3号掘立では、東辺44～58cm、南辺41～55cm、北辺44～52cmである。柱穴間距離は、2号掘立の場合、東辺は共に2.2m、南辺は1.5と1.7m、西辺は2.3と2.2m、北辺は1.5と1.9mである。3号掘立では、東辺は2.0と2.3m、南辺は1.6と1.7m、北辺は1.7mである。

両掘立共に、柱穴の底から出土した遺物はなかった。各柱穴の覆土中からは土師器破片が数点ほど出土し、実測可能なものは図示した坏2個体である。他に流れ込みと思われる軟質陶器片が5点見られた。

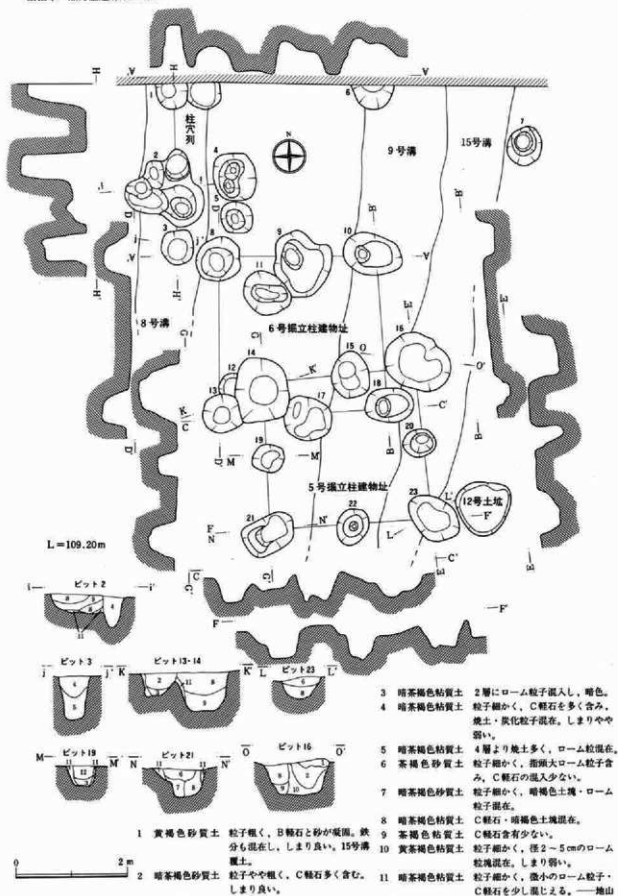
両掘立の新旧関係は、上述のように不明だが、全体の構成・各柱穴の形状は近似している。3号掘立の北西及び西の2個の柱穴が検出できなかったのは、当初から存在しなかったと思われる。3号掘立は未完成であったと考えたい。(坂井)



第55図 2号掘立柱建物址出土遺物図

第23表 2号掘立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	覆土 口縁～体部片	2掘 -1	口径14.0mm	口縁部が内反する。	外：口縁部は横ナデ、体部→ヘラケズリ。内：薄く粘土を塗って成形、ヘラナデ。	砂粒を含む。やや硬質、酸化。内黒い褐色、外黄褐色。	
土師器	覆土 口縁～体部片 以下	2掘 -2	口径14.0mm	口縁部が内反する。	外：口縁部は横ナデ、体部→ヘラケズリ。	砂粒を含む。比較的硬質、酸化。褐色。	



第56図 5・6号獨立柱建物址、柱穴列、12号土壇断面図

5・6号掘立柱建物址、柱穴列、12号土壇

本遺構群はいずれも第④層の暗褐色粘質土面で確認された。5・6号掘立は共に東側で9・15号溝と重複しており、5号掘立は両溝より、6号掘立は9号溝より古い。また西側で6号掘立と柱穴列は8号溝と重複し、溝がいずれの遺構よりも新しい。また6号掘立が5号掘立を切っている。

5号掘立は、2×2間で、東辺2.7m、南辺2.9m、西辺2.6m、北辺2.7mのほぼ正方形を呈し、主軸はN4°Wをとる。6号掘立は、1×2間で、東辺2.8m、南辺2.9m、西辺2.8m、北辺2.7mのやや歪んだ正方形を呈し、主軸はN11°Wをとる。柱穴列は、N5°Wの方向に直線状に3個の柱穴が並んでおり、調査範囲内での長さは2.9mである。

柱穴の底径は、5号掘立では、四隅が52~60cm、中間が8~33cmと極めて対称的になっている。6号掘立では、南辺が22~30cm、北辺が18~36cmと全体にやや不ぞろいである。柱穴列は、3個の柱穴は36~40cmの間に収まる。確認面よりやや上の海拔109.20mより測った各柱穴の深さは、5号掘立では四隅が66~82cm、中間が52~87cmである。6号掘立では、南辺が60~65cm、北辺が55~65cmとかなり近似している。柱穴列では、97~135cmとかなり深い。柱穴間の距離は、5号掘立では東辺が1.3と1.4m、南辺が1.4と1.4m、西辺が1.4と1.2m、北辺が1.5と1.1mである。6号掘立では、東辺が2.8m、南辺が1.2と1.7m、西辺が2.7m、北辺が1.4と1.3mである。柱穴列では1.6と1.4mである。

遺物は、他の掘立に比べ確認時に比較的多く検出されたが、いずれの遺構も、柱穴の底からの出土はない。5号掘立では、柱穴覆土より灰輪塊(1)と須恵器壺片(2)が出土し、その他に多数の土師器片そして須恵器片が見られる。6号掘立は、土師器小破片約10点以外確実な遺物がなく、土師質土器塊(1)は、確認時のものである。柱穴列は、深いためか覆土中の遺物が多く、土師器坏(1・2・3)、壺片(5)、須恵器坏(4)、甕(6)が覆土から出土した。

5号掘立の南東角に接する12号土壇は、80×80cmのやや三角形の楕円形を呈し、海拔109.20mよりの深さは52cmである。遺物はないが、覆土は他の各遺構の柱穴とは異なって、浅間C軽石の混入が見られなため、時期的にはかなり古いものの可能性がある。

5・6号掘立、柱穴列の周辺には、平面図に見られるようにその他にも多数のピットがあり、まだ別の掘立状遺構が存在する可能性が考えられる。特に柱穴列については、東側に深さと形の似たピット7があり、このピットと組んで北側に延びる掘立も想定できる。しかし調査範囲内では、他に対応するピットを検出できなかったため、一応柱穴列として扱った。なおこの柱穴列の各柱穴の覆土には焼土が含まれているため、この上の建築物は火災によって倒壊したと考えられる。

なお上述のような重複関係から、5号掘立は、浅間B軽石純層を覆土に持つ15号溝より古いことが知られるが、6号掘立は5号掘立に後出するものの形状からそれほど時間差があるとは考えにくく、そのためやはり15号溝よりも古いと考えたい。柱穴列は、ピット7を同一の遺構と考えた場合、15号溝よりも古いことは明瞭であり、6号掘立とも重複が考えられ、形状から考えても6号掘立に先行すると推定したい。(坂井)

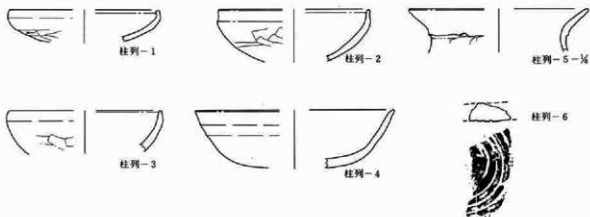


第57図 5・6号掘立柱建物址出土遺物図

第24表 5・6号獨立柱建物址出土遺物観察表

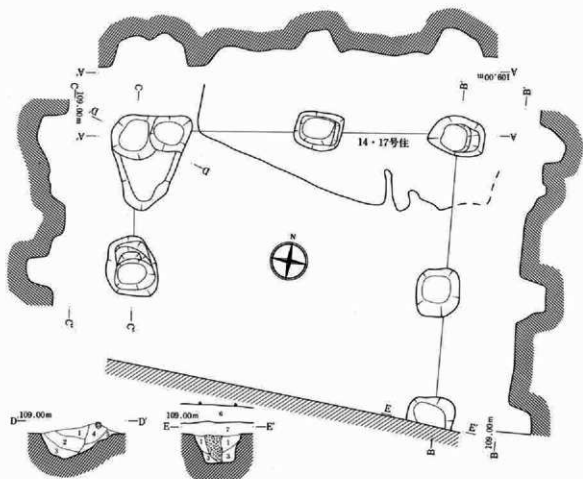
器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
塊 灰釉陶器	5 獨立覆土 口縁へ体部写 以下	5 掘 -1	—	口縁部が外反する。	内外面共に施釉されている。 施釉は内面が厚く、外面が薄 い。	長石粒を含む。 硬質、還元。 明オリブ灰色。	
壺 須恵器	5 獨立覆土 胴部小片	5 掘 -2	—	—	内外面共にタタキ灰が残って いる。内面に自然軸。	砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰色。	
塊 土質土器	5 獨立覆土 底部の一部	6 掘 -1	—	高台部が比較的高い。	付け高台、丁寧に貼り付けら れ、横ナデされている。	砂粒を含む。 比較的硬質、酸化。 浅黄褐色。	

第58図 柱穴列出土遺物図



第25表 柱穴列出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
坏 土 節 器	覆土 口縁へ体部写 以下	柱列 -1	口径12.0横	口縁部は内反。	外：口縁部は横ナデ、体部へ ヘラケズリ。 内：口縁へ体部横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
坏 土 節 器	覆土 口縁へ体部写	柱列 -2	口径 12.0	口縁部は内反。	外：口縁部は横ナデ、体部へ ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
坏 土 節 器	覆土 口縁へ体部写 以下	柱列 -3	—	口縁部は内反。	外：口縁部は横ナデ、体部へ ヘラケズリ。内：口縁部へ 体部は横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	
坏 須恵器	覆土 口縁へ体部写	柱列 -4	口径17.0横 器高 4.5横	—	巻き上げ後ロクロ成形。外： 口縁へ体部横ナデ、底部へラ ケズリ後ナデ。内：横ナデ、 底部カキメ。	長石粒を含む。 硬質、還元。 明緑灰色。	
壺 土 節 器	覆土 口縁へ胴部写	柱列 -5	—	口縁部は外反。	外：口縁部は横ナデ。 内：口縁部は横ナデ。	砂粒・曹母含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	
高台付壺 須恵器	覆土 底部片	柱列 -6	—	—	底部に3本の同心円状沈線。 高台貼り付け痕と思われる。	砂粒を含む。硬質。 還元。灰白色。	



- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 茶褐色粘質土 粒子やや粗くC軽石多く含む。しまり良い。 | 6 耕作土 |
| 2 茶褐色粘質土 粒子細かくC軽石・ローム粒混在。 | 7 茶褐色砂質土 粒子粗くB軽石混在。 |
| 3 暗茶褐色粘質土 粒子細かく暗褐色土塊、ローム粒塊混在。 | 8 白黄褐色粘土 粒子細かく微小の焼土粒子含む。しまり良い。 |
| 4 茶褐色粘質土 粒子細かくC軽石少ない。 | |
| 5 暗褐色粘質土 粒子細かく微小のローム粒少量に混じえる。 | |

第59図 7号掘立柱建物址平面図



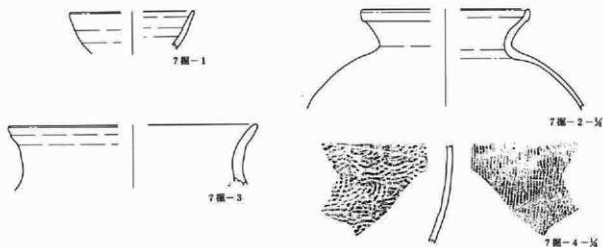
7号掘立柱建物址

本掘立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北側で14・17号住と重複しており、本掘立は17号住より新しく14号住より古い。

調査範囲内では、計6個の柱穴を検出し2×2間を考えられるが、南北方向が南に延びる可能性はある。辺長は、東辺が現状で4.6m、西辺が同じく3.6m、北辺は5.2mを測り、北東角はやや鋭角になっている。主軸は、N79°Eを呈する。

各柱穴の底径は、東辺が40～58cm、西辺が46・50cm、北辺が40～50cmである。確認面よりやや上の海拔109.00mより測った深さは、東辺が57～69cm、西辺が58・70cm、北辺が58～69cmで比較的深い。柱穴間の距離は、東辺が2.4と2.0m、西辺が2.1m、北辺が3.0と2.1mである。

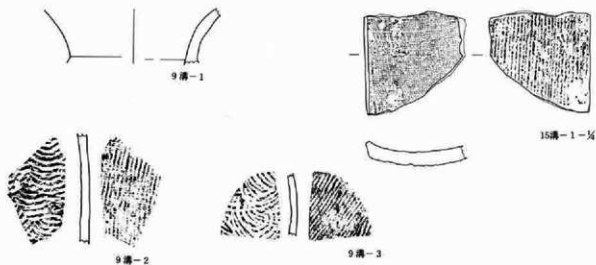
遺物は、柱穴底からの出土はなく、北西角の柱穴覆土上層から図示したような土師器・須恵器が出土した。北西角の柱穴は、別の遺構の柱穴と思われる東側の柱穴に切られている。遺物はその遺構に属すると思われる。また南東端の柱穴の覆土には、柱底状に焼土を含む白黄褐色粘土が堆積していた。(坂井)



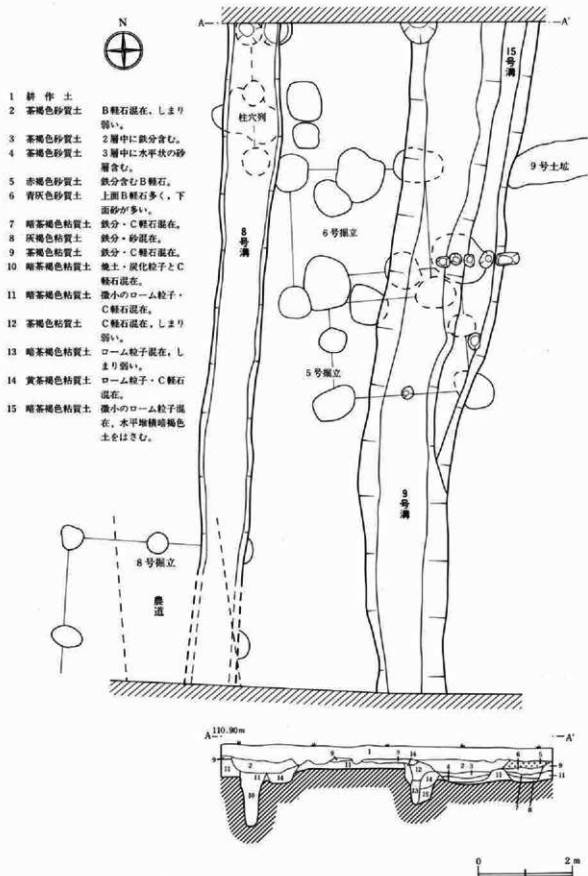
第60図 7号掘立柱建物址出土遺物図

第26表 7号掘立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 須 器	覆土 口縁以下	7掘 -1	口径10.6推	—————	ロクロ成形。	砂粒を含む。硬質。 還元。灰白色。	
埴 須 器	覆土 口縁以下	7掘 -2	口径18.0推	口縁部、く字状に外反し、先端が立っている。	口縁部は成形後に横ナデ、胴部にはタタキ痕が残っている。	砂粒含む。 硬質、還元。 暗青灰色。	
埴 土 師 器	覆土 口縁以下	7掘 -3	—————	口縁部は外反。	口縁部は横ナデ。	砂粒を含む。 やや硬質、酸化。 褐色。	
埴 須 器	覆土 胴部小片	7掘 -4	—————	—————	内外面にタタキ痕が残る。	長石粒を含む。 硬質、還元。	色：明青灰



第61図 9・15号溝出土遺物図



第62図 8・9・15号溝断面図

8・9・15号溝

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。8号溝は、6・8号掘立、柱穴列と重複しており、これらの遺構より新しい。9号溝は、5・6号掘立と重複しており、同じくこれらの遺構より新しい。15号溝と9号土壇の重複は、9号土壇が新しい。また9号溝は、15号溝を切っている。

8号溝は、上幅0.9~1.3m、下幅0.7~1.1mで、断面は幅広のU字形をなし、確認面よりやや上の海拔109.50mからの深さは40~65cmを測る。南北方向にほぼ直線的に延びており、走向はN3°Eを測り、北から南にかけて序々に底が低くなる。

9号溝は上幅1.4~2.0m、下幅0.7~1.2mで、断面形は、幅広U字形の下部に逆八字状の上部が接続している。同じく109.50mからの深さは、60~70cmを測る。走向は南側から調査範囲内の中央やや南側までほぼN3°Wに向った後、僅かに東に向きを変えてN4°Eで北に向っている。北から南にかけて、やはり底が次第に低くなる。

15号溝は中段の幅約0.7m、下幅約0.5mで、断面形は、U字形の下部に幅広U字形の上部が接続すると思われる。同じく109.50mからの深さは、約60cmを測る。走向は南側が9号溝に切られているためやや不明確だが、N12°Eほどで南から来た後、調査範囲内中央やや北側附近で僅かに西に曲ってN8°Eで北に延びる。

土層断面では、9号溝と15号溝の下部に砂の堆積が見られ、水痕痕と思われる。そして重要なことは、15号溝の覆土最上層に赤色化した浅間B軽石の純層が、10~20cmの厚さで堆積しており、9号溝はそれを切っ

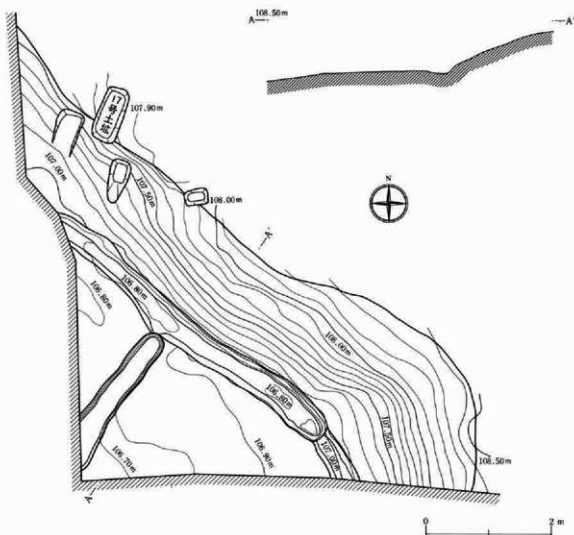
て掘られていることである。遺物は、8号溝では土師器破片10数点・須恵器破片4点見られたが、実測可能なものはなかった。9号溝では、覆土中より図示したものが出土した他、土師器・須恵器の破片が10数点づつ見られた。15号溝では、確認面の浅間B軽石中より平瓦片(1)が出土した以外に、土師器破片10数点が見られる。

8・9号溝は、ほぼ平行して走っており、覆土と断面形もかなり類似している。土層断面より9号溝が浅間B軽石降下後それほど時間を経ずに掘られたことは明瞭であり、8号溝もほぼ同時期に掘削されたと思われる。なお、両溝の間は、約2mの幅でN3°Eの走向を持つ。また土層断面では硬化面は確認されていない。ただ8号溝西ではN9°Wの走向で農道が走っている。耕作による攪乱を考えれば、両溝の間が現農道の古道敷であった可能性は、否定しきれない。

(坂井)

第27表 9・15号溝出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	9溝覆土 頸部以下	9溝 -1	——	壺の頸部と考えられる。	内外面共にロクロ成形。	砂粒含む。やや硬質、還元。灰白色。	
須恵器	9溝覆土 胴部小片	9溝 -2	——	胴部の破片。	内外面共にタタキ痕が残っている。	砂粒を含む。硬質、還元。明青灰色。	
須恵器	9溝覆土 胴部小片	9溝 -3	——	胴部の破片。	内外面共にタタキ痕が残っている。	砂粒を含む。硬質、還元。外、灰白色。内、明青灰色。	
瓦	15溝覆土 片	15溝 -1	——	平瓦。	表は布目、裏は縄目の押圧痕。側面ヘラナデ。	砂粒を多量含む。硬質、還元。明青灰色。	



第63図 水田址，17号土坑平面断面図

水田址

本水田址は調査範囲内の最西端に位置する。調査以前では、上越新幹線と交差する地点付近から西傾斜面を形成する地形であり、西・南方向で一段と低い水田面を形成して、井野川によつかる。本水田址の発見により現水田面と台地部の間に旧水田面が存在することになった。

調査した水田は極めて小部分である。東南傾斜をもつ台地の末端は調査範囲西端で小さな急傾斜面をつくり、盪地状の地形を形成していた。本水田址はそのような地形を利用したものである。緩傾斜面と急傾斜面の下端線の比高は約2mである。その下端線に沿って、南東方向から北西方向に幅約90cm、深さ約20cmの溝と、それに接続する幅約70cm、深さ約20cmの溝が走る。さらにその溝の中央西側から、南西方向に走る幅約80cm、深さ約25cmの溝が走っている。これらの溝は地形的にも構造的にも、この水田を潤す灌漑用の水路であろう。水田面もやや南西傾斜をもっている。水田表面には無数の凹みが観察できる。

なお本水田址は水田面直上に10～15cmの浅間B軽石層、その上層には明小豆色の火山灰におおわれている。

本調査範囲と直交する上越新幹線建設工事に伴う発掘調査範囲（熊野堂遺跡第II地区）では、浅間B軽石層下の水田址は発見されていない。本水田址は地形的に見ると北西方向に拡がる可能性がある。（長谷部）

第4節 中世の遺構

中世と考えられる遺構は、次のものがある。

館址状遺構群 (溝) 5号溝, 6号溝, 10号溝, 11号溝, 12号溝, 13号溝

(竪穴状遺構) 1~5号竪穴

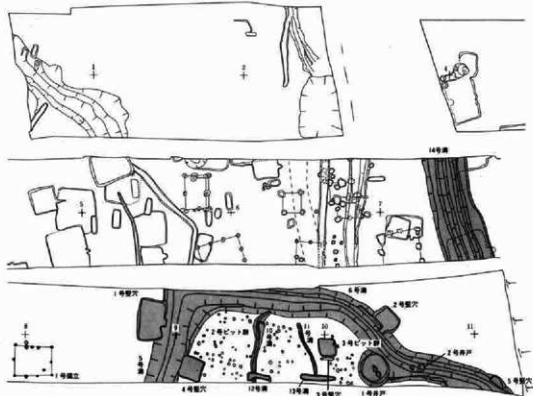
(ピット群) 2・3号ピット群

(井戸址) 1号井戸, 2号井戸

掘立柱建物址 計1棟 1号掘立

溝 計1条 14号溝

第64図 中世遺構分布概念図



館址状遺構群

本遺跡の東端の唐沢川右岸の崖上から西に約50mにわたって調査範囲内全体に、6条の溝、5基の竪穴状遺構、2基の井戸址、2群以上のピット群が検出された。これらの各遺構は、いずれも第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、覆土は大半が第②層茶褐色砂質土を基本にしている。そのためそれほど時間差のない一群の中世の館址を構成する遺構群として把握したい。

5・6号溝

本遺構群の基本をなすと思われる遺構である。5号溝は、1・4号竪穴と重複し、6号溝は、10号溝、2・5号竪穴、1・2号井戸と重複する。しかしこれらの遺構は、本溝と基本的に覆土が類似しており、明確な新旧関係は、把握できなかった。

5号溝は、上幅3.7~4.4m、底幅0.6~0.9mで、断面形はV字形を呈し、確認面よりやや上の海拔108.30mから測った深さは、約1.8mである。底の深さはほぼ変化しないが、両側の上場の高さは大きく異っており、同測線から西側は約5cm、東側は40~50cmを測る。走向は、西側に向けて緩く弧を描く形で、調査範囲内の中央付近で屈曲点を考えれば、概ね南側はN17°E、北側はN7°Eほどに測れる。

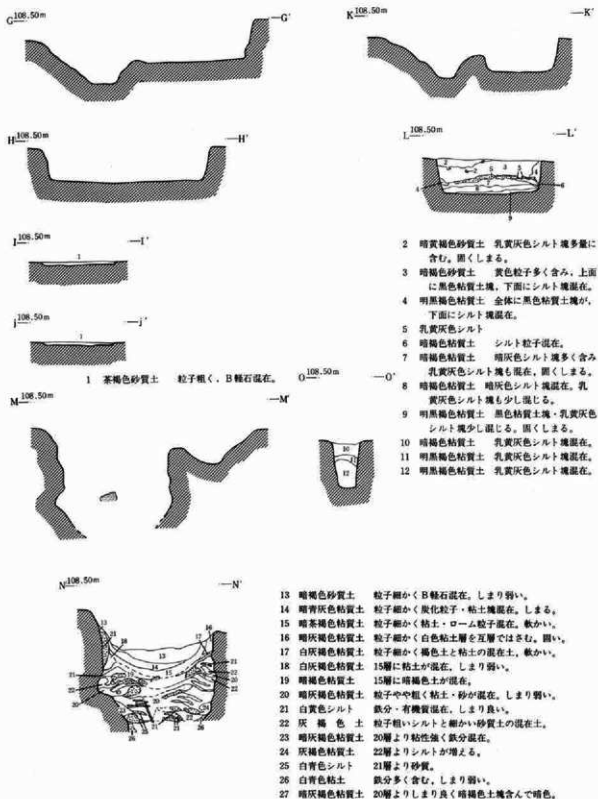
6号溝は、本遺構群北西部で5号溝とほぼ直交して合流しており、基本的には同一の溝と考えられる。上幅は3.5~4.1m、底幅0.4~0.9mで、断面形はやはりV字形をなす。海拔108.30mからの深さは、約1.7~2.0mを測り、自然地形に沿って東に進むにつれ深くなる。両側の上場の高さも異っており、南側は北側よりも10~30cmほど低い。5号溝との合流点の上場内側角附近は、内側平坦面より20cmほど低い最大幅1.8mの三角形のテラスをなしている。このテラスの端が、本溝の南側の傾斜面における傾斜変換線となって続いている。変換線より上部は、傾斜が緩くなっているため、厳密には対称的なV字形の断面形ではない。本溝の最大の特徴は、基本的には東西方向を指向しながら、走向を大きく波状に変化させていることである。しかもその変化は、いわゆる「折り」のような急激な変化ではなく、かなり緩やかな連続した曲線状の変化になっている。そのため、これらの変化を方位の変化で示すにはやや困難があるが、試みに4回の変化と考えれば、西からN86°W→N42°W→N78°W→N57°Wと東へ移っている。

両溝から出土した遺物は比較的多かったが、底に密着して検出されたものはなかった。図示したものは、いずれも覆土中からの出土であり、その他に縄文・弥生から灰輪までの破片が少しづつみられ、実測不可能な軟質陶器鍋・鉢の小破片が大量に見られた。また美濃・常滑の陶器小破片も出土した。

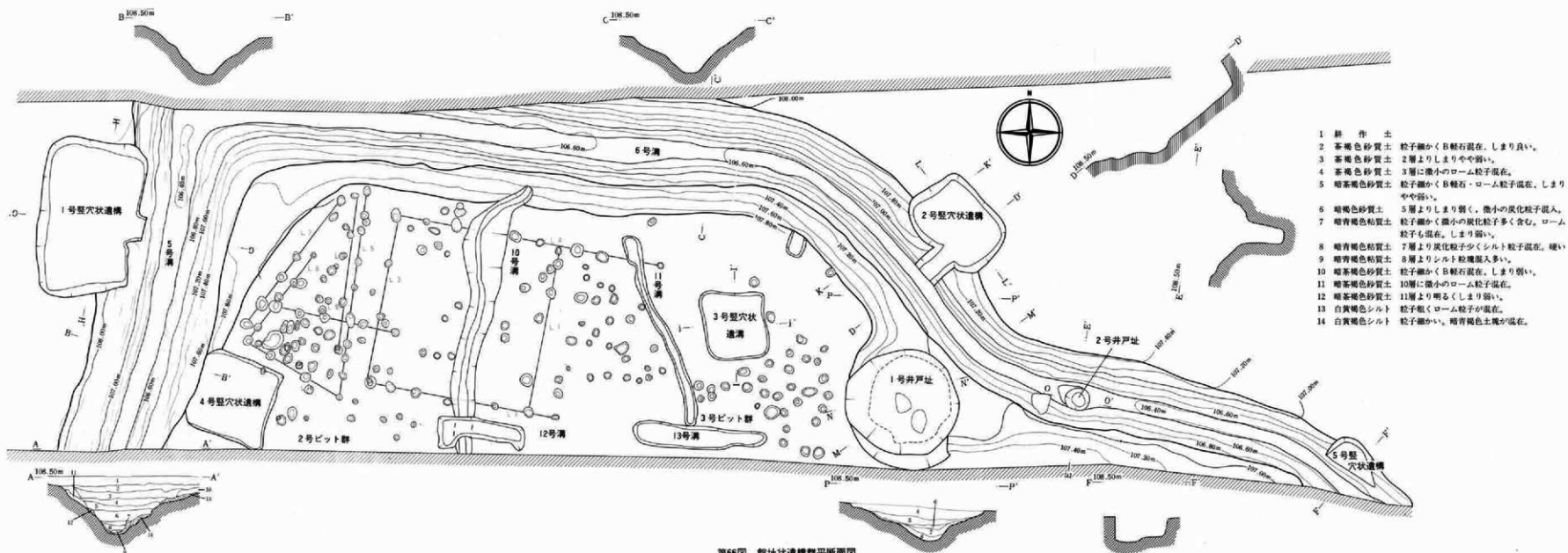
5号溝と6号溝は、覆土と断面形がほぼ同一であり、また両溝の交点の底部分にも段差は見られないため、同一時期に同一用途で掘られたものと思われる。両溝のなす角が、ほぼ直角を示しているのも興味深い。しかし、調査範囲内では、角部分の外側を検出できなかったため、両溝が1本の溝であるかは断定しがたい。さらに周辺の地割の状況を見れば、調査範囲のすぐ北側外に、5号溝の東側の上場と連続するような地帯が見られる(地境の走向N11°E)ことから、T字形に交差していた可能性も十分ありうる。6号溝の東側の波状の屈曲は、周辺の海拔107.5mの等高線の動きに見られるような、傾斜している自然地形に沿わせた結果と考えるのが最も妥当であろう。(付図2 館址状遺構周辺地形図参照) (坂井)

1~5号竪穴状遺構

本遺構群において5基の竪穴状遺構が検出された。これらは、必ずしも性格が同一ではなく、また時間差を推定できるものもあるが、他に適当な呼称をつけがたいため、一括して竪穴状遺構として扱った。



第65図 館址状構群断面図



- 1 緑作土
- 2 茶褐色砂質土 粒子細かく白礫石混在。しまり良い。
- 3 茶褐色砂質土 2層よりしまりやや弱い。
- 4 茶褐色砂質土 3層に微小のローム粒子混在。
- 5 暗茶褐色砂質土 粒子細かく白礫石・ローム粒子混在。しまりやや弱い。
- 6 暗褐色砂質土 5層よりしまり弱く、微小の炭化粒子混入。
- 7 暗青褐色粘質土 粒子細かく微小の炭化粒子多く含む。ローム粒子も混在。しまり弱い。
- 8 暗青褐色粘質土 7層より炭化粒子少くシルト粒子混在。硬い。
- 9 暗青褐色粘質土 8層よりシルト粒混入多い。
- 10 暗茶褐色砂質土 粒子細かく白礫石混在。しまり弱い。
- 11 暗茶褐色砂質土 10層に微小のローム粒子混在。
- 12 暗茶褐色砂質土 11層より暗くしまり強い。
- 13 白黄褐色シルト 粒子粗くローム粒子が混在。
- 14 白黄褐色シルト 粒子細かい。暗青褐色土塊が混在。

第66図 館址穴遺構群平面図

0 4m

1号竪穴は5号溝の北西側にあり、位置的には5号溝と重複している。土層断面による層位的な観察が全くできなかったため断定はできないが、覆土が同一なため一応同時期と調査時には推定した。東辺約4.3m、南辺約2.8m、西辺約5.2m、北辺約3.2mのやや隅丸状の台形プランを持ち、東西両辺の走向は、N9°Eほどで、5号溝の走向にほぼ等しい。確認面よりやや上の海拔108.50mから測れば、底は1.3~1.4mの深さでほぼ水平である。しかし住居の床のような硬化した面は、見られない。南・西・北の立ち上がりは、住居の壁とほとんど変わらない垂直に近い急傾斜を示す。ただ5号溝に面した東辺は、底から10~30cmほどの高さしか残っていない。特に中央部分の約70cmは、10cmほどの高さしかなく、平面的には、5号溝と連結する機能等も感じられる。

1号竪穴からは、遺物の出土はみられなかった。本竪穴の底部分と5号溝の底の間には、約60cmの高低差がある。遺憾ながら、上記のように調査時に全く土層状況を把握できなかったため、本竪穴の性格及び5号溝との時期差については全く不明である。

2号竪穴は6号溝の北東外側に位置し、6号溝と重複している。両遺構にまたがる土層断面をやはり観察できなかったため、明確な新旧関係は判然としない。しかし本竪穴の覆土の上層と近接する6号溝の覆土の上層とはほぼ同質の暗褐色砂質土であり、最終的な埋没時期は同一と考えられる。平面形は、東辺が約2.7m、南辺が約1.8m、西辺が約2.7m、北辺が約1.9mで、ほぼ隅丸方形を呈している。長辺の走向は、N38°Wほどで、近接する6号溝の走向に近い。確認面よりやや上の海拔107.80mより測った深さは1.1~1.2mで、底面はほぼ水平である。1号竪穴とはほぼ同じで、住居床面ほどは硬くない。立ち上がりは、後述のように、土層状況よりやや問題もあるが、調査時にはほぼ垂直に近い急傾斜を東・南・北辺で検出した。一方、6号溝側の西辺は、1号竪穴と同じように、幅60cmほどの切れ目が見られる。この切れ目の部分は、ほぼ本竪穴の底と同じレベルで約1.1m延びて6号溝に連している。また西壁の残り部分は、底より50~60cmの高さで土堤状に続いており、6号溝側が比較的緩やかなのに比べ、本竪穴側はかなりの急傾斜になっている。

本竪穴の埋没状況は、土層断面図に見られるように極めて特異である。とりわけ第4層の乳黄灰色シルト質土の堆積状況は、通常の竪穴の自然の埋没過程では全く考えられないものである。唐沢川に至る傾斜部のこのあたりの地山は、本遺跡の他の部分と異って第⑧層の上部ロームが見られず、第⑨層のシルト塊混じりの暗青色粘質土が第⑦層と第⑩層の間に入っている。この第⑨層の上面は、本竪穴の周辺では、海拔107.80mより20~40cmの深さであり、下面は70~80cmの深さである。本竪穴の断面で見れば、4~6層がこれらの地山の上面に相当する。また3層は、この地山の続きである。これらの層位的状況から考えれば、この土層断面を見る限り、底より50~80cmほどの高さにあった地山が陥没して4~6層の堆積になったと思われる。そして2層は陥没後の自然堆積であり、1層は人為的な埋土と思われる。

本竪穴からは、若干の遺物が見られた。しかし遺憾ながら、実測可能な図示した遺物が覆土中のどのレベルから検出したかは記録できなかった。ただ周囲の状況から考えて、2層から出土と推定される。

上記土層断面の検討結果から考えると、本遺構は、現在の底より50~80cm程度の高さに掘られた横穴であったと推定できる。この数値は、土層観察箇所の数値で、6号溝側の土堤状の壁の残存状態をみれば、最も高い箇所1mほどの高さは想定できる。しかも6号溝側に明瞭な入口状の部分が残っている以上、6号溝掘削後の使用時に、6号溝側から掘られた横穴であったとの結論に達する。

2号竪穴と形態的に全く類似した1号竪穴も、同様の施設であったと推定しうる。

3号竪穴は、5・6号溝に囲まれた台部の北東角附近に位置する。東辺約2.0m、南辺約1.8m、西辺約2.1m、北辺約2.1mの辺長を持ち、僅かに歪んだ方形を呈する。東西両辺の走向は、N6°Wほどで、東と北に

約3mで6号溝の上場に達する。確認面よりやや上の海拔108.00mからの深さは、20~25cmを測り、底は大体水平だが、住居の床ほどの硬化面は見られない。立ち上がりは、掘り込みが浅いため顕著な特徴を見出せない。

内部に何のピット等もみられず、遺物も全く出土していない。1号井戸との間に3号ピット群があり、本堅穴と何らかの関係を有すると思われるが、それ以上の性格については不明である。

4号堅穴は、5号溝の東側に位置し、6号溝・2号ピット群と位置的な重複が見られる。しかし層位的な新旧関係は不明である。平面形は、各辺が約2.7mのほぼ正方形を呈し、南北方向の軸はN20°Eで、5号溝南側の走向に近い。確認面からの深さは、15~20cmで、底は海拔107.80mほどのレベルを保ってほぼ水平である。立ち上がりのかなり急傾斜な壁が、東・南・北の三辺に見られるが、5号溝と接する西辺には存在しない。北壁際には、底径10cmほどのピットがあるが、本堅穴と関係あるかは、はっきりしない。

遺物は、美濃鉄釉片1点が出土している。本堅穴の性格については全く不明だが、水平状の底部のレベル107.80mが5・6号溝交点角のテラス平坦部のレベルと等しいのは、注目すべきであろう。

3・4号堅穴は、共に5・6号溝の内側に位置し、周辺のピット群・溝と同一の覆土で、第②層茶褐色粘質土面で確認された。いずれも浅く性格を想定すべき特徴を持たないが、5・6号溝との位置関係に意味があると思われる。

5号堅穴は、6号溝の最東端北側にあり、位置的にやはり6号溝と重複している。6号溝に面した辺が約2.0m、西辺が約1.0m、東辺が約1.7mを測り、角を北側に向けた隅丸ぎみの直角三角形を呈している。西辺に直交する方向を主軸と考えればN35°Wで、6号溝の走向とはかなり異なる。確認面よりやや上の海拔107.30mから測った深さは、約80cmで底はほぼ水平である。他の堅穴状遺構と同様に、明瞭な住居床面状の硬化面は見られなかった。

遺物の出土は全く見られず、6号溝との重複関係も不明である。1・2号堅穴と同様の横穴状のものと考えられないでもないが、溝の走向とのずれや入口状部分がない点が大きく異なる。調査範囲の隅で確定的なことは不明だが、6号溝に切られた住居の可能性も完全に否定できない。(坂井)

10~13号溝

これら4条の溝は、5・6号溝に比べはるかに浅く小さな溝で、6号溝の中央南側に位置する。いずれも第②層茶褐色粘質土面で確認されており、10と12号溝、11と13号溝はそれぞれ重複している。また10号溝は、2号ピット群と明瞭な重複関係があり、6号溝とも位置的に重っている。いずれも遺物はない。

10号溝は、上幅60~160cm、底幅15~35cmで、断面は逆八字形に開いている。確認面よりやや上の海拔108.10mから測った深さは、約30~40cmで、南側が僅かに深い。走向は、僅かに蛇行しているが、基本的にはN8°Eほどで、6号溝の手前でN57°Eほどに大きく東向きを変えて6号溝に接している。2号ピット群・6号溝との新旧関係は不明だが、覆土がほぼ同一なためそれぞれの時期差はないだろう。12号溝は、10号溝に切られている。

11号溝は、上幅30~60cm、底幅10~30cmで、断面形は幅広のU字形である。同じく108.10mからの深さは、25cm前後で、あまり深さの差は見られない。緩くS字形に屈曲するが、全体を通しN22°Wほどの走向をもっている。南側の13号溝と交差するあたりで確認できなくなっているが、まだ延びているとすれば、13号溝を切っているだろう。2・3号ピット群との関係は不明である。

12・13号溝は共に10・11号溝に切られており、覆土も浅間C軽石混じりの暗褐色土で、明らかに館址状遺

跡群より古い溝である。両溝とも上幅は約30cm、底幅は約20cmで断面形はU字形を呈している。深さは正確な計測値がないが、10・11号溝の底よりも10cmほど深く、いずれも底の状態が不均一である。走向は12号溝がN84°W、13号溝がN88°Wと似ているが、12号溝は西端でほぼ直角に南に向きを変えている。(坂井)

2・3号ピット群

5・6号溝に囲まれた部分で、数多くのピットを検出した。これらは、いずれも第⑦層茶褐色粘質土面で検出された。確認面直上の海拔108.00mから測れば、深さは20～30cm前後と浅く、底径は10～30cmとかなり差がある。調査時には、ついに掘立に組みなかつたため、便宜的に11号溝より西側を2号ピット群、東側を3号ピット群と分けて検討した。

2号ピット群には、図に示したような10本の考察線が検討の対象になりうると思われる。L1～L4は、それぞれN9°E、N80°W、N8°E、N81°Wとほぼ直交している。しかもL2とL4は、北側の6号溝の走向に近い。この4本をもって3×3間の掘立と仮定した場合、柱穴間の距離は、L1が約1.6m、L2が1.3～3.0m、L3が1.3～2.4m、L4が1.7～2.2mとなる。各交点をもって辺長とすれば、東辺6.0m、南辺6.0m、西辺5.9m、北辺6.1mのほぼ正方形の建物が想定できる。L5とL6は、L3に似たN6°EとN5°Eの走向をもっている。L5の柱穴間距離は、0.5～1.2m、L6は1.4～2.5mで、東側のL1～L4の建物と関係する柱穴群とも考えられる。L7とL8は、N37°EとN38°Eの走向を持っており、柱穴間距離はそれぞれ0.9～3.6m、0.6～1.2mである。西側のテラス部分の立ち上がりの走向に似ており、柱穴列が想定できる。L9とL10は、走向はN79°WとN60°Wを測る。柱穴間距離は、0.9～1.5mと1.0～1.5mで、L9はL2・4とほぼ走向が等しい。L10は、4号竪穴との関係が考えられる。

3号ピット群は、3号竪穴及び1号井戸との関係があると思われるが、調査範囲内では考察線も引けない。これら2・3号ピット群からは、図示した2個体の陶磁器片が出土している。しかし遺憾ながら、出土位置及び状態は記録されていない。以上の他に、軟質陶器片5点、美濃天目焼片1点が見られた。

上述のように、これらのピット群は、深さが浅く、位置的にもかなり問題があるため、完全な掘立柱建物址や柱穴列のような遺構として把握するには、かなり大胆にならねばならない。しかしこれらのピットのうちの一定部分は、館址に伴う柱穴と考えられ、どのような形にせよ建物や柱穴列があった可能性は、極めて高いと思われる。(坂井)

1・2号井戸址

1号井戸址は6号溝の屈曲部の南側に控えている。第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、確認時には、6号溝との新旧関係は把握しがたかった。内径は3.0～3.2m、確認面よりやや上の海拔107.70mから測った深さは少なくとも3.2m以上という極めて大きなものである。本井戸に接する6号溝の南側中段は、溝の底より50cmほど高いかなり平坦なテラス状を呈している。この6号溝のテラス側の壁面は、ほとんど垂直に近い急傾斜で、反対側の3号ピット群側は、やや緩やかな傾斜で60cmほど下がってからやはり急傾斜に変わる。深さ2.4mほどの部分で、壁は一度かなり拡がって、径は3.8mに近くなる。そしてそれより下では、内側に向けて、次第に径が小さくなる傾向が見られる。

埋没過程は、図に見られるように、大きく2時期に分けられる。1～3層の上層は砂質土で、基本的に6号溝の覆土と同一である。調査最深部は約2.3mほどの深さで、6号溝の底より1.1mほど深い。4層以下が下層で、径40～50cmのシルト塊や砂を多く含む粘質土である。下層と上層の境付近には、長径70～80cmほど

の扁平不整形な河原石が2個見られた。下層は、大部分が水没して、壁面の地山のシルト層の崩壊によって埋没した堆積と思われる。そして一程度埋没した段階で掘り直しをしたのが、上下両層の境ではないだろうか。その後、本館址の廃棄後に6号溝と共に再埋没していった、と考えられる。

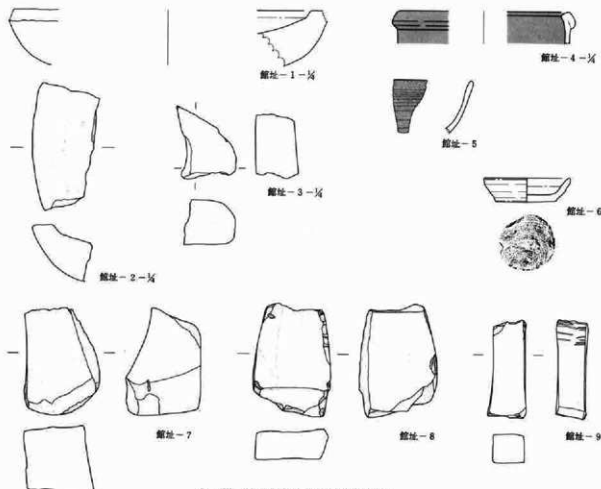
遺物は、遺構の大きさに比べかなり少ない。図示したもののうち土師質土器小皿(6)は覆土上層の出土だが、その他は、覆土中の明確な位置は記録できなかった。この他に、内耳鍋破片と軟質陶器破片が見られた。概して、下層からの遺物出土は、ほとんどなかった。

上記のように、本井戸と6号溝が時期的に共存した可能性が大きい、という事実は、両者の位置関係を考えればやや奇異に感じられる。すぐ東側に唐沢川の水 flow があることを考えれば、少なくとも2回目の掘削時に本井戸は、必ずしも井戸として機能していなかった、と思われる。

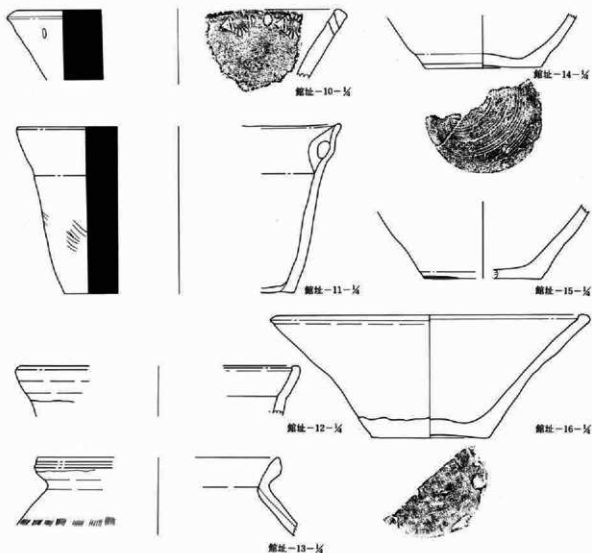
2号井戸址は6号溝東側底の第⑩層白黄褐色シルト質土面で確認された。上径約80cm、底径約50cmで、6号溝底の海拔106.40m から測った深さは、約1.5mである。

土層としては、図に見られるように、本井戸上層と6号溝下層の土質は似ており、同時に埋没した可能性も考えられる。

遺物の出土は全くなかった。前述のように6号溝には、常時水があった可能性は少なく、そうであれば本井戸が6号溝と共存することもありうる。しかし機能的には水を汲むための井戸であったことは、考えにくい。(坂井)



第67図 館址状遺構群出土遺物図(1)



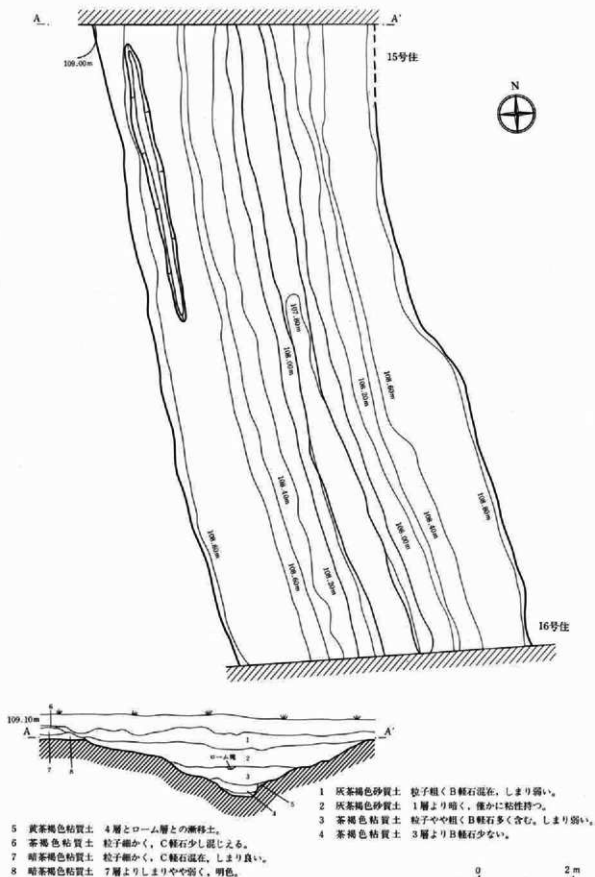
第68図 館址状遺構群出土遺物図(2)

第28表 館址状遺構群出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
石臼	5・6溝覆土 瓦以下	館址 -1	—	口唇に平坦面，体部外面内反，内面口唇より急に内傾後，緩く内反。	内：使用痕の研磨が見られる。	黄灰色。	
石臼	2窪穴覆土 瓦以下	館址 -2	—	口縁端部12mm幅平坦面体部外面内反，口唇内面より内傾後緩く内反。	内：僅かに使用痕の研磨が見られる。	暗灰黄色。	
不明 石製品	1井戸覆土 不明	館址 -3	最大厚 4.7 最小厚 4.1	表面と裏面は，極めて平滑両面平行。右側面に一部内反する加工部。	表面裏面及び右側面の一部は，極めて平滑研磨されるが，調整痕か使用痕かは不明。	灰色。	
広口壺 壺・戸	6溝覆土 瓦以下	館址 -4	—	口縁断面隅丸形状，頸部は，薄く内反，口唇内面に縁。	口縁は端部で外側へ折り曲げる。内外面に施釉。	鉛状土。 還元，良好。 灰オリブ色。	

第29表 館址状遺構群出土遺物観察表②

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坩 美 溝	2・3号ピット群覆土 瓦以下	館址 —5	—	内挿する口縁から、薄く内反する体部が続く。	両面に褐色釉がかかる。外面の釉を通して、回転横ナデが見られる。	薄草土。 還元。良好。 オリーブ色。	
小 皿 土 質 土 器	1井戸覆土上層 完存	館址 —6	口径 6.8 底径 4.7 器高 1.9	口縁から体部外面は緩く内反。底部は、体部よりやや厚い。	底部左回転糸切り痕。底部外面以外横ナデ。	砂粒含み気泡あり。 酸化。不良。 褐色。	
磁 石	6溝北東角覆土 不明	館址 —7	最大6.0× 5.6,最小4. 2×4.0	鋭角二等辺三角形状平面形。先端薄く下端厚い。下端割れ口磨滅。	表裏両側面の四面に、使用痕の研磨あり。表面以外は、中央部がやや凹んでいる。	灰色。	石臼状石製品の転用と思われる。
砥 石 (砂岩)	5溝覆土 瓦以上	館址 —8	最大6.2× 3.2,最小4. 4×1.6	鋭角二等辺三角形状平面形。先端薄く下端厚い。下方に一部自然面。	表裏両側面の四面に、使用痕の研磨あり。表面両側は特に最終使用時の凹面が見られる。	浅黄色。	
砥 石	5・6溝覆土 瓦以上	館址 —9	最大3.0× 2.3,最小2. 4×2.1	中央部が何れもやや括れる直方体を呈し、両端部は割れている。	上下両端を除いて、四面は、何れも使用痕の研磨あり。右側面上方に、横方向の凹凸。	灰白色。	
有孔盤形 土 器	6溝覆土 瓦以下	館址 —10	—	口唇部面取り。体部は直線的に内傾。口縁内より外へ垂直に径6mmの孔が7cm間隔で2個。	内外面横ナデ。 体部は指ナデ。	砂粒含み気泡あり。 内側酸化不良。 外側還元色。 灰色。	口縁内面に菱 形印文。 外面に煤付 痕。
内耳土鍋	5・6溝覆土 瓦	館址 —11	器高 17.6	口唇部最大径。頸部僅か括れる。口唇内面面取り。頸部内面傾。底部薄く、耳外部突出。	体部僅か輪横痕。耳・底部と体部との接合痕。口唇内外面体部内面横ナデ。体部外面ヘラケズリ後、指ナデ。	砂粒含み気泡あり。 還元。不良。 表黒色。裏灰色。	外面体部はほぼ 全面に、煤付 着。
内耳土鍋	5・6溝覆土 瓦以下	館址 —12	—	口唇部、やや丸みを持って面取り。頸部外面で傾斜変化。内面に傾。	口縁内外：輪横痕。 口縁内外：回転横ナデ。	砂粒含み気泡あり。 内側酸化不良。 外側還元不良。 灰オリーブ色。	
壺 軟質陶器	5溝覆土 瓦以下	館址 —13	—	口縁断面台形状。外面に2条の凹帯。頸部は強く、く字形に屈曲。	内外面輪横痕。頸部～肩断面、長い接合痕。外：1/4ハメ後カキメ。内：カキメ。	砂粒含み気泡あり。 還元。不良。 灰色。	頸部内面に二 次的研磨痕。
鉢 軟質陶器	5・6溝覆土 瓦以下	館址 —14	底径 12.3	体部下位は緩やかに内反しながら底部に至る。底部直上に比輪。底部内面僅かに盛り上がる。	底部右回転糸切り痕。底部周縁ヘラナデ。体部外面指ナデ、内面横ナデ。	砂粒含み気泡あり 還元。良好。 灰色。	内面の多くに、 二次的な研磨 あり。
鉢 軟質陶器	5・6溝覆土 瓦以下	館址 —15	—	体部直線状内傾。底部平底体部より薄い。底部内面緩やかに屈曲。	体部僅か輪横痕。 底部周縁粘土組織目。 体部外面指ナデ。	砂粒含み気泡あり。 還元。不良。外面黒 色。内面灰白色。	内面は全面に 二次的な研磨 あり。
鉢 軟質陶器	5・6溝覆土 瓦	館址 —16	口径 33.9 底径 12.4 器高 12.9	口唇緩く面取り。体部直線状内傾。中位傾斜強い。口唇内面に傾。体部緩く底部に連続。	体部外面に輪横痕。底部周縁貼り付け痕。 外：指ナデ後、口縁横ナデ。 内：横ナデ。	砂粒含み気泡あり。 内側酸化不良。 外側還元不良。 鈍い黄色。	内面全体と底 部に、二次的 な研磨あり。



- 5 黄茶褐色粘質土 4層とローム層との漸移土。
- 6 茶褐色粘質土 粒子細かく、C軽石少し混じる。
- 7 暗茶褐色粘質土 粒子細かく、C軽石混在、しまり良い。
- 8 暗茶褐色粘質土 7層よりしまりやや弱く、明色。

- 1 灰茶褐色砂質土 粒子粗くB軽石混在、しまり弱い。
- 2 灰茶褐色砂質土 1層より暗く、僅かに粘性持つ。
- 3 茶褐色粘質土 粒子やや粗くB軽石多く含む、しまり弱い。
- 4 茶褐色粘質土 3層よりB軽石少ない。

第69図 14号溝平面断面図

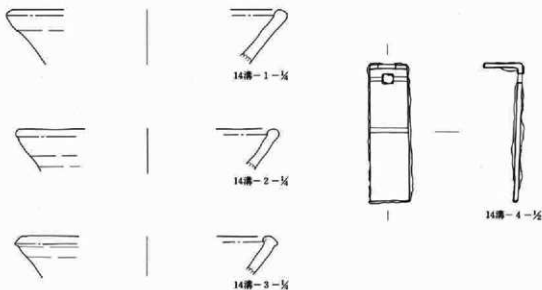
14号溝

本溝は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。北側で15号住、南側で16号住と重複し、いずれの住居も本溝より古い。

しかし、本溝の掘り込み面は、北側境界面の土層断面に見られるように、第⑦層茶褐色粘質土面よりも上であり、この土層断面で確認された立ち上がりの最上端を上場と考えれば、その幅は6.9mに達する。断面形は、基本的には逆八字形を呈しているが、両側に明瞭に認められる三段のテラスが存在する。これらのテラスの幅は、第一段が約6.0m、第二段が約2.9m、第三段が約1.5mを測り、底幅は0.4~0.7mである。またテラス自体の幅は、第一段は西側が10cm、東側が40cm、第二段は西側が100~135cm、東側が60~140cm、第三段は西側が45~70cm、東側が25~40cmである。立ち上がり最上端上りやや上の海拔109.40mより深さを測れば、第一段は西側が20cm、東側が40cm、第二段は西側が59~83cm、東側が65~98cm、第三段は西側が102~142cm、東側が111~140cmとなり、底は148~170cmとなる。各テラスが概して西が高く東が低く、底が北が浅く南が深いのは、自然地形に応じた結果と思われる。また第二段テラス西側の北半には、下幅10~15cm深さ10cm前後の浅い溝が、本溝の走行に平行して約6m直線状に延びている。本溝の走向は、調査範囲内の中央附近で僅かに屈曲しており、南からN19°Wで進んできたのが東に少しふれてN10°Wに変わって北に向かっている。

遺物は、比較的多く出土したが、大半は重複する15・16号住から流れ込んだと思われる土師器・須恵器の破片である。図示した遺物のうち(3)以外は、覆土下層(第三段テラス以下)出土で、(3)は覆土上層(第二段テラス以上)から検出された。有孔L字形鉄製品(4)は、覆土上層の出土である。図示した以外に軟質陶器破片が11点、美濃褐釉片1点が出土している。

本溝の走向が、東側に約6m離れた地境の走向(N8°W)と西側に約16m離れた農道の走向(N11°W)に北側でほぼ平行している点は、注目に値する。また本溝の西側の上場を北側の調査範囲外に約15m延長すると走向がN7°Wの地境に至り、本溝の屈曲から考えて、この地境との接続にはそれほど無理がない。(付図2 館址状遺構周辺地形図参照) (板井)



第70図 14号溝出土遺物図

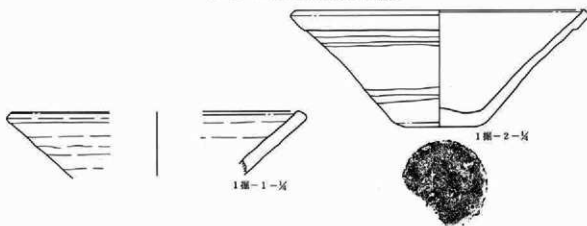
第30表 14号溝出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
鉢 軟質陶器	覆土下層 瓦以下 口縁部	14溝 -1	——	口唇丸く面取り。内面に緩い稜。体部浅く内傾後、肥厚して外反。	内外面に僅かに輪横痕。内面横ナデ。口唇ヘラナデ。体部外面指ナデ。	砂粒含み気泡あり。還元。不良。灰色。	内面に二次的な研磨あり。
鉢 軟質陶器	覆土下層 瓦以下 口縁部	14溝 -2	——	口縁はやや丸みを持って、内外面に緩い稜。	内外面に僅かに輪横痕。口唇ヘラナデ。内外面横ナデ。	砂粒含み気泡あり。還元。不良。灰色。	内面に二次的な研磨あり。
鉢 軟質陶器	覆土上層 口縁部	14溝 -3	——	口唇は扁平に面取り。外面に稜。内面先端を巻き込む。	体部内外面に輪横痕。口唇内面折り返し。内外面横ナデ。口唇はヘラナデ。	砂粒含み気泡あり。内側酸化不良。外側還元不良。暗オリーブ灰色。	

第31表 14号溝出土遺物観察表(2)

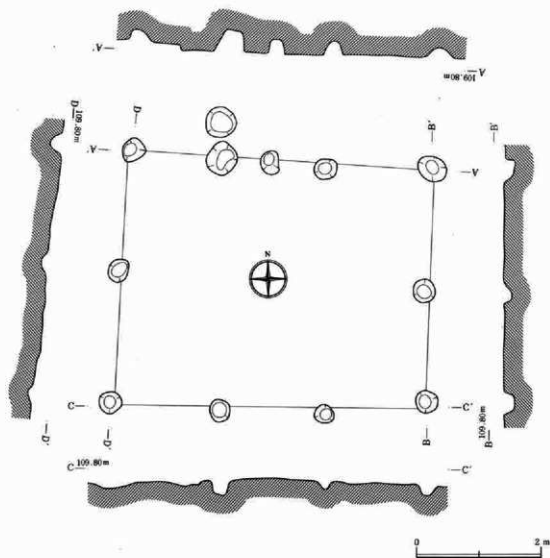
器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
有孔し字形 鉄製品	覆土上層	14溝-4	7.3	2.2	0.3	薄い短冊状鉄板の片側中央に一辺0.5cmの正方形孔あり。孔側の端部が垂直に曲って高2.2cm、幅1.0~1.7cmの台形状を呈す。	直方体状の木製容器の止め金具と思われる。

第71図 1号掘立柱建物址出土遺物図



第32表 1号掘立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
鉢 軟質陶器	覆土 瓦以下	1掘 -1	——	口唇はやや丸みを持って面取りされ。内外面に緩かな稜が見られる。体部と口縁の間にも稜。	内外面僅かに輪横痕。内面・口縁外面横ナデ。体部外面指ナデ。	砂粒含み気泡あり。内側酸化不良。外側中性炭不良。外側褐色。内側い橙色。	内面には、二次的な研磨見られる。
鉢 軟質陶器	覆土 瓦	1掘 -2	口徑 30.6 底徑 7.4 器高 12.3	口唇面取り。内外面に稜。外面頸部に稜。体部中位で傾斜急。	底部回転糸切り痕。体部内外面巻上痕。口縁外面と内面中位上横ナデ。体部外面指ナデ。	砂粒含み気泡あり。還元。不良。鈍い褐色。	内面中位より上は、二次的な研磨。



第72図 1号掘立柱建物址平面断面図

1号掘立柱建物址

本掘立は第⑦層赤褐色粘質土面で確認された。2×3間の柱間で、各辺の長さは、東辺3.7m、南辺5.1m、西辺4.0m、北辺4.9mを測り、全体としてはやや歪んだ長方形を呈する。主軸は、N87°Wを測る。

柱穴は北辺の中央に1個あり、合計11個検出できた。底形は、いずれも約23cmで、確認面よりやや上の海拔108.80mから測ると深さは、東辺の3個は33~41cm、南辺の4個は34~45cm、西辺の3個は29~34cm、北辺の5個は31~40cmである。各柱穴間の距離は、東辺が1.7と2.0m、南辺が1.6・1.7・1.8m、西辺が1.9・2.1m、北辺が0.7・0.9・1.5・1.7mである。

遺物は柱穴の底から出たものではなく、図示したものは覆土中の出土である。その他に埴美壺片2点、軟質陶器鉢片6点があり、また蓋・壺頸部等の須恵器破片8点、土師器片も少し見られた。

本掘立の確実な時期は把握したいが、柱穴は他の掘立に比べ浅く径も小さい。一応、最も新しい図示した遺物をもって本掘立の時期としたい。

(坂井)

第5節 時期不明の遺構

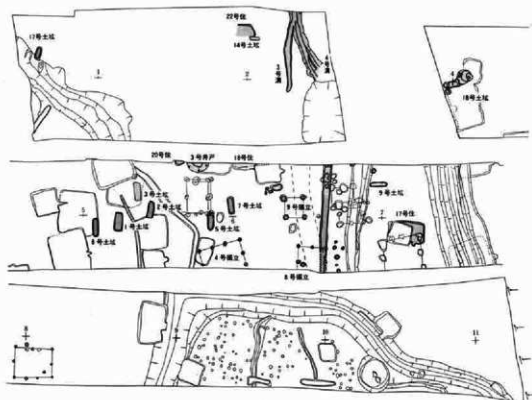
時期不明の次の遺構を本節で記した。

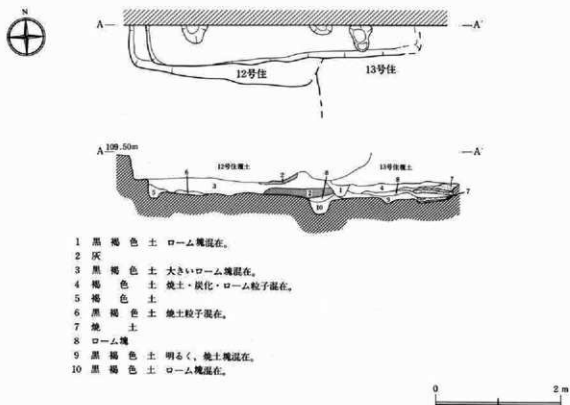
住居址	計3軒(4) 18号住, 20号住, 22号住
掘立柱建物址	計3棟(3) 4号掘立, 8号掘立, 9号掘立
溝	計2条(3) 3・4号溝
土 塚	計1基(0) 9号土塚

()内の数は総数, 他に井戸址1基がある。

なお、竪穴住居址表・掘立柱建物址表を本節末に併記した。

第73図 時期不明遺構分布概念図



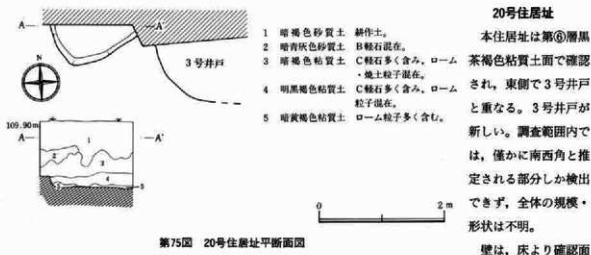


第74図 18号住居址平断面図

18号住居址

本住居址は12号住及び13号住の下層から検出した。12・13号住に切られている。そのほとんどは北側の路線外であり、規模・平面形は不明である。A-A'の土層断面では東西辺4.8mである。又2箇所の角の形状からは、主軸N85°Eをとる方形あるいは長方形が推定できる。南西角部附近にピット状の遺構があるが、断面形状からは柱穴とは断定しがたい。壁周溝はない。

東南角部の土層断面図に焼土流・焼土塊の堆積が観察でき、カマドの位置は東壁の南寄りか推定できる。覆土中からは、土師器甕・坏の小破片9点、須恵器甕小破片1点が出土している。(長谷部)



第75図 20号住居址平断面図

20号住居址

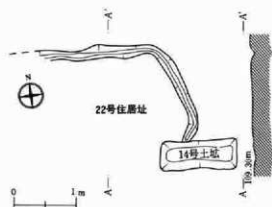
本住居址は第④層黒茶褐色粘質土面を確認され、東側で3号井戸と重なる。3号井戸が新しい。調査範囲内では、僅かに南西角と推定される部分しか検出できず、全体の規模・形状は不明。

壁は、床より確認面

まで30cmの深さで急傾斜に立ち上がる。床面はかなり均様で、比較的固くローム地山をたたいている。

調査範囲内では、柱穴・周溝・カマド等は検出していない。遺物は、覆土中より土師器小破片が出土。

調査範囲が極めて狭いため、住居址と断定するにはやや困難があるが、掘り込み形態・床の状況・覆土より住居址と想定した。(坂井)



第76図 22号住居址平面断面図

部分的に床状の硬質部が確認できたことによる。

遺物は、確認時に須恵器壺片・蓋片、土師器壺片・坏片そして多数の土師器小破片が覆土中より検出されたが、本住居に確実に伴うものは見られなかった。(長谷部)

22号住居址

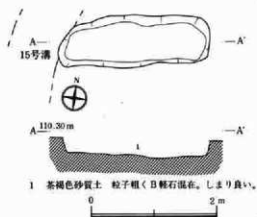
本住居址は第③層上部ローム層面で確認された。南東側で14号土坑と重複しているが、新旧関係は不明。

本住居は極めて残存状況の悪い住居で、北西角部の壁周溝が検出されたのみである。北側の周溝の走行は $N89^{\circ}W$ を測る。この地点は西傾斜面に位置するので、土砂の流出のため耕作によって破壊されたものである。住居址として確認したのは底面が平坦で、

9号土坑

本土坑は第④層暗褐色粘質土面で確認された。西側で15号溝と重複が考えられるが、本土坑が新しい。底部の形は、 $0.5 \times 2.2m$ のやや歪んだ長方形を呈する。確認面のやや上の海拔110.30mから測った深さは35~40cmで、西側が僅かに浅い。主軸は $N79^{\circ}E$ を測る。

遺物は全く見られなかったが、覆土は8・9号溝とほぼ同一であり、时期的にも近いだろう。(坂井)

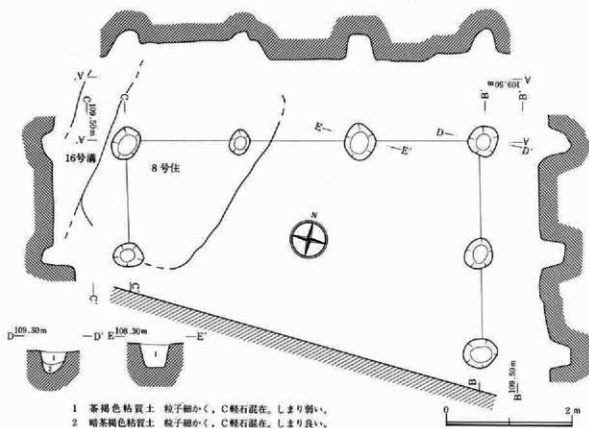


第77図 9号土坑平面断面図

第33表 竪穴住居址表

番号	確認面	重複関係	平面形	主軸方位	床面積㎡	柱穴数	周溝	カマド/炉	時代	その他
1	第②層	—————	不整形長方形	N91°E	7.9	なし	なし	東壁南側	古代	
2	第②層	熊野堂第1地区196・214住より旧	推定長方形	N76°E	—————	2	—————	東壁南側 粘土袖	古墳時代	貯蔵穴
3	第②層	—————	推定長方形	N4°W	—————	—————	—————	北壁東側 粘土袖	古墳時代	南側範囲外 貯蔵穴
4	第⑥層	5住より新	正方形	N77°E	9.0	なし	なし	東壁南側	古代	
5	第⑥層	4・6住、8土壇より旧	隅丸長方形	N2°E	30.2	4	なし	中央 地床炉	弥生時代	
6	第⑥層	5住より新	推定長方形	N74°E	—————	4	—————	東壁南側 粘土袖	古墳時代	南側範囲外 貯蔵穴
8	第⑥層	16溝・4掘立より旧	隅丸長方形	N16°E	7.5	なし	なし	北東側 地床炉	弥生時代	
9	第⑥層	10住・7溝より旧	不整形	N3°E	19.8	4	なし	西側 T字形地床炉	古墳時代	
10	第⑥層	9住より新	推定長方形	N83°E	—————	—————	—————	東壁北側 袖無、石組	古代	北側範囲外
11	第⑥層	3井戸より旧	—————	N82°E 南辺	—————	—————	—————	—————	古代	北側範囲外
12	第⑥層	13・18住より新	推定方形	N97°E	—————	—————	—————	東壁南側 粘土袖、瓦・石 による補強	古代	北側範囲外
13	第⑥層	18住より新、12住より旧	推定方形	N84°E	—————	—————	—————	東壁南側 粘土袖	古代	北側範囲外
14	第②層	17住・7掘立より新	正方形	N105°E 南北辺	6.8	なし	なし	—————	古代	
15	第②層	14溝より旧	推定方形	N75°E	—————	—————	—————	東壁南側 粘土袖	古代	北側範囲外
16	第②層	14溝より旧	隅丸正方形	N74°E	—————	—————	あり	東壁南側 粘土袖	古代	南側範囲外
17	第②層	14住・7掘立より旧	推定長方形	N8°E 南北軸	—————	—————	—————	南壁に焼土址	不明	住居址でない可能性
18	—————	12・13住より旧	推定方形	N85°E	—————	—————	—————	推定東壁南側	不明	北側範囲外
19	第⑥層	21住・16溝より新	隅丸長方形	N71°E	推定19.9	—————	あり	北壁(?)	古墳時代	北側範囲外
20	第⑥層	3井戸と重複	—————	—————	—————	—————	—————	—————	不明	北側範囲外
21	第②層	19住、7・16溝、3土壇より旧	内反長方形	N83°W	推定23.8	4	—————	中央 地床炉	弥生時代	

番号	確認面	重複関係	平面形	主軸方位	床面積㎡	柱穴数	周溝	カマド/竈	時代	その他
22	第5層	14上地と重複		N89°W 北周溝			あり		不明	



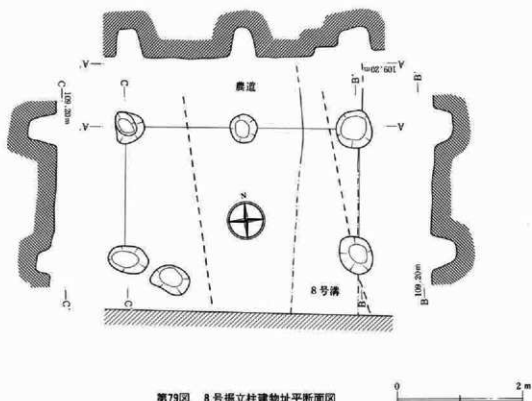
第78図 4号掘立柱建物址平面図

4号掘立柱建物址

本掘立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で検出された。北西側で8号住と完全に重複しており、16号溝とも重複が考えられる。8号住は本掘立より古い、16号溝との関係は不明である。調査範囲内では、2×3間の計7個の柱穴が検出されたが、南北方向はまだ延びると思われる。そのため南北軸方向はN73°Eを測るが、全体の形状は判明しない。北辺の辺長は5.7m、南北辺は3.4m以上と思われる。

各柱穴は、底径が20～38cmとかなり差がある。確認面よりやや上の海拔109.30mより測った深さは、東辺が44～56cm、西辺が44と53cm、北辺が40～49cmである。柱穴間の距離は、東辺が1.8と1.6m、西辺が1.8m、北辺が1.8・1.9・2.0mである。

遺物は、柱穴の底から出土したものではなく、覆土中から羽釜片を含む土師器片が5点、須恵器片1点が検出されたが、実測可能な個体はない。他に流れ込みと思われる軟質陶器片1点がある。(坂井)



第79図 8号掘立柱建物址平面図

8号掘立柱建物址

本掘立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側で8号溝と重複しており、8号溝が新しい。

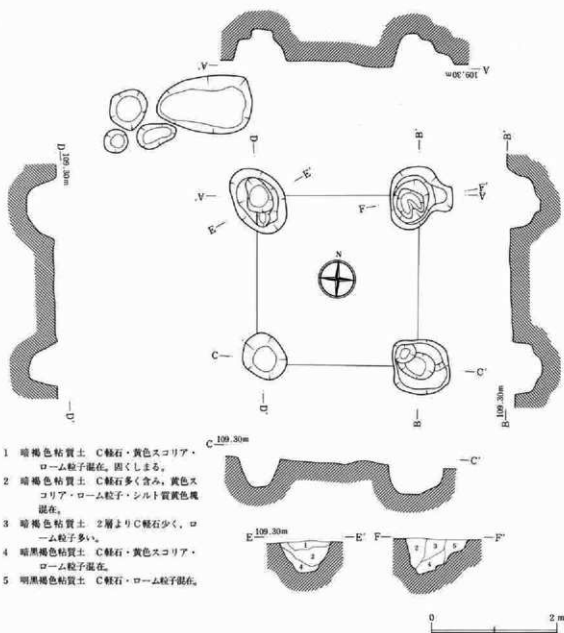
調査範囲内では、南北1間、東西2間の計5個の柱穴が確認されたが、そのまま1×2間と想定した場合の南辺中央は調査できず、そこに柱穴があったかどうかは不明。むしろ他の掘立の形状から考えて、南北辺が南側の調査範囲外に延びる可能性が大きいと思われる。北東・北西の角はほぼ直角で、主軸はN88°Wを測る。

各柱穴の底径は、東辺が33と42cm、西辺が30と44cm、北辺が28～42cmである。確認面よりやや上の海拔109.40mより測った深さは、東辺が75と77cm、西辺が67と75cm、北辺が75～77cmとほぼ近似している。柱穴間の距離は、東辺が2.0m、西辺が2.0m、北辺が1.9と1.8mとやはり近似している。

遺物は、全く出土していない。

南西側に、本掘立とはつながらない径36cm、深さ82cmのピットがある。形状から、南側調査範囲外に続く別の掘立の柱穴と思われる。

(坂井)



- 1 暗褐色粘質土 C軽石・黄色スコリア・ローム粒子混在。固くしまる。
- 2 暗褐色粘質土 C軽石多く含み、黄色スコリア・ローム粒子・シルト質黄色塊混在。
- 3 暗褐色粘質土 2層よりC軽石少く、ローム粒子多い。
- 4 暗黒褐色粘質土 C軽石・黄色スコリア・ローム粒子混在。
- 5 明黒褐色粘質土 C軽石・ローム粒子混在。

第60図 9号掘立柱建物址平面図

9号掘立柱建物址

本掘立は第④層暗褐色粘土面で確認された。1×1間で、辺長は東辺2.4m、南辺2.3m、西辺2.5m、北辺2.3mでほぼ正方形を呈し、主軸はN7°Wである。

各柱穴の底径は、北東が32cm、南東が18cm、南西が38cm、北西が34cmと南東のもののみやや小さい。確認面よりやや上の海拔109.30mより測った深さは、北東が53cm、南東が61cm、南西が64cm、北西が57cmとほぼ近似している。

遺物は、全く検出できなかった。南西の柱穴を除いて他はやや複雑な掘り方を示しており、同一位置での掘り替えも考えられる。

北面側にいくつか土壇・ピットが見られたが、いずれも浅く遺物も見られなかった。

(坂井)

第34表 掘立柱建物址表

遺構名	確認面	柱間	辺長平均 m	主軸方位	柱穴底径平均cm		柱穴深き平均cm		基準レベル (毎夜 m)	柱穴間距離平均m		備考
					東西辺	南北辺	東西辺	南北辺		東西辺	南北辺	
1掘立	第⑤層	2×3	南北 3.9 東西 5.0	N87°W	23	23	37	34	108.80	1.7	1.9	中世
2掘立	第⑤層	2×2	南北 4.5 東西 3.3	N6°W	35	34	53	52	109.40	1.7	2.2	3掘立と重複
3掘立	第⑤層	2×2	南北 4.3 (?) 東西 3.3	N2°W	34	36	48	51	109.40	1.7	2.2	未完成
4掘立	第⑤層	2×3	南北 3.4 (?) 東西 5.7	N73°E	30	29	44	49	109.30	1.9	1.7	平安朝
5掘立	第⑤層	2×2	南北 2.7 東西 2.8	N4°W	四隅56	中央26	四隅77	東西74	109.20	1.4	1.3	B降下以前
6掘立	第⑤層	1×2	南北 2.8 東西 2.8	N11°W	30	29	62	61	109.20	1.4	2.8	5掘立より新
7掘立	第⑤層	2×2	南北 4.6 (?) 東西 5.2	N79°E	45	48	65	63	109.00	2.6	2.2	14住・他柱穴より旧
8掘立	第⑤層	1×2	南北 2.0 以上 東西 3.7	N88°W	33	37	76	74	109.40	1.9	2.0	
9掘立	第⑤層	1×1	南北 2.5 東西 2.3	N7°W	31	31	58	58	109.30	2.3	2.5	
柱穴列	第⑤層	2	南北 2.9 以上	N5°W	—	37	—	118	109.20	—	1.5	掘立の可能性あり

注：東西辺とは、概ね東西方向に走る辺、南北辺とは概ね南北方向に走る辺を示す。

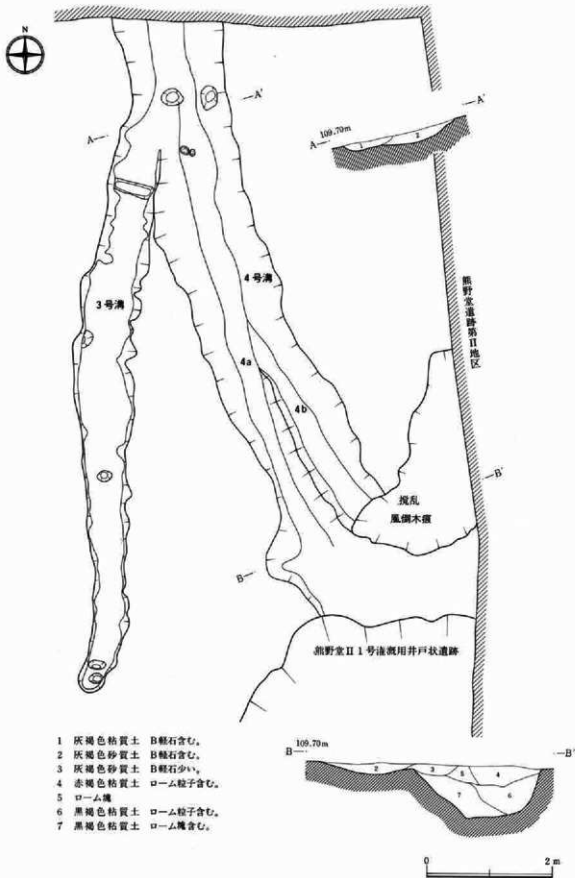
3・4号溝

本溝は第④層上部ローム層面で確認された。3号溝、4a号溝、4b号溝と3本の溝が重複しているが、それぞれの新旧関係は、4b号溝→4a号溝→3号溝の順で新しくなる。4a号溝は、熊野堂遺跡第Ⅱ地区の1号灌漑用井戸状遺構と切り合っているが、新旧は明瞭ではない。4b号溝は南側で風倒木根に切られ、3号溝は南で止まっている。

3号溝は、幅0.5～1.0m、深さは5～25cm、断面はU字形をなし、走向は南側でN4°W、北側でN9°Eを測る。4a号溝は、上幅0.6～1.3m、下幅0.3～0.6m、深さは5～20cm、断面は逆八字形をなし、走向は南側でN25°W、北側でN17°Wを測る。4b号溝は、上幅約0.8m、下幅0.2～0.4m、深さ10～15cmで、断面は逆八字形をなし、走向はN38°Wを測る。

これらの各溝の覆土は、浅間B軽石を混じえているが、4a号溝の覆土下層中には鉄分の沈着が認められる。

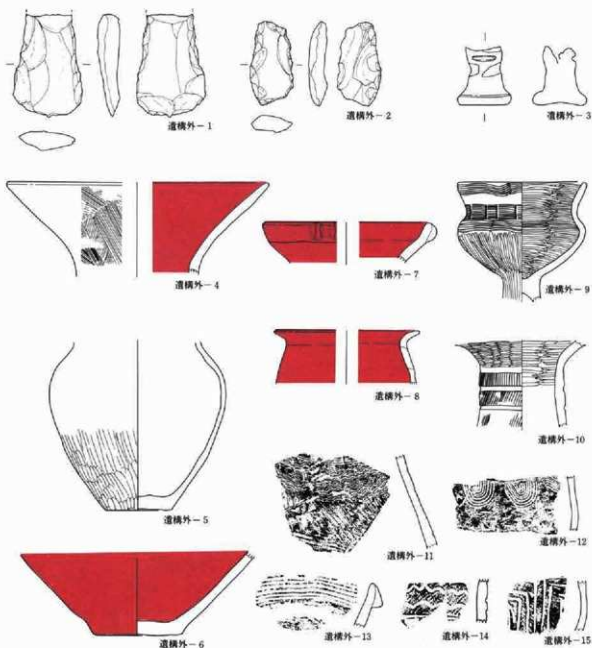
遺物は、各溝覆土中かなり含まれており、土師器・須恵器の塊坏類・灰釉埃片・軒丸瓦片（遺構外-42）・陶磁器片そして鉄滓など極めて多様であるが、いずれも各溝に確実に伴うとは考えられない。（長谷部）



第81図 3・4号溝平面図

第6節 遺構外出土遺物

本遺跡の調査において検出された土器片を主体とする遺物は、総数で遺物収納箱23箱になる。このうち残りの良いもの、図上復元が可能なものそして顕著な特徴が見られるもの合計396個体の実測を行った。その中で、確実に遺構に伴うもの及び遺構に伴う可能性が高いもの合計175個体については、各遺構の記載箇所に示した。それ以外の遺構に伴わないで出土した遺物のうち、代表的なもの50個体について、以下時代ごとに紹介したい。(坂井)



第82図 縄文・弥生時代遺構外出土遺物図

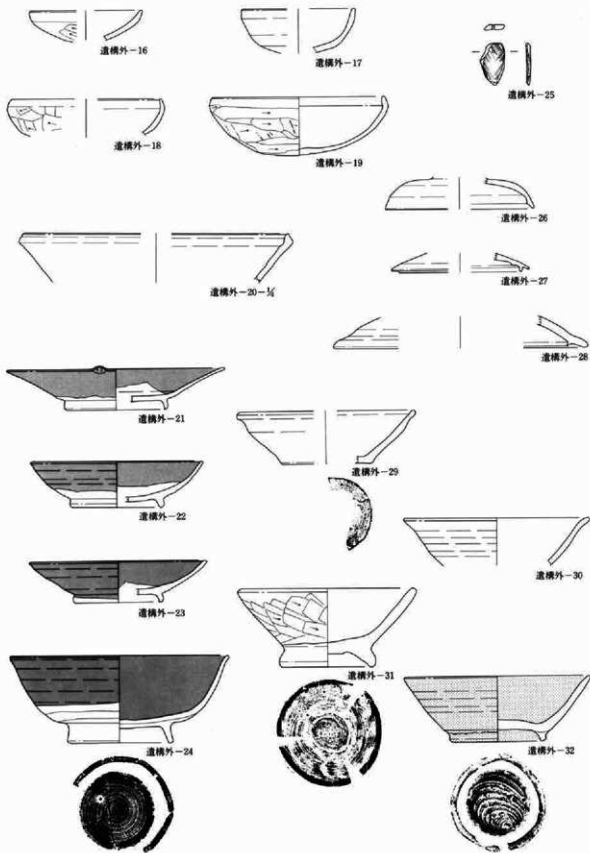
第35表 縄文石器遺構外出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	整形加工の特徴	石材	備考
打製石斧	出土位置不明 完存	遺構 外1	長さ 8.0 幅 5.5 厚さ 1.5	バナ形を呈する。	扁平な素材使用、片面にやや大きな割離後、細かな調整、片面だけ割離して刃部形成。表面に自然面を大きく残す。	安山岩	
打製石斧	4住覆土 完存	遺構 外2	長さ 6.5 幅 3.5 厚さ 1.5	小形で不定形を呈する 刃部の一部欠損。	片面にやや大きな割離後、周囲に細かな調整。表面に自然面を大きく残す。	安山岩	

第36表 弥生時代遺構外出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
不明 土製品	1住覆土	遺構 外3	底径 4.0	円筒形。指による押し付け、浅い凹み約一周、その上に棒状工具による押し付けの凹みあり。全面指ナデ。		砂粒含む。良好、硬質。淡褐色。	
甕 弥生土器	21住周辺 口縁部写	遺構 外4	口径 20.8	口縁部緩やかに外反。口縁部斜めハケ後、頸部横指ナデ、内面赤色塗彩後、横ヘラミガキ。		砂粒少量含む。 良好。鈍い黄褐色。	
甕 弥生土器	10住カマド外 9住覆土 胴部一底部写 残存	遺構 外5	底径 5.4	胴部上位に最大径があり、胴部は狭く括れる 底部は少し上げ底。	外：胴部附近弱いハケ調整、 胴部下位～底部↑ヘラミガキ 底部ヘラケズリ。内：横ナデ 底部接合面強いナデ。	砂粒を多く含む。 良好、酸化。 鈍い黄褐色。	胴部内面に黒 泥。 胴部中位二次 焼成痕。
甕 弥生土器	22住覆土 底部	遺構 外6	底径 7.0	胴部は約45°で直線的 に開く。	内外面赤色塗彩、横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。良 好、硬質。淡褐色。	
甕 弥生土器	7溝覆土 口縁部	遺構 外7	口径 13.5	口縁部は斜めに外方開 き、端部はやや立ち上 がり、棒状浮文を持つ。	内外面赤色塗彩後、ヘラミガ キ。	砂粒を含む。 良好、酸化。 黒地淡褐色。	
甕 弥生土器	館址内 口縁部	遺構 外8	口径 11.5	口縁部は大きく外反。	外面及び口縁内面赤色塗彩。 内外面横ヘラミガキ。	粒子細かい。良好 硬質。黒地淡褐色。	
台付 甕 弥生土器	5住覆土・掘り 方、1住覆土 写	遺構 外9	口径 10.5 胴径 10.2	胴最大径は上半部にあ り、そこから括れて頸 部となり、緩やかに外 反。口唇直立さみ。	口唇～胴上半部→指ナデ後施文。 口唇・胴上6本単位帯帯平行 線文。胴部縦状文。下1ヘラ ミガキ、内面→ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好、硬質、酸化。 淡褐色。	内外面黒泥。
甕 弥生土器	8住周辺 胴部	遺構 外10	—	口縁部は緩やかに外反。	頸部3本の平行沈線区画に↓ 帯状工具による文様帯残し、 他は指ナデ、→ヘラミガキで 消す。内面→ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好、硬質、酸化。 淡褐色。	
甕 弥生土器	1住覆土 胴部	遺構 外11	—	—	外面指ナデ後、縦状文→波状 文→扇面文施文。内指ナデ。	小砂粒を多く含む。 やや良好、淡褐色。	内面保付着。 黒泥。
甕 弥生土器	6住カマド 掘り方 胴部	遺構 外12	—	—	外面指ナデ後、帯帯半回転文 施文。内面一指ナデ。	砂粒少量含む。良 好、硬質。赤褐色。	
甕 弥生土器	10住覆土 口縁部	遺構 外13	—	—	口縁部外面三角帯貼り付け 胴部上端指ナデ、口縁部横指 ナデ、内面横指ナデ。	砂粒やや多く含む。 良好、硬質、酸化。 赤褐色。	外面保付着。
甕 弥生土器	9住覆土 胴部	遺構 外14	—	—	胴部縄文押除後、波状沈線文 施文。内面不明。	砂粒を含む。良好、 硬質、酸化。淡褐色。	
甕 弥生土器	4住カマド 掘り方 胴部	遺構 外15	—	—	外面縄文押除後、沈線文施文。 内面ヘラミガキ。	砂粒少量含む。良 好、硬質。暗褐色。	内外面保付着。

第三章 熊野堂遺跡第III地区



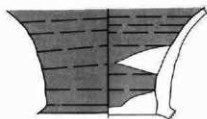
第83圖 古墳時代・古代遺構外出土遺物圖(1)



遺構外-33-Ⅰ



遺構外-37-Ⅰ



遺構外-38



遺構外-34-Ⅰ



遺構外-39



遺構外-35



遺構外-40-Ⅰ



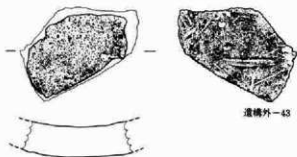
遺構外-36-Ⅰ



遺構外-41



遺構外-42



遺構外-43

第84圖 古墳時代・古代遺構外出土遺物圖(2)

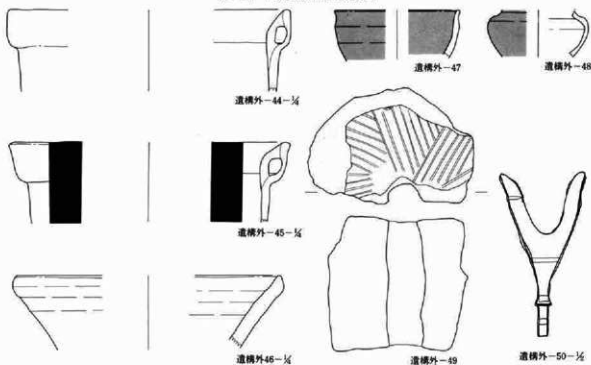
第37表 古墳時代・古代遺構外出遺物観察表(1)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
坏 土 師 器	14住厘土 口縁部～体 部写残存	遺構 外16	口径 9.0	体部はやや扁平きみに 立ち上がり、腹部にヘ ラケズリによる稜。	外：体部不定方向ヘラケズリ 後、口縁部横ナデ。 内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 暗赤褐色。	
坏 土 師 器	順り方厘土 口縁部～底部 写残存	遺構 外17	口径 9.2	底部～体部にかけて丸 みを持ち、口縁部は直 立きみに立ち上がる。	外：口縁部横ナデへ。体部阻 難なナデ。内：口縁横ナデ。 底部ヘラケナデ。	砂粒をやや多く含 む。軟質、酸化。 黄褐色。	
坏 土 師 器	16住厘土 口縁部～体部 写残存	遺構 外18	口径 12.0	体部緩い丸みで立ち上 り下位ヘラケズリによ る稜。口縁短く内反。	外：口縁部横ナデ、体部横方 向ナデ後、下位ヘラケズリ。 内：横ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
坏 土 師 器	15住末より17 cm 口縁部～ 底部写残存	遺構 外19	口径 13.8 器高 4.6	大形で深みのある器形。 体部は緩い丸みを持ち 口縁は短かく内反。	外：口縁部横ナデ、底部縦へ ラケズリ後、体部ヘラケズ リ。内：横ナデ。	砂粒をやや多く含 む。軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	底部外面全体 黒斑。
鉢 須 恵 器	22住厘土 口縁部写残存	遺構 外20	口径 28.0	口縁部は直線的に外反 し、口首部は外縁を持 ち少し内反。	全体に指押さえ調整後、外 面口縁部横ナデ。内：斜めナ デへ後、上位横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰白色。	
段 皿 灰軸陶器	2住厘土上層 口縁～底部	遺構 外21	—	端部の内縁する低い高 台貼り付け。明瞭な段 を持つ。	口縁部回転横ナデ。高台部回 転ナデ。内：回転横ナデ、軸 つけがけ。	還元。 灰白色。 軸：灰白色。	
碗 灰軸陶器	2住厘土上層 口縁～底部	遺構 外22	—	口縁部やや薄く、底部 に向って厚くなる。短 い高台貼り付け。	口縁部外部回転横ナデ。高台 から底部回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。灰白色。 軸：灰白色。	
皿 灰軸陶器	グリッド出土 口縁～底部	遺構 外23	—	口縁部外反し、外面に 沈線を持つ。短く細い 高台貼り付け。	口縁部側回転横ナデ。高台部回 転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。明オリブ 灰色。 軸：灰白色。	
碗 灰軸陶器	3・4溝、2 住厘土 写残存	遺構 外24	口径 17.5 底径 9.0 器高 6.8	外面口縁部は僅かに外 反。直線的に底部に至 り、底部は平坦。直線的 に外傾した付け高台。	内外面共にロクロ成形。 外：ロクロ成形後、体部下半 右回転ヘラケズリ。底部回転 ヘラケズリ。つけがけ無軸。	硬質、還元。 灰白色。	
削形石製 模 造 品	21住周辺 写残存	遺構 外25	長さ 3.3 幅 2.0推 厚さ 0.4	鋭角二等辺三角形の 平面形で、薄く扁平。 基部に径2mmの小孔。	表面面共に、研磨。表面は一 部ノ研磨もあり、各側面は 研磨。穿孔は、両方向から。	滑石製。 明オリブ灰色。	
蓋 須 恵 器	2住厘土上層 下半以下	遺構 外26	—	頂部などらかな丸み を持ち、内面に僅かな身 受けがある。	外：回転ヘラケズリ。 内：横ナデ。	還元。 褐色。	
蓋 須 恵 器	12住厘土 口縁部写残存	遺構 外27	口径 11.0	器壁は一定の厚さを持 ち、内面に身受け。	外：不定ヘラケズリ後周縁の みヘラケズリ。内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、還元。灰白色。	
蓋 須 恵 器	22住附近 以下写残存	遺構 外28	口径 20.0	器壁の厚さは一定して いる。内面に身受け。	内外：→回転横ナデ。	微砂粒を含む。硬 質、還元。灰白色。	
坏 土 師 器	3住厘土上層 口縁～底部	遺構 外29	器高 4.2	口縁部～体部にかけて 浅い段を持ち、底部へ 直線的に繋げる。	口縁～底部横ナデ。 内：回転ナデ。 底部に回転糸切り痕。	砂粒子含む。 酸化。浅黄色。	

第38表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表(2)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
環須恵器	1住覆土上層 口縁部へ体部 ×残存	遺構 外30	口径 14.8	体部は僅かに丸みを持って外反し、口唇部一旦括れ更に開く。	外：右回転横ナデ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰白色。	
埴土胎質土器	グリッド出土 口縁へ底部	遺構 外31	——	太く厚い高台を貼付。底部が厚く体部も同じ位厚い直縁に近い丸み。	口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ痕、高台貼り付け回転ナデ。 内：全体にナデ。	砂粒子含む。 酸化。 褐色。	外面黒色が残ら。
埴須恵器	グリッド出土 口縁へ底部	遺構 外32	器高 5.2	太く短い高台を貼付。底部が厚く体部はやや薄い。	口縁から底部にかけて横ナデ。 内：回転ナデ。 底部回転糸切り痕。	砂粒子含む。 中性炎。 鈍い褐色。	
羽釜	8住周辺表土 口縁へ胴部	遺構 外33	——	口縁部直立。口唇部やや内傾。胴三角形上面にやや反る。胴部緩く内傾。器壁は均一。	口縁部外面横ナデ。胴横ナデ 胴部粗い横ナデ。ヘラケズリ痕。	砂粒子含む。 酸化。 褐色。	内外面黒色。
羽釜	2住床面直上 (樺野堂目地区196住の遺物) 口縁胴部	遺構 外34	——	口縁部大きく内反。三角形の脚水平に貼付。口唇内傾。胴部なだらかに内傾。厚き均一。	口縁部横ナデ。器先端は上ヘナデ。胴部粗いナデ。内：回転横ナデ。	砂粒子含む。 酸化。 鈍い黄褐色。	胴部窪付着。
羽釜?	12住覆土 口縁部×残存	遺構 外35	口径 14.0	口縁部直立きみ。口唇部内側丸い。	内外：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質還元。灰白色。	
壺須恵器	14溝覆土下層 ×以下	遺構 外36	器高 2.6	体部は直線状に内傾。底部は体部と同じ厚さで極めて扁平。	体部、底部内面ロクロ痕。底部周縁左回転ヘラケズリ、体部内外面、底部内面カキメ。	砂粒含まず、気泡なし。還元、良好。灰色。	
羽釜?	1住覆土 口縁部へ胴部 ×残存	遺構 外37	——	全体に内傾。口唇に内傾。やや水平に外反。脚は断面三角形。	外：回転横ナデ。内：幅広い単位による横ナデ。	砂粒をやや多く含む。硬質。酸化。 赤褐色。	
長須恵器 灰釉陶器	水田傾斜面 胴部	遺構 外38	——	口縁部は薄く、大きく外反する。肩部に近い所はやや厚い。	口縁部回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	白色砂粒子含む。 還元。灰白色。 釉：灰白色。	
長須恵器 瓶	22住覆土 底部×残存	遺構 外39	底径 8.0	円形粘土版の底部に断面三角状の粘土帯高台貼付。高台部に自然釉。	内外：横ナデ。高台部ナデ付け。	白色粒少量含む。 緻密、硬質、還元。 灰白色。釉：緑色。	
要土師器	3住覆土 口縁部へ胴部 ×残存	遺構 外40	口径 16.7	胴部膨みなく、頸部僅か括れ。口縁波状僅か外反。断面に輪横痕。	外：口縁横ナデ後、幅広いヘラケズリ。内：口縁へ胴横ナデ。胴一部へヘラナデ。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。 黄褐色。	
大形壺須恵器	8・9溝周辺 胴部	遺構 外41	——	ほぼ均一した厚みを持つ小片。	外：平行タタキ痕。 内：背海波状アテ痕。	還元。良好。 外：灰白色。 内：灰色。	
軒丸瓦	3・4溝覆土 下部×以下	遺構 外42	径 14.0推 厚さ 2.7	作りが雑であり文様の線・円周の線が著しく崩れている。	表面にやや歪んだ粘土細貼付による瓦当文。裏面右目尻。表裏周縁・外側面ヘラナデ。	砂粒を含む。 やや軟質。酸化。 鈍い黄褐色。	
平瓦	12住覆土 ×以下残存	遺構 外43	厚さ 2.4	アテ、側面共に割れ口。	表面素文。へヘラナデ後、1ナデ。裏面素文。自然釉。	砂粒を含む。硬質 還元。青灰色。	

第85図 中世遺構外出土遺物図



第39表 中世遺構外出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
内耳土鍋	7溝覆土 以下	遺構 外44	—	口縁外傾し、胴部直立。 口唇取り、胴部内面 稜。耳外面突出。	耳は、粘土黏貼付後、口縁を 押し出し、口縁内外面横ナデ。 体部外面指ナデ。	砂粒含み気泡あり。 内側酸化。外側中 性灰不良。黒褐色。	外面に煤付 着。
内耳土鍋	7溝覆土2・ 3ビット群覆 土以下	遺構 外45	—	遺構外-44と同じ。	遺構外-44と同じ。	砂粒、石英含み気 泡あり。還元不良。 黒褐色。	口縁外面に煤 かに煤付着。
鉢 軟質陶器	1住覆土 口縁～胴部	遺構 外46	—	口縁部やや内反し、厚 い器壁。	口縁部回転横ナデ。輪横取。 胴部指ナデ、一部1ヘウナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒含み気泡あり。 還元、良好。 褐灰色。	胴部内面二次 的な研磨。
埴 瀬戸鉄軸	22住覆土上層 以下	遺構 外47	—	口縁僅かに外反。体部 は緩く内反。	内外面に施軸。	鉛状土。還元良好。 軸：鈍い赤褐色。 素地：鈍い黄褐色。	
小形 甕 青磁	グリッド出土 以下	遺構 外48	—	頸部から肩部にかけ強 い屈曲を示し肩を張り 底部にかけ内反。	内：クロ痕あり。 外：施軸。	磁器土。還元良好。 軸：明緑灰色。 素地：灰白色。	
石 臼	15土壇覆土 以下	遺構 外49	厚さ10～11	表面両面に平担面。両 面を貫通する径2.8cm の円孔あり、側面欠損。	表面に、5～6mm間隔で右回 りに平行沈線が45°づつ振ら れている。	灰色。	表面は、二次 的な磨滅あり。

第40表 金属器遺構外出土遺物観察表

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
鉄線	12住カマド内	遺構外 - 50	8.6	4.6	0.7	内側に刃部を持つY字形の厚さ0.3cmの扁平な線。基部断面方形で、中位より下欠損。	

第IV章 雨 壺 遺 跡

第1節 縄文時代の遺構

縄文時代と考えられる遺構は次のものがある。

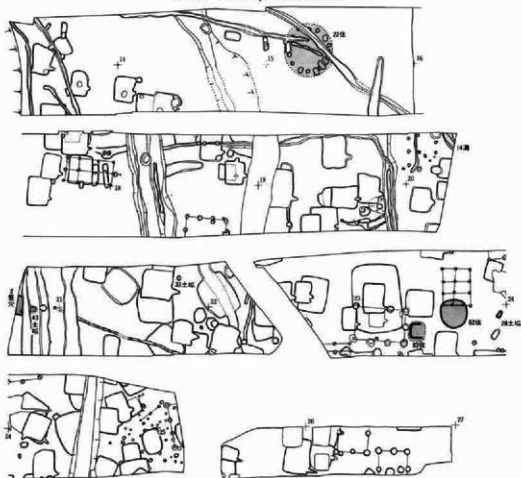
住居址	計3軒	22号住、62号住、83号住
竪穴状遺構	計1基	2号竪穴
溝	計1条	14号溝
土 塚	計3基	28号土塚、33号土塚、43号土塚

なお時期不明の次の各遺構を本節に併記した。

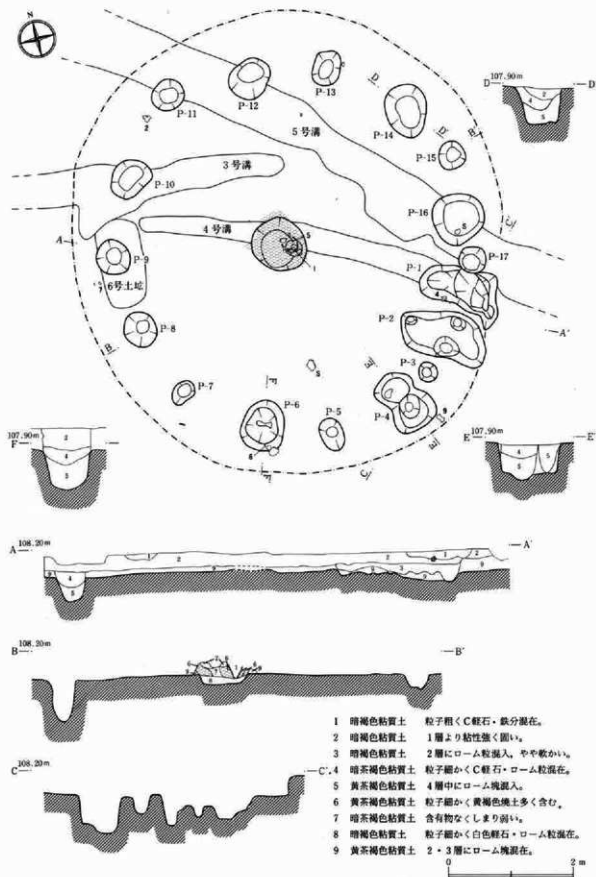
15号溝、1号ピット群

14号土塚

第86図 縄文時代遺構分布概念図



第IV章 調査遺跡



第87図 22号住居址平面断面

22号住居址（1区）

本住居址は4号溝底で炉址を検出したが、第⑥層鉄分含有黒茶褐色粘質土中では他に何も確認できなかった。そこで第⑧層の上部ローム層上面まで下げて柱穴を検出した。北半分は、3・4・5号溝と6号土壇に切られている。

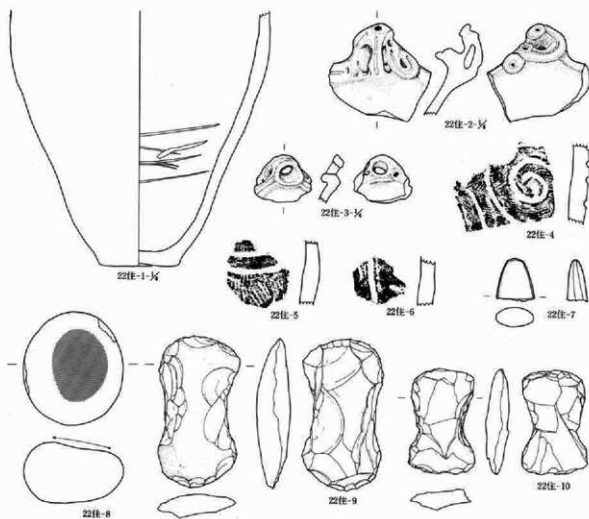
正確な規模は不明だが、炉址を経て対応する柱穴間の外側上場間の距離は、約6.3mとほぼ等しい。従って7.0m以下の直径の円形プランと推定できるが、南東側には隣接してやや形状を異にする柱穴があり、そこに入口を想定すれば柄鏡形の可能性も考えられる。その場合、主軸はN55°Wを測る。壁は全く検出できなかった。床面も調査時には検出できなかったが、土層断面図に見られるような柱穴の立ち上がりから考えて、第⑦層のローム漸移層上面の海拔107.90m附近と思われる。柱穴は炉址を中心に、環状に大小17個を検出した。底径は20cm程度の小形と40～60cmの大形に分かれ、推定床面からの深さは20～30cmの浅いものと50～80cmの深いものに分かれるが、これらの配列組み合わせには、規則性は認められない。柱穴間の距離は南東側が0.5～0.7mと短い、他は1～1.5mの長さがある。P-4は内側と外側の柱穴間の新旧関係は層層的には不明だが、炉址からの距離は内側のものが他の柱穴に近い。しかし炉址をはさんだ反対側のP-11は、P-4の外側とほぼ同じのやや離れた位置にある。南東側のP-1とP-2は深さ20～30cmの浅い楕円形の掘り込みが広がって、その中にP-1では1箇所、P-2では2箇所の深さ42～56cmの柱穴状のピットが見られる。ここを入口施設と想定したが、壁が全く確認されていないため正確には不明である。

炉は各柱穴間のほぼ中心に位置し、上幅90cmほどの円形の深さ20cmほどの掘り込みをもっており、一部に白色粘土が見られた。やや東に偏して垂直に深鉢（1）が埋められていた。この深鉢の周囲にはやや黄褐色ぎみの焼土が散っている。掘り込みの底から深鉢の底は10cmほど高い。

遺物は、P-10とP-11の中間で推定床面より15cmのレベルで把手（2）が出土している。鉢胴部（4）が同じく13cmのレベルでP-1上部より検出された。また打製石斧（9）がP-4外側で床より6cm、磨製石斧（7）がP-9近くで10cmのレベルで出土した。胴部破片では（5）が埋土と共に、（6）が12cmのレベルで見られた。これ以外に破片類は約200点見られた。（坂井）

第41表 22号住居址出土遺物観察表（1）

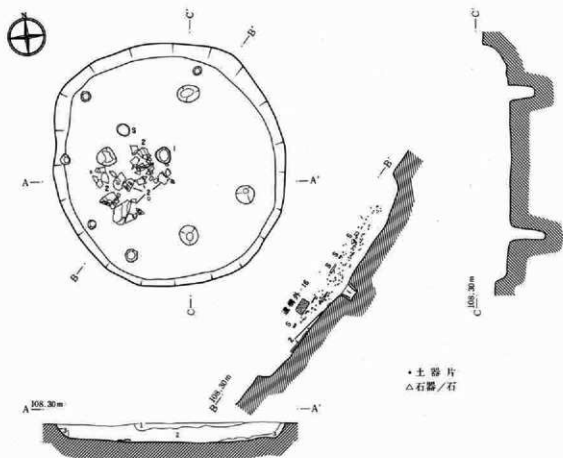
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	床より10cm 胴部中位以下	22住 -1	最大径20.8 底径8.6		外：へら状工具による縦位、 斜位のナデ。内：横位のナデ、 底部には木葉痕あり。	砂粒を多く含む。 不良。 明黄褐色。	無文土器
深鉢 縄文土器	床より15cm 把手	22住 -2	—	把手を有し、キャリ パーを呈する。	内外面：へら状工具による横 位のナデが行なわれている。	砂粒を多く含む。 不良、橙色。	
深鉢 縄文土器	覆土 把手	22住 -3	—	把手を有し、キャリ パーを呈する。	内外面：へら状工具による横 位のナデと研磨が行なわれて いる。	砂粒を多く含む。 やや良い。 鈍い黄褐色。	
深鉢 縄文土器	床より13cm 胴部	22住 -4	—		R L縄文を地文とし、太い沈 線で弧状・渦巻状などで区画	砂粒を少し含む。 良好、明黄色。	
深鉢 縄文土器	床より10cm 胴部	22住 -5	—		屈曲する沈線により磨文間 を磨消縄文としL R縄文地文。	砂粒を多く含む。 不良、橙色。	
深鉢 縄文土器	床より12cm 胴部	22住 -6	—		沈線による磨文を施文して いる。	砂粒を多く含む。 不良、明黄色。	



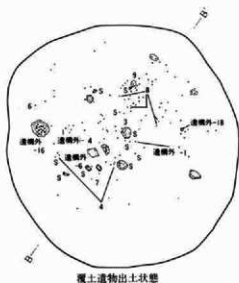
第88図 22号住居址出土遺物図

第42表 22号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量(cm)	成形加工・使用痕・形態の特徴	石材	備考
磨製石斧	床より10cm	22住 -7	幅 3.0 厚さ 1.5	基部片で、横断面は隅丸方形を呈し、調整は丁寧に施している。		
磨石	覆土	22住 -8	長さ 9.0 幅 8.0 厚さ 4.8	円形の扁平な石で2面を磨いている。		
打製石斧	床より6cm	22住 -9	長さ 12.0 幅 6.3 厚さ 2.7	扁平な素材を使用し、片面にやや大きな割離を施し細かな調整を加えている。刃部は弧状を呈する。側辺の抉れはほぼ左右対称である。 分銅形を呈する。片面に自然面を大きく残す。		
打製石斧	覆土	22住 -10	長さ 8.3 幅 5.3 厚さ 1.8	やや大きな割離を施した後、周囲に細かな調整を加えている。側辺部両側に抉れ部を有する。 分銅形を呈する。		



- 1 褐色砂質土 粒子細かく灰白・黄白色粒混じり、しまる。
- 2 褐色砂質土 1層より暗くローム粒含む、しまる。
- 3 褐色粘質土 ローム塊含む、しまる。



覆土遺物出土状態



第89図 62号住居址平面図

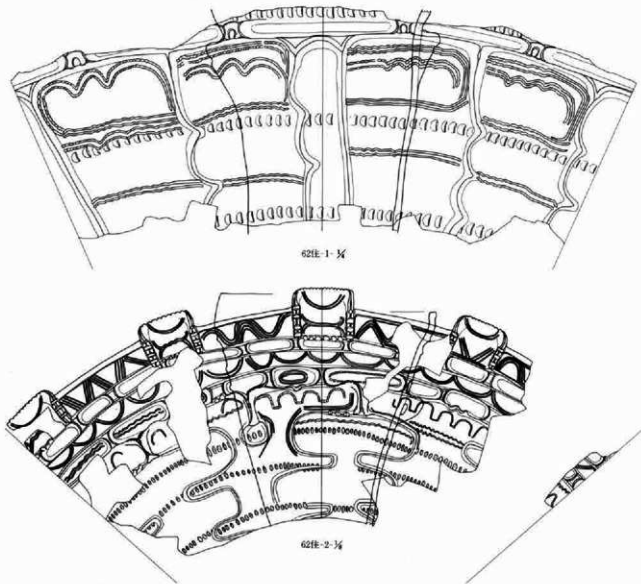
62号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。6号掘立が重複し、南側に44号住、西側に61号住が隣接する。

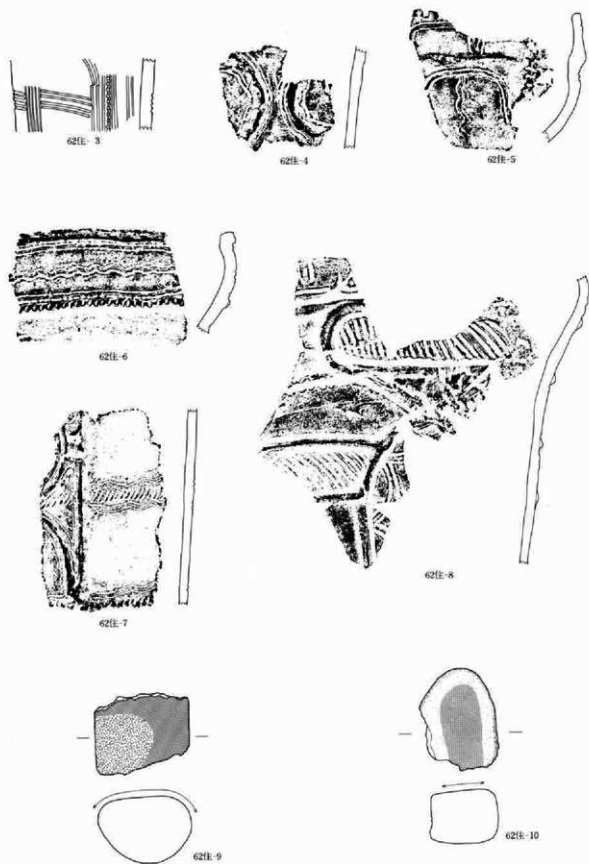
規模は長径3.5m、短径3.3mの円形を呈する。覆土は、ローム粒を全体に含む褐色土が見られ、ややしまる。壁は緩傾斜で、良好な状態を示す北辺側で高さ約30cm。床面は黄褐色粘質土を踏み固めて平坦で堅緻。柱穴は、主柱穴が対の位置で4本、北辺側に壁柱穴が4本、東辺側で1本確認された。

炉址は、中央で確認された。床面を掘り抜き、口縁部と胴下半部を欠く深鉢形土器(1)を埋設し、周囲の床面はわずかに低く、内部には焼土塊が少量見られた。

遺物は、確認面から多量に見られ、主に北半分で顕著である。床面上では、炉脇から倒立つぶれた状態で深鉢形土器(2)が出土している。また(3~8)は床よりかなり浮いた状態で見られた。この他に、胎土が2種類の縄文土器片約700片、石製品片約30片が覆土中に見られ、そのうち土器片130片と石製品は出土状態を点で図示した。(女屋)



第90図 62号住居址出土遺物図(1)



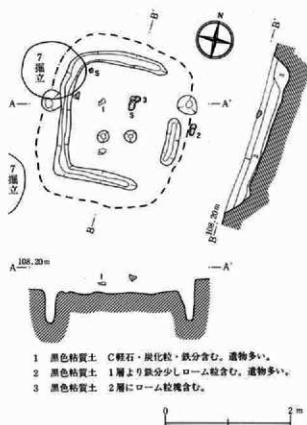
第91圖 62号住居址出土遺物(2)

第43表 62号住居址出土遺物観察表(1)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
深鉢 縄文土器	砂穴内埋没 口縁・底部欠損	62住 -1	—	口縁・底部欠損であるが、胴部から肩部にかけて外反するので、キャリバー形を呈すると思われる。	横位隆帯で頸部文様帯と胴部文様帯を区分。上に粘土起を半円形に貼付、両側に隆帯の楕円区画を出し、4分割。胴部幅広い爪形文を横位で区画、上に隆帯Y字状突起を頸部の小突起間に差し、下位へ曲線的に垂下。上位文様帯は、隆帯楕円区画内に半截竹管沈線、結節沈線文で波状・弧状文、以下は横位に波状沈線文。	砂粒を多く含む。 良好。 褐色。	
深鉢 縄文土器	床面直上 底部欠損	62住 -2	口径 70.0	2対の把手を有し、平縁でキャリバー形を呈する。	把手部は扇状把手で周囲に刻目文、内側半截竹管の弧状文口縁部平縁。把手で4分割。区画内弧状文・波状文、頸部横位隆帯で3分割。上下楕円区画、区画内半截竹管の楕円形・波状文、角押文の楕円形文、中段弧状文連続施文。胴部横位幅広い爪形文3条、4分割し頸部からのX字状突起。隆帯下位に曲線的垂下し楕円区画、上位隆帯楕円区画内に角押文の弧状文・半円形文・波状文。以下区画内は無文。	砂粒を多く含む。 良好。 鈍い黄褐色。	全体に煤付着。
深鉢 縄文土器	床より11cm 胴部	62住 -3	—	—	縦位に隆帯2条刻目。他は半截竹管の沈線文で縦位・横位に方形区画を作る。	砂粒を多く含む。 良好。 鈍い黄褐色。	
深鉢 縄文土器	床より20cm 胴部	62住 -4	—	—	半円形隆帯2条、両側に半截竹管の結節沈線文。	雲母・石英粒を多く含む。良好。 鈍い褐色。	色：黄褐色
深鉢 縄文土器	床より19cm 把手	62住 -5	—	扇状把手でやや内反を呈する。	把手頂部刻目内側弧状文。下位隆帯楕円区画、区画内半円形結節沈線と縦位波状沈線文。	雲母・石英粒を少し含む。良好。 鈍い褐色。	
深鉢 縄文土器	床より19cm 口縁部	62住 -6	—	平縁でやや内反を呈する。	口縁に近い横位隆帯、区画内は隆帯に沿い半截竹管の結節沈線文、中央に波状沈線文。以下無文。	雲母・石英粒を多く含む。良好。 鈍い褐色。	
深鉢 縄文土器	床より21cm 胴部	62住 -7	—	—	縦位・斜位に隆帯で三角区画、内側に半截竹管の沈線文。横位に幅広い爪形文と波状文を組合せる。	雲母・石英粒を多く含む。良好。 鈍い褐色。	
深鉢 縄文土器	床より16cm 胴部	62住 -8	—	胴部から頸部にかけて外反するのでキャリバー形を呈すると思われる。	横位の隆帯で文様帯区画。頸部に隆帯の突起。胴部へ曲線的垂下。楕円区画内に太い斜位沈線。隆帯の両側半截竹管の角押文・沈線文を施文。	砂粒・雲母粒を少量含む。 良好。 褐色。	
磨石	床より17cm 破損品	62住 -9	長さ 6.0 幅 7.6 厚さ 5.3	丸みのある断面三角形を呈し、全面を磨いている。			

第44表 62号住居址出土遺物観察表(2)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
磨石	覆土 破損品	62住 -10	長さ 8.2 幅 6.0 厚さ 4.2	不定形を呈し、片面を磨いている。	先端部に使用痕あり。		



- 1 黒色粘質土 C軽石・炭化粒・鉄分含む。遺物多い。
- 2 黒色粘質土 1層より鉄分少しローム粒含む。遺物多い。
- 3 黒色粘質土 2層にローム粒含む。

第92図 83号住居址平断面図

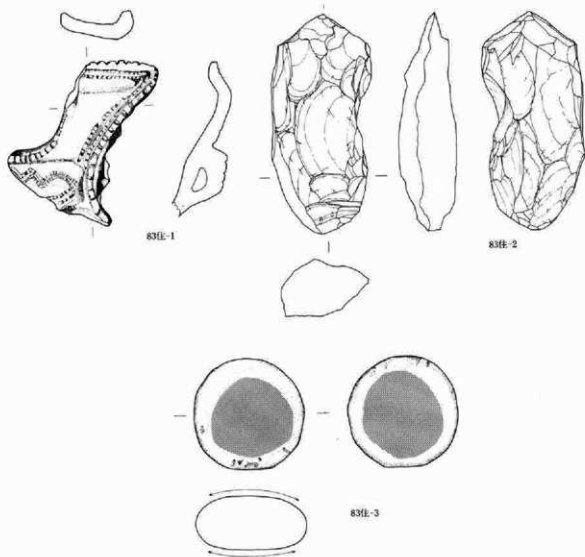
83号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土で確認され、北辺で61号住と隣接する。規模は東辺2.3m、南辺2.0m、西辺2.6m、北辺1.8mを測り、平面形は小形隅丸方形を呈する(西辺走向N9°W)。覆土はローム粒と灰白色軽石を含む黒色土である。

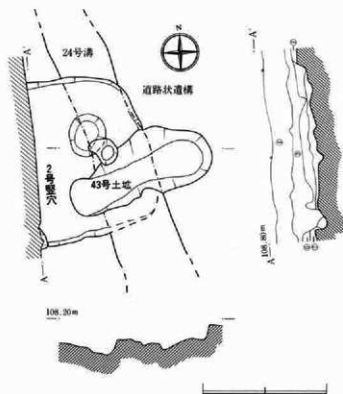
壁は緩傾斜で、床面はローム面そのままの軟弱である。柱穴は東西の壁に壁柱穴が2本検出され、住居内には南側に小柱穴が2本検出された。壁周溝はほぼ全周する。遺物は覆土で多く出土し、床より浮いて縄文土器把手部(1)、石斧(2)、磨石(3)が出土した。他に約70片の縄文小破片がみられた。(新井)

第45表 83号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	床より14cm 把手	83住 -1		波状口縁状に把手を有し、やや内反を呈する。	波頂部に板状内反把手。頂部より垂下する曲線的隆部に刻目。隆部に拍い半截竹管の結節沈線。下位口縁に拍い隆帯の横円区画。区画内に波状結節沈線。	雲母・石英粒を多く含む。 良好。 暗褐色。	
打製石斧	床より12cm	83住 -2	長さ 17.3 幅 7.5 厚さ 4.5	分銅形を呈し、片側に強い抜れを有する。	大きな割離を施し周囲を調整しているが、加工が粗雑である。		
磨石	床より3cm	83住 -3	長さ 8.8 幅 8.8 厚さ 4.3	円形を呈し、両面を磨いている。			



第93圖 83号住居址出土遺物圖



- 1 暗褐色粘質土 ローム粒含む。
- 2 黄褐色粘質土 1層とローム粒塊の張在土。固くしまる。
- 3 暗褐色粘質土 ローム塊含み軟かい。

第94図 2号壑穴状遺構、43号土壇平面断面図



252-1



43壇-1

第95図 2号壑穴状遺構、43号土壇出土遺物図

第46表 2号壑穴状遺構・43号土壇出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	覆土 口縁部	2壑 -1	—	平縁で、やや内反。	口縁隆帯状張り出し。下位半円形隆帯幅広爪形文。	砂粒を多く含む。 良好。茶褐色。	
深鉢 縄文土器	道路状遺構下層 把手	43壇 -1	—	波状口縁上に把手を有し、やや内反を呈する。	波頂部楕円形、内反する把手、外側刻目文。内側横位3条沈線と爪形文。下位隆帯楕円区画内側3条沈線と横位爪形文。	雲母・石英粒を多く含む。 良好。 鈍い黄褐色。	

2号壑穴状遺構 (Ⅲ区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土下層において確認された。本遺構埋没後に24号溝に切られ、また西側では調査範囲外へ延びている。43号土壇との関係は不明。

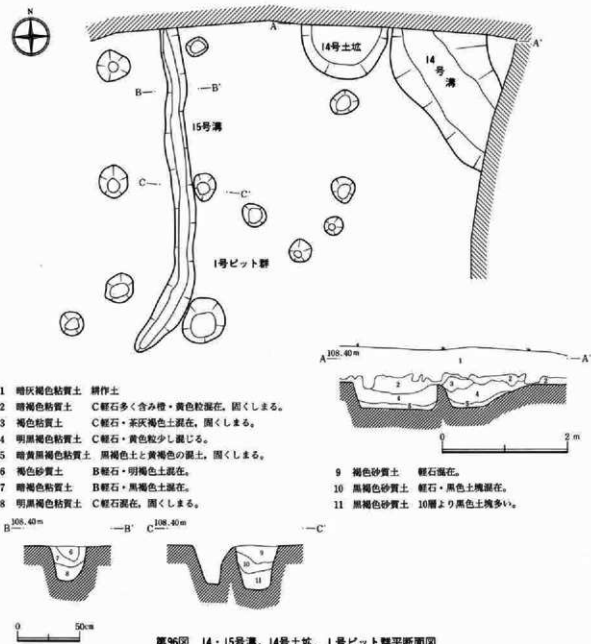
規模は南北約2.2mの方形と推定されるが、明確に捉えることは不可能であった。壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、底面には凹凸がある。

遺物は(1)の他に縄文土器小破片約100片が見られた。(飯塚)

43号土壇 (Ⅲ区)

本土壇は2号壑穴と同一面でも確認された。本遺構埋没後に24号溝に切られている。規模は2.2×0.3m、主軸N85°Eの楕円形と推定される。

遺物は道路状遺構の下層より約1000点の縄文土器小破片が見られたが、(1)はその一つで確実に本遺構に伴うかは不明である。(飯塚)



14・15号溝, 14号土坑, 1号ピット群 (II区)

本遺構群はいずれも第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。14号溝と14号土坑, 1号ピット群と15号溝及び14号土坑が近接している。

14号溝

N38°Wの走向をもち現存長2mである。上幅1.2~1.6m, 下幅0.5~0.7m, 確認面よりやや上の海拔108.40mからの深さは約0.4mを測る。断面形は逆八字形で、底面はローム面になる。

出土遺物は覆土中より縄文土器片(1~5)があり、小破片で縄文土器片約30片, 土師器片3片が見られた。なお道路敷をはさんだ南東の延長(III区)には2号堅穴が位置する。

15号溝

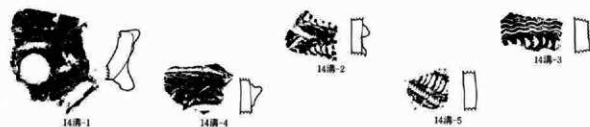
若干蛇行しながらほぼN2°Wの走向を示す。上幅0.3~0.4m、下幅0.1~0.2m、確認面直上の海拔108.30mからの深さは0.3~0.4mを測る。南側が僅かに深い。断面はU字形を呈している。出土遺物は覆土中より須恵器壺片等6片、土師器片10片の小破片が見られた。

14号土壇

北側が調査範囲外になり現存最大径1.1m、確認面からの深さ約0.4mを測る。壁はやや急傾斜で底面はほとんど平坦な明黒褐色土である。覆土は14号溝に近似している。出土遺物はない。

1号ピット群

6×6mの範囲で12個のピットが検出された。底径は0.1~0.4mで、確認面はほぼ直上の海拔108.30mからの深さは0.2~0.5mで、0.4m前後のものが多く、掘り方は緩傾斜のものと円筒状のものがある。出土遺物は全くない。(小安)

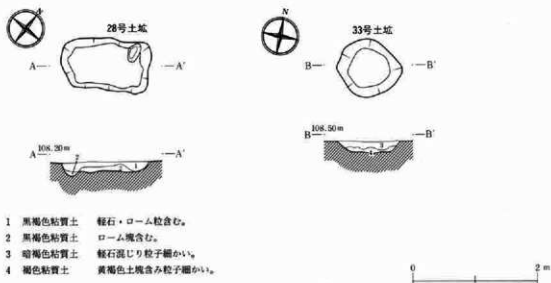


第97図 14号溝出土遺物図

第47表 14号溝出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	覆土 口縁部	14溝 -1	—	波状口縁でキャリバーを呈する。	隆起線により渦巻文を施文。	砂粒を多く含む。良好。褐色。	加曾利E式。
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	14溝 -2	—	—	隆起線の両側に爪形文連続施文。	砂粒を多く含む。良好。赤褐色。	瓣板式。
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	14溝 -3	—	—	半截竹管の波状沈線文を横位に、下位に爪形文連続施文。	砂粒を多く含む。良好。赤褐色。	瓣板式。
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	14溝 -4	—	—	断面が三角の屈曲する隆起線の両側に沈線を施文。	骨母・石英粒を多く含む。良好。褐色。	阿玉台式。
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	14溝 -5	—	—	隆起線両側に爪形文連続施文、下位幅広い爪形文連続施文。	砂粒を多く含む。良好。明褐色。	瓣板式。

第IV章 雨壺遺跡



第98図 28・33号土城平面断面図

28号土城 (IV区)

本土城は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。周辺は住居址が検出されず、土城・ピットの類が多数検出される。19・29・34号土城、6号竪立などである。規模は長辺1.2m、短辺0.6m、深さ0.3mの隅丸長方形。主軸N43°Wを測る。壁はやや垂直に近く、底面はロームである。覆土はローム粒子・ローム塊・浅間C軽石を含む硬くしまった層である。遺物は覆土中より縄文土器が4片あるのみである。土城底はほぼ平坦で軟弱。 (宮下)

33号土城 (III区)

確認面は第⑦層黒茶褐色粘質土である。重複はないが、74・78・85号住が近接する。規模は長軸0.7m、短軸0.6mで、平面形はややいびつな楕円形である。確認面からの深さは約0.2mであり、覆土は暗褐色土である。 (井川)



第99図 28・33号土城出土遺物図

第48表 28・33号土城出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	28城 -1	—	—	横位に半截竹管の沈線文。内側に爪形文と三角印刺文。	砂粒多く含む。良好。茶褐色。	
深鉢 縄文土器	覆土 胴部	33城 -1	—	—	横位の籐帯上に圧痕。下位に半截竹管横位の沈線文と同心円状の沈線文。間を刺突文。	砂粒多く含む。良好。赤褐色。	

第2節 弥生時代の遺構

弥生時代と考えられる遺構は次のものがある。

住居址 計11軒 47号住, 48号住, 49号住, 53号住
57号住, 67号住, 69号住, 71号住
84号住, 86号住, 90号住

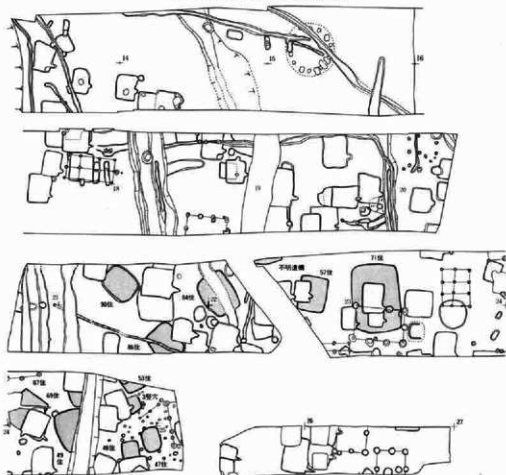
不明遺構 計1基

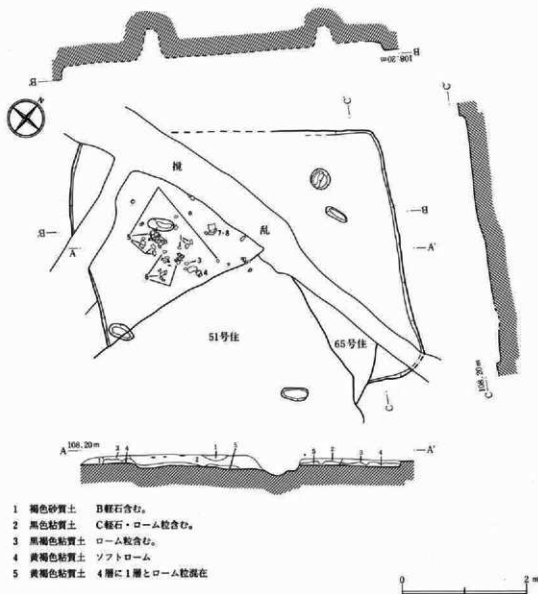
竪穴状遺構 計1基 3号竪穴

なお時期不明の次の各遺構を本節に併記した。

72号住, 27号土塚

第100回 弥生時代遺構分布概念図

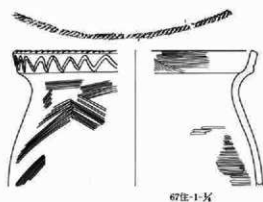




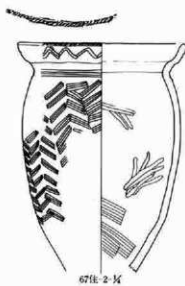
第101図 67号住居址平面断面図

67号住居址 (IV区)

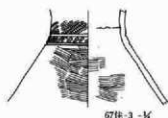
本住居址は第②層褐色粘質土面で確認された。51・65号住と重複関係にある。南東を51・65号住に切られている。北側に8号掘立が見られ、東側に49号住が隣接している。現代の下水管が東西に走り攪乱する。規模は東辺3.8m 北辺4.8mの不整形で、東辺走向N56°Wを測る。確認面から床面まで浅いが、壁はほぼ垂直に近く、床面はやや軟弱で緩やかな凹凸が見られる。覆土は黒色土。柱穴は掘り方調査で検出する。4本とも横広の楕円形で形に統一性がある。しかし、柱穴の間隔が壁に対してまちまちで、統一性に欠ける。炬は検出できず、51号住の覆土に焼土・灰の混った部分が本住居際に見られるので、51号住に切られた可能性が高い。遺物は、住居内の南西部分に集中する。壺口縁~胴部(1)は床面よりやや高い位置で出土。炭化物・焼土を少量伴う。小形台付壺(4)は、伏せたような形で床面より浮いてほぼ完存で出土する。壺(2)は破片が小さいため覆土中より1個体分出土、床面より高い位置。壺(5)は横たわった形で、床面に近い位置で出土。破片が小さく1箇所に集中している。壺(6)は(5)と接していて(5)より大きい



67住-1-Ⅻ



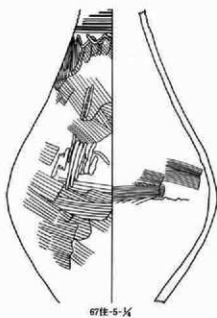
67住-2-Ⅻ



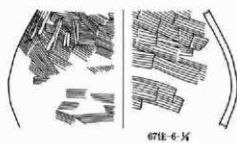
67住-3-Ⅻ



67住-4



67住-5-Ⅻ



67住-6-Ⅻ



67住-7-Ⅻ



67住-8-Ⅻ

第102図 67号住居址出土遺物図

第IV章 雨 壺 遺 跡

壺で、位置はやや高い。壺(3)は(5)とほぼ同じ位置で出土し、破片が小さく残りも少ない。他に弥生土器小破片約130片が、覆土中に見られた。

本住居は確認面で床面が検出された部分が多く、形状が不明のため全体を把握しにくい。重複関係のある住居のうち一番古い時代となる。(宮下)

第49表 67号住居址出土遺物観察表

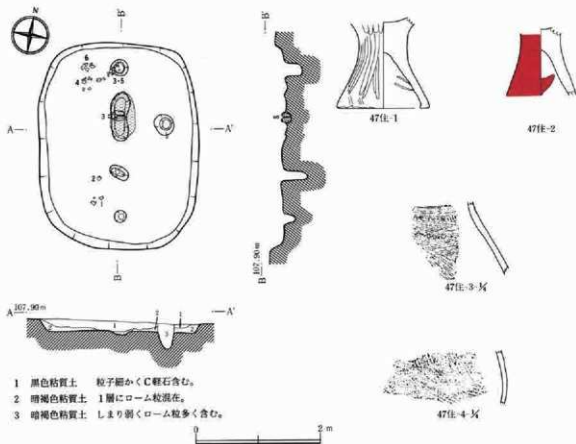
器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
壺 弥生土器	床より18cm 互残存	67住 -1	口径 26.0	胴部縦く内反。胴部大きく外反。口縁部鋭。	外：横指ナデ。内：横指ナデ。口唇部縄文押捺。	砂粒含む。良好。鈍い橙色。	外面黒斑。
壺 弥生土器	覆土 互残存	67住 -2	口径 18.0 胴径 16.8	最大径胴上部。口縁部鋭。	外：指ナデ後施文。内：横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。良好。硬質。橙褐色。	胴部黒斑。
壺 弥生土器	床より14cm 互残存	67住 -3	————	胴部縦く内反。	外：ヘラケメ。内：指ナデ後。一部ヘラケメ。輪横痕。	砂粒少量含む。良好。硬質。	色：鈍い黄橙。内外面黒斑。
台付 壺 弥生土器	床より13cm 互残存	67住 -4	口径 10.0 胴径 8.0 底径 5.6 器高 9.1	最大径胴上位にあり。口縁径はさらに大きい。台部は八字状に開く。	外：横指ナデ。内：横ハケ調整後。横ヘラミガキ。台部外面横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。普通。黒褐色。	外面煤付着。
壺 弥生土器	床より4cm	67住 -5	胴径22.5	最大径胴中央やや下方。僅かに内傾し胴部に至る。	外：ヘラミガキ。内：ハケ調整後。指ナデ。底部輪横痕。	砂粒少量含む。良好。硬質。	色：鈍い黄橙。胴部黒斑。
壺 弥生土器	床より10cm 互以下残存	67住 -6	胴径 24.2	————	外：ヘラケメ。内：ヘラケメ。	小砂粒少量含む。普通。鈍い黄橙色。	内面煤付着。
壺 弥生土器	床より18cm	67住 -7	————	胴部やや内反。口縁部外反。	外：横指ナデ。内：横指ナデ後横ヘラミガキ。	小砂粒僅か含む。良好。硬質。	色：鈍い黄橙色。
壺 弥生土器	床より18cm	67住 -8	————	胴部やや内反。口縁部縦く外反。	外：横指ナデ。内：ヘラミガキ。	小砂粒僅か含む。良好。鈍い赤褐色。	————

47号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。規模は長軸を南北にもち、短軸2.3m、長軸3.0m、主軸N14°Wを測る。平面形は調整りをもつ隅丸形を示す。覆土は灰白色・明褐色軽石とローム粒を含む黒色土である。

壁は急傾斜で、床面はローム層の地山をそのまま生活面とし、全体に踏み固められて硬い。柱穴は南北の長軸に沿って3本検出された。炉は住居の中央北側に設置する。石を境に南北にそれぞれ直径40cm、深さ5cmの円形に掘りくぼめて炉とする。全体に焼土が多く、炉の中心部は強く焼けている。

遺物は台付甕(1)、高坏(2)が南側から、甕(3~6)が炉の北側から出土し、他に覆土中に弥生土器小破片約50片が見られた。(新井)



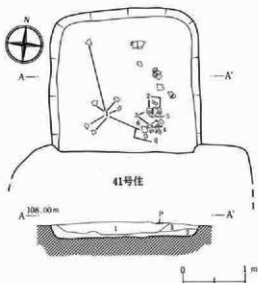
第103図 47号住居址平面断面図



第104図 47号住居址出土遺物図

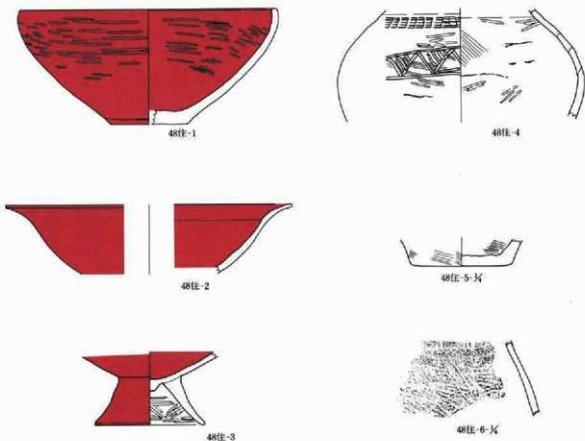
第50表 47号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
台付 弥生土器	床より10cm 台部	47住 -1	底径 7.5	台部八字状に開く。	外：ヘラミガキ。 内：横指ナデ。	砂粒含む。普通。 鈍い赤褐色。	外面煤付着。
高环 弥生土器	床より7cm 脚部	47住 -2		脚部八字状に開く。	外：赤色塗彩後縦ヘラミガキ。 内：横指ナデ。	砂粒多く含む。 良好。硬質。赤褐色。	
甕 弥生土器	床より7cm 胴部	47住 -3			外：ヘハケ調整後磨消し施文。 内：横ハケメ、頸部横指ナデ。	砂粒含む。良好。 硬質。赤褐色。	
甕 弥生土器	床より6cm 胴部	47住 -4			外：ヘハケメ。 内：横ハケメ。	砂粒含む。良好。 硬質。赤褐色。	黒斑あり。
甕 弥生土器	床より7cm 胴部	47住 -5			外：ヘハケ調整後縦ヘラミガキ。 内：横ハケメ。	砂粒含む。 良好。褐色。	
甕 弥生土器	床より10cm 胴部	47住 -6			外：横指ナデ。 内：横ハケメ。	砂粒多く含む。良 好。硬質。赤褐色。	



- 1 黒色粘質土 C軽石混じえ、粒子細かくしめる。
- 2 暗褐色粘質土 1層にローム粒含む。
- 3 褐色粘質土 ローム粒塊多く含む。軟かい。

第105図 48号住居址平面断面図



第106図 48号住居址出土遺物図

48号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土で確認された。規模は、南辺で41号住により切られているため確定されないが、走向N14°Wの長軸を南北にもち短軸2.2mを測る。平面は胴張りをもつ隅丸方形の可能性ある。覆土は明褐色軽石とローム粒を含む黒色土である。

壁は緩傾斜で、床面はローム面そのまままで軟弱である。遺物は西側に散って鉢(1)、東側から壺(4)、高坏(2・3)、甕(5・6)がやや浮いた状態で出土した。他に覆土中には弥生土器小破片約60片が見られた。

(新井)

第51表 48号住居址出土遺物観察表

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
鉢 弥生土器	床より10cm 片残存	48住 —1	口径 20.6 底径 6.2 器高 9.1	大きく開き、口唇部内反。	内外面赤色塗彩後、横へラミガキ。	小砂粒含む。 良好。 内外面赤色。	
高 環 弥生土器	床より12cm 坏部	48住 —2	口径 23.0	内反しながら大きく開き、端部は外反。	内外面赤色塗彩後、へラミガキ。	小砂粒含む。 良好。	色：内外面赤色。
高 環 弥生土器	床より12cm 脚部	48住 —3	底径 8.8	台部短く八字状に開く。	坏部を脚部に挿入。坏部内外面・脚部外面赤色塗彩後、へラミガキ。	砂粒含まず。 良好、軟質。 赤色。	
壺 弥生土器	床より16cm 胴部	48住 —4	胴径 19.8	—	外：横へラミガキ。内：横指ナゲ後、横へラミガキ。	砂粒含む。 普通。鈍い橙色。	
壺 弥生土器	床より15cm 底部	48住 —5	底径 10.6	—	内外面指ナゲ。	砂粒含む。 良好、赤褐色。	
甕 弥生土器	床より19cm	48住 —6	—	—	外：斜ハケズ。内：横指ナゲ後横へラミガキ。	砂粒含む。 普通。灰色。	外面僅存。 磨滅。

49号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘土面で確認された。17号溝と重複関係にあり本住居の東半分が切られている。北側には69号住、西側には51・65・67号住が隣接している。規模は西辺約5m、北辺約3.5mの大きい隅丸長方形で、主軸はN22°Wを測る。

覆土は黒色土にローム粒子を含む硬く締った層で、床面近くがより一層締っている。壁はやや傾斜をもち軟弱。床面は全体がローム塊を多量に含む黒色土で、堅緻である。柱穴は主柱穴4本に、南壁近くに2本の計6本検出。北壁近くにある主柱穴は炉を中央にはさむように位置し、南壁寄りの主柱穴は残りの2本に接して位置する。主柱穴は大形円形、底面に段差がある小さなピットをもつものがある。残りの2本は小形円形だが、主柱穴4本より深さがある。

炉は住居中央北寄りに位置する。焼土・灰を含む楕円形の僅かな落ち込み。炉内南側に細長石が1個出土する。貯蔵穴は検出されない。

遺物は住居内全体に散らばって出土。台付甕(1)は北壁近く床面より上面において出土。壺口縁部(4)は北西壁近く、高環坏部(6)は南側近く、甕口縁部(3)は3箇所散らばっており、台付壺台部(2)は(6)の北側に隣り合う。緑泥片岩(11・12)は使用痕あり、高環坏部(5)は住居中央より出土する。ほとんどの遺物は床面から10～20cm位上面より出土する。覆土からも約500片の破片が出土している。

本住居は深い17号溝に切られているため、床面は半分しか検出されないが、かろうじて柱穴は17号溝の底面より深いため検出された。Ⅲ区84・90号住と柱穴の数・炉の位置・主軸の方向が似ており共通点が見られる。

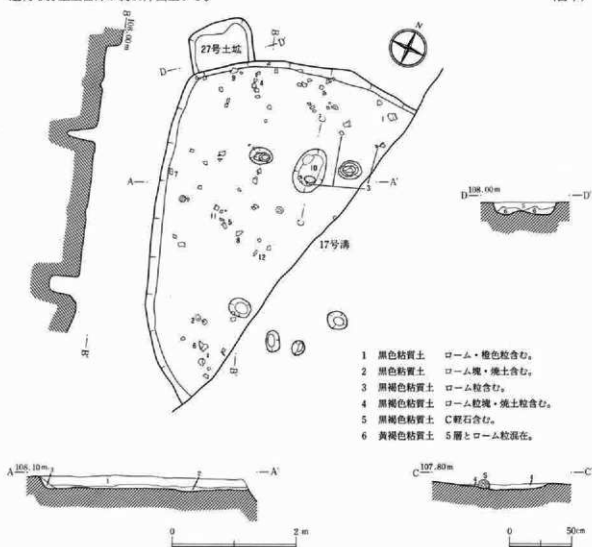
(宮下)

27号土坑 (IV区)

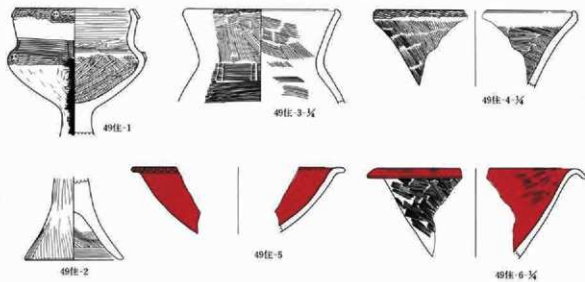
本土坑は49号住と同一面で確認され、重複関係にある。49号住が南側を切っている。規模は長辺0.8m、短辺0.5m、深さ0.2mをとり主軸N43°Wを測る。覆土は黒色土に浅間C軽石を含み、49号住と時代が近い。

遺物も弥生土器片が約30片出土する。

(宮下)



第107図 49号住居址、27号土坑平面断面図



第108図 49号住居址出土遺物(1)



第109図 49号住居址出土遺物(2)

第52表 49号住居址出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
台付壺 弥生土器	床より3cm 瓦残存	49住 —1	口径 9.6 胴径 11.0	最大径胴上部, 口唇部 内反。	外: 胴部ヘラケズリ後, 指ナ デ。口縁部横指ナデ。 内: 横ヘラミガキ。	砂粒・小石含む。 普通。 褐色。	外面煤付着。
台付壺 弥生土器	床より3cm 台部のみ	49住 —2	底径 7.7	台部八字状に開く。	外: 縦ハケメ 内: 横ハケメ	小砂粒含む。 良好。褐色。	外面煤付着。 磨滅。
壺 弥生土器	床より6cm 口縁部	49住 —3	口径 16.3	口縁部, く字状に開く。	外: 口縁部横ハケ後縦ハケメ。 内: 横指ナデ後横ハケメ。輪 横痕。	砂粒を含む。 良好。硬質。 褐色。	外面全面煤付 着。
壺 弥生土器	床より5cm 口縁部瓦残存	49住 —4	口径 21.1	口縁部は大きく外反し, 口唇部は立ち上がる。	外: 縦ハケメ 内: 横ハケメ	砂粒を多く含む。 良好。硬質。	色: 黄褐色。
高 弥生土器	床より5cm 坏部瓦残存	49住 —5	口径 16.8	坏部内反しながら, 大 きく開く。端部は外反。	内外面赤色塗彩後, 横ヘラミ ガキ。	砂粒を含む。 良好。硬質。	内外面赤色塗 彩。
高 弥生土器	床より3cm 瓦残存	49住 —6	口径 23.0	坏部やや内反しながら 開く。端部大きく外反。	外: 横ハケメ。内: 赤色塗彩 後横ヘラミガキ。輪横痕。	小砂粒を多く含む。 普通。硬質。	色: 褐色。 外面煤付着。
壺 弥生土器	床より8cm 口縁部	49住 —7	——	口縁部短く, く字状に 外反。	外: 横指ナデ。 内: 横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 不良。褐灰色。	外面織文押捺。
壺 弥生土器	床より2cm 胴部	49住 —8	——	——	外: 斜ハケメ。内: 横ヘラミ ガキ。輪横痕。	砂粒を少量含む。 良好。黒褐色。	外面全面煤付 着。
壺 弥生土器	床より4cm 胴部	49住 —9	——	——	外: 横指ナデ。 内: 横指ナデ。	砂粒を含む。 普通。明褐色。	——
壺 弥生土器	床より2cm 胴部	49住 —10	——	——	外: 斜ハケメ。内: 横ハケメ 輪横痕。	砂粒を含む。 良好。鈍い褐色。	——

第53表 49号住居址出土遺物観察表 (2)

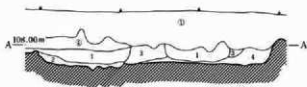
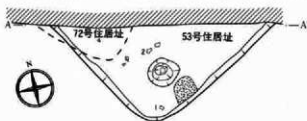
器種	出土遺存状態	番号	法量	成形加工・使用痕・形態の特徴	石材	備考
不明 石製品	床より4cm	49住 -11	—	棒状。端部に使用痕。	緑泥片岩	
不明 石製品	床より6cm	49住 -12	—	—	緑泥片岩	

53号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。北面側で72号住に切られ、西側で81号住、南側で66・70号住に近接する。規模は北側が調査範囲外にあるため確定されない。

壁は緩傾斜で、床面はローム面に2～3cm粘土を張り、全面を張り床し生活面とする。柱穴は南西隅に深さ50cmの円形プランで設け、南壁から柱穴にかけて粘土を張った厚さ約3cmの帯を検出した。

遺物は要(1・2)が出土し、他に覆土中から弥生土器小破片約20片が見られた。(新井)



- 1 褐色粘質土 C軽石多く含む。
 2 暗褐色粘質土 ローム粒塊・灰白色軽石含む。
 3 暗褐色粘質土 C軽石・炭化・焼土粒含む。粒子細かい。
 4 黒色粘質土 灰色軽石含む。粒子細かい。

第110図 53・72号住居址断面図

72号住居址 (IV区)

本住居址は53号住の土層堆積状況精査時に、土層面より確認された。掘り込み面は第④層暗褐色粘質土面で、53号住を切断している。壁高は約30cmあるが、平面的には全くプランを検出できなかった。53号住覆土中に10数片混在する須恵・土師器片が本住居のものと思われる。(新井)



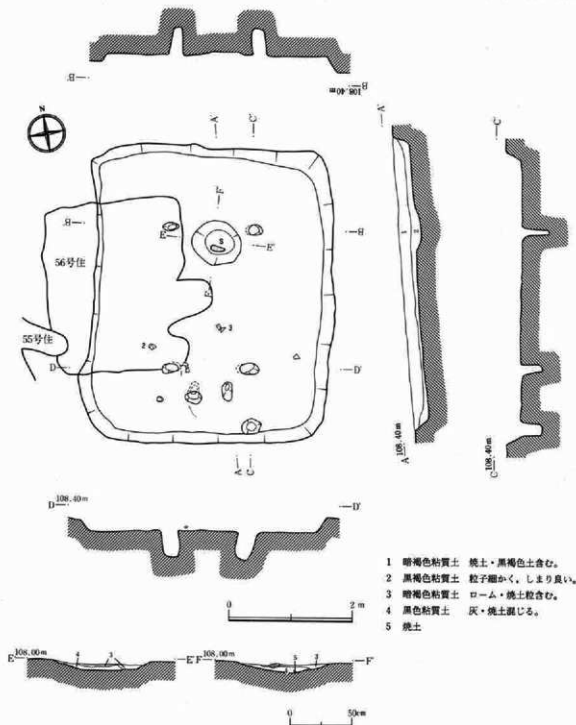
第111図 53号住居址出土遺物図

第54表 53号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
要 弥生土器	床より4cm 肩部	53住 -1	—	—	外：縦ハケメ。波状文施文後、 胴部指ナデ。内：輪襷痕。	砂粒を含む。 良好。褐色。	外面煤付着。
要 弥生土器	床より10cm 胴部	53住 -2	—	—	外：縦ハケメ。 内：ハケ調整後指ナデ。	砂粒を含む。 良好。鈍い褐色。	外面煤付着。

57号住居址 (IV区)

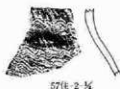
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面において確認された。本住居埋没後56号住がつくられている。主軸はN9°Eで、4.2×3.5mの長方形を呈する。



第112図 57号住居址平面図

壁はやや傾斜をもって立ち上がり、ローム層を掘り込んだそのままの面を床面として使用している。主柱穴は4本、全て長円形を呈している。また補助柱穴が主柱穴の外側、炉址と反対側の短辺寄りに2本ある。同方向の南壁に接してピットがあるが補助柱穴と考えられる。炉址は柱穴間や内側に存在し、円形で皿状の掘り込みである。

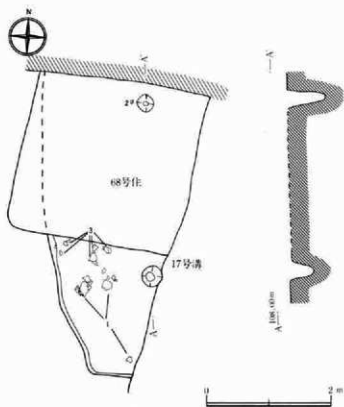
出土遺物は床面附近より高坏(1)、やや浮いて壘(2・3)の破片が出土し、他に覆土中から小破片として弥生土器片約250片が見られた。(飯塚)



第113図 57号住居址出土遺物図

第55表 57号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高坏 弥生土器	床より5cm 脚部	57住 -1	—	脚部八字状に開く。	外：赤色塗彩後縦ヘラミガキ。内：横指ナデ。	砂粒・小石を含む。外面赤色塗彩。良好，硬質。	
壺 弥生土器	床より13cm 肩部	57住 -2	—	—	外：縦ハケメ。内：横ハケ後、横ヘラミガキ。	砂粒を含む。良好。淡黄褐色。	
壺 弥生土器	床より15cm 口縁	57住 -3	—	—	外：指ナデ。内：横ヘラミガキ。	砂粒・小石を含む。普通。黒色。	外面塚付着。



第114図 69号住居址平面図

69号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。68号住，17号溝と重複関係にある。

68号住に北側を切られ，17号溝に東側を切られている。南側で49号住に近接する。

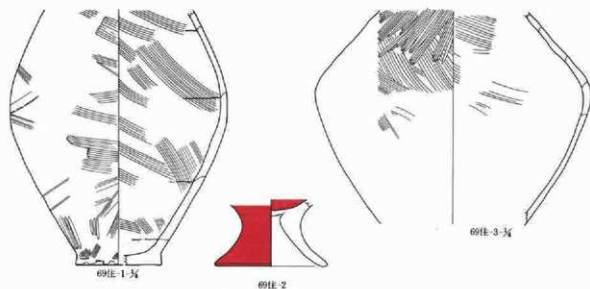
規模は南西角部分しか検出されず不明。主軸はN8°Wを測る。壁は残りの良い西側ではほぼ垂直に近く，床面はローム面で軟弱，緩やかな凹凸が見られる。柱穴は掘り方で1本検出，68号住の掘り方で1本，計2本検出される。炉・貯蔵穴は不明。

遺物は検出された面全体に散存する。査胴～底部(1)が破片で散らばって出土。高坏脚部(3)は68号住掘り方の柱穴際より出土。査胴部(2)は68号住際より出土。68・69両住居覆土中より併せて110片の弥生土器小破片が見られた。

本住居は検出された部分が少なく全体を

把握できない。重複関係にある68号住・17号溝より時代が古い遺溝である。

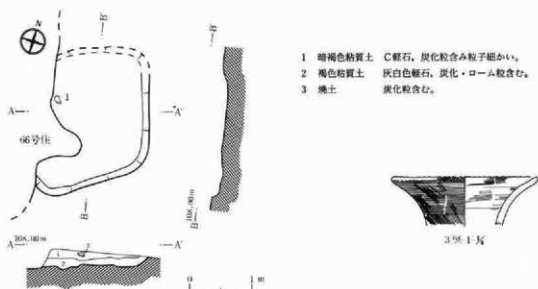
(宮下)



第115図 69号住居址出土遺物図

第56表 69号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 弥生土器	床より2cm 割〜底部	69住 -1	胴径 23.2 底径 9.0	胴最大径中央。	内外面斜ハケメ。	砂粒を含む。 良好。褐色。	外面磨滅、黒 斑。
壺 弥生土器	床面直上 割部	69住 -2	胴径 22.0	胴最大径中央。	外：上半ハケ調整後、ヘラミ ガキ。下半横指ナデ。 内：横指ナデ。輪横痕。	砂粒を含む。 良好。 鈍い橙色。	外面黒斑。
高 弥生土器	床より3cm 脚部のみ	69住 -3	底径 9.0	脚部短く、八字状に開 く。	外：赤色塗彩後、ヘラミガキ。 内：横指ナデ。坏部貼付。	砂粒を含む。 良好、硬質。赤色。	



第116図 3号壺穴遺構平面及出土遺物図

3号竪穴状遺構 (IV区)

本遺構は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、西辺で66号住と重複し、53号住と隣接する。規模は66号住により切られているため確定されないが、長軸を東西にもち、長軸1.7mを測る。平面形は小形方形を示す。覆土は、ローム粒と炭粒を含む黒色土である。

壁は緩傾斜で、床面はローム面そのままで軟弱である。遺物は壺口縁片(1)がかなり浮いた状態で出土し、その他に弥生土器片約15片が覆土中に見られた。(新井)

第57表 3号竪穴状遺構出土遺物観察表

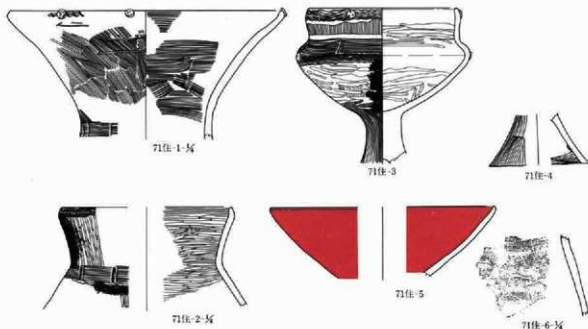
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 弥生土器	床より20cm 以下残存	3壺 -1	口径 15.4	口縁部大きく外反。	外：縦ハケ調整後横ハケメ。 内：横ハケ後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好。黄褐色。	口唇部破文。 押捺。

71号住居址 (IV区)

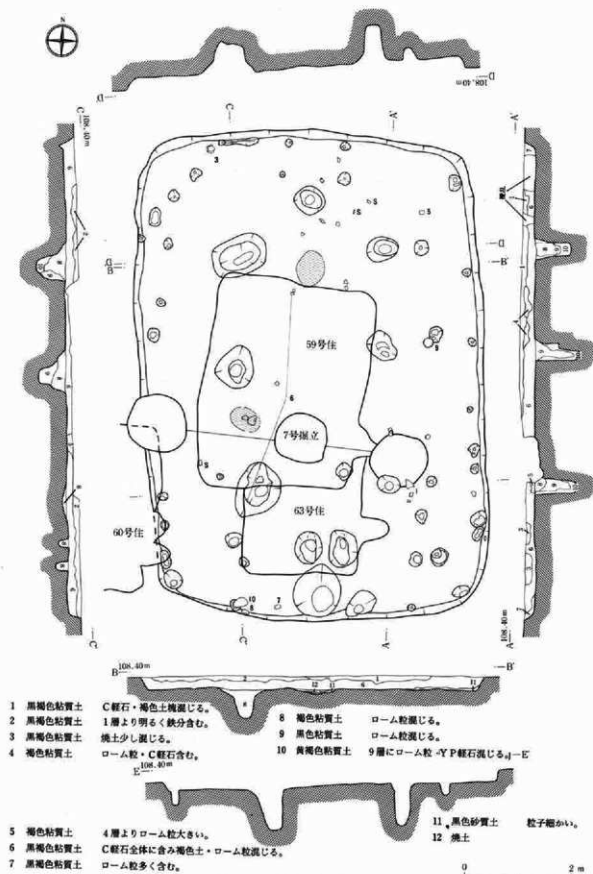
本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。59・60・63号住、7号掘立が重複し、東辺側に61号住が隣接する。規模は東辺8.2m、南辺5.9m、西辺7.9m、北辺5.9mの大形で、主軸N6°Wの隅丸方形を呈する。壁は緩傾斜で高さ約25cm。床面は黄褐色粘質土を踏み固め雨が僅かに低い。柱穴は対の位置をなす主柱穴が7本、入口状施設と思われる南辺際の柱穴が3本、他に壁柱穴が37本ある。入口状施設と思われる柱穴は対の位置をなし外方に傾く。壁周溝は北辺で一部見られたが、壁際は全体的に少し低い。

炉址は2箇所確認された。中央北寄りと西寄りとともに床面を浅く円形に掘りくぼめている。西寄りのものは自然石による縁石があり、焼土の量も多い。

遺物は住居内全体から多量に出土し、台付壺(3)、壺(1)、鉢(5)などがあり、これに平板状の台石(9・10)と打痕・擦痕をもつ鏃(7・8)が伴出する。この他に覆土中より弥生土器小破片約2,000片が見られた。(女屋)

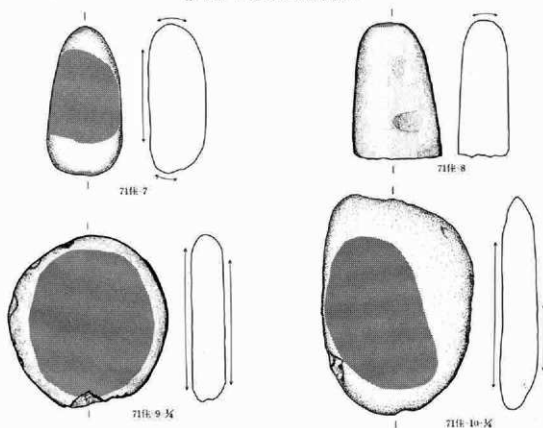


第117図 71号住居址出土遺物図(1)



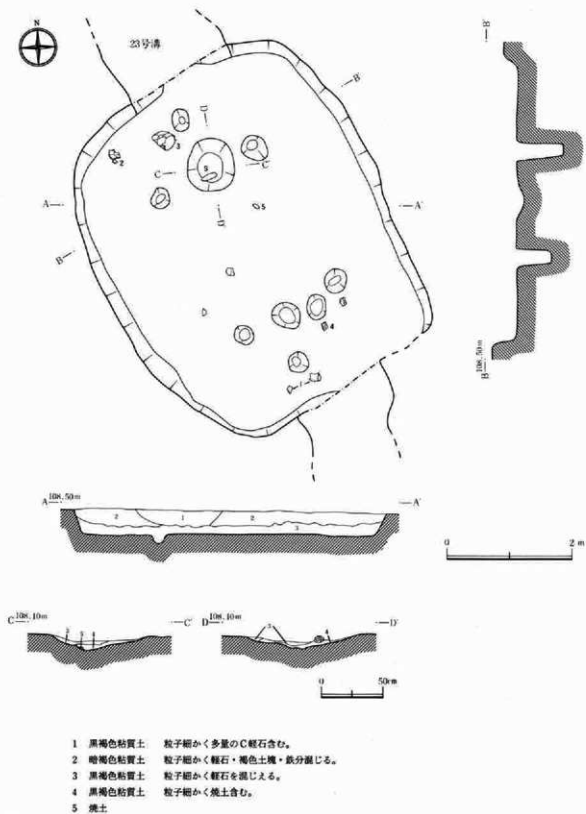
第118図 71号住居址平断面図

第119図 71号住居址出土遺物(2)



第58表 71号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	床より3cm	71住-1	口径 29.0	口縁部大きく外反	外：縦ハケメ。 内：横ハケメ。	小砂粒を含む。 普通。灰黄色。	内外面磨減。
壺	覆土	71住-2	口径 18.0	口縁部やや外反、口唇部内反。	外：縦ヘラミガキ。 内：横ヘラミガキ。	砂粒を含む。普通。 鈍い黄褐色。	外面煤付着。
台付壺	床より2cm	71住-3	口径 11.9 胴径 14.0	胴径大径上部。口縁直立。口唇内反。	外：縦ハケ調整後、頸部指横ナダ。胴下半横ヘラミガキ。 内：指ナダ後、横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 普通。 黒褐色。	外面煤付着。
台付壺	覆土 台部	71住-4	底径 8.0	脚部八字に開く。	外：縦ハケメ。 内：指ナダ。輪横直。	砂粒含む。良好。 硬質。暗赤褐色。	外面煤付着。
鉢	床より9cm	71住-5	—	—	内外面赤色塗彩後、外：縦ヘラミガキ。内：横ヘラミガキ。	砂粒少量含む。 良好。硬質。赤色。	
壺	床より4cm	71住-6	—	—	外：斜ハケ調整後、指ナダ。 内：横ハケメ。	砂粒を含む。良好。 鈍い橙色。	
不明石製品	床より5cm	71住7	長さ 11.8	—	先端部敲打痕。	—	
不明石製品	床より2cm	71住8	厚さ 3.9	—	先端部敲打痕。上面磨減痕。	—	
不明石製品	床より4cm	71住9	幅 17.2	—	表面が磨かれている。	—	
不明石製品	床より4cm	71住10	長さ 22.6	—	表面が磨かれている。	—	



第120図 84号住居址平断面図

84号住居址 (III区)

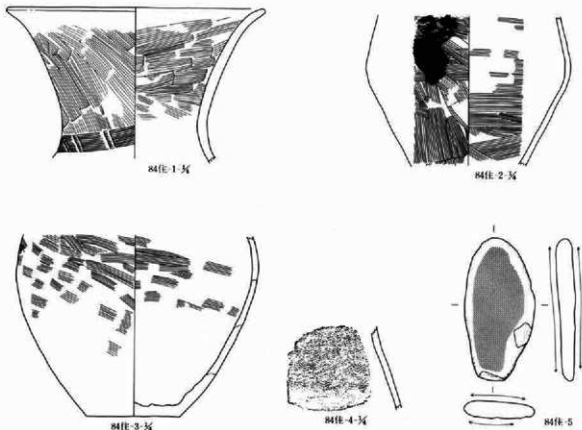
本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。23号溝と重複しており、南側に77号住、35・36・37号土坑が近接する。23号溝との新旧関係は土層断面による覆土の相違から本住居の方が古い。しかし大きな時間差はないものと考えられる。規模は長辺約5.4m、短辺約4.3mであり、平面形はやや胴張りの隅丸長方形である。主軸はN35°Wである。

壁は比較的明瞭に確認でき立ち上がりは約40cmを測るが、南東角付近は風倒木のためやや不明瞭である。床はローム層中に構築されており、ローム塊と黒褐色土が混合した薄い張り床がある。床面は非常に硬く良好な床であるが、風倒木の影響を受けた南東角付近はやや軟弱である。主柱穴は4本で、各々底径は約15~20cmであり床面からの深さは約55~75cmである。主柱穴の他、北側の柱穴の中間点から壁寄り約90cmの所に、底径約15cm、床面からの深さ約30cmのビットがあり、補助柱穴の可能性がある。また南側の柱穴の間に2基のビットがあるが、浅く皿状で柱穴とは考えられない。周溝はない。

炉は北側主柱穴の中間にあり、長軸90cm、短軸80cmの楕円形をしており、掘り込みの深さは約10cmである。炉の中央やや南寄りに石が1個残っており、石囲炉と推定される。炉中央部からは厚さ約10cmの焼土層が検出された。貯蔵穴はない。

遺物は壺(4)、壺(1・2・3)などが床面近くから出土している。他に覆土中に弥生土器小破片約400片が見られた。

(井川)

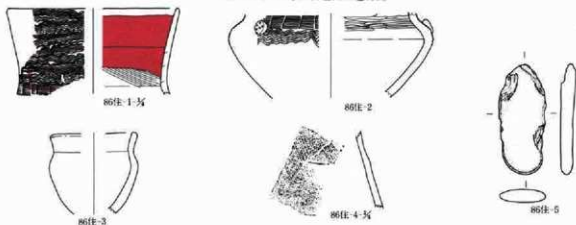


第121図 84号住居址出土遺物図

第59表 84号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕	床より10cm 口縁部	84住 —1	口径 20.8	口縁部緩やかに開き、 端部開きが大きい。	外：↑ハケ調整後、端部横指 ナデ。内：ハケメ。	砂粒少量含む。良 好、硬質、鈍い橙色。	
甕?	床より2cm 胴部	84住 —2	胴径 22.0	中位最大径、断面近く 字状。	外：上半部斜ハケメ、下半部 縦ハケメ。内：横ハケメ。	砂粒含まず。 不良、黄灰色。	外面煤付着。
甕	床より2cm 胴-底部	84住 —3	胴径 25.5	最大径胴上半部。	外：上部斜ハケ調整後指ナデ 下部指ナデ。内：横指ナデ。	砂粒多く含む。 普通、鈍い赤橙色。	外面黒斑、煤 付着。
甕	床より4cm 肩部	84住 —4	—	—	内外面横指ナデ。	砂粒含む。良好。 鈍い橙色。	黒斑あり。
不明石製品	床より1cm	86E5	長さ 11.3	—	表裏面磨滅痕。	明緑灰色。	緑泥片岩。

第122図 86号住居址出土遺物図



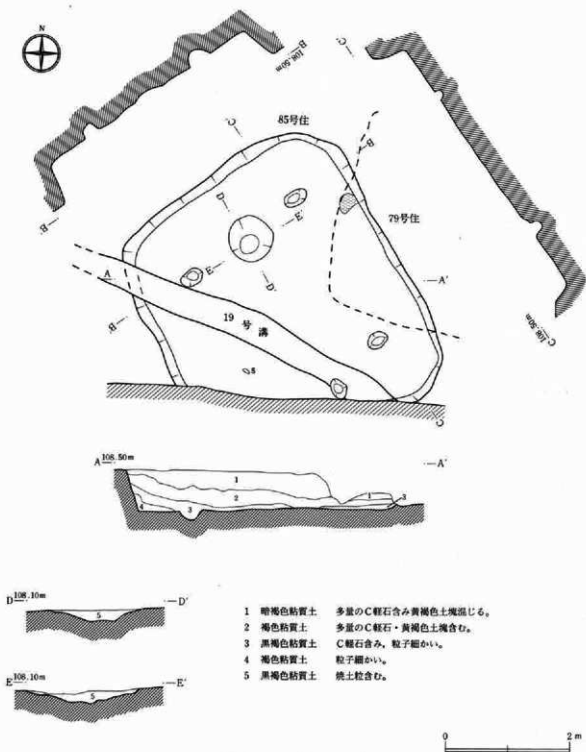
第60表 86号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕	覆土 口縁部	86住 —1	—	口縁部やや外反。	外：横指ナデ。内：横ハケ調 調整後、横指ナデ、輪横痕。	砂粒含む。 良好、硬質、赤褐色。	内外面赤色塗 彩。
甕	覆土 胴部	86住 —2	—	最大径胴上部。	外：斜ハケ調整後、指ナデ。 内：横ヘラミガキ。	砂粒含む。普通。 暗赤褐色。	内外面黒斑あ り。
小形甕	覆土 片残存	86住 —3	—	肩部柄口縁外反。	手捏成形、内外面指ナデ。	粒子細かい。普通。 黄灰色。	内外面煤付着。
甕	覆土 肩部	86住 —4	—	—	外：縦ハケメ。 内：横ハケメ。	砂粒多く含む。 良好、硬質。	色：鈍い黄橙 色。
不明石製品	床面直上	86E3	長さ 8.7	扁平で長円形。	両面すべすべしている。	淡緑色。	

86号住居址(Ⅲ区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。79・85号住、19号溝と重複する。79・85号住との新旧関係は、覆土の相違からとも本住居の方が古く、19号溝との関係も同様である。

規模は長辺約4.5m、短辺約3.8mで、平面形は隅丸長方形である。主軸はN36°Wである。覆土上層と中



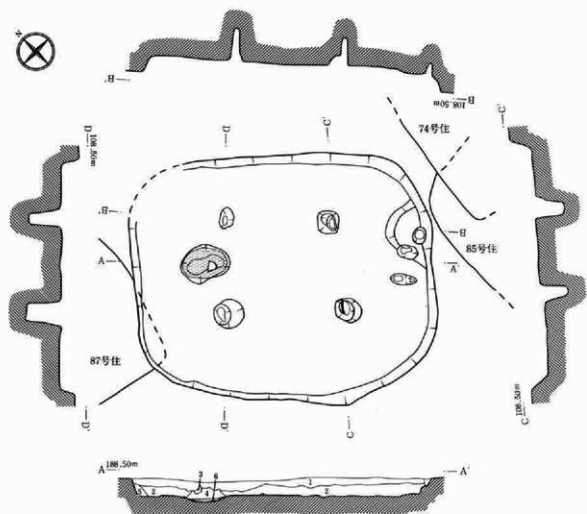
第123図 86号住居址平面図

層は多量の浅間C軽石を主体としレンズ状に堆積している。壁の残存状態は良好であり、調査範囲外になる南西角附近・79号住と重複する部分を除いて、約60cmのほぼ垂直な立ち上がりが確認できた。床はローム層中に構築されており硬く良好な床である。主柱穴は4本であると推定できるが、南西側の柱穴は調査範囲外のため確認できなかった。各柱穴は底径18~22cmであり、床面からの深さは18~20cmである。その他、南側の柱穴の中間と推定できる位置にピットがある。周溝はない。

北側の柱穴の中間に炉と考えられる皿状のピットがあるが、炭化物・焼土は確認できなかった。東壁の北東角近くで焼土・炭化物が確認できたが掘り込みはない。貯蔵穴は不明である。

遺物は壺(1・2・3)、壺(4)などが覆土中より出土している。他に弥生土器小片破約200片が見られた。

(井川)



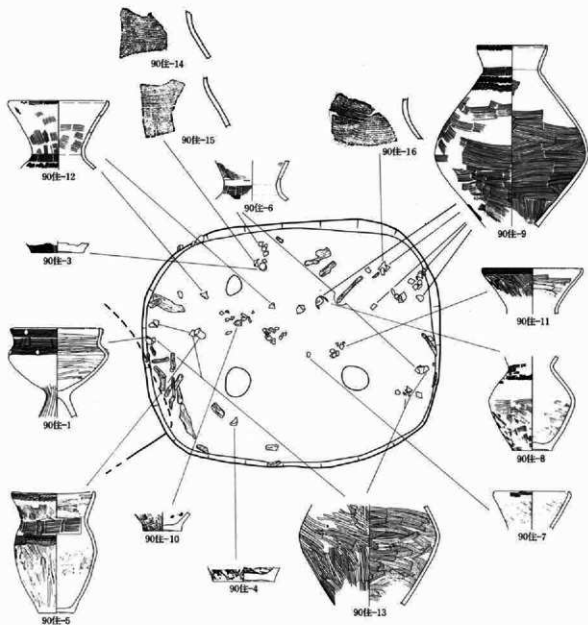
- | | | |
|---|--------|--------------------|
| 1 | 褐色粘質土 | ローム粒、鉄分、灰白色砂粒粉じり混。 |
| 2 | 褐色粘質土 | 1層より暗くしまる。 |
| 3 | 褐色粘質土 | 2層に焼土・炭化粒混じる。 |
| 4 | 黒褐色粘質土 | 炭化粒多く含む。 |
| 5 | 褐色粘質土 | ローム粒多く含む。 |
| 6 | 焼土 | 黒色土・ローム粒混じる。 |

第124図 90号住居址平面断面図



90号住居址(Ⅲ区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。87号住が重複し、74・85号住が東辺側に隣接する。規模は北東辺4.5m、南東辺2.9m、南西辺4.0m、北西辺2.8mで、隅丸方形を呈する。壁は緩傾斜で高さ約30cm。主軸はN49°Wを測る。床面は黄褐色粘質土を踏み固め平坦。柱穴は対の位置をなす主柱穴が4本、東



第125図 90号住居址遺物出土状態図

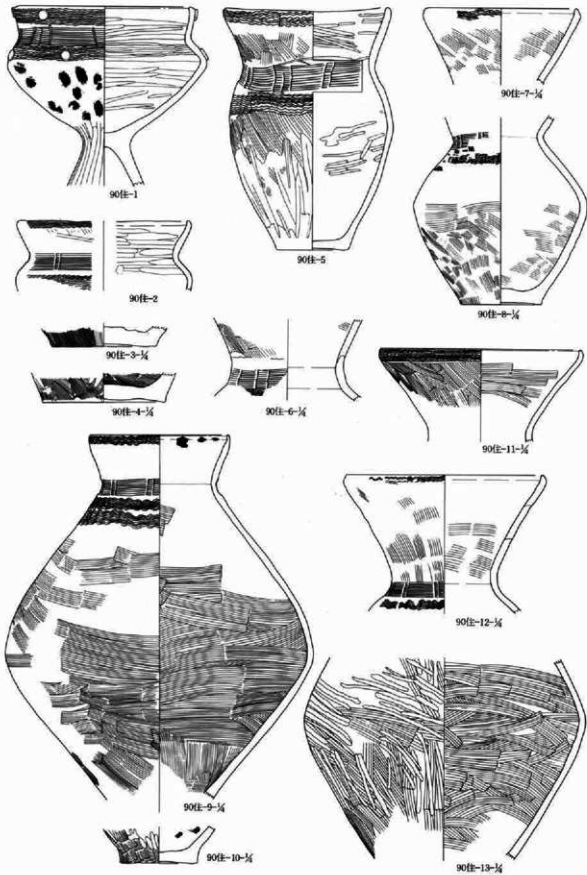
辺側で入口状施設と思われる少し外傾する柱穴が2本ある。

炉址は中央西寄りの位置に床面を浅く掘りくぼめた地床炉がある。長径80×短径60cmの楕円形で板状の割石が1個、中央を少し外れた位置にある。炉内は焼土・灰の互層状態が見られた。

遺物は住居内全体から多量に出土し、床直としては炉内に倒れ込んだ甕(5)、壺(13)、床面から少し浮いた状態で甕(3・4・8・9・12)、台付壺(1)などがある。他に覆土中から弥生土器小片約120片が見られた。

本住居は壁跡を中心として住居内から多量の炭化物及び一部の炭化材が出土し、かつ焼土を伴うことから焼失住居と判断される。

(女屋)



第126図 90号住居址出土遺物図(1)

第IV章 兩登遺跡



90住-14-写



90住-15-写



90住-16-写

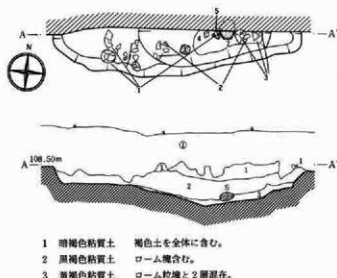
第127図 90号住居址出土遺物(2)

第61表 90号住居址出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
台付 甕 弥生土器	床より1cm 写、残存	90住 -1	口径 14.6 胴径 16.0	最大径は胴上部にあ り、口径よりも大きい。	外：輪横痕。胴部指ナゲ脚部 ヘラミガキ。内：一指ナゲ。	砂粒含む。普通。 鈍い赤褐色。	外面塚付着。
壺 弥生土器	覆土 片残存	90住 -2	口径 14.0	頸部、く字状に括れ。 口唇部立ちあがる。	外：横指ナゲ後、波状文・垂 状文施文。 内：横ヘラミガキ。輪横痕。	砂粒少量含む。 良好。 鈍い赤褐色。	外面塚付着。
甕 弥生土器	床より11cm 底部	90住 -3	底径 11.2	—	外：縦ハケメ。 底部内面指圧痕。	砂粒含む。 普通。黄褐色。	外面塚付着。
甕 弥生土器	床より4cm 底部のみ	90住 -4	底径 13.2	—	内外面ヘハケメ。底部ヘラケ ズリ。	砂粒少量含む。 普通。黄褐色。	外面一部塚付 着。
壺 弥生土器	床面直上 完存	90住 -5	口径 13.5 胴径 13.3 底径 6.0 器高 19.2	最大径は胴上部にあ り、口径とはほぼ同じ。	外：ハケ調整後、上部波状文・ 垂状文施文。下部ヘラミガ キ。内：指ナゲ後、ヘラミガ キ。輪横痕。	砂粒少量含む。 普通。 黒褐色～鈍い黄褐 色。	外面塚付着。
甕 弥生土器	床より13cm 写、残存	90住 -6	—	頸部大きく括れる。	外：輪横痕。口縁外面1ハケ メ。内面横ナゲ。	砂粒多く含む。 良好。鈍い黄褐色。	—
甕 弥生土器	床より17cm 口縁のみ	90住 -7	口径 16.0	口唇部内反。	外：ヘハケメ。 内：ヘハケメ。	砂粒多く含む。 普通。鈍い褐色。	No 8 と 接 合 か？
甕 弥生土器	床より1cm 頸部～底部	90住 -8	胴部 18.5 底部 8.7	最大径やや上方。口縁 頸部、く字状に外反。	外：胴中央ヘハケメ。↑ハケ メ。内：ヘハケメ。輪横痕。	砂粒を含む。普通。 鈍い褐色。	No 7 と 接 合 か？
甕 弥生土器	床より1cm 写、残存	90住 -9	口径 14.6 胴径 24.5	胴最大径中央。口縁は、 く字状に外反し口唇部 内反。	内外面ヘハケメ。 内：下部ヘハケメ。輪横痕。	砂粒多く含む。やや 不良。外：鈍い黄 褐色。内：黄灰色。	外面塚付着。
甕 弥生土器	床より16cm 底部	90住 -10	底径 8.0	—	外：ヘハケメ。 内：横指ナゲ。	砂粒少量含む。 良好。褐色。	外面塚付着。
甕 弥生土器	床より13cm 口縁のみ	90住 -11	口径 21.4	口唇部は立ち上がる。	外：ヘハケメ。 内：ヘハケメ。	小砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	一部 2 次 焼 成。
甕 弥生土器	床より9cm 口縁のみ	90住 -12	口径 21.0	口縁部、く字状に立ち 上がり。口唇部内反。	外：↑ハケメ。 内：ヘハケメ。輪横痕。	砂粒多く含む。 普通。鈍い褐色。	—
甕 弥生土器	床面直上 胴部	90住 -13	胴径 30.0	最大径胴部やや上方。	外：ヘハケメ。輪横痕。 内：ヘハケメ。	小砂粒を含む。 良好。暗褐色。	黒斑あり。
甕 弥生土器	床より17cm 胴部～底部	90住 -14	—	—	外：斜ハケメ。 内：磨滅のため不明。	小砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	—
甕 弥生土器	床より17cm 胴部～底部	90住 -15	—	—	外：縦ハケ後横方向帯描施文 内：ナゲ。輪横痕。	砂粒を含む。良好。 褐灰色。	—

第61表 90号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 弥生土器	胴部～胴部 床より15cm	90住 -16			内外面磨減のため不明。	砂粒・小石含む。 普通。鈍い橙色。	



第128図 不明遺構横断面図

不明遺構 (IV区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面において確認された。調査範囲外へと延びているため規模・性格などは不明である。

平面形は不整形を呈する。覆土は2層の黒褐色土からローム小塊を含み、下方に行くにしたがって量が多くなる。掘り方は傾斜をもっているが、場所により一定ではない。また底面には凹凸がある。

遺物はすべて破片であり、2層の黒褐色土中より出土している。不明石製品(7)の下が、やや深くなっており、左下から壺破片(1・2・5)さらにその下から不明石製品(6)が出土した。その他に約20片の弥生土器小破片が覆土中に見られた

(飯塚)

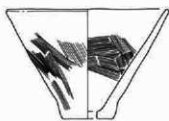
第62表 不明遺構出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 弥生土器	底面直上 口縁	不明 -1	口径 23.0	口縁部大きく外反。口 唇部立ち上がる。	外：↑ハケメ。 内：↑ハケメ。	砂粒少量含む。 良好。鈍い橙色。	
壺 弥生土器	底面直上 胴部	不明 -2		八字状に開く。	外：斜ハケメ。輪積灰。 内：↑ハケメ。	砂粒多く含む。 普通。鈍い橙色。	
甗 弥生土器	底より21cm 片残存	不明 -3	底径 5.3 器高 11.5	底部中央に円孔。直線 的に開く。	外：縦ハケ調整後、指ナデ。 内：横指ナデ。	砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	内外面黒灰。
壺 弥生土器	底より6cm 底部	不明 -4	底径 11.0	平底。	輪積灰。外：縦指ナデ。 内：横指ナデ。	砂粒を含む。普通。 鈍い橙色。	
壺 弥生土器	底面直上 胴部	不明 -5			外：↑ハケメ。 内：横ハケメ。	砂粒を含む。 良好。硬質。黄褐色。	
不明石製品	底面直上	測6	長さ 18.4	扁平	両面磨灰。		
不明石製品	底より10cm	測7	長さ 33.7	河原石	上面凹部。2箇所両面磨灰。		

第四章 兩亞遺跡



不明-1-片



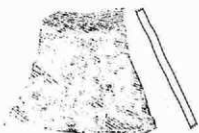
不明-2-片



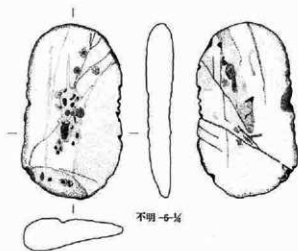
不明-2-片



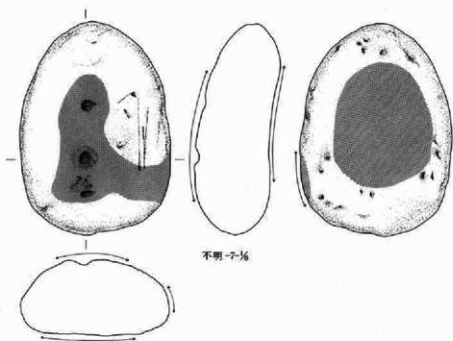
不明-4-片



不明-5-片



不明-6-片



不明-7-片

第129圖 不明遺構出土遺物圖

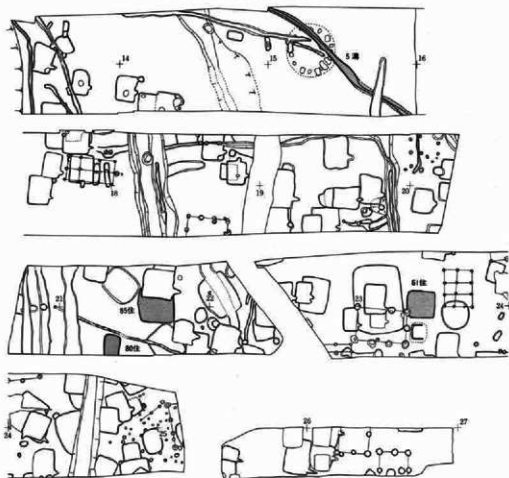
第3節 古墳時代の遺構

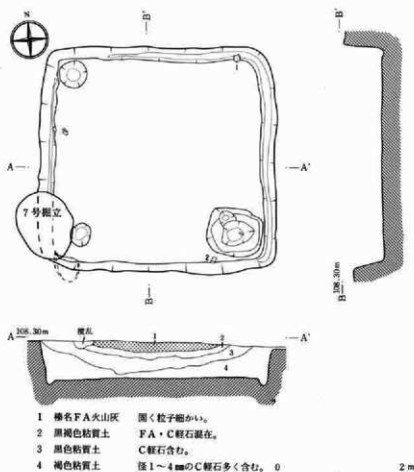
古墳時代と考えられる遺構は次のものがある。

住居址	計3軒	61号住, 80号住, 85号住
溝	計1条	5号溝

なお時期不明の4号溝及び古代と考えられる7号溝を本節に併記した。

第130図 古墳時代遺構分布概念図





第131図 61号住居址平断面図

- 1 棒名FA火山灰 固く粒子細かい。
- 2 黒褐色粘質土 FA・C軽石混在。
- 3 黒色粘質土 C軽石含む。
- 4 褐色粘質土 径1~4mmのC軽石多く含む。

61号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。7号掘立が重複し、東辺側に62号住、南辺側に83号住、西辺側に71号住が隣接する。

規模は東辺3.2m、南辺3.4m、西辺3.1m、北辺3.1mで方形を呈する。東・西辺の走向はN2°Eを測る。覆土には確認面で棒名FA火山灰、下位で浅間C軽石の混入した堆積状態が見られた。壁は垂直に近い、高さ60cmと極めて深いのが特徴である。床面は平坦で、浅間YP軽石層直上で大粒のロームを含む黒褐色土による張り床が見られた。壁周溝は南辺を除いて部分的に検出。柱穴は西辺に寄った位置で2箇所確認されたが浅い。

カマド及び炉址は確認され

なかったが、南辺際で焼土塊が見られた。貯蔵穴は東南隅で確認された。長さ90×70cmの方形を呈する。また南辺西隅で壁に付して水平に掘り込まれた袋状の小土壇がある。間口35cm、奥行35cmの規模をもつ。

遺物は少なく、貯蔵穴近く床面より埴(2)、北東角床近くより埴(1)、また掘り方覆土より甕(3)が出土した。その他に覆土中より石田川期土器小破片約20片、弥生土器片約130片が見られた。(女屋)



第132図 61号住居址出土遺物図

第63表 61号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴土師器	床より5cm ×残存	61住 -1	口径 底径 器高	9.4 4.3 4.1	やや大きめの底部から 坏部やや内反しながら 開く。	外：ヘラミガキ。 内：ハケ調整後ヘラミガキ。	砂粒を含む。 普通、硬質。 鈍い褐色。	外面黒斑あり。
小形埴土師器	床面直上 口径～胴部	61住 -2	口径 胴径	8.2 7.5	胴部球形、口縁部、く 字状に開く。	外：指ナゲ後、ヘラミガキ。 内：胴部横ハケメ後、口縁部 横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 普通。 鈍い褐色。	内外面黒斑あり。
煮土師器	掘り方覆土 口縁部	61住 -3	口径	16.2	口縁部に段を持ち、端 部は大きく外反。	外：斜ハケメ。 内：横ヘラミガキ、輪横砥。	砂粒を含む。 良好。鈍い褐色。	内外面磨滅。

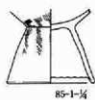
85号住居址 (III区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。74・86号住と重複し、79・90号住が近接する。74号住との新旧関係は覆土の相違と本住居の覆土中に74号住の床が構築されていることから、本住居の方が古い。86号住との新旧関係は覆土の相違により本住居の方が新しい。本住居の規模は一辺約4mで、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN0°である。

壁は攪乱で破壊されている東壁と西壁の一部を除き、明瞭に確認できた。残存状態は比較的良好であり、約40cmのほぼ垂直な立ち上がりが確認できた。床は、ローム塊を含む黒色土で構築されており、硬く良好である。主柱穴は4本で、それぞれ底径は約20cm、床面からの深さは約30～40cmである。東側の柱穴の中間東壁寄りに5基のピットがある。そのうち2基は壁と接していることとピットの集中から、出入り階段の可能性はある。周溝は攪乱部分を除き、壁に接して検出できた。全周するものと推定できる。周溝は底幅が約4～15cm、床面からの深さが約2～10cmである。

炉は中央部やや西寄りにある。長軸90cm、短軸75cmの楕円形を呈しており、掘り込みの深さは床面から約10cmである。炉からは炭化物層・焼土層が検出できた。貯蔵穴はない。

遺物は台付甕(1)が北西側床面近くから、同じく台付薬片(2・3・4)が覆土及び掘り方覆土から出土した。覆土中の小破片では石田川期土器約100片、弥生土器約130片が見られた。(井川)



85-1-Ⅰ



85住-2-Ⅰ

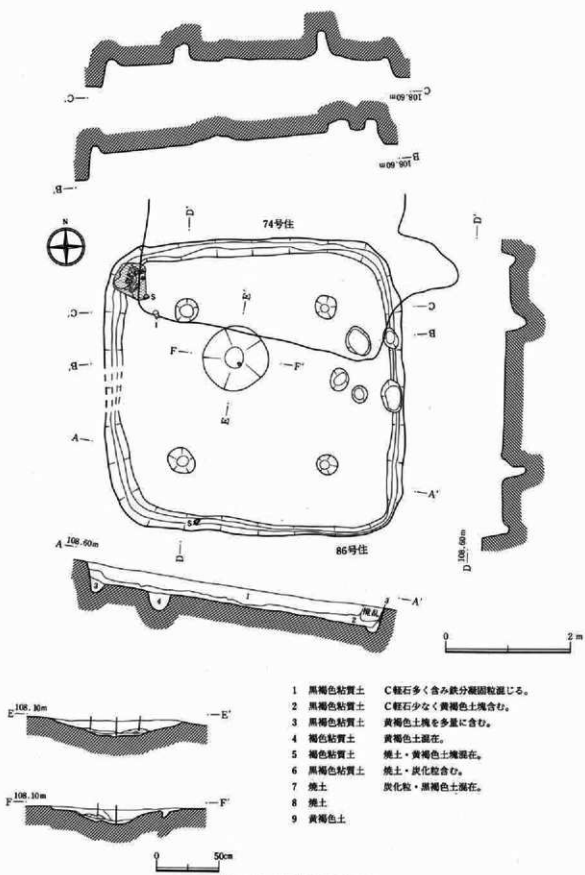


85住-3-Ⅰ



85住-4-Ⅰ

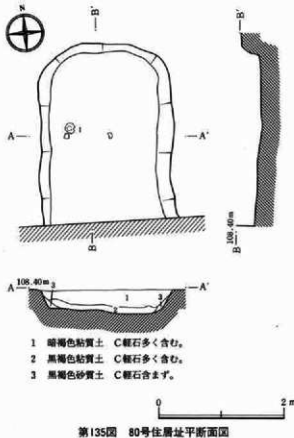
第133図 85号住居址出土遺物図



第134図 85号住居址平断面図

第64表 85号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
台付壺 土師器	床より7cm 台部	85住 -1	底径 9.5	台部内面折り返し。	外：指ナデ。 内：横指ナデ。	小砂粒含む。良好。 硬質。鈍い橙色。	内外面煤付着。
台付壺 土師器	掘り方覆土 台部	85住 -2	底径 8.5	台部内面折り返し	内外面横指ナデ。	砂粒多く含む。 良好。洗黄橙色。	外面煤付着。
壺 土師器	覆土 口縁部	85住 -3	口径 15.2	口縁部下段は雙線明瞭。上段は直立後外反。	外：口縁部横指ナデ。胴部斜ハケメ。内：横指ナデ。	砂粒含む。 良好。硬質。黒褐色。	外面煤付着。
壺 土師器	掘り方覆土 口縁部	85住 -4	——	——	外：斜ハケメ。	小砂粒含む。 普通。洗黄色。	内外面磨滅。



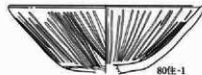
80号住居址 (Ⅲ区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。北側で19号溝と近接するが重複する遺構はない。規模は不明であるが、短辺は約1.7mである。平面形はやや不整形な隅丸長方形になると推定される。覆土は多量の浅間C軽石を含む黒褐色粘質土である。

壁の残存状態は比較的良好で、立ち上がりは約30cmを測る。しかし北壁付近は風倒木度でやや不明瞭である。床は黒色土中に構築されており軟弱である。柱穴・周溝は不明である。

炉址は調査範囲からは検出されず不明であり、貯蔵穴も不明である。

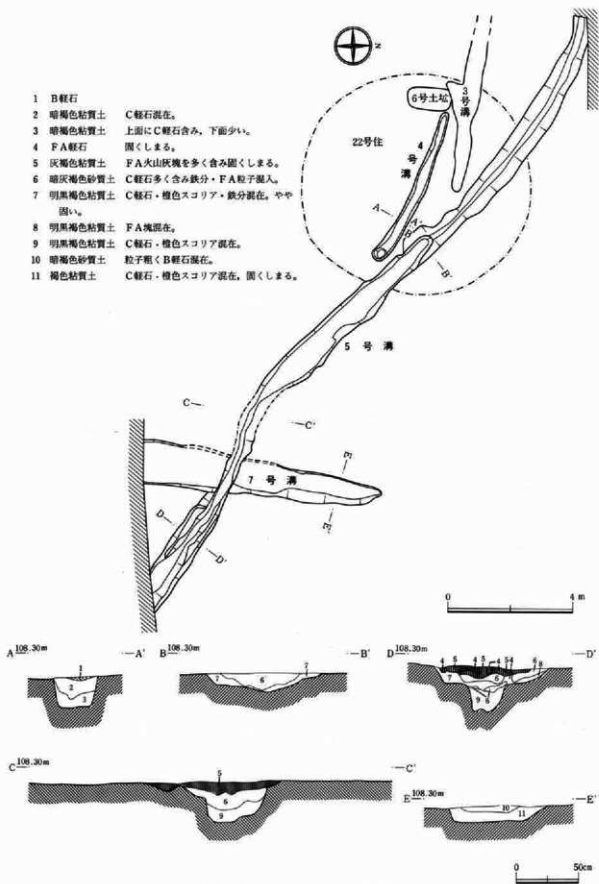
遺物は西壁床近くで高坏(1)などが出土しているが、他にはほとんどない。(井川)



第65表 80号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高坏 土師器	床より5cm 坏部	80住 -1	口径 15.7	坏部下方に壁をもち、大きく開く。	外：縦ヘラミガキ。内：横ヘラミガキ後、縦暗文施文。	砂粒少量含む。 良好。硬質。赤褐色。	内外面一部煤付着。

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1 B軽石 | |
| 2 暗褐色粘質土 | C軽石混在。 |
| 3 暗褐色粘質土 | 上面にC軽石含み、下面少い。 |
| 4 FA軽石 | 固くしまる。 |
| 5 灰褐色粘質土 | FA火山灰塊を多く含み固くしまる。 |
| 6 暗灰褐色砂質土 | C軽石多く含み鉄分・FA粒子混入。 |
| 7 明黒褐色粘質土 | C軽石・橙色スコリア・鉄分混在、やや固い。 |
| 8 明黒褐色粘質土 | FA塊混在。 |
| 9 明黒褐色粘質土 | C軽石・橙色スコリア混在。 |
| 10 暗褐色砂質土 | 粒子粗くB軽石混在。 |
| 11 褐色粘質土 | C軽石・橙色スコリア混在、固くしまる。 |



第137図 4・5・7号溝断面図

4・5・7号溝 (I区)

本遺構群は第⑥層の黒茶褐色粘土面で確認された。5号溝は7号溝に切られている。また4・5号溝は22号住を切っており、3号溝に近接している。4号溝は6号土塚とも近接している。

4号溝

N71°Wの走向をもち僅かに弧状のみながら直線的な約5mの長さの溝で、上幅30~40cm、底幅15~30cm、確認面よりやや上の海拔108.20mからの深さは30~40cmである。西から東にかけて深くなり、断面はU字形を呈する。遺物は土師器小破片2片が覆土中より見られただけである。

5号溝

北西から南東にかけてN69°W-N47°W-N61°Wのような走向で蛇行して走る。上幅は50~100cm、底幅は20~80cmで、断面は北西側がV字形、中央部がU字形、そして南東部がV字形に変化している。確認面よりやや上の海拔108.30mからの深さは北西側が15~20cm、段をもって下がる中央部以東は30~40cmほどで、全体では北西から南東にかけて低くなっている。覆土中層から上層には5~10cmの厚さの榛名FA火山灰の塊状堆積が見られる。

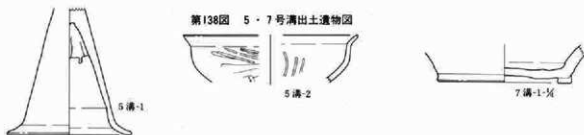
遺物は覆土中より土師器高坏脚部(1)、坏(2)が見られた。その他に須恵器1片・土師器4片の小破片が覆土中より検出された。

7号溝

本遺跡I区の溝群の中で唯一東寄りの方向をとる溝で、走向はN8°Eを測る。上幅は80~140cm、底幅は50~130cmで南にかけて幅が次第に拡がる。確認面よりやや上の海拔108.30mからの深さは15~30cmほどで、北から南にかけて低くなり断面はU字形を示す。

遺物は覆土中より須恵器壺底部(1)が唯一見られただけである。

(長谷部)



第66表 5・7号溝出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高坏土師器	覆土脚部	5溝-1	底径10.0	直線上に延び、下部は短く拡がる。	外：ヘラナデ。 内：上端に絞り痕、指ナデ。	砂粒含む。外酸化内還元。硬質。橙色。	内外面に鉄分付着。
坏土師器	覆土片残存	5溝-2		口縁外傾して内外面に横、体部内反。	口縁内外面横ナデ。 外：上位斜ヘラ研磨、下位ヘラケズリ。内：縦ヘラ研磨。	砂粒含む。硬質。酸化。暗赤褐色。	
須恵器	覆土底部	7溝-1	直径 14.0	高台断面方形、体部やや外反のみ。器壁厚い。	ロクロ成形(粘土紙巻き上後と思われる)。	やや多く砂粒含む。硬質。還元。緑灰。	

第4節 古代の遺構

古代と考えられる遺構は次のものがある。

住居址 計55軒 1号住, 2号住, 3号住, 4号住, 6号住, 7号住, 8号住, 10号住, 11号住, 13号住
 14号住, 15号住, 16号住, 17号住, 19号住, 23号住, 24号住, 25号住, 26号住, 27号住
 28号住, 29号住, 30号住, 31号住, 33号住, 34号住, 35号住, 36号住, 37号住, 41号住
 42号住, 44号住, 45号住, 46号住, 50号住, 51号住, 52号住, 54号住, 55号住, 56号住
 58号住, 59号住, 60号住, 63号住, 64号住, 66号住, 68号住, 74号住, 75号住, 76号住
 77号住, 78号住, 79号住, 81号住, 88号住

掘立柱建物址 計5棟 2号掘立, 3号掘立, 4号掘立, 6号掘立, 7号掘立

溝 計9条 7号溝, 9号溝, 10号溝, 13号溝, 16号溝, 20号溝, 21号溝, 23号溝, 24号溝

土 壇 計7基 12号土壇, 18号土壇, 21号土壇, 24号土壇, 35号土壇, 37号土壇, 38号土壇,

焼 土 計1箇所 1号焼土

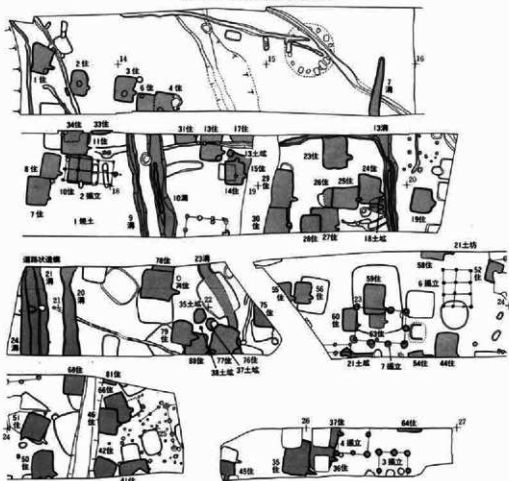
道路状遺構

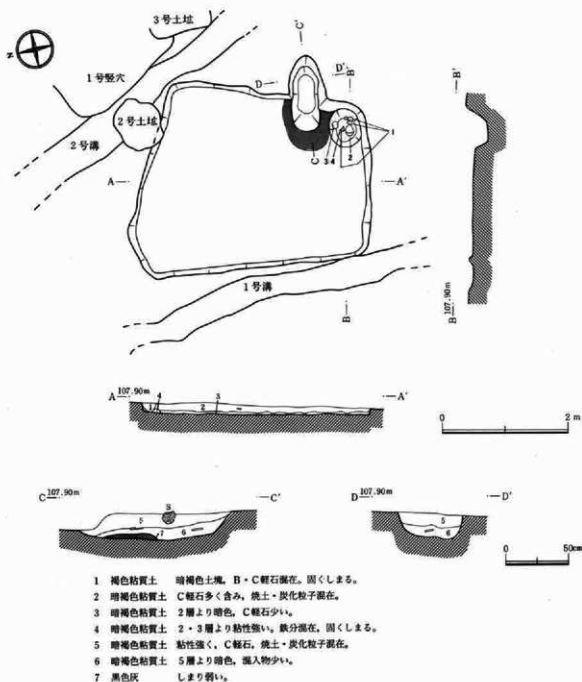
なお7号溝は第3節で記し、時期不明の次の各遺構を本節に併記した。

12・16・38・40・65・73・82各号住居址 11・18・22・25各号溝 7・8・9・10・11・15・16

17・20・22・36・39・41・44・45各号土壇 2号焼土 1号井戸址

第139図 古代遺構分布概念図





第140図 1号住居址平面断面図

1号住居址(Ⅰ区)

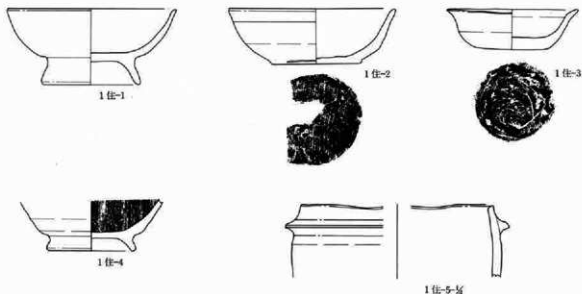
本住居址は第④層黄茶褐色粘土面で確認され、南西角部を1号溝に、北壁東側を2号土壇により切断されている。2号土壇は2号溝を切断する。また2号溝と1号整穴が北東側で近接する。

主軸はN108°Eで、東辺2.9m、南辺2.1m、西辺3.3m、北辺2.4mを測り、台形状プランを呈する。壁はやや急傾斜で部分的に直な立ち上がりをもち壁高15cmを測る。床面は暗褐色粘質土を踏み固め硬くしておりほぼ平坦である。柱穴・周溝は確認されない。

第IV章 兩壺遺跡

東壁の南側にカマドが構築されており、全長1.2m、幅0.6mを測り壁外へ0.6m突出している。燃焼部は小判形のプランをもつ浅いのかほみになっている。袖部はなく焚口前面0.7m四方に炭化物・焼土が1~2cm堆積している。貯蔵穴は東南角部にあり、径0.4m、深さ0.2mの円形プランを呈し、壁も比較的緩傾斜であるが、南側はほぼ直の立ち上がりをもつ。

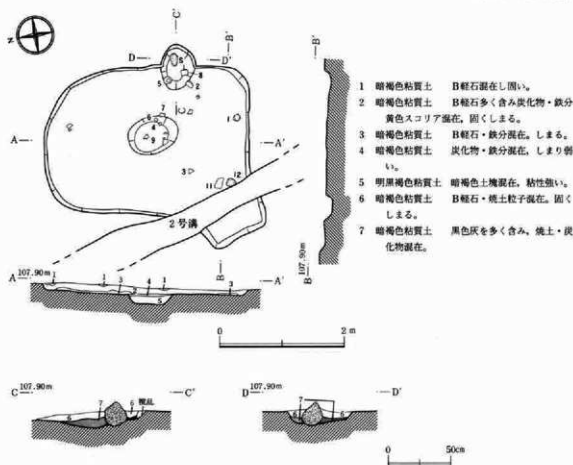
遺物は貯蔵穴内より出土し、底面より7~13cm浮いた状態で土師質土器杯(3)、土師質土器・黒色土器碗(1・2・4)が検出されている。また覆土内より羽釜片(5)が出土している。その他に小破片では灰釉片1片、須恵器壺壁・塊片約10片、土師器系統碗・釜片約200片が見られた。(小安)



第141図 1号住居址出土遺物図

第67表 1号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師質土器	貯蔵穴底より11cm 口縁~底部	1住-1	口径 13.4 底径 7.6 器高 6.0	器壁が薄く、深く長い高台雑に貼付。	外：回転横ナデ、高台部内側回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多くの鉱物・砂粒子含む。酸化。 鈍い褐色。	
土師質土器	貯蔵穴底より6cm 片	1住-2	口径 13.3 底径 7.2 器高 4.5	口唇部から底部にかけて丸みを持ち器高が高い。	口唇部横ナデ。底部静止糸切り痕。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物・砂粒子含む。 酸化。黄灰色。	黒斑あり。
土師質土器	貯蔵穴底より11cm 完存	1住-3	口径 10.4 底径 5.5 器高 3.2	口唇部外反し、底部は小さく器高の低い小形。	底部回転糸切り。口縁部回転横ナデ。内：回転横ナデ。	砂粒子含む。 多くの鉱物含む。 酸化。鈍い褐色。	
土師質土器	貯蔵穴底より12cm 底部	1住-4	口径 7.0	底部やや厚手、厚く短い高台雑に貼付。	外：回転横ナデ、高台横ナデ。 内：ヘラミダキ、黒色処理。	砂粒子含む。 酸化。 鈍い黄褐色。	
羽釜	掘り方覆土 口縁部以下	1住-5	—	口唇部薄く平ら、胴部やや厚い。断面台形状の脚雜に貼付。	口唇部ヘラケズリ後横ハケメ、踵の先ヘラケズリ、貼付部横ナデ。内：横ナデ。	多量の鉱物・砂粒子含む。 酸化。褐色。	



第142図 2号住居址平面図

2号住居址(1区)

本住居址は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、南西角部を2号溝に切断されている。2号溝が本址を切断している部分の西側に、同じく2号溝により切断されている方形の遺構が検出され、底面は本址とほぼ同じレベルをもつが、本址と関連があるのかは不明である。

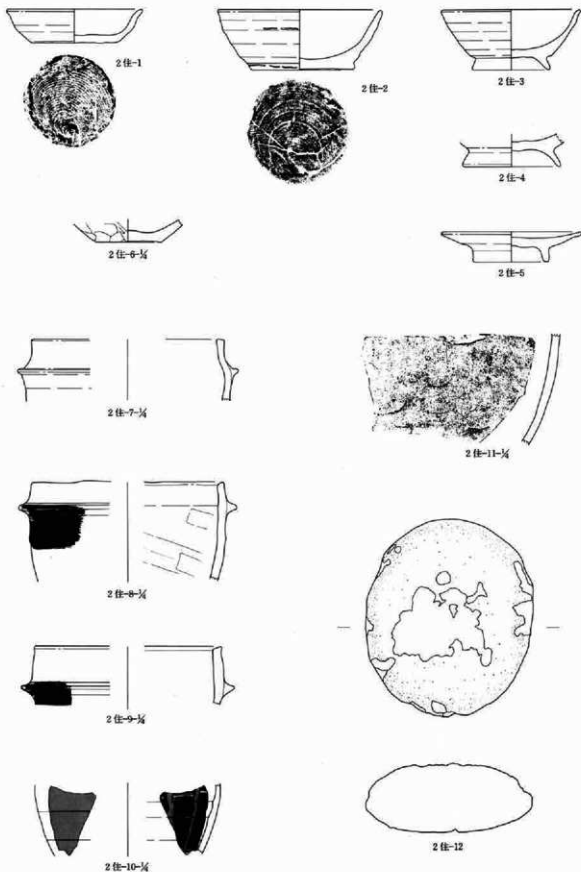
主軸はN96°Eで、東辺2.6m、南辺1.7m以上、西辺1.8m以上、北辺1.6mを測り、北壁は円形状を呈するが隅丸長方形プランと考えられる。壁は緩傾斜で壁高0.1mを測る。床面は暗褐色粘質土を踏み固め硬くまわっており平坦である。柱穴・周溝は確認されない。

カマドは東壁中央部よりやや南寄りに構築されており、全長0.7m、幅0.5mを測り壁外へ0.3m突出している。袖部はなく、浅く皿状に掘りくぼめ基底部をつくり角閃石安山岩を埋め込んでいる。支脚の可能性が強いが表面は焼けていない。住居中央部に径0.5×0.4m、深さ0.15mの楕円形のピットが確認され、遺物出土状態・土層断面により本址廃絶以前に埋められたと考えられる。

出土遺物はカマド内・ピット上面より多く出土している。床面密着土器として土師質土器碗底部(4)、底部に回転糸切りをもつ完存の土師質土器碗(3)、底部に回転糸切りをもつ同環(1)、須恵器壺片(11)が検出され、カマド内の若干浮いた状態で土師質土器皿(5)、羽釜片(8)が出土している。中央部ピットの上面では床面レベルよりやや浮いて土師器壺底部(6)、羽釜片(9)、須恵器壺片(10)が見られた。また南西角では床面直上で扁円形石製品(12)が出土している。覆土中より須恵器片3片、土師器系統約30片の小破片が出土している。

(小安)

第IV章 兩晉遺跡

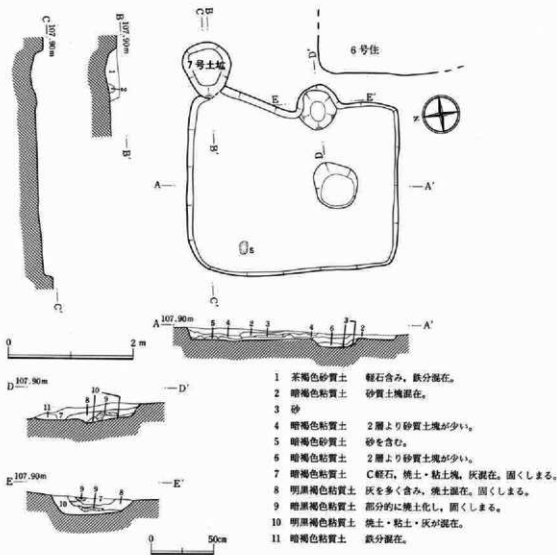


第143圖 2号住層址出土物圖

第68表 2号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土部質土器	床面直上 欠	2住 -1	口径 10.8 底径 6.8 器高 2.7	器壁が薄く器高が低い。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ。底部不足の段あり。内：中央うず巻状回転ナデ。	多量の鉱物含む。酸化。鈍い橙色。	
埴土部質土器	床面直上 完存	2住 -2	口径 13.1 底径 8.1 器高 4.7	口縁部薄く底部厚い器壁。器高やや高い。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ。口縁部ヘラケズリ後ナデ。内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。不良。鈍い黄褐色。	
埴土部質土器	床面直上 欠	2住 -3	口径 11.0 底径 6.0 器高 4.8	均一した厚み。器高がやや高く、短く薄い高台、やや雑な貼付。	底部回転糸切り後回転横ナデ。外：回転横ナデ。口縁部。内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。酸化。鈍い橙色。	
埴土部質土器	床面直上 底部	2住 -4	底径 7.8	薄く長い高台丁寧に貼付。	底部回転糸切り後回転横ナデ。内：中央波うち。他回転横ナデ。	小石・多量の鉱物含む。酸化。褐色。	
埴土部質土器	床より8cm 完存	2住 -5	口径 11.2 底径 6.0 器高 3.0	底部平皿で均一した厚みを持ち、短く薄い高台丁寧に貼付。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。酸化。鈍い橙色。	
埴土部質土器	床より6cm 底部	2住 -6	底径 7.0	ほぼ均一した厚みの器壁。大きな疵がりをみせる割部。	外：ヘラケズリ。内：ヘラケズリハケメ痕少量あり。	多量の鉱物含む。酸化。鈍い橙色。	底部塚付着。
羽蓋	床より6cm 口縁部	2住 -7	—	口唇部平皿。断面三角形の踵貼付。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。踵貼付部分浅いくぼみナデ。	酸化。淡黄色。	表面塚付着。
羽蓋	床より8cm 口縁部割部	2住 -8	—	口唇部平皿で波をうち断面台形の踵貼付。	外：回転横ナデ。割部ヘラケズリ。踵部先ヘラケズリ。内：口縁部回転横ナデ。割部斜ヘラケズリ後ナデ。	多量の鉱物・砂粒含む。酸化。鈍い黄褐色。	割部塚付着。
羽蓋	床より2cm 口縁部	2住 -9	—	口唇部平皿。断面三角形の踵貼付。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	酸化。鈍い橙色。	
壺酒器	床より4cm 胴部	2住 -10	—	均一した厚さ、やや丸いカーブを呈す。	外：ヘラケズリ後回転横ナデ。沈線不定間隔二本。内：口縁部。波うつ回転横ナデ。	還元。軸：灰オリーブ色。胎が縦に2本	内面塚付着。
壺酒器	床面直上 胴部	2住 -11	—	均一した厚さで、丸みの緩やかな大形。	外：ヘラケズリ。ナデ。内：粗いヘラケズリ。	砂粒・多量の鉱物含む。還元。灰色。	
石製品	床面直上	2住 -12	長さ 15.7 幅 13.4 厚さ 5.4	楕円形でほぼ平らに近い厚み。内面に叩いた使用痕あり。	—	—	

第IV章 兩空遺跡



第144図 3号住居址、7号土坑平衡面図

3号住居址 (1区)

本住居址は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、北東角部を7号土坑により切断されている。南東側で6号住に近接している。

主軸はN98°Eで、東辺3.1m、南辺2.4m、西辺3.0m、北辺2.5mを測り、長方形プランを呈する。壁はやや急傾斜で壁高0.1mを測る。床面は暗茶褐色砂質土と黄茶褐色粘質土を強く踏み固めコチコチにしまっておりほぼ平坦である。柱穴・周溝は確認されない。

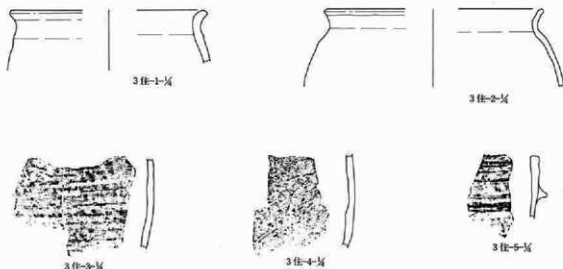
東壁中央部よりやや南寄りにカマドが構築されており、全長0.7m、幅0.7mを測り、壁外へ0.4m突出している。袖部はなく、僅かに浅く皿状に掘りくぼめ基底部をつくる。住居中央部より南寄りに径0.5m、深さ0.1mの円形のピットが確認された。やや急傾斜な壁をもつ。

出土遺物は少なく、カマド覆土内より土師器壺口縁(1・2)、羽釜片(3・4)、ピット内より羽釜片(5)が出土している。その他に覆土中より須恵器片2片、羽釜片2片、土師器系統7片、黒色土器片2片の小破片が見られた。

(小安)

7号土坑 (I区)

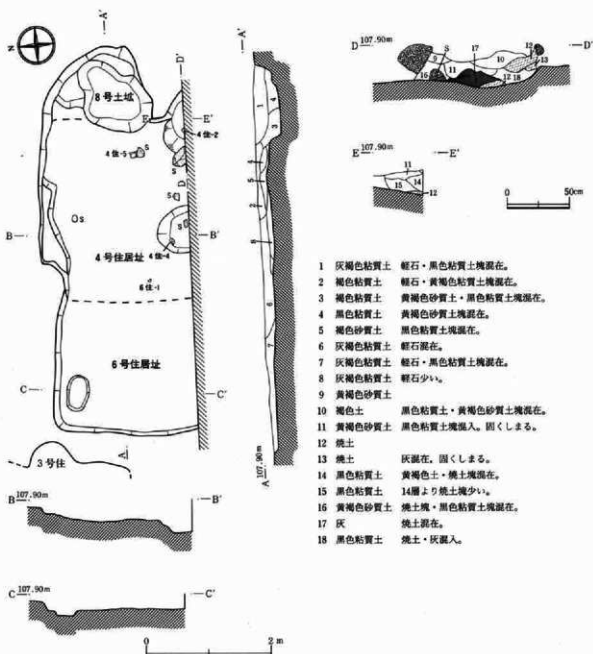
本遺構は第④層黄茶褐色粘質土面で確認された。3号住居址北東角部を切断する。主軸はN88°Eを測り、プランは若干歪んだ楕円形を呈し長軸0.6m、短軸0.5m、最深部で0.2mを測る。壁はやや急傾斜である。底面は硬くしまっておりほぼ平坦である。出土遺物はない。(小安)



第145図 3号住居址出土遺物図

第69表 3号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (m)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 土師器	カマド内 口縁部	3住 -1	—	口唇部波をうち、口縁部、コ字状。	外：口縁部横ナデ。下方ヘラケズリ。 内：全体に横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。 明赤褐色。	
壺 土師器	カマド内 口縁部	3住 -2	—	口唇部僅かに反りをもち、コ字状口縁。	外：口縁部横ナデ。下方ヘラケズリ。内：全体に横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。鈍い褐色。	口縁部表面煤付着。
羽蓋	カマド内 胴部	3住 -3	—	やや均一した厚み。カーブの緩やかな胴部。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒少量含む。 酸化。鈍い褐色。	
羽蓋	カマド内 胴部	3住 -4	—	やや波うつ厚み。カーブの緩やかな胴部。	外：ヘラケズリ。 内：回転横ナデ。	砂粒含む。酸化。 不良。鈍い褐色。	表面煤付着。
羽蓋	ピット内 口縁部	3住 -5	—	口唇部平坦。断面三角形の小形磚丁家に貼付。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。褐色。	



第146図 4・6号住居址、8号土壇平面図

4・6号住居址(1区)

本住居址群は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、住居址南半分は範囲外である。南壁土層断面より4号住が6号住を切る。北東側で8号土壇が4号住を切っている。6号住は西側で3号住と近接する。

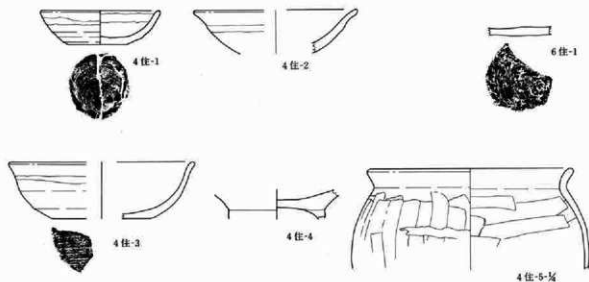
4号住は北辺2.8m、壁は緩傾斜で0.15mを測る。床面は褐色土を踏み固め平坦。カマド・ピットは半分以上未調査で、ピットは短軸0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物はカマド内より土師質土器塊(2)が出土し、ピット内より同坑底部(4)が、カマド左前面のほぼ床直で土師器壺(5)が見られた。覆土中より土師質土器片(1・3)が検出され、須恵器碗片20片、黒色土器片6片、土師器系統約50片の小破片が出土している。

6号住は緩傾斜な壁で0.15mを測る。床面は褐色土を固め平坦。北西角部に径0.5×0.3m、深さ0.1mのピットが確認された。出土遺物は土師器坏底部(1)がほぼ床直で出土しただけである。(小安)

8号土坑(1区)

本土坑は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、4号住北壁を切断する。

主軸はN46°Eで歪んだ楕円形プランを呈し、径1.1×0.7m、深さ0.3mを測る。壁はやや急傾斜。底面は平坦で硬い。出土遺物はない。(小安)

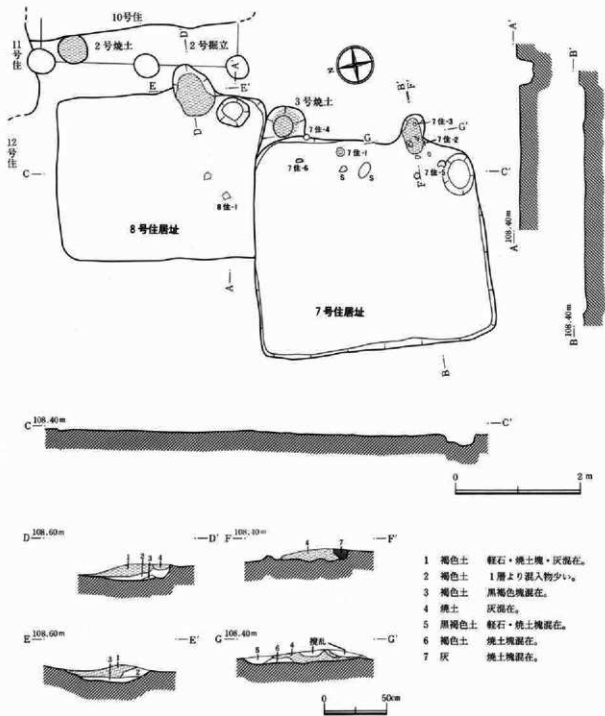


第147図 4・6号住層出土遺物図

第70表 4・6号住層出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師質土器	覆土 ほぼ完存	4住 -1	口径 9.5 底径 4.8 器高 2.7	底部の径小さく器高の低い小形。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。 鈍い褐色。	
埴土師質土器	床より5cm 口縁部	4住 -2	口径 13.0	やや薄い器壁。口縁部外反し5mm位帯状に滑らかな部分あり。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	酸化。中心灰白色。表面淡赤褐色・灰白色	
坏土師質土器	覆土 口縁～底部	4住 -3	口径 14.8 底径 7.8 器高 4.5	やや薄い器壁。口縁部僅かに外反し器高が高い。	底部静止糸切り。 外：回転横ナデ。3mm位帯状に滑らかな横ナデ。	酸化。部分的に淡赤褐色・灰黄色。	
埴土師質土器	床より10cm 底部	4住 -4	—	短く厚い高台雑に貼付。	底部回転糸切り後横ナデ。 内：横ナデ。	酸化。不良。 淡黄色。	
粟土師質土器	床より1cm 口縁部	4住 -5	口径 21.4	口唇部丸く、コ字状口縁。	外：横ナデ、体部ヘラケズリ。 内：横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。褐色。	
坏土師質土器	床面直上 底部のみ	6住 -1	—	—	外：右回転糸切り痕。 内：ナデ。	微砂粒を少量含む。 軟質酸化。淡褐色。	

第IV章 兩宅遺跡



第148図 7・8住居址断面図

7・8号住居址(II区)

本住居址群は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。8号住が7号住を切っている。また3号焼土は両住居址に切られている。8号住の東から西にかけて、10・11・12各号住居址及び2号掘立と2号焼土が近接している。

7号住居址

東西3～3.4×南北約3.6mのやや隅丸長方形であり、北辺よりもやや南辺が短くなる台形状を呈す。主軸方位はN95°Eを測る。確認面までの壁高は約5cmで低いが、床面はしっかりしている。カマドは東壁南寄りに設置されているが、残存状態は極めて悪く僅かに中央部底面のみ調査できた。貯蔵穴は南東角にあり径45cm、深さ15cmの浅い楕円形である。

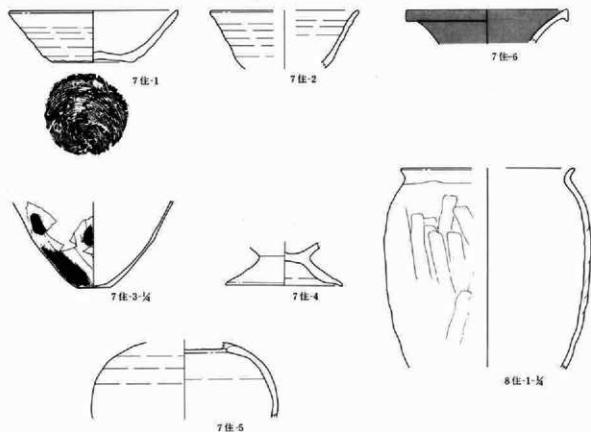
遺物は須恵器坏（1）、須恵器壺胴部破片（5）、土師器壺胴部下半～底部破片（3）が床面直上で出土している。また灰軸陶器壺口縁（6）、土師器台付壺台部（4）、そして須恵器塊片（2）も床より5cm以内の位置で検出された。カマド内及び周辺に大半の遺物が集中している。その他に小破片として灰軸片3片、須恵器壺・坏片約30片、黒色土器塊片約5片、土師器壺系統・坏片約100片が覆土中に見られた。

8号住居址

東西約2.5×南北約3.3mの長方形で、主軸方位はN99°Eを測る。7号住より残存状態はさらに悪く、ほとんどプランが確認できる程度である。カマドは東壁南寄りに設置されている。煙道部への立ち上がりと燃焼部底面が確認できたのみである。貯蔵穴と考えられる径30cm・深さ約30cmのピットが存在する。

遺物は南壁寄り中央部床面直上及び床面近くで土師器壺片（1）が出土している。その他は掘り方覆土中より土師質土器塊片、覆土中より灰軸塊片4片、須恵器壺・塊片約20片、土師器系統壺・塊片約100片の小破片が見られた。

(長谷部)



第149図 7・8号住居址出土遺物図

第71表 7・8号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏須恵器	床面直上 ほぼ完存	7住 -1	口径 13.6 底径 6.5 器高 4.1	やや均一した厚みの器壁。底部内側中央盛り上り。口径は大きい。	底部回転糸切り。外：回転ヘラケズリ後ナデ。口縁部回転横ナデ。内：回転横ナデ。	砂粒多量に含む。還元。不良。黄灰色。	
埴須恵器	床より3cm 口縁~胴部	7住 -2	口径 12.0	やや均一した厚さの器壁。底部近く厚い。	外：回転指痕横ナデ。内：回転横ナデ。	砂粒含む。還元。黄灰色。	
甕土師器	床面直上 胴~底部	7住 -3	———	やや薄い器壁。底径が小さい。	外：体部・底部ヘラケズリ。内：不定ナデ、ハケメ痕あり。	酸化。外面灰褐色。内面鈍い褐色。	表面煤付着。
台付甕土師器	床より2cm 台部	7住 -4	底径 9.4	やや均一した厚みの器壁。器高が低く大きく広がる脚部貼付。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	酸化。鈍い褐色。	表面煤付着。
壺須恵器	床面直上 胴部	7住 -5	最大径15.0	均一した厚み。丸みが強く、頸部は丁寧に仕上げ、後に口縁付ける。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	還元。中心褐色。暗緑灰色。	
壺灰釉陶器	床より3cm 口縁部	7住 -6	口径 13.0	均一した厚さで口唇部直立に反る。	外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	還元。外面鈍い褐色。内面釉：灰白色。	
甕土師器	床より4cm 口縁~胴部	8住 -1	———	口縁小さく斜めに立ち上り頸部。く字状。均一した厚みの脚部。	外：口縁部回転横ナデ、胴部ヘラケズリ。内：口縁横ナデ、胴部横ナデ。	酸化。褐色。	表面一部に煤付着。

10号住居址 (II区)

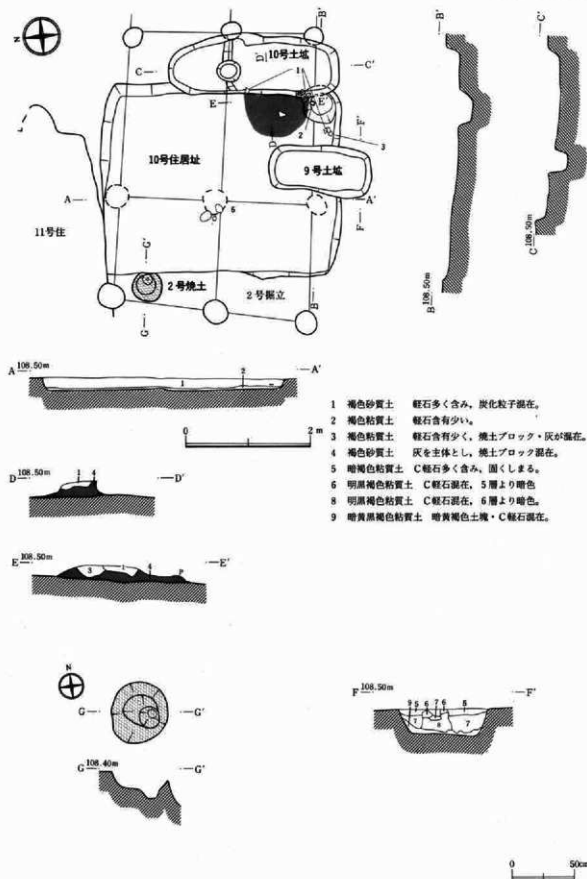
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北側で11号住と重複しており、11号住が新しい。また2号掘立との重複も本住居址が古い。南及び東側では9・10号土壇に切られている。西側では2号焼土と切り合うが新旧関係は不明。また3号焼土、8号住に近接する。

東西2.8~2.9×南北約3.5mの規模で南北方向がやや長い長方形を呈し、主軸方位はN96°Eを測る。確認面から床面までは15~25cmと浅い。床面の状態は不良で柱穴は検出できなかった。カマドはほとんど崩平され不明確であるが、10号土壇の壁面及び南壁東寄りの焼土・灰層の確認から東壁南寄りに想定できる。貯蔵穴は南東角にカマドと接するように設置され、径35cmの不整形で深さ約20cmを測る。

遺物はカマド付近より須恵器埴(1)・坏(3)が床面直上で出土し、貯蔵穴内より須恵器埴底部(2)・同坏底部(4)、灰釉陶器皿口縁(5)が見られた。また中央西寄りから床より7cmで須恵器・甕底部(6)が検出された。覆土中からは灰釉埴口縁1片、須恵器埴坏・甕片約30片、黒色土器埴片1片、土師器系統甕・釜・台部等約50片の小破片が見られた。(長谷部)

2号焼土 (II区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側で10号住と切り合うが新旧関係不明。2号掘立との重複関係も不明である。また8・11号住、3号焼土に近接する。



第150図 10号住居址，9・10号土塚，2号焼土平面断面図

底径約25cmの不整形形で確認面からの深さ15cmを測る。底の東側には、さらに底径7cm、深さ6cmほどのビット状の掘り込みが見られる。覆土全体に焼土が見られた。遺物の出土はなく、性格不明である。

(長谷部)

9・10号土壇(II区)

本土壇群は共に第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。共に10号柱を切っている。2号獨立とも重複するが、新旧関係は不明である。10号土壇は東側で11号土壇と近接する。

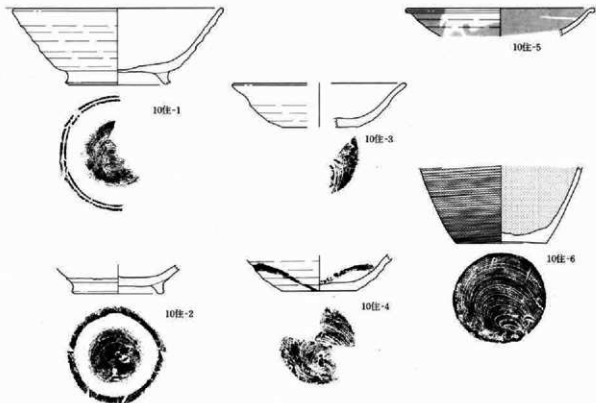
9号土壇

主軸をN9°Eにとり、長軸1.5m、短軸0.6m、確認面からの深さ0.2mを測る。隅丸長方形プランで壁は急傾斜。底面は暗褐色土でほぼ平坦である。出土遺物は、灰軸碗片1片、須恵器碗坏片7片、土師器系統10片の小破片が覆土中に見られた。

10号土壇

主軸をN3°Eにとり、長軸2.5m、短軸0.7mを測る。中央やや北よりに0.1mの段差があり、確認面からの深さは北側が0.2m、南側が0.35mである。また段の中央に径0.25m、深さ約0.4mのビットが見られる。全体では隅丸長方形のプランを呈す。壁は急傾斜で、床面は暗褐色土でしまっている。ビットが、本土壇に伴うものかは不明である。また出土遺物は全くない。

(小安)



第151図 10号住居址出土遺物図

第72表 10号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 須 器	床面直上 口縁～底部	10住 -1	口径 16.6 底径 7.8 器高 4.1	口径広く器高の高い大形。厚く短い高台縁に貼付。	外：クロロ指痕ナデ、底部回転糸切り後横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・多量の鉱物含む。還元。 褐色。	
埴 須 器	床面直上 底部	10住 -2	底径 7.0	やや厚い底部に、短く厚い高台縁に貼付。	底部回転糸切り。 外：高台部回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒含む。 還元、不良。 黄灰色。	
坏 須 器	床より1cm 口縁～底部	10住 -3	器高 3.5	口縁部僅かに拡がり、底部にかけてやや厚い器壁。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ、クロロ指痕ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒含む。 還元、不良。 灰黄色。	
坏 須 器	貯蔵穴内 底部	10住 -4	底径 6.0	底部やや厚い器壁。	底部回転糸切り。 外：クロロ指痕、回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・多量の鉱物含む。還元。 灰オリーブ色。	内外面に煤付着。
皿 灰 軸 陶 器	貯蔵穴内 口縁部	10住 -5	口径 14.8	薄手で均一した厚みの器壁。口縁丸く小さな反り。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。 釉：灰白色。 灰白色。	
甕 須 器 ?	床より7cm 胴～底部	10住 -6	底径 7.2	胴部は薄く、底部厚い器壁。	底部回転糸切り。外：全体に櫛目文。内：回転横ナデ。	中性灰。 黄い黄褐色。	表面煤付着。

11・12・34号住居址 (II区)

本住居址群は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。三者の新旧関係は12号住→11号住→34号住の順で新しく、11号住は10号住も切っており、2号掘立・2号焼土・8号住に近接している。

11号住居址

本住居址は東西3.4～3.6×南北2.6～3.0mの東西がやや長い不整形長方形を呈する。主軸方位は、N90°Eを測る。壁は確認面まで15cm程度しか残っていないが、しっかりと立ち上がっている。床面は一部不明確である。

カマドは残存状態が悪く、袖は確認できなかった。燃焼部幅は約40cm、煙道は平面三角形状に壁より約50cm突出する。北西角に径30cm、深さ8cmほどのピットがあり、若干の炭化物を含む覆土をもっていた。しかし本住居址に伴うものかは明瞭ではない。

遺物は中央やや東寄りの床面より3cmのレベルで羽釜片(1)が出土している。他に覆土中からは灰軸陶器壺片1片、須恵器壺甕・埴片約30片、土師器甕・埴片約50片、土師質土師壺・皿約10片、平瓦片1片(遺構外-101)が見られた。

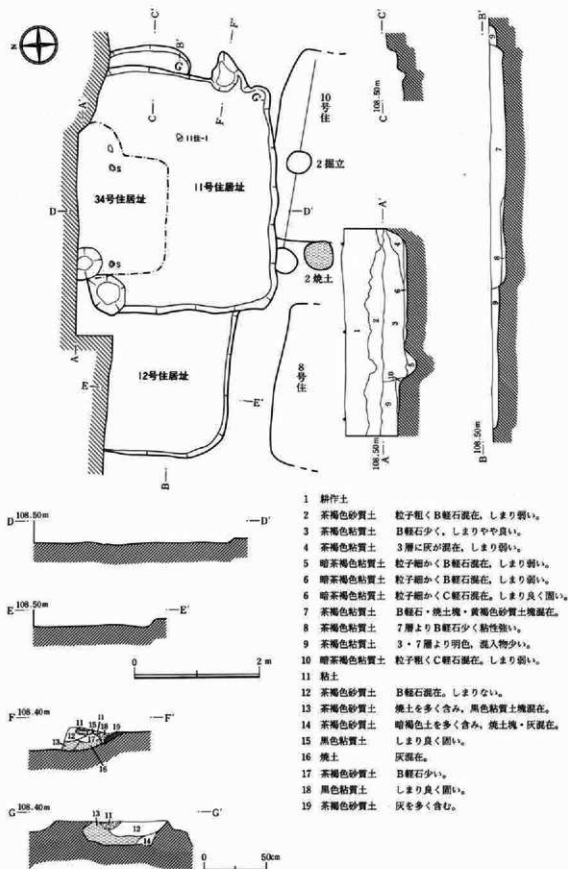
(長谷部)

12号住居址

本住居址は11号住によって切られ、また北側が調査範囲外のため南西部分しか調査できなかった。規模・形状はそのため不明だが、南辺はN94°Eの走向をも確認面からの深さは約10cmである。

確実な遺物は見られず、覆土中より灰軸陶器壺片1片、須恵器埴片約20片、土師器系統甕・埴片約30片が見られた。

(長谷部)



第152図 11・12・34号住居址平面断面図

34号住居址

規模・平面形は不明だが、土層断面では東西約2mを測り、カマドを東側にもつ方形と推定できる。

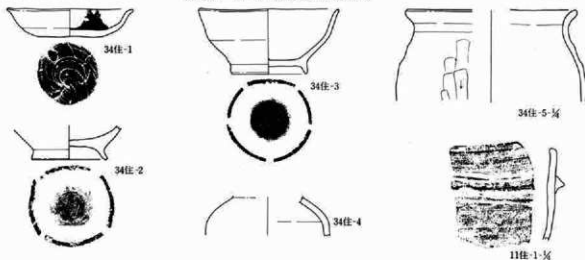
壁は平面的には検出されなかったが、断面では40cmほどのほぼ垂直な立ち上がりが見られた。床は地山の暗茶褐色粘質土の上に5cmほどの張り床がなされていたことが、断面より判明した。しかし調査時には平面的な張り床は確認できなかった。11号住の床面とほぼ同一レベルである。

カマドは東壁部分にやや張り出しぎみに灰と焼土の混在層が断面で確認されただけで、平面的には掘り込み等の施設は何も確認できなかった。

遺物はカマド覆土のものが主体で、土師質土器碗(2・3)、皿(1)、土師器甕片(5)、須恵器壺肩部(4)が見られた。その他に覆土中より、須恵器壺片・灰釉皿片そして須恵器小破片約10片、土師器系統小破片約30片が出土した。

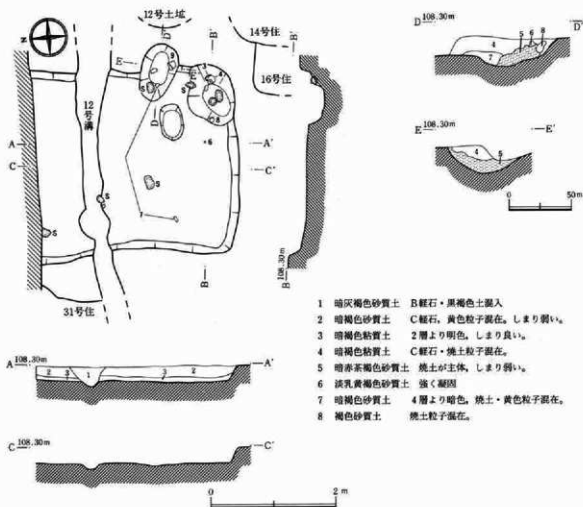
第153図 11・34号住居址出土遺物図

(坂井)



第73表 11・34号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師質土器 皿	カマド内 口縁部～底部 片残存	34住 —1	口径 10.0 底径 4.9 器高 2.3	体部は扁平、体部中位に弱い丸みを持って緩く外反する。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕、糸切り後ナデ調整。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 灰黄色。	口縁部～底部の内部に煤付着。
土師質土器 碗	カマド覆土 底部	34住 —2	底径 6.1	断面三角状の高台を貼付。	外：回転糸切り痕、高台内側強い横ナデ。内：回転横ナデ。	硬質、酸化。 黄灰色。	
土師質土器 碗	カマド内 口縁部～底部 片残存	34住 —3	口径 11.0 底径 6.0 器高 5.2	器壁は薄く一定深みがある。体部中位弱い丸み、口縁直立ぎみ外反。	内外：回転横ナデ。底部、糸切り痕。高台部の内側強い横ナデ。	微粒を含む。 硬質、酸化。 灰黄色。	
須恵器 壺	カマド内 胴部片以下残存	34住 —4	—	胴部中位に最大径を持つ。	内外：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、還元。 灰色、釉：黄白色。	外面に自然釉。
土師器 甕	カマド内 口縁部～胴部 片以下残存	34住 —5	—	胴部中位に最大径を持つ。口縁部は短く、緩く外反する。	外：口縁部横ナデ、胴部指頭によるオサエ後1ヘラケズリ。内：横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 赤褐色。	
羽釜	床より3cm 口縁～胴部	11住 —1	—	口縁部ほぼ平坦、断面三角形の筒壁に貼付。筒の先下向き。	外：横ナデ。筒ヘラケズリ後ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒多量の胎物含む。 酸化。 鈍い橙色。	



第154図 13号住居址平断面図

13号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。12号溝が本住居址を切っており、西側で31号住、東側で14～17号住、12号土壇が近接している。

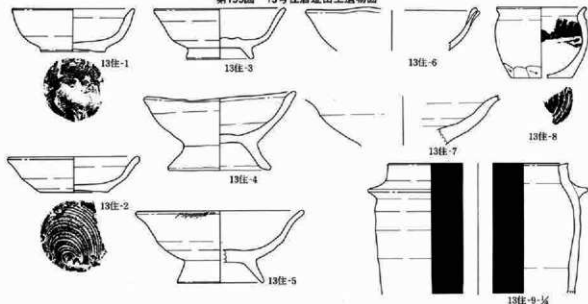
主軸方位N96°Eを測り、東西約2.8m、南北3m以上の長方形を呈する。壁高は約25cmで残存状態は良い。床面は良好な張り床をなしている。柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

カマドは東壁南寄りに設置されているが、残存状態は悪く燃焼部の楕円状の掘り込みが見られただけである。この燃焼部は壁外に半分以上出しており、焼土粒子は見られたが灰層は検出できなかった。

貯蔵穴は南東角にあり、径60cm・深さ約35cmを測る不整形である。覆土中には焼土塊及び黒色灰が含まれていた。

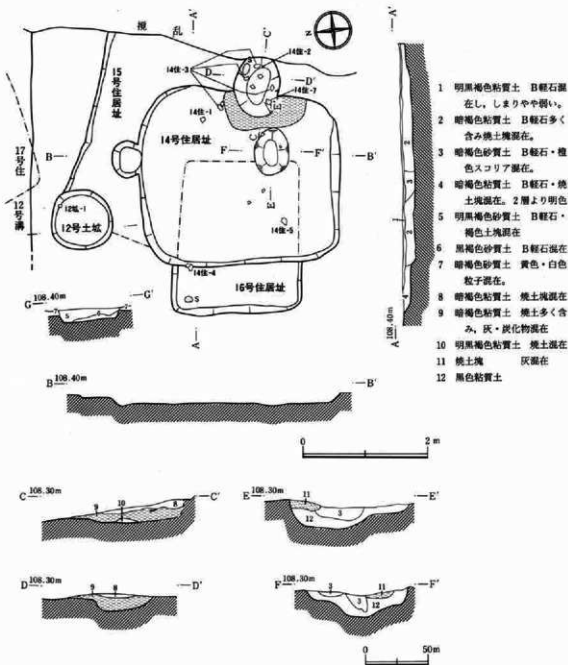
遺物は比較的量が多く、カマド内からは羽釜口縁(9)、土師質土器塊体部(7)が出土し、貯蔵穴内からは土師器小形甕(8)、土師質土器塊(3・4)が見られた。また床面にほぼ密着して土師質土器塊(6)があり、覆土中からは同塊(5)、同環(1・2)が出土した。その他に貯蔵穴内から針状鉄製品2点、覆土中から平瓦片1片(遺構外-104)、灰輪軸片約20片、羽釜片1片、須恵器壺・甕・塊坏片約100片、土師質土器塊坏片と土師器甕片約200片の小破片が見られた。(長谷部)

第155図 13号住居址出土遺物図



第74表 13号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏 土師 土器	覆土 ほぼ完存	13住 -1	口径 9.6 底径 5.2 器高 3.4	体部中位にやや膨らみ を持って外反。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕、糸切り 後ナデ調整。	砂粒をやや多く含 む。硬質、酸化。 褐色。	
坏 土師 土器	南西側覆土 口縁部～底部 欠残存	13住 -2	口径 10.3 底径 5.5 器高 2.8	体部中位にやや膨らみ を持って外反。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕、糸切り 後ナデ調整。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	
碗 土師 土器	貯蔵穴底より 10cm ほぼ完存	13住 -3	口径 10.4 底径 5.2 器高 4.0	体部下位に丸みを持 つ。 高台は端部鋭い。	内外：回転横ナデ。 高台部回転糸切り後、ナデ付 け。	砂粒をやや多く含 む。硬質、酸化。 黄褐色。	
碗 土師 土器	貯蔵穴底より 15cm 完存	13住 -4	口径 11.9 底径 8.0 器高 6.25	体部は緩やかな丸み を持って外反。高台は高 く、外に強く張り出す。	内外：回転横ナデ。 付け高台。高台の内外側とも 強いナデ付け。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。 褐色。	
碗 土師 土器	南西側覆土 口縁部～底部 欠残存	13住 -5	口径 13.2 底径 7.0 器高 5.7	体部中位にやや膨らみ をもって外反。高台は 高く、外へ張り出す。	内外：回転横ナデ。 高台部ナデ付け。	砂粒をやや多く含 む。硬質、酸化。 黄褐色。	
碗 土師 土器	床面直上 口縁部以下 残存	13住 -6		器壁は薄く一定。 口縁部は肥厚し外反す る。	内外：回転横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 黄褐色。	
碗 土師 土器	カマド内 体部以下残 存	13住 -7		体部は底部から緩く外 反、中位に弱い外縁を 持って、更に外反する。	内外：回転横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
小形 土師 土器	貯蔵穴底より 18cm 口縁部～底部 欠残存	13住 -8	口径 7.0 底径 4.8 器高 5.6	胴部中位に最大径を持 ち、緩やかな丸みを呈 する。口縁部は短く外 反する。	外：頸部強いナデによる凹線 胴部横ナデ。底部立ち上がり 一ヘラケズリ。底部回転糸切 り。内：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	内面保付着。
羽 釜	カマド内 口縁部～胴部 欠残存	13住 -9	口径 19.0	胴付近に最大径。胴部 直立。口縁短く平滑。 胴断面三角水平に張 る。	内外：横ナデ。胴部外面に は縦方向に粗雑なナデあり。	砂粒を少量含む。 軟質、還元。 黒灰色。	



第156図 14・15・16号住居址、12号土坑平面断面図

14・15・16号住居址、12号土坑 (II区)

本遺構群は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側は大きく複乱溝で切られている。重複関係は15号住→16号住→14号住の順に新しい。12号土坑は15号住を切っている。13・17号住、12号溝が近接。

14号住居址

主軸方位をN93°Eにとり、東西約2.6m、南北約3.0mのやや南北に長い隅丸長方形の平面形を呈す。确实に柱穴と認められるものはなく、北壁中央部に壁から張り出したピットがある。壁・床面は良好である。カマドは東壁中央部に位置するが、削平が著しく燃焼部のみ調査できた。底部は60×30cmの楕円形である。

また袖の存在したと考えられる周辺には、炭と焼土が多く散布している。

遺物は比較的多く、カマド内より須恵器壺片(7)、羽釜片(3)、土師質土器埴底部(2)が見られ、カマド左前面でやや浮いて土師質土器埴片(1)、西側床よりやや浮いて須恵器壺・甕(4・5)が出土した。また覆土中より須恵器壺(6)、2点の鉄製品(8・9)が検出された。その他に小破片として灰釉壺・皿片3片、須恵器壺・埴片約100片、羽釜片3片、土師器蓋・埴片約200片が覆土中に見られた。

15号住居址

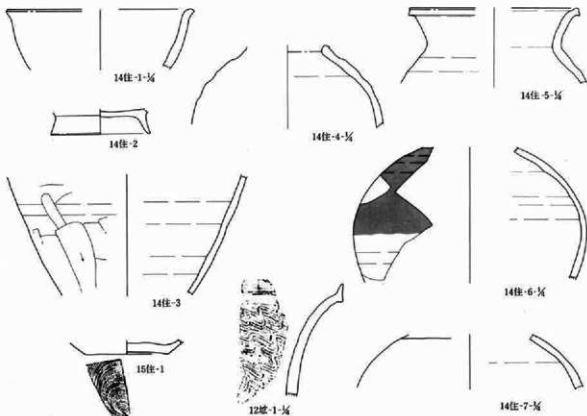
大半が14号住と攪乱に破壊されている。床面は硬くしまっており、北壁部分は確認面から5cm前後の深さをもつ。北壁の走向はN70°Wを測る。遺物は須恵器埴片(1)が覆土中に見られた以外、数片の須恵器・土師器系統小破片が見られた程度である。

16号住居址

西壁・南北壁の一部として14号住床下でカマド址が確認された。南北は2.0m、東西は2.3mほどに推定でき、東西に長い長方形と思われる。主軸方位はN100°Wを測る。残存する床面は普通で、柱穴・周溝は検出できず。カマドの位置は東壁南寄りと思われ、燃焼部は底径40×20cmの楕円形を呈する。遺物は全く見られなかった。

12号土壇

径80cmの円形を呈し、確認面からの深さは約10cmである。底より4cmのレベルで須恵器壺口縁(1)が出土した。その他に針状鉄製品小片が覆土中に見られた。(長谷部)



第157図 14・15号住居址、12号土壇出土遺物図(1)

第75表 14・15号住居址, 12号土坑出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
大土師質土器	床より10cm 口縁部以下残存	14住 -1	——	体部から緩く外反して立ち上がり口唇部が少し外反する。	内外：横ナデ。	緻密。 軟質，酸化。 黄い褐色。	
土師質土器	床面直上 底面以下残存	14住 -2	底径 8.0	断面三角状の高い高台を貼付。	外：高台部の内側丁字な横ナデ。内：回転横ナデ後十字状にミガキ。	砂粒をやや多く含む。 軟質，酸化。 明赤褐色。	
須恵器	床より10cm 胴部下下部以下残存	14住 -3	——	底部から直線的に大きく外反し上半部に続く。外面と断面に輪横痕。	外：上位横ナデ後ヘラケズリ，下半部：ヘラケズリ。内：横ナデ。	砂粒を多く含む。 硬質，酸化。 灰色。	
須恵器	床より5cm 胴部以下残存	14住 -4	最大径20.4	胴部中に最大径を持ち，腹部に内接あり。口縁部は強く外反か。	内外：横ナデ。内：輪横痕を残す。	緻密。 軟質，還元。 浅黄色。	
須恵器	床より2cm 口縁部～胴部以下残存	14住 -5	——	頸部は緩い，く字状に外反する。口唇部平滑に切られて外反。	内外：回転横ナデ。	緻密。 硬質，還元。 灰色。	
須恵器	覆土 胴部以下残存	14住 -6	——	胴部中央部に最大径を持つ。腹部は強く括れて外反か。	内外：幅広い単位での横ナデ。	緻密。硬質，還元。 灰白色。釉：灰緑色。	
須恵器	床より6cm 胴部以下残存	14住 -7	——	胴部中に最大径を持つと思われる。	外：平行状の叩き調整後，主に横方向粗雑なナデ。内：ヘラアテ，オサエ痕残す。	緻密。 硬質，還元。 灰色。	外面に自然釉あり。
須恵器	覆土 底部破片	15住 -1	底径 6.7	底部少し上げ底状。体部緩やかに立ち上がる。	外：左回転赤切り痕。内：回転ナデ。	微砂粒を少量含む。 硬質，還元，灰色。	
須恵器	底より4cm 口縁～胴部	12坑 -1	——	口縁僅かに内反し直立。明瞭な横より胴部大きく外反。	外：口縁回転横ナデ。胴部回転横ナデ後4本単位帯指波状文4段。内：輪横痕。	砂粒・気泡少ない。 硬質，還元。 灰白色。	



14住-8-1/2

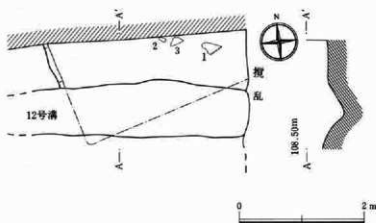


14住-9-1/2

第158図 14号住居址出土遺物図(2)

第76表 14号住居址出土遺物観察表 (2)

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
有孔円筒形鉄製品	覆土	14住 -8	3.6	——	0.2	中央に径0.2cmの円孔がある薄い円盤。サビが多いが一部周縁が残る。推定径3.2cm。	紡錘車か。
編状鉄製品	覆土	14住 -9	6.4	3.6	1.0	先端がやや曲った断面0.4×0.6cmの方形の棒状の下部に、左右に大きく内反する厚い部分が付くが、片側の一部のみが残る。	



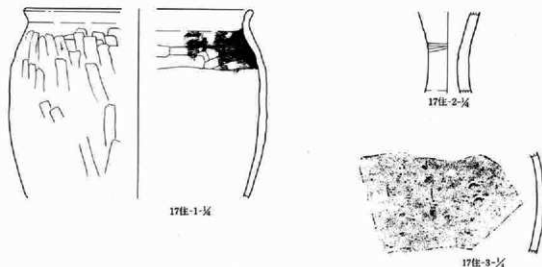
第159図 17号住居址平面図

17号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。12号溝に南側を切られ視乱溝によって東側が破壊されている。南側で15号住・12号土壇、西側で13号住に近接する。

床面の状況は普通で、西壁の壁高は確認面から約10cmである。西壁の走向はN18°Wを測る。

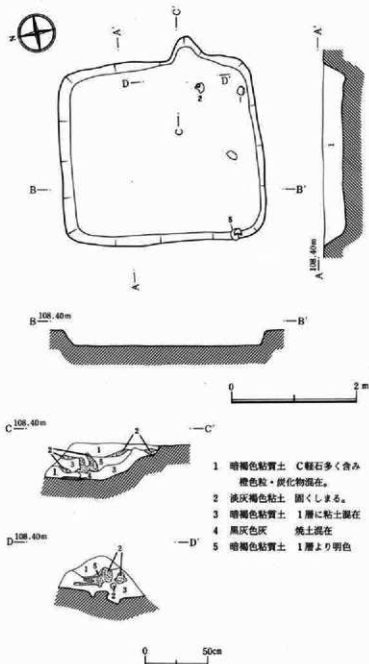
床面の推定中央部から、須恵器薬片(3)がほぼ密着状態で、同壺頸部(2)と土師器甕(1)がやや浮いた状態で出土している。他に遺物は全く見られなかった。(長谷部)



第160図 17号住居址出土遺物図

第77表 17号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	床より5cm 口縁部～胴部 片残存	17住 —1	—	胴部はやや膨らみを持ち短い口縁部に続く。器壁は一定し厚い。	外：口縁部横ナデ、胴部ヘラクスリ。内：横ナデ、頸部ヘラナデ調整。	砂粒をやや多く含む。硬質、酸化。鈍い赤褐色。	胴部内部煤付着。
須恵器	床より11cm 胴部以下残存	17住 —2	—	器壁は薄い。肩部との内面接合部に輪痕痕と指痕痕あり。	内外：横ナデ。外：ヘラ工具による浅い沈線あり。	白色砂粒を少量含む。硬質、還元。灰白色。	自然軸あり。
須恵器	床より1cm 胴部破片	17住 —3	—	大形の壁の破片と思われる。	内外：指痕によるオサエ調整後、平行状の印オ。	白色砂粒を含む。硬質還元。青灰色。	自然軸あり。



第161図 19号住居址平面断面図

19号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側で18号住に近接している。

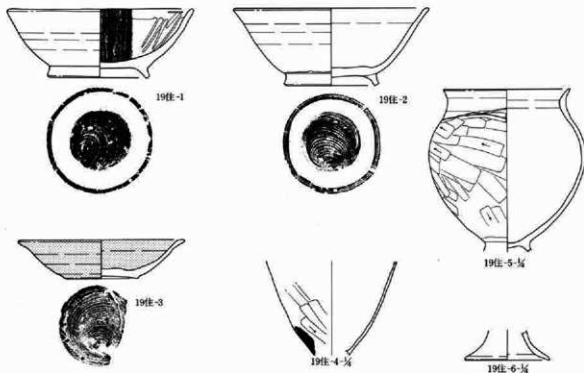
主軸はN96°Eで、東辺推定2.7m、南辺同2.6m、西辺同2.9m、北辺同2.4mを測り、東西辺が僅かに長い長方形を呈する。床面は全体に軟弱であり、カマド及び覆土の土層断面より確認できる程度である。壁は急傾斜で、確認面までの壁高は30cmを測る。調査時においては床面を飛ばしてしまったため明瞭ではないが、断面には東辺と南辺に周溝状の掘り込みが見られる。

東壁中央南寄りにカマドが構築されており壁外へ0.3m突出している。袖はなく淡灰褐色粘質土を部分的に敷き固めて基底部をつくり、焼土化した粘質土も見られる。

出土遺物はカマド前面の推定床面直上で須恵器碗(2)、南壁際にやや浮いて黒色土器碗(1)が見られ南西角附近の壁際に土師器台付壺(5)が8cmほど浮いて出土した。またカマド内からは須恵器坏(3)が見られた。覆土中からは土師器壺胴部(4)、同台部(6)が見られた。その他に小破片として、須恵器壺・碗坏片約100片、土師器系統壺・碗坏片

約200片が覆土中から、また釘状鉄製品小片3点が覆土上層で出土した。

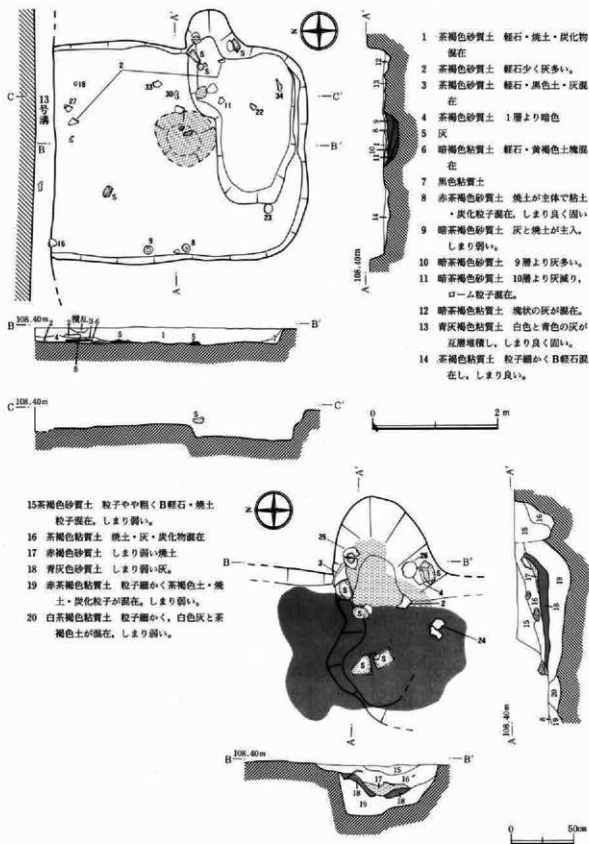
(小安)



第162図 19号住居址出土遺物図

第78表 19号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 黒色土器	床より6cm 完存	19住 -1	口径 15.0 底径 8.2 器高 4.5	体部は緩やかな丸みを 持つて外反する。高台 断面形状。	外：回転横ナデ。 内：口縁部横ミダギ、体部～底 部縦ミダギ。底部右回転糸切 り痕、高台部両側強い横ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
埴 須恵器	床面直上 口縁部～底部 片残存	19住 -2	口径 15.8 底径 7.7 器高 6.2	大形で深い。体部は薄 く一定し直線的に外反。 高台断面方形。	内外：回転横ナデ。底部右回 転糸切り痕。高台部の両側強 いナデ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 暗灰色。	
埴 須恵器	カマド内 口縁部～底部 片残存	19住 -3	口径 13.4 底径 6.0 器高 3.1	体部緩やかに外反。 口唇部少し肥厚し外反。 底部少し上げ底状。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り後ナデ調 整。	緻密。 硬質、中性炎。 鈍い褐色。	
台付 土器	覆土 胴部	19住 -4	—	器壁は薄く一定。 胴部直線的に立ち上る。	外：縦ヘラクスリ。 内：ヘラナデ。	微砂粒を含む。硬 質酸化、鈍い褐色。	
台付 土器	床より8cm 口縁部～底部 片残存	19住 -5	口径 13.4	口縁部は緩い、コ字状 を呈し、胴部中位に最 大径を持つ。	外：口縁部横ナデ、胴部下半 部縦ヘラクスリ後、上半部斜 ヘラクスリ、胴部強いナデ付 け。 内：口縁部～胴部横ナデ、胴 部ヘラナデ、ヘラアテ痕。	白色微粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	
台付 土器	覆土 台部	19住 -6	—	八字状に開らく。	内外：横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。	色：明赤褐色。



第163図 23号住居址平面断面図

23号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北側で13号溝と重複しており、13号溝が新しい。

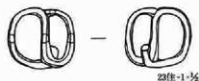
東西辺は約3.3mを測り、南北辺は不明だが4m以上はあると思われる、全体には隅丸方形を呈する。主軸方位はN90°Eを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、床より確認面までは約20～30cmである。床面は平坦だがそれほど硬くなく、特に南側と西側ではその傾向が強い。

カマドは東辺のやや南寄りに位置し、プラン外に60cmほど煙道部分が楕円状に張り出す。比較的残存状態は良かったが、覆土中には全く粘土がなく袖も検出されなかった。焚口部分には10×15×5cmほどの角柱状土塊があり焼けていた。焚口の天上に使われたものと思われる。また燃焼部両壁には長さ20cmほどの河原石を壁に立たせ、その内側に平瓦(3・4)がそれぞれ組み合わせられて立った状態で検出された。天上を支える側柱の機能と思われる、全体には石組瓦補強構造でカマドを構築したと考えられる。

カマド前面から、灰層の下に焼土・炭化粒子を混じえ多量の土器片を含む茶褐色土を覆土とする掘り込みが、南壁中央部分まで続いている。上面には張り床の硬化面がなく、床からの深さは10～20cmほどである。カマド使用時には埋っていたことは確実だが、床下の土壇ではなく性格は不明である。また床面中央には上幅約1m、深さ20cm強の円形状の掘り込みがあった。厚さ2cmの張り床の下には焼土を含む灰がレンズ状に堆積していた。なお張り床の上には長さ15cmほどの円筒状河原石が密着していた。

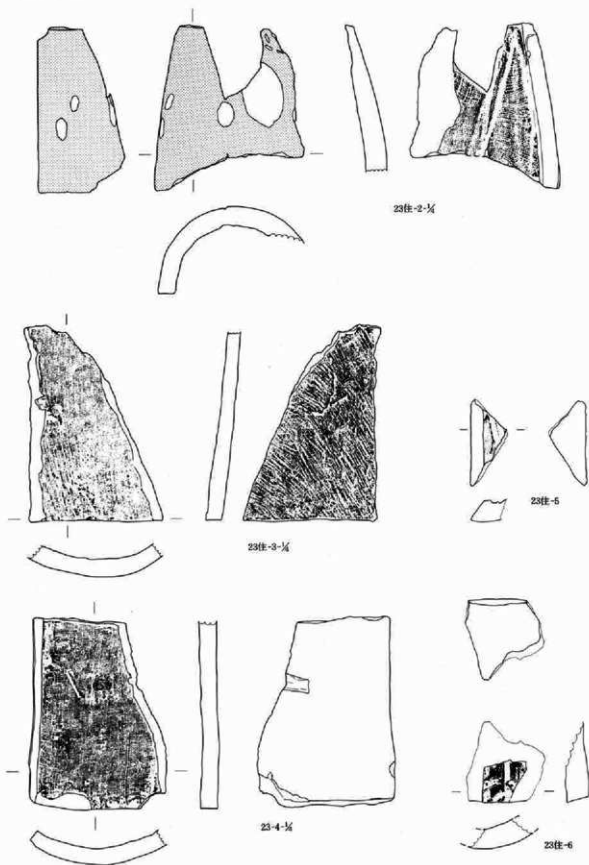
全体に遺物の量は多く、カマド及びその前面・北壁側・西壁際に集中が見られる。しかしカマド内と北壁側の丸瓦片(2)は接合するため、焼絶時にカマドが破壊された可能性が考えられる。カマド内からは瓦類以外に、灰軸塊(21)、須惠器皿(24・25・26)、同塊(15・17・19)、同坏(10・12・13・14)、土師器壺(31・32・35・36)、同坏(28・29)、そして不明鉄製品(1)が見られた。カマド右前面の掘り込みからは、底よりやや浮いて須惠器塊坏(11・20・22)と土師器壺(34)が出土しているが、後者はカマド内の破片とも接合している。またカマド前面の床より10cm以上浮いて土師器壺(30・33)が見られたが、両者とも同様にカマド内破片と接合した。北壁際からはやや浮いて須惠器壺(27)、同塊(16・18)が、西壁際からはやはり少し浮いて須惠器坏(8・9)、同皿(23)が出土している。覆土中からは須惠器坏(7)、上層からは瓦片(5・6)が見られた。他に小破片として須惠器塊坏・壺片約200片、土師器系統壺・坏片約500片、そして刀子状・釘状の鉄製品小片5片が覆土中より出土している。(板井)



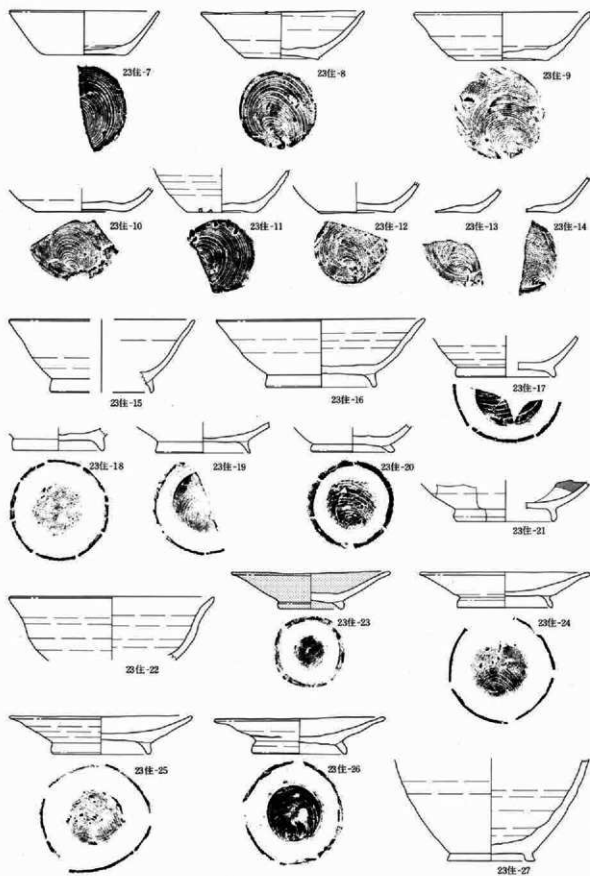
第164図 23号住居址出土遺物図(1)

第79表 23号住居址出土遺物観察表 (1)

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
8字形鉄製品	カマド灰土	23住-1	3.5	3.1	0.8	断面0.3×0.5cmの長方形の鉄棒を8字状に折り曲げ、欠損している先端は上方を向く。	鉄具の一種か。

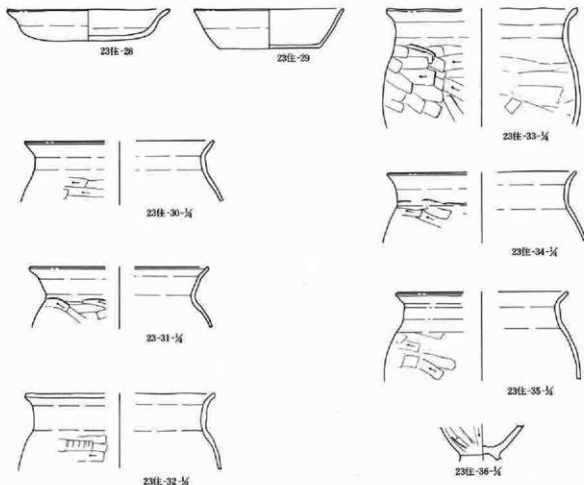


第165圖 23号住居址出土遺物(2)



第166図 23号住居址出土遺物図(3)

第IV章 雨壺遺跡



第167図 23号住居址出土遺物(4)

第80表 23号住居址出土遺物観察表 (2)

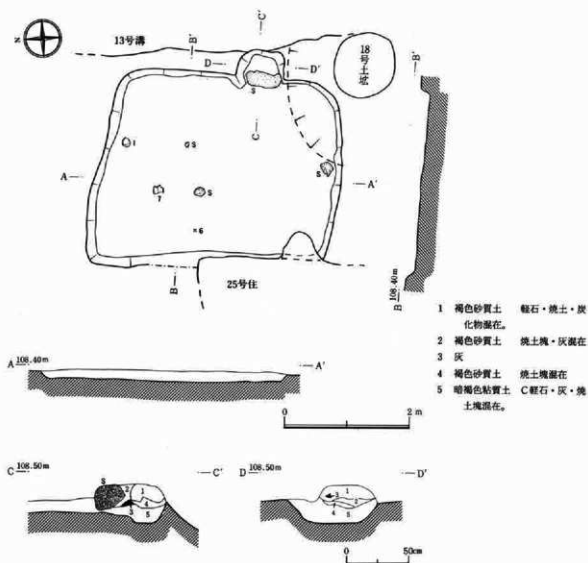
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
丸瓦	カマド床より14cm・床面直上へ残存。	23住-2	—	上部器壁厚く下位に向い肥厚。各側面に明瞭な稜。表面極めて平滑。	外：素文。横ナゲ後、縦へラナゲ調整。内：布目痕。重水痕。各側端部へラ切り。	砂粒・気泡を含む。硬質、中性灰。鈍い褐色。	側部二次的研磨。
平瓦	カマド床直上へ残存。	23住-3	—	器壁ほぼ一定。側面に明瞭な稜。	外：布目痕。重水痕。内：平行状の叩き痕が密。側端部へラ切り、粘土紐巻上げ。	径3cmの礫を含む。硬質、外：中性灰、内：還元。灰褐色。	
平瓦	カマド床直上へ残存。	23住-4	—	器壁側部やや薄く、中央僅かに肥厚。左側面稜削られ鈍内。	表：布目痕。周縁部へラナゲ。裏：不定方向のナゲ。側端部へラ切り。粘土紐巻上げ。	径1cmの砂礫を含む。硬質、還元。灰色。	
平瓦	覆土上層端部小破片	23住-5	—	側端部、やや下方に反る。稜明瞭。	表：布目痕。裏：平行状の叩き後、側端部横ナゲ。側端部へラ切り。	砂粒・気泡を含む。硬質、還元。灰色。	No 6 と同一個体。
平瓦	覆土上層端部小破片	23住-6	—	下端部、稜ややあまい。	表：布目痕。裏：平行状叩き後、側端部横ナゲ。側端部へラ切り。	砂粒を含む。硬質、外：還元、内：酸化。灰色。	

第81表 23号住居址出土遺物観察表 (3)

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏須恵器	覆土 互残存	23住 -7	底径	6.8 器高 3.5	体部は直線的に外反する。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切痕。糸切後ナデ調整。	緻密。軟質、酸化。灰黄色。	
坏須恵器	床より8cm 完存	23住 -8	口径 底径	13.2 6.0 器高 3.9	体部は直線的に外反。底部は上げ底状で僅かに作り出しを持つ。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。	緻密。硬質。還元。灰色。	
坏須恵器	床より8cm 互残存	23住 -9	口径 底径	14.0 7.4 器高 3.8	体部は緩やかな丸みを持って外反。口唇部や外方に肥厚する。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。	砂粒を含む。硬質。還元。灰白色。	
坏須恵器	カマド灰上 互残存	23住 -10	——	——	体部は緩やかに外反。上げ底。	内外：回転横ナデ。底部左回転糸切り痕。糸切り後ナデ調整。	微砂粒を含む。硬質。還元。灰白色。	
坏須恵器	床より6cm 互残存	23住 -11	底径	5.4	体部は緩やかな丸みを持って外反し。口縁部に向って器壁が薄い。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。	緻密。軟質。還元。黄灰色。	
坏須恵器	カマド覆土 互残存	23住 -12	底径	6.0	体部少し丸く緩やかに外反。底部ヘラアテの作り出し。上げ底。	内外：回転横ナデ。底部左回転糸切り痕。周縁部使用による磨耗。	砂粒を含む。緻密。硬質。還元。暗灰色。	
坏須恵器	カマド灰上 互残存	23住 -13	——	——	器壁底部中央極薄く。体部厚い。上げ底。	内外：回転横ナデ。底部左回転糸切痕。糸切後ナデ調整。	黒色微砂粒を含む。硬質。還元。灰色。	
坏須恵器	カマド灰上 互残存	23住 -14	底径	6.0	器壁底部接合部附近で厚い。口縁部にかげ薄い。体部は緩く外反。	体部内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。糸切り後ナデ調整。	砂粒を含む。硬質。還元。灰色。	
埴須恵器	カマド灰上 互残存	23住 -15	器高	5.8	体部器壁薄く一定。緩やかな丸みで外反。やや外側に開らく付高台。	内外：回転横ナデ。	緻密。硬質。還元。灰色。	
埴須恵器	床より11cm 互残存	23住 -16	口径 底径	15.8 8.0 器高 5.4	体部は緩やかな丸みを持って外反。付け高台。	内外：回転横ナデ。底部回転糸切り後、ナデ調整。高台部横ナデ調整。	砂粒を含む。硬質。還元。灰白色。	
埴須恵器	カマド灰上 互残存	23住 -17	底径	8.0	付け高台。断面三角状。底部右回転糸切り痕。高台部の両側強いナデ。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。高台部の両側強いナデ。	緻密。硬質。還元。灰色。	
埴須恵器	床より2cm 底部のみ	23住 -18	底径	7.4	付け高台。	底部右回転糸切り痕。高台部横ナデ調整。	砂粒を含む。軟質。還元。灰色。	
埴須恵器	カマド灰上 互以下残存	23住 -19	底径	7.6	付け高台。断面三角形で底部鋭い。	内外：回転横ナデ。底部左回転糸切り痕。高台部の両側強いナデ。	緻密。硬質。還元。灰色。	
埴須恵器	貯蔵穴埋土 互以下残存	23住 -20	底径	6.7	付け高台。丸みがあり少し扁平。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。高台部の内側、強いナデ調整。	砂粒を少量含む。軟質。還元。灰色。	
埴灰輪陶器	カマド灰上 互以下残存	23住 -21	——	——	付け高台。断面三日月状を呈する。	内外：回転横ナデ。底部ヘラ調整。	白色砂粒少量含む。緻密。硬質。還元。色：灰色。	剛毛塗施軸。
埴須恵器	床より5cm 互残存	23住 -22	口径	16.4	体部は緩やかな丸みを持ち。口縁更に外反。	内外：回転横ナデ。	硬質。還元。灰色。	

第82表 23号住居址出土遺物観察表 (4)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
皿 須恵器	床より9cm 宛存	23住 -23	口径 12.8 底径 5.4 器高 3.0	付け高台。 体部は大きく外反す る。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。 高台部の両側ナデ調整。	砂粒を含む。 軟質、中性灰。 灰色。	
皿 須恵器	カマド床より 10cm 瓦残存	23住 -24	口径 13.6 底径 7.6 器高 3.0	体部は扁平。口縁部は 水平方向に開らく。 付け高台。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。 高台部横ナデ調整。	砂粒を少量含む。 緻密。軟質、還元。 灰色。	
皿 須恵器	カマド床より 29cm ほぼ宛存	23住 -25	口径 14.6 底径 7.6 器高 3.1	体部は扁平。口縁部は ほぼ水平方向に開らく。 付け高台。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。 高台部横ナデ調整。	砂粒を含む。 緻密。軟質、還元。 灰白色。	
皿 須恵器	カマド床より 20cm 瓦残存	23住 -26	口径 13.8 底径 7.8 器高 3.0	体部中位に弱い稜を持 ち、口縁部はほぼ水平方 向に外反。付け高台。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。 高台はやや粗雑なナデ調整。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰白色。	
壺 須恵器	床より13cm 瓦残存	23住 -27	底径 7.0	幅広く扁平な高台を貼 付。	内外：一回転横ナデ。底部ナデ 調整。	白色粒を少量含む。 緻密。硬質、還元。	色：灰色。
坏 土器器	カマド覆土 瓦残存	23住 -28	口径 13.0 底径 5.8 器高 2.5	体部は扁平で中位に横 ナデによる浅い凹線。 口縁部は短く外反。	外：口縁部横ナデ。体部ヘラ ナデ。底部ヘラクスリ。 内：横ナデ。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い橙褐色。	
坏 土器器	カマド覆土 瓦残存	23住 -29	口径 11.9 底径 8.0 器高 3.1	器壁は薄く一定してい る。体部は緩く外反。 平底。	外：口縁部横ナデ。体部ナデ。 底部ヘラクスリ。 内：横ナデ。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
壺 土器器	床より11cm 瓦以下残存	23住 -30	———	器壁は薄く一定し、口 縁部は断面、コ字状を 呈する。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面へラクスリ。 内：ヘラナデ、断面に輪痕。	硬質、酸化。 明赤褐色。	
壺 土器器	カマド灰上 瓦以下残存	23住 -31	———	器壁は薄く一定。 口縁部断面、コ字状。 口縁部断面、コ字状。	口縁部内外：横ナデ。胴部外 面へラクスリ内面ヘラナデ。	硬質、酸化。 赤褐色。	
壺 土器器	カマド灰上 瓦以下残存	23住 -32	———	器壁は薄く一定し、口 縁部は断面、コ字状を 呈する。	外：口縁部横ナデ。胴部へ ラクスリ。内：口縁部横ナデ、 胴部ヘラナデ。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 明黄褐色。	
壺 土器器	床より12cm・ カマド灰上 瓦残存	23住 -33	———	器壁は薄く一定する。 口縁部は断面くずれ た、コ字状を呈する。	口縁部内外横ナデ。胴部外面 へラクスリ。 内：幅広く単位横ヘラナデ。内 外面ともヘラナデ痕を残す。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
壺 土器器	床より6cm・ カマド灰上 瓦以下残存	23住 -34	———	器壁は薄く一定し、口 縁部は断面、コ字状を 呈する。	口縁部内外横ナデ。胴部外面 へラクスリ。ヘラナデ痕。 内：ヘラナデ。断面輪痕。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	
壺 土器器	カマド覆土 瓦以下残存	23住 -35	———	器壁は薄く一定。口縁 部は断面、コ字状を呈 する。	口縁部内外横ナデ。外：ヘラ 状工具アテの浅い凹線。胴 部外面へラクスリ内面。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 暗赤褐色。	
台付壺 土器器	カマド灰上 瓦以下残存	23住 -36	———	接合部はやや強く括れ 緩く外反して胴部へと 続く。	外：胴部へラクスリ、接合 部横ナデ。 内：ナデ調整。台部ナデ。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	



第168図 24号住居址平断面図

24号住居址 (II区)

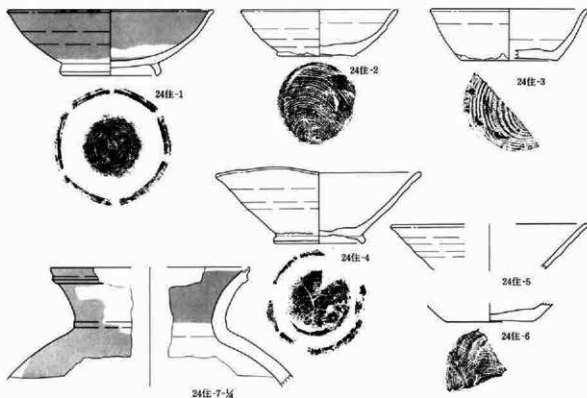
本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認され、西壁南西角部で25号住に、東側で13号溝によりカマド先端を切断される。また南東角で18号土坑と重複しているが、明確な新旧関係は不明である。

主軸はN99°Eで、東辺3.1m、南辺2.6m、西辺3.5m、北辺2.8mを測り南北が長い不整長方形プランを呈する。壁は緩傾斜で壁高0.15mを測る。床面は暗褐色土を踏み固めており、ほとんど平坦であるがやや軟弱。柱穴・周溝は確認されない。

カマドは東壁中央部よりやや南寄りに構築されており、全長1.1m、幅0.8mを測る。袖部は右袖が僅かに痕跡をとどめている。長さ0.6m、幅0.25m、厚さ0.2mの砂岩が焚口面より0.2m浮いた状態で検出され、天井石の可能性が高い。

出土遺物はカマド内より須惠器壺(4)、北側床面より灰釉陶器塊(1)、須惠器甕(7)が床より5cm浮いた状態で検出された。カマド内より須惠器壺(5)、南側床面直上で須惠器坏(6)が検出された。覆土内より須惠器坏片(2・3)が出土している。その他に小破片として須惠器壺・壺坏片約30片、土師器系統壺・壺坏約100片が見られた。

(小安)



第169図 24号住居址出土遺物図

第83表 24号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
灰胎陶器	床より5cm 口縁部～底部 互に残存	24住 —1	口径 16.2 底径 7.6 器高 5.2	大形で端正。器壁の厚 さ一定。体部緩やかな 丸みを持って外反。	内外：回転横ナデ。底部断面 三日月状の高台貼付。高台の 外側強い横ナデ。	緻密。硬質。還元。 灰白色。釉：淡緑 色。	軸：ドブ漬け。 口唇部に煤付 着。
灰胎陶器	覆土 口縁部～底部 互に残存	24住 —2	口径 12.6 底径 6.9 器高 3.7	器高は底部に厚みを持 ち、体部は薄くなりな がら緩やかに外反する。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕、糸切り 後ナデ調整。	砂粒を含む。 硬質。還元。 灰白色。	
灰胎陶器	覆土 口縁部～底部 互に残存	24住 —3	口径 12.6 底径 7.7 器高 4.1	体部は直線的に外反す る。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り痕、糸切り後 用縁部種のヘラ調整。	緻密。 硬質。還元。 灰白色。	
灰胎陶器	カマド覆土 互に残存	24住 —4	口径 16.0 底径 7.5 器高 6.0	底部から直線的に立ち 上り口縁部に至る。 器高は6.0 底部には付け高台。	ロクロ成形。外面に指痕が残 る。口縁部内面は横ナデ。 回転糸切り後に付け高台。	砂粒を多量に含む。 比較的硬質。還元。 明緑灰色。	
灰胎陶器	カマド内 口縁部～体部 互に残存	24住 —5	—	器壁は薄く一定する。 体部は直線的に外反す る。	内外：回転横ナデ。	砂粒やや多く含む。 軟質。還元。灰色。	
灰胎陶器	床面直上 底部	24住 —6	—	底部附近に厚みを持ち 体部は外反する。	外：回転糸切り痕、糸切り後 ナデ調整。内：回転横ナデ。	緻密。硬質。還元。 灰白色。	
灰胎陶器	床より5cm 口縁部～胴部 互以下残存	24住 —7	—	中厚手。胴部は緩い、 く字状を呈す。口唇部 直下に凸部を持つ。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面平行状の甲ヶ直。内 面背面波状のアケ痕。	緻密。 硬質。還元。 灰色。釉：淡黄色。	

25・26号住居址, 45号
土壇 (II区)

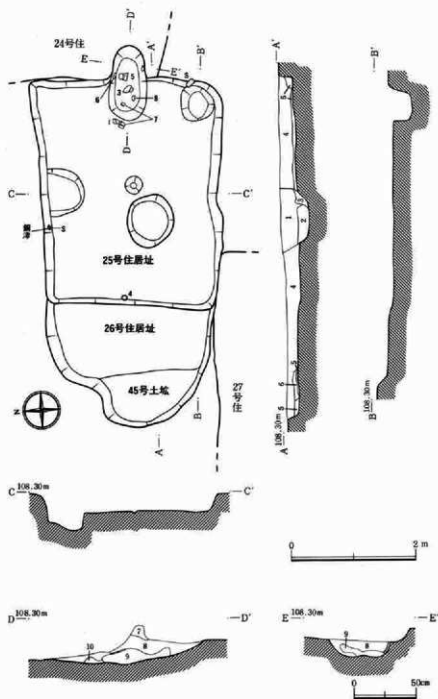
本遺構群は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側で24号住, 南側で27号住とも重複しており, 新旧関係は24・26・27号住はいずれも25号住より古い。45号土壇は26号住に切られている。

25号住居址

本住居址は主軸をN91°Eにとり, 東西約3.4m, 南北2.6~2.9mの東西に若干長い長方形を呈する。床面は良好で柱穴・周溝は確認されていない。

カマドは東壁中央に位置し袖部は検出されなかった。燃焼部底面は85×40cmの長楕円形である。煙道部はやや急傾斜で立ち上がる。貯蔵穴は南東角に位置し40×30cmの不整形円形をなす。また床面中央に底径10cm, 深さ10cmの小ピットが見られた。なお北壁中央に径60cm, 深さ25cmの半円形のピットがあるが, 本住居址との関係は不明である。また小ピット西側の径60cm, 深さ15cmの円形土壇は本住居址を切っている。

遺物はカマド内から土製置きカマド片と思われる土製品4点(1・3・5・6)が出土し, その他に土師質



- | | | |
|----|---------|-----------------------|
| 1 | 褐色砂質土 | 軽石・焼土塊混在。 |
| 2 | 褐色砂質土 | 1層に黒色塊混在。 |
| 3 | 褐色砂質土 | 1層より軽石少い。 |
| 4 | 褐色砂質土 | 1層より軽石多い。 |
| 5 | 黒色粘質土 | 褐色土混在。 |
| 6 | 褐色砂質土 | 4層に灰が混入。 |
| 7 | 暗褐色砂質土 | B軽石・焼土塊・黄色粒子混在。固くしまる。 |
| 8 | 暗褐色粘質土 | B軽石・焼土塊混在。固くしまる。 |
| 9 | 明黒褐色粘質土 | B軽石・焼土塊・灰・炭化物混在。軟かい。 |
| 10 | 暗褐色粘質土 | 灰・焼土粒子混在。 |

第170図 25・26号住居址, 45号土壇平面図

の壘片（7・8）が見られた。また西壁際から土師質土器壘底部（4）が床より9cmのレベルで出土した。なお同一の置きカマド片と思われる（2）は18号土塚覆土より出土し、（7）の接合破片は28号住の床より9cmのレベルで検出されている。また北壁際やや西寄りの床より9cmのレベルから銅滓が、中央部の小ピットの覆土中から炭化材と共に銅滓約10点が見られた。その他に覆土中より小破片として須恵器壺壘・壘片約20片、土師器系統壘・壘片約50片があった。

以上により本住居址は銅製品工房址であった可能性が考えられ、カマドは珍しい置きカマドを使用していた特異な性格が想定できる。また廃絶状態はむしろ人為的な状況を推定させられる。

26号住居址

本住居址は西側部分しか残っていないため住居址と断定し難い点もあるが、床面の状態から一応住居址として調査時は把握した。確認面から床までの深さは北側で25cm、南側で15cmほどである。また25号住床面とのレベル差は5cm程度である。南北の長さは約2.5mを測る。

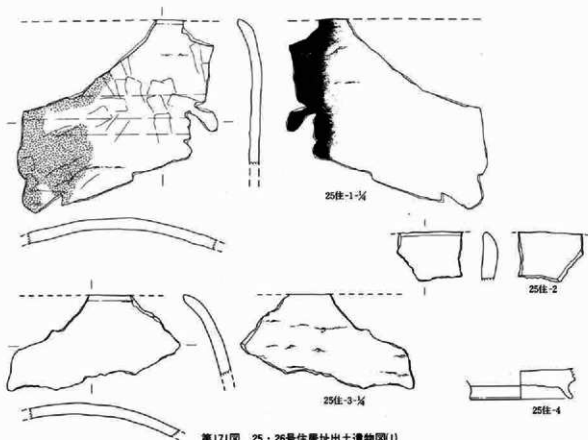
遺物は土師器壘片（1）が1点覆土中より見られただけである。

25号住と本住居址の覆土はほとんど差がなく、25号住の張り出し部分の可能性も考えられる。

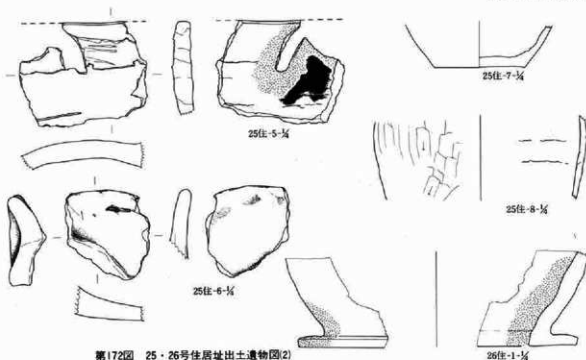
45号土塚

本土塚は26号住に切られて南北幅1.5mの半円形の形状しか分らない。底は均様で26号住床面とレベル差がない。遺物は全く見られなかった。

覆土もほとんど26号住に似るため、26号住と併せて25号住の張り出しの可能性も考えられる。（長谷部）



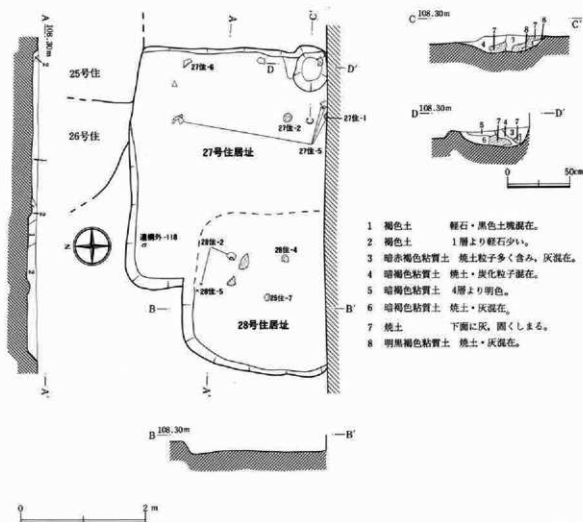
第171図 25・26号住居址出土遺物(1)



第172図 25・26号住居址出土遺物(図2)

第64表 25・26号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕 カマド	床面直上 焚口部口縁	25住 —1	—	胴部から口縁にかけ括 れなく、口縁僅かに肥 厚し外反。	外：口縁横ナデ、胴部指オサ エ後、不定方向ヘラナデ。 内：幅広い横ナデ、輪横痕。	砂粒やや多く含む。 硬質、酸化。 鈍い褐色。	外面：二次焼 成。内面：煤 付着。
甕 カマド	18土壇覆土 焚口部口縁	25住 —2	—	僅かに肥厚して外反す る。	内外：横ナデ。	砂粒やや多く含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	色：鈍い黄褐 色。
甕 カマド	床より9cm 焚口部口縁	25住 —3	—	No.1と同じ	No.1と同じ	No.1と同じ 褐色。	
埴 土甕 土甕	床より9cm 底部	25住 —4	直径 8.0	底部の器壁厚い。高台 断面三角形。付け高台。	接合部両側入念な横ナデ。 内：縦方向密なミガキ。	砂粒含む。硬質、 酸化。鈍い黄褐色。	内面黒斑。
甕 カマド	床面直上 器接部口縁	25住 —5	—	口縁水平に面取り。内 外面明瞭な稜。口縁下 把手刺離成。器壁厚く 右側特に肥大化傾向。	外：口縁面取り後軽い横ナ デ。把手接合部横比儀。体部 不定方向ヘラナデ、指ナデ。 内：輪横痕、指オサエ、ナデ。	砂粒多く含む。 硬質、酸化。 褐色。	内面：二次焼 成。
甕 カマド	床より12cm 把手	25住 —6	—	端部丸く右側でやや下 に曲る。接合部左側大き く上に曲る。器壁厚い。	上：端部輪横痕。指オサエ。 接合部指ナデ。 下：指オサエ、ナデ。	砂粒多く含む。 硬質、酸化。 褐色。	両面：高熱後 二次焼成。
甕 土甕	床より1cm 底部	25住 —7	直径 9.4	中厚手。少し上げ底状 を呈する。	外：縦ヘラナデ。下端→ヘラ ケズリ。内：横ナデ。	砂粒やや多く含む。 硬質、酸化。褐色。	底部に黒斑。
甕 土甕	床より1cm 胴部	25住 —8	—	僅かな膨らみを持って 立ち上がる。	外：1ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。褐色。	No.7と同一個 体。
甕 土甕	掘り方覆土 体部~底部	26住 —1	—	器壁は厚い。胴部は緩 やかに外反。底部断面 方形の跡が下端から水 平に張り出す。	外：幅広い単位の横ナデ、調 状部分へラ調整。 内：幅広い単位の横ナデ。下 端ヘラナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 褐色。	内外面：二次 焼成。



第173図 27・28号住居址平面断面図

27・28号住居址 (II区)

本住居址群は第⑥層黒褐色粘質土面で確認された。27号住が古く28号住が新しい。また27号住は25・26号住に切れられ、東側では16号溝とやや近接している。

27号住居址

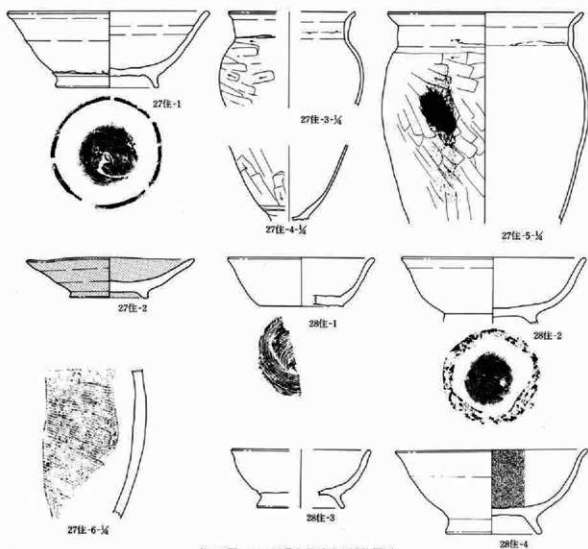
本住居址は東西3.6m、南北は3m以上の方形もしくは長方形の平面形をもち、主軸方位はN91°Eを測る。床面は良好だが柱穴・周溝は検出されなかった。カマドは東壁に位置し燃焼部は壁内に設置されている。黒茶褐色粘質土の地山を長さ50cm、幅20cmほど掘り残して袖としている。燃焼部は底径40cmの円形を呈している。西壁の推定延長部分も明瞭な壁が確認できていない。

遺物は比較的多く、カマド内からは土師器壺(3・5)、同付壺(4)、またカマド前面からはほぼ直上で須恵器皿(2)、やや浮いて須恵器塊(1)が見られ、東壁近く北寄りからは須恵器壺片(6)がやや浮いて出土した。また覆土中より刀子状及び針状各1点の鉄製品小片、須恵器壺・塊坏片約100片、土師器系統壺・塊坏片約100片の小破片が見られた。なお北西角近くの床より8cm浮いた覆土中より黒曜石尖頭器(遺構外-118 331頁第298図)が出土している。

28号住居址

本住居址は西壁及び北壁西側は10～15cm程度確認面からの深さをもっているが、東側は北東角を中心としてかなり不明瞭である。東西辺約2.5m、北辺走向約N90°Eを測り、隅丸方形を呈すると思われる。顕著なピットあるいはカマド址等は検出されなかった。

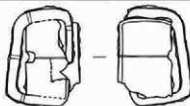
遺物は北壁際中央附近の床面直上で鉄製品(5)、床よりやや浮いて土師質土器、埴(2)、黒色土器埴(4)が出土している。床より9cmのレベルで出土した土師器壺片(25住-7)は25号住の遺物と接合した。土師質土器坏(1)は掘り方から、同埴(3)は覆土中より検出された。また覆土中より須恵器壺壺・埴坏片約100片、土師器系統壺片約100片の小破片が見られた。(長谷部)



第174図 27・28号住居址出土遺物図(1)

第85表 27・28号住居址出土遺物観察表 (1)

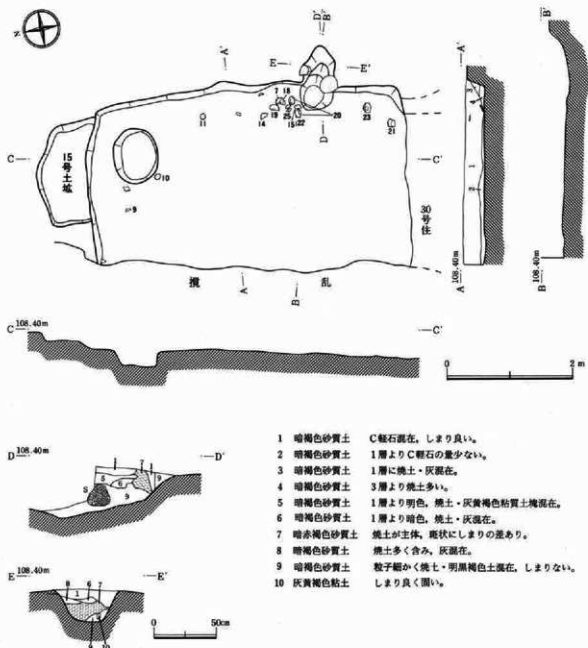
器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
埴 土 器 須 恵 器	床より5cm 口縁部~底部 互残存	27住 —1	口径 16.0 底径 8.0 器高 6.1	大形で深い。底部附近厚みを持つが深壁一定。体部直線的に緩く外反。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り痕。高台部の両側、強い横ナデ。	砂粒を含む。硬質、還元。灰色。	
埴 土 器 須 恵 器	床より1cm ほぼ完存	27住 —2	口径 13.4 底径 6.25 器高 3.2	底部附近に厚みを持ち口縁部に向って外反しながら薄くなる。	内外：回転横ナデ。底部回転糸切り後、扁平な高台貼付。高台部内側強い横ナデ。	砂粒を含む。軟質、中性灰。鈍い黄褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	カマド内 口縁部~胴部 互残存	27住 —3	—————	胴部中位に最大径を持つ。口縁部は、コ字状を呈する。	外：口縁部横ナデ。胴部へラケズリ。内：口縁部横ナデ。胴部ヘラナデ。	微砂粒を含む。硬質、酸化。褐色。	外面に煤付着。
台 付 埴 土 器 須 恵 器	胴部互。以下 残存	27住 —4	—————	器壁は台座接合部を除いて薄く一定。胴部直線的に緩く外反する。	外：1ヘラケズリ。接合部強い横ナデ。内：入念なヘラナデ。	微砂粒を含む。硬質、酸化。赤褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	カマド内及び 床より2cm 口縁部~胴部	27住 —5	口径 20.5 胴径 22.0	胴部中位に最大径を持つ。口縁部は、コ字状を呈する。	外：口縁部横ナデ。胴部へラケズリ。内：口縁部横ナデ。胴部ヘラナデ。	微砂粒を含む。硬質、酸化。褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	床より6cm 胴部	27住 —6	—————	大形の埴。	外：平行状の印キ痕密。内：アテ具によるオサエ後ヘラナデ。	緻密。硬質、還元。灰色。	
坏 土 器 須 恵 器	掘り方覆土 口縁部~底部 互残存	28住 —1	口径 11.7 底径 6.6 器高 3.8	体部は直線的に緩く外反する。	内外：回転横ナデ。底部左回転糸切り痕。糸切り後ナデ調整。	砂粒を含む。硬質、酸化。明褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	床より6cm 口縁部~底部 互残存	28住 —2	口径 14.5	大形で深みを持つ。体部下位に弱い丸みを持って外反する。	内外：回転横ナデ。底部付け高台。高台部の両側は入念なナデ。	やや大粒の砂粒を含む。硬質、酸化。褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	覆土 口縁部~底部 互残存	28住 —3	器高 4.7	断面三角状で端部鋭い高台貼付。体部少し丸みを持って外反。	内外：回転横ナデ。底部高台部の両側を強く横ナデ。	微砂粒を含む。硬質、酸化。赤褐色。	
埴 土 器 須 恵 器	床より3cm 口縁部~底部 互残存	28住 —4	口径 15.3 底径 7.4 器高 6.8	大形で深みを持つ。体部は緩く外反する。高台は台形状に少し外側に張る。	内外：回転横ナデ。内：底部1ミガキ後。体部へ入念なミガキ。底部付け高台。高台部の両側強い横ナデ。	砂粒を含む。硬質、酸化。鈍い赤褐色。	



28住-5-6 第175図 28号住居址出土遺物図(2)

第86表 28号住居址出土遺物観察表 (2)

器 種 ・ 器 形	出土状態	番号	現存最大値 (cm)			形 態 の 特 徴 ・ 遺 存 状 態	備 考
			長さ	幅	厚さ		
鉄 製 鉄 具	床面直上	28住 —5	5.2	3.7	1.0	断面0.2×0.5cmの長方形の鉄棒を3.3×5.0cmの□形に折り曲げ、その片側を中央に径0.7cmの孔を持つ薄い鉄片ではさみこむ。	



第176図 29号住居址・15号土坑平面断面図

29号住居址, 15号土坑 (II区)

本遺構群は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。15号土坑→29号住の順で新しく、29号住は南側で30号住を切っている。また西側は攪乱溝で破壊されている。

29号住居址

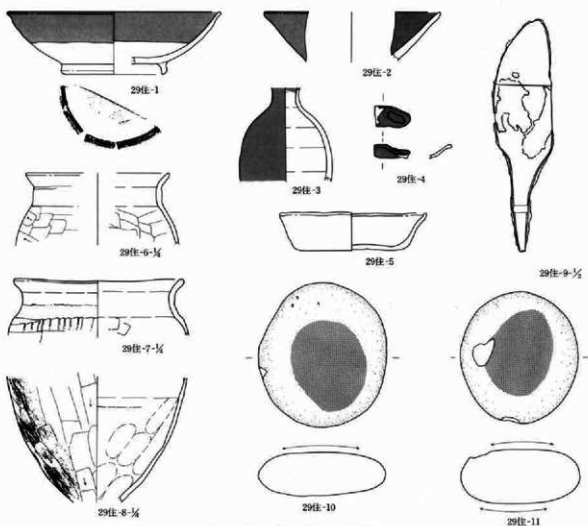
本住居址は南北4.6~5.0m, 東西2.9m以上の中彫らみの長方形/方形を呈し, 主軸はN95°Eを測る。床面は普通で柱穴・周溝は検出されなかった。北東角附近では0.8~0.5mの楕円形の新しい土坑が床面を切っ

ている。カマドは東壁南側に位置し、燃焼部は壁内に設けられているが釉は検出されなかった。燃焼部奥の両壁に河原石が埋められており、カマド構築の基礎として使われたと思われる。

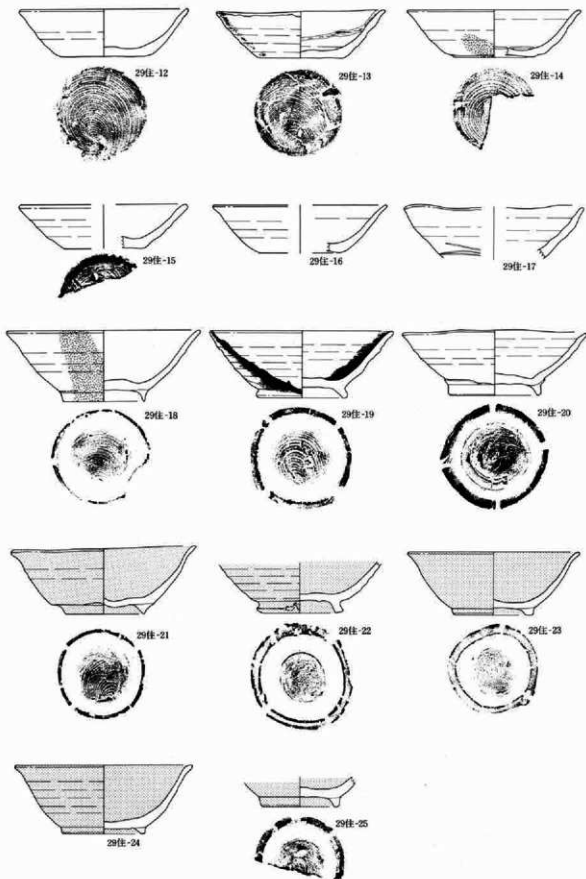
遺物は残りが良く、カマド内からは須恵器碗(24)、灰釉瓶(3)が出土し、カマド前面左側からは須恵器碗(18・19・20・22・25)、同坏(14・15)、土師器壺口縁(7)が床直及び床より10cm以内のレベルで集中して見られた。またカマド前面右側からは須恵器碗(21・23)が床直及びやや浮いて出土し、北側では床近くから扁平形彩石製品(10・11)及び鉄製刀子(9)が検出された。覆土中からは舶載青磁碗片(2)、灰釉碗(1)、同耳皿片(4)、須恵器坏(12・13・16・17)、土師器坏(5)、同壺片(8)、そして掘り方覆土から同壺口縁(6)が見られた。その他に小破片では中世陶器片3片、灰釉陶器碗・皿・壺片8片、須恵器壺蓋・碗坏片約300片、黒色土器碗片3片、土師器系統壺・坏片約600片、さらに釘状鉄製品2片が覆土中より出土した。

15号土坑

東西約1.4mの幅をもち29号住に切られて不整形長方形を呈している。床面は明瞭ではない。須恵器壺片等6片、土師器系統片10片の小破片が覆土中に見られた。(長谷部)



第177図 29号住居址出土遺物(1)



第178図 29号住居址出土遺物(2)

第27表 29号住居址出土遺物観察表 (1)

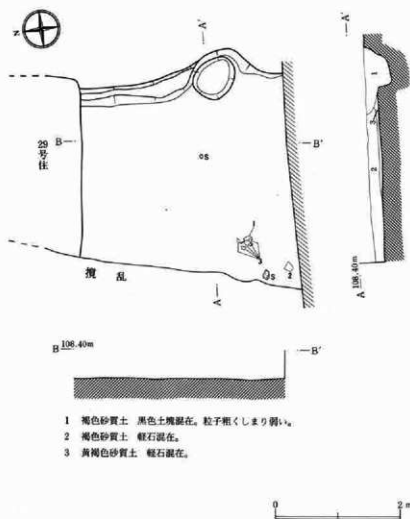
品 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
埴 反輪陶器	覆土 瓦残存	29住 —1	口径 17.1 底径 8.0 器高 5.0	器壁厚さ一定。体部緩い丸みで外反。高台部断面三日月状。	内外：回転横ナデ。 底部回転ヘラ切り痕。	緻密。硬質。還元。 灰白色。釉：黄白色。	釉：ハケ塗施 釉。
埴 青 磁	北側覆土。口 縁以下残存	29住 —2	————	外面口縁下僅かに括れ。器壁下位序々に肥厚。	外：口縁回転横ナデ。内外： 施釉。不定細かい貫入。	砂粒なく気泡疎か。 硬質。還元。	釉：オリーブ 茶。灰白色。
小 瓶 反輪陶器	カマド掘り方 瓦残存	29住 —3	最大径 7.4	小さい頸部から漏斗状に開き胴部に続く。	内：強い横ナデ。	緻密。硬質。還元。灰 白色。釉：淡緑色。	
瓦 皿 反輪陶器	覆土 口縁部破片	29住 —4	————	器壁は薄く一定する。	内外：施釉。	緻密。硬質。還元。灰 白色。釉：淡緑色。	
坏 土 筋 器	覆土 瓦残存	29住 —5	口径 11.8 底径 8.1	平底。器壁薄く一定。口唇部丸く、内側に削いつまみ出し。	内外：手持ち成形。横ナデ。 底部縦ヘラケズリ後、周縁部 若干の調整。	砂粒を含む。 軟質。酸化。 褐色。	
葵 土 筋 器	掘り方覆土 瓦残存	29住 —6	————	口縁部は断面、コ字状を呈する。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面へラケズリ。内面 幅広い横ヘラナデ。	微粒を含む。 硬質。酸化。 鈍い褐色。	
葵 土 筋 器	床より14cm 瓦残存	29住 —7	————	口縁部断面、コ字状を呈する。	口縁部内外：横ナデ。胴部外 面縦ヘラケズリ。	砂粒含む。硬質。 酸化。鈍い黄褐色。	
葵 土 筋 器	覆土 胴下半部瓦残 存	29住 —8	————	器壁は薄く一定する。 丸みを持つ胴部から径 をすぼめて底部に続く。	外：へラケズリ。 内：接合痕を残し、上は横ナ デ、下半部はヘラナデ。	微砂粒を含む。 硬質。酸化。 褐色。	
磨 石	床より2cm	29住 —10	長さ 11.5 幅 10.2 厚さ 3.4	扁平で長円形の礫を使用。	全体に磨滅するが、上面中央 部に磨耗面が見られる。	灰色。	
磨 石	床より4cm	29住 —11	長さ 10.4 幅 9.4 厚さ 4.3	ほぼ円形で、扁平の礫を使用。	全体に磨耗面が見られるが、 上下両面の中央全体に面として 見られる。	灰色。	
坏 須 惠 器	覆土 瓦残存	29住 —12	口径 13.4 底径 7.0 器高 3.8	体部は直線的に外反する。平底。	内外：回転横ナデ。 底部左回転糸切り痕。糸切り 後ナデ調整。	砂粒を少量含む。 硬質。還元。 灰色。	
坏 須 惠 器	掘り方覆土 瓦残存	29住 —13	口径 13.6 底径 6.8 器高 3.9	体部はやや波を打ちながら直線的に外反する。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。糸切り 後ナデ調整。	大粒の砂粒を含む。 軟質。還元。 灰白色。	
坏 須 惠 器	床より1cm 瓦残存	29住 —14	口径 14.0 底径 6.4 器高 3.8	体部緩く外反。底部は少し上げ底、ヘラ調整による鋭い作り出し。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕。糸切り 後ナデ調整。	砂粒を含む。 硬質。還元。 灰色。	
坏 須 惠 器	床より6cm 瓦残存	29住 —15	器高 3.5	体部はやや波を打ちながら外反する。平底。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り痕。	砂粒を少量含む。 硬質酸化。灰白色。	
坏 須 惠 器	掘り方覆土 瓦残存	29住 —16	器高 3.8	底部厚い。口縁部にか け薄く外反。上げ底。	内外：回転横ナデ。 底部糸切り痕。	緻密。硬質。還元。 灰白色。	
坏 須 惠 器	覆土 瓦残存	29住 —17	————	体部は緩やかな丸みを持ち、深みがある。	内外：回転横ナデ。	緻密。硬質。還元。 灰色。	

第88表 29号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)			形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
			口径	底径	器高				
埴須恵器	床より5cm 片残存	29住 -18	口径 15.6 底径 6.6 器高 5.6	大形で深い。体部やや 波状に直線的な外反。 高台断面三角形。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の両側、強いナデ。	緻密。 硬質、還元。 灰白色。			
埴須恵器	床より7cm 片残存	29住 -19	口径 14.7 底径 7.1 器高 5.3	体部は波を打ちながら 直線的に外反。高台断 面台形、外に張る。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。	砂粒を少量含む。 硬質、還元。灰色。	外面に黒斑。		
埴須恵器	床より2cm 片残存	29住 -20	口径 14.7 底径 7.4 器高 4.9	体部はやや波を打ちな がら直線的に外反する。 高台断面台形。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の内側、強い横ナデ。	緻密。 硬質、還元。 灰色。			
埴須恵器	床面直上 片残存	29住 -21	口径 14.6 底径 6.3 器高 5.4	大形で深い。底部立ち 上がりナデの弱い横。 高台断面三角形低い。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の両側、強いナデ。	砂粒を含む。 軟質、中性炎。 洗黄色。			
埴須恵器	床より8cm 片残存	29住 -22	口径 6.5	粗雑な作り。体部波状 に緩く外反。 高台断面台形、横あり。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の両側強いナデ調整。	砂粒を多く含む。 硬質、中性炎。 洗黄色。			
埴須恵器	床より6cm 片残存	29住 -23	口径 13.6 底径 6.3 器高 5.0	体部底部から緩い丸み で立ち上がり、口縁部更 に外反。高台断面台形。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の両側強いナデ調整。	砂粒を少量含む。 硬質、中性炎。 洗黄色。	内外面に黒斑 あり。		
埴須恵器	カマド灰上 片残存	29住 -24	口径 14.0 底径 6.6 器高 5.5	体部緩い丸みで外反。 口唇部外反へ少し肥厚。 高台断面台形。	内外：回転ナデ。底部ナデ調 整。	砂粒を少量含む。 硬質、中性炎。 洗黄色。	内外面に黒斑 あり。		
埴須恵器	床より3cm 片残存	29住 -25	口径 6.2	付け高台、断面台形。	内外：回転横ナデ。底部回 転未切り痕。高台両側強いナデ。	砂粒を含む。硬質 中性炎。洗黄色。	黒斑あり。		

第89表 29号住居址出土遺物観察表 (3)

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値 (cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
鉄製刀子	床より1cm	29住 -9	12.4	3.0	0.5	刃部長さ7.5cmの扁平片刃の刃状形をなし、断面方形長さ約4cmの茎が付く。	完存。



第179図 30号住居址平面断面図

30号住居址(II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北側で29号住に切られており、西側で攪乱溝に破壊されている。

東西は3.2m以上、南北は3.5m以上あり、方形/長方形の平面形が想定される。東壁に直交する軸はN86°Eを測る。確認面より床面まで25cmほどの深さだが、東壁北側には床より10~15cmの高さでやや平坦なテラス状の部分が見られる。床面は全体に平坦で均一である。

東壁中央部分は壁外へ半分張り出す形で径60×45cmほどの楕円形状の土坑に切られている。深さは床より15~20cm深い。この土坑に破壊される以前に、ここにカマドが存在していた可能性を示す証拠は、得られなかった。

遺物は南西側に集中しており、床より10cm以上浮いて土師

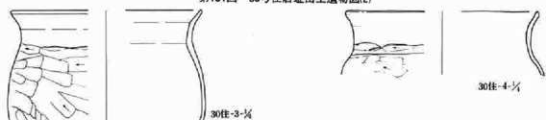
器(3)、須恵器環(1)がまとまり、少し離れて須恵器片(2)が床より8cmのレベルで出土している。覆土中には土師器甕口縁(4)が見られた他はほとんど見られなかった。

本住居址はカマドの存在が不明瞭であり、遺物の出土状態も通常とはやや異なるため竪穴状遺構の可能性も考えられるが、床面の状態が良好なため住居址として扱った。(長谷部)



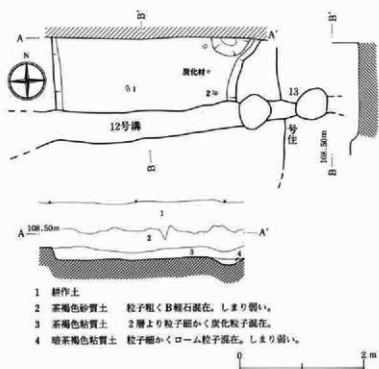
第181図 30号住居址出土遺物(1)

第181図 30号住居址出土遺物(2)



第90表 30号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	床より14cm 口縁部～底部 瓦残存	30住 —1	口径 12.0 底径 8.2 器高 3.5	体部は直線的に緩く外反する。	内外：回転横ナデ。 底部回転赤切り痕、赤切り横ナデ調整。	白色微粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	口唇部に煤付着。
須恵器	床より8cm 胴部	30住 —2	—	胴部上半部の破片。	外：平行状の印キ痕。 内：青黄流文のアラ横。	緻密、硬質、還元。 青灰色。	
埴土器	床より12cm 口縁部～胴部 瓦残存	30住 —3	—	口縁部は緩い、コ字状を呈する。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面～ヘラケズリ、内面ヘラナデ、ヘラアテ痕。	白色微粒を含む。 硬質、酸化。 明赤褐色。	
埴土器	覆土 口縁部～胴部 瓦以下残存	30住 —4	—	口縁部はくずれた、コ字状を呈する。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面横方向ヘラケズリ。	微粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	



第182図 31号住居址断面図

なくカマドかどうかは不明。

遺物は東側床近くから須恵器碗(1・2)が見られた以外は、東壁近くで炭化材小片が数点出土しただけである。他に灰陶陶器碗片・土師器壺片各1片の小破片が出ている。

(坂井)

31号住居址(II区)

本住居址は第⑩層黒茶褐色粘質土面で確認された。南側で12号溝と重複しており確実な新旧関係は不明だが、12号溝が新しい可能性が高い。また東側では13号住と近接している。北半分は調査範囲外である。東西は約2.6mで主軸はN70°Eを測るのが確実ではない。

壁の残りは悪く、東壁で確認面まで約15cm、西壁では約5cmしかない。床は地山の暗茶褐色粘質土をたいて、平坦で比較的硬い。

東壁中央と推定される部分に、径60cm、深さ10cmの浅い掘り込みが壁外に張り出した形で検出された。本住居に伴うものではあるが、埴土等

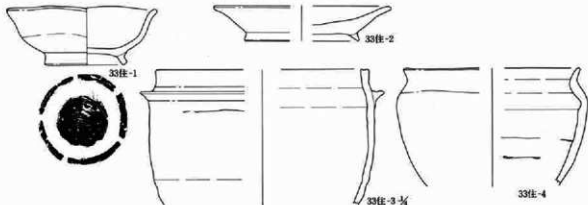
第183図 31号住居址出土遺物図



第91表 31号住居址出土遺物観察表

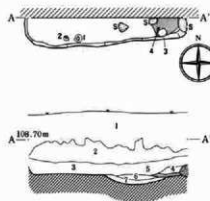
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 須 恵 器	床より4cm 体部～底部 以下残存	31住 -1	底径 7.0	体部は大きく外反して 立ち上がりと思われ る。高台断面三角形。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部両側強い横ナデ。	緑色。 硬質。還元。 灰白色。	
埴 須 恵 器	床より3cm 底部以下残 存	31住 -2	底径 8.1	接合部附近に厚みを持 つ。高台部は低く、三 角形状を呈する。	外：右回転未切り痕。 高台部の内側強い横ナデ。	微砂粒を含む。 硬質。還元。 灰色。	

第184図 33号住居址出土遺物図



第92表 33号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 土 師 實 土 器	床より4cm 完存	33住 -1	口径 11.8 底径 6.2 器高 4.8	回転未切り後付け高台。 体部の中位に少し丸み を持って外反する。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り痕。 高台部の内側強い横ナデ。	砂粒をやや多く含 む。硬質。酸化。 灰白色。	
皿 須 恵 器	床より8cm 口縁部～底部 以下残存	33住 -2	器高 2.8	底部接合部附近に最大 の厚みを持つ。断面三 角形の高台を貼付。	内外：回転横ナデ。 底部回転未切り痕。 高台部の内側強い横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質。酸化。 灰褐色。	
羽 蓋	床より10cm 口縁部～胴部 以下残存	33住 -3	—	胴部上位に最大径を持 つ。口縁部短く、口唇 部は平直。脚は断面三 角状で水平に張る。	内外：横ナデ。 外面及び断面に輪痕を残 す。	砂粒を少量含む。 硬質。酸化。 鈍い黄褐色。	
小形 土 師 器	床より12cm 口縁部～胴部 以下残存	33住 -4	—	頸部附近に最大径を持 ち、内壁あり。口縁部 は短く、少し外反する。	外：口縁部横ナデ、胴部主 に横方向へラケズリ。 内：横ナデ、輪痕を残す。	砂粒をやや多く含 む。硬質。酸化。 赤褐色。	



第185図 33号住居址平面断面図

- | | | |
|---|---------|-----------------------|
| 1 | 耕作土 | |
| 2 | 茶褐色砂質土 | 粒子粗くB粒石混在。しまり弱い。 |
| 3 | 茶褐色粘質土 | 2層よりB粒石少い。 |
| 4 | 茶褐色粘質土 | 3層に灰が混在。 |
| 5 | 青白褐色灰 | しまり弱い。 |
| 6 | 暗茶褐色粘質土 | 粒子細かく、C粒石少し混じり、しまり弱い。 |
| 7 | 暗茶褐色粘質土 | 6層中に水平に凝固した砂を含む。 |

33号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北側の大部分が調査範囲外になっており、西側では11号住に近接している。

東西辺は約2.5m強でN85°Eの走向があるが全体の形状は不明。壁は比較的急傾斜で確認面まで15cmほどの高さが残る。床は平坦で地山の暗褐色粘質土をたたいている。

南東角と推定される部分に小児頭

大の石があり、その前面には厚さ3cmの青白色の灰が拡がっていた。カマドの一部と考えられ、灰の下には下部に凝固した砂の堆積する15cmほどの深さの掘り込みが一部見られた。

遺物はカマド前面の灰の上より羽釜片(3)、小形壺片(4)、南壁際西寄りから土師質土器塊(1)、須恵器皿(2)が出土した。覆土中からは、灰釉陶器壺口縁、須恵器小破片約20片、土師器系統小破片約30片が見られた。

(坂井)

35号住居址 (V区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。36号住と重複し、37号住が隣接する。36号住との新旧関係は覆土の相違から本住居の方が新しい。規模は長辺約4.7m、短辺約3.6mで、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN103°Eである。

壁の残存状態は比較的良好であり、掘乱で確認できない北東角附近・北西角附近を除いて、約10~18cmの立ち上がりを確認できた。床面は、ローム塊を含む暗褐色土で構築されており、カマド附近は硬く良好な床であるが、それ以外はやや軟弱である。壁内に柱穴はなく、周溝もないものと推定される。

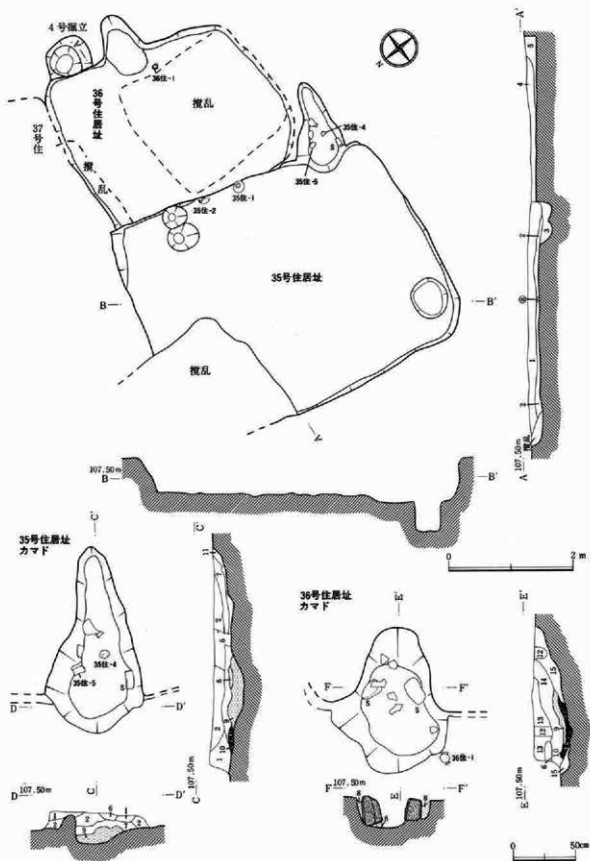
カマドは東壁の南東角近くに設置されており、煙道部を含むカマド全体の張り出しは大きく壁から約120cmである。カマドの残存状態は悪く、袖は痕跡だけの検出であるが、灰白色の粘土で構築されていた。燃焼部・煙道部からは多量の炭化物・焼土が検出された。住居内の南東角附近には、貯蔵穴と推定できるピットがある。規模は底径約50cmで、平面形は円形を呈し、床面からの深さは約50cmである。ピットの覆土は床面直上の住居覆土と類似しているが、ピット上面の覆土はローム塊を含み、居住の最終段階ではピットは埋められ張り床されていたと推定できる。

遺物は須恵器塊(3)、土師質土器皿(4)、土釜(5)などがカマド内から出土している。須恵器塊(1・2)は36号住及び掘乱近くから検出された。他に覆土中から小破片として灰釉片5片、須恵器片約80片、土師器系統約200片が見られた。

(井川)

36号住居址 (V区)

確認面は35号住と同様である。35・37号住、4号掘立と重複している。35号住との新旧関係は覆土の相違から本住居の方が古く、37号住との新旧関係は掘乱のため不明である。4号掘立との新旧関係は覆土により本住



第186図 35・36号住居址平断面図

- 1 暗褐色シルト質土 軽石・有機質含み粒子細かい。 6 灰白色粘質土。 11 褐色粘質土 焼土混じる。
 2 暗褐色シルト質土 1層より明るくローム粒含む。 7 暗褐色粘質土 多量の焼土・炭化物含む。 12 明褐色砂質土 B軽石含む。
 3 暗褐色粘質土 黄褐色土塊含む。 8 焼土。 13 暗褐色粘質土 軽石微石含む。
 4 暗褐色粘質土 1・2層より粗くローム塊含む。 9 焼土と炭化物混在土。 14 暗褐色粘質土 焼土粘土含む。
 5 暗褐色粘質土 有機質含み、軽石・焼土混じる。 10 炭化物。 15 暗褐色粘質土 焼土多く含む。

層の方が新しいと推定される。擾乱のため規模・平面形は不明であるが、隅丸方形になるものと推測される。主軸はN109°Eである。

壁の残存状態は悪く、東壁及び北東角附近が確認できただけであり、立ち上りは約15cmである。床はカマド附近のみの検出であったが、ローム塊を含む暗褐色土で構築されており、比較的硬く良好であった。壁内に柱穴はなく、周溝もないものと推定される。

カマドは東壁中央に設置され、煙道部を含むカマドの張り出しは約60cmである。カマドの残存状態は悪く大部分が壊されているが、張り出し部分の両端に石が立てて放置されていた。カマド内からは多量の炭化物・焼土を検出している。

遺物はカマド前の床面から土師質土器塊(1)が出土し、他にカマド内に須恵器片が見られた。覆土中からは小破片として、灰釉片2片、須恵器片約20片、土師器系統約40片が見られた。(井川)

第187図 35・36号住居址出土遺物図

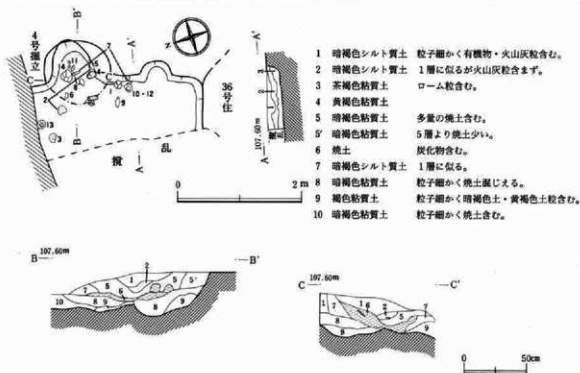


第93表 35・36号住居址出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	床より4cm ほぼ完存	35住 —1	口径 15.2 底径 6.2 器高 7.3	全体に深みあり、体部は直線的に外反。	内外：回転横ナデ。 高台部内外面、強いナデ調整。	大粒の砂粒を含む。硬質、還元。浅黄色。	体部内外面に墨書「土」。
須恵器	床より9cm 片残存	35住 —2	口径 13.4 底径 7.0 器高 4.8	体部は少し丸みを持ち口縁部が外方に反る。	内外：回転横ナデ。 高台部、弱いナデ調整。	砂粒をやや多く含む。硬質、還元。灰黄色。	
須恵器	カマド内 片残存	35住 —3		体部扁平、直線的に外反。	内外：回転横ナデ。	砂粒を多く含む。硬質、中性灰。	色：鈍い黄褐色。
小土師質土器	カマド裏より 8cm 片残存	35住 —4	口径 8.4 底径 5.6 器高 1.6	体部扁平、口径に対して底径が大きい。	内外：回転横ナデ。 底部、右回転糸切り痕。	砂粒を少量含む。軟質、酸化。鈍い褐色。	

第94表 35・36号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土釜	カマド底より 13cm以下	35住 -5	—	厚手、胴部に強いナデ による浅い凹線あり。	口縁部内外：横ナデ。胴部外 面へラケズリ。内面ナデ。	砂粒を多く含む。 硬質酸化。赤褐色。	
焼 土師質土器	床面直上 遺部	36住 -1	底径 6.2	高台部は扁平で断面台 形状。	外：高台部は強いナデ調整。 内：ロクロ回転痕。	砂粒を多く含む。 硬質酸化。暗褐色。	



第188図 37号住居址平面図

37号住居址 (V区)

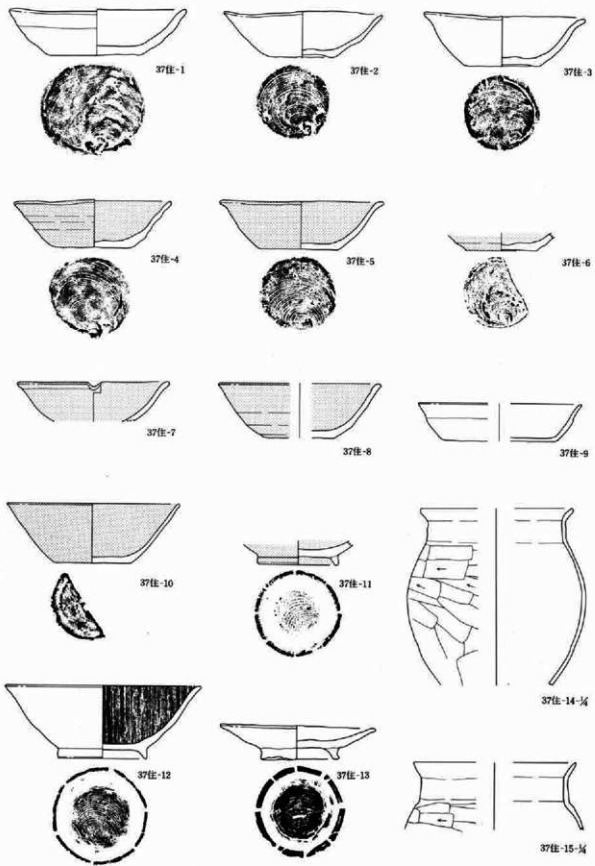
本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。36号住、4号掘立と重複する。36号住との新旧関係は不明であるが、4号掘立との関係は、本住居のカマドが4号掘立を壊して構築されていることから、本住居の方が新しいことがわかる。

規模・平面形は攪乱及び道路により不明であるが、主軸N103°Eの隅丸方形になると推測される。壁は東壁と南東角部分を除き不明であるが、検出部分の立ち上りは約20cmである。床はローム層中に構築されており、一部分であるが比較的硬く良好な床が検出できた。柱穴・周溝は攪乱等のため不明であるが、壁内に柱穴はないものと推測される。

カマドは東壁に設置されており、煙出部を含めた壁外への張り出しは約60cmである。カマドの残存状態は不良であり、袖はほとんど壊されており、カマドの掘り込み及び掘り込み部分に溜った炭化物・焼土のみが確認できた。

遺物の出土はカマド内及びカマドの周辺に集中しており、須恵器坏・碗 (1~8・10・11)、土師器坏 (9)、須恵器皿 (13)、黒色土器碗 (12)、土師器甕 (14・15) などが床・底近くから出土している。他に小破片では、覆土中より須恵器片約10片、土師器系統約70片が見られた。

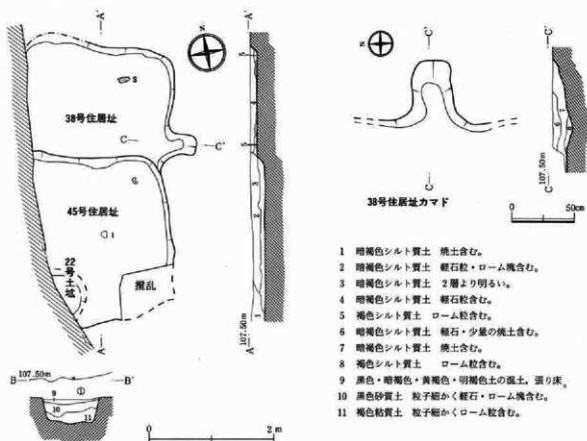
(井川)



第189図 37号住居址出土遺物図

第95表 37号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏須恵器	床より7cm 宛存	37住 -1	口径 13.9 底径 7.2 器高 3.7	体部は扁平、緩い丸みを持つ。底部はほぼ平底状。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り。周縁の一部でヘラナデ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	
坏須恵器	カマド底直上 ほぼ宛存	37住 -2	口径 12.7 底径 5.0 器高 3.7	器壁は薄く一定。体部は緩やかな丸みを持つ。底部は上げ底状。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り。	大粒の砂粒を含む。 硬質、還元。 黄白色。	
坏須恵器	床面直上 ほぼ宛存	37住 -3	口径 12.6 底径 5.4 器高 4.3	やや深みがあり、底径に比して口径が大きい。底部はやや上げ底状。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り。	砂粒をやや多く含む。 硬質、還元。 灰青色。	
坏須恵器	カマド底直上 宛存	37住 -4	口径 12.3 底径 6.0 器高 3.9	体部内外面にロクロ回転による調整痕あり。底部は平底。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り。	微砂粒を含む。 硬質、中性炎。 黄白色。	底部周縁使用による磨れあり。
坏須恵器	カマド底より 7cm 宛存	37住 -5	口径 13.0 底径 6.0 器高 3.9	器壁は薄く一定。体部深みがあり、口唇部僅かに反る。底部平底状。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り。	砂粒を含む。 硬質、中性炎。 黄白色。	底部周縁部使用による磨れあり。
坏須恵器	カマド底直上 底部宛残存	37住 -6	底径 5.7	底部は、僅かに上げ底状。	外：左回転糸切り。 内：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、中性炎、橙色。	内外面に黒斑あり。
埴須恵器	カマド底より 6cm 宛残存	37住 -7	口径 12.0	体部は扁平、緩やかな丸み。口唇部が僅かに外反、片口部を持つ。	内外：回転横ナデ。 片口部工具による軽いオヤエ。	砂粒を含む。 軟質、中性炎。 明褐色。	
坏須恵器	カマド底より 6cm 宛残存	37住 -8	口径 12.7 底径 5.6 器高 4.3	体部外面にロクロ回転による調整痕あり。全体に深みがある。	内外：一回転横ナデ。 底部回転糸切り痕。	砂粒を含む。 軟質、中性炎。 鈍い褐色。	
坏土師器	床より9cm 宛残存	37住 -9	口径 12.9 底径 9.0 器高 3.0	器壁は薄く一定。体部は浅く、口径に比して底径が大きい。	外：口縁部横ナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 明褐色。	
埴須恵器	床より7cm 宛残存	37住 -10	口径 13.6 底径 6.0 器高 4.7	器壁は薄く一定。体部は深みがあり、直線的に外反。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り、高台部剥落。	砂粒を少量含む。 軟質、中性炎。 黄褐色。	外面に黒斑あり。
坏須恵器	カマド底直上 底部のみ	37住 -11	底径 6.4	口端部の端正な高台を貼付。	外：回転糸切り痕。高台の両側ナデ。内：丁寧なミガキ。	やや緻密。 硬質、中性炎、橙色。	内面に黒斑あり。
埴黒色土器	床より7cm ほぼ宛存	37住 -12	口径 15.4 底径 7.0 器高 5.8	器壁は薄く一定。体部は深みがある。付け高台。	外：回転横ナデ。内：ミ研磨。底部右回転糸切り後、高台貼付。両側ナデ調整。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。 外面明褐色。	高台の端部使用による磨れあり。
皿須恵器	床より2cm 宛存	37住 -13	口径 12.4 底径 6.0 器高 2.8	体部中位の内部に割い痕を持つ。付け高台。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り。高台の内側ナデ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	内面中性炎。
坏土師器	カマド底より 7cm 宛残存	37住 -14	—————	口縁部断面、コ字状。最大径を胴部中位。口縁部輪横痕、胴部に接合痕あり。	口縁部内外：横ナデ。胴部外面ヘラケズリ後、上位ヘラケズリ。内面ナデ、ヘラアテ痕あり。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 橙色。	
坏土師器	カマド内 火以下残存	37住 -15	—————	口縁部断面、コ字状。器壁薄い。口縁部に輪横痕あり。	口縁部内外：横ナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 橙色。	



第190図 38・45号住居址、22号土壇平面断面図

38号住居址 (V区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。45号住と重複する。新旧関係は土層断面による覆土の相違により、本住居の方が古い。規模全体は不明であるが、主軸はN106°E、北辺は約2.4mと推定され、平面形は隅丸方形になるものと推測できる。

壁は北壁・東壁が確認できたが、残存状態は悪く、立ち上りは約10cmが認められただけである。床は北東寄りの約1/3が検出されただけであるが、ローム層中に構築されており比較的硬く良好である。柱穴・周溝は不明であるが、壁内柱穴・周溝はないものと推測される。

カマドは東壁に設置されており、壁外への煙道部の掘り込みは約85cmである。カマドの残存状態は非常に悪く、袖は全く検出できず、僅かに焼土を含む暗褐色土が検出できただけである。燃焼部と考えられる部分の床への掘り込みもほとんどない。

遺物は覆土中に小破片として須恵器片3片、土師器系統約30片が見られた。

(井川)

45号住居址 (V区)

38号住と同じ面を確認された。38号住、22号土壇と重複する。22号土壇との関係は、土壇の上面に張り床がある为本住居の方が新しい。規模は不明であるが、平面形は隅丸方形になるものと推測される。

壁は北東角を中心に北壁・東壁が確認できた。立ち上りは約20cmである。床はローム層中に構築されており、硬く良好である。調査範囲内では柱穴・周溝は不明だが、壁内に柱穴はないと推定される。



第191図 45号住居址出土遺物図

複乱及び住居が調査範囲外へ延びるため、カマド・貯蔵穴は不明である。住居内床面直上、南側調査範囲外に延びる焼土層を検出している。なお掘り方の調査で、住居内北西部分から皿状の落ち込みを検出した。

遺物は土師器甕(1)が中央床近くより出土し、覆土中の小破片としては灰軸片3片、須恵器片約100片、土師器系統約200片が見られた。(井川)

22号土坑 (V区)

本土坑は45号住の掘り方調査中に検出した。本土坑の覆土の上層は、ローム塊の混入している土が硬く固められており、45号住の張り床である。西側部分が生活道路の下になるため規模は不明であるが、平面形は円形又は楕円形になるものと推定される。土坑底面はローム層であり、確認面(45号住床面)からの深さは約40cmである。(井川)

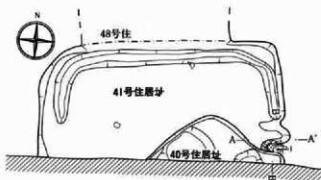
第96表 45号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形質の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	床より6cm以下残存	45住-1	—	胴部上位に最大径を持ち、口縁部は断面縦いコ字状。	外：口縁部横ナゲ、胴部→後→ヘラケズリ。内：口縁部横ナゲ、胴部ヘラアテ葺。	微砂粒を含む。軟質、酸化。鈍い褐色。	口縁部外面に黒斑あり。

40号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、41号住と重複する。本住居が41号住の覆土を切って構築する。規模は南側が調査範囲外にあるため確定されない。覆土は浅間B軽石・ローム粒を少量含む暗褐色土である。壁は急傾斜で、床面は軟弱である。北隅に円形のピットを設ける。

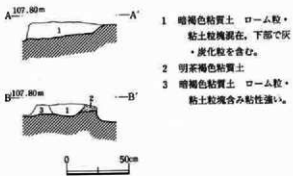
遺物は覆土から須恵器片5片、土師器系統約30片の小破片を検出した。(新井)



41号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、南辺で40号住、北辺で48号住と重複する。規模は南側が調査範囲外であるが、北辺で3.5mを測る。平面形は南側が欠損しているが、主軸N82°Eの隅丸方形を呈すると思われる。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土である。

壁は急傾斜で、床面は全面に粘土を3~5cm張り張り床をしており、北辺側面に壁周溝を検出した。カマドは東辺中央部に設置する。壁を円頂形に掘り込



第192図 40・41号住居址断面図



第193図 41号住居址出土遺物図

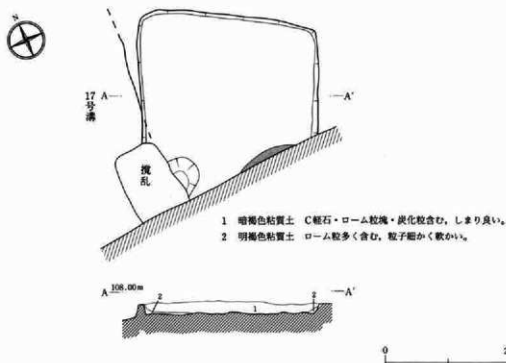
んで、燃焼部は壁外につくり出し、主体部は明茶褐色粘土で構築する。貯蔵穴は南東隅に深さ50cmの円形プランを設ける。

遺物は土師器甕(1)がカマド袖より検出された他は僅かに須恵器片1片、土師器系統5片の小破片が見られただけである。

(新井)

第97表 41号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	床より6cm 割部以下残存	41住 -1	—	割部はほぼ直立に近い。	外：ヘラケズリ後、接合部 附近→ヘラケズリ。内：ナデ。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。褐色。	



第194図 42号住居址平面図

42号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、西辺で17号溝と重複する。規模は南側が調査範囲外で西側に17号溝があるため確定されないが、北辺で2.7mを測り、主軸はN111°Eほどと思われる。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

壁は緩傾斜で、床面は全体に張り床をしており、住居中央部にピットを検出した。カマドは確認されないが、東側に焼土・灰が多く確認されたので東壁にカマドを設置すると思われる。

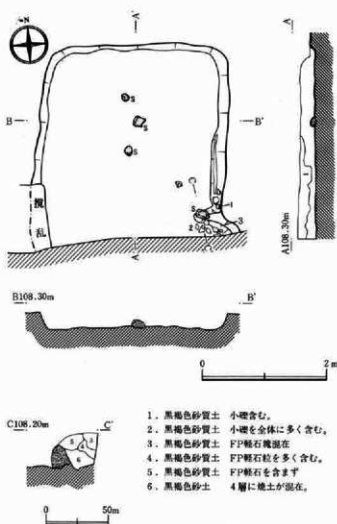


第195図 42号住居址出土遺物図

遺物は須恵器蓋(1)が覆土に見られ、他に小破片として灰釉片2片、須恵器片約30片、土師器系統約50片が見られた。(新井)

第98表 42号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
蓋 須志器	覆土 口縁部 以下残存	42住 -1	—	口縁部断面三角形、つまみ出されている。	内外：回転模ナデ。	精密。 硬質、還元、灰色。	



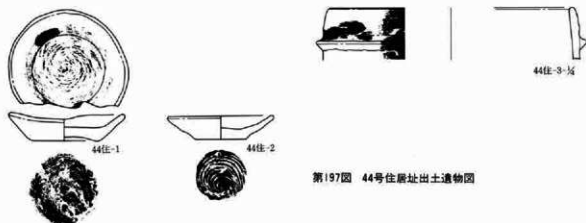
第196図 44号住居址断面面図

44号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。西辺側に54号住、北辺側に62号住が隣接する。規模は調査範囲外にかかる南辺を除き、北辺で2.5m、東・西辺はその一部が2.8m・3.0mである。平面形は南辺側を欠くが主軸N96°Eの推定隅丸方形を呈する。覆土は黒褐色土が一様に見られたが、標名FP軽石により3層に細別できた。壁は緩傾斜で高さ25cm、床面は第⑦層の茶褐色粘質土を踏み固めており、中央部が周囲に比べて若干高い。東辺側のカマド脇で上幅10cm、深さ3cmの壁周溝が検出されたが、全周していた可能性が強い。

東辺南寄りと思われる箇所でカマドが半分ほど確認された。第⑦層の茶褐色粘質土を半円形に壁外に掘り込んで乳白色粘質土を張り付けし主体部を構築する。焚口部の片袖部分には角閃石安山岩の割石が据えられ、さらに面取りした角閃石安山岩が鳥居状に組まれていたと推定される。

遺物はカマド内より土師質土器皿(2)、羽釜(3)、カマド左にやや浮いて土師質土器皿(1)が検出された。覆土中からは小破片として須恵器片約30片、土師器系統約100片が見られた。(女屋)



第197図 44号住居址出土遺物図

第99表 44号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
Ⅲ 土師質 土器	床より10cm 互残存	44住 —1	口径 9.4 底径 5.5 器高 2.1	体部は扁平、口縁に比 して底径が大きい。	内外：横ナデ。 底部右回転ヘラ切り。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い橙色。	内面腐付着。
Ⅲ 土師質 土器	カマド直直上 互残存	44住 —2	口径 8.6 底径 4.0 器高 2.85	体部は扁平、底部少し 作り出し状。	内外：横ナデ。 底部右回転ヘラ切り。	砂粒をやや多量に 含む。軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	
別 釜	カマド直直上 互以下残存	44住 —3	—	口唇部の断面形は丸 い。肩は断面三角形。	内外：横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質、酸化。褐色。	

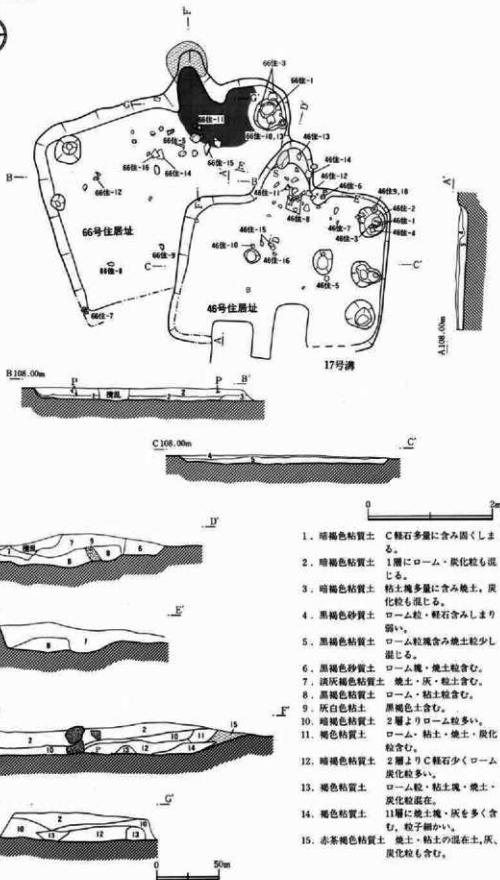
46号住居址 (Ⅳ区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、東辺で66号住、西辺で17号溝と重複する。本住居は66号住の覆土を切って構築し、17号溝により切られている。規模は西辺で17号溝により切られているため確定されないが、東辺で3.0m、南・北辺は2.3m・2.4mである。主軸はN98°Eを測る。覆土はローム・焼土粒を多く含む黒褐色土である。

壁は傾斜斜で、床面ローム層を15cm掘り込んで黒色土とロームの混土で張り床し生活面とする。ピットは4本確認されたが、みな浅く不整形であるため柱穴の可能性は弱い。カマドは東辺に設置する。壁を円頂形に掘り込んで、燃焼部は壁外につくり出し、主体部は灰白色粘土で構築する。貯蔵穴は南東隅に深さ40cmの円形プランで設ける。

遺物はカマド周辺と貯蔵穴に集中しており、カマドとその周辺からは須恵器甕(14)、台付壺(6)、甗(8)、羽釜(12)、土師器甕(11・13)が見られ、貯蔵穴内からは須恵器壺(1・2・3・4)、灰釉碗(7)、そしてやや浮いて土師器杯(18)、土師(9)が出土した。中央部床面直上で須恵器杯(5)が見られ、その周辺で羽釜(10)、土師器杯(15)、須恵器杯(16)が出土した。これらの遺物には混入したと思われるものもあるが、出土状態より考えて一括して本住居に扱った。他に覆土中から小破片として灰釉片9片、須恵器片約70片、土師器系統約100片が検出されている。

(新井)



D 108.00m



E 108.00m



F 108.00m



G 108.00m



0 50m

1. 暗褐色粘質土 C 軽石多量に含み固くしまる。
2. 暗褐色粘質土 1層にローム・炭化粒も混じる。
3. 暗褐色粘質土 粘土塊多量に含み焼土、炭化粒も混じる。
4. 黒褐色砂質土 ローム粒・軽石含みしまり弱い。
5. 黒褐色粘質土 ローム粒塊含み焼土粒少し混じる。
6. 黒褐色砂質土 ローム塊・焼土粒含む。
7. 淡灰褐色粘質土 焼土・灰・粒土含む。
8. 黒褐色粘質土 ローム・粘土粒含む。
9. 灰白色粘土 黒褐色土含む。
10. 暗褐色粘質土 2層よりローム粒多い。
11. 褐色粘質土 ローム・粘土・焼土・炭化粒含む。
12. 暗褐色粘質土 2層よりC 軽石少くローム炭化粒多い。
13. 褐色粘質土 ローム塊・粘土塊・焼土・炭化粒混在。
14. 褐色粘質土 11層に焼土塊・灰を多く含む。粒子細かい。
15. 赤茶褐色粘質土 焼土・粘土の混在土、灰、炭化粒も含む。

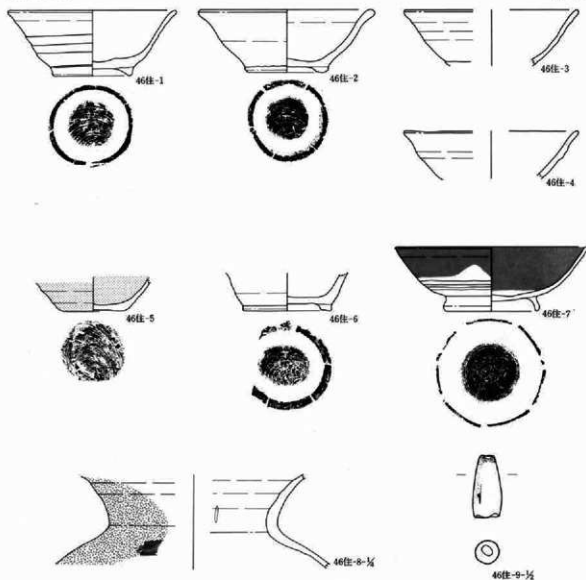
第198図 46・66号住居址平面図

66号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、東辺で70号住、西辺で46号住と重複し、53号住と隣接する。本住居は70号住の覆土を切って構築し、46号住により切られている。規模は西辺の46号住により切られているため確定されないが、長軸3.9m、短軸2.9mを測り、主軸はN74°Eを呈する。覆土はローム粒・浅間C軽石を多く含む暗褐色土である。

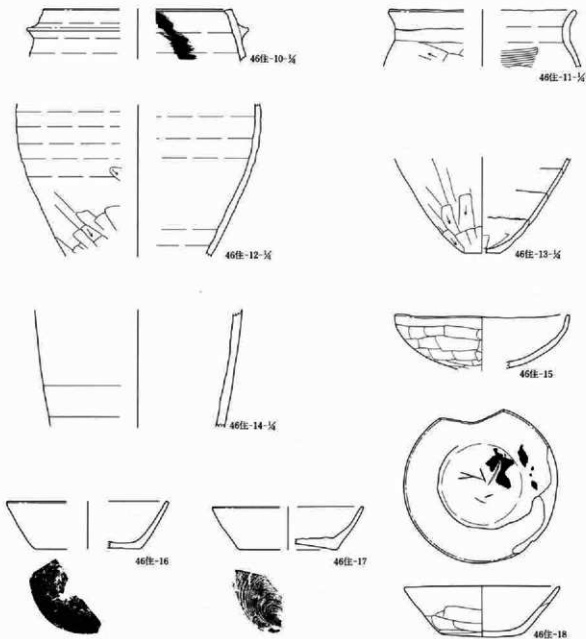
壁は緩傾斜で、床面はローム層を掘り込み、黒色土とロームの混土で全面を張り床し生活面とする。カマドは東辺に設置する。壁を円頂形に掘り込んで、燃焼部は壁外につくり出し、主体部は灰白色粘土で構築する。貯蔵穴は南東隅に深さ20cmの円形プランを設け、北東隅に深さ30cmの円形ピットを検出した。

遺物はカマド周辺から須恵器坏(2)、盤(5)、壺(6)、甕(10・14・15・16)、土師器坏(3・4)が検出され、貯蔵穴からは須恵器坏(1)、壺(13)が出土し、北西側床面から灰釉皿(8)、須恵器蓋(9)、土師器甕(7)が見られた。覆土中からは小破片として灰釉片3片、須恵器片約15片、土師器系統約120片が検出された。(新井)



第199図 46号住居址出土遺物図(1)

第IV章 兩登遺跡



第200図 46号住居址出土遺物図(2)

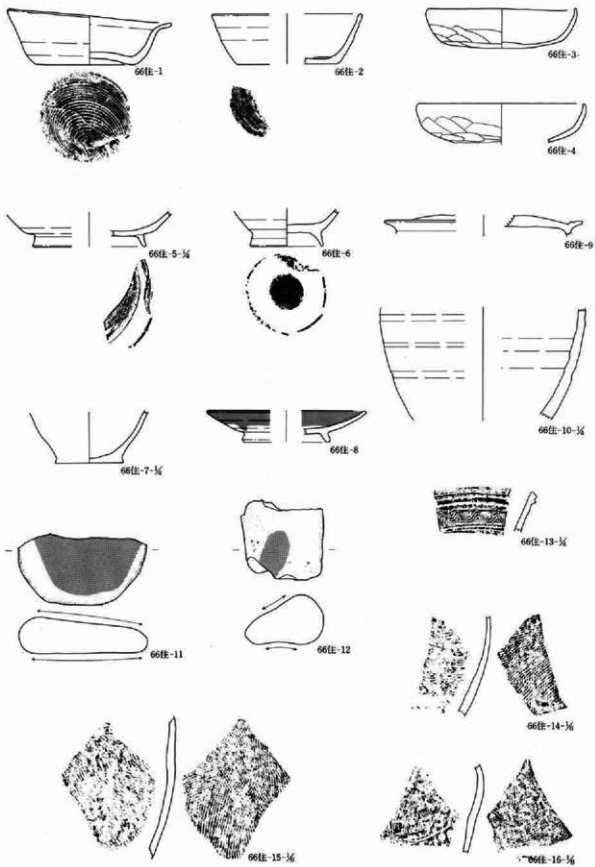
第100表 46号住居址出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 瓦 器	底より11cm 完存	46住 -1	口径 底径 器高	13.4 6.0 5.2	体部薄くやや直線状に 外反し、口ろ回転成 を残す。付け高台。	内外：回転横ナデ。 底部半静止糸切り後、高台を 貼付。高台の内側ナデ調整。	砂粒を多く含む。 軟質、還元。 灰白色。	
埴 瓦 器	底より9cm 完存	46住 -2	口径 底径 器高	14.2 6.0 5.0	器壁はやや厚く、口唇 部少し肥厚し外反、扁 平な付け高台。	内外：回転横ナデ。底部回転 糸切り後、高台を貼付し、内 側をナデ調整。	砂粒を多く含む。 軟質、還元。灰白 色。内面重々焼痕。	高台の口端に 使用による磨 れ。

第101表 46号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 須 器	底より3cm 以下残存	46住 —3	——	器壁はやや薄く一定。 体部にはロクロ回転痕。	内外：回転横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 軟質、還元。	色：灰色。
埴 須 器	底より6cm 以下残存	46住 —4	——	体部中位にロクロ回転 痕、口唇部少し外反。	内外：回転横ナデ。	砂粒を多く含む。 軟質、還元。灰色。	
坏 須 器	床面直上 底部のみ	46住 —5	口径 5.0	平底、体部へは緩く外 反して続く。	外：右回転糸切り。 内：回転横ナデ。	砂粒を含む。軟質、 中性灰。黄灰色。	外面に黒斑あ り。
台 付 煮 須 器	床より9cm 以下残存	46住 —6	口径 7.0	扁平で幅広い高台を貼 付。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り後、高台を 貼付、内側ナデ調整。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	内外面に黒斑 あり。
埴 灰 輪 陶 器	底より27cm ほぼ完存	46住 —7	口径 15.4 口径 7.4 器高 5.1	器壁は薄く一定、体部 は緩やかな丸みを持って 立ち上がる。付け高 台、断面三日月状。	内外：回転横ナデ。 底部外面立ち上がり回転ヘ ラケズリ。底部の高台内側を ナデ調整。	砂粒を含む。緻密。 硬質、還元。 灰白色。釉：淡緑 色。ドブ漬。	O-53 トチン痕残 す。
甗 須 器	床より11cm 以下残存	46住 —8	——	折れ部断面緩い、く字 状を呈す。	下端内外：回転横ナデ。胴部 外面ナデ後一部に彫状工具 痕。内面指オサエとヘラナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 灰白色。	
土 鍋	床より10cm 以下残存	46住 —9	口径 0.5	中央部に最大径を持つ。	指頭オサエ。ナデ仕上げ。	軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	端部に使用に よる磨れ。
羽 蓋	床より6cm 口縁部破片	46住 —10	——	口唇部截錐状、器は断 面三角形で水平に張る。	内外：回転横ナデ。 断面に輪積痕を残す。	砂粒を含む。軟質、 酸化。鈍い褐色。	
甗 土 師 器	床より17cm 口縁部以下残存	46住 —11	——	口縁部は断面緩い、コ 字状を呈す。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面→ヘラケズリ。 内面アテ工具擦痕。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 褐色。	
羽 蓋	床より9cm 胴部以下残存	46住 —12	——	底部から直線的に立ち 上がり、胴部中位にか けてやや丸みを持つ。	外：回転横ナデ。下位は横ナ デ後→ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒をやや多く含 む。硬質、酸化。 浅黄色。	
甗 土 師 器	床より5cm 底部以下残存	46住 —13	——	平底。胴部へ八字状に 開く。器壁は胴部にか けてやや薄い。	胴部外面→ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。アテ痕残す。 底部ヘラケズリ。	砂粒をやや多く含 む。硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	
甗 須 器	床より1cm 以下残存	46住 —14	——	器壁はやや薄く、直線 的に立ち上がる。	外：アテ工具による横ナデ。 内：指オサエ後、横ナデ。 断面に輪積痕あり。	砂粒を少量含む。 軟質、還元。 灰色。	
坏 土 師 器	床より6cm 以下残存	46住 —15	——	器壁はやや薄く一定。 底部から緩く立ち上 がり、口唇部少し内傾。	口縁部内外：横ナデ。 体部外面→ヘラケズリ。 内：ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 褐色。	
坏 須 器	床より3cm 以下残存	46住 —16	——	体部は直線状に外反。器 壁はやや薄く一定。平底。	内外：回転横ナデ。底部回転 糸切り後全部ヘラナデ調整。	白色粒を少量含む。 硬質、還元。灰色。	
坏 須 器	覆土 以下残存	46住 —17	器高 3.4	体部は少し内傾状。 底部接合部厚く上げ底。	内外：回転横ナデ。 底部左回転糸切り。	緻密。硬質、還元。 灰色。	
坏 土 師 器	床より3cm ほぼ完存	46住 —18	口径 12.0 口径 6.6 器高 3.1	体部はやや直線的に外 反する。底部は中央部 がやや厚く一定しない。	手持ち成形。外：口縁部横ナ デ。体部ナデ後→ヘラケズリ 底部→ヘラケズリ。内：横ナ デ。底部ヘラアテ痕。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 褐色。	内面に炭化物 (漆?)付着。

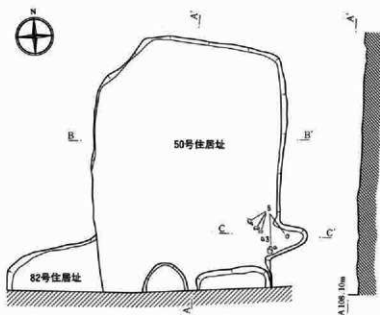
第IV章 兩壺遺跡



第201圖 66号住居址出土遺物圖

第102表 66号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
環須恵器	貯蔵穴内 ほぼ完存	66住 -1	口径 13.2 底径 7.5 器高 3.8	体部やや直線的な外反。 一方は口縁部緩い、く 字状に外反。上げ底。	内外：回転横ナデ。 底部右回転未切り。	緻密。 硬質、還元。 灰色。	周縁部に使用 による磨れ。
環須恵器	カマド内 片残存	66住 -2	—————	平底。体部は直線状に 外反。	内外：回転横ナデ。底部回 転未切り。周縁部ヘラナデ。	軟質、還元。 灰白色。	
環土師器	カマド内 床より2cm 片残存	66住 -3	口径 13.7	器壁は薄く一定。体部 扁平で丸みを持ち、口 唇部少し内傾する。	外：口縁部横ナデ。 底部ヘラナズリ。 内：横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
環土師器	カマド内 片残存	66住 -4	口径 12.2 底径 9.8 器高 3.1	器壁は薄く一定。 体部は扁平で、口唇部 やや内傾する。	外：口縁部は体部のナデ調整 後、横ナデ。底部ヘラケズ リ。内：横ナデ。	砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い赤褐色。	
盤須恵器	床より4cm 片以下残存	66住 -5	—————	器壁一定、底部立ち上 がり外面に若い稜を 持って外反、付け高台。	内外：回転横ナデ。 底部ヘラ切り後、高台を貼付。 高台の両側ヘラナデ調整。	緻密。 硬質、還元。 灰色。	
壺須恵器	カマド内 底部のみ	66住 -6	底径 5.8	小形。底部平紐。 高台断面三日月形。	内外：回転横ナデ。 底部回転未切り後、高台を貼 付、両側ナデ調整。	微砂粒をやや多く 含む。硬質、還元。 灰色。	
甕土師器	床より6cm胴 部へ底部残存	66住 -7	底径 7.2	平底。作り出しがある。 端部僅かつまみ出る。	胴部内外：ナデ。底部ヘラナ デ、立ち上がり附近指オサエ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	
皿 灰釉陶器	床より7cm 片以下残存	66住 -8	器高 2.5	器壁は薄く一定。 口縁部か反る。 高台断面半月形。	内外：回転横ナデ。 底部立ち上がり附近ヘラケズ リ調整。底部高台両側ナデ。	緻密。硬質、還元。 灰白色。釉：淡緑 色。ドブ掛け。	
蓋須恵器	床面直上 片残存	66住 -9	—————	頂部盛り上がり少な く、口縁部水平に張り 出し。内面に身受け。	内外：回転横ナデ。口端部つ まみ出し。内：身受け。ヘラ 工具のアテ調整あり。	緻密。硬質、還元。 灰色。口縁部に自 然釉あり。	
甕須恵器	床より9cm カマド内 片以下残存	66住 -10	—————	中厚手。底部から緩い 丸みを持って立ち上 がる。	内外：回転横ナデ。	砂粒をやや多く含 む。緻密。 硬質、還元。灰色。	
不明 石製品	床より5cm 破砕礫片残存	66住 -11	長さ 10.3 幅 5.2 厚さ 2.4	表面平坦の扁平礫。 一方が厚くなる。	表面平坦面に使用痕と思われ る磨耗痕がある。	—————	
不明 石製品	床より3cm 破砕礫片残存	66住 -12	長さ 5.5 幅 6.2 厚さ 3.9	扁平棒状礫の中央部分 幅 6.2 一方の側縁部が厚く、 厚さ 3.9	—————	—————	
釜須恵器	底より9cm 片以下残存	66住 -13	—————	広口壺の口縁、少し反 り身を持つ。	外：口唇部直下ヘラでの細い 筋帯。中位瘤状工具で3条を 単位とする波状文あり。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰色。	
大甕 須恵器	床より5cm 胴部破片	66住 -14	—————	器壁の厚さ一定せず。 断面に輪痕。	外：斜格子状のタタキ調整。 内：波状文のアテ痕。	白色粒を少量含む。 硬質、還元。灰色。	
大甕 須恵器	床より6cm 胴部破片	66住 -15	—————	胴部下位の破片、中厚 手。緩い丸みを持つ。	外：斜格子状のタタキ調整。 内：波状文のアテ痕。	白色粒を少量含む。 硬質、還元。灰色。	
大甕 須恵器	床より5cm 底部のみ	66住 -16	—————	平底状。内面に僅かに 盛り上がりあり。	外：不定方向のタタキ調整。 内：ナデ後、タタキ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。灰色。	



1. 暗褐色粘質土 焼土少し混じる



第202図 50・82号住居址平断面図

50号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認され、西辺で82号住を切る。北辺側に51・65号住が隣接する。南辺側が調査範囲外に拡がり、規模は北辺で2.8mである。平面形は南辺側を欠くが主軸N96°Eの隅丸方形を呈するか。覆土は暗褐色粘質土が見られた。壁は確認時床面が露出に近い状態で、僅かに残るだけである。床面は第⑦層の茶褐色粘質土を踏み固めているがやや北に傾斜し軟弱。

カマドは東辺南寄り確認された。第⑦層を半円形に掘り込み主体部を構築か。袖の位置で両端を割られた角閃石安山岩が1個あり、袖石に使用されたと思われる。焼土も少量見られた。

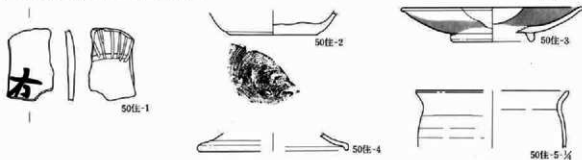
遺物はカマド周辺から土師器壺(5)、灰軸皿(3)、掘り方覆土からは墨書土師器坏片(1)、須恵器坏(2)、蓋(4)が出土している。他に小破片として掘り方覆土より須恵器片約20片、土師器系統約100片が見られた。

(女屋)

82号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で50号住の西辺に重複して確認された。西北隅にかかる一部分で辺長も1mに満たない。平面形・規模などは不明で、壁高は約25cmである。床面は褐色土を踏み固めているが軟弱である。重複関係は50号住より古い。

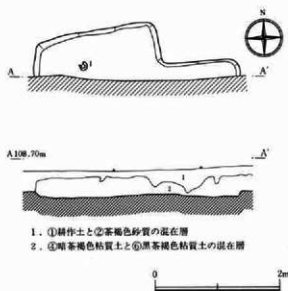
(女屋)



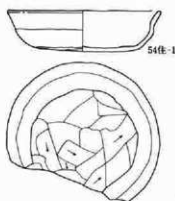
第203図 50号住居址出土遺物図

第103表 50号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	掘り方覆土 底部破片	50住 -1	—	平底で、体部への緩い 反りを示す。	外：不定ヘラケズリ。内：へ ラナダ後、体部へ放射状研磨。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。褐色。	外面に墨書。
坏須惠器	掘り方覆土 底部片残存	50住 -2	底径 7.0	底部やや上げ底状。 周縁部僅か張る。	外：右回転糸切り前後周縁部 ナダ調整。内：回転横ナダ。	緻密。硬質。還元。 灰色。	
皿 灰釉陶器	床より1cm 片残存	50住 -3	口径 14.6 底径 6.7 器高 2.7	器壁一定。体部緩い丸 み。口唇部やや外反。 高台断面三日月状。	体部内外：回転横ナダ。 高台の両側ナダ調整。	緻密。硬質。還元。 灰白色。釉：淡緑 色。胎：刷毛塗り。	
蓋 須惠器	掘り方覆土 口縁部破片	50住 -4	—	器壁薄い。口縁部断面 三角。頂部へ膨らみ。	内外：回転横ナダ。自然釉。 外：トチン痕。	緻密。硬質。還元。 灰色。	釉：淡緑色 ～黒褐色。
壺 土師器	床面直上 口縁部片残存	50住 -5	口径 16.3	口縁部断面ややくずれ たコ字形。	内外：回転横ナダ。	砂粒をやや多く含 む。軟質、酸化。	色：明褐色。



第204図 50号住居址平面図



第205図 54号住居址出土遺物図

54号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で北辺寄り
の一部が確認された。東辺側に44号住が隣接する。

規模は北辺で1.8m、東・西辺はその一部のみであ

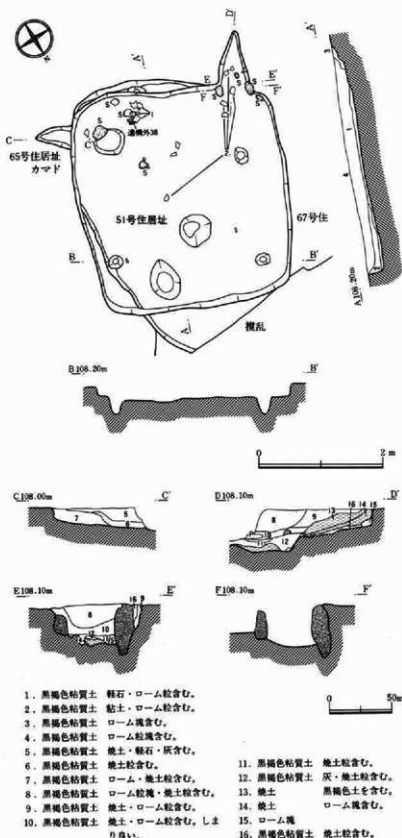
る。覆土は黒褐色土の単層で、黒色土を踏んで床面とするが軟弱である。壁は緩傾斜で高さ約10cm。

遺物は土師器坏(1)が床面直上で出土している。他に小破片として覆土中から須惠器片4片、土師器系
統約20片が見られた。

平面形は東辺側が覆土を同じくしてL字形に突出するが、住居址の重複か、突出部が住居かは現状の範囲
では不明。(女屋)

第104表 54号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	床面直上 ほぼ完存	54住 -1	口径 12.3 底径 7.8 器高 3.2	器壁は薄く一定、体部 は扁平で、口唇部は僅 かに外反。	外：口縁部体部のナダ後横ナ ダ、底部縦・横方向ヘラケズ リ。内：ナダ。	白色粒を含む。 軟質、酸化。 褐色。	



第206図 51-65号住居址平面断面図

51号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。65・67号住と重複関係にある。67号住の南東を切り、65号住のカマドを残して住居全体を切る。50号住が南側に隣接し、49号住が東側に隣り合う。規模は東辺3.1m、南辺2.9m、西辺2.8m、北辺2.8mの方形で、主軸はN158°Wを測る。覆土は黒褐色土のやや柔らかい層が全体を占め、床面近くにローム粒子・ローム塊を含む層を成す。壁は垂直に近くやや軟弱。床面は張り床で平坦、堅緻な面が見られないが、東壁南壁際は特に軟弱である。柱穴は3本検出され、小形円形でやや深さがある。柱穴内の覆土は3本とも似ており、形・大きさに共通点がある。

カマドは南辺西寄りに位置する。袖石は角閃石安山岩で東西の両袖となる。角閃石安山岩の支脚を中央に配している。焼土・灰を多量に含む覆土で、カマド前の床面はやや軟弱で少しくぼむ。貯蔵穴は検出されず。本住居には伴わない時代の新しいピットが1本。柱穴より大形で深いピットが北壁近くと、やや中央寄りに大きく浅いピット計2本が検出された。覆土は柱穴内と似ているため、本住居に伴うものと思われるが用途不明。

埴輪片(2)はカマド内両袖石の中央及び床面中央より出

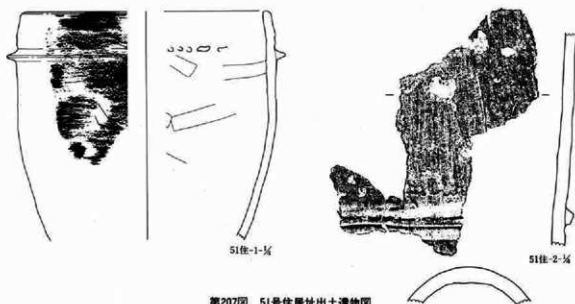
土。羽釜（1）は破片が重なり合う。覆土から小破片として灰軸片7片、須恵器片約50片、土師器系統約30片が見られた。

重複関係にある65・67号住より時代的に一番新しい住居である。南壁にカマドをもち埴輪をカマド補強に使う、本遺跡中でも例のない住居である。（宮下）

65号住居址（Ⅳ区）

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。51・67号住と重複関係にある。67号住の南東を切り、カマド以外を67号住に切られている。南側に50号住が隣接し、東側に49号住が隣り合う。規模は東辺4.0m、他は不明。平面形も不明。壁はやや垂直に近い。床面は北側の一部が検出されないが、ほぼ平坦で軟弱である。柱穴は検出されない。

カマドは東辺南寄りに位置し、焼土・灰を含む。覆土には土師器破片が数点あるのみである。貯蔵穴は不明。遺物は覆土より小破片として須恵器片2片、土師器系統約10片が出土し、床面近くにはほとんど検出されず。本住居は51号住に殆んど切られているため、全体が把握できないが、本遺跡ではカマドを東辺南寄りにもつ住居が多数検出されているので、その内の1つとして集落を成していたと思われる。（宮下）

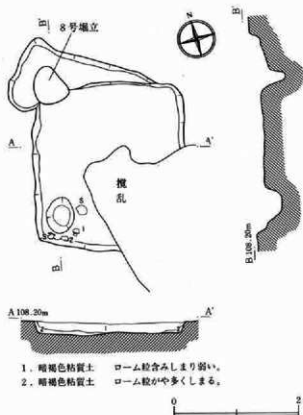


第207図 51号住居址出土遺物図

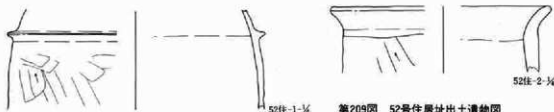
第105表 51号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
羽釜	床より1cm 以下残存	51住 -1	—	口縁附近最大径。胴部 中位まで直立。口唇部 平直。肩は断面三角形。	口縁部内外：横ナデ。肩つま み出し成形後、両側ナデ。 裏面オサニ尻。胴部外：1へ ラナデ、内：ナデ。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 暗褐色～黒褐色。	外面の一部に 煤付着。 内面使用痕の 磨れ。
円筒埴輪	カマド底より 2cm	51住 -2	厚さ 1.5	直立。タガ断面三角形 に近い不正台形、頂部 浅く凹む。	外：横ナデ後、1へラナデ、 タガ上下：ナデ。内：粗い横 ナデ。断面輪横肌。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。 明赤褐色。	外面煤付着。

第IV章 兩意遺跡



第208図 52号住居址平断面図



第209図 52号住居址出土遺物図

52号住居址 (IV区)

本住居址は第④層暗褐色粘質面で確認された。住居北側部分で8号堀立と土壇状の掘り込みを切って構築されている。また南東部分は掘乱により消滅している。

規模は東西2.2m、南北2.6mで正方形に近い長方形である。主軸はN100°Eを測る。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、床面はロームをもって張り床してある。柱穴及び壁溝はない。

カマドは確認されていないが、掘乱部分に存在した可能性が高い。南西角近くに円形のピットがあり、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物として土釜片(2)、羽釜片(1)が貯蔵穴周辺の床面附近より出土。他に小破片として覆土中より灰釉片1片、須恵器片13片、土師器系統約50片が見られた。(飯塚)

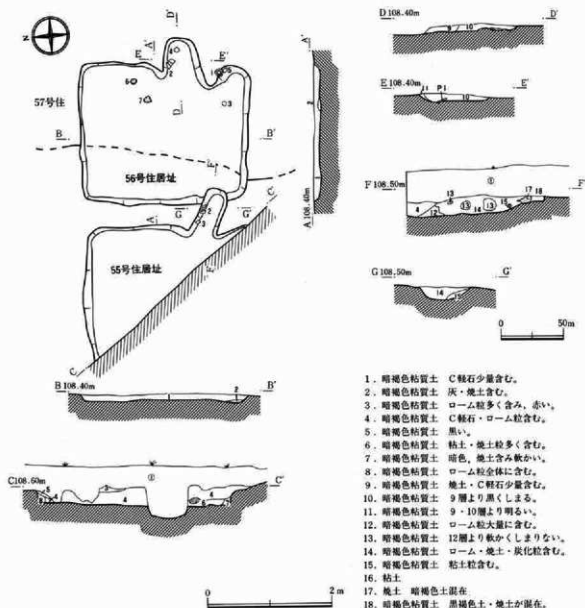
第106表 52号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
羽釜	床より3cm以下残存	52住-1	—	胴部中位最大径。器壁はやや薄く、断面輪楕圓。跨断面三角形。	胴部外：1ヘラケズリ、内：横ナデ。跨指オサエ後両側ナデ。	砂粒を多く含む。硬質、筋筋、酸化。鈍い赤褐色。	
土釜	床より2cm以下残存	52住-2	—	直立する胴部から口縁部外反。器壁厚い。	口縁部内外：横ナデ、胴部外：1ヘラケズリ、内：横ナデ。	砂粒を含む。硬質、酸化。明赤褐色。	

55号住居址 (IV区)

本住居址は第④層暗褐色粘質土面で確認され、カマドの先端が56号住を切って構築されている。また西南部分は道路下のため未調査である。

主軸N91°Eの方角のプランが推定される。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。床面は黄褐色粘質土で張り



第210図 55・56号住居址平面断面図

床しているが、カマド周辺を除いて比較的軟弱である。柱穴及び壁周溝はない。カマドは東壁に付設されて、煙道が約80cm南に傾いて壁外へ延びる。

出土遺物としては、カマド内から羽釜（1～4）が出土し、覆土中からは小破片として、羽釜片5片、須惠器片約10片、土師器系統約20片が見られた。（飯塚）

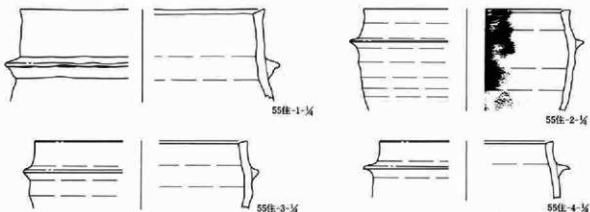
56号住居址（IV区）

本住居址は第④層暗褐色粘質土面で確認され、東側約3分の2が57号住の埋没面に構築されている。規模は長辺2.6m、短辺2.1mの長方形で、主軸N91°Eを測る。

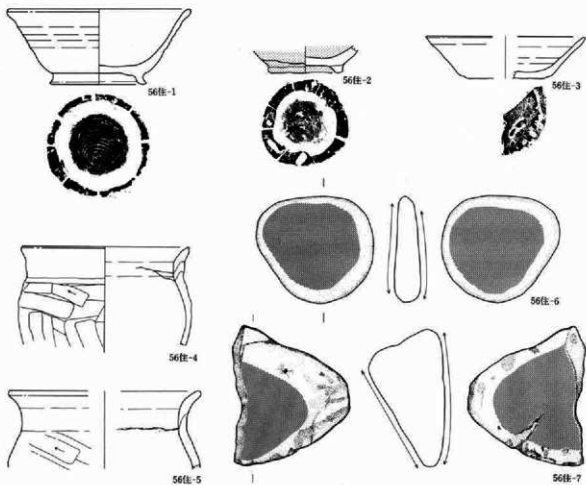
第IV章 雨查遺跡

壁はやや傾斜をもって立ち上がり、床面はロームで張り床しており比較的硬い。柱穴・壁周溝はない。カマドは東壁中央やや南側に付設されている。

遺物は、カマド内から須恵器埴(2)、土師器壺(4)、カマド右前から須恵器坏(3)、埴(1)、土師器壺(5)そして左前から不明石製品(6・7)が出土している。他に覆土中には小破片として、灰軸片6片、須恵器片約10片、土師器系統約20片が見られた。(飯塚)



第211図A 55号住居址出土遺物図



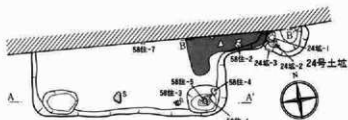
第211図B 56号住居址出土遺物図

第107表 55・56号住居址出土遺物観察表

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
羽 釜	カマド覆り方 覆土 互以下	55住 —1	————	器壁厚く大形。口縁部 長く、口唇部截頭少し 内傾。断面三角形。	内外：横ナデ。 蹄の両側粗面ナデ。	砂粒を含む。 軟質。還元。 灰黄色。	
羽 釜	カマド底より 4cm 互以下	55住 —2	————	蹄附近に最大径。口唇 部截頭状。断面三角 形で端部鋭い。	内外：横ナデ。 断面に輪襷を残す。	砂粒を多く含む。 硬質。還元。 灰色。	内外面に大き な黒斑。
羽 釜	カマド底より 5cm 互以下	55住 —3	————	口唇部截頭状。蹄は断 面三角形で端部丸い。	内外：横ナデ。 蹄の両側ナデ。	砂粒を含む。硬質。 酸化。浅黄色。	
羽 釜	カマド覆り方 覆土 互以下	55住 —4	————	口唇部截頭状。蹄は断 面三角形で端部鋭い。	内外：横ナデ。 蹄の両側ナデ。	砂粒をやや多く含 む。硬質。還元。	色：鈍い橙色。
埴 須 恵 器	床より6cm 互残存	56住 —1	口径 14.8 底径 7.7 器高 6.0	体部にクロコ回転痕。 口唇僅か肥厚外反。高 台断面外反三日月形。	内外：回転横ナデ。 底部右回転永切り後、高台貼 付し内側をナデ。	砂粒を多く含む。 硬質。還元。 灰色。	底部内面に重 機痕が残る。
埴 須 恵 器	カマド底直上 底部のみ	56住 —2	底径 6.0	断面台形の高台を貼 付。	高台の両側ナデ。端部に圧痕。 内面回転ナデ。	砂粒を含む。軟質。 中性灰。暗黄色。	
埴 須 恵 器	床より7cm 互残存	56住 —3	器高 3.3	器壁厚く一定。体部外 傾。口唇部鋭い。平底。	内外：回転横ナデ。底部回転 永切り痕。僅か作り出し状。	砂粒を多く含む。 硬質。還元。灰色。	
埴 土 器	カマド底直上 互残存	56住 —4	口径 13.4	口縁部断面コ字状。胴 部中位に最大径を持 つ。	口縁部内外：横ナデ。胴部 外：上位へヘラケズリ後、中 位から1ヘラケズリ。内：ナ デ。爪跡多い。断面輪襷痕。	砂粒をやや多く含 む。 硬質。酸化。 鈍い赤褐色。	外面に煤付 着。
埴 土 器	床より6cm 互以下	56住 —5	————	口縁部は断面コ字状。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外：へヘラケズリ。 内：横ナデ。接合痕。	砂粒を少量含む。 硬質。酸化。 赤褐色。	
不 明 石 製 品	床近く	56住 —6	長さ 9.5 幅 8.3 厚さ 2.0	上下に平坦面。扁平。両面とも磨耗。片面に磨耗と撞 痕。側縁部対称位置に敲打痕。			敲打痕と磨耗 痕あり。
不 明 石 製 品	床近く	56住 —7	長さ 8.9 幅 10.7 厚さ 5.9	断面三角形。上下と側縁に三面の平砥。上下はやや磨 耗。割れ口の一部に敲打痕あり。			敲打痕あり。

58号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で南辺側の一部が確認された。カマドにかかって24号土壇を切る。規模は南辺で2.9m、南辺の走向はN98°Eを測る。覆土は粘土・炭粒を少量含む暗褐色土が見られた。壁は緩傾斜で高さ15cm。床面は第⑧層黄褐色粘質土をよく踏み固めている。



1. 暗褐色粘質土 軽石・砂粒・焼土を含む。
2. 暗褐色粘質土 1層に炭化粒が混在、やや暗色。
3. 暗褐色粘質土 1層に黄色粘質土塊混在。
4. 黒褐色土
5. 暗褐色粘質土 1層に焼土が混在。
6. 暗褐色粘質土 1層に焼土、ローム粒を全体に含む。
7. 焼土
8. 焼と灰の互層
9. 黒褐色土 灰が混在。



第212図 58号住居址、24号土坑平断面図

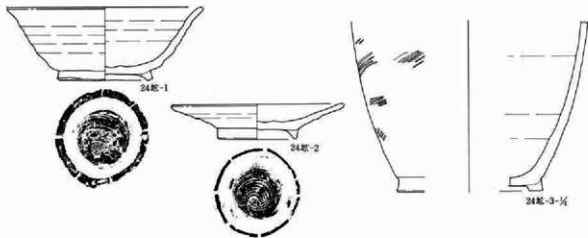
カマドは東辺で確認された。第⑦層を半円状に壁外に掘り込み、乳白色粘質土を張り付けて燃焼部を構築。焚口部周囲には灰が厚さ1~2mmで床面上に分布し、煙道部先端は赤く焼けていた。貯蔵穴は東南隅で確認された。底径40×20cmの隅丸方形で底は平坦。

遺物はカマド内から須恵器碗(2)、貯蔵穴内から黒色土器碗(4)、須恵器环(1)、碗(5)、貯蔵穴近くから黒色土器碗(3)、中央床面より瓦(7)が出土した。他に覆土中から小破片として須恵器片約20片、土師器系統約30片が見られた。(女屋)

24号土坑 (IV区)

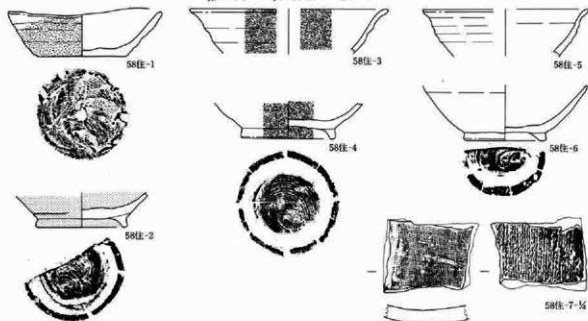
本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面上で調査範囲外にかり確認された。58号住に切られる。確認されたのは半分ほどと思われるが長辺0.4mをとり、平面形は円形で断面円筒状。深さ40cm、主軸は不明。

遺物は須恵器碗(1)、皿(2)、壺(3)が出土し、他に覆土中より小破片として須恵器片6片、土師器系統約20片が見られた。(女屋)



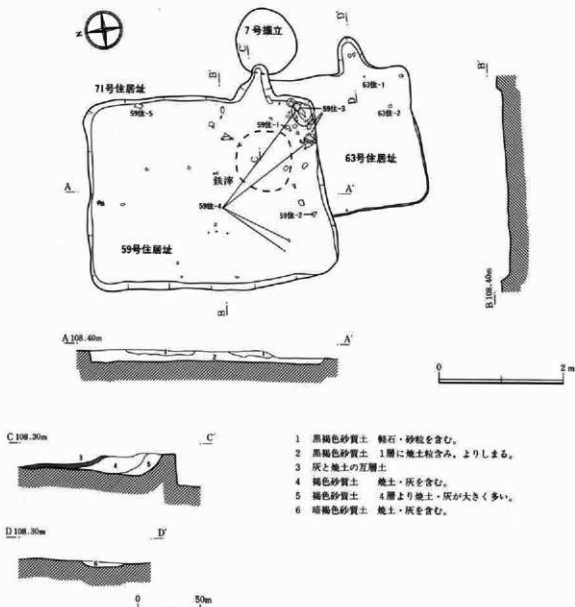
第213図 24号土坑出土遺物図

第214図 58号住居址出土遺物図



第108表 58号住居址, 24号土坑出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴須恵器	底より12cm 口縁～底部残	24坑 —1	口徑 15.4 底徑 7.0 器高 5.8	口徑の広い大形。 短く厚い高台縁に貼付。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・多量の鉱物含む。不良, 還元, 黄灰色。	
皿須恵器	底直上 片残存	24坑 —2	口徑 13.6 底徑 6.0 器高 2.9	均一した厚さの器壁。 短く薄い高台貼付。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	砂粒・鉱物含む。還元, 灰白～黄灰色。	
壺須恵器	底直上 底部	24坑 —3	—	器壁厚く, 底が平らで厚い高台貼付。	外：回転横ナデ後不定タタキ瓶。内：凹凸し回転横ナデ。	砂粒・多量の鉱物含む。不良, 還元, 色：黄灰色。	
坏須恵器	貯蔵穴底より 2cm 完存	58住 —1	口徑 12.3 底徑 7.0 器高 3.8	全体に歪んだ形状。 体部は直線状に外反し ロクロ回転痕を残す。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り。 規線の一部へラ調整。	砂粒を少量含む。 硬質, 還元, 灰白色。	
埴須恵器	カマド底より 7cm 底部片残存	58住 —2	底徑 7.4	底部は平底。 体部へ緩く立ち上がる。 付け高台。	外：回転糸切り後, 高台を貼付し両側をナデ調整。 内：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。 硬質, 中性灰, 鈍い褐色。	外面に黒斑あり。
埴黒色土器	床より3cm 以下残存	58住 —3	—	器壁薄い。体部ロクロ回転痕。口唇外反。	内外：回転横ナデ。	砂粒を含む。軟質, 還元, 赤地灰色。	内外面黒色。
埴黒色土器	貯蔵穴底より 11cm 底部のみ	58住 —4	底徑 7.6	平底, 付け高台, 高台端部及び内面に磨れ。	内：回転横ナデ。 底部右回転糸切り後, 高台貼付, 両側ナデ調整。	砂粒を含む。 軟質, 還元, 赤地灰色。	内外面黒色。
埴須恵器	貯蔵穴底より 4cm 以下	58住 —5	—	器壁薄く一定。体部緩い丸み口唇部肥厚外反。	内外：回転横ナデ。	砂粒を含む。 軟質, 還元, 灰色。	
埴須恵器	覆土 片残存	58住 —6	底徑 6.6	平底状。底部から緩い丸みで立ち上がる。	内外：回転横ナデ。底部回転糸切り後, 高台貼付。	砂粒を含む。軟質, 還元, 淡黄色。	
平瓦	床より3cm	58住 —7	厚さ 1.3	緩い反り身を持つ。	表：布目肌。一部指頭によるナデ肌あり。裏：網目肌。	砂粒を含む。 硬質, 還元, 灰色。	



第215図 59・63号住居址平断面図

59号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。南辺側で63号住・7号獨立さらに71号住を切断する。規模は東辺3.4m、南辺2.6m、西辺3.6m、北辺2.6mで、平面形は主軸N94°Eの隅丸方形を呈する。覆土は焼土粒・黒色土小塊を含む黒褐色砂質土が見られた。壁は垂直に近い掘り方で高さ約20cm、床は暗褐色粘質土を踏み固めた張り床で平坦。

東辺南寄りでカマドが確認された。第⑦層茶褐色粘質土を舌状に掘り込み、褐色土を張り付けて主体部を構築、左袖口に割石が据えられていた。貯蔵穴は東南隅で確認された。底径25×15cmの円形を呈する。

遺物は住居内全体から出土したが、貯蔵穴附近から須恵器坏(1)、土師器壺(3・4)が、南西側から須恵器埴(2)そして北東壁際から鉄釜(5)が出土した。他に覆土中から小破片として須恵器片約50片、土師器系統約130片が見られた。

(女屋)

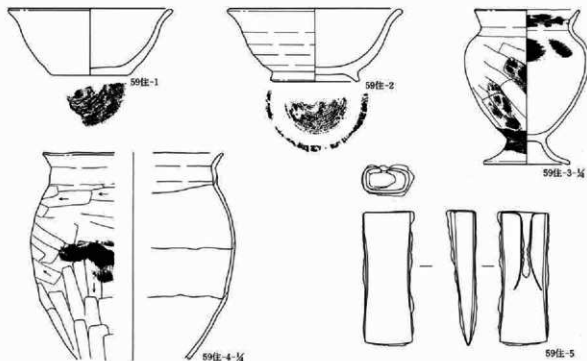
63号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認され、59号住に切られ71号住を切り、7号掘立と近接する。規模は南辺2.1m、他の三辺は重複のため不明。平面形は主軸N87°Eの隅丸方形と思われる。確認時、一部で床面が露出し、壁高は数cm。床は黄褐色粘質土を踏んで張り床としている。

カマドは東辺やや南寄り、掘り方に近い形で確認された。71号住覆土の黒褐色土を半円状に掘り込み主体部を構築、カマド周囲には焼土・灰が薄く分布していた。

遺物は全体から散漫な分布で緑釉段皿(2)、須恵器坏(1)が出土しただけである。

(女屋)



第216図 59号住居址出土遺物図

第109表 59号住居址出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏 須恵器	床面直上 片残存	59住 -1	口径 13.0 底径 6.0 器高 5.8	体部は、緩やかな丸み を持ち、深みがある。 底部は平底状。	内外：回転横ナデ。 底部回転へら切り。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰色。	
埴 須恵器	床面直上 片残存	59住 -2	口径 13.7 底径 7.0 器高 5.8	体部は、緩やかな丸み を持ち、深みがある。 底部は平底状、付高台。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り。高台の両側 強いナデ調整。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰色。	
台付 土師器	床面直上 貯蔵穴 片残存	59住 -3	口径 11.0 底径 8.9 器高 16.4	器壁薄く一定。口縁断 面コ字状。胴部上位最 大径。台部扁平八字状。	外：口縁部横ナデ、胴部へ ラケズリ。台部横ナデ。 内：口縁部横ナデ、胴部へラ ナデ。台部横ナデ。	砂粒をやや多く含む。 硬質、酸化。 暗褐色。	外面に煤付着。 器表の一部剥 落。
壺 土師器	床面直上 片残存	59住 -4	—	器壁薄く一定。口縁断 面緩いコ字状。胴部中 位最大径。内面滑合痕。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外：上位-中位以下へ ラケズリ。内：へラナデ。	微砂粒を含む。 軟質、酸化。 褐色。	胴部上位以下 一面に煤付着。

第110表 59号住居址出土遺物観察表 (2)

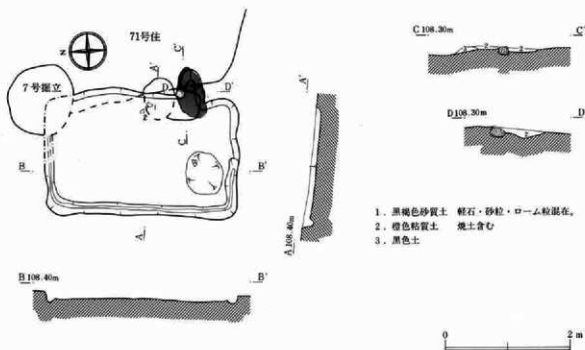
器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
鉄	斧 東壁北障床面 直上	59住 一5	10.6	3.8	2.0	僅かに中細りの短冊形で刃部先端にあり。基部は両端を内側に折り込み、柄装着部とする。	完存、柄は刃部に対して直角の方向となる。

第217図 63号住居址出土遺物図



第111表 63号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏 質 器 器	床より1cm ほぼ完存	63住 一1	口径 底径 器高	13.0 6.7 3.5	底部の器壁厚く口縁部 にかげ薄い。体部緩い 膨らみで外反。平底。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り。	やや緻密。 軟質。還元。 灰白色。	内外面に煤付 着。
段 皿 緑釉陶器	床面直上 以下残存	63住 一2	底径	7.0	底部内面明線な段。 高台端部端正、付高台。	内外：回転横ナデ。	緻密。硬質。還元。 素地灰色、釉緑色。	



第218図 60号住居址断面図

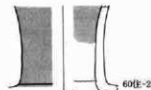
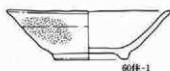
60号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。71号住・7号掘立を切る。規模は東辺2.8m、南辺1.7m、西辺2.8m、北辺1.6mで主軸N91°Eの隅丸方形を呈する。覆土にはローム粒子を少量含む黒褐色砂質土が見られた。壁は緩傾斜で、高さ約15cm、西辺と南・北辺の半分ほどまで壁周溝がめぐる。床面は平坦・堅緻で71号住重複部分には褐色土を用いた張り床が見られた。

カマドは東辺南寄りで確認され、71号住の覆土を舌状に掘り込んで設けられている。乳白色粘質土を用いて主体部を構築し、左袖には角閃石安山岩の割石を据えた袖石が設けられている。内部の焼土と灰は住居内の右袖側にかけ出された状態で薄く分布する。

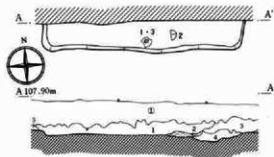
遺物はカマドの左前から須恵器壺(2)、埴(1)が出土し、他に覆土中から小破片として灰袖片3片、須恵器片約30片、羽釜片2片、土師器系統約50片が見られた。(女屋)

第219図 60号住居址出土遺物図



第112表 60号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	床より1cm 欠残存	60住 -1	口径 12.9 底径 5.5 器高 4.05	体部はほぼ直線的外反。 口唇部僅か肥厚外反。 粗雑な作り、付け高台。	内外：回転辘ナデ。 底部・高台の両側ナデ調整。	砂粒を含む。 軟質、還元。 灰白色。	外面2次焼成痕。
須恵器	床より7cm 胴部のみ	60住 -2		頸部は、やや長く直立 ぎみ。内面に接合痕。	内外：回転辘ナデ。 外：刷毛施釉。	緻密。硬質、還元。 灰白色。釉黄緑色。	



1. 暗褐色砂質土 軽石・炭化粒を含む。
2. 暗褐色砂質土 焼土・炭化粒を多量に含む。
3. 暗褐色砂質土 粒子細かく微量の軽石含む。
4. 褐色砂質土 粒子細かく軽石含まない。

第220図 64号住居址断面図

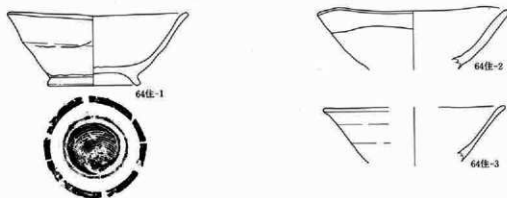
64号住居址 (V区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。3号掘立の北側、4号掘立の東側にあり、調査範囲での重複はない。全体の規模は不明であるが、南辺はN90°Eの走向で約3.1mである。平面形は隅丸方形になると推定される。

壁は南壁と南東角附近・南西角附近が検出できたが大部分は道路の下である。残存状態は悪く立ち上りは約10cmと浅い。住居址との想定なしに掘り下げたため、床の確認は土層断面で行った。柱穴・周溝は不明である。

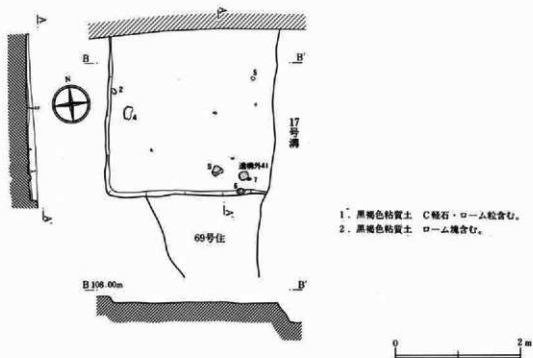
遺物は須恵器埴(1~3)が出土した。他に覆土中に小破片として須恵器片10片、土師器系統約10片が見られた。(井川)

第221図 64号住居址出土遺物図



第113表 64号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	床より5cm ×残存	64住 -1	口径 14.2 底径 7.0 器高 5.9	体部はやや直線的に外反。口縁部は丸みを持ち器高を5.9に付けた高台。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り後、高台を粘付し高台周囲強いナデ調整。	砂粒を含む。 硬質。還元。 灰色。	
須恵器	床より3cm ×残存	64住 -2	口径 15.0	器壁は厚い。体部緩い丸みで外反。	内外：回転横ナデ。	砂粒を含む。硬質。 還元。灰白色。	
須恵器	床より5cm ×残存	64住 -3		体部はやや直線的に外反し、口唇部肥厚する。	内外：回転横ナデ。	砂粒やや多く含む。 軟質。還元。灰白色。	



第222図 68号住居址平断面図

68号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。69号住・17号溝と重複関係にある。北側は調査範囲外へ

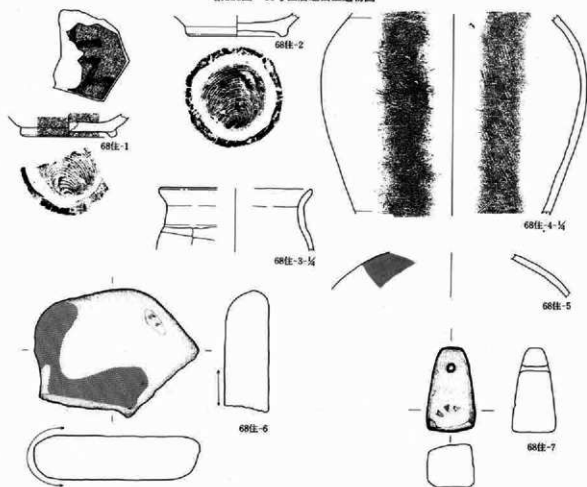
延び、東側は17号溝に切れ69号住を切っている。規模は南西角のみ検出のため不明。南辺走向N93°Eを測る。壁はほぼ垂直に近く、床面は張り床で平坦、堅緻。中央部分がより一層硬く、壁近くはややソフトな面となり、柱穴は不明。掘り方で小さなピットが4箇所検出されたが、浅深が激しく統一性がない。カマド・貯蔵穴は不明。掘り方はロームを掘り込み凹凸が激しい。

遺物は住居の中心部分から西壁にかけて散存する。西壁近くから須恵器甕胴部(4)、埴(2)、南壁際から有孔石製品(7)、不明石製品(6)、北東側から灰釉壺肩部(5)そして覆土中から墨書黒色土器埴(1)、掘り方覆土から土師器甕(3)が出土した。他に覆土中から小破片として須恵器片約30片、土師器系統約80片が見られた。

本住居は重複関係の69号住より時代が新しい。17号溝よりは時代が古い。

(宮下)

第223図 68号住居址出土遺物図



第114表 68号住居址出土遺物類表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴 黒色土器	覆土 高部以下残 存	68住 -1	底径 7.0	平底状、付け高台。	内：回転横ナズ。 外：右回転糸切り後、高台貼付、両側ナズ調整。	砂粒を少量含む。 軟質。還元。素地 灰色、内外面黒色。	内面に墨書。 (判読不可)
埴 須恵器	床より5cm 底部のみ	68住 -2	底径 7.5	平底状、付け高台。	内：回転横ナズ。外：左回転 糸切り後、高台貼付、両側ナズ。	砂粒を少量含む。 硬質還元。灰白色。	

第115表 68号住居址出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土器	掘り方覆土 互以下残存	68住 -3	—	口縁部断面コ字状。 器壁やや厚い。	口縁部内外：回転横ナデ。 胴部外面→ヘラケズリ。	砂粒を含む。 硬質酸化。明褐色。	
須恵器	床面直上 互以下残存	68住 -4	—	器壁中厚手で一定。 胴部上位に最大径、胴 部に向い内傾。	外：ヘラナゲ調整後1タタキ 肌。上位横ナデ。内：指オサ エ板。断面輪横板。	白色砂粒を含む。 緻密。硬質、還元。 灰色。	
灰釉陶器	床より4cm 互以下残存	68住 -5	—	緩い丸みで大きく八字 状に開らく。	内：回転横ナデ。	緻密。硬質、還元。 素地灰白色。	釉：淡緑色。
不明 石製品	床より7cm	68住 -6	長さ 10.2 幅 13.1 厚さ 3.5	扁平板状の塊。両面の 平坦部に磨滅が見られ る。破砕塊。			側縁部に埋付 着。
有孔 石製品	床より2cm 完存	68住 -7	長さ 6.2 幅 3.85 厚さ 3.4	頂部截頭状の四角錐の形状。 頂部を含む六面全て研磨 あり。頂部に近い端部に両面穿孔による孔あり。 孔径0.7cm。		角閃石安山岩使用。	有孔磨研砥石 か。

74号住居址 (Ⅲ区)

本住居址は第層の茶褐色粘質土面で確認された。78・85号住と重複しており、西側に90号住、東側に33号土壇がある。85号住との新旧関係は覆土の相違と本住居の張り床から本住居の方が新しく、78号住との新旧関係は攪乱により不明である。また、本住居の東側に近接して33号土壇があるが、本住居との直接的関係はないものと考えられる。本住居の規模は、東西約3.8m・南北3.6mであり、平面形はほぼ隅丸正方形である。主軸はN97Eである。

壁は北壁を除いて比較的明瞭に確認でき良好である。立ち上がりは約25cmである。床は、ローム塊混入の褐色土で張り床されており、硬く良好であるが、85号住との重複部分はやや軟かい。柱穴は壁内ではなく、周溝もない。

カマドは東壁に設置されており、壁からの張り出しは約1mである。カマドの残存状態は不良であるが、袖の一部を検出した。袖は灰褐色の粘土で構築されている。燃燒部の焼土・炭化物は厚く、十分に使用されたカマドと推測される。貯蔵穴はない。中央部の床下には皿状の落ち込みがある。

遺物はカマド内より墨書土師器環(1)、土師器環(2)、土師器甕(11)、須恵器蓋(8)、カマド右前より須恵器環(3・4)、土師器甕(12)、左前から須恵器蓋(9)、南壁擦り方から須恵器蓋・甕(13・14)が出土した。他に覆土中より小破片として須恵器片約30片、土師器系統約100片が見られた。(井川)

78号住居址 (Ⅲ区)

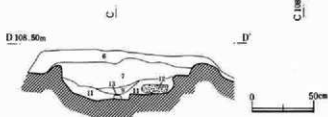
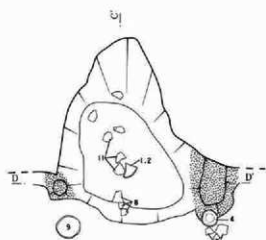
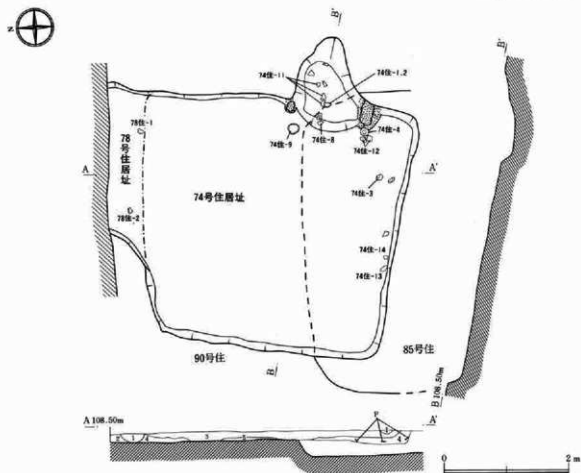
確認面は74号住と同様である。74号住と重複しているが、新旧関係は不明である。規模・平面形は、74号住との重複・調査範囲外への遺構の拡がりにより不明である。

壁は東壁・西壁の一部を検出しただけである。残存状態は不良であり、立ち上がりは約10cmである。床はローム塊を含む褐色土で張り床されているが、やや軟弱である。柱穴・周溝は不明である。

カマドは調査範囲内では検出できなかった。貯蔵穴は不明である。

遺物は須恵器瓶(2)、環(1)が出土した。灰釉片1片が覆土中より見られた。

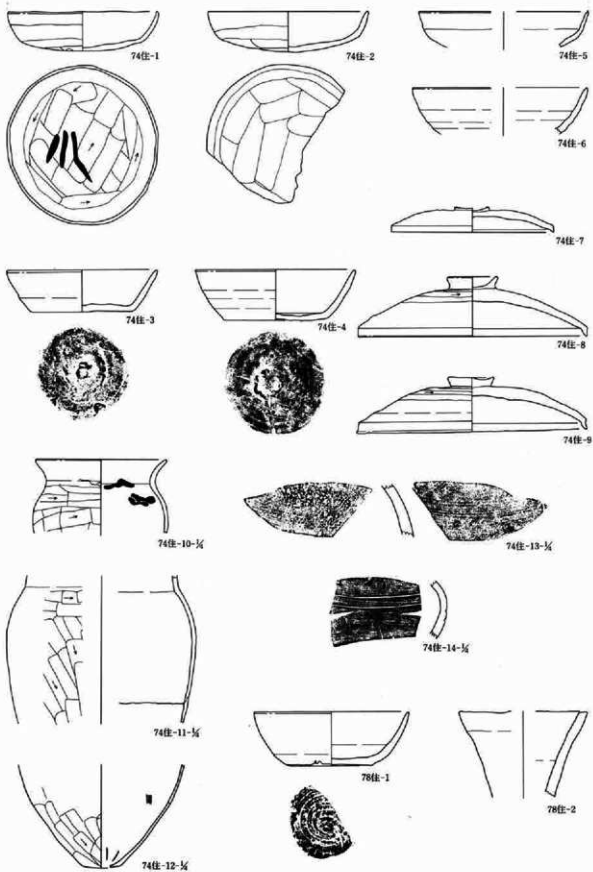
(井川)



- | | |
|--------------------|------------|
| 1. 明褐色砂質土 | 軽石(A?)含む。 |
| 2. 暗褐色粘質土 | C軽石混じる。 |
| 3. 暗褐色粘質土 | 多量のC軽石含む。 |
| 4. 暗褐色粘質土 | 2層より暗い。 |
| 5. 暗褐色粘質土 | C軽石・焼土含む。 |
| 6. 褐色粘質土 | C軽石・焼土混じる。 |
| 7. 褐色粘質土 | 焼土・炭化物・灰白色 |
| | 粘土含む。 |
| 8. 焼土 | 炭化物・褐色土含む。 |
| 9. 褐色土と焼土・炭化物の混在土。 | |
| 10. 褐色粘質土 | 黄褐色土塊含む。 |
| 11. 暗褐色粘質土 | 粒子細かい。 |
| 12. 灰白色粘土 | |
| 13. 黄褐色ローム | |

第224図 74・78号住居址平面断面図

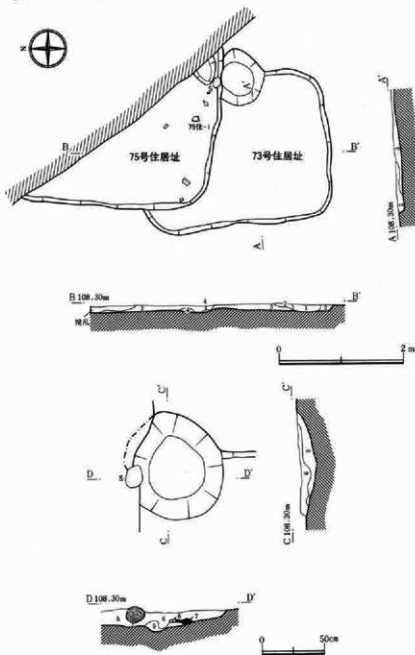
第IV章 兩晉遺跡



第225圖 74・78住居址出土遺物圖

第116表 74・78号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	カマド底より15cm 完存	74住 —1	口径 12.1 底径 9.8 器高 3.0	体部は扁平。口唇部少し内傾。底部は扁平な丸底状。	外：口縁横ナデ。体底部指オサエ後ヘラケズリ。内：体部横ナデ、底部ヘラナデ。	砂粒を多く含む。軟質、酸化。褐色。	底部外面に墨書「小」または「川」か。
坏土師器	カマド底より15cm 欠残存	74住 —2	口径 13.0 底径 11.1 器高 3.2	器壁薄く一定。体部扁平。口縁僅か外反。底部は扁平な丸底状。	外：口縁～体部ヘラナデ後横ナデ、底部ヘラケズリ。内：体部横ナデ底部ヘラナデ。	軟質、酸化。褐色。	外面に黒斑あり。
坏須恵器	床面直上 欠残存	74住 —3	口径 12.0 底径 8.2 器高 3.3	体部やや扁平。直線的に立ち上がり外反。底部平底。	内外：回転横ナデ。底部右回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒を含む。硬質、還元。灰色。	周縁の一部使用による磨れ。
坏須恵器	床より2cm 完存	74住 —4	口径 12.9 底径 8.35 器高 4.0	体部ややゆらみを持ち外反。平底。やや深みを持ち端正。	内外：回転横ナデ。底部回転ヘラ切り後、全面ヘラナデ調整。	硬質、還元。灰色。	周縁部使用による磨れ。
坏	カマド内 瓦以下	74住 —5	——	器壁薄い。口縁部外傾。底部より緩い丸み。	口縁部内外：横ナデ。	軟質、酸化。鈍い赤褐色。	
坏須恵器	覆土 瓦以下	74住 —6	——	底部からやや丸みを持って体部へと続く。	内外：回転横ナデ。内：コロ回転状。	硬質、還元。灰色。	外面に自然釉あり。
蓋須恵器	覆土 欠残存	74住 —7	口径 13.0	頂部口縁近くに丸み。周平。口縁端部明瞭。断面三角部絶縁扁平。	外：回転横ナデ後、鋸部周囲ヘラケズリとナデ。内：回転横ナデ。	砂粒を少量含む。硬質、還元。灰色。	
蓋須恵器	カマド底より1cm ほぼ完存	74住 —8	口径 4.0 口径 18.4 器高 4.75	頂部緩い膨らみ。口端部断面三角。内側丸み。鋸部中央凹む。	外：左回転ナデ後、鋸部の周囲回転ヘラケズリ。内：左回転ナデ。	砂粒をやや多く含む。硬質、還元。灰色。	内面環の焼キ重な痕。
蓋須恵器	床面直上 完存	74住 —9	口径 3.5 口径 18.4 器高 4.5	頂部緩い膨らみ。口端部断面三角。内側丸み。鋸部扁平少し突起。	外：左回転ナデ後、鋸部周囲回転ヘラケズリ。内：左回転ナデ。	砂粒を少量含む。硬質、還元。灰色。	内面環の焼キ重な痕。
甕土師器	覆土 欠残存	74住 —10	口径 14.0	口縁部断面く字状。胴部上位最大径。器壁薄く一定。	口縁部内外：横ナデ。胴部外面ヘラケズリ。内面横ヘラナデ、ヘラアテ痕。	微砂粒を含む。軟質、酸化。鈍い赤褐色。	外面傷。内面タール質付着。
甕土師器	カマド底より16cm 瓦以下	74住 —11	——	胴部上位最大径。口縁部断面く字状。器壁薄く一定。	頸部内外：横ナデ。胴部外面ヘラケズリ後、ヘラケズリ。内面ヘラナデ、接合痕。	微砂粒を含む。軟質、酸化。褐色。	
甕土師器	床より3cm 欠残存	74住 —12	口径 4.0	高部径小。器壁薄い。	外：胴部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内：ヘラナデ。	微砂粒を含む。軟質酸化。赤褐色。	
大甕須恵器	掘り方覆土 瓦以下	74住 —13	——	胴部は緩やかな丸みを持つ。	内外：アテ工具による横ナデ。	緻密。硬質、還元。灰色。	
大甕須恵器	掘り方覆土 瓦以下	74住 —14	——	胴部強い丸み。外：ヘラ掻き平行沈線。	内外：回転横ナデ。	緻密。硬質、還元。灰色。	
坏須恵器	床より4cm 欠残存	78住 —1	口径 12.4 底径 6.4 器高 4.3	体部深い。底部から緩い丸みで口縁部に至る。底部やや上げ底。	内外：回転横ナデ。底部右回転糸切り、糸切りによる切り離しを二度行なう。	砂粒を多く含む。硬質、還元。灰白色。	
瓶須恵器	床より7cm 瓦以下	78住 —2	——	長頸瓶の一部。口唇部平肩。器壁下方厚い。全体に歪む。	内外：回転横ナデ。口唇部強いヘラアテ。割れ口接合痕。	硬質、還元。灰色。	



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 黄褐色土塊・軽石含む。 |
| 2. 暗褐色粘質土 | 軽石含む粒子細かい。 |
| 3. 褐色粘質土 | 黄褐色土粒塊・軽石含む。 |
| 4. 黄褐色粘質土 | 暗褐色土塊含む。 |
| 5. 褐色粘質土 | 黄褐色土塊含む。 |
| 6. 褐色粘質土 | 焼土粒含む。 |
| 7. 炭化物 | |
| 8. 焼土 | |
| 9. 黄褐色粘質土 | 褐色土・ローム粒含む。 |

73号住居址 (III区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。75号住と重複し南東角に近接して31号土塊、西壁に近接して18号溝がある。75号住との新旧関係は、土層断面による覆土の相違から本住居の方が古い。

75号住により北東部分を破壊されているが、規模・平面形は長辺約2.9m、短辺約2.3mの隅丸長方形になるものと推定される。(主軸N83°E)

壁は北東角附近、北壁を除き確認できたが、残存状態は悪く立ち上がりは約10cmである。床はローム層の最上面に構築されており、カマド附近は比較的硬く良好であったが、その他はやや軟弱で不良である。柱穴は検出できず、壁内にはない。貯蔵穴はない。

カマドは東壁に設置されており、東壁より約40cm東へ掘り込まれている。残存状態は悪く、ほとんど壊されており、袖などは全く検出できなかったが、燃焼部と推定できる部分から焼土・炭化物の層が検出された。

遺物は覆土中より小破片として須恵器片1片が出ただけである。(井川)

75号住居址 (III区)

73号住と同面で確認された。73号住を切って構築されている。規模・平面形は北東

第226図 73・75号住居址平面断面図



第227図 75号住居出土土物図

側の約半分が道路下のため不明であるが、一辺約3mの隅丸方形になるものと推測される。(南辺走向N94°E)

壁は南西側角を中心に南壁・西壁が確認できた。残存状態は悪く、立ち上がりは約10cmである。床はローム層最上面に構築されており、全体にやや軟弱である。柱穴・周溝はないと推定される。カマドは大部分が調査範囲外であるが、焼土層の一部が土層断面で確認できた。袖などは不明である。

遺物は羽釜(1)が出土した以外に、小破片として覆土中から灰釉片1片、土師器系統約10片が見られただけである。(井川)

第117表 75号住居出土土物観察表

面 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
羽 釜	床面直上 5以下	75住 -1		□縁部附近最大径。 □唇部平滑、跨断面三 角形・扁平。	□縁部内外：横ナデ。 胴部外：1ハケメ。内：ナデ 跨同側ナデ。断面輪横直。	砂粒を含む。 硬質、酸化。 橙色。	

76号住居址(Ⅲ区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。77・89号住、23号溝と重複している。77号住との関係は、77号住カマドが本住居の床面を破壊して構築され、また本住居より深い77号住の覆土中に本住居の床面が確認できないことから、本住居の方が古いことが断定できる。89号住、23号溝との関係は、覆土の相違から本住居の方が新しい。その他、18号溝・39号土坑が近接する。規模・平面形は大部分が77号住によって破壊、もしくは調査範囲外のため不明であるが、平面形は主軸N91°Eの隅丸方形ではないかと推測される。

壁はカマド周辺のみが確認できた。残存状態は大変に悪く、立ち上がりは約5cmである。床はカマド周辺しか残存していないが、褐色土中に構築されており、硬く良好な床である。柱穴・周溝は不明であるが、壁内に柱穴はないと推測される。

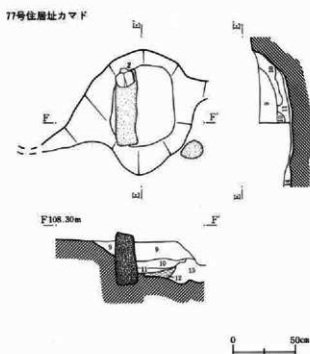
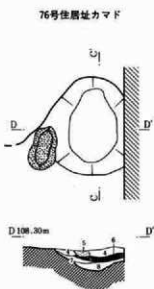
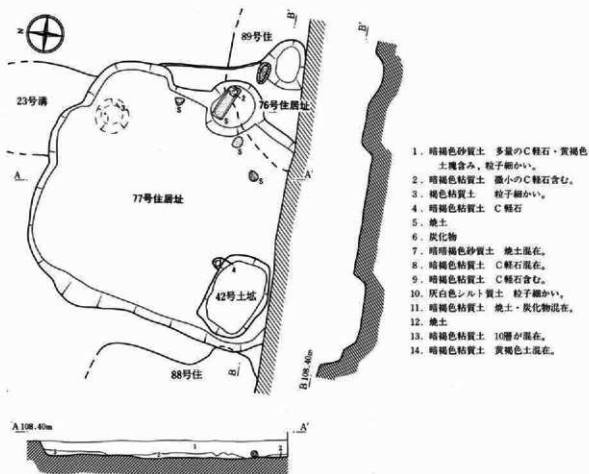
カマドは東壁に設置されており、壁からの張り出しは約40cmである。大部分が壊されており、残存状態は不良であるが、左袖の痕跡が認められ燃焼部の焼土・炭化物を検出した。貯蔵穴は不明である。

遺物は、覆土中より須恵器壺片(1)の他に小破片として、灰釉片2片、須恵器片約30片、土師器系統約80片が見られた。(井川)

77号住居址(Ⅲ区)

確認面は76号住と同様である。76・88号住、23号溝、36・37号土坑と重複している。76号住との新旧関係は76号住の項で記載の通りである。88号住との新旧関係は88号住のカマド煙道部を切って本住居西壁が構築されており、本住居の方が新しいと断定できる。23号溝との新旧関係は覆土の相違により本住居の方が新しい。36・37号土坑との新旧関係は不明である。南壁及び南東角附近が調査範囲外になるが、規模・平面形は長辺約4.1m、短辺約3.3mで主軸109°Eの隅丸長方形になるものと推定できる。

壁は南壁・南東角附近を除いて比較的に明瞭に確認でき、立ち上がりは約20cmあるが、北壁中央部分の膨らみは、本住居と同時期(同質の土)の土坑の重複した可能性がある。床は、ローム塊混入の褐色土で構築さ

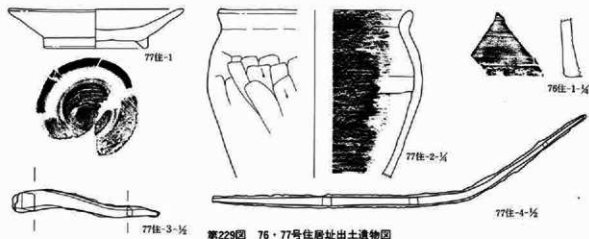


第228図 76・77号住居址平断面図

れており、比較的硬く良好である。柱穴は壁内ではなく、周囲もないと推定される。

カマドは東壁に設置されており、壁からの張り出しは約40cmである。残存状態は良くないが、左の袖には縦60cm・横15cm・幅40cmの大きな石が埋め込まれている。燃焼部からは焼土層・炭化物層を検出した。貯蔵穴は不明であるが、掘り方調査で南西角に長辺1.1m、短辺0.8m、床面よりの深さ25cmの長方形の土坑(42号土坑)を検出した。貯蔵穴の可能性もあるが、土坑上面の覆土は本住居の張り床であり、貯蔵穴であったとしても、最終段階では使用されていなかったと推定できる。その他、張り床の下から皿状の落ち込みが2箇所、小ピットが4箇所検出された。小ピットはその形状・位置から柱穴ではない。

遺物はカマド灰上から土釜(2)、北東側床面から鉄釘(3)、南西側床面から針状鉄製品(4)、掘り方ピットから須恵器皿(1)が出土し、他に覆土中から小破片として灰釉片6片、須恵器片約110片、土師器系統約140片が見られた。(井川)



第229図 76・77号住居址出土遺物図

第118表 76・77号住居址出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法	量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器 鉢	覆土 断面	76住 -1	—	—	厚い器壁。	外：回転横ナゲ、沈線1本あり。内：横ナゲ。	白色灰物含む。 還元。	内：灰褐色。 外：褐灰色。
須恵器 皿	掘り方ピット 覆土 互残存	77住 -1	口径 底径 器高	14.0 8.0 3.2	口径大きく器高低く、厚い底部に短く高い高台部に貼付。	底部回転糸切り。 外：回転横ナゲ。 内：回転横ナゲ。	砂質・灰物含む。 不良、還元。灰白色。	内外磨減著しい。
土釜	カマド灰上 口縁～胴部	77住 -2	—	—	かなり厚い器壁。胴部洗い換れ。	外：口縁横ナゲ胴部1ヘラケズリ、内：横ナゲ、ヘラケズリ。	多量の灰物、酸化。 鈍い赤褐～灰褐色。	

第119表 77号住居址出土遺物観察表(2)

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
鉄釘	北東側床面直上	77住 -3	7.8	1.0	0.6	断面長方形の尖頭形で、全体に大きく歪みかじれている。	
不明鉄製品	南西側床面直上	77住 -4	21.3	0.5	0.5	両端尖頭形をなす断面円形もしくは扁平な鉄棒で、互ほどの箇所まで30度程度曲っている。	先端一部欠損。

79号住居址 (III区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。86・88号住と重複しており、北西に85号住が、北東に35・38号土壇が近接する。86号住との新旧関係は覆土の明瞭な相違により、本住居の方が新しい。88号住とは時間的な差は大きくなく覆土も近似するが、88号住の床面を破壊して本住居のカマドが構築されており、本住居の方が新しい。規模は長辺3.5m、短辺2.5mで、平面形は主軸N100°Eの隅丸長方形である。

壁は比較的明瞭に確認でき、立ち上りは約20cmを測るが、86・88号住との重複部分はやや不明瞭が残る。床は、ローム塊混入の褐色土で構築されており、カマド附近は比較的硬く良好であったが、他はやや軟弱であった。壁内に柱穴はなく、周溝もない。

カマドは東壁に設置されており、壁からの張り出しは約90cmである。残存状態は悪く、袖は確認できなかった。掘り込みも焼土・炭化物層が確認できた。貯蔵穴はない。

遺物は、カマド内より土師器甕(1)が出土し、他に覆土中より小破片として刀子状鉄製品2片、須恵器片約50片、土師器系統約70片が見られた。

(井川)

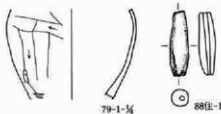
88号住居址 (III区)

確認面は79号住と同じである。77・79号住と重複する。77号住との新旧関係は、77号住の西壁が本住居のカマド煙道部を破壊して構築されており、本住居の方が古い。79号住との新旧関係は、79号住で記載のとおり本住居の方が古い。規模は不明である。平面形は、主軸N99°Eの隅丸方形になると推測される。

壁の残存状態は悪く、北西角付近から西壁・南壁は79号住と調査範囲外のため確認できず、立ち上りは約10cmである。床はローム塊を含む褐色土で構築されており、比較的硬く良好であるが、86号住の近くは軟弱である。柱穴は不明であるが、壁内にはないと推定される。周溝も不明だが、ないと考えられる。

カマドは東壁に構築されているが残存状態は悪く、煙道部は77号住に切断されており、袖も確認できなかった。掘り込み部分と、そこに溜った焼土・炭化物の確認のみである。貯蔵穴は不明である。

遺物はカマド内で須恵器塊(清里陣馬II期)が検出されたが、遺物ながら粉失してしまった。覆土中から土鏃(1)が出土し、他に小破片として釘状鉄製品1片がカマド覆土により見られた。

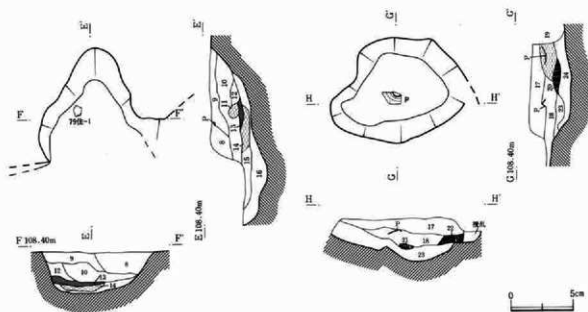
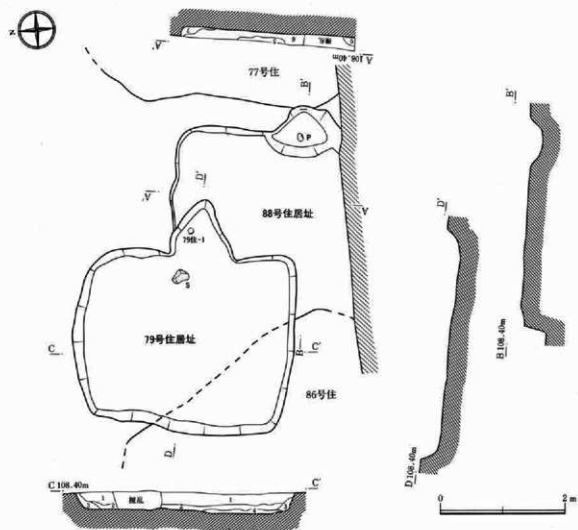


第230図 79・88号住居址出土遺物図

(井川)

第120表 79・88号住居址出土遺物観察表

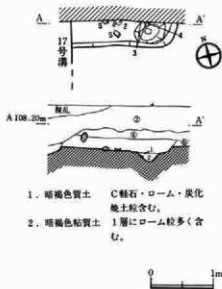
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師器	カマド底より 9cm 割下部	79住 -1	—	器壁薄く、胴部最大径 を持つ。	外：ヘラケズリ。 内：不定ナデ。	藍物含む。酸化。 鈍い橙色。	外面剝離部分 あり。
土鏃	覆土 完存	88住 -1	長さ 5.1 外径 1.5 孔径 0.35	中央部に最大径を持つ 紡錘形。両端は平滑に 截断。	全体にナデ。	軟質。酸化。灰褐色。	



第231図 79・88号住居址平断面図

第IV章 調査遺跡

- | | | | |
|-----------|-----------------|-----------|-------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 多量のC軽石含む、粒子細かい | 13 灰 | 焼土・黒褐色土含む |
| 2 暗褐色粘質土 | C軽石含む、粒子細かい | 14 焼土 | 炭化物含む |
| 3 黒褐色粘質土 | 多量のC軽石含む | 15 暗褐色粘質土 | 炭化物を多量に含む |
| 4 暗褐色粘質土 | ローム混じり粒子細かい、張り床 | 16 暗褐色粘質土 | 黄褐色土含む |
| 5 暗褐色砂質土 | 多量のA軽石含む | 17 暗褐色粘質土 | 軽石・焼土粒含む |
| 6 暗褐色粘質土 | C軽石含む、粒子細かい | 18 暗褐色粘質土 | 多量の焼土・炭化物含む |
| 7 褐色粘質土 | 微量の軽石含む、粒子細かい | 19 焼土 | 暗褐色土含む |
| 8 黒褐色粘質土 | 軽石・ローム粒含む | 20 炭化物・焼土 | 灰白色粘土混在土 |
| 9 黒褐色粘質土 | ローム・焼土粒含む | 21 炭化物 | |
| 10 黒褐色粘質土 | 焼土・ローム塊含む | 22 炭化物 | 焼土含む |
| 11 焼土 | | 23 褐色粘質土 | 粒子細かい |
| 12 黒褐色粘質土 | 焼土・灰含む | 24 褐色粘質土 | 黄褐色土塊含む |



1. 暗褐色質土 C軽石・ローム・炭化物土粒を含む。
 2. 暗褐色粘質土 1層にローム粒多く含む。

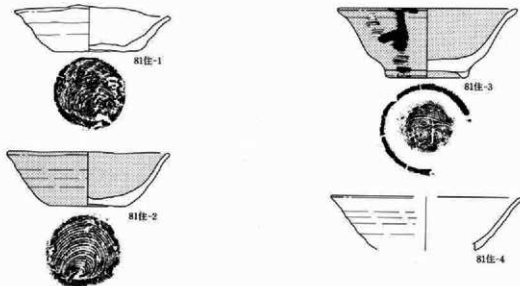
第232図 81号住居址平面図

81号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、西辺で17号溝に切られ、東側で53・72号住に近接する。規模は北側が調査範囲外で、西側に17号溝があるため確定されない。覆土はローム粒・焼土・炭粒を含む暗褐色土である。

壁は急傾斜で、床面はローム層を5cm張り込んで黒色土とロームの混土で張り床し生活面とする。貯蔵穴は南東隅に深さ15cmの円形プランで設ける。

遺物は貯蔵穴内より須恵器塊(3・4)、やや西側より同坏(2)、覆土中から同坏(1)が出土した。他に小破片として須恵器片2片、土師器系統5片が見られた。(新井)



第233図 81号住居址出土遺物図

第121表 81号住居址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	覆土 ほぼ完存	81住 —1	口径 12.5 底径 5.6 器高 3.6	全体に歪みが激しく、 口縁波うつ。やや薄手 で小形。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・砂粒・磁物 含む。気泡有。不 良、還元。灰黄色。	
須恵器	床より9cm 片残存	81住 —2	口径 13.0 底径 6.0 器高 4.3	底面中央盛り上がり、 底平らでない。やや高 い器高。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・磁物含む。 気泡有。中性灰。鈍 い黄橙～鈍い黄色。	
須恵器	貯蔵穴底より 4cm 片残存	81住 —3	口径 14.4 底径 6.6 器高 5.5	やや厚い器壁。口径大 きく器高が高い。太く 短い高台部に貼付。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	磁物含む。 不良、中性灰。鈍 い黄色。	煤付着。 磨減部分あり。
須恵器	貯蔵穴底より 11cm口径縁部	81住 —4	—	やや薄い器壁で口径部 僅かに外反する。	外：回転横ナデ。指口クロ底 あり。内：回転横ナデ。	砂粒・磁物含む。 還元。灰黄色。	

2号獨立柱建物址(II区)

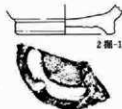
本獨立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。10号住、9～11号土坑、1・2号焼土と重複しており・11号住、配石遺構と近接する。重複する各遺構との新旧関係は不明である。

計12個の柱穴が検出されたが、いずれもほぼ対応する位置の3×2間総柱の柱間をもつ。辺長は北辺6.2m、中央東西辺6.4m、南辺6.4m、東辺3.0m、東側南北辺2.9m、西側南北辺3.2m、西辺3.2mを測る。全体としては南西及び北西角のやや歪んだ台形に近い長方形を呈する。主軸の中央東西辺はN84°Wの走向を示す。

北辺の各柱穴の径は13～22cm、中央東西辺は8～26cm、南辺10～16cmであり、東辺10～14cm、東側南北辺8～16cm、西側南北辺13～26cm、西辺では16～22cmである。確認面直上の海拔108.40mからの深さは北辺37～59cm、中央東西辺31～55cm、南辺25～57cm、東辺37～48cm、東側南北辺37～54cm、西側南北辺55～57cm、西辺25～59cmを測る。柱穴間距離は北辺1.6～2.6m、中央東西辺1.7～2.7m、南辺1.9～2.7m、東辺1.5m、東側南北辺1.4と1.6m、西側南北辺1.6m、西辺1.5と1.7mである。径は一般に小さく、深さは東及び西側南北辺の6個が深く、その他はやや浅い傾向がある。柱穴間距離も中央の6個が東西2.7m、南1.6mでほぼそろっている。

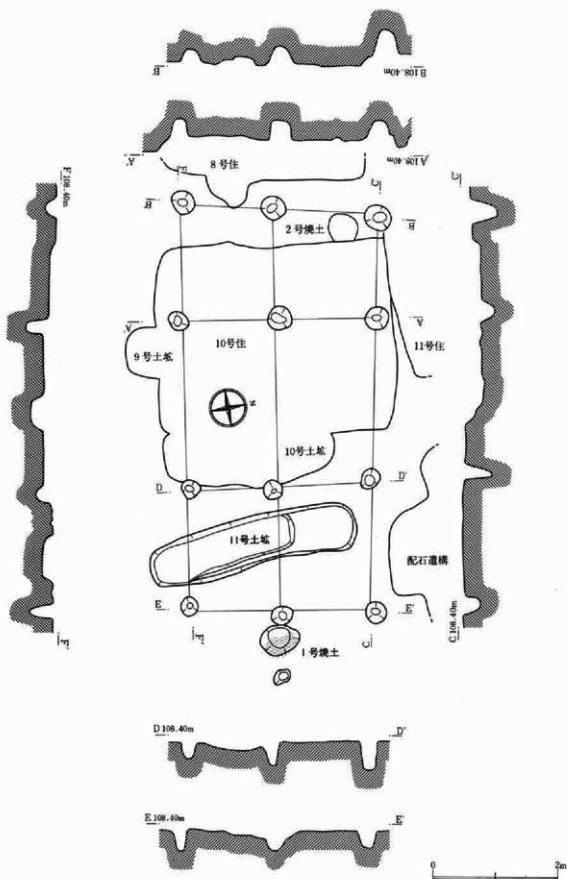
遺物は柱穴底から出土したものはなく、覆土中より須恵器塊底部(1)が出土した。また小破片では須恵器塊坏片約10片、土釜片等の土器系統のもの約20片が見られた。

上述の各柱穴の状況から考えて、東西両側に廂をもつ1×2間の建物と考えた。
い。

第234図 2号
獨立柱建物址出土遺物図
(坂井)

第122表 2号獨立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	覆土 底部のみ	2層 —1	底径 7.0	付け高台。	内外：横ナデ。 底面に溝を穿ち高台を付けて いる。	砂粒・雲母粒を含 む。比較的硬質。 還元。灰白色。	



第235图 2号獨立柱建物址、11号土坑、1号燒土平面圖

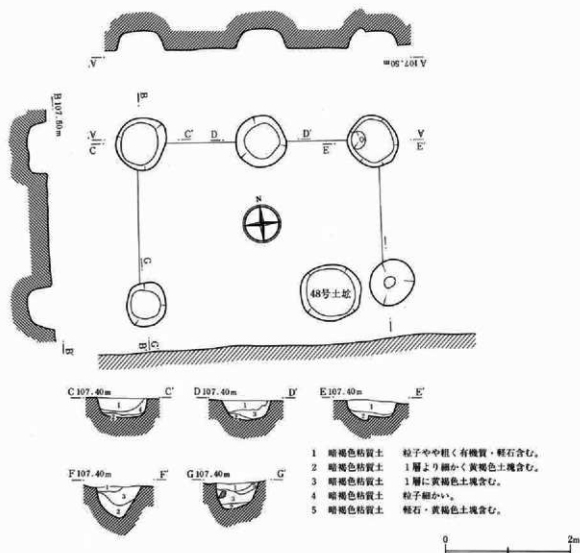
11号土坑（II区）

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。2号掘立と重複するが新旧関係は不明。また10号土坑・配石遺構に近接する。

一部二段掘りの土坑で、外側は3.2×0.7m、主軸N1°W、確認面からの深さ10~20cm、内側は2.2×0.5m、主軸N10°W、確認面からの深さ25~30cmを測る。共にやや隅丸の長方形で、覆土は第①層耕作土である。

遺物は覆土中に須恵器破片1片、土師器系統壺・破片10片の小破片が見られた。（長谷部）

第236図 3号掘立柱建物址平断面図



第123表 3号掘立柱建物址出土遺物観察表

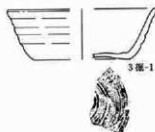
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	覆土 口縁~底部	3層 -1	器高 4.0	底部中央薄く体部やや厚く直立さみ。	底部回転未切り。外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	灰物含む。還元。黄灰色。	

3号獨立柱建物址 (V区)

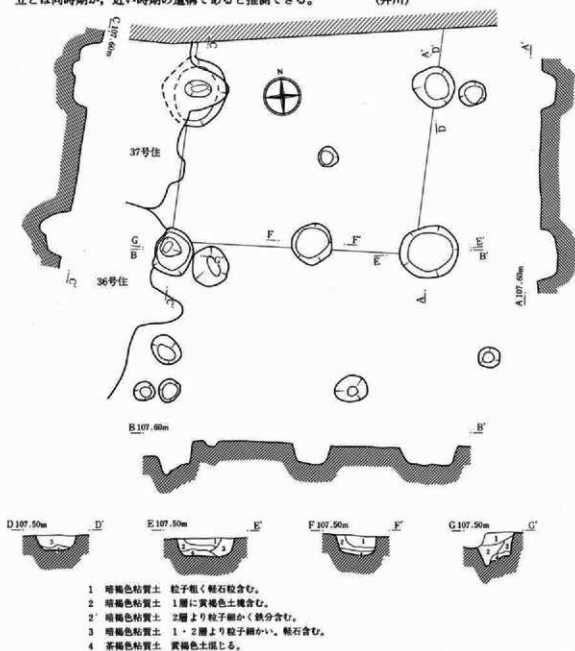
本掘立は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。重複関係はなく、4号掘立、25・26・48号土塚が近接する。

規模は北辺が約3.8mで2間、走向はN81°Eを測る。各柱穴は直径20~70cmであり、確認面直上の海拔107.40mからの深さ29~60cmである。各柱穴間の距離は北辺が約1.9m、東辺2.3m、西辺2.6mである。

遺物は須恵器環(1)が出土しているが、他に小破片として覆土中から須恵器片約10片、土師器系統約30片が見られた。覆土の類似から、4号掘立とは同時期か、近い時期の遺構であると推測できる。(井川)



第237図 3号獨立柱建物址出土遺物図



- 1 暗褐色粘質土 粒子粗く軽石を含む。
- 2 暗褐色粘質土 1層に黄褐色土塊含む。
- 3 暗褐色粘質土 2層より粒子細かく鉄分含む。
- 4 暗褐色粘質土 1・2層より粒子細かい、軽石含む。
- 5 茶褐色粘質土 黄褐色土塊する。

第238図 4号獨立柱建物址平断面図

4号掘立柱建物址 (V区)

本掘立は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。37号住と重複し、35・36号住、3号掘立が近接する。37号住との新旧関係は、本掘立の柱穴を破壊して37号住のカマドが構築されており焼土層が確認できた。したがって37号住より本掘立の方が古い。また3号掘立とは形状・覆土が類似しており、同時期か、近い時期と推測できる。

規模は南辺が約4.2mで2間、N87°Wの走向をもつ。各々の柱穴は底径約20~70cm。確認面直上の海拔107.50mからの深さ約32~57cmで、平面形は円形に近い。各柱間の距離は東・西辺が2.6m、南辺は約2.1mである。

遺物は覆土中から須恵器坏片(1)が出土した他に、小破片として扁方形鉄製品1片、須恵器片5片、土師器系統5片が見られた。

(井川)



第239図 4号掘立出土遺物図

第124表 4号掘立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏須恵器	覆土底面	4器-1	——	ほぼ均一した厚さの器壁。	底部回転未切り。内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。還元。黄灰色。	

6号掘立柱建物址 (IV区)

本掘立は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認され、62号住と重複し、58・61号住が隣接する。柱間は2×3間の総柱で、南辺は3間をとり、東辺長4.9m、南辺長3.7m、南北棟で主軸はN2°Wである。各柱穴は東辺で底径が20~40cm、確認面直上の海拔108.30mからの深さ27~42cmの円形を呈し、他の3辺も同様である。柱間距離は東辺で1.4~1.9m、南辺で1.1~1.2m、西辺で1.5~1.8m、北辺で1.7~1.9mである。南辺は柱穴が4本で構成されるが、2×2間の総柱の建物に付設された廂状部分ともとれる。

遺物は土師器坏(1・2)が覆土中から出土しただけである。

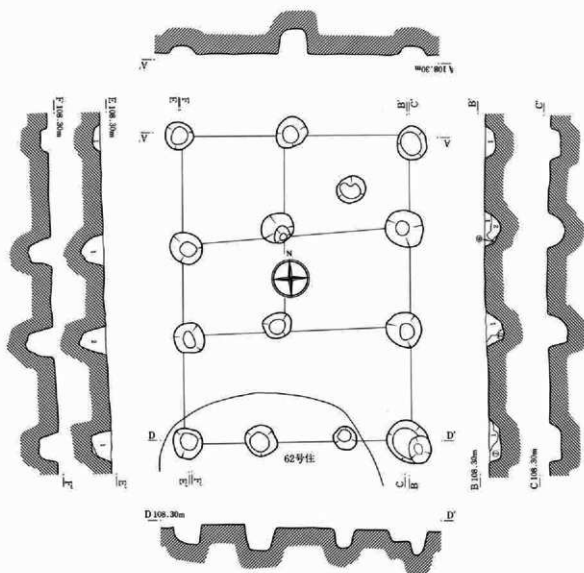
(女屋)

第240図 6号掘立柱建物址出土遺物図



第125表 6号掘立柱建物址出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師器	覆土口縁~底部	6器-1	器高 3.1	口唇部薄く底部にかけて厚くなる器壁。器高やや低い。	外：口唇一本沈線あり。横ナデ。体部~底部へラケズリ。内：横ナデ。	気泡・鉱物含む。硬質、中性灰。鈍い黄褐色。	
坏土師器	覆土口縁~底部	6器-2	——	口縁部小さく立ち上がり、体部丸く器高高い。	外：口縁横ナデ。体部へラケズリ。内：ナデ。	多量の鉱物含む。酸化。鈍い褐色。	

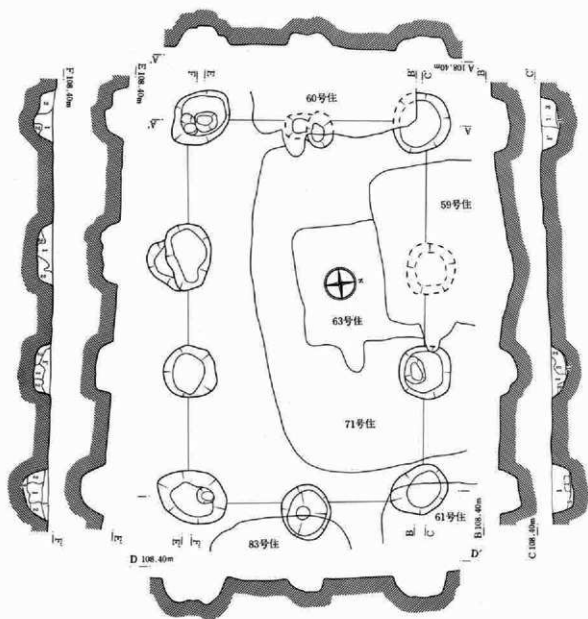


- 1 暗褐色砂質土 灰白色軽石を混じえる。
 2 暗褐色砂質土 1層にローム粒含む。

第241図 6号掘立柱建物址平面断面図

7号掘立柱建物址 (IV区)

本掘立は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認され、59・60号住に切られ、61・71・83号住を切る。9号掘立、20・21号土壇が南西に隣接する。柱間は2×3間で、東辺長4.0m、南辺長6.9m、東西棟で主軸はN86°Wである。各柱穴は、東辺で底径が0.7～0.8m、確認面直上の海拔108.30mからの深さ46～56cm、南辺で底径が0.8～1.0m、深さ40～52cmの円形を呈し、四辺全て大形の掘り方である。いくつかの柱穴は柱痕と思われる径20～30cmの小形の掘り方が確認された。柱間は東辺で1.9～2.2m、南辺で2.3～2.4m、他の2辺も同様である。



- | | | |
|-----|-------|------------------------|
| 1 | 黒色砂質土 | 粘質塊含み小礫・軽石混じえる。 |
| 1' | 黒色砂質土 | 1層よりやや明るい。 |
| 1'' | 黒色砂質土 | 1層よりしまり弱い。柱痕か。 |
| 2 | 黒色砂質土 | ローム較塊含む。 |
| 3 | 黒色砂質土 | ロームを薄くレンズ状に含みしめる。灰塵土か。 |

第242図 7号竪立柱建物址平断面図

第IV章 調査遺跡

遺物は須恵器蓋(1)が出土した他に、小破片として須恵器片約15片、土師器系統約40片が見られた。

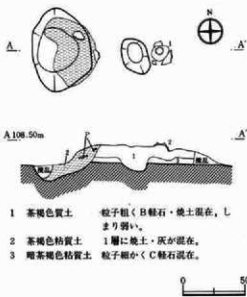
本掘立は規模の点では中心的な建物とも思われる。(女屋)



第243図 7号掘立柱建物出土遺物図

第126表 7号掘立柱建物出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	覆土 口縁部	7掘 -1	—	口端部内傾し内側凹部。器高低く頂部近くやや厚くなる器壁。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂礫・灰物含。還元。灰オリーブ色。	



第244図 1号焼土平断面図

- 1 茶褐色質土 粒子粗くB軽石・焼土混在、しまり強い。
- 2 茶褐色粘質土 1層に焼土・灰が混在。
- 3 暗茶褐色粘質土 粒子細かくC軽石混在。

片ではその他に須恵器破片等6片、土師器系統壺片等約20片、さらに炭化物が出土している。

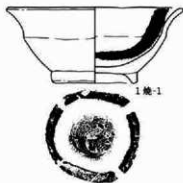
本焼土は西側の掘り込みや遺物出土状況から考えて堅穴住居址のカマドの可能性が高い。そして住居の中心は西側に続いていたと想定できるが、確認時には全く床等を検出できなかった。(坂井)

1号焼土(II区)

本焼土は第④層暗褐色粘質土面で確認された。2号掘立と重複するが新旧関係は不明、また9号溝に近接する。(第235図2号掘立平断面図参照)

底径約35cm、確認面直上の海拔108.50mからの深さが約34cmの掘り込みと、底径約15cm、深さ同じく約26cmの掘り込みがN85°Wほどの軸をもって東西に並んでいる。西側の前者は覆土が焼土と灰の混在層で、後者の覆土中にも焼土が混っている。

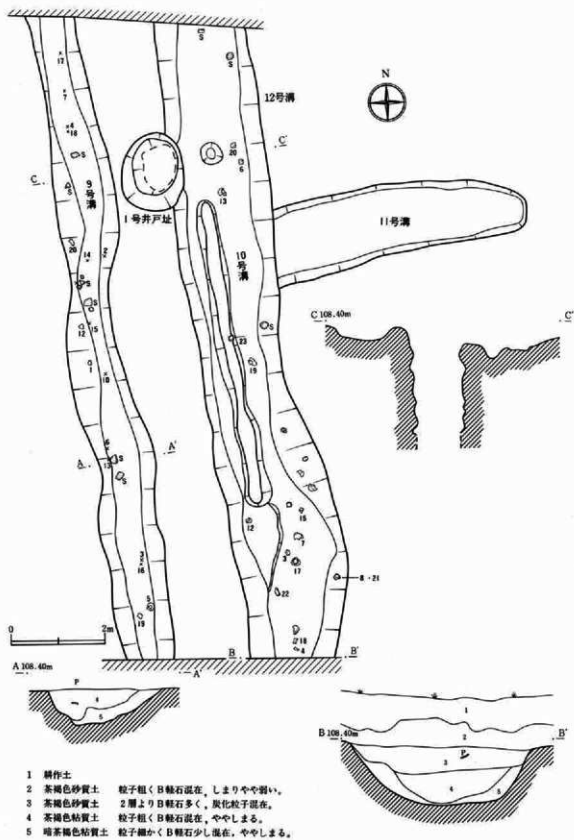
遺物は東側の掘り込みの覆土中に土師質土器塊(1)が見られ、また西側の掘り込みの覆土中にも同じような壺片があった。また小破片



第245図 1号焼土出土遺物図

第127表 1号焼土出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
須恵器	確認面より14cm ほぼ完存	1掘 -1	口径 14.0 底径 6.7 器高 5.2	底部から縁く内反して立ち上がり、口縁で外反する。	ロクロ成形、口縁部は内外面ともに横ナデ。底部は回転糸切り後に付け台。	砂礫含む。比較的硬質、還元。明オリーブ灰。	



第246図 9・10・11号溝、1号井戸址平面断面図

断面図凡

9号溝 (II区)

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。掘り込み面は不明だが10号溝と同様に第④層黄茶褐色粘質土面と考えられる。北西側で配石遺構の周辺の溝と重複しているが新旧関係は不明である。北東側で1号井戸に近接し、東側に約1.5mの間隔で10号溝が平行している。

調査範囲中央でやや西側にくわりを見せるものの、全体としては上幅1~1.2m、下幅0.2~0.7mで北から南にほぼ直行している。走向はN10°Wを測る。確認面よりやや上の海拔108.50mから測った深さは48~72cmで、概して南がやや浅い。断面形は上端が逆八字状に開くU字形である。

遺物は須恵器・土師器片を中心に全体に出土量が多いが、特に調査範囲内の北側と中央附近の密度が濃い。底より10cmを下層、10~20cmを中層、20~30cmを上層とすれば、下層からは須恵器埵(2・5・7)、同甕(19・20)があり、中層からは須恵器埵(3・6)、同甕(12・16)、土師器甕(14・15)があり、上層からは須恵器埵(10)、同坏(1)、同甕埵(17・18)、土師器甕(13)が出土した。覆土中からはカマド袖材(11)、灰軸皿(8・9)が見られた。L字状及び釘状の2点の鉄製品小破片の他に、覆土中から埵・坏類を中心とする須恵器小破片約100片、甕等を中心とする土師器系統小破片約100片が見られた。(坂井)

10号溝 (II区)

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。掘り込み面は土層断面より第④層黄茶褐色粘質土面と判明した。北西側で1号井戸、北東側で11・12号溝と重複している。1号井戸は本溝より新しいが11・12号溝との関係は不明。西側では約1.5mの間隔で9号溝が平行しており、南東側では1号掘立が近接している。

全体としては上幅1.7~2.4mで北から南にかけN9°Wの走向で直線的に走っている。しかし底は調査範囲内の中央部で約8mにわたって二筋に分かれている。南北両端では底幅は1~1.2mだが、中央部では西側の0.2~0.3mの部分と東側の0.4~0.8mの部分になる。東側の部分が本筋と思われる、全体を通して海拔108.50mからの深さは64~83cmと北から南にかけて徐々に低くなっている。一方西側の筋は65~76cmの深さで必ずしも南が低くなく、特に南の合流箇所では本筋との間に5cmの段をなしている。また両筋を分ける山の部分は50~69cmと南に来るにつれて高くなっている。南北両端での断面形は上部が逆八字状に開くU字形を呈する。

土層断面では本溝の最下層に暗茶褐色粘質土の堆積が見られた。この層と覆土中層以上の茶褐色砂質土との間には質的な差が見られ、遺物出土状況から考えればこの層が地山の可能性もある。

遺物は土師器・須恵器を中心にかかなりの出土があった。北端と南端にそれぞれ片寄って出土分布しているが、特に南側は量が多く底近くから復元可能な遺物が見られた。底より20cm以内のレベルで出土したものは須恵器坏(3)、埵(8)、甕(17・18)、甕片(21・22)、灰軸皿(15)、須恵器埵(7)は全て南側で検出された。須恵器水瓶(20)が一点底より10cmのレベルで北側で見られた。21cm以上50cm程度までの出土レベルのものは、中央から北側では須恵器甕未成品(19)、甕片(23)、皿(13)、土師質土器埵(6)があり、南側では須恵器埵(12)、坏(4)がある。その他に覆土中から須恵器埵・坏類(1・2・9・10・11)・甕、皿、黒色土器埵(5)、土師器坏・小形甕、灰軸皿(14)・甕(16)が出土している。また小破片は須恵器約100片、土師器系統約200片、そして釘状鉄製品1片が見られた。(坂井)

11号溝 (II区)

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。10号溝と重複しているが新旧関係は不明。東側では13号住に近接している。

上幅1.6~0.8m、底幅1.2~0.5mでほぼ東西方向に直線的に走り、東に向かうに連れて細くなり約5.5mの距離で終焉する。海拔108.50mからの深さは33~36cmでほぼ一定である。確認面からの深さが10cmほどしかないため、断面形は下側が幅広のU字形であるとしか判明しない。なお走向はN81°Eを測り、10号溝とほぼ直交している。

覆土は10号溝覆土と同じ茶褐色砂質土だった。

遺物は覆土中より須恵器埴・坏片約10片、羽釜片2片、土師器系統埴・壺片約20片の小破片が見られた。

本溝は走向・覆土より、深さこそ浅いが10号溝とほぼ同時期に10号溝と有機的な関係をもって使用された溝と考えられる。

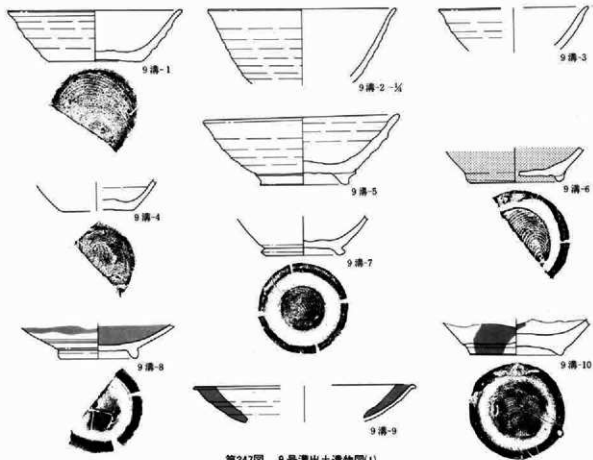
(坂井)

1号井戸址 (II区)

本井戸址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。10号溝を切っており9号溝に近接する。上面径1.4~1.6m、中径1.0mの円形を呈する。深さは確認面から2.5m以上あり、覆土上層は第①層耕作土、中層は第④層黄茶褐色粘質土及び第④層暗褐色粘質土塊が混入している。

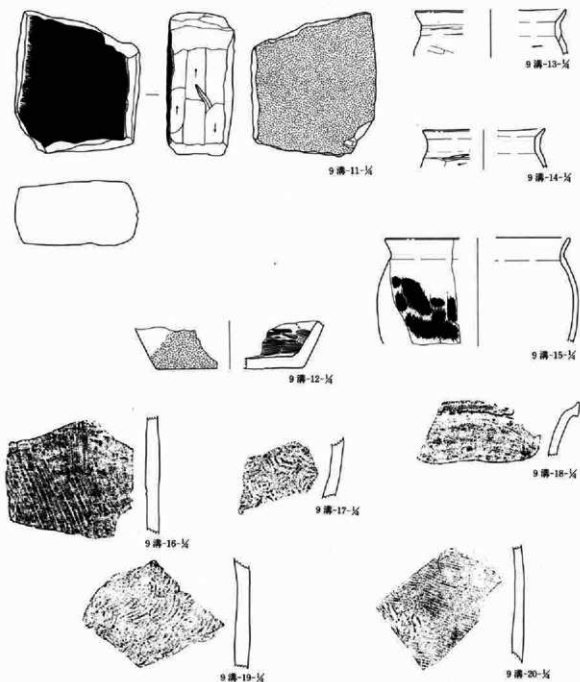
遺物は全く見られなかった。

(長谷部)



第247図 9号溝出土遺物図(1)

第IV章 兩支遺跡



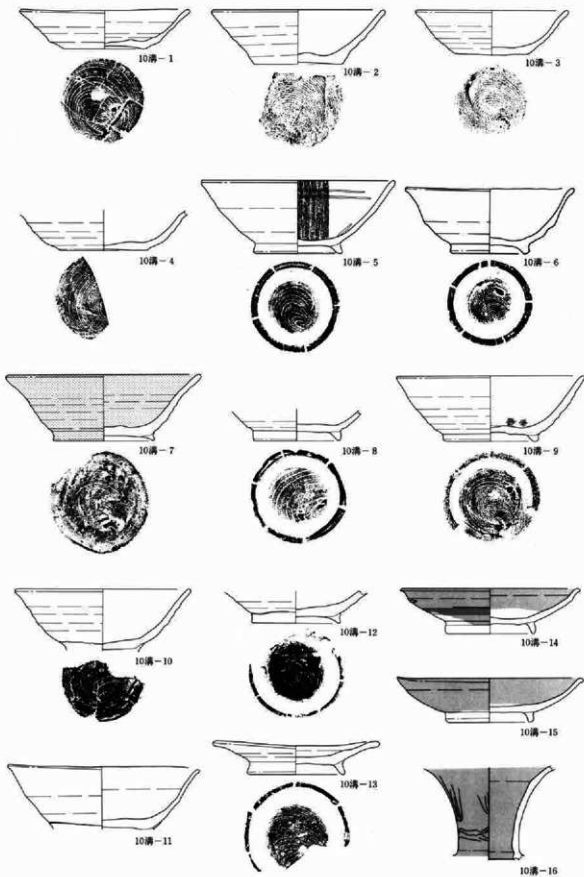
第248図 9号溝出土遺物図2)

第128表 9号溝出土遺物観察表 (1)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
坏 須 恵 器	底より25cm 片残存	9溝 -1	□径14.0 底径 6.5 器高 4.0	体部ほぼ直線状に傾斜。 平底。	ロクロ成形、外面体部及び内面底部に指痕の凹凸が残る。 底部は回転未切り。	砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰色。	
埴 須 恵 器	底より1cm 片残存	9溝 -2	□径20.0	大形で体部ほぼ直線状に傾斜。	ロクロ成形、外：指痕が残る。	やや多量の砂粒を含む。 硬質、還元。	色：灰白色。

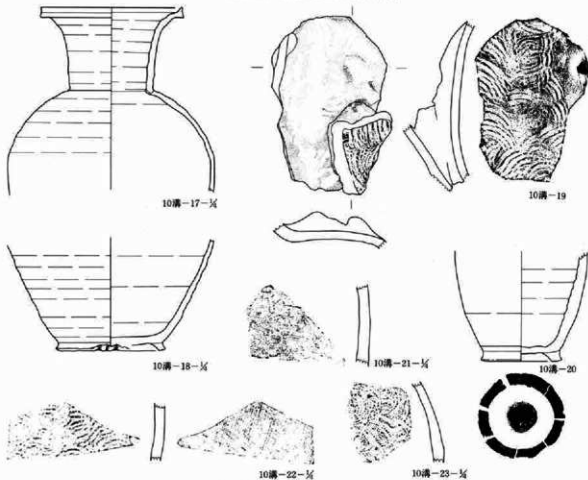
第129表 9号溝出土遺物観察表(2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴須志器	底より14cm 以下	9溝 —3	——	口縁部はやや外反する。	ロクロ成形、外：指痕が見られる。	砂粒を含む。硬質、還元。灰色。	
埴須志器	底より28cm 底部のみ	9溝 —4	——	体部やや内反り、平底。	ロクロ成形。底部は回転糸切り。	砂粒を含む。硬質、還元。	色：明オリブ灰色。
埴須志器	底より7cm 片残存	9溝 —5	口径 15.7 底径 7.2 器高 9.5	底部から緩く外反して体部は立ち上り、口縁部に至る。	ロクロ成形、内外：指痕の凹凸。口縁部は横ナデ。底部回転糸切り後、付け高台。	砂粒を含む。硬質、還元。オリブ灰色。	高台の付け方が雑
埴須志器	底より13cm 底部のみ残存	9溝 —6	底径 7.0	高台断面台形。	ロクロ成形。底部は回転糸切り後に付け高台。	砂粒を含む。比較的硬質、中性灰。	色：灰色
埴須志器	底より9cm 底部のみ残存	9溝 —7	底径 6.5	高台断面台形。外側に横、体部やや内反り。	ロクロ成形。底部は回転糸切り後に付け高台。	砂粒を含む。比較的硬質、還元。	色：灰色
Ⅲ 灰釉陶器	覆土 片残存	9溝 —8	底径 6.4	底部から体部は緩やかに立ち上がる。	ロクロ成形。底部は回転糸切り後に付け高台。高台端部丸み。外：体部3本の沈線。	砂粒を含む。硬質、還元。明オリブ灰色。	
Ⅲ 灰釉陶器	北側覆土 以下	9溝 —9	——	口縁部が外反する。	ロクロ成形。残存部分には、全面的に施釉されている。	少量の長石粒を含む。硬質、還元。	色：灰白色。
埴須志器	底より21cm 片残存	9溝 —10	底径 7.5	高台断面台形。	ロクロ成形。回転糸切り後に付け高台。	砂粒を含む。硬質、還元。灰白色。	
カマドの 袖材 土製	覆土	9溝 —11	縦 13.0 厚さ 6.5	長方形の粘土板と思われる。	長方形にする為に削った跡が見られる。	砂粒・雲母粒含む。やや軟質、酸化。明赤褐色・淡黄色。	日干しの可能性。焼成は二次的。
埴須志器	底より13cm 以下	9溝 —12	底径17.0	胴部は底部より直線的に立ち上がる。	胴部はケズリ後にナデ、内面にハケメ痕。	砂粒を含む。硬質、還元。灰白色。	
埴土師器	底より24cm 口縁部以下	9溝 —13	——	口縁部は外反する。	口縁部は内外ともに横ナデ。外：胴部ヘラケズリ。内：胴部ナデ。	砂粒・雲母粒を含む。比較的硬質、酸化。鈍い褐色。	
埴土師器	底より11cm 以下	9溝 —14	——	口縁部は外反する。	口縁部は内外ともに横ナデ。胴部はヘラケズリ。	砂粒・雲母粒を含む。比較的硬質、酸化。	色：鈍い赤褐色。
埴土師器	底より11cm 以下	9溝 —15	——	口縁部は外反する。	口縁部は内外ともに横ナデ。外面胴部1ヘラケズリ。	砂粒多く含む。硬質、酸化。	色：淡褐色。
埴須志器	底より16cm 胴部片	9溝 —16	——	器壁厚い。	外：平行状叩キ痕。内：輪横痕。	砂粒を含む。硬質、還元。灰白色。	
埴須志器	底より30cm 胴部片	9溝 —17	——	器壁厚い。	外：自然釉。内：青海波状アテ痕。	砂粒含む。硬質、還元。	外：浅黄色 内：灰色
Ⅲ 須志器	底より27cm 口縁～胴部	9溝 —18	——	口縁外面直立。横を持って頸部外反。	内外：輪横痕、回転横ナデ。	砂粒多い。硬質、還元。灰白色。	
埴須志器	底より3cm 胴部片	9溝 —19	——	器壁厚い。	外：平行状叩キ痕。自然釉。内：青海波状アテ痕。	砂粒含む。硬質、還元。灰色。	
埴須志器	底より10cm 胴部片	9溝 —20	——	器壁厚い。内反りみだがやや歪む。	外：平行状叩キ痕。内：輪横痕。	雲母粒含む。硬質、還元。灰白色。	



第249図 10号溝出土遺物図(1)

第250図 10号溝出土遺物(2)

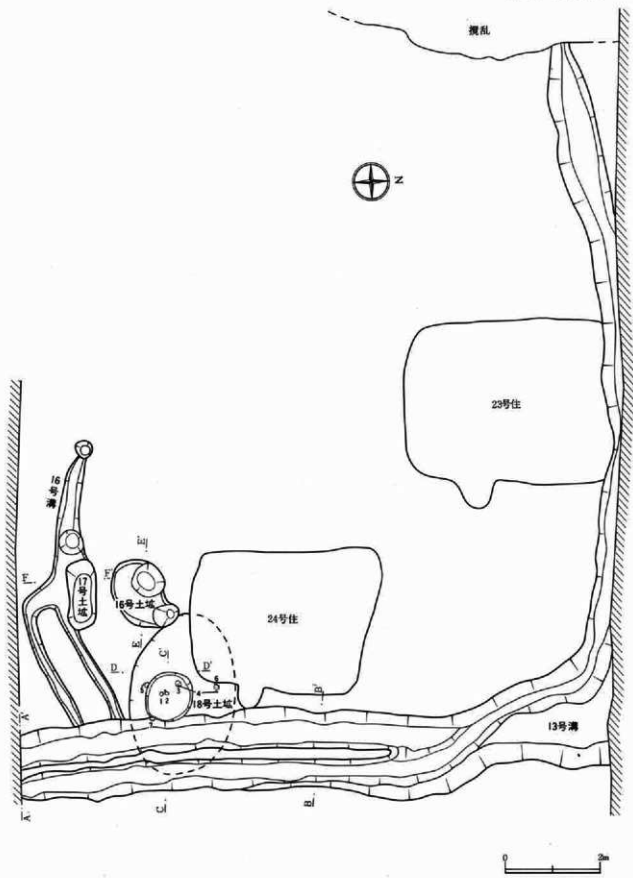


第130表 10号溝出土遺物観察表(1)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏須恵器	覆土 瓦残存	10溝 -1	口径14.0推 底径 6.7 器高 3.2	口唇やや歪む。 体部直線状。 やや上げ底。	ロクロ成形。内外面に指痕が 残る。底部は回転糸切り。	砂粒を含む。 比較的硬質、還元。 灰白色。	
坏須恵器	覆土 瓦残存	10溝 -2	口径14.0推 底径 7.0 器高 4.5	口唇丸み。 体部直線状に外傾。 平底。	ロクロ成形。外：指痕が残る。 内：横ナデ。底部は回転糸切 り。	砂粒を含む。 硬質、還元。 明緑灰色。	
坏須恵器	底より18cm 瓦残存	10溝 -3	口径12.0推 底径 6.0 器高 3.5	口縁やや外反。 体部緩く内反ぎみ。	ロクロ成形。外：指痕が残る。 外面口縁端部及び内面は横ナ デ。	砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰白色。	
坏須恵器	底より51cm 瓦残存	10溝 -4	口径 7.0推	体部上位外反、下位大 きく内反。平底。	ロクロ成形。外：指痕が残る。 底部は回転糸切り。	砂粒を含む。硬質、 還元。灰白色。	
埴 黒土器	覆土 瓦残存	10溝 -5	口径15.0推 底径 7.0 器高 5.8	口唇丸みを持ち、体部 緩く内反、高台外に開 き断面方形状。	ロクロ成形。内：全面的に磨 き後黒色処理。底部は回転糸 切り後に付け高台。	やや多量の砂粒を 含む。比較的硬質、 還元。	内：黒色。 外：灰黄色。
埴 土器 土器	底より26cm 完存	10溝 -6	口径 13.5 底径 6.5 器高 5.2	口縁丸く外反、体部下 位大きく内反。高台断 面方形で外に開く。	ロクロ成形。底部は回転糸切 り後に付け高台。	砂粒を含む。 比較的硬質、酸化。 淡黄色。	

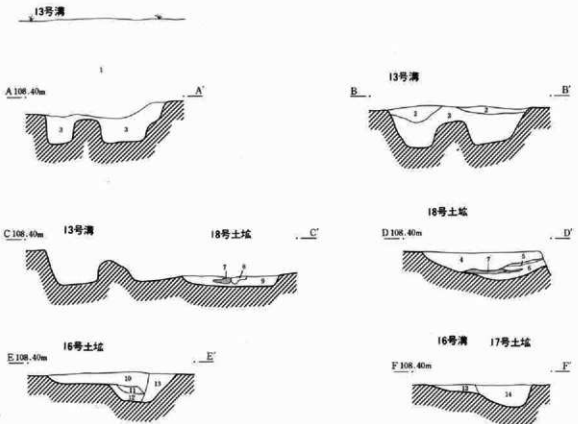
第131表 10号溝出土遺物観察表 (2)

器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
埴 須 恵 器	底より16cm 欠残存	10溝 —7	口径14.0推 底径 8.2 器高 5.2	口縁部はやや外反す る。	ロクロ成形。口縁部は内外面 ともに横ナデ。底部は回転糸 切り後に付け高台。	多量の砂粒を含む。 比較的硬質、 中性灰、鈍い橙色。	
埴 須 恵 器	底より17cm 底部のみ	10溝 —8	底径 7.2	体部下位凹形。 高台断面三角形。	ロクロ成形。底部は回転糸切 り後に付け高台。	砂粒を含む。 硬質、還元、青灰色。	
埴 須 恵 器	覆土 欠残存	10溝 —9	口径 14.5 底径 7.5 器高 5.2	口縁へ体部やや内反。 高台断面方形。	ロクロ成形、外：指痕が残る。 底部は回転糸切り後付け高 台。	多量の砂粒を含む。 硬質、還元。 明緑灰色。	内面に煤付着。
埴 須 恵 器	覆土 欠残存	10溝 —10	口径14.0推	口縁端部はやや外反す る。底部に高台割離痕。	ロクロ成形。口縁端部は内外 ともに横ナデ。外：指痕が残 る。底部は回転糸切り。	砂粒を含む。 比較的硬質、還元。 灰白色。	
埴 須 恵 器	覆土 欠残存	10溝 —11	口径 16.0	口唇外反歪む。高台割 離。体部中位やや屈曲。	ロクロ成形。底部は回転糸切 り後に付け高台。	砂粒を含む。硬質、 還元、青灰色。	
埴 須 恵 器	底より24cm 底部のみ	10溝 —12	底径 7.2	体部やや内反さみ。 高台断面三角形。	ロクロ成形。底部は付高台。 (回転糸切り後にナデか?)	多量の砂粒を含む。 硬質還元、灰白色。	
皿 須 恵 器	底より28cm 欠残存	10溝 —13	口径 13.0 底径 7.8 器高 2.7	口縁大きく歪む。 高台外に聞き断面方形 状。	ロクロ成形。 回転糸切り後に付け高台。	砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	
皿 灰輪陶器	覆土・9溝南 側覆土 欠残存	10溝 —14	口径14.0推 底径 7.0推 器高 3.5	口縁外反。口縁下段あ り。体部4本平行沈線。 高台断面三日月形。	ロクロ成形。付け高台。内外 面ともに底部附近を除き施 軸。つけがけ。	細かい砂粒を含む。 硬質、還元。 灰白色。	内外面重焼 付着。
皿 灰輪陶器	底より18cm 欠残存	10溝 —15	口径15.0推 底径 7.1 器高 3.5	体部緩く内反。口縁端 部丸く外反。 高台断面肥厚三日月形。	ロクロ成形。底部は付け高台。 内外面ともに底部を除き施 軸。つけがけ。	少量の砂粒を含む。 硬質、還元。軸オリ ープ反。素地灰白。	
壺 灰輪陶器	覆土 頸部のみ	10溝 —16	————	上位ラッパ状に大きく 外反。内径頸部狭あり。	ロクロ成形。外：ヘラ描沈線 による文様5個。全面施軸。	少量の砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰色。	軸：灰オリ ープ、素：灰白色
壺 須 恵 器	底より12cm 欠残存	10溝 —17	口径 15.0 最大径22.0	垂直な頸部。口縁部近 くで外反。口縁端部直 立。体部大きく内反。	粘土紐巻き上げ後にロクロ使 用。頸部と体部は別作り接 合。	砂粒を含む。 硬質、還元。 青灰色。	18と同一個体 か。
壺 須 恵 器	底より18cm 欠残存	10溝 —18	底径 12.0	体部内反さみに内傾。 高台断面方形。外開き。	粘土紐巻き上げ後にロクロ使 用か。付け高台。	砂粒を含む。硬質、 還元、青灰色。	17と同一個体 か。
甕 須 恵 器	底より34cm	10溝 —19	————	大小2片の壺胴部片が 自然融ガラス質で接着。	青海波状アテ痕が残る。	砂粒を含む。硬質、 還元、青灰色。	置き台か。
水 瓶 須 恵 器	底より10cm 欠以下	10溝 —20	底径 6.3	体部緩く内反直立さみ。 高台断面方形厚い。	ロクロ成形。内：工具をあて た跡が残る。底部は付け高台。	砂粒を含む。硬質、 還元、明青灰色。	
甕 須 恵 器	底より17cm 胴部片	10溝 —21	————	器壁厚い。	内外：表面割離。僅かに輪積 痕。	微気泡多い。 やや軟質、還元。	外：灰 色。 内：灰白色。
甕 須 恵 器	底より14cm 胴部片	10溝 —22	————	器壁厚く、緩く内反。	外：平行状叩き痕。 内：青海波状アテ痕。	砂粒・雪母含む。 硬質、還元、灰色。	
壺 須 恵 器	底より41cm 胴部片	10溝 —23	————	器壁上位薄く、下位厚 い。	外：平行状叩き痕。 内：青海波状アテ痕。	砂粒を含む。 硬質、還元。	外：灰白色。 内：灰色。



第251図 13・16号溝，16・17・18号土坑平面図

第IV章 雨庭遺跡



- | | | |
|--------------------------------|-----------|---------------------|
| 1 耕作土及び暗褐色砂質土 | 9 暗褐色砂質土 | 焼土塊・灰多く含む炭化物混在。 |
| 2 暗褐色砂質土 日軽石多く含む、橙・黄色粒子混在、しまる。 | 10 褐色砂質土 | 軽石・黒色土塊混在。 |
| 3 暗褐色砂質土 2層より日軽石少く、暗色 | 11 黒色粘質土 | 軽石混在 |
| 4 茶褐色砂質土 粒子粗く日軽石混在、しまり弱い。 | 12 黒色粘質土 | 軽石・褐色土塊混在 |
| 5 茶褐色砂質土 4層にローム粒子混入。 | 13 黒褐色砂質土 | 黒色土塊多く含む。 |
| 6 茶褐色粘質土 粒子細かく焼土粒子混在、しまり強い。 | 13 暗褐色砂質土 | 日軽石、黄・橙色粒子混在、固くしまる。 |
| 7 青白褐色粘砂質土 粒子細かい灰が主体、焼土も含む。 | 14 暗褐色砂質土 | 日軽石多く含む、黄色粒子混在。 |
| 8 暗褐色土 焼土・灰混在。 | | |



第252図 13・16号溝、16・17・18号土壇断面図

13号溝 (II区)

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。23・24号住を切断し、16号溝との新旧関係は不明である。

N 0°の走向でほぼ南北に走るが底は平行する2条に分かれており、西側の部分がそのまま北へ走るのに対し、東側の部分は調査範囲北近近くで大きく西に向きを変え西側の溝と交差してN 89°EからN 75°Eほどの走向で西に向かい掘れ溝に当たっている。西側の溝は上幅0.6~0.9m、下幅0.3~0.4mあり、確認面よりやや上の海拔108.40mからの深さは0.3~0.5mを測る。断面形はU字形を呈し底面は暗褐色土。北側がやや浅く、南側がやや深い。東側の溝は上幅0.5~1.0m、下幅0.2~0.4m、同じく深さは0.4~0.6mを測る。断面は南北部分がU字形で走向変化部分から西はV字形ぎみになる。底面は暗褐色土で、西及び北がやや浅く南がやや深い。両溝の交差部分では約0.15~0.2mの段差で東側の溝の底が深い。

遺物は全て覆土中の出土で、緑釉埴片(1)、須恵器壺口縁(2)、同壺底部(4)、同坏底部(3・5)が見られた以外に灰釉埴片約20片、須恵器壺壺・埴片約200片、羽釜片1片、土師器系統壺・埴片約200片の小破片が出土している。

両溝は掘削時の時期差があると思われるが、覆土は同一で新旧関係の区別はできない。比較的短い時間差であろう。また攪乱溝をはさんだ西側にはほぼ似た走向・形状・断面形の12号溝が東西に走っている。12号溝は本溝の東側の延長と考えられる(小安)

16号溝(Ⅱ区)

本溝は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。17号土壇・ピットにより切断されている。13号溝と重複するが新旧関係は不明である。なお13号溝の東側では本溝の延長は確認されていない。16・18号両土壇が北側で近接し、西側では27号住が近接している。

全体としては南側に膨らむ弧状をなしており西側はN75°W、東側はN64°Eほどの走向を示す。中央部で東側は南側に平行して走る溝が分岐しておりU字形の平面形を呈している。西端には径0.2m、確認面からの深さ0.3mのピットがある。上幅は0.2~0.5m、下幅0.1~0.4mで中央部が最も幅広い。確認面よりやや上の海拔108.30mからの深さは0.1m前後で西側が僅かに深い。断面形は各部分ともU字形である。

遺物は須恵器坏底部(1)が覆土中から出土しており、その他に土師器系統小破片4片が見られただけである。(小安)

17号土壇(Ⅱ区)

本土壇は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。16号溝を切断している。主軸はN86°Eで、長軸1.0m、短軸0.4mを測る。確認面からの深さは約0.2mで隅丸長方形のプランを呈する。壁は急傾斜で、底面は若干硬くしまった暗褐色土。遺物は覆土中から灰釉片2片、須恵器片3片、土師器系統小破片10片が見られただけである。(小安)



第253図 13・16号溝出土遺物図

第132表 13・16号溝出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
埴輪陶器	覆土 口縁小片	13溝 -1	——	器壁薄く、口唇丸みあり、やや外反。	内外：黄緑色から濃緑色斑状の施釉。一部釉剥落。	砂粒少ない。軟質、還元。素地灰白色。	
須恵器	覆土 須恵器	13溝 -2	——	器壁厚く、外反。	外：回転横ナデ後。4～6本単位彫刻波状文。内：輪横筋。	砂粒少ない。軟質、還元。灰色。	
須恵器	覆土 底部片	13溝 -3	——	平底。	底部右回転糸切り後、ナデ調整。ヘラ描比線一糸。	砂粒少ない。硬質、還元。灰色。	
須恵器	覆土 底部片	13溝 -4	——	器壁厚い。平底、立ち上がり部平行比線。	底部回転糸切り後、ナデ調整。	砂粒少し含む。硬質、還元。暗灰色。	
須恵器	覆土 底部片	13溝 -5	——	器壁薄く、体部内反さみ。底部上げ蓋さみ。	体部口クロ痕。底部右回転糸切り後、ナデ調整。	微気泡あり。硬質、還元。灰白色。	
須恵器	覆土 底部片	16溝 -1	——	器壁薄く、体部内反さみ。底部上げ蓋。	底部右回転糸切り後、周縁ヘラナデ。一部自然釉。	砂粒・青母含む。硬質、還元。灰白色。	

16号土坑 (II区)

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北東側で18号土坑に接するが新旧関係は不明。また北側で24号住に近接する。

主軸を概ねN57°Eにとる1.4×1mほどの楕円形状を呈し、確認面よりやや上の海拔108.40mからの深さは22～24cmである。北側には本土坑より古い底径40cm深さ47cm、底径15cm深さ50cmのピットが2個重なっている。

遺物は覆土中から須恵器小破片3片、土師器系統小破片10片が出土したのみである。(坂井)

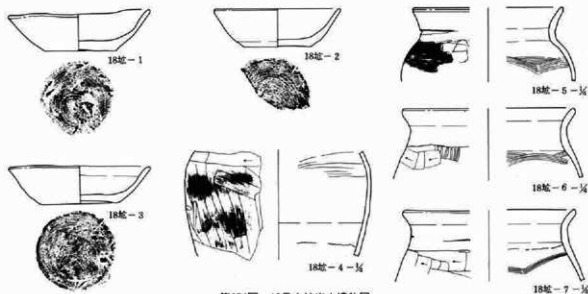
18号土坑 (II区)

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。北西側で24号住、東側で13号溝と重複しているが、明確な層位的新旧関係は把握できなかった。しかし調査時の状況からは、24号住より新しく13号溝より古いと思われる。南西側で16号土坑、南側で16号溝に近接している。

形状は極めて不明瞭で、調査時には推定長径3m以上、確認面直上の海拔108.30mからの深さ20～30cmの半楕円形状で、壁の立ち上がりが住居址のように急な掘り込みが検出された。そして底のほぼ中央には1×0.9mの円形で深さ38～42cmのさらに下がる掘り込みが見られた。しかし土層断面や遺物出土状態から考えると、2×3mほどの径をもつ楕円形平面で皿状の緩い傾斜をもって底の円形掘り込みに至る形状が本来のものであったと思われる。底の円形掘り込みにはほぼ全体に焼土・灰・炭化物が堆積しており、特に灰層は土器片を包含しながら緩い傾斜に沿うようなレンズ状に似た堆積をしていた。

遺物は土器片がかなり多量に見られた。底近くの灰層中からは土師質土器杯(1・2・3)が出土し、また土師器壺口縁(5)もあった。また中心部上層から検出した土師器壺口縁(7)は、北側周縁部上層から出土した土師器壺(4・6)に器形が良く似ている。その他覆土中からは須恵器埴輪小破片約20片、壺・埴輪を中心とする土師器系統の小破片約200片、さらに黒色処理された埴片2片が見られた。

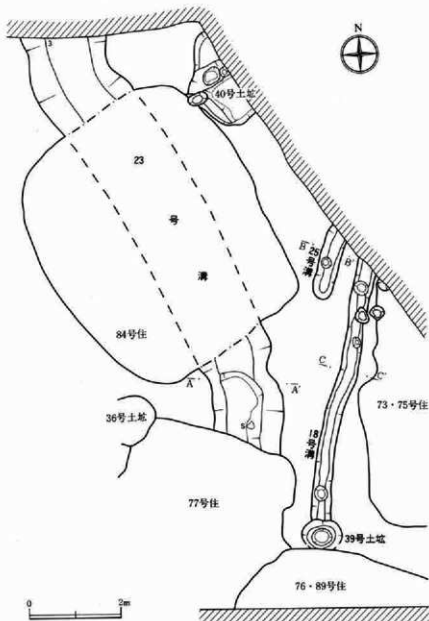
本土坑は当初住居址と想定して調査したため、遺物ながら本来の形状を十分に把握しえなかった。しかし須恵器類が少ないことを除けば、遺物は住居址のものに似ている。断面が皿状のやや深い掘り込みである点に問題は残るが、焼土・灰の堆積状況からみれば屋外炉のような施設と考えるのが妥当と思われる。(坂井)



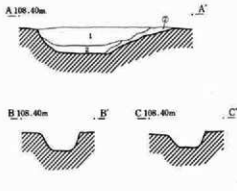
第254図 18号土坑出土遺物図

第133表 18号土坑出土遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師實土器	底より2cm 1/2残存	18坑 —1	口径 11.5 底径 5.8 器高 3.3	口唇歪み体部緩く外反。 底部は凹凸がはげしい。	内外：ロクロ成形。 口縁端部は横ナデ。 底部は回転糸切り。	多量の砂粒含む。 やや軟質、酸化。 鈍い褐色。	体部内面煤付 着。
坏土師實土器	底より2cm 1/2残存	18坑 —2	口径10.0推 底径 6.0推 器高 2.8	体部下半で内反し、直 線的に口縁に至る。 平底。	ロクロ成形。 底部は回転糸切り。	やや多量の砂粒を 含む。やや軟質、 酸化。黄褐色。	
坏土師實土器	底より1cm 完存	18坑 —3	口径 11.5 底径 6.3 器高 3.1	底部から緩く外反。口 唇やや厚く、上げ底。	ロクロ成形。 口縁部内外：横ナデ。 底部は回転糸切り。	粗い砂粒をやや多 量に含む。比較的 硬質、還元。	色：鈍い黄褐 色。
壺土師器	底より5cm 胴部片	18坑 —4	—	胴上半で緩く内反する。 器壁薄い。	粘土垂巻き上げ、外：ヘラケ ズリ。	やや多く砂粒含む。 硬質、酸化。褐色。	外面には煤付 着。
壺土師器	底より8cm 1/2残存	18坑 —5	口径18.0推	口縁部く字状に外反。 口唇外面沈線。 胴部内反。	口縁部内外：横ナデ。 胴部外面→ヘラケズリ。 内：ハケメ調整。	やや多量の砂粒を 含む。比較的硬質、 酸化。明赤褐色。	胴部外面煤付 着。
壺土師器	底より5cm 1/2以下	18坑 —6	—	口縁頸部器壁厚く、口 縁外反。胴部・体部は ほぼ直線状。	口縁部内外：横ナデ。 胴上半外：横ヘラケズリ。 内：ハケメ調整。	砂粒を含む。 比較的硬質、酸化。 褐色。	
壺土師器	底より15cm 1/2以下	18坑 —7	口径18.0推	頸部より口縁外反。胴 部とはほぼ直線状に続 く。口縁頸部器壁厚い。	頸部→口縁部内外：横ナデ。 外：頸部から下→ヘラケズリ。 内：ハケメ調整。	やや多く砂粒含む。 比較的硬質、酸化。 褐色。	



- 1 暗褐色粘質土 C軽石多量に含みローム・炭化・焼土粒混じる。粒子細かい。
- 2 暗褐色粘質土 ローム粒塊多く含む。



第255図 18・23・25号溝, 39号土壇平面断面図

18号溝 (Ⅲ区)

本溝は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。39号土壇と重複し、73・75・76号住と重複し、73・75・76号住と重複し、39号溝が近接する。39号土壇との新旧関係は不明である。

N11°Eの走向でほぼ直線状に走り、断面は逆八字形を呈する。上幅は約40cm、底幅約20cmと狭く、確認面直上の海拔108.30mからの深さも約20cmと浅い。

覆土から水は流れていなかったと推測される。(井川)

23号溝 (Ⅲ区)

確認面は18号溝と同様である。77・84号住と重複するが、土層堆積状況より、本溝は84号住より新しく、77号住より古い。東側で76号住、18号溝に近接する。

北から南に向って、N12°W→N38°W→N18°Wと蛇行している。断面は皿状を呈し、上幅1.3～1.8m、底幅0.8mを測り、深さ(同上)は15～35cmで、南側で7cmほどの段をもって低くなっている。

覆土は多量の浅間C軽石を含む黒褐色粘質土で、水の流れた痕跡はない。

遺物は、北側より須恵器蓋(3)、覆土中より同埵(2)、甕(4)、土師質土器片(1)が出土し、他に小破片として須恵器片1片、土師器系統約10片が見られた。(井川)

25号溝 (Ⅲ区)

確認面は18号溝と同様である。重複はないが、84号住・18号溝が近接する。

走向はN12°Eで、断面は逆八字形を呈する。上幅は約40cm、底幅約20cmと狭く、深さ(同上)も約20cmと浅い。北から南へ向って走るが、途中で消滅している。

覆土から水は流れていなかったと推測される。

(井川)

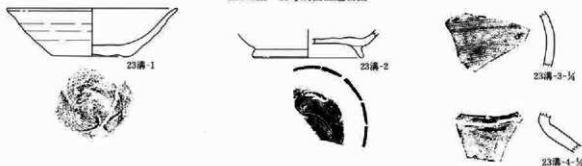
39号土壇 (Ⅲ区)

確認面は18号溝と同様である。89号住、18号溝と重複し、76・77号住と近接する。89号住との新旧関係は、覆土の相違から本土壇の方が新しいと考えられる。18号溝との新旧関係は不明である。

本土壇の規模は長軸約80cm、短軸約60cmで、平面形は楕円形を呈する。確認面からの深さは約20cmである。

(井川)

第256図 23号溝出土遺物図



第134表 23号溝出土遺物観察表

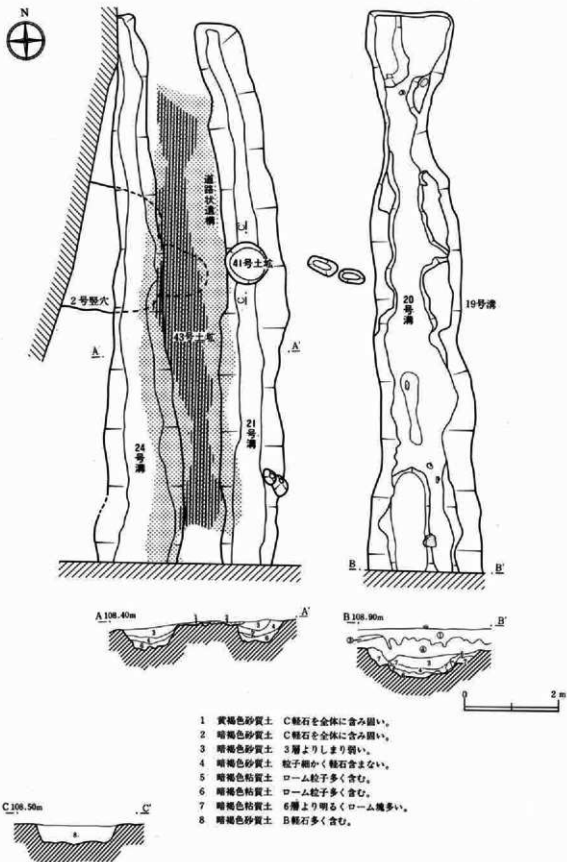
器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏土師質土器	覆土 片残存	23溝 —1	口径 13.6 底径 6.2 器高 3.8	口縁薄く底部厚い器壁。 器高狭く口径大きい。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ、ロクロ指痕。内：回転横ナデ。	砂粒多量の胎物含む。酸化。灰黄褐色。	
埴須器	覆土 底部	23溝 —2	底径 8.6	器壁薄く中心極く薄手。 薄く長い高台丁摩動付。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	還元。褐灰色。	黒斑あり。
埴須器	底より19cm 胴部	23溝 —3	—	ほぼ均一した器壁。緩やかな丸み。	外：不定沈線。内：回転横ナデ。	還元。灰色。	
埴須器	覆土 胴部	23溝 —4	—	厚い器壁。頸部立ち上り 胴部大きく広がる。	外：ヘラケズリ胴部ナデ。 内：横ナデ胴部ヘラケズリ。	白色粒子含む。還元。中心灰褐色。	色：外面褐灰色。

道路状遺構 (Ⅲ区)

本遺構は第④層暗褐色粘質土面において確認された。21号溝埋没後に、両溝の間を中心に一部両溝の埋没面に重複して作られている。走向は埋没溝とほぼ平行している。

道路面は中央付近においては比較的硬くなっているものの、周辺部においては軟弱となっており、その幅を確定することは困難ではあるが、約2mと推定することができる。

道路面中央に幅約1m、厚さ5cmの黄褐色砂質土が敷かれている。この部分は路面下が若干くぼんでいる



第257図 道路状遺構、20-21-24号溝、41号土坑平面断面図

ところから、使用時において道路中央部のくぼみを修正するために補填したものと考えられよう。なお土層断面検出以前の遺構確認時には、1・2層の上面に浅間B軽石の硬化面が見られた。そのため路面は、B軽石降下以後と以前の2面が確実にあり、さらに21・24号溝掘削時の最下面も可能性がある。

出土遺物としては、補填部黄褐色砂質土中より須恵器壺(4)、路面下より同壺(3・5)、埴(1)、灰釉皿(2)、石製紡錘車(6)が出土し、その他に小破片として路面下より須恵器片約200片、土師器系統約20片、弥生土器片約30片、縄文土器片約1000片が見られた。(飯塚・女屋)

20号溝(Ⅲ区)

確認面は道路状遺構と同様である。21・24号溝とほぼ平行のN5°Wの走向をもち、斜め方向からくる19号溝が埋没後につくられている。幅は広い部分で、上幅2.3m、底幅1.2m、狭い部分で、上幅1.0m、底幅0.5mである。確認面直上の海拔108.40mからの深さは約40～60cmで、底面は北側がやや高くなっている。掘り方は、斜めに掘り込み、途中で段をもつ部分と、もたない部分がある。底面は皿状の掘り込みで、さらに深く掘り込まれている部分もある。

出土遺物としては、覆土中より墨書須恵器埴(1)、黒色土器埴(2)、須恵器埴(3)、壺(5)、鉢(4)、平瓦(6)が出土し、小破片として中世陶器片1片、須恵器片約40片、土師器系統約200片が見られた。いずれも流れ込みで、溝と直接関連するものではない。

埋没土層の状況から空堀であり、徐々に埋没していったことがうかがわれる。

(飯塚)

21号溝(Ⅲ区)

確認面は道路状遺溝と同様である。20号溝及び21号溝の間に平行して走っており、溝埋没後に41号土壇、道路状遺構がつくられている。上幅1～1.3m、底幅0.2～0.7mで、確認面直上の海拔108.40mからの深さは45～60cmで、北側が僅かに浅い。走向はN6°Wを測る。掘り方は斜めに掘り込んでいるが、その傾斜は一定ではない。底面はU字状を呈している。

出土遺物としては覆土中より須恵器壺・埴(1・2)が出土し、他に覆土中より小破片として釘状鉄製品2片、須恵器片約40片、土師器系統約20片が見られた。いずれも流れ込みで溝と直接的な関連性はない。

埋没土層の状況から空堀りであり、徐々に埋没していったものと推定できる。

(飯塚)

24号溝(Ⅲ区)

確認面は道路状遺構と同様である。20・21号溝とほぼ平行し、縄文期の43号土壇、2号整穴の埋没面を切ってつくられている。溝は北側が幅が狭く上幅0.6m、底幅0.3m、南側は広くなっており上幅1.8m、底幅1.0m、また深さ(同上)は40～60cmで、底面は北側がやや高くなっている。走向はN4°Wを測る。掘り方は斜めに掘り込んでいるが、場所により傾斜は一定ではなく、底面は凹凸のある部分もある。

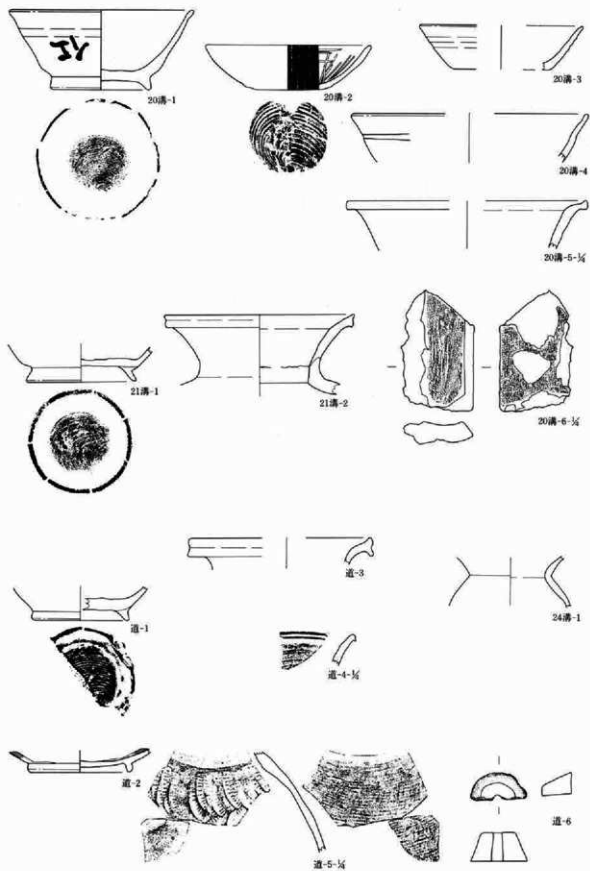
出土遺物としては、覆土中から須恵器壺(1)が出土した。他に小破片として鉄錘1片、須恵器片約20片、土師器系統約30片が見られた。いずれも溝掘削後もなく流入したものと考えられる。

土層の堆積状況から空堀で、徐々に埋没していったものと考えられる。

(飯塚)

41号土壇(Ⅳ区)

確認面は道路状遺構と同様である。21号溝の埋没面につくられている。規模は底径70cmの円形で、壁はや



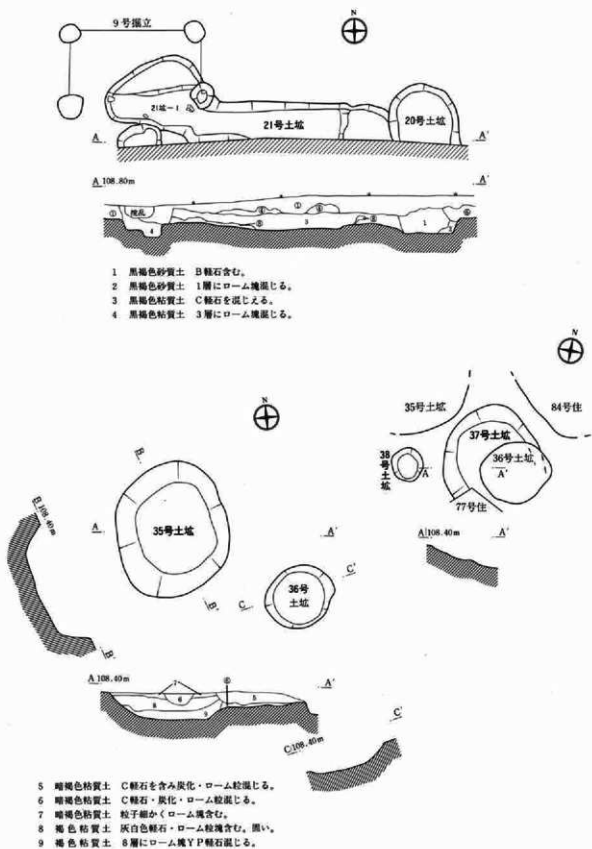
第258圖 20・21・24号清，道路状遺構出土遺物圖

や傾斜をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸がある。

土壇内には浅間B軽石を多量に含んだ暗褐色土が埋没している。このことから浅間B軽石降下後まもなく埋没したことが推定される。なお出土遺物は皆無である。(飯塚)

第135表 20・21・24号溝、道路状遺構出土土物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
埴 須 恵 器	底より9cm 以上残存	20溝 一	口径 14.6 底径 7.8 器高 6.3	ほぼ均一した厚み。器 高が高く口径広い大 形。厚く短い高台貼付。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 還元。灰白色。	体部外面黒書 「江」。
坏 黒色土器	覆土 完存	20溝 二	口径 13.2 底径 5.8 器高 3.5	ほぼ均一した薄手。器 高、低く口径大きい。	底部回転糸切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ研磨、黒 色処理。	小石・鉱物含む。 鈍い橙色。	外面口縁埋付 着。
坏 須 恵 器	覆土 口縁～底部	20溝 三	器高 3.5	器壁が薄くなだらかに 立ち上がる。	底部回転糸切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ。	鉱物含む。外：黄 灰色。内：灰白色。	
鉢 須 恵 器	覆土 口縁部	20溝 四	————	口縁薄く段が付き体部 やや厚い器壁。	外：回転横ナデ沈線1本あり。 内：回転横ナデ。	良好、還元。 黄灰色。	
壺 須 恵 器	覆土 口縁部	20溝 五	————	口唇部緩やかに外反す る。胴部均一した厚さ の器壁。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	不良。外：灰白色。 内：黄灰色。	
平 瓦	覆土 小片	20溝 六	————	厚く僅かなカーブあり。 表面の割離難しい。	外：ナデ。 内：布目痕。	鉱物含む。不良。 鈍い橙色。	
埴 須 恵 器	覆土 体部～底部	21溝 一	底径 8.6	中心薄く外側やや厚い。 底部に薄く長い高台貼 付。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒含む。良好。 還元。褐灰色。	
壺 須 恵 器	覆土 口縁～胴部	21溝 二	————	器壁口縁から胴部にか けて厚くなり長い。口 唇部僅かに外反。	胴部叩き痕。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 良好、還元。黄灰 色。	
壺 須 恵 器	覆土 胴部～胴部	24溝 一	————	やや薄手でく字状に屈 する胴部。	外：回転横ナデ。胴部ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 不良、還元。中心 灰黄色、外暗灰黄。	
埴 須 恵 器	下層 底部	道路 一	底径 7.6	器壁が厚く断面三角形 の高台縁に貼付。	底部回転糸切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ。	鉱物含む。還元。 灰色。	
皿 灰輪陶器	下層 底部	道路 二	底径 7.8	均一した器壁。厚く短 い高台丁寧に貼付。	外：回転横ナデ。底面回転へ ラケズリ。内：回転横ナデ。	還元。灰白色。 軸：灰白色	
壺 須 恵 器	下層 口縁部	道路 三	————	器壁厚く口唇部に薄く 小さな器貼付。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 還元。外褐灰色。	自然釉。内灰 白色。
壺 須 恵 器	黄砂中 口縁部	道路 四	————	胴部近く厚く下方やや 薄くなる大形。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 還元。褐灰色。	
壺 須 恵 器	下層 胴部	道路 五	————	器壁厚く緩やかなカー ブを描く大形。	外：平行叩き痕。 内：接合部アズ痕。	鉱物含む。還元。 外：黄灰色。	内：暗 灰 黄 色。
紡 錘 車 滑 石	下層 片残存	道路 六	幅 4.5 厚さ 2.3	厚みのある楕円円形。 穿孔は下面側がやや大 さい。	上面研磨後糸痕。下面研磨さ れる。側面縦方向のケズリ痕 後に研磨。	鈍い黄褐色。	



第259図 20・21、35・36、37・38号土壇平面断面図

20号土坑 (IV区)

本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面上で調査範囲外にかかって半分ほど確認された。21号土坑より新しく、7号掘立の南に位置する。規模は長辺0.9mで円形を呈すると思われる。深さは20cmで、主軸は不明。覆土のほとんどは浅間B軽石を混入する黒褐色土が見られた。遺物は覆土中から小破片として、須恵器片7片、土師器系統約10片が見られた。

(女屋)

21号土坑 (IV区)

確認面は20号土坑と同様である。20号土坑より古く、9号掘立より新しい。7号掘立の南に位置する。平面形は、溝状部分・土坑状部分とが連続する形態である。覆土には浅間C軽石をまばらに含む黒褐色土が見られた。遺物は西側部分より黒色土器環(1)が出土した他に、小破片として覆土中から須恵器片4片、土師器系統約10片が見られた。

(女屋)

35号土坑 (III区)

本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。規模は底径1.4×1.2mで、平面形はややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは約50cmである。覆土は浅間C軽石を含む暗褐色土である。

遺物は覆土中から須恵器環(1)、蓋(2)が出土し、他に小破片として須恵器片約10片、土師器片1片が見られたが、流れ込みと思われる。

(井川)

36号土坑 (III区)

本土坑は37号土坑底面で確認され、西側で37号土坑、南側で77号住に切られる。平面形は径80cmの円形で、確認面からの深さは約25cmである。覆土はローム粒・ローム塊を多く含む暗褐色土である。遺物は覆土中より縄文時代中期土器小破片を少量出土した。

(新井)

37号土坑 (III区)

本土坑の確認面は35号土坑と同様で、南東側で36号土坑を切り77号住に切られ、南側で88号住、西側で35号土坑、北側で84号住と隣接する。平面形は南東側で77号住により切られているため確定されないが、長辺1.5m以上、短辺1.1mをとり確認面からの深さ15cmを測る。覆土は焼土・炭粒少量含む褐色土であり、遺物は覆土より須恵器皿(1)、蓋(2)、そして鉄釘(3)を出土した他、小破片として須恵器片約10片、土師器系統約20片が見られた。

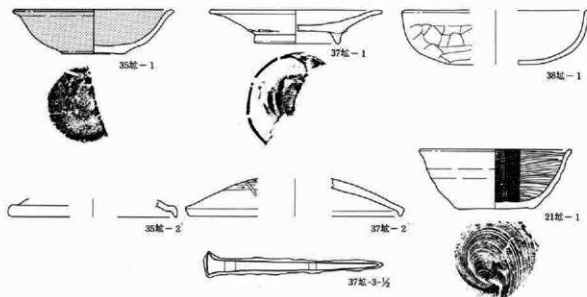
(新井)

38号土坑 (III区)

確認面は35号土坑と同様である。重複はないが77・79・88号住、35・36・37号土坑が近接する。規模は底径約40cm、平面形は円形である。確認面からの深さは約20cmである。遺物は土師器環(1)が覆土中から出土した他、小破片として須恵器片2片が見られた。

(井川)

第260図 21・35・37・38号土坑出土土遺物図



第136表 21・35・37・38号土坑出土土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏 黒色土器	底より17cm 片残存	21坑 -1	口径 12.0 底径 6.0 器高 4.8	やや均一した器壁。底 部中心凹む。	底部回転未切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ後研 磨・黒色処理。	砂粒・鉱物含む。 酸化。 鈍い橙色。	
坏 須恵器	覆土 口縁～底部	35坑 -1	底径 5.0 器高 3.5	やや薄い器壁。口唇部 僅かに外反する。	底部回転未切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 中性灰。	色：鈍い黄橙 色。傷付甚。
蓋 須恵器	覆土 口縁部片残存	35坑 -2	—	均一した厚さ。口端部 丸く断面三角	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	鉱物含む。還元。 褐灰色。	
皿 須恵器	覆土 口縁～底部	37坑 -1	口径 13.6 底径 6.5 器高 2.7	底部厚く口縁部僅かに 外反。断面三角形の高 台座に貼付。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	気泡あり。鉱物含 む。還元。 灰～黄灰色。	
蓋 須恵器	覆土 口縁部	37坑 -2	—	頂部厚く口端部薄い器 壁。口端部内傾し断面 三角。	外：頂部回転ヘラケズリ、口 端回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・鉱物含む。 気泡あり。還元。 灰黄色。	
坏 土器	覆土 口縁～底部	38坑 -1	器高 4.3	体部丸みを帯び丸底で 器壁薄い。	外：ヘラケズリ後ナデ。 内：横ナデ。	鉱物含む。酸化。 鈍い橙色。	

第137表 37号土坑出土土遺物観察表 (2)

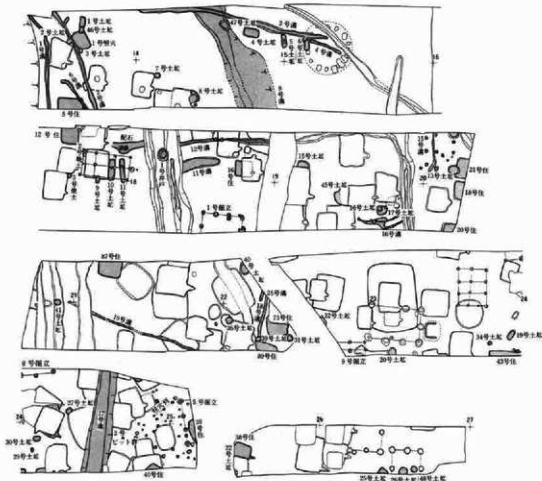
器種・器形	出土状態	番号	現存最大値 (cm)			形態の特徴・遺存状態	備考
			長さ	幅	厚さ		
鉄 釘	覆土	37坑 -3	9.5	1.4	0.9	扁平な頭部がやや左右に広がり、断面方形で 尖頭形の体部が直線状に基びる。	完存。

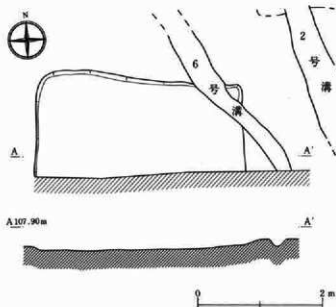
第5節 時期不明の遺構

時期不明の次の遺構を本節で記した。

住居址	計8軒 (16)	5号住, 18号住, 20号住, 21号住, 39号住, 43号住, 87号住, 89号住
掘立柱建物址	計5棟 (5)	1号掘立, 5号掘立, 8号掘立, 9号掘立, 柱穴列
ピット群	計1群 (2)	2号ピット群
溝	計8条 (13)	1号溝, 2号溝, 3号溝, 6号溝, 8号溝, 12号溝, 17号溝, 19号溝
土 塚	計19基 (36)	1号土塚, 2号土塚, 3号土塚, 4号土塚, 5号土塚, 6号土塚, 13号土塚, 19号土塚, 25号土塚, 26号土塚, 29号土塚, 30号土塚, 31号土塚, 32号土塚, 34号土塚, 40号土塚, 46号土塚, 47号土塚, 48号土塚
焼 土	計1箇所 (2)	3号焼土
竪穴状遺構	計1基 (1)	1号竪穴
配石遺構	計1基 (1)	() 内の数は総数, 他に井戸址1基がある。

第261図 時期不明遺構分布概念図





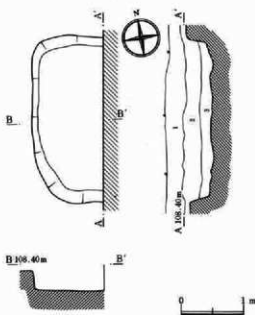
第262図 5号住居址平断面図

5号住居址(Ⅰ区)

本住居址は第④層黄褐色粘質土面で確認され、南側半分以上は範囲外のため未調査で、北東角は6号溝に切断されている。

北辺で3.1mを測り、現存長は東辺1.3m、西辺1.6mで方形プランと思われる。壁は緩傾斜で壁高は0.1mを測る。床面は暗褐色粘質土を踏み固め硬くしまっておりほぼ平坦である。柱穴・周溝は確認されていない。

カマドは調査範囲内では検出されず、遺物も全く出土していない。そのため住居址との断定は困難で、堅穴状遺構の可能性も考えられる。(小安)



第263図 18号住居址平断面図

18号住居址(Ⅱ区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認され、東側半分以上は範囲外のため未調査である。北側に21号住、西側に19号住が近接する。

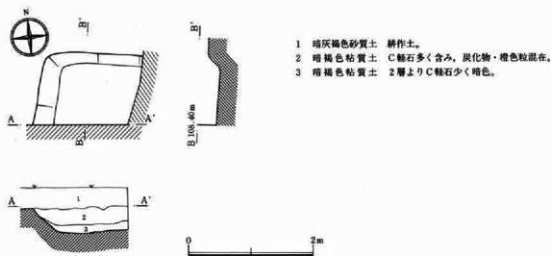
西辺2.3mを測り、現存長で南辺0.5m、北辺1.0mであり方形プランを呈すると思われる。壁は急傾斜で確認面まで壁高は30cmある。床面は茶褐色粘質土でほとんど平坦だが軟弱である。柱穴・周溝は確認できない。

カマドは調査範囲内では検出できなかった。

遺物は床面のものはなく、覆土中より土師器頸口縁、須恵器埴底部が上層より見られた他、小破片として須恵器壺・埴片約20片、土師器系統壺・坏片約30片があった。

形状より住居址と考えたが、堅穴状遺構等の可能性も考えられる。(小安)

- 1 暗灰褐色砂質土 耕作土。
- 2 暗褐色粘質土 C軽石多く含み橙色・炭化粒点混在。
- 3 明黒褐色粘質土 C軽石・橙色・黄色粒塊混在。



第264図 20号住居址平断面図

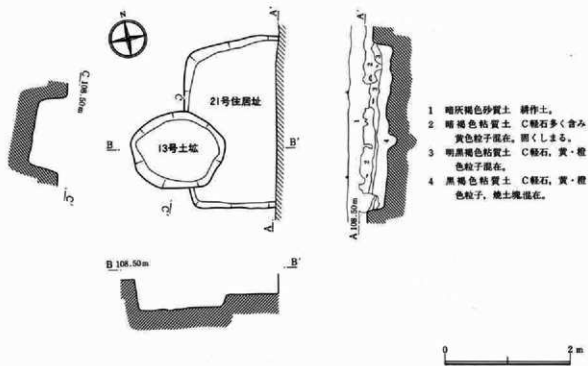
20号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側・南側が調査範囲外である。

現存する壁は西辺が0.9m、北辺が1.2mで方形のプランを呈すると思われる。壁は特に西壁が緩傾斜で、確認面までの壁高は20～30cmある。床面は明黒褐色土面だが軟弱不均一なため、調査時には飛ばしてしまい土層断面より確認した。柱穴・周溝・カマドは確認できていない。

遺物は覆土中より須恵器塊・坏片約10片、土師器系統壺・坏片約30片が見られた。

本住居は調査時には形状より住居址と考えたが、整穴状遺構の可能性も考えられる。(小安)



第265図 21号住居址、13号土坑平断面図

21号住居址 (II区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。東側は調査範囲外で西壁中央南寄りで13号土坑に切断される。南側では18号住に近接している。

西辺2.2mを測り現存する壁は南辺1.2m, 北辺1.3mで、方形状のプランを呈すると思われる。壁はやや急傾斜で、確認面までの壁高は20~30cmを測る。床面は暗黄黒褐色土でほとんど平坦であるが軟弱。柱穴・周溝は確認されていない。調査範囲内ではカマドは検出されていない。

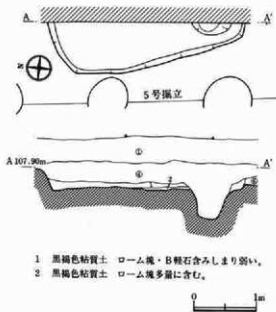
遺物は覆土中より須恵器壺・埴坏片約10片, 土師器系統壺・埴片約20片の小破片が見られただけである。

本住居址は調査時には住居址として扱ったが、竪穴状遺構等の可能性も考えられる。(小安)

13号土坑 (II区)

本土坑は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認され21号住を切断している。主軸はN75°Wを測り、プランは楕円形を呈し長軸1.3m, 短軸1.0m, 最深部で確認面からの深さ約0.5mを測る。壁は急傾斜で、底面はほとんど平坦だが軟弱。

遺物は覆土より須恵器壺・埴坏片3片, 土師器系統壺・台部・坏片約10片の小破片が見られた。(小安)



第266図 39号住居址断面図

39号住居址 (IV区)

本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。西辺で5号掘立と隣接する。規模は東壁が現代の道路に切られて確認されないが西辺で2.8m, 西辺走向N22°Wであり、覆土はローム粒を多く含む黒褐色土である。

壁は緩傾斜で、床面は全体に軟弱であるが部分的に張り床をしている。カマドは確認されないが、貯蔵穴を南西隅に設ける。

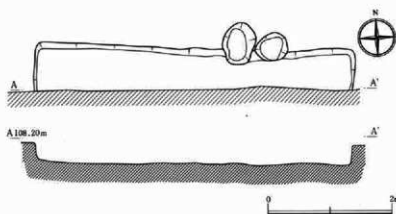
遺物はほとんど出土していない。(新井)

43号住居址 (IV区)

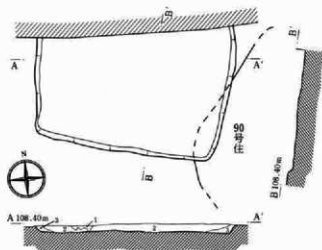
本住居址は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。北辺東側は新しいピットに一部切られている。規模は北辺で5.0m, 東・西辺はその一部である。北辺走向はN89°Wを測る。覆土は浅間C軽石とローム粒子を全体に含む褐色土が見られた。壁は直立に近く、床面は第⑦層を踏み固めているが軟弱である。

第5節 時期不明の遺構

覆土・床面での遺物は縄文土器片少量があるが、混入と思われる。(女屋)



第267図 43号住居址平断面図

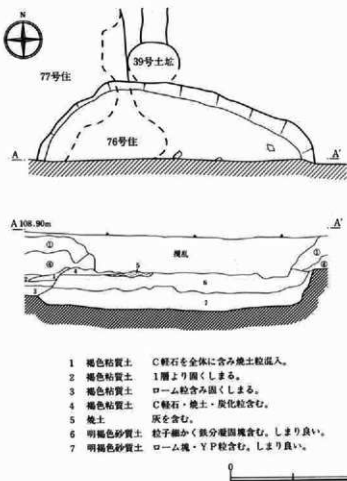


- 1 灰褐色砂質土 しまり弱い。
- 2 暗褐色粘質土 C粒石・黒褐色土・ローム粒含む。
- 3 黒褐色粘質土 2層とローム・C粒石含有黒褐色土が混在。

第268図 87号住居址平断面図

87号住居址 (Ⅲ区)

本住居址は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。90号住居埋没面に一部重複して構築されている。規模は南辺2.8mであるが、南北は調査範囲外へ延びているため不明である。南辺走向はN77°Wを測る。方形を呈し壁はやや傾斜をもって立ち上がる。床面は中央付近において僅かに張り床が認められたものの、全体的に軟弱である。柱穴・壁周溝・カマド・貯蔵穴は確認されなかった。出土遺物は皆無である。(飯塚)



第269図 89号住居址平断面図

- | | |
|----------|---------------------|
| 1 褐色粘質土 | ○軽石を全体に含み焼土粒混入。 |
| 2 褐色粘質土 | 1層より固くしまる。 |
| 3 褐色粘質土 | ローム粒含み固くしまる。 |
| 4 褐色粘質土 | ○軽石・焼土・炭化粒含む。 |
| 5 焼土 | 灰を含む。 |
| 6 明褐色砂質土 | 粒子細かく鉄分凝固塊含む。しまり良い。 |
| 7 明褐色砂質土 | ローム塊・Y P粒含む。しまり良い。 |

89号住居址 (III区)

本住居址は第⑦層黒茶褐色粘質土面で確認され、76号住、18号溝、39号土坑より古く、73・76号住が近接する。規模は南側が調査範囲外であるため確定されないが、東西方向4.1mを測り、平面形は円形の可能性が高い。覆土はローム塊と浅間Y P軽石を含む黒褐色土である。

壁は緩傾斜で、床面はロームを掘り下げ、上面にうすい張り床をして生活面とする。

遺物は覆土で縄文土器片と石鏝1点が見られたが、遺物ながら整理時まで粉失してしまった。(新井)

1号掘立柱建物址 (II区)

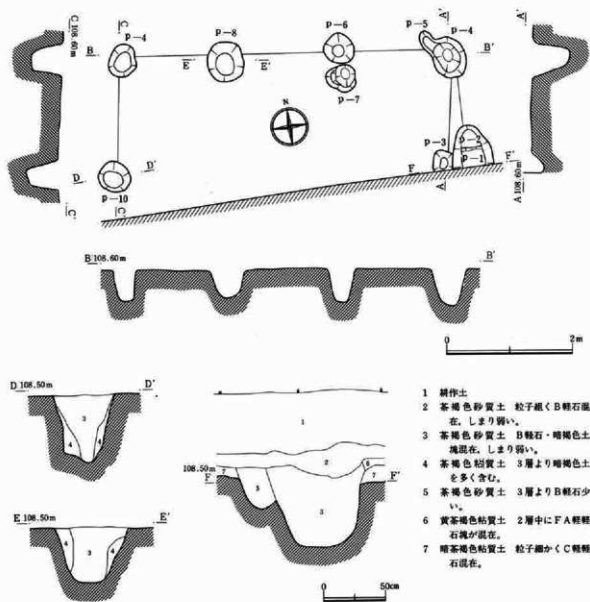
本掘立は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。南側は調査範囲外で未掘である。西側では9号溝に近接している。

計10個の柱穴を検出したが、調査範囲内ではP-3・4・6・8・9・10の計6個を結ぶ東西3間、南北2間以上の建物址を想定できる。北辺は約5.2mを測り、北西角がやや鈍角な方形もしくは長方形と考えられる。北辺の走向はN85°Wを呈する。

確認面直上の海拔108.30mから測った各柱穴の深さは東辺が32と71cm、北辺が57～71cm、西辺が61と67cmである。P-3のみ浅いが、断面に見られるようにP-3はP-1に切られており本来もう少し深かったと思われる。各柱穴の底径は東辺が20cm、北辺が20～35cm、西辺が30と35cmである。柱穴間距離は東辺が1.8m、北辺が1.6～1.8m、西辺が1.8mである。

P-1・2・7はそれぞれ深さが52・44・62cmあり、さらに重複する掘立柱遺構の存在が考えられる。断面に見られるように本掘立はその遺構に切られている。遺物はいずれの柱穴からも全く出土しなかった。

(坂井)

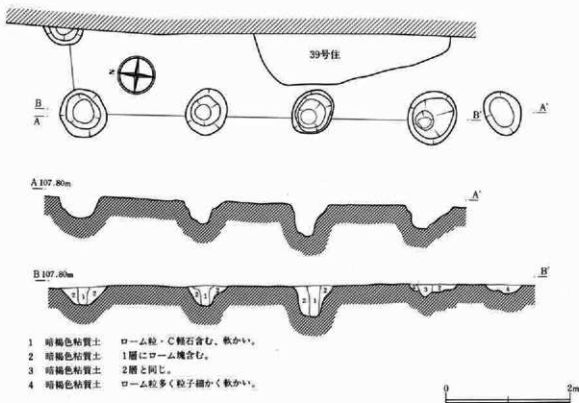


第270図 1号掘立柱建物址平断面図

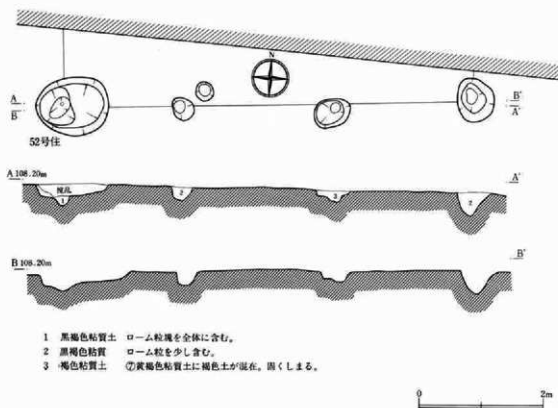
5号掘立柱建物址 (IV区)

本掘立は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、39号住と隣接する。平面形は東側が調査範囲外のため確定されないが、柱間は西辺で3間、西辺長5.5mで走向N8°Wを測る。各柱穴は底径が20~40cm、確認面直上の海抜107.70mからの深さ35~66cmで円形を呈し、柱穴間距離は1.7~1.9mである。大きな掘り方をもち、全ての柱穴に柱痕が認められた。覆土中から小破片として須恵器片3片、土師器系統片約10片が見られた。

(新井)



第271図 5号掘立柱建物址平面断面図



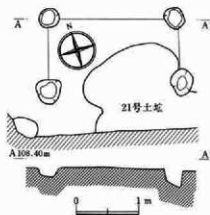
第272図 8号掘立柱建物址平面断面図

8号掘立柱建物址 (IV区)

本掘立は第⑥層黒茶色粘質土上で確認された。柱穴は南辺の4本が検出された。他の柱穴は北側の調査範囲外へ延びる。南西近くで52号住に切れ、南側には67号住が隣り合っている。規模は柱間3間、辺長6.6m、形状は4本とも異なる楕円形。主軸はN81°Eを測り、南辺西側より柱穴の底径20cm・25cm・55cm・25cm。確認面直上の海拔108.10mからの深さ50cm・31cm・32cm・52cm、柱穴間距離2.1m・2.3m・2.3mを測る。そして底のレベルはほぼ一様だが、掘り方の形状に差があり、他の掘立柱遺構と異なり統一感がない。

遺物出土状態は破片が少量で、本遺構に伴うものかは不明。年代・性格不明。確認面で南辺の1番西側の柱穴は形状が始めはつきりせず、大きく広がる。2番目の柱穴は底面に2つの小ピットが検出。3番目は中心に段差をもち、4番目は1つのピットだけで形成。底はそれぞれ柔らかくロームあるいは漸移土である。南東に2本のピットが確認されたが、本遺構とは別のものと考えられる。

(宮下)



第273図 9号掘立柱建物址平面断面図

9号掘立柱建物址 (IV区)

本掘立は第⑦層茶褐色粘質土上で確認され、21号土坑に切られる。遺構の大半は調査範囲外に広がる。柱間は2×2間以上で、東辺長2.0m以上、北辺長3.7m以上、主軸は不明であるが北辺走向はN83°Eを測る。

各柱穴は底径が20~30cm、確認面直上の海拔108.30mからの深さ23~42cmと他の掘立柱に比べてやや小さい円形を呈する。柱間距離は2.1~2.2mと思われる。北側の2本の柱穴は南側より浅く柱間が近いことから北面の廂状部分ともとれる。(女屋)

第138表 掘立柱建物址遺構表 (1)

遺構名	確認面	柱間	辺長平均	主軸方位	柱穴底径平均cm		柱穴深さ平均cm		基準レベル (海拔 m)	柱穴間距離平均m		備考
					東西辺	南北辺	東西辺	南北辺		東西辺	南北辺	
1掘立 II区	第⑥層	3×2 (?)	東西5.2m	N85°W (北辺)	28	26	63	58	108.30m	1.7	1.8	南側範囲外
2掘立 II区	第⑥層	1×2 両側面	南北3.1m 東西6.3m	N84°W	中央6箇 15.2	両側6箇 15.7	中央6箇 51	両側6箇 41	108.40m	中央2.7 両側1.7	中央1.5 両側1.5	10住、1・2 層土址等と重 複。新旧不明
3掘立 V区	第⑥層	2×?	東西3.8m	N87°W (北辺)	66	53	32	41	107.40m	1.9	2.5	南側範囲外
4掘立 V区	第⑥層	2×?	東西4.2m	N87°W (南辺)	47	40	45	43	107.50m	2.1	2.6	36・37住より 旧。北側範囲外
5掘立 IV区	第⑥層	3×?	南北5.5m	N8°W (西辺)	—	33	—	48	107.70m	—	1.8	東側範囲外
6掘立 IV区	第⑥層	2×3 総柱	南北4.9m 東西3.7m	N2°W	外側27	内側19	外側40	内側35	108.30m	北1.8 南1.2	1.6	62住より新
7掘立 IV区	第⑥層	2×3	南北4.0m 東西6.9m	N86°W	61	45	46	46	108.30m	2.3	2.0	59・60・63住 より旧

第IV章 兩堂遺跡

第139表 竪立柱建物址遺構表 (2)

遺構名	確認面	柱間	辺長平均	主軸方位	柱穴底径平均cm		柱穴深さ平均cm		基準レベル (海拔 m)	柱穴間距離平均m		備 考
					東西辺	南北辺	東西辺	南北辺		東西辺	南北辺	
8 竪立 IV 区	第①層	3×7	東西 6.6m	N81°E (南辺)	34	—	41	—	108.10m	2.2	—	52住より旧
9 竪立 IV 区	第①層	7×7	—	N83°E (北辺)	南側20	北側25	南側41	北側28	108.30m	南 2.2 北 2.1	—	21土塚より旧
柱穴列 IV 区	第①層	2	3.2m	N54°E	13	—	52	—	107.80m	1.6	—	

第140表 竪穴住居址遺構表 (1)

番号区	確認面	重複関係	平面形	主軸方位	床面積 ㎡	柱穴数	周溝	カマド/炉	時代	その他
1 I 区	第①層	1溝, 2土塚より旧	台形	N108°E	7.0	—	—	東壁南側, 袖無	古代	貯蔵穴
2 I 区	第①層	2溝より旧	隅丸長方形	N 96° E	約4.4	—	—	東壁南側 支脚石, 袖無	古代	
3 I 区	第①層	7土塚より旧	長方形	N108°E	7.5	—	—	東壁南側, 袖無	古代	円形ビット
4 I 区	第①層	6住より新, 8土塚より旧	—	—	—	—	—	東壁, 袖無	古代	南側範囲外 ビット
5 I 区	第①層	6溝より旧	—	—	—	—	—	—	不明	南側範囲外
6 I 区	第①層	4住より旧	—	—	—	—	—	—	古代	南側範囲外 ビット
7 II 区	第①層	8住より旧, 3機土より新	隅丸長方形	N 95° E	11.5	—	—	東壁南側, 袖無	古代	貯蔵穴
8 II 区	第①層	7住, 3機土より新	長方形	N 99° E	8.3	—	—	東壁南側, 袖無	古代	貯蔵穴
10 II 区	第①層	11住, 2竪立, 9・10土塚より旧, 2機土と重複	長方形	N 96° E	10.0	—	—	東壁南側, 袖無	古代	貯蔵穴
11 II 区	第①層	34住より旧, 10・12住より新	—	N 90° E	—	—	—	東壁南側, 袖無	古代	北側範囲外 ビット
12 II 区	第①層	11住より新	—	—	—	—	—	—	不明	北側範囲外
13 II 区	第①層	12溝より旧	—	N 96° E	—	—	—	東壁南側, 袖無	古代	北側範囲外 貯蔵穴
14 II 区	第①層	15・16住より新	隅丸長方形	N 93° E	7.8	—	—	東壁中央, 袖無	古代	ビット
15 II 区	第①層	14住, 12土塚より旧	—	—	—	—	—	—	不明	東側覆土
16 II 区	第①層	14住より旧, 15住より新	長方形	N 94° E	推 4.6	—	—	東壁南側, 袖不明	不明	
17 II 区	第①層	12溝より旧	—	—	—	—	—	—	古代	東側覆土
18 II 区	第①層	—	—	—	—	—	—	—	不明	東側範囲外

第141表 竪穴住居址遺構表 (2)

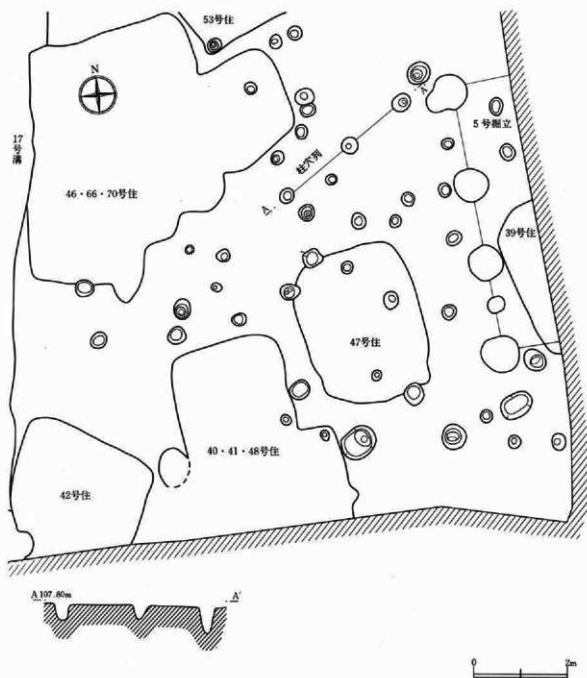
番号	区	確認面	重複関係	平面形	主軸方位	床高積 m	柱穴数	周溝	カマド/炉	時代	その他
19	II区	第⑥層	—————	長方形	N 96° E	7.0	—	あり	東壁南側、袖無、 基底部粘質土	古代	
20	II区	第⑥層	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	不明	東・南側範囲外
21	II区	第⑥層	13土壌より旧	—————	—————	—————	—————	—————	—————	不明	東壁範囲外
22	I区	第⑧層	3・4・5溝、6土壌より旧	円形/柄鏡形	N 55° W	約31.2	大小17	—	中央部、円形、 粘土床、埋壁 ⁹	縄文	壁不明
23	II区	第⑥層	13溝より旧	—————	N 90° E	—————	—————	—————	東壁南側、袖無、 石・平瓦で補強	古代	不整形・円形ピット
24	II区	第⑥層	25住、18土壌、13溝より旧	長方形	N 99° E	8.9	—————	—————	東壁南側、頂部 砂岩、地山袖?	古代	
25	II区	第⑥層	24・26・27住より新	長方形	N 91° E	9.4	—————	—————	東壁中央、置きカ マド	古代	銅押・炭含 むピット
26	II区	第⑥層	27住、45土壌より新。 25住より旧	—————	—————	—————	—————	—————	—————	古代	25住の張り 出し部?
27	II区	第⑥層	25・26・28住より旧	—————	N 91° E	—————	—————	—————	東壁、地山袖	古代	南側範囲外
28	II区	第⑥層	27住より新	—————	—————	—————	—————	—————	—————	不明	南側範囲外
29	II区	第⑥層	30住、15土壌より新	—————	N 95° E	—————	—————	—————	東壁南側、袖無、 石で補強	古代	西側覆乱
30	II区	第⑥層	29住より旧	—————	—————	—————	—————	—————	—————	古代	西側覆乱
31	II区	第⑥層	12溝と重複	—————	—————	—————	—————	—————	—————	古代	北側範囲外
33	II区	第⑥層	—————	—————	N 85° E	—————	—————	—————	南東角、支脚石	古代	北側範囲外
34	II区	第⑥層	11住より新	—————	—————	—————	—————	—————	東壁	古代	北側範囲外
35	V区	第②層	36住より新	隅丸長方形	N 103° E	16.9	—————	—————	南東角、粘土袖	古代	貯蔵穴
36	V区	第②層	35住より旧。4掘立より新。37住と重複	—————	N 109° E	—————	—————	—————	東壁中央、袖石	古代	南側覆乱
37	V区	第②層	4掘立より新。36住と重複	—————	N 103° E	—————	—————	—————	東壁	古代	西側覆乱
38	V区	第②層	45住より旧	隅丸方形?	N 106° E	—————	—————	—————	東壁、袖無	不明	西側範囲外
39	IV区	第②層	—————	—————	西辺N 22° W	—————	—————	—————	—————	不明	東側範囲外
40	IV区	第②層	41住より新	—————	—————	—————	—————	—————	—————	不明	南側範囲外
41	IV区	第②層	40住より旧。48住より新	隅丸方形?	N 82° E	—————	—————	—————	東壁中央	古代	南側範囲外 貯蔵穴
42	IV区	第②層	17溝より旧	—————	N 111° E	—————	—————	—————	東壁?	古代	南側範囲外
43	IV区	第②層	—————	—————	北辺N 89° W	—————	—————	—————	—————	不明	南側範囲外

第142表 壁穴住居址遺構表 (3)

番号区	確認面	重複関係	平面形	主軸方位	床面積 ㎡	柱穴数	周溝	カマド/炉	時代	その他
44	IV区 第②層	—————	隅丸方形?	N 96° E	—————	—————	—————	東壁南側、袖・燃焼部石組粘土	古代	南側範囲外
45	V区 第②層	38住、22土壇より新	隅丸方形?	—————	—————	—————	—————	—————	古代	西側範囲外
46	IV区 第②層	66住より新、17溝より旧	—————	N 98° E	—————	—————	—————	東壁中央、燃焼部粘土	古代	貯蔵穴
47	IV区 第②層	—————	隅丸方形	N 14° W	6.9	3	—————	中央北側、8字形、石組地床炉	弥生	
48	IV区 第②層	41住より旧	隅丸方形?	N 14° W	—————	—————	—————	—————	弥生	
49	IV区 第②層	17溝より旧、27土壇より新	隅丸長方形	N 22° W	推22.3	大 4 小 2	—————	中央北側、横円形、石組地床炉	弥生	やや大形
50	IV区 第②層	82住より新	隅丸方形	N 96° E	—————	—————	—————	東壁南側、袖石	古代	南側範囲外
51	IV区 第②層	65・67住より新	方形	N158°W	約 8.4	3	—————	南壁西側、袖石支脚石	古代	
52	IV区 第④層	8 掘立より新	長方形	N100°E	約 5.7	—————	—————	—————	古代	南東側覆土貯蔵穴
53	IV区 第②層	72住より旧	—————	—————	—————	1	—————	—————	弥生	北側範囲外
54	IV区 第②層	重複?	L字形?	—————	—————	—————	—————	—————	古代	南側範囲外
55	IV区 第③層	56住より新	—————	N 91° E	—————	—————	—————	東壁	古代	西側範囲外
56	IV区 第③層	55住より旧、57住より新	長方形	N 91° E	5.5	—————	—————	東壁南側	古代	
57	IV区 第⑤層	56住より旧	長方形	N 9° E	14.7	大 4 小 3	—————	中央北側、地床炉	弥生	
58	IV区 第②層	24土壇より新	—————	南辺N 98°E	—————	—————	—————	東壁南側、燃焼部粘土	古代	北側範囲外貯蔵穴
59	IV区 第②層	63・71住、7 掘立より新	隅丸長方形	N 94° E	約 9.1	—————	—————	東壁南側、袖石	古代	貯蔵穴
60	IV区 第②層	71住、7 掘立より新	隅丸長方形	N 91° E	約 4.6	—————	あり	東壁南側、袖石	古代	
61	IV区 第②層	7 掘立より旧	正方形	N 2° E	約10.2	2	あり	—————	古墳	貯蔵穴 袋状土壇
62	IV区 第②層	6 掘立より旧	円形	—————	約 9.1	大 4 小 5	—————	中央、埋壺炉	縄文	
63	IV区 第②層	59住より旧、71住より新	隅丸方形?	N 87° E	—————	—————	—————	東壁南側	古代	
64	V区 第②層	—————	隅丸方形?	南辺N90°E	—————	—————	—————	—————	古代	北側範囲外
65	IV区 第②層	51住より旧、67住より新	—————	—————	—————	—————	—————	東壁南側	不明	

第143表 竪穴住居址遺構表 (4)

番号	区	確認期	重複関係	平面形	主軸方位	床高 m	柱穴数	周溝	カマド/竈	時代	その他
66	IV区	第①層	46住より旧, 70住より新	隅丸方形	N 74° E	11.3	—	—	東壁南側, 燃焼部粘土	古代	貯蔵穴
67	IV区	第①層	51・65住より旧	不整形長方形	東辺N56°W	約18	4	—	—	弥生	北西側覆土
68	IV区	第①層	69住より新, 17溝より旧	—	南辺N81°E	—	—	—	—	古代	北側範囲外
69	IV区	第①層	68住, 17溝より旧	—	N 8° W	—	2	—	—	弥生	
71	IV区	第①層	59・60・63住, 7掘立より旧	隅丸方形	N 6° W	約47.5	大 中 小 7 3 37	あり	2箇所 中央北側・中央西側	弥生	
72	IV区	第④層	53住より新	—	—	—	—	—	—	不明	北側範囲外
73	III区	第①層	75住より旧	隅丸長方形	N 83° E	—	—	—	東壁西側, 袖無	不明	
74	III区	第①層	85・90住より新, 78住と重複	隅丸正方形	N 97° E	約13.7	—	—	東壁南側, 粘土袖	古代	
75	III区	第①層	73住より新	—	南辺N86°W	—	—	—	—	古代	東側範囲外
76	III区	第①層	77住より旧, 89住, 23溝より新	—	N 91° E	—	—	—	東壁, 粘土袖	古代	南側範囲外
77	III区	第①層	76・88住, 23溝より新, 36・37土域と重複	隅丸長方形	N109° E	約13.5	—	—	東壁中央, 袖石	古代	南側範囲外 貯蔵穴
78	III区	第①層	74住と重複	—	—	—	—	—	—	古代	北側範囲外
79	III区	第①層	86・88住より新	隅丸長方形	N109° E	8.8	—	—	東壁中央, 袖無	古代	
80	III区	第①層	—	隅丸長方形	—	—	—	—	—	古墳	南側範囲外
81	IV区	第①層	17溝より旧	—	—	—	—	—	—	古代	北側範囲外 貯蔵穴
82	IV区	第①層	50住より旧	—	—	—	—	—	—	不明	南側範囲外
83	IV区	第①層	—	隅丸方形	西辺N9°W	約 4.7	4	あり	—	—	縄文
84	III区	第①層	23溝より旧	隅丸長方形	N 35° W	23.2	大 小 4 1	—	中央北側, 石組地床炉	弥生	
85	III区	第①層	74住より旧, 86住より新	隅丸正方形	N 0°	約16.0	大 小 4 5	あり	中央西側, 地床炉	古墳	
86	III区	第①層	29・85住, 19溝より旧	隅丸長方形	N 36° W	約17.1	大 小 4 1	—	中央北側, 地床炉	弥生	南側範囲外
87	III区	第④層	90住より新	隅丸方形?	南辺N77°W	—	—	—	—	不明	北側範囲外
88	III区	第①層	77・79住より旧	隅丸長方形	N 99° E	—	—	—	東壁	古代	南側範囲外
89	III区	第①層	76住, 18溝, 39土域より旧	円形?	—	—	—	—	—	不明	南側範囲外
90	III区	第①層	87住より旧	隅丸長方形	N 49° W	約15.8	大 小 4 2	—	中央西側, 石組地床炉	弥生	焼失住居

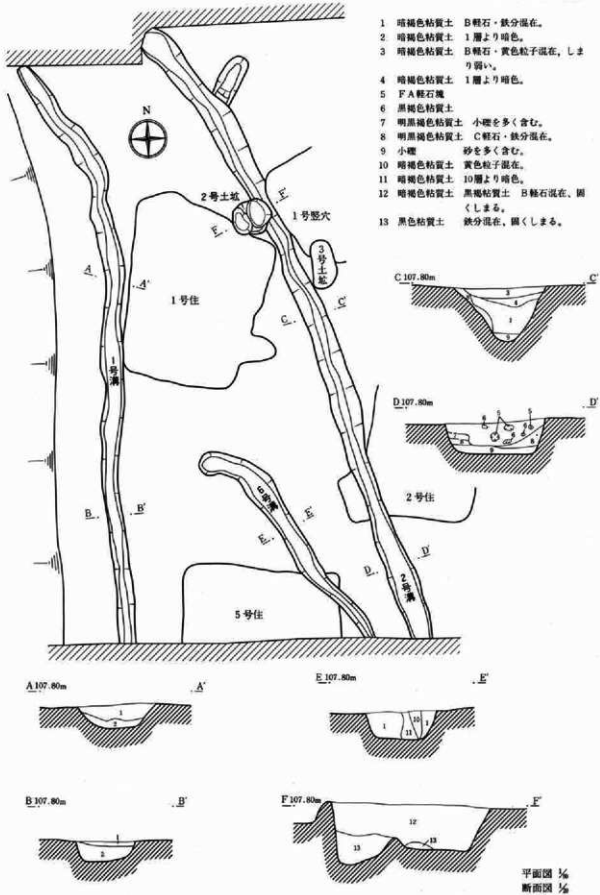


第274図 2号ピット群、柱穴列平面断面図

2号ピット群・柱穴列 (IV区)

本ピット群はIV区の東側に位置し、第②層茶褐色粘質土面で確認された。覆土により3種類に分類される。第1類・黒色土、第2類・浅間C軽石を多く含む褐色土、第3類・ローム粒、ローム塊を多く含む褐色土で第2・3類が多く検出された。全体に散漫してまとまらないが、3類で南北の列を検出した。柱間2間、辺長3.2mで、各柱穴は底径が10~15cm、確認面直上の海拔107.80mからの深さ41~65cmで円形を呈し、柱穴間距離は1.5~1.7mである。走向はN54°Eを測る。伴出遺物が少ないため年代は不明である。(新井)

第5節 時期不明の遺構



第275図 1・2・6号溝、2号土塚平面断面図

第IV章 雨遺跡

1号溝 (I区)

本溝は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、1号住南西角部を切断する。調査範囲内をN5°Wで走り、1号住北西角近辺でN41°Wに流路を変える。規模は上端0.3~0.5m、下端0.1~0.3m。確認面よりやや上の海拔107.80mからの深さは0.2~0.3mである。底の高低差はあまりなく断面形は浅いU字形を呈し、底面は暗褐色粘質土である。出土遺物はない。(小安)

2号溝 (I区)

本溝は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、2号住南西角部、1号竪穴を切断し、2号土壇により切断されている。また1号住、3号土壇と近接する。調査範囲内をN19°WからN33°Wで走り北側で長さ約1mの溝が付随する。規模は上端0.3~0.6m、下端0.1~0.5m。確認面よりやや上の海拔107.90mからの深さは0.2~0.4mである。南北がやや浅く中央がやや深い。断面形はU字形であるが部分的に緩いV字形を呈す。底面は暗褐色粘質土である。出土遺物は覆土内より土師器系統小破片約30片が出土している。(小安)

6号溝 (I区)

本溝は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、5号住北東角部を切断する。N38°Wの走向で走り、1号住と5号住のほぼ中央で止まっており先端は円形を呈す。規模は上端0.25~0.6m、下端0.1~0.4m。確認面よりやや上の海拔107.70mからの深さは0.1~0.2mである。北西側がやや深い。断面形はU字形を呈す。出土遺物はない。(小安)

2号土壇 (I区)

本土壇は第④層黄茶褐色粘質土面で確認され、1号住北壁、2号溝を切断する。主軸はN59°Eで、長軸0.7m、短軸0.6m、最深部で0.3mを測る長楕円形でピットが2つ合わさった形状を呈す。壁はやや急傾斜。底面は黒褐色粘質土で硬くしまっている。出土遺物はない。(小安)

12号溝 (II区)

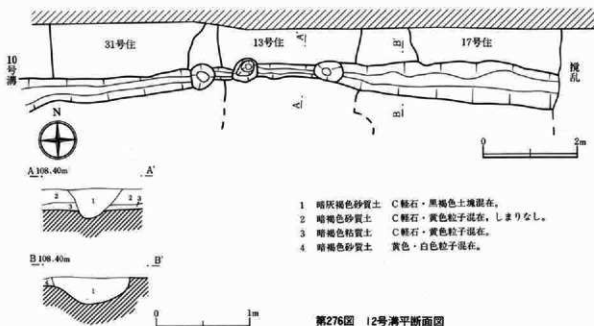
本溝は第⑥層黒茶褐色粘土面で確認された。17・13・31号住及び10号溝と重複し各住居を切っているが、10号溝との関係は不明である。

ほぼ東西方向に走っており、上幅は1~0.3m、底幅は0.1~0.2mで断面形は逆八字形もしくはV字形を呈する。掘り込み面は未確認であり、特に13号柱と重複する部分では13号住の床面との切り合い部分しか検出していないため平面図にはやや細く表わされているが、これは本溝の性格とは関係ない。ただ底の状態から見ると、13号住西側附近で緩く向きを変えておりN88°Wの走向が10°南に曲ってN82°Eで10号溝に達している。また確認面よりやや上の海拔108.30mからの深さは18~49cmほどで、西から東に向けて徐々に深くなっている。また13号住附近で底径15~20cm、深さ57~92cmの3個のピット状の落ち込みが本溝に見られるが、これらが本溝に伴うものかは明確に難しい。

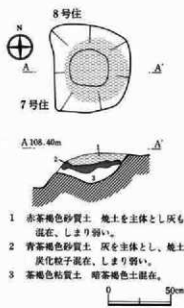
遺物を見るべきものがなく、覆土中から平瓦片1片(遺構外-100)、灰軸3片、須恵器碗・壺片約30片、土師器系統約30片のいずれも小破片が検出されただけである。

本溝は図に見られるように東側では攪乱にあたっている。約3mの幅の攪乱の反対側では、走向の似た13

号溝がほぼ同じ位置にある。覆土も似ているため本溝が13号溝の延長である可能性は極めて高いと思われる。また10号溝との層位的な新旧関係は不明だがほぼ直行しており、覆土的にもやはり同質であることを考えれば、同時期に存在していた可能性も否定できない。(坂井)



第276図 12号溝平断面図



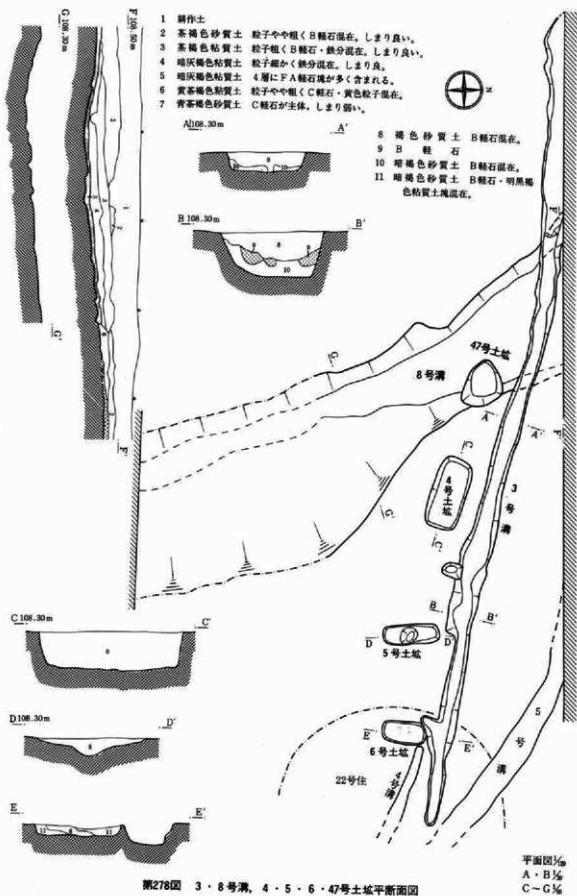
第277図 3号焼土平断面図

3号焼土 (II区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。7・8号住居址に切られており、また東・北側で10号住、2号堀立、2号焼土に近接している。

上径約60cm、底径約30cm、確認面からの深さ約20cmを測る隅丸方形のピット状を呈する。覆土中に焼土・灰・炭化物の層がある。

遺物の出土はなく住居址のカマド址とも思われるが、断定できる証拠がないため焼土とした。(長谷部)



第278図 3・8号溝、4・5・6・47号土城平衡断面図

3・8号溝, 4・5・6・47号土壇 (1区)

3号溝西側は第④層暗褐色粘質土面で、3号溝東側と他の遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面で確認された。3号溝と47号土壇は8号溝を切っており、3号溝・6号土壇は22号住も切っている。3号溝と47号土壇の新旧関係は不明である。

3号溝

ほぼN79°Wの走向をもって直線的に走っている。上幅は40~90cm, 底幅は30~70cmで、確認面よりやや上の海拔108.30mからの深さは30~40cmで、西側に10cmほどの段差が見られ極めて緩く東から西にかけて低くなる。断面はU字形を呈している。

遺物は覆土中より須恵器壺片3片, 土師器系統片10片の小破片が見られただけである。

8号溝

本溝はN23°Wの走向をもって大きく幅を変える溝状の落ち込みである。上幅は2.8~約5m, 下幅は0.7~約3mで、確認面よりやや上の海拔108.20mからの深さは30~40cmで、あまり顕著な一方向の高低差は認められない。断面は基本的には逆八字形だが立ち上がり面の変化が著しい。

覆土最下層には径10cm程度の椽名F A火山灰塊が大量に見られた。遺物は覆土中より須恵器片7片, 土師器片10片の小破片が見られただけである。

本溝は形状より人工的な遺溝とは考えにくい。

4号土壇

本土壇は2.0×0.9mの長方形を呈し、主軸はN74°Wを測る。確認面からの深さは約40cmでほぼ底は平坦である。遺物は全く出土していない。

5号土壇

本土壇は1.6×0.5mの長方形を呈し、主軸はN6°Wを測る。底は確認面より40cmの深さの中央の楕円形ピット状の底に向けて緩やかに傾斜している。遺物は全く出土していない。

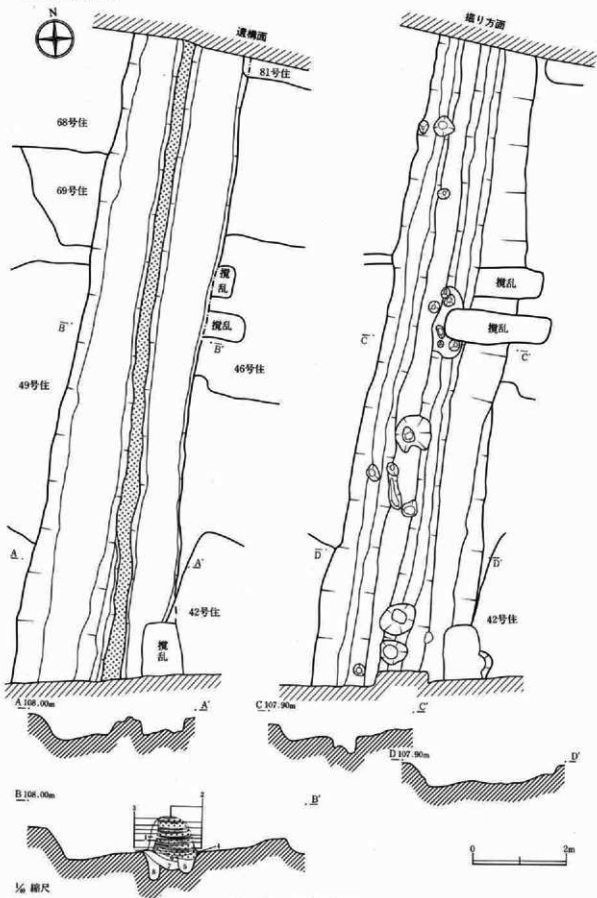
6号土壇

本土壇は1.3×0.6mの長方形を呈し、主軸はN4°Eを測る。底は比較的平坦で確認面からの深さは15cm弱である。遺物は全く出土していない。

47号土壇

本土壇は1.0×0.8mの不整形で、確認面からの深さは20cmほどである。底はあまり均一ではなく、覆土は不明で、遺物は全く出土していない。(長谷部)

第IV章 雨夜遺跡



第279図 17号溝平断面図

- | | | |
|----------------|----------------------------------|-----------------|
| 1 茶褐色砂質土 B軽石含む | 4 褐色砂質土 B軽石細粒砂にローム・YP 軽石含む硬くしまる。 | 7 褐色砂質土 6層より暗い。 |
| 2 浅間B軽石に伴う火山灰 | 5 青灰色砂質土 ローム・YP 軽石・鉄分含む。硬くしまる。 | 8 暗褐色砂質土 ローム・Y |
| 3 浅間B軽石 | 6 褐色砂質土 ローム・YP 軽石・粘土塊含む硬くしまる。 | P・B軽石含む硬い。 |

17号溝 (IV区)

本溝は第⑦層茶褐色粘質土面で確認され、東側で42・46・81号住と西側で49・68・69号住を切り、南側と北側が調査範囲外で切られている。平面形は上幅約3m、走向N7°Eを測り、南へ緩く傾斜している。掘り込み面は第④層暗褐色粘質土より上面で、60cm以上の深さがあり、断面形は底が2m程度の幅で平らな逆八字形を呈する。覆土は浅間B軽石を多く含む第③層暗茶褐色砂質土である。溝中央部には、上幅70cm、高さ70cmの浅間B軽石を版築し、断面台形状の帯状部分が溝に沿って走向し溝を二分している。

遺物は覆土中より小破片として灰釉片8片、須臾器片約40片、土師器系統約100片、弥生土器片約30片、縄文土器片約20片が見られた。

土層断面より考えれば、浅間B軽石降下直後に、本溝の走向と同方向の中央版築帯（道路状遺構か？）がつくられ、その後両側に側溝的機能の意味で溝が掘られたと考えられる。（新井）

48号土壇 (V区)

本土壇は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。重複はないが、26号土壇・3号掘立が近接する。規模は底径が約80cmであり、平面形は円形を呈する。覆土は浅間B軽石を少量含む褐色土である。

遺物は土器片が数片出土しているが、流れ込みの可能性が大きい。（井川）

26号土壇 (V区)

確認面は48号土壇と同様である。重複はないが、48・25号土壇、3号掘立が近接する。規模は不明であるが、短軸は約0.9m、平面形は楕円形と推測できる。覆土は浅間B軽石を含む褐色土である。

遺物は、土器片が数片出土しているが、流れ込みの可能性が大きい。（井川）

25号土壇 (V区)

確認面は48号土壇と同様である。重複はないが、26号土壇・3号掘立が近接する。規模・平面形は、半分以上が調査範囲外のため不明である。確認面からの深さは約25cmで浅く、覆土は浅間B軽石を多量に含む。

遺物は土器片が数片と土鏝が一点出土しているが、流れ込みである。（井川）

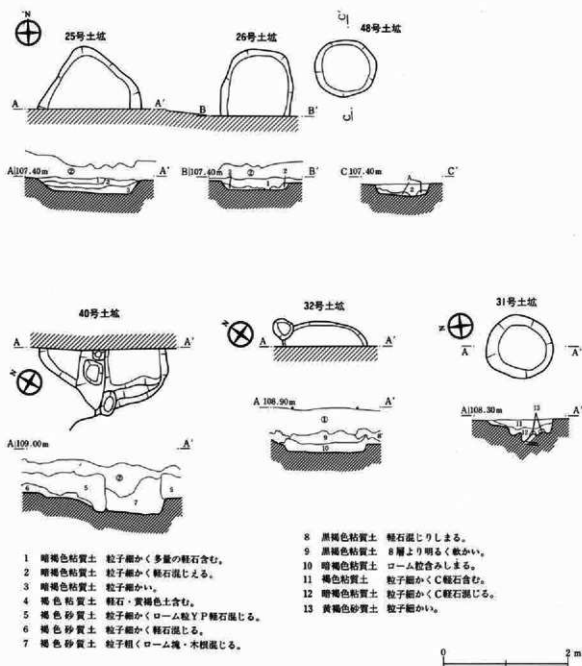
31号土壇 (III区)

本土壇は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。重複はないが、73・75号住が近接する。規模は底径約80cm、平面形はほぼ円形である。確認面からの深さは約40cmで皿状である。覆土は褐色土である。（井川）

32号土壇 (IV区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面において確認された。調査範囲外へ延びているため全容は不明であるが、底形約1.8mの円形と推定される。出土遺物はなく、時期を確定することは不可能であるが、覆土に浅間C軽石を含んでいないことから、浅間C軽石降下前のものである。（飯塚）

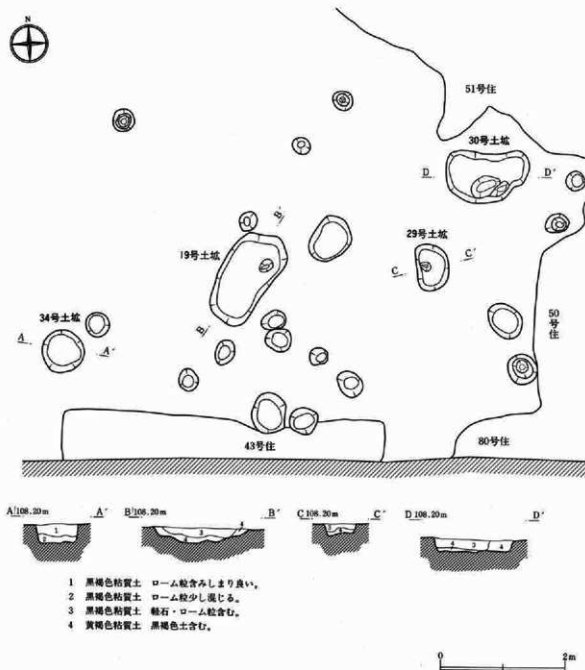
第IV章 兩 壙 遺 跡



第280図 25・26・48, 31, 32, 40号土坑断面図

40号土坑 (Ⅲ区)

本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。84号住と近接する。規模は不明であるが一辺は約1.8mであり、平面形は方形か長方形になるものと推定される。覆土は、ローム塊混入の褐色砂質土であり、密度も粗であることから、最近の土坑と考えられる。覆土より出土した土器系統約50片、縄文土器片約20片の小破片は、流れ込みと思われる。(井川)



第281図 19・29・30・34号土壇平面図

19号土壇 (IV区)

本土壇は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。周辺には大小のピットが隣接する。規模は長辺1.3m, 短辺0.6mをとり、主軸N33'Eを測り隅丸方形を呈する。底面はやや不定で中央東北寄りに小ピットがあく。

(女塚)

29号土壇 (IV区)

本土壇は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。43号住と50号住との間に集中する土壇・ピット群の一つで、規模は長辺0.6m, 短辺0.4mをとり、楕円形を呈する。覆土には軽石ローム粒子を少量含む黒褐色土が見



- 1 褐色粘質土 粒子細かく礫石含む。
- 2 明褐色砂 粒子細かく小礫含む。
- 3 暗褐色粘質土 粒子細かい。

新282図 19号溝平面図

られた。

(女屋)

30号土坑 (IV区)

本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。北側に51号住が隣接し、東側には50号住が接している。29号土坑と土坑・ピット群が広がる部分に位置する。規模は長辺1.2m、短辺0.6m、深さ15cmの楕円形である。壁はほぼ垂直に近いが、底面には小さなピット2個があき凹凸が激しくローム面を掘り込んでいる。遺物は覆土中より小破片として須恵器片3片、土師器系統約10片が見られた。

(宮下)

34号土坑 (IV区)

本土坑は第⑦層茶褐色粘質土面上で確認された。43号住の北側に位置する。規模は底形0.5mをとり円形を呈する。深さは30cmである。

(女屋)

19号溝 (III区)

本溝は第⑦層茶褐色粘質土面で確認された。86号住、20・21号溝と重複し、80号住と近接する。86号住との新旧関係は、覆土の相違から本溝の方が新しい。20・21号溝との新旧関係は本溝の残存状態が悪く不明な点が残るが、本溝の方が新しいと推測される。

本溝は底幅約20~30cmと狭く、確認面からの深さも約10cmと浅いので、底面のみの残存と推定される。断面形は箱形であり、北西から南東に向ってN70°Wの走向で約18m走る。覆土は小礫を含む砂土であり、水の流れていたことは確定できる。

(井川)

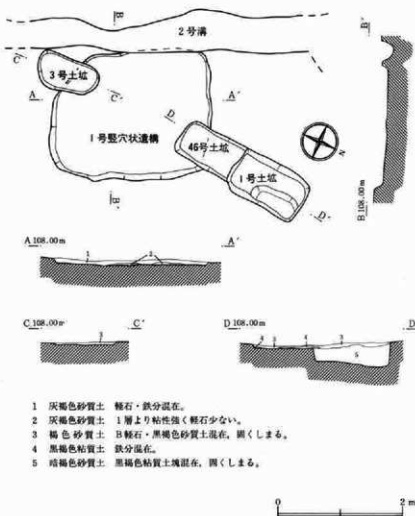
1号竪穴状遺構、1・3・46号土壇（1区）

本遺構群は第④層黄茶褐色粘質土面で確認された。1号竪穴は1・46号土壇及び2号溝に切断されている。また46号土壇は1号土壇を切断している。1号竪穴は1号住及び2号土壇に、3号土壇は2号溝にそれぞれ近接している。

1号竪穴

長辺の走向はN27°Wで東辺2.3m、南辺約1.5m、西辺1.8m、北辺1.7mを測り、五角形さみの長方形プランを呈する。

壁はやや急傾斜で確認面まで壁高5～15cmと浅い。床は黒茶褐色粘質土を踏み固め硬くしまっておりほぼ平坦である。ピット等は何も確認されなかった。出土遺物はない。



- 1 灰褐色砂質土 軽石・鉄分混在。
- 2 灰褐色砂質土 1層より粘性強く軽石少ない。
- 3 褐色砂質土 B軽石・黒褐色砂質土混在、固くしまる。
- 4 黒褐色粘質土 鉄分混在。
- 5 暗褐色砂質土 黒褐色粘質土塊混在、固くしまる。

第283図 1号竪穴状遺構、1・3・46号土壇平面断面図

1号土壇

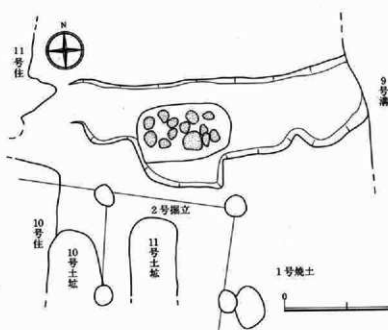
主軸をN3°Eにとり現存長軸0.9m、短軸0.5m、確認面からの深さ約0.1mを測り長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直。底面は黒茶褐色粘質土で硬くしまっている。出土遺物はない。

46号土壇

主軸をN4°Eにとり、長軸1.1m、短軸0.6m、確認面からの深さ約0.3mを測り長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直な立ち上がりをもつ。底面は暗褐色砂質土で硬くしまっている。東壁から北壁にかけて0.2×0.6m、深さ0.4mの長方形の一段低い部分がある。出土遺物はない。

3号土壇

主軸をN5°Wにとり、長軸0.9m、短軸0.5m、確認面からの深さ0.1m弱を測り隅丸長方形プランを呈する。壁は緩傾斜。底面は黒茶褐色粘質土で硬くしまっている。出土遺物はない。 (小安)



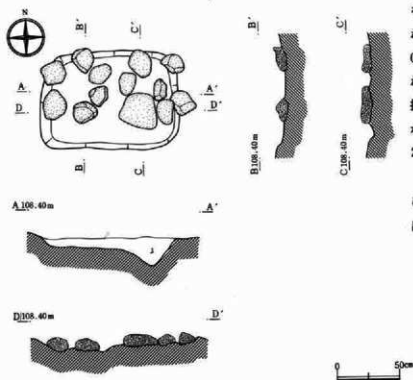
配石遺構 (II区)

本遺構は第⑥層黒茶褐色粘質土面で検出された。南側で2号掘立, 11号土壇と近接している。

11号住と9号溝の間に確認面よりやや上の海拔108.50mからの深さが15~20cm, 幅約1mの概ね東西に延びる浅い溝状の掘り込みがある。その掘り込みの中央に1×0.7mの方形プランで同じく深さ40~50cmの土壇状の掘り込みが掘られ, その中に大小13個の石が配されている。

石は長径15~30cmの加工痕のない火山岩と河原石で, それぞれ6個と7個を使って西と東に0.6~0.7mの径で環状に並べられている。各石の下面は土壇状掘り込みの底と, 5~10cmの間があるが, 上面は概ね海拔108.25mの高さにそろえられている。

遺物は全く見られず, 覆土中にも焼土等の特別な混入物は検出できなかった。(坂井)

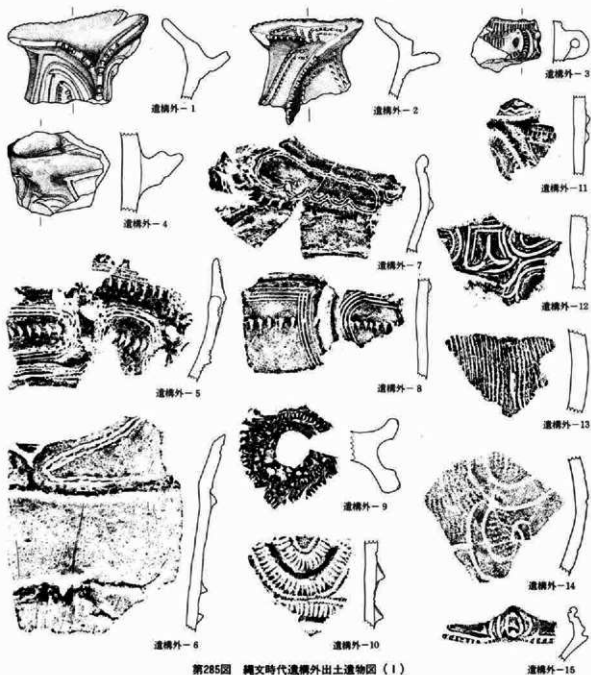


第284図 配石遺構平面図

第6節 遺構外出土遺物

本遺跡の調査において検出された土器片を主体とする遺物は、総数で遺物取納箱78箱になる。このうち残りの良いもの、図上復元が可能なものそして顕著な特徴が見られるもの合計1,352個体の実測を行った。その中で、確実に遺構に伴うもの及び遺構に伴う可能性が高いもの合計528個体については、各遺構の記載箇所にすでに示した。それ以外の遺構に伴わないで出土した遺物のうち、代表的なもの118個体について、以下時代ごとで紹介したい。

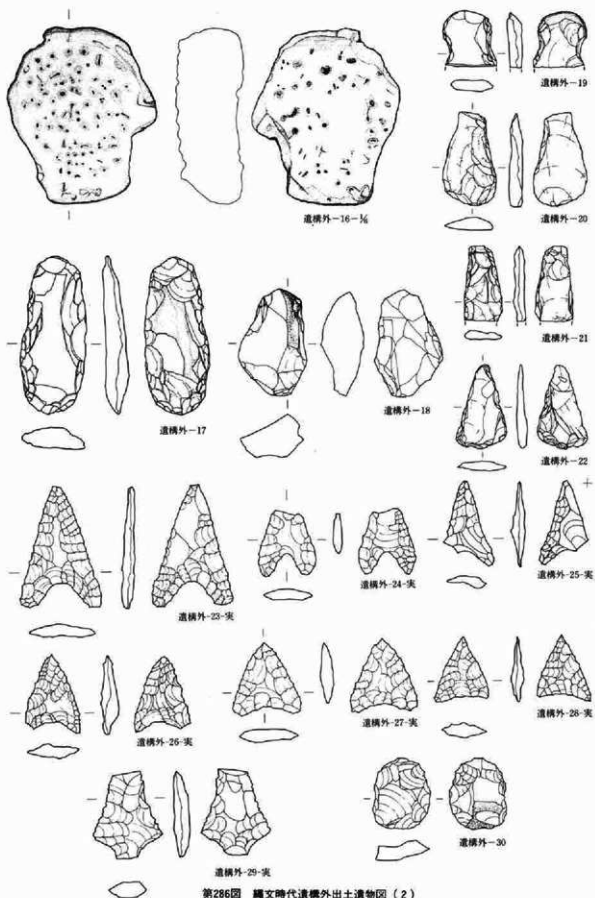
(坂井)



第285図 縄文時代遺構外出土遺物図(1)

第144表 縄文時代遺構外出土遺物観察表 (1)土器

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
深鉢 縄文土器	62住覆土 把手	遺構 外1	——	波状口縁上に把手を有し、やや内反。	波頂部は楕円形、周囲刻目。Y字状隆帯区画内に半截竹管沈線文と刺突文。	砂粒を多く含む。良好。明褐色。	
深鉢 縄文土器	40住覆土 把手	遺構 外2	——	大波状口縁で把手を有し、やや内反を呈する。	波頂部楕円形、隆帯曲線の垂下刻目。2条角押文。	雲母・石英粒を多く含む。良好。	鈍い黄褐色
深鉢 縄文土器	20住覆土 胴部	遺構 外3	——	——	隆帯文を施し、半截竹管により爪形文・刺突文・押引き等を施し幾何学的な文様を構成	砂粒を多く含む。茶褐色。	膝版式
深鉢 縄文土器	62住覆土 胴部	遺構 外4	——	——	粘土細巻き上げ突起に渦巻文。隆帯に沿い半截竹管沈線文。	砂粒を多く含む。良好。茶褐色。	
深鉢 縄文土器	道路状遺構下 層 把手	遺構 外5	——	波状口縁に把手を有し、やや内反を呈する。	波頂部楕円形内反把手。外側刻目文。内側横位沈線爪形文。下位隆帯楕円区画、内側に沈線と横位爪形文。	雲母・石英粒を多く含む。良好。鈍い黄褐色。	
深鉢 縄文土器	62住覆土 口縁部	遺構 外6	——	波状口縁でやや外反。	横位隆帯楕円区画、内に円形竹管結節沈線・円形文、下位横位隆帯。	雲母・石英粒を多く含む。良好。鈍い黄褐色。	
深鉢 縄文土器	I区グリッド 口縁部	遺構 外7	——	波状口縁で内反を呈する。	口縁に沿って隆帯楕円。区画内に結節沈線、半円弧連続文。	雲母・石英粒を多く含む。良好。	色：茶褐色。
深鉢 縄文土器	I区グリッド 胴部	遺構 外8	——	——	曲線的隆帯区画。区画内半截竹管沈線文と幅広い爪形文。	雲母・石英を多く含む。良好。	色：暗褐色。
深鉢 縄文土器	84住覆土 把手	遺構 外9	——	——	円形状の把手部の横線に刻目。	砂粒を少し含む。良好。黄褐色。	
深鉢 縄文土器	II区グリッド 胴部	遺構 外10	——	——	上位円形状隆帯に沿って幅広い爪形文と角押文。	砂粒を多く含む。良好。褐色。	
深鉢 縄文土器	II区グリッド 胴部	遺構 外11	——	——	隆帯と沈線の三角形区画内に爪形文連続施文。上段波状沈線文を横位に施文。	砂粒を多く含む。良好。茶褐色。	膝版式。
深鉢 縄文土器	53住覆土	遺構 外12	——	——	棒撞の幾何学文・三角印刻文や刻目文。	砂粒を多く含む。良好。赤褐色。	
深鉢 縄文土器	I区グリッド 胴部	遺構 外13	——	——	縦位に帯余文を施文している。	砂粒を多く含む。良好。赤褐色。	
深鉢 縄文土器	I区グリッド 胴部	遺構 外14	——	——	曲線的な沈線区画を行ない、内側を磨消。LR風文を施文。	砂粒を多く含む。悪い。	色：鈍い黄褐色。
深鉢 縄文土器	71住覆土 口縁部	遺構 外15	——	波状口縁で内反を呈する。	波頂部を中心に幅広い沈線。中央に2つの円形刺突と刻目。	砂粒を多く含む。良好。	色：暗茶褐色

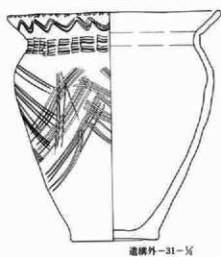


第286圖 繩文時代遺構外出土遺物圖(2)

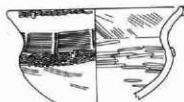
第145表 縄文時代遺構外出土遺物観察表 (2)石器

器 種	出土遺存状態	番号	法 量	成形加工・使用痕・形態の特徴	石 材	備 考
多孔石	62住覆土	遺構外16	長さ 20.7 幅 17.3 厚さ 7.2	不定形を呈し、両面使用している。 多面にわたり多孔面を有し、片面は凹状を呈する。		
打製石斧	24溝覆土 完存	遺構外17	長さ 12.4 幅 5.1 厚さ 1.7	短冊形を呈し、基部と刃部に丸みを有する。 やや大きな割離を施して周囲に細かな調整を加えている。 片面に自然面を大きく残す。		
不定形打製石器	62住覆土	遺構外18	長さ 8.5 幅 5.5 厚さ 3.4	不定形を呈する。 やや大きな割離を施し、片面加工により刃部を作り出している。		
打製石斧	20溝覆土 刃部欠損	遺構外19	幅 4.1 厚さ 1.1	分割形を呈し、左右対称な抜れを有する。 基部に自然面を大きく残し、周縁の加工が粗雑である。		
不定形打製石器	62住覆土	遺構外20	長さ 7.3 幅 4.0 厚さ 1.0	不定形を呈する。 縦長割離片を素材とし、片面加工により刃部を作り出している。		
鏃 器	51住覆土	遺構外21	長さ 5.9 幅 3.0 厚さ 0.8	鏃形を呈し、直線的な刃部を有する。 自然面・主要割離を裏面とし裏面側からによる粗い片面加工により調整している。		
削 器	62住覆土	遺構外22	長さ 6.7 幅 3.0 厚さ 0.7	三角形を呈する。横長割離片を素材とし、周囲に細部加工を施し、一辺を弱い弧状に刃部を作り出している。		
石 鏃	II区グリッド 先端部を欠損	遺構外23	長さ 3.2 幅 2.2 厚さ 0.3	平面形が二等辺三角形を呈し、基部に抉り部を持ち脚を有する。	チャート。	
石 鏃	42土壇覆土 先端部を欠損	遺構外24	長さ 1.8 幅 1.6 厚さ 0.2	平面二等辺三角形、両側辺がやや膨らみ、基部に抉り部。	チャート	
石 鏃	出土位置不明 片脚部を欠損	遺構外25	長さ 2.2 幅 1.5 厚さ 0.3	平面形が二等辺三角形を呈し、両側辺が若干抉れ、基部に強い抉り。		
石 鏃	24溝覆土 片脚部を欠損	遺構外26	長さ 2.1 幅 1.5 厚さ 0.45	平面形が二等辺三角形、両側辺がやや膨らみを持ち、基部に抉り部。	黒曜石。	
石 鏃	28住覆土	遺構外27	長さ 1.9 幅 1.8 厚さ 0.3	平面形が二等辺三角形を呈し、基部に抉り部を持ち、脚を有する。	黒曜石。	
石 鏃	III区グリッド 下層 完存	遺構外28	長さ 1.7 幅 1.5 厚さ 0.3	平面二等辺三角形、両側辺がやや膨らみ、基部抉りは片寄り浅い。		
石 鏃	26土壇覆土 基部と先端部 を欠損	遺構外29	長さ 2.3 幅 1.8 厚さ 0.4	平面二等辺三角形、身・基部境明確な割なし。		
削 片	22住覆土	遺構外30	長さ 2.8 幅 2.2 厚さ 0.6	一次削片を素材にし、周囲に細かな調整を加えている。 片面に自然面を大きく残す。		

第6節 遺構外出土遺物



遺構外-31-寫



遺構外-32



遺構外-33



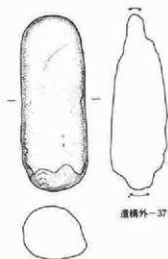
遺構外-34-寫



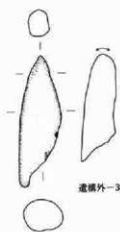
遺構外-35-寫



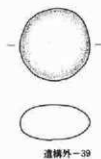
遺構外-36-寫



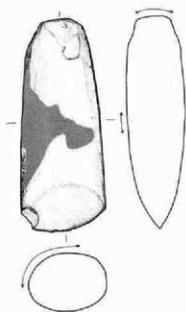
遺構外-37



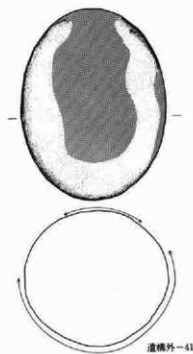
遺構外-38



遺構外-39



遺構外-40

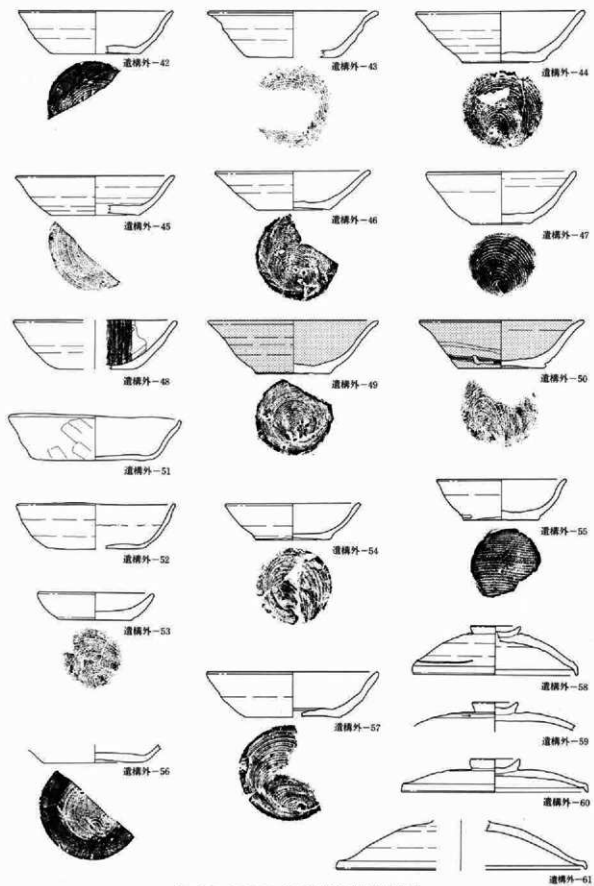


遺構外-41

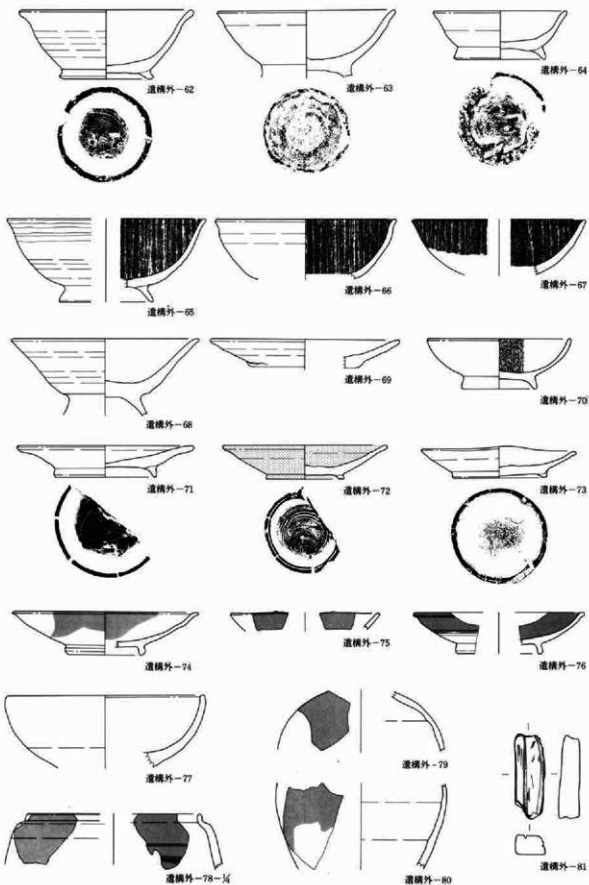
第287圖 弥生時代・不明石製品遺構外出土遺物圖

第146表 弥生時代・不明石製品遺構外出土遺物観察表

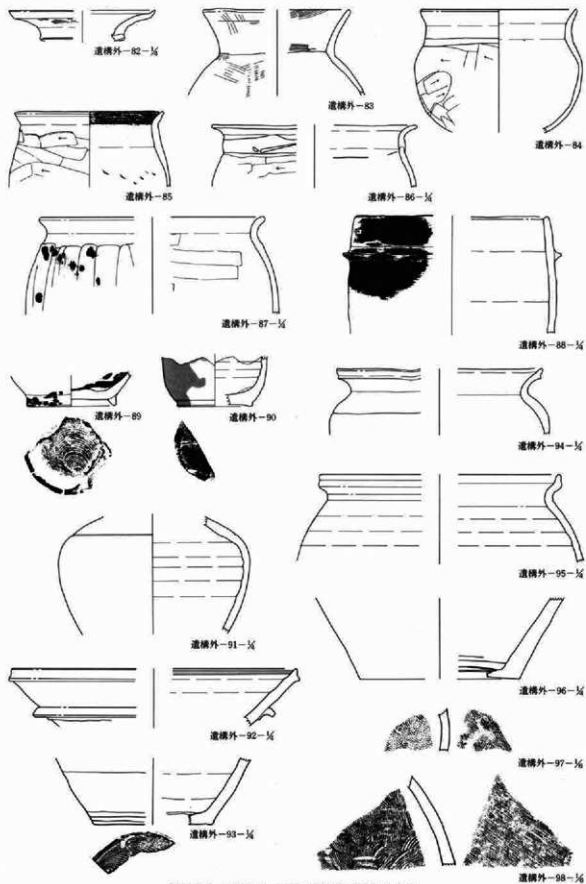
器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
壺 弥生土器	10溝附近 完存	遺構 外31	口径 23.5 胴径 21.3 底径 9.0 器高 24.0	胴最大径は上位にあり、ほぼ直線的にすぼまり底部に至る。口縁部く字状に外反。	外面指ナゲ後、左まわり兼状文、胴部タテ帯縮波状文、口縁部波状沈線文、口唇部刻目、内面横指ナゲ。	砂粒を含む。 不良 外：淡褐色、内： 黒褐色。	外面上部煤付着
台付 壺 弥生土器	84住覆土	遺構 外32	口径 14.2 胴径 12.5	最大径胴上部、口縁部は大きく開く。	外：横ハケメ。 内：横指ナゲ。	小石を含む。普通。 鈍い褐色。	外面煤付着。
器 台 弥生土器	24溝覆土	遺構 外33	上部径 7.0	台部ハ字状に開き2孔。	外：赤色塗彩後ヘラミガキ。 内：指ナゲ。	砂粒を含む。 良好、硬質。赤色。	
壺 弥生土器	66住カマド内 口縁部	遺構 外34	—————	—————	外：横指ナゲ。 内：横ヘラミガキ。	砂粒を含む。 良好、硬質。	
壺 弥生土器	I区グリッド 胴部	遺構 外35	—————	—————	—————	小石粒を少量含む。 普通。	
壺 弥生土器	I区グリッド 胴部	遺構 外36	—————	—————	内外：横ハケメ。	砂粒を含む。 良好。	
不 明 石 製 品	84住覆土	遺構 外37	長さ 15.0	—————	先端に使用痕。	—————	
乳 棒 状 石 斧	5住覆土 胴部与残存	遺構 外38	長さ 10.2 幅 3.3 厚さ 2.4	平・断面形は紡錘形を呈する。	表面両縁のほとんどに成形痕があり、表面の平坦に研磨痕あり。	—————	
不 明 石 製 品	II区グリッド 完存	遺構 外39	5.7×5.6 ×2.8	円形状。断面楕円形。	表面叩いたらしい小さな穴が円周状に見られる。	石英か？ 灰白色。	
磨製石斧	出土位置不明	遺構 外40	長さ 16.8 幅 6.7 厚さ 4.6	短冊状を呈し、両面研磨による刃部形成。側面に縦い溝。	片上面・側面に研磨痕。基部に敲打痕。	—————	
礫	68住覆土	遺構 外41	長さ 15.1 幅 10.1 厚さ 11.5	卵形。全体に磨滅している。	—————	—————	全体に腐状に煤付着。



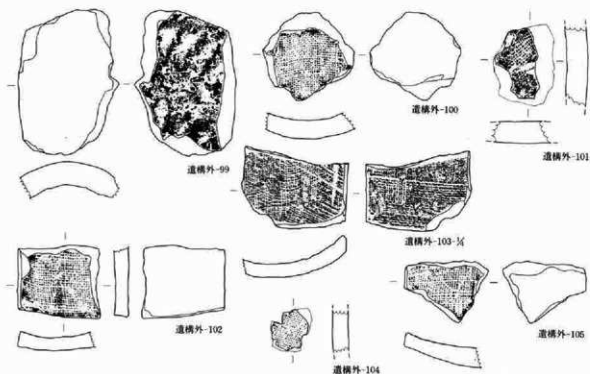
第288図 古墳時代・古代遺構外出土遺物図(1)



第289圖 古墳時代・古代遺構外出土遺物圖(2)



第290圖 古墳時代・古代遺構外出土遺物圖(2)



第291図 古墳時代・古代遺構外出土遺物図(4)

第147表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表 (1)

器種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
環 須 恵 器	II区グリッド 口縁～底部	遺構 外42	口径 12.4 底径 7.0 器高 3.4	底部中央厚く口縁近く 薄い器壁。器高やや低 い。	底部回転糸切り。外：回転横 ナデ。内：回転横ナデ。	鉱物を含む。還元。 褐灰色。	
環 須 恵 器	24住, 18土壇 覆土 片残存	遺構 外43	口径13.0推 底径 6.8 器高 3.7	底部から直線的に立ち 上った体部は、口縁部 で外反。	ロクロ成形。外側に指圧痕が 残る。底部は回転糸切り。	粗い砂粒を多量に 含む。硬質, 還元。 緑灰色。	
環 須 恵 器	7住掘り方 片残存	遺構 外44	口径 13.5 底径 6.5 器高 4.1	口唇部旋をうち口径が 広い。底部凹凸した厚 い器壁。	底部回転糸切り。 外：ロクロ指痕横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物・砂粒 含む。 還元。黄灰色。	
環 須 恵 器	19住覆土 口縁～底部 片残存	遺構 外45	口径 12.8 底径 7.0 器高 3.1	体部は緩やかに外反す る。底部少し上げ底状 を呈する。	内外：回転横ナデ。 底部回転糸切り痕。	黒色微粒を含む。 硬質, 還元。 灰白色。	
環 須 恵 器	II区グリッド 口縁～底部 片残存	遺構 外46	口径 12.6 底径 6.0 器高 3.1	均一した厚みを持ち、 底部やや底をうつ。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	白色粒子・砂粒多 量含む。 還元。灰色。	粗製。
環 須 恵 器	20住覆土 口縁～底部 片残存	遺構 外47	口径 12.0 底径 4.7 器高 4.2	体部は僅かに膨らみを 持って外反する。	内外：回転横ナデ。 底部右回転糸切り痕, 糸切り 後ナデ調整。	白色砂粒を少量含 む。軟質, 還元。 灰色。	
環 黒色土器	29住覆土 片残存	遺構 外48	器高 3.9	体部は直線的に外反す る。底部中央部は器壁 が極端に薄い。	外：横ナデ。内：横ナデ後, 口唇部横・底部～口縁部放射 状研磨。底部回転糸切り後周 縁部ヘラケツリ調整。	砂粒を含む。 硬質, 酸化。 鈍い橙褐色。	

第148表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表 (2)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
環須恵器	84住覆土 口縁~底部	遺構 外49	口径 13.6 底径 6.0 器高 4.2	ほぼ均一した厚さの体部、口径広く口唇やや開きき。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・鉱物含む。 中性灰。 浅黄色。	底部内面保付着。
環須恵器	14住覆土 口縁~底部 互残存	遺構 外50	口径 13.2 底径 7.0 器高 3.8	体部は緩く外反し、中位で更に外反する。	内外：回転横ナデ。 底部、右回転糸切り痕、糸切り後ナデ調整。	微砂粒を含む。 硬質、中性灰。 鈍い橙褐色。	
坏土師器	7住掘り方 ほぼ完存	遺構 外51	口径 13.9 底径 9.5 器高 3.7	極く薄い器壁。体部は波をうち、底部平ら。	外：不定ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ、口唇部沈線あり。 内：横ナデ。	少量の鉱物含む。 酸化、もろく細く割裂。鈍い橙色。	内面一部保付着。
坏土師器	24住覆土 口縁~底部 互残存	遺構 外52	口径 12.8 底径 7.6 器高 3.6	器壁が薄く一定する。体部は緩やかな丸みを持つ。	外：手持ち成形による指頭痕を残す、底部ヘラケズリ。 内：横ナデ。	砂粒を少量含む。 軟質、酸化。 鈍い橙色。	
皿土師質土器	51住覆土 互残存	遺構 外53	口径 9.0 底径 5.8 器高 2.2	体部は短く扁平、底部は平直で僅かに作り出しあり。	内外：一回転横ナデ。 底部右回転糸切り、使用による磨れあり。	砂粒を多く含む。 軟質、酸化。 鈍い黄褐色。	
坏土師質土器	11住覆土 口縁~底部	遺構 外54	口径 10.9 底径 6.0 器高 2.9	全体に薄い器壁。器高の低い小形。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	酸化。 鈍い橙色。	
坏土師質土器	II区グリッド 互残存	遺構 外55	口径 10.4 底径 6.0 器高 3.3	口縁部薄く、底部厚く表をうつ。器高低く口径小さい。	外：回転横ナデ。底部静止糸切り。 内：回転横ナデ。	不良、酸化。 浅黄色。	
坏須恵器	I区グリッド 底部	遺構 外56	———	やや厚く内面平らな底部。	底部回転糸切り後、周縁ヘラケズリ、外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	鉱物含む。 良好、還元。 灰色。	
坏須恵器	1号不明覆土	遺構 外57	口径 13.6 底径 7.8 器高 3.6	器高やや低く、口径広く、底面も広い。 底部中央凹む。	底部回転糸切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	鉱物含む。酸化。 外：灰黄~灰白色。 内：黄灰色。	
蓋須恵器	III区グリッド 互残存	遺構 外58	総径 4.0 口径 13.2 器高 3.9	器高やや高く、小形。ボタン状紐縁に貼付。口縁部断面三角形。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	鉱物含む。還元。 褐色。輪：オリブ黒色。	自然軸。
蓋須恵器	II区グリッド 紐~頂部	遺構 外59	総径 3.6	ほぼ均一した器壁で、ボタン状紐貼付。	外：回転横ヘラ削り。 内：回転横ナデ。	不良、還元。灰白色。	
蓋須恵器	III区グリッド 互残存	遺構 外60	総径 4.0 口径 15.0 器高 2.7	やや歪みのある器壁にボタン状紐貼付。口縁部断面三角形。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	砂粒・鉱物含む。 還元。 黄灰色。	内面ヒビ割れ。
蓋須恵器	84住、23溝覆土 頂部	遺構 外61	———	頂部厚く端部薄い器壁。端部断面三角。	外：回転ヘラ削り後回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	鉱物含む。 還元。灰色。	
埴須恵器	20住覆土 口縁~底部 互残存	遺構 外62	口径 13.8 底径 7.0 器高 5.5	底部附近厚み。体部緩やかに外反。口唇部肥厚。高台断面台形状。	内外：回転横ナデ。 底部、右回転糸切り痕。高台内側ナデ。外側ヘラ調整。	砂粒少量含む。 硬質、還元。 灰色。	
埴土師質土器	8住南西掘り 方口縁~底部	遺構 外63	口径 14.2 底径 7.0	口縁部浅い溝状の帯あり。短く厚い高台貼付。	底部回転糸切り、回転ナデ。 高台部・口縁部横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物含む。 酸化。 浅黄色。	

第149表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表 (3)

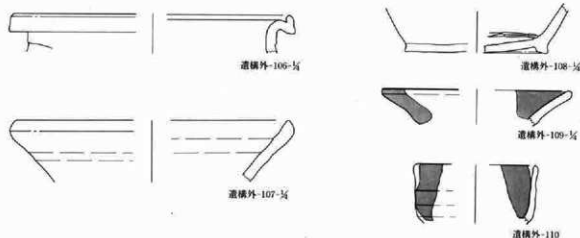
器 種	出土遺存状態	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
埴 土師質土器	11住覆土 口縁～底部	遺構 外64	口径 10.7 底径 7.4 器高 3.8	口縁部薄く、底部厚く 断面三角形の高台貼付。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	多量の鉱物・砂粒 含む。酸化。 褐色。	
埴 黒色土器	II区グリッド 口縁～底部	遺構 外65	————	器形が大形。器壁が薄 く断面八字状高台部貼 付。	外：回転横ナデ。内：回転 横ナデ研磨。口縁部外側及び内 面黒色処理。	小石含む。 酸化。内黒褐色 素地鈍い黄褐色。	
埴 黒色土器	11住覆土 口縁～胴部	遺構 外66	口径 14.6	全体に薄い器壁、口径 大きい。	外：回転横ナデ。内：回転横 ナデ、研磨後黒色処理。	砂粒含む。 酸化。鈍い黄褐色。	
埴 黒色土器	13住覆土 口縁部以下 残存	遺構 外67	口径 13.8	体部は緩やかな丸み を持つ。	外：回転横ナデ後、口唇部 近は黒色処理で横研磨。 内：黒色処理後、横研磨。	炭砂粒を含む。 酸化。硬質。鈍い 褐色。	
埴 土師質土器	11住覆土 片残存	遺構 外68	口径 15.0	口径大きく器高の高い 大形。長く厚い高台丁 草に貼付。	底部回転未切り。 外：ロクロ指痕。回転横ナ デ。 内：回転横ナデ。	酸化。 鈍い黄褐色。	
皿 須 恵 器	10溝覆土	遺構 外69	口径15.0程	————	ロクロ成形。底部は付け高台。 外側に指痕が残る。	砂粒を含む。硬質。 還元。灰白色。	
埴 黒色土器	11住覆土 片残存	遺構 外70	口径 11.6 底径 6.0 器高 4.0	薄い器壁。器高の低い 小形。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。黒色処理。	酸化。 鈍い黄褐色。	
皿 須 恵 器	II区グリッド 口縁～底部	遺構 外71	口径 14.2 底径 8.2 器高 2.5	高台貼付部分厚く、口 唇部平ら、厚く短い高 台貼付。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。 淡黄色。	複製。
皿 須 恵 器	84住覆土 口縁～底部	遺構 外72	口径 13.2 底径 6.3 器高 2.7	器高低く、薄く短い高 台縁に貼付。	底部回転未切り。 外：回転横ナデ。内：回転横 ナデ。高台底面沈線1本有。	鉱物含む。 中性灰。 淡黄色。	
皿 須 恵 器	I・II区グリ ッド ほぼ完存	遺構 外73	口径 12.1 底径 7.4 器高 2.4	全体に器壁が薄く、低 い器高。短く小さい 高台縁に貼付。	外：回転横ナデ。底部ヘラケ ズリ後横ナデ。 内：回転横ナデ。	不良。還元。 褐色。	
皿 灰 輪 陶 器	II区グリッド 口縁～底部	遺構 外74	口径 15.0 底径 6.0 器高 3.4	器壁薄くなだらかに広 がり口唇部僅かに平 ら。短く厚い高台貼付。	外：回転横ナデ。高台部回転 ヘラケズリ後、回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。釉：淡黄色 素地：灰白色。	
皿 緑 輪 陶 器	III区グリッド 口縁部	遺構 外75	————	薄い器壁、口唇部1箇 所凹凸ところがある。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。釉：オリ ブ灰色、灰白色。	
皿 灰 輪 陶 器	II区東端 口縁～底部 片残存	遺構 外76	器高 3.3	全体に器壁薄く、器高 やや低い。断面三角形 の高台丁草に貼付。	外：回転横ナデ。体部中央に 沈線。 内：横ナデ。つけかけ。	密。還元。 素地：灰白色。 釉：灰黄褐色。	
埴 土師質土器	11住覆土 口縁～胴部	遺構 外77	口径 16.0	口縁から体部にかけて かなり厚くなる器壁。 口径大きい。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	酸化。 鈍い褐色。	
無須広口蓋 灰 輪 陶 器	II区グリッド 口縁～胴部	遺構 外78	————	口縁部短く、胴部最大 径は上部に位置する。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。浅い沈線周 縁不規則にあり。	還元。釉：淡黄色 素地：灰白色。	

第150表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表 (4)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 灰軸陶器	II区グリッド 胴部～肩部	遺構 外79	——	均一した厚さ。強いカーブの胴部に2本の浅い沈線あり。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	還元。 軸：灰オリーブ色。 素地：灰白色。	80と同一
壺 灰軸陶器	II区グリッド 胴部	遺構 外80	——	均一した厚さで、腹やかな丸みをもつ胴部。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。	79と同一。	79と同一
砥石	51住覆土 片残存	遺構 外81	長さ 6.4 幅 2.4 厚さ 1.5	直方体。表裏及び側面に研磨あり。表面と片側面に金属面によると思われる小溝あり。		火熱を受けたと思われる一部黒色に変色。	
壺 土器器	70住覆土 以下残存	遺構 外82	口径 15.5	有段口縁。口縁部大きく外反。肩部はやや立ち上がる。	段部貼付。 外：縦ハ調整後、横指ナデ。 内：横指ナデ。	小砂粒を含む。 不良。灰黄褐色。	内外面黒斑あり。
壺 土器器	III区グリッド 口縁～胴部	遺構 外83	——	やや薄い器壁。口縁の立ち上がり長く、く字状口縁。	外：口縁横ナデ。胴部ヘラケズリ後タタキ。内：口縁ハケメ胴部ヘラケズリ。	砂粒・鉱物含む。 酸化。鈍い赤褐色。	
壺 土器器	10溝覆土	遺構 外84	口径 12.4	胴部は丸みをもち、口縁部は外反する。	外：口縁部は横ナデ。胴部はヘラケズリ。頸部に接合痕。 内：口縁部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質、還元。外：明褐色。内：褐色。	外面に煤付着。
小形壺 土器器	29住覆土 片残存	遺構 外85	口径 12.0	口縁部はややくずれたコ字状を呈する	外：口縁部横ナデ。胴部～ヘラケズリ。内：横ナデ。胴部に爪アタ裏あり。	微砂粒を含む。 硬質、酸化。 鈍い赤褐色。	
壺 土器器	I区グリッド 口縁～胴部	遺構 外86	——	凹凸のある厚さでコ字状口縁。	外：粗いヘラケズリ。口唇部横ナデ胴部ヘラケズリ。内：口縁横ナデ。胴部ヘラケズリ。	砂粒・鉱物を含む。 酸化。明赤褐色。 内：鈍い赤褐色。	
壺 土器器	II区グリッド 口縁～胴部	遺構 外87	——	コ字状口縁。	外：口縁回転横ナデ。胴部縦ヘラケズリ。内：回転横ナデ。	酸化。砂粒含む。 褐色。	表面に煤付着。
羽釜	55住覆土 片以下残存	遺構 外88	——	ほぼ直立。口唇部截頭状。内側肥厚。側断面三角形。肩部鋭い。	口縁部内外面横ナデ。口唇部に一部ヘラナデ。胴部：粗雑なナデ。内：横・斜ナデ。	砂粒を多く含む。 硬質、酸化。 鈍い黄褐色。	内外面に大きな黒斑あり。
埴土製瓦土器	IV区グリッド	遺構 外89	底径 7.0	中央が盛り上がる底部に薄く短い高台貼付。	底部回転糸切り。外：回転横ナデ。内：回転横ナデ。	鉱物含む。酸化。 灰黄色。	
壺 灰軸陶器	24住覆土 胴部～底部片 残存	遺構 外90	底径 6.0	底部から腹やかな丸みを持って立ち上がり、胴部は直線的に続く。	内外：回転横ナデ。底部回転糸切り痕。周縁部ナデ調整。基部ヘラ工具の強い沈線あり。	緻密。硬質。還元。 灰白色。軸：淡緑色。	
壺 須恵器	10溝、18土 地覆土、II区 グリッド 片残	遺構 外91	最大径19.0	頸部から肩部緩く内反。肩部で大きく内反し沈線一帯。	粘土層巻き上げ後にロクロ成形。回転横ナデ調整。	やや多量の砂粒を含む。灰色。	
壺 須恵器	II区グリッド 口縁部	遺構 外92	——	均一した器壁。口唇部反りを持ち口縁部に断面長方形の脚縁に貼付。	外：回転横ナデ。 内：回転横ナデ。口唇部5本沈線あり。	還元。灰白色。	
壺 須恵器	II区グリッド 胴～底部	遺構 外93	——	器壁の厚い大形。	底部糸切り。回転横ナデ。下方不規則な沈線あり。内：回転横ナデ。不規則な浅い沈線。	砂粒含む。 還元。灰白色。	粗製。

第151表 古墳時代・古代遺構外出土遺物観察表 (5)

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺 須恵器	II区グリッド 口縁部	遺構 外94	——	器壁が厚く、有段口縁。	外：回転横ナデ。体部上位沈 線1本有。内：回転横ナデ。	砂粒・灰物含む。 還元。黄灰色。	
壺 須恵器	II区グリッド 口縁～胴部	遺構 外95	——	均一した器壁。コ字状 口縁。口唇部やや直立 に近く先が丸い。	外：回転横ナデ。 内：雑な回転横ナデ。 口唇部内外面沈線あり。	還元。黄灰色。	
壺 須恵器	10溝覆土 底部	遺構 外96	底径18.6㎝	——	粘土畑巻き上げ？外：タタキ 疵。後ケズリ。	砂粒を含む。硬質。 還元。明青灰色。	外：珪素系物 質発泡。
壺 須恵器	III区グリッド 胴部	遺構 外97	——	かなり厚い器壁で緩や かな丸みを持つ大形。	外：平行タタキ復斜行印キ 疵。内：格子アケ疵。	灰物含む。還元。 黄灰色。	
大形壺 須恵器	55注覆土 胴部破片	遺構 外98	——	器壁は厚く、緩やかな 丸みを持つ。	外：平行伏タタキ疵。 内：青濁波状アケ疵。	黒色粒子が目立つ。 硬質。還元。灰色。	
丸瓦	II区グリッド 小片	遺構 外99	——	器壁の厚い緩やかな丸 みを持つ。	外：ヘラナデ。 内：指オサエ。	黒色粒子含む。 還元。白色、橙色、 浅黄褐色。	粗製。
平瓦	12溝覆土	遺構 外100	——	器壁やや薄い。	上面：布目疵。 下面：指オサエ・ナデ痕。	やや多く砂粒含む。 比較的硬質。酸化 明赤褐色。	
平瓦	11注覆土	遺構 外101	——	かなり厚い器壁。	上面：布目疵。 下面：ヘラナデ。	砂粒・多量の灰物 含む。酸化。橙色。	
平瓦	I区グリッド 小片	遺構 外102	——	全体に均一した厚さで 緩やかに内傾する。	上面：布目疵。 下面：ヘラナデ。	石英・砂粒子含む。 酸化。橙色。	105と同一
平瓦	I区グリッド 小片	遺構 外103	厚さ 1.4	器壁厚く、緩やかな カーブを持つ。	上面：布目疵。周縁ヘラナデ。 下面：縄目印キ疵。周縁ヘラ ナデ。側端部金属製ヘラ切り。	砂粒含む。硬質。 還元。 黄灰色。	
平瓦	13注覆土 小片	遺構 外104	——	——	上面：布目疵。 下面：ナデ。	砂粒やや多く含む。 硬質。酸化。赤褐色。	
平瓦	I区グリッド 小片	遺構 外105	——	全体に均一した厚さで 緩やかに内傾する。	上面：布目疵。 下面：ヘラナデ。側端部金属 製ヘラ切り。	石英・砂粒含む。 酸化。橙色。	102と同一



第292図 中世遺構外出土遺物図

第152表 遺構外出土中世遺物観察表

器種	出土遺存状態	番号	法量 (cm)	形態の特徴	成形調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕 常滑	17溝覆土 口縁部	遺構 外106	—	器壁が厚く口唇部折り返し。	口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。 内：回転横ナデ。	砂粒。多量の鉱物含む。還元。褐灰色。内面灰褐色。	気泡あるが硬質焼締。
鉢 炊貫陶器	I区グリッド 口縁部以下 残存	遺構 外107	—	口唇丸みを持って外傾。口縁肥厚し、体部直線上に内傾。	内外：輪襖底。口縁内外面体部内面回転横ナデ。体部外面指ナデ。	砂粒含む気泡あり。内酸化、外還元。褐灰色。	内面2次的研削。
甕 / 壺 陶器	9溝北側覆土 底部以下 残存	遺構 外108	—	体部直線上に内傾。高台接合部方形で稜明瞭。接地面内傾。底部丸底ぎみに下がる。	外：体部回転横ナデ。高台接合部横ナデ。底部回転糸切り後ナデ。内：体部、底部回転横ナデ。接合部ヘラナデ。	砂粒。気泡なし。還元後酸化。硬質。外：灰赤色。中：灰白色	焼締焼成により硬質。備前焼に似る。
鉢 山茶碗窓	II区グリッド 口縁部以下 残存	遺構 外109	—	口縁外面軽く面取り。緩く外反ぎみに大きく傾斜し体部に向かう。	内外：回転横ナデ。無軸。口唇内面に施軸後の2次的研削痕。	雲母・砂粒含む気泡あり。還元硬質。外灰白色、内浅黄色。	
焼 瀬戸?	II区グリッド 口縁部以下	遺構 外110	—	体部ほぼ直立、底部近くで急速に内反。	体部外面ロクロ痕。内外面透明釉で全面施釉。貫入あり。	磁器土。硬質。浅黄色。	硬質後、2次焼成。



遺構外-111-1/2



遺構外-112-1/2



遺構外-113-1/2



遺構外-114-1/2



遺構外-115-1/2

第293図 遺構外出土金属器

第153表 遺構外出土金属器観察表

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備 考
			長さ	幅	厚さ		
鉄 鏝	7住掘り方埋土	遺構外II	13.8	2.6	0.5	凹基有基鏝で、刃部長約4cm、茎長約11cm、茎は断面方形で先端一部欠損。	
刀子状鉄製品	56住覆土	遺構外II	9.4	2.0	0.6	扁平な不整形台形状の使用部先端に斜め方向の刃部あり。基部は扁平尖頭形で上下に波打つ。	ほぼ完存。ノミ状のものか。
鉄 釘	54住覆土	遺構外II	13.0	2.9	1.2	扁平な頭部が左右に大きく延び、体部は断面方形で中位よりややよじれる。	
棒状鉄製品	I区グリッド	遺構外II	2.0	—	1.1	中央に現存径0.6cmの孔があるが、全面サビに覆われているため、原形法量不明。	完存。
釣針状鉄製品	19住周辺グリッド	遺構外II	3.3	1.6	—	断面最大0.5cm方形の鉄棒の先端を尖らせて尖頭部をし字形に曲げる。上端に僅かに突起。	完存。



遺構外-116-実



遺構外-117-実

第294図 遺構外出土銅銭

第154表 遺構外出土銅銭観察表

器種・器形	出土状態	番号	現存最大値(cm)			形態の特徴・遺存状態	備 考
			長さ	幅	厚さ		
銅 銭	田区グリッド117と密着	遺構外II	2.5	—	0.1	中央に1辺0.6cmの方孔。周縁帯幅0.6cm。表面「開元通宝」銘。裏面方孔周縁0.8cm。	初唐唐武徳4(621)年。
銅 銭	田区グリッド116と密着	遺構外II	2.4	—	0.1	中央に1辺0.6cmの方孔。周縁帯幅0.2cm。表面「開元元宝」銘。裏面サビ激しく不明。	初唐北宋開元1(1068)年。

第V章 調査のまとめ

第1節 旧石器時代

麻生敏隆

両面加工尖頭器が1点、兩壺遺跡の平安期の27号住居土中より出土している。縦長切片を素材とし、周縁に調整剝離を加えることにより「木葉形」を作り出している。石質は黒曜石、長さ4.7cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmと小形である。

群馬県内で尖頭器が出土している遺跡としては、岩宿・元宿・三屋・石山・武井・乾田Ⅱ・御正作などがあげられる。このうち出土層位のはっきりしているのは、Y P（板鼻黄色軽石）層直上の石山とソフトローム上位の乾田Ⅱを除けば、他はすべてY P層からB P（板鼻褐色軽石）層にかけて検出されている。

石山の尖頭器は細身の両面加工を特徴とし搔器を伴うが、その形態と組成は新潟県本ノ木遺跡と類似していることから、芹沢氏の考えるように縄文早創期に位置するとみてよいであろう。黒曜石の片面加工を主体とする三屋はその詳細がはっきりしていないが、両面加工尖頭器がエンド・スクレイパーを伴って検出されている。後でのべる武井Ⅱに類似性を見い出せるが、ナイフ形石器が共伴するかどうか不確定なため、武井Ⅱと同時期か少し前に位置すると考えてもよいであろう。頁岩や砂岩を主な石材とする元宿の尖頭器は両面加工を主体とし、細身の柳葉形・木葉形を特徴とするが、三屋と同様に詳細がはっきりしない。武井については詳細な報告がなされているが、そのうちで尖頭器が出土しているのは上層の武井Ⅱと呼ばれている石器文化である。全出土遺物の30.1%を尖頭器が占めるが、大きさでは大形・普通・小形、調整加工では両面・片面に大きく分けることができる。特に小形の尖頭器は黒曜石を主な石材とし、素材に縦長切片を多用している。小形のナイフ形石器、エンド・スクレイパーなどの石器組成や石核にみられる調整剝離技術からみて、南関東地域でいう武蔵野台地第Ⅱb文化期（IV層上部～Ⅲ層下部）と同時期とみることができる。御正作では黒曜石を主な石材とする片面及び両面加工の尖頭器が、ナイフ形石器と共伴して検出されており、武井Ⅱとほぼ同時期と考えてよいであろう。乾田Ⅱでは細身の柳葉形の両面加工尖頭器が隆起線土器と検出されており、縄文早創期と考えてまちがいない。

以上で県内の主な尖頭器を伴う石器群をみてきたが、調整加工技術や石器組成からみて大まかな編年を組み立てることができよう。

三屋→武井Ⅱ・御正作→石山・乾田Ⅱ

本遺跡出土の黒曜石は石材、周縁加工のあり方などからみて、武井Ⅱ・御正作と類似した点が多く、ほぼ同時期といえる。



遺構外-118-Ⅱ
第295図 遺構外出土旧石器

- 1 杉原在介：『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第1号、1956
- 2 芹沢長介：『日本の旧石器』『考古学ジャーナル』第10号、1967
- 3 芹沢長介：『関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察』『戦国史学』第4号、1964
- 4 相沢忠洋：『群馬県赤堀石山遺跡』『考古学ジャーナル』第9号、1967
- 5 杉原在介：『群馬県武井における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第7号、1977
- 6 水上町教育委員会：『乾田Ⅱ遺跡発掘調査報告』、1978
- 7 大泉町教育委員会：『御正作遺跡発掘調査報告』、1981

第2節 縄文時代

本遺跡地は、井野川の東側に並行する流路をもつ唐沢川と天王川にはさまれた平野部に移行する傾斜変換地点である。

遺構は、唐沢川西岸の熊野堂遺跡第Ⅲ地区では確認されず、唐沢川東岸の両遺跡で台地中央部のローム層上に、中期阿玉台式期の住居址2軒と土壇2基、竪穴状遺構1基、溝1条を確認し、唐沢川岸の一段低い場所で後期縄文・内土器期の住居址1軒を確認した。遺構の分布は、台地中央部に中期が集中しており、一段低い台地縁辺に後期の遺構が配せられている傾向がある。

今のところ井野川中・下流域では、縄文時代の遺構調査の報告例は少ないが、本遺跡地の東側に隣接する高崎市大八木町菊田池遺跡¹⁾では、中期加曾利E式期の住居址2軒と土壇数基が確認されており、同じ台地上にあり一連の関連があると思われる。本遺跡の広がりや東側に伸びる可能性がうかがえる。また、井野川と猿府川にはさまれた台地上の熊野堂遺跡第Ⅰ地区²⁾では、前期踏碇B式期の住居址1軒と包含層より中期土器片を多量に確認し、その北側の三ツ寺II遺跡³⁾で前期黒浜式・踏碇A式期の住居址4軒と土壇数基確認されている。これら前段階の遺構が同台地上北側に位置しており、強い影響を受けていると思われる。

次に、今回遺構に伴って出土した阿玉台式土器について西村正衛氏によって提唱された阿玉台I b式を一部抜出して論じてみたい。

「阿玉台I b式とは、器形が深鉢で口辺を浅く内湾曲乃至は直口にして真直ぐ底部にしまる胴腹に接続させた形体で、肩状把手や隆起線を口縁に取付け、口唇部に幅が付き、口縁内側にしっかりとした稜が付けられる。胎土に雲母末を混入したものもあるが、多くは砂を混えている。焼色は黒・黒褐色等で、文様は隆起線に沿って単独で角押文や、細いヘラを押しつけながら曳きずってゆく有節線文を施す。これに波状沈線文・凹凸文・刻目文など加えられた。胴腹は隆起線でVやY字状文、また直曲線文が配される。」と提唱された。

本遺跡の62号住居址から出土した床直の土器(62住-2)は、口辺を浅く内湾曲させ、真直ぐ底部にしまる胴腹に接続させた深鉢で、口縁は肩状把手が4ヶ所備えられ、胎土に少量の雲母と砂を混入。文様は口辺に隆起線による区画状文が構成され、それに付随して角押文が加わり、区画内の角押文や半載竹管による沈線文は、それぞれ図柄を異にしている。胴腹は隆起線で直曲線文を施している。これをみても器形・文様等はまったく同一で阿玉台I b式に比定されるが、一部文様で半載竹管を使用する点で異なり、II式で旺盛する文様をもつ土器と言える。また遺構外よりII式に比定される土器片が多量出土している。以上の結果、遺構の存在が想定されるが、遺跡の性格・詳細な検討等は今後の調査を待たなければならない。(新井)

注 1 高崎市教育委員会：「大八木菊田池遺跡」高崎市文化財調査報告書第44集、1983、3

2 群馬県埋蔵文化財調査事業団：「熊野堂遺跡第Ⅰ地区」(印刷中)

3 群馬県埋蔵文化財調査事業団：「三ツ寺遺跡」三ツ寺遺跡説明会資料、1981、12

4 西村正衛：「阿玉台式土器編年的研究の概要」『早稲田大学文学部研究科紀要』第18輯、1972

第3節 弥生時代から古墳時代前期

弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構は、次の3時期に大別出来る。

I期 熊野堂遺跡5号・21号、雨登遺跡48号・67号・69号の5軒の住居址と雨登遺跡の3号竪穴状遺構。
II期 雨登遺跡47号・49号・53号・57号・71号・84号・86号・90号の8軒の住居址と不明遺構、及び熊野堂遺跡11号土址。

III期 熊野堂遺跡8号・9号、雨登遺跡61号・80号・85号住居址の5軒の住居址と熊野堂遺跡の6号土址。

第I期は弥生中期後半から後期初頭と考えられ、住居址は熊野堂遺跡においても雨登遺跡においても、比較的近接して存在する。熊野堂遺跡の5号住居址と21号住居址は主軸が平行しており、同時存在または近い時期の建替えが想定されよう。雨登遺跡69号住居址出土の壺形土器は、最大径が胴中位にあり、中部高地千曲川流域より進出した吉田式土器の影響のもとに、器形変化をたどりつつある段階の土器である可能性もある。

第II期は弥生後期半ば前後である。熊野堂遺跡の11号土址を除いてすべて雨登遺跡のIII・IV区に集中している。90・86・84号住居址と47・49・53号住居址は、それぞれの主軸が平行し、各住居址間の間隔がすべて約7mであるという特徴がある。そしてこの2グループの住居址群は、約50mを隔てて主軸が平行する。ところでこれらの住居址の出土土器には大きな時間差は考え難く、また口縁部・胴最上部にボタン状貼付文を持ち、胴最大径が頸部直下である特徴的な台付壺が47・84・86・90・57・49号住居址の各住居址から出土している。このことから同時存在の住居址群である可能性が強い。57号住居址及び大形の71号住居址は、主軸は平行していないが、71号住居址については前述の特徴的な台付壺が存在することや、両グループのほぼ中央附近に存在することから、同時存在の可能性を指摘することも出来よう。

第III期は古墳時代前期である。熊野堂遺跡8号住居址は最も古く、当地域の弥生終末期の壺形土器が残存し、新来の土器との複合使用という現象が表われている。なおS字状口縁台付壺は、大参養一氏の分類によるA類である。熊野堂遺跡9号住居址は8号住居址に続く時期であると考えられる。雨登遺跡61・80・85号住居址は最も新しく、住居址の主軸が平行しており、出土土器もほぼ同時期と考えられることから、同時存在の可能性が強い。

熊野堂遺跡と雨登遺跡の出土土器の分析、遺跡全体のまとめについては、熊野堂遺跡II地区の報告で扱うことが予定されているので、ここでは出土土器をめぐる一、二の研究上の問題点を指摘しておきたい。

まず第一に、第I期土器の土器様式についてである。小林行雄氏は昭和13年に発行された「弥生式土器聚成図録」において、本様式土器を「上野竜見町、下野野沢の資料によって知られる中部高地第一様式（筆者注、栗林式土器をさす）の系統であり……」とされ、また翌14年杉原荘介・乙益重隆氏は、「弥生式土器の所置櫛目式土器に先行して古式弥生式土器との中間に位置するものと考えられ、信濃の栗林、松本城山等においても一様式として認められた」とされている。すなわち熊野堂・雨登遺跡出土の第I期土器は、杉原荘介氏が高崎市竜見町遺跡出土土器に関して説明されているように、「明らかに信濃栗林遺跡出土の栗林式土器と同系統或はその末期的なるもの」なのである。北関東地方において確認された弥生土器の一様式が、信濃の栗林や松本城山等においても一様式として認められ、さらに信濃栗林遺跡出土の栗林式土器と同系統或はその末期的なものであるならば、北関東地方における本様式土器は栗林式土器であるということになる。

ところで関東地方においては、本遺跡出土の第I期土器は神沢勇一氏及び井上唯雄・柿沼恵氏によって竜見町式土器と呼ばれている。神沢・井上・柿沼氏は杉原・乙益氏の論文をその根拠にあげておられるが、

何故に新様式(型式)を設定する必要があったのかについては、明らかにされていない。井上・柿沼両氏の研究によれば、竜見町式土器はその内容及び変遷が栗林式土器とスムーズに対応しており、新様式(型式)の設定は難かしいといわざるを得ないであろう。

小林行雄氏は、弥生式土器の一つの文化圏としての中部高地地方という概念

のもとに、「飛騨・上野・下野や甲斐地方と同じ様式の土器が見られる」ことを指摘されている。栗林式土器と竜見町式土器が同じ様式(型式)であるならば、様式(型式)名は栗林式土器一つで十分であるということになる。北関東西部は地形的にも中部高地と連続しており、現在の行政区にとらわれることなく、「文化圏としての中部高地地方」という視点も必要であろう。

第二の問題点として、II期からIII期への転換がどのように行なわれたかである。熊野堂遺跡8号住居址及びII地区IV区18号住居址出土土器からは、弥生終末期の集落に他地域の土器が入り込み、緩やかに古墳時代へと変化していく状況を見てとることが出来る。熊野堂遺跡9号住居址出土土器は、伊勢湾沿岸元屋敷期の影響が強く、本地域弥生土器終焉直後の様相を示している。

それは従来考えられていたように、古墳時代の土器(土師器)をもった多数の人々が弥生後期集落のほとんど存在しない利根川流域の低地帯へ進出し、やがて台地縁辺に存在していた弥生文化が解体していったというようなことは異なっている。古墳時代前期は関東地方において、五領又は石田川期と呼ばれているが、この時期の半ば前後から上瀧・石田川・高林・弥藤吾新田・大黒等の利根川流域低地帯での集落の形成・拡大が行なわれているのであり、その前半期に古墳時代社会へと転化した旧弥生社会の人々が、西方からの移住者と共に低地開発にかかわった可能性は極めて大きいといわざるを得ないであろう。兩堂遺跡61・86・90号住居址の営まれた時期は低地開発が進行し、集落が拡大していた時期にあっている。(飯塚)

- 注 1 菅沢清：「踏津水式土器発生に関する一試論——普光寺平における後期初期の弥生式土器(吉田式土器)の設定とその意味するもの——」、『信濃』、第22巻11号、信濃史学会、1970
- 2 大巻義一：「S字状口縁土器考」、『いちのみや考古学』、一宮考古学会、1967
- 3 森本六郎・小林行雄：『弥生式土器形成図録』、東京考古学会学報第1冊、東京考古学会、1938
- 4 杉原正介・乙益雄雄：『高崎市周辺の弥生式遺跡』、『考古学』、第10巻第10号、東京考古学会、1939
- 5 杉原正介：『上野博遺跡調査概報』、『考古学』、第10巻第10号、東京考古学会、1939
- 6 神沢勇一：『弥生文化の発展と地域性——関東——』、『日本の考古学』、河出書房、1966
- 7 井上雄雄・柿沼憲介：『入門講座弥生土器——北関東——』、『考古学ジャーナル』、140、141、145、1977・78
- 8 長谷部達雄・増水和雄：『熊野堂遺跡(26地区)』、『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告II』、群馬県教育委員会、1975
- 9 尾崎喜左衛門：『前橋市史』、第1巻、前橋市、1971
- 10 佐藤明人他：『八幡原A・B、上瀧、元島名A』、関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第3集、群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、1981
- 11 尾崎喜左衛門・今井新次・松島崇治：『石田川』、石田川刊行会、1968
- 12 大塚初重・小林三郎：『群馬県高林遺跡の調査』、『考古学』、第3巻下、1968
- 13 栗原文蔵・田部开功：『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』、埼玉県遺跡調査会報告第29巻、埼玉県遺跡調査会、1976
- 14 川島正一：『大黒遺跡発掘調査報告』、奈良町誌基礎資料第7号、奈良町誌編さん室、1976

第155表 弥生時代遺構分布表

通称・区 時期	熊野堂田	兩 堂 遺 跡				
		I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区
I 期	住居2	なし	なし	なし	住居3 竈穴1	なし
II 期	土坑1	なし	なし	住居3	住居5 不明1	なし
III 期	住居2 土坑1	なし	なし	住居2	住居1	なし

第4節 古墳時代・古代

(1) 集落変遷について

A 古墳時代

本調査両遺跡は、西で上越新幹線をまたぎ、地形的に唐沢川で二分されている。遺構は、唐沢川をはさんだ両岸から石田川～鬼高期を主に竪穴住居址が確認された。西岸の熊野堂遺跡第Ⅲ地区は、本県及び南関東編年の石田川・和泉・鬼高期の竪穴住居址5軒と溝2条があり、上越新幹線で台地上を南北に調査した熊野堂遺跡の東西の広がりを知ることができる。遺構の分布は、熊野堂遺跡第Ⅰ・Ⅱ地区を含めて考えると台地中央部附近にみられ、中央部では密に、縁辺部では疎という傾向があり、本地区は熊野堂遺跡の東縁辺部を形成する。さらに一段低い地形部分では、熊野堂遺跡第Ⅱ地区の事例では標名山二ツ岳F A火山灰の降灰を受けた水田址が確認されており、水田址などの耕作地である可能性が高いが、本地区では確認されなかった。竪穴住居址の規模は、一辺が約4～5m内外で方形を呈し、カマドを東辺及び北辺に設けるなど、熊野堂遺跡第Ⅰ・Ⅱ地区と差異はない。

一方の東岸両遺跡は、石田川期の竪穴住居址3軒と唐沢川寄りで鬼高期標名山二ツ岳F A火山灰下の溝1条とがある。分布の傾向としては、西岸と同様だが散漫な状態である。鬼高期の遺構としては明確な例を欠くが、県道波川～高崎線東の高崎市大八木町箱田池遺跡¹⁾では当該期の遺構及び遺物が出土しており、地形

第156表 古墳時代・古代遺構分布表

遺跡・調査区	石田川	和泉	鬼高	真間	陣馬Ⅰ	陣馬Ⅱ	陣馬Ⅲ	陣馬Ⅳ	陣馬Ⅴ	陣馬Ⅵ	B以後	その他	
熊野堂Ⅲ	住居1	住居1	住居3 溝2	住居5 竪立2 柱列1	なし	なし	住居2 柱穴1	住居1 竪立2	なし	なし	溝1	B下水田 B下溝1	
両	Ⅰ区	なし	溝1	なし	なし	なし	なし	住居4	なし	住居1	なし		
	Ⅱ区	なし	なし	なし	住居1	住居7 溝2	住居3 竪立1	住居7 溝2 土塚1	溝4	住居1 溝4	溝4		
	Ⅲ区	住居1	住居1	なし	住居1 土塚1	住居1	住居2 溝4 道路1	土塚1 溝4 溝4 道路1	住居1 溝4 溝4 道路1	住居1 溝4 道路1	溝4 道路1	溝4 道路1	
	Ⅳ区	住居1	なし	なし	住居1 竪立2	住居1	住居4	住居6 土塚2	住居2	住居1	住居1	溝1	
	Ⅴ区					竪立2	住居2	住居1	住居1	なし	住居1	なし	
合計	住居3	住居2	住居3 溝1	住居7 竪立4 柱列1 土塚1	住居3 竪立2	住居15 溝6 道路1	住居12 竪立1 溝4 溝4 土塚2 柱穴1	住居16 竪立2 溝6 溝6 道路1 土塚1	住居2 溝8 溝8 道路1	住居4 溝8 道路1	溝10 道路1		

備考：確定な遺物を伴う遺構及び軽石の埋積状態より時期が推定できる遺構に限った。(第158・159・160頁参照)

的にみても本地区のローム層が東へ広がりをもつことから、遺跡としては本地区を含めて東方へ大きく円を描く中で包括されるものと思われる。

以上が分布などから見た概要であるが、熊野堂遺跡第III地区は熊野堂遺跡の一部を形成し、その東縁辺部として位置付けできる。雨壺遺跡は東方の大八木町箱田池遺跡との関連で、その範囲が東へ大きく拡大され、その西縁辺部としての位置付けが可能であろう。分布のあり方で両地区とも共通しているのは、台地中央部に遺構が規制された点で、これは弥生時代の例とは共通し、後統する奈良時代以降の遺構とは対照的である。

(女屋)

注 1 高崎市教育委員会：『大八木箱田池遺跡』、高崎市文化財調査報告第44集、1983

B 古 代

当該期の遺構は、熊野堂第III地区・雨壺の両遺跡からほとんど全域で確認された。内容的には竪穴住居址を主体とし、掘立・土壇・溝・道路状遺構などで構成され、地形的に一段低い熊野堂第III地区の西端からは水田址を含み密度の濃いあり方を示す。分布の傾向としては、両地区共通して古墳時代でみたように台地中央部から縁辺部への進出がみられる。以下、本調査両遺跡のほぼ真北旧三国街道沿いに約7.5km離れた同じく旧群馬郡内の清里陣場遺跡（前橋市池端町、北群馬郡吉岡村陣馬）での平安時代土器編年及び南関東編年を援用して概要を記す。

熊野堂第III地区は古墳時代同様、熊野堂遺跡の一部を形成するものであり、東西への広がりを知ることができる。まず真間期の遺構は、上越新幹線の東側で竪穴住居址5軒と掘立2棟があり、西側の空白地を考えると一群を形成するものと思われる。竪穴住居址はいずれも東辺にカマドを設け、規模も一辺約3mで方形を呈するという共通した特徴をもっている。次の国分期になると、清里陣馬編年の第三期・第四期の竪穴住居址3軒があり、この間に南北走向の比較的規模のある溝2条と西端の一段低い部分での浅間B軽石の降灰を受けた水田址がある。遺構としては散漫なあり方だが、熊野堂遺跡第I・II地区との相互補充の関係によりその欠如部分を補うことができるだろう。水田址は小範囲の確認ながら、低地部分に全体にもその遺構が及ぶことを暗示するものである。また熊野堂遺跡第II地区の南半で浅間C軽石と榛名山二ツ岳F火山灰の降灰を受けた2枚の水田址が知られていたが、二ツ岳F軽石土流で壊滅的打撃を受けた水田耕作が、浅間B軽石降下の時期までに再開されていたことを知る資料である。水田址に隣接して、熊野堂遺跡第I・II地区からは大規模な灌漑用井戸状遺構が確認されており、水を給するという点では一連の遺構と思われ、飲料水と共に水田址への給水も考えられる。

雨壺遺跡は、竪穴住居址・掘立・土壇・溝などで構成されているが、遺構数量的に見て清里陣場編年を援用すると第二期・第三期に主体がある。遺構は全域に広がる様相をもつが、各区に相応する形で小群の構成が分布の上からみることができる。これは、遺構分布の密度及び空白地、溝及び道路状遺構を境界の基準としたもので、大別して道路状遺構をはさんで東西に二分し、西は唐沢川沿いの一群（I区）と道路状遺構の西側の一群（II区）、東は6号掘立付近を境界にしての二群（III・IV区とIV・V区）という計4群構成である。これら小群を唐沢川から東へむかって仮に第1～4群としてその概要をみていくと、竪穴住居址軒数は第2群の清里陣馬編年第四期の9軒をピークに各群増減を繰り返している。この小群には、時期不詳のものが多いが基本的に掘立が伴う構成をなすものであろう。また全体の動きとしては、道路状遺構をはさんだ第2～4群に各期を通じての安定した推移がみられる。東方へは大八木箱田池遺跡との関連でさらに東へと拡大するものと推定されるが、西の唐沢川沿いへは第IV期になって初めて遺構の進出がみられ、全体としては台地中

中央から東方に依拠する小群が漸次拡大を図ったものと思われる。その時期の一つとして、この第IV期は特徴付けられると共に、第I～III期に熊野堂遺跡との間の空白地であった唐沢川沿いの地区を埋める資料になる。なおこの唐沢川東岸地域（I区）は、基本土層④層と⑤層の堆積に特徴がみられ、あるいは氾濫影響を常時受けていた可能性が考えられる。

これら小群の各遺構からは豊富な土器類が出土しているが、土師器断面「コ」の字形壺から羽釜・土師質土器の出現及びその推移の時期に相当し、大筋において清里陣馬編年の背首するものである。また特徴的な遺物として舶載青磁・灰釉陶器・緑釉陶器・墨書土器・置きカマドなどが少量あげられる。

小群構成の境界基準として道路状遺構をあげたが、時期としては清里陣馬編年の第II期まで遡るもので、第VI期まで存続期が求められる。位置としては、江戸時代の三国街道を東へ約5m外れ大変興味深いものがある。遺跡内を縦断する三国街道は、高崎市下小島町から群馬町福島・三ツ寺方面への道筋の一部に相当する。道路面には浅間B軽石が覆拵ながら薄くみられ、熊野堂遺跡第I地区内で調査された推定東山道の道路状遺構と同様な状況である。三国街道下にこの道路状遺構が続くとすると、推定東山道とは現行道路で遺跡の北約500mの群馬町福島所在の金剛寺の西南でT字路となり、三国街道下の古道としてはなく推定東山道から分岐する道路の一つとして位置付けられる。またこの道路状遺構は両側に溝をもつもの、竅穴住居址との重複例はなく、浅間B軽石を覆土にもつ9・10・13・17・20各号溝を始めとして走向性を近似させる溝も多く、遺跡内において何らかの基準となっている遺構ともいえる。

以上が両遺跡合せた概要であるが、弥生・古墳時代の後を受けて古代は遺構も漸増増加し安定した様相をもち、凡そ8世紀末～11世紀にかかる集落跡として両遺跡を性格付けられる。中には道路状遺構のように推定東山道との関連をも考えられ、本調査両遺跡内だけではなく広い視野での考察を必要とする遺構もある。さらに唐沢川兩岸での熊野堂遺跡をも含めた遺構数、[和名抄]の「八木郷」・「上野国交野実録帳」の「八木院」に関連するような大八木所在の遺跡として考えたい。両遺跡の南約1.3kmの高崎市大八木水田遺跡では、浅間B軽石の降灰を受けた一町四方の条里制遺構が確認され、道路状遺構の存在などから本遺跡との関係もわかれるが、本遺跡内の字名である両遺の「壺」を条里の「坪」に関連があるかと指摘するに停める。なお本調査両遺跡を二分する唐沢川は、すぐ北で猿府川と合流している。唐沢川本流自体は台地上を貫通して、近世の福島などの集落がその兩岸に密接な連がりをもつのに対し、猿府川は上・中流兩岸に狭いながら現在水田となっている沖積地をもち大字の境界となっている。さらに上流の古墳時代から平安時代集落の三ツ寺II・III遺跡、中林遺跡、井出村東遺跡、古墳時代居館址三ツ寺I遺跡が、沿岸約2km北側に内に集中している。これらより両川の存在が本調査両遺跡と緊密な関係が考えられる。またそれぞれの「カラサワ」・「サルブ」の地名も検討に値するものであろう。

(女屋・坂井)

- 1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：「清里陣馬遺跡」、1982
- 2 群馬県教育委員会：「三国街道」、群馬県歴史の道調査報告書第3集、1980
- 3 地辺弥彦：『和名無抄地名考證』。吉川弘文館、1970。なお石川正之助氏は井野川村岸離道遺跡を「八木郷」に比定している。群馬県教育委員会：「上越新幹線探検II」、1975
- 4 高崎市教育委員会：「大八木水田遺跡」、高崎市文化財調査報告書第12集、1979
- 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：「年報1」、1982
群馬県教育委員会：「上越新幹線調査概報VI」、1980
- 6 群馬県教育委員会：「中林遺跡」、群馬県埋蔵文化財報告書第6集、1982
- 7 井出村東遺跡調査会：「井出村東遺跡発掘調査の概要」、1981。本報告1983予定
- 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：「年報1」、1982他

第157表 出土金属器一覧表

出土遺跡・遺構		番 号	種類・形状	出土状態	遺構時期
熊野堂田	14号溝	14溝 -4	有孔L字状鉄製品	覆土	中世
	12号住	遺構外 -50	鉄鏃	12住カマド内	——
雨	II区14号住	14住 -8	鉄製紡錘車	覆土	陣馬IV
		14住 -9	鐮状鉄製品	覆土	同 上
表	II区23号住	23住 -1	8字状鉄製品	カマド内	陣馬II
	II区28号住	28住 -5	鉄製錠具	覆土	陣馬IV
表	II区29号住	29住 -9	鉄製刀子	覆土	陣馬II
	IV区59号住	59住 -5	鉄斧	東壁北窓床面	陣馬III
表	III区77号住	77住 -4	不明鉄製品	南西側床面	陣馬IV

出土遺跡・遺構		番 号	種類・形状	出土状態	遺構時期
雨	III区77号住	77住 -3	鉄釘	北東側床面	陣馬IV
	III区37土塔	37塔 -3	鉄釘	覆土	不明
表	I区7号住	遺構外 -111	鉄鏃	7住廻り方覆土	——
		IV区56号住	遺構外 -112	刀子状鉄製品	56住覆土
表	IV区54号住	遺構外 -113	鉄釘	54住覆土	——
	I区遺構外	遺構外 -114	鐮状鉄製品	——	——
表	II区遺構外	遺構外 -115	釣針状鉄製品	——	——
	III区遺構外	遺構外 -116	銅銭	——	——
表	III区遺構外	遺構外 -117	銅銭	——	——

第158表 熊野堂遺跡第III地区古代住居址遺物組成表

遺構名	土 師 器		須 恵 器		羽 釜		土		土 師 質 土 器			灰 輪 陶 器	黒 膏 土 器	鉄 製 品	その他の遺物	時 期
	長 環	コ 字 環	武 調 整 環	無 調 整 環	還元 塊	中性 塊	黒色 研粉 塊	還元 元	酸 化 基	環	塊					
1住					○										土師器鉢	III
4住	○	○								○					土師器小形壺	真間
10住																IV
11住															須恵ケズリ壺	?
12住													○		須恵壺	III
13住	○	○													須恵内面碗	真間
14住		○													須恵盤, 土師器鉢	真間
15住	○	○													須恵壺	真間
16住	○	○														真間

注 時期区分は、清里陣馬遺跡編年を基準とし、これに南関東編年を加味した。無調整環とは、底部回転未切りによる切り離し後何ら調整を行っていないもので、その他の須恵器環を底調整環とした。土師観察表に黒色土器として記載したもののうち研磨されているものは、清里陣馬による土師質土器塊Bに入れた。研磨されていないものとは、清里陣馬の糠焼成のもののみを、中性塊環とは、須恵器塊環で還元が十分でなく中性塊もしくは、酸化に近い焼成がなされ白～茶褐色の色調のものをさす。

第159表 兩登遺跡古代住居址遺物組成表 (I)

遺構名	区	土師器			須恵器		黒色研焼埴土	羽釜	土	土師質土器			灰釉陶器	瓦	黒書土器	鉄製品	その他の遺物	時期
		長	環	コ字壺	底調製環	瀬元埴				中性埴	環	A						
1住	I							○	○		○	○						IV
2住	I							○	○	○	○		○	○				VI
3住	I							○	○									IV
4住	I								○	○	○							IV
6住	I									○								IV
7住	II			○		○	○							○				II
8住	II								○									IV
10住	II					○	○							○			中性土	II
11住	II							○										III
13住	II							○		○	○	○						IV
14住	II							○			○					○	須恵器	IV
15住	II				○													III?
17住	II								○								須恵器・壺	IV
19住	II			○		○	○	○			○							II
23住	II		○	○		○	○							○	○	○	中性土	II
24住	II					○	○							○				III
25住	II								○	○							置きカマド、銅洋	IV
26住	II																須恵器	?
27住	II			○		○											中性土、須恵器	II
28住	II									○	○	○				○		IV
29住	II		○	○		○	○	○						○		○	青磁埴	II
30住	II			○	○												須恵器	I
31住	II					○												II
33住	II							○		○							須恵器、土師器小形壺	IV
34住	II								○	○		○	○					VI
35住	V					○	○		○				○		○			VI
36住	V									○								IV

第160表 兩壺遺跡古代住居址遺物組成表 (2)

遺 構 名	区	土師器		須恵器			羽蓋		土師質土器			灰 輪 陶 器	瓦	黒 書 土 器	鉄 製 品	其 他 の 遺 物	時 期		
		長 斐	コ 字 斐	底 調 整 環	無 調 整 環	蓮 元 境	中 江 境 環	黒 色 磨 石 器 環	蓮 元 化	土 蓋	境 環							柄 境 環	境 皿
37住	V	○	○		○						○					須恵皿	II		
41住	IV		○															II	
42住	IV															須恵蓋	?		
44住	IV							○				○						VI	
45住	V		○															II	
46住	IV	○	○	○	○	○	○		○				○			須恵壺・壺, 土師	III		
50住	IV	○	○	○									○	○		須恵蓋	II		
51住	IV							○					○					V	
52住	IV							○	○									IV	
54住	IV	○																I	
55住	IV							○										IV	
56住	IV		○		○	○	○											III	
58住	IV				○	○	○	○					○					III	
59住	IV		○		○	○									○			III	
60住	IV				○											須恵壺		II	
63住	IV				○											緑輪物		II	
64住	V				○													III	
66住	IV	○											○			須恵壺・蓋, 土師器		真岡	
68住	IV		○		○	○								○		緑輪・須恵壺, 不明土製品		III	
74住	III	○	○	○	○									○		須恵蓋・壺		真岡	
75住	III							○										V	
76住	III															須恵壺		?	
77住	III							○						○		須恵皿		IV	
78住	III				○											須恵壺		I	
79住	III		○															II	
81住	IV				○	○	○											III	
88住	III				?											土師		II?	

(2) 出土円面硯について

熊野堂遺跡第Ⅲ地区の13号住居址のカマド左前の床近くから、円面硯(第38図13住一3, 巻頭図版1, 図版9)が出土している。

本遺物の用途については当初不明だったが、福岡県大宰府都府楼跡出土の円面硯(第296図1, 九州歴史資料館蔵)に形態的に類似点が認められ、他の使用目的が全く考えられないため、円面硯とした。都府楼例は、楠崎彰一氏によれば⁸³⁾「低い台脚をもつた皿の上面を円盤で蔽い、周縁に浅い溝を繞らし、周縁の一部に隅丸短形の孔を穿っている。」という特徴をもっている。上面の孔は1個で、本報告例の大中孔の、いづれかと同様の機能を持つと思われる。なおこの都府楼例は、低い高台を有しているが、本報告例は高台はなく底部は僅かに丸底ごみのため安定度にやや欠ける。また外側の小孔については、静岡県沼津市上香貫宮原古墳出土の把手付円面硯(第296図一2, 東京国立博物館蔵)の側縁有孔突起より筆立てと考えることもできる。

本調査同遺跡では、下表のように5点以上の墨書土器が検出されたが、いずれも雨倉遺跡で、熊野堂Ⅲでは全く見られなかった。墨書土器出土遺構のうち時期的に熊野堂Ⅲ13号住と近いのはⅢ区74号住だが、同一時期ではない。(坂井)

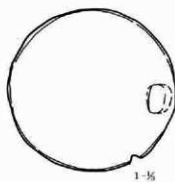
県内陶磁器概観報告書一覧(緒方邦男氏、田口一郎氏ご教示による)

- 前橋市教委:『中島遺跡発掘調査報告書』, 1981
- 前橋市文化財研究会:『清原南部遺跡群』, 1980
- 群馬県教育委員会:『十三宝塚遺跡概報Ⅱ』, 1976
- 国史館大考古学研究室:『多野郡古井町多比良下五反田塚址発掘調査略報』, 1976
- 佐波郡地町教育委員会:『明神遺跡発掘調査報告書』, 1975
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団:『鳥羽Ⅰ遺跡』, 『年報Ⅰ』, 1982
- 群馬県教育委員会:『史跡上野区分寺岡調査概報Ⅱ』, 1981
- 富岡市教育委員会:『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』, 1981
- 多野郡古井町教育委員会:『川内遺跡発掘調査報告書(図版編)』, 1982
- 渋川市教育委員会:『有馬桑里遺跡沖田地区』, 1983
- 群馬郡安群町教育委員会:『生原飯森遺跡』, 1984(予定)

第161表 出土墨書土器一覧表

出土遺跡・遺構	番号	器種・器形	出土状態	墨書位置	字形	備考	時期
雨倉V区35号住	35住-1	須恵器 埴	カマド左壁際。床より4cm	体部内外面各1箇所	「上」か	住居内カマド出土遺物より古い	陣馬Ⅱ
雨倉IV区50号住	50住-1	土師器 坏	竈方覆土	底部外面	「右」か	住居時期より古い	陣馬Ⅰ?
雨倉IV区68号住	68住-1	須恵器・無研磨黒色処理埴	覆土	底部内面	不明	器表黒色のため不鮮明	陣馬Ⅲ
雨倉Ⅲ区74号住	74住-1	土師器 坏	カマド内 底より15cm	底部外面	「川」/ 「小」?		真間
雨倉Ⅲ区20号溝	20溝-1	須恵器 埴	覆土	体部外面	「江」		陣馬Ⅱ

注: 時期とは、墨書土器そのものの青里陣馬遺跡及び南関東編年による時期を示す。またⅢ・Ⅳ区試掘時の遺物に墨書土器片が見られたが、整理時には遺構がある所在不明になり本表に載れている。



福岡県大宰府都府楼出土
九州歴史資料館蔵 8世紀



静岡県上香貫宮原古墳出土
東京国立博物館蔵 8世紀

第296図 他遺跡出土特殊円面硯図

第V章 調査のまとめ

注 1 楠崎彰一：「日本古代の陶磁——とくに分類について——」、『小林行雄教授古稀記念，考古学論考』，平凡社，1982
五島美術館：『日本の陶磁』，五島美術館展覧会図録No.68，1978

2 前掲 楠崎論文
なお『陶磁関係文献目録』、『埋蔵文化財ニュース』41，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター，1983は既報台図817点の分類目録で便利である。

(3) 出土古瓦について

大江 正行

両遺跡から21点の古瓦が出土し，本書ではすべてを掲げた（第162表参照）。実測図中の素文の平・丸瓦については素文面の拓影を略した。第84図熊野堂遺跡第Ⅲ地区遺構外-42の軒丸瓦については，群馬県内既出の約200種余りの軒丸瓦を対照した結果，同范関係を明らかにすることはできなかったものの上野国分寺に共通種が存在し，その拓影図を用いて欠損部分の補いをはかった。上野国の軒丸瓦は上野国分寺式瓦など10数例を除外すると，一型式一范型でしかも変化に富む意匠である場合が多く，細片であっても欠損部分の推定が可能となるのである。

両遺跡における出土瓦は主としてカマド材であり，少なくとも瓦の持つ本来の機能を損なった形で存在する。このため両遺跡における瓦の存在は二次的であり，再利用を目的としたものと言える。しかし瓦の存在は，両遺跡周辺に，それを使用した建築物があったはずであり，その建物の存在の解釈あるいは使用瓦についての造瓦生産の形態，その体制などを把握することにより，地域の古代史に大きく寄与する側面を持っているのである。ここではそうした意図を前提に若干の検討を加えたい。

① 出土瓦の製作年代

平瓦は15点存在し，桶巻作りとされる寄木状痕をとどめる例はない。寄木状痕をとどめる例は上野国分寺⁸²

第162表 出土古瓦一覧表

出土遺跡・遺構	番号	種類	出土状態	遺構時期	
熊野堂	1号住	1住-4 平瓦	覆土	陣馬田	
	12号住	12住-2	丸瓦	カマド燃焼部側	陣馬田
		12住-3	丸瓦	同上	同上
		12住-4	丸瓦	同上	同上
		遺構外-43	平瓦	同上	——
3・4号溝	遺構外-42 軒丸瓦	3・4号溝覆土	——		
15号溝	15溝-1 平瓦	覆土	B純層下		
雨	Ⅱ区11号住	遺構外-101 平瓦	11号住覆土	——	
	Ⅱ区13号住	遺構外-104 平瓦	同上	——	
倉	Ⅱ区23号住	23住-2	丸瓦	カマド燃焼部壁際	陣馬田
		23住-3	平瓦	同上	同上

出土遺跡・遺構	番号	種類	出土状態	遺構時期	
雨	Ⅱ区23号住	23住-4	平瓦	カマド燃焼部壁際	陣馬田
		23住-5	平瓦	覆土上層	同上
		23住-6	平瓦	同上	同上
	Ⅳ区58号住	58住-7	平瓦	中央部末より2cm	陣馬田
	Ⅱ区12号溝	遺構外-100	平瓦	12号溝覆土	——
	Ⅲ区20号溝	20溝-6	平瓦	覆土	陣馬田～B降下以降
倉	Ⅰ区遺構外	遺構外-102	平瓦	——	——
	Ⅰ区遺構外	遺構外-105	平瓦	——	——
	Ⅱ区遺構外	遺構外-99	丸瓦	——	——
	Ⅲ区遺構外	遺構外-103	平瓦	——	——

で25%以上が認められ、平瓦の総体的な年代は8世紀中頃に建立されたと考えられる上野国分寺より後出する。縄印をほどこした例は熊野堂15溝-1・雨壺58住-7・20溝-6・遺構外-103の計4点認められる。縄印は上野国分寺創建段階の軒平瓦に認められ、この4点が、それ以降の所産であることは言うまでもない。この中で前3者は、長大な縄印目と Fe_2O_3 と SiO_2 の混合物粒を多く含むことから、これらは安中市秋間古窯跡群で焼造されたものと考えられ、さらに雨壺遺構外-103も縄印の縦と横の2重印の技法上の特徴から同じく秋間古窯跡群で焼造されたものとみなされる。秋間古窯跡群において共通した瓦の散布地には、いずれも8世紀後半から9世紀初頭の須恵器片が採集できる。また上野国における造瓦生産は、県下各窯跡群に伴う須恵器との対比から10世紀段階には終息しつつあったことが明らかとなっている。

以上のことから、当遺跡における瓦の主体的な年代は9世紀前半代であったと考えられる。

② 瓦の生産地域

出土瓦のうち生産地域は前述の4点が技法上の共通性と胎土から秋間窯跡群製と見られるが、他の瓦片も胎土中に Fe_2O_3 と SiO_2 の混合物の細粒を多く含むことから、主体供給窯は秋間窯跡群と考えられる。しかし熊野堂12住-4のみは胎土中に石英、長石の大粒な鉱物粒が挟雑しているため、同窯跡群で焼造されたかは疑問である。

③ 出土瓦をめぐる

両遺跡における瓦は再利用によるものであった。周辺地域の古瓦散布地は井野川をはさんで当遺跡と対峙する位置に高崎市大八木町麻通寺遺跡、熊野堂遺跡第Ⅲ地区の北東に隣接し群馬町福島に存在する熊野堂古瓦散布地がある。ともに、散布量は多くなく、瓦の供給が単一窯跡群を主体とする単純な造瓦体制であったと考えられることから、民的な色彩の強い小仏堂あるいは瓦葺施設の存在を想定することができる。両遺跡の場合は近接して熊野堂古瓦散布地があるため、両遺跡出土瓦は、その場所からの搬入と考えられる。再利用された瓦のうち年代的に古いのは、雨壺Ⅱ区23号住の例で9世紀後半代があたり、瓦の主体的年代の9世紀前半と半世紀前後のひらきしかない。このことは少なくとも瓦葺建物の掌握者に当たる人々が継続して存在した可能性があり、また両遺跡における集落の存続が9世紀代を通じて存在することも考え合わせれば、瓦葺建物の掌握者と両遺跡における9世紀代の住居を営んだ人々の間に直接的な関連が生じ得よう。ここに熊野堂・雨壺遺跡の住居址に起居した人々の性格の一端が現れていると推考される。

注 1 佐原真：「平瓦種別作り」『考古学雑誌 第58巻2号』、1972

2 井上唯雄・大江正行：『上野国分寺跡地域の調査』(群馬町教育委員会)、1975

3 花岡統一：「瓦の胎土分析について」『山王南寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会)、1982に分析結果がある。

4 『群馬歴史考古同人会』『土器部会資料 1』、1983

5 大江正行・中沢悟：『シンポジウム 9世紀代の瓦と須恵器』(立正大学)、1982

(4) 出土置きカマド・甕について

雨壺遺跡Ⅱ区25号住のカマドから、合計5点の土製品片(P192, 3・第17L, 2図 25住-1~3・5・6)が出土している。本土製品の①器壁厚い、②口径大きい、③一對以上の水平把手を有す、④紐作り成形、⑤調整粗雑、⑥酸化炭焼成、⑦裏面を中心に2次焼成を受ける、との諸特徴から考えるならば、土製の置きカマド(カラカマド)の一部である、と考えることが最も妥当性をおぼる。

置きカマドは、5世紀後半に朝鮮半島から渡来人によって持たされた炊飯用具で、主に畿内地方を中心に後期古墳の副葬品そして古代(奈良・平安時代)において炊飯祭祀用具として広く出土例がある。「延喜式」には、「韓甕」の名で祭祀用具として記載されている。7世紀代の築造とされる新羅慶州の羅橋池の出土品

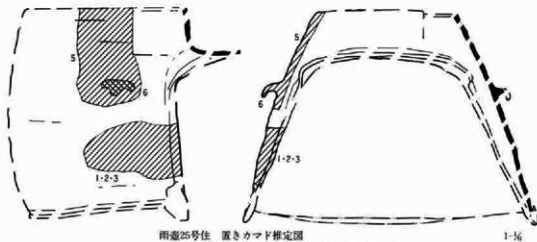
にも小形のものが見られる。

第297図-2は、大阪市難波宮下層竪穴出土例で、甗・甗と共に3種一組になっている。東国における出土例は少く、管見では、神奈川県平塚市の四ノ宮下ノ郷遺跡他4例、山梨県東山梨郡勝沼町大切遺跡他4例に見られ、本県では、生原飯森遺跡(群馬郡箕郷町)の8世紀の住居址より1例見られる。(田口一郎氏ご教示) 本遺跡出土各片を大阪府羽曳野市東飯田遺跡出土例の実測図に基づいて想定したのが、第297図-1である。ただし把手の位置は、25住-5より考えれば、かなり上に付くと思われる。

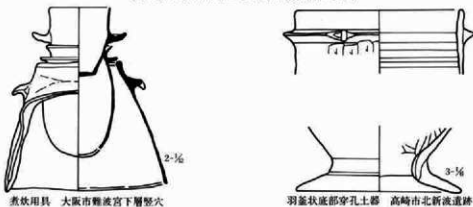
25号住の張り出し部分とも想定できる26号住覆土中からは、大形甗(P193・第172図26住-1)底部片が出土している。断定はできないが、置きカマドと共に使用された可能性もありうる。器形はかなり異なるが、雨釜IV区46号住からも甗と考えられる土器が出土している。(P217・第199図46住-8)

26住-1は、前橋市荒砥上川久保遺跡出土例、46住-1は、高崎市北新波遺跡(本遺跡の西北西2.5km)出土の羽釜状底部穿孔土器に類似が認められる。後者の報告では、この種の甗は、上部に羽釜状の脚があり、脚に小孔を持つとしている。本遺跡では、そのような破片は確認できなかった。(坂井)

- 注 1 菅原正明：「畿内における土釜の製作と流通」、『奈良国立文化財研究所三十年記念論文集，文化財論叢』，同朋社，1982
 2 松橋健：「古代宮廷職考」、『古代文化』第25巻2・3号，1961
 3 韓国国立中央博物館：『羅鴨池』，1980には「土製風爐」として高19.5cm 口径30.2cmの置きカマド(把手なし)が見られる。
 4 菅原文献より引用
 5 湘南砂丘研究会：「四之宮下ノ郷調査概報」No.1・2，1980・81，中原上宿遺跡調査班：「中原上宿」，1981
 6 山梨県教育委員会：「古代甲斐国の考古学調査(続編)」，1975，同左：「大切遺跡発掘調査報告書」，1977
 7 大阪府教育委員会：「東飯田遺跡—1979年度第四区の調査—」，1981
 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団：「荒砥上川久保遺跡」(近刊)
 9 高崎市教育委員会：「北新波遺跡」，高崎市文化財調査報告書第33集，1982，本書は同種土器の集成を行っている。



雨釜25号住 置きカマド推定図
(大阪府羽曳野市東飯田遺跡出土例実測図による)



煮炊用具 大阪市難波宮下層竪穴

羽釜状底部穿孔土器 高崎市北新波遺跡

第297図 他遺跡出土置きカマド・甗

第5節 中世館址遺構群の性格について

山崎 一

館址の形状

熊野堂遺跡の発掘調査では、大部分中世遺物と思われるものを伴う堀址が検出されたが、道路建設事前の緊急調査であって、対象が幅15m程に限定されていて、同じような条件の他の例と同様、遺構全面の形状推定が極めて困難であった。

堀の形状と伴出遺物によって、これは中世環濠遺構の一部と認定して誤りあるまいが、20m余りへだてた二筋の堀は、対向する部分が、平行に近い走向を示さず、28°程北に向って開くことから、一応両者を別々の遺構として考察してみた。

その場合第14号空堀（溝でもよい）を東面とする仮定環濠遺構の西面空堀か、南面・北面の空堀を検出する必要がある。ところが、本調査の西の限界までの間には西面堀址が発見されず、その西端で交わる上越新幹線敷地の別調査でも、南堀・北堀を検出することができなかった。従って、この仮定環濠遺構は存在しないことが明らかとなった。

これにより、第14号空堀は、第5・6号空堀の一部とする環濠遺構の外堀を構成するか、又はそれとは無関係に、南北方向にのびる用途不明の空堀であるかということになる。

次の問題はこここの環濠遺構の形であるが、それを推定する地形上の手がかりとしては、東側では唐沢川に猿谷川が合流し、東岸を削って半円弧を画いて弯曲、高さ3mの急崖を形成するので、西岸の遺構側ではそれより緩傾斜であったということ以外には全くなかったと言っておく。

峰名山裾野の末端部であるから、西北から東南に向って40分の1の傾斜を示す緩斜地で、108.5mの等高線が第5・6号空堀の接点から北18m附近（384番地と386番地との境）で、直角に近い角度をとって2回屈折すること、調査地南限から30m南（386番地と389番地附近）に東西方向をとる微崖所が東西にのびるのが、変化といえよう。この二つは居館址の堀址が残した大切な遺跡なのである。

それ故、館址推定に利用できるのは、現存の道路と、100年程前に設定された地籍の境界線（地境と略称する）だけということになる。もともとこの地境は明治になって図面に明示されたのではあるが、それ以前、江戸時代、場所によっては中世からの所有地の境界であったから、中世遺構との関連も充分考えることができるのである。道路もまた、中世・近世を通じあまり変化を見せず、100年程以前から加速度的に現代の大変革期を迎えたもので、古い道路程、旧状推定に役立てられる。

ところがここでは、道路と地境との関係を検討すると、道路を横断してつづく地境が何か所も見られ、殊に兩空堀から西微北に向かう道は、新道旧道とも、同一地番を分析していて、最も新しいものと判断され、道路より、それに先行する地境を、最も有用な資料としなければならないと理解される。

この附近の地境の傾向は、地形の傾斜とは若干異なり、西北微北から東南微南に向って引かれた線が主導的で、東西方向のものは、僅かに西北にふれる程度で、最も古いと思われる東南—西北の道路はこの傾向にならって屈折しつつ走っている。第14号空堀がこの道に並行しており、居館址遺構が、この道路から東に限られている点は見のがすことができない。

地籍図で先づ目を惹かれるのは、386番地が他に比較して異常に大きいことであろう。東西65m、南北は85mに及び、面積は周囲の10地番の平均に対し、5倍半に達している。このような地籍に特殊な遺跡の覆された

例は甚だ多く、遺跡模索の目安となる。

これにより作図した環壕遺構は別図のように、内郭は東西45m、南北40m程と推定され、第4号空堀を含む外郭を伴った全遺跡は、東西90m、南北70m程となり、矢中七騎の大沢屋敷、北新波の若、玉村の茂木屋敷と同じ程の規模の、中世環壕遺構中では小型のものであったと思われる。

その形式は二重堀居館（内堀・外堀の間隔が土居数の幅だけで、外郭のないもの）ではなく、内外2郭をもつ複郭であった。

内堀の東端が唐沢川に向って直達せず、末端が南に向う傾向を示しているから、内堀は東面にもあって、完全な田堀になっていたと推定する。これは、唐沢川の要害が不充分で、東面を川岸に依託することができないからである。この堀の東北部に「歪み」（屈曲）が見られるのは、地形なりに曲げたか、或は鬼門除けが意識されていたかも知れない。

南面に「折」があったと考えたのは、386番地の地境によったもので、直線であったかも知れない。「折」があったとすれば、内郭の出入口（門）は、その西側に南に向って開いていたと思われる。外郭の正門も南面であろうが、西面・北面にも出入口をもっていたかも知れない。

遺構の観察

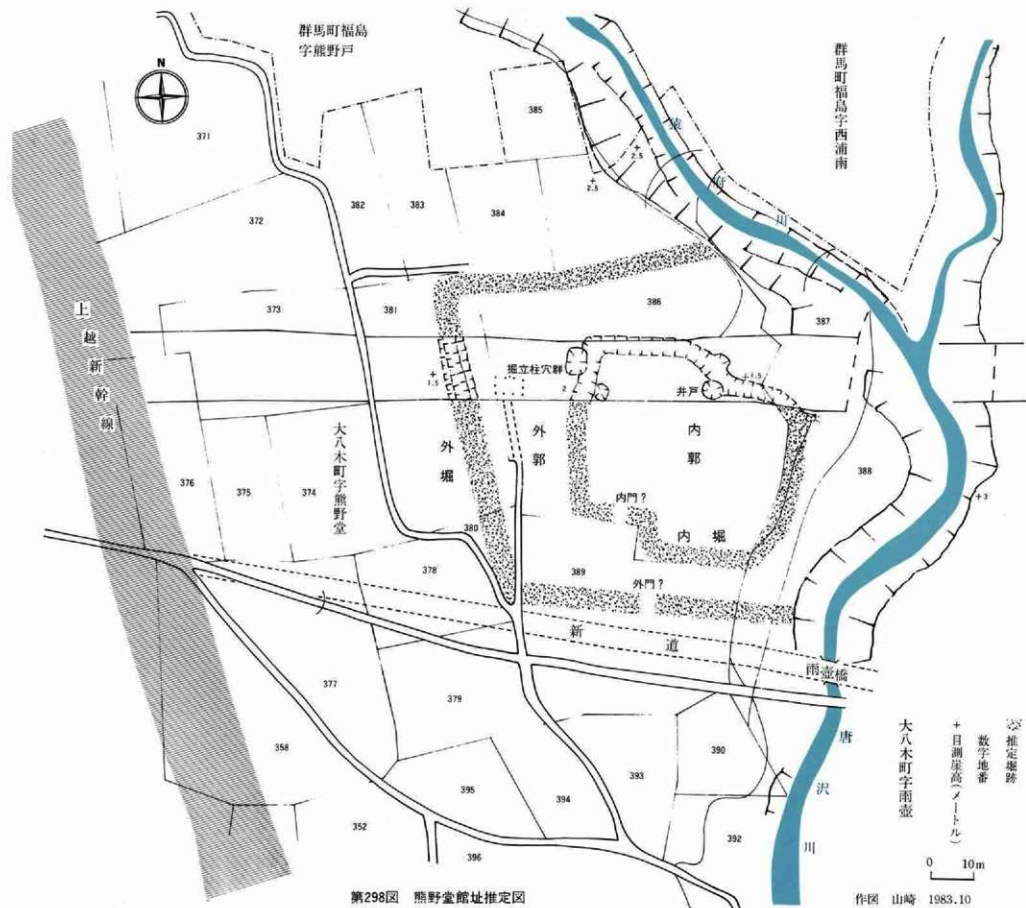
堀の余土は内側に盛り上げて土居を作るのが通常のやり方だが、この空堀の余土を全部土居に使った場合は、土居数の幅5m、高さ2mの高土居となった筈であるが、第1号井戸址やピット群の分布を見ると、数幅5mの土居はあり得ないこととなり、余土の半分は郭内に均らし、第1号井戸址を除いた堀ぎわに高さ1m程の低土居が築かれていたのであろうと考えられる。1号井戸址から10号溝までの間の堀ぎわにピットのないことがそれを推測させる。第10号溝から西面にわたるピット列は、土居を貫いて地山に達したものである。櫓或は櫓の柱は、引き倒されるのを防ぐため1m以上埋め込まねばならない事による。柱穴の間隔から、この土居上に建てられたのは、櫓ではなく塀であったと推定する。

第14号空堀は三段堀に見えるが、通例によれば、下段だけの二段堀である。このように堀の側斜面に、テラス状の部分のある例は稀ではないが、空堀でも水堀りでも、土砂揚げに、その部分に丸太を渡し並べ、もっこを引き上げる足場にしたものと考えられる。鎌ともっただけによる作業であるから、尚さらそれが必要であろう。世良田長楽寺南側に発掘された堀のように底の狭い藁研堀では、その必要がよく理解できる。

同じ空堀内側の上段テラスの一部に、堀に平行する小溝が認められたが、これもよく見られるもので、目的は、土居から流れ落ちる雨水を一度受けて、一定の場所まで流して堀に入れ、堀の浅くなるのを防ぐためのものだと いわれる。しかし、八崎城新郭堀では、その溝が石と粘土で被われ暗渠になっていた。このような例もあるので、その目的については、充分研究する要がある。

第6号空堀の内側に半ばかかって第1号井戸址、堀底に第2号井戸址が掘られているが、このような例も大胡城その他に認められ、深く掘り込む作業を軽減するためである事勿論で、二つとも唐沢川の近くにあるのは、川から浸透して濾過された水を汲み上げるためで、新田金山城の日の池・月の池周辺や、片岡根小屋城の水堀の近くに井戸跡の見られるのと同一であろう。

内堀外側にある二つの堅穴状遺構は特に注意を惹くもので、空堀に向って開口する土室状横穴であったらうという意見は肯定できるが、堀の深さ（2m程）から考えると、天井の高さは、1mをあまり超えることはできないであろうと思われる点や、四すみがちんとできすぎている点、及び使用目的につき理解しきれない点など疑問がのこる。貯蔵施設ならば、何か証跡が認められそうなものである。



第298図 熊野堂館址推定図

作図 山崎 1983.10

このような附帯施設は、外堀には存在しないであろう。

内堀・外堀とも空堀であることは、これら各種の構造物が随伴することによっても明らかで、各堀とも底に幅1m程の平らな面をもつ、所謂、箱形堀(葉研堀に対してそう呼ぶので、井形堀という方が適切。尚、底が弧状断面の腕形堀もある。)で、通路に用いられていたことは明らかだが、堀底への下り口はこの発掘範囲では発見されていない(堀底に下るには、女堀に見られた階段や、斜道によっていた筈)。

館址立地の状況

館址は大八木町字熊野堂にあるが、北につづく猿府川兩岸も群馬町福島字熊野堂で、この地名は、大八木福島の現境界決定以前から存在したと思われる。また南側には字下熊之平があり、井野川の旧河道は、両地番の西から南を廻っていたのである。下熊野平は熊野の下の平地の意で、地形もよくそれに合っている。

大八木地区は史料の乏しい所で、中世文書は皆無であるが、ただ文久の頃(1862頃)書写されたと思われる「当村正伝記」中に

1. 熊野三社大権現引(越元和九年立。 1. 熊野堂ニ地神石宮ハ加治七立。

とあり、また、寛文六年(1666)3月15日の検地の「除地覚」に

大日	下畑老反歩	右同断(何ノ縄ニも除く)	八幡免	一ノ祢宜
課方廻り	下畑老反七畝歩	右同断	課方免	主計
同所	中田式反十四歩	右同断	同免	同人
	屋敷式段八歩	右同断	伊セ免	神子
伊勢廻り	下島七畝歩	右同断	同免	同人
	寺内式反七畝歩			融邊寺
北くぼ	下島老反廿四歩	右同断		同寺
熊の廻り	下島式反六畝歩	右同断		同寺
大日	下島三反老畝九歩		大日免	同寺

とあって、熊野廻りは現熊野堂、北くぼが下熊之平に該当し、当時は熊野堂、下熊野平の地名がなく、熊野三社跡があったことが推定される。或は、内郭のピット中には、それに関連するものが残っているのかも知れない。居館址に神社や仏字が建った例が多いからである。

熊野三社は元和9年(1623)、他に移り、加治七という者が地神の石宮を建てたということになる。

この地方における中世環濠遺構は別図(第300図)のように分布しているが、これらのうちには、一部分又は大部分が現存しているもの、近年破壊され消滅したもの、発掘調査で発見確認されたものを含んでいるが、今後、発掘調査その他の機会に、発見追加されるものが多数であろうと思われる。

熊野堂居館のように、空堀を素質として築かれているのは、井野川・鳥川に近接しているものだけで、他は水堀をめぐらす遺構である。それらの中には、排水・灌漑・防水の目的を併せたとと思われる例もあり、邑楽郡や、広瀬川・利根川中間地区では特にその傾向が強く、環濠が単に、防衛や権威誇示だけに關した構築物ではないことが知られる。

本図だけでは尚不十分だが、矢中・中居・日高・三ツ寺・浜川等に頻度の高い所が認められ、今後、発掘調査の機会増加に伴い、環濠遺構の形態、出土品の種類、用途等の判明と共に、中世社会の実態が逐次明らかにされていくことであろう。

第163表 周辺城館址発掘調査一覧表

遺跡名	番号	所在地	調査主体	調査年	検出遺構	検出遺物	報告書等
寺ノ内館址	13	高崎市浜川町	高崎市教委	1977～78	外堀、中堀、内堀、土塁、掘立、井戸、土塚墓、溝	銅銭、土師質土器、内耳鍋、石臼、陶磁器、板碑、五輪塔、鉄釘	『寺ノ内遺跡』, 1979
矢島館址	8	高崎市浜川町	同上	1978～79	外堀、内堀、掘立、塹穴、井戸、土塚	銅銭、土師質土器、内耳鍋、石臼、陶磁器、板碑、五輪塔、宝篋印塔	『矢島遺跡・御布呂遺跡』, 1979 『矢島館発掘』, 『上州路』No.61, 1979
元島名城址	2	高崎市元島名町	同上	1978～79	堀、掘立、礎石建物、土塚、井戸	銅銭、土師質土器、内耳鍋、紀年板碑	『元島名城址』, 1979
根小屋城址	—	高崎市山名町	同上	1982	石積土層		『根小屋城址』, 1983
箕輪城址	14	群馬郡箕輪町	箕輪町教委	1982	石垣、井戸、土塚、土塁	陶磁器、土師質土器、五輪塔、宝篋印塔等	発掘調査報告未刊 県教委: 『箕輪城跡』, 1982
元島名館址	2	高崎市元島名町	県教委	1976	堀、掘立、井戸	陶磁器	『関越道報Ⅳ』, 1978
中尾城址?	42	高崎市中尾町	同上	1977	堀、掘立、井戸、土塚、塹穴	陶磁器、軟質陶器、土師質土器	『関越道報Ⅴ』, 1979
金尾城址	23	高崎市中尾町 前橋市島羽町	同上	1976～77	堀		『中尾(遺構編)』, 1983
長者屋敷館址	—	高崎山下佐野町	県教委	1976～79	堀、掘立、塹穴、井戸、土塚墓	内耳鍋、板碑	『上越新幹線報Ⅳ』, 1978 他に備蓄出土の館址あり。
融通寺館址	25	高崎市大八木町	県教委 県埋文事業団	1975～76 1983	堀、土塚墓、火葬墓、馬墓、井戸、土塁	銅銭、五輪塔、土師質土器、板碑	『上越新幹線報Ⅱ』, 1975 『年報2』, 1983
同道館址	82	群馬郡群馬町	県埋文事業団	1978～79	堀、掘立、井戸、土塚墓	銅銭、内耳鍋、石臼、陶磁器、板碑	『同道遺跡』, 1984
木部城址	—	高崎市木部町	同上	1980	堀、土塁、土塚	銅銭、内耳鍋、石臼、陶磁器、土師質土器	『上越新幹線報Ⅲ』, 1976
三ツ目館址	24	群馬郡群馬町	同上	1981	堀、土塚墓	銅銭、内耳鍋、五輪塔	『年報1』, 1982
島羽館址	79	前橋市島羽町	同上	1981～82	堀、井戸、土塚、土塚墓、竈治址	銅銭、板碑、宝篋印塔、石臼、鋤型等	『年報1』, 1982
井出村東遺跡	39	群馬郡群馬町	井出村東遺跡調査会	1980～81	井戸、地下式横穴墓、火葬土塚	紀年板碑、土師質土器	『井出村東遺跡』, 1983

注: 本調査向遺跡周辺の高崎市、群馬郡群馬町、同業郷町、前橋市西部(旧群馬郡を中心とする地域)における中世の城館址の発掘調査事例を列記した。ここに収録したのは、何らかの形で報告が公開されており、報告者が中世城館址と見なしたものに限定している。なお、最後の井出村東遺跡は、城館址とは報告されていないが、融通寺館址と共に本調査向遺跡に最も近く、紀年板碑等の重要遺物を出したため併記した。また、遺跡番号は、8頁第3図の番号に対応している。

附録

熊野堂遺跡第Ⅲ地区遺構索引

	時代	遺構図	本文	遺物図	観察表	写真	時代	遺構図	本文	遺物図	観察表	写真
竪穴住居址							14号溝	中世	P 89	90	91	20
1号住	古代	P 60	61	61	62	12	15号溝	古代	P 75	76	74	76'
2号住	古墳時代	P 32	32	34	33	7	16号溝	古墳時代	P 44	45	46	46'
3号住	古墳時代	P 39	39	40	41	6						
4号住	古代	P 48	48	49	49	2	合計14条					
5号住	弥生時代	P 19	19	20	21	2						
6号住	古墳時代	P 35	36	38	37	6	土壇					
8号住	弥生時代	P 22	23	22	23	3	1号土壇	時期不明	P 44	45		
9号住	古墳時代	P 28	28	30	31	4	2号土壇	時期不明	P 44	45		
10号住	古代	P 66	66	67	67	11	3号土壇	時期不明	P 44	46		
11号住	古代	P 50	50	50	50	10	5号土壇	時期不明	P 26	26		
12号住	古代	P 63	63	64	65	14	6号土壇	古墳時代	P 34	34	34	34
13号住	古代	P 51	52	52	52	9	7号土壇	時期不明	P 28	26		
14号住	古代	P 53	54	55	54	10	8号土壇	時期不明	P 19	20		
15号住	古代	P 55	56	56	57	9	9号土壇	時期不明	P 95	95		
16号住	古代	P 58	59	60	59	10	11号土壇	弥生時代	P 25	25	25	26
17号住	時期不明	P 53	54				12号土壇	時期不明	P 70	71		
18号住	時期不明	P 94	94				17号土壇	時期不明	P 77			
19号住	古墳時代	P 42	42	43	43	7						
20号住	時期不明	P 94	94				合計11基					
21号住	弥生時代	P 24	24	25	25	2						
22号住	時期不明	P 96	95				井戸址					
合計21軒							1号井戸	中世	P 80	85	86	87
							2号井戸	中世	P 80	85		15
							3号井戸	時期不明	P 50	51		15
竪立柱遺構址							合計3基					
1号竪立	中世	P 92	92	91	91	20						
2号竪立	古代	P 68	69	69	69		竪穴状遺構					
3号竪立	古代	P 68	69				1号竪穴	中世	P 86	79		15
4号竪立	時期不明	P 97	97				2号竪穴	中世	P 80	79	86	87
5号竪立	古代	P 70	71	71	72	13	3号竪穴	中世	P 80	79		15
6号竪立	古代	P 70	71	71	72	13	4号竪穴	中世	P 80	79		15
7号竪立	古代	P 73	73	74	74	13	5号竪穴	中世	P 80	79		15
8号竪立	時期不明	P 98	98				合計5基					
9号竪立	時期不明	P 99	99									
柱穴列	古代	P 70	71	72	72		水田址					
合計10棟							古代	P 77	77			
ピット群												
2号 pit 群	中世	P 80	85	86	87	15	合計1面					
3号 pit 群	中世	P 80	85	86	87	15						
合計2群												
溝												
3号溝	時期不明	P 101	100									
4号溝	時期不明	P 101	100									
5号溝	中世	P 80	79	86	87	15						
6号溝	中世	P 80	79	86	87	15						
7号溝	古墳時代	P 44	45	46	46							
8号溝	時期不明	P 75	76									
9号溝	古代	P 75	76	74	76							
10号溝	中世	P 80	84			15						
11号溝	中世	P 80	84			15						
12号溝	中世	P 80	84			15						
13号溝	中世	P 80	84			15						

雨壺遺跡遺構索引 (1)

壘穴住居址	時代	遺構圖	本文	遺物圖	觀察表	写真	時代	遺構圖	本文	遺物圖	觀察表	写真
1号住	古代	P 157	157	158	158	41	58号住	古代	P 230	229	231	231 55
2号住	古代	P 159	159	160	161	41	59号住	古代	P 232	232	233	233 55
3号住	古代	P 162	162	163	163		60号住	古代	P 234	235	235	235 57
4号住	古代	P 164	164	165	165	42	61号住	古墳時代	P 150	150	150	151 39
5号住	時期不明	P 280	280				62号住	縄文時代	P 113	114	114	116 27
6号住	古代	P 164	164	165	165		63号住	古代	P 232	233	234	234 55
7号住	古代	P 166	166	167	168	42	64号住	古代	P 235	235	236	236 55
8号住	古代	P 166	166	167	168		65号住	時期不明	P 224	225		
10号住	古代	P 169	168	170	171	42	66号住	古代	P 216	217	220	221 57
11号住	古代	P 172	171	173	173		67号住	弥生時代	P 124	124	125	126 29
12号住	時期不明	P 172	171				68号住	古代	P 236	236	237	237 57
13号住	古代	P 174	174	175	175	43	69号住	弥生時代	P 134	134	135	135
14号住	古代	P 176	176	177	178	44	71号住	弥生時代	P 137	136	136	138 33
15号住	古代	P 176	176	177	178		72号住	時期不明	P 132	132		
16号住	時期不明	P 176	176				73号住	時期不明	P 242	242		
17号住	古代	P 179	179	179	179		74号住	古代	P 239	238	240	241 56
18号住	時期不明	P 280	280				75号住	古代	P 242	242	243	243 55
19号住	古代	P 180	180	181	181	44	76号住	古代	P 244	243	245	245 58
20号住	時期不明	P 281	281				77号住	古代	P 244	243	245	245 58
21号住	時期不明	P 281	282				78号住	古代	P 239	238	240	241 56
22号住	縄文時代	P 110	111	112	111	26	79号住	古代	P 247	246	246	246 56
23号住	古代	P 182	183	183	183	45	80号住	古墳時代	P 153	155	153	153 40
24号住	古代	P 189	189	190	190	48	81号住	古代	P 248	248	248	249 57
25号住	古代	P 191	191	192	193	47	82号住	時期不明	P 222	222		
26号住	古代	P 191	191	192	193	47	83号住	縄文時代	P 117	117	118	117
27号住	古代	P 194	194	195	196	50	84号住	弥生時代	P 139	140	140	141 34
28号住	古代	P 194	194	195	196	50	85号住	古墳時代	P 152	151	151	153 40
29号住	古代	P 197	197	198	200	49	86号住	弥生時代	P 142	141	141	141 35
30号住	古代	P 202	202	202	203	49	87号住	時期不明	P 283	283		
31号住	古代	P 203	203	204	204		88号住	古代	P 247	246	246	246 57
33号住	古代	P 205	205	204	204	50	89号住	時期不明	P 284	284		
34号住	古代	P 172	171	173	173	44	90号住	弥生時代	P 143	143	145	146 36
35号住	古代	P 206	206	207	207	51						
36号住	古代	P 206	205	207	207	52	合計87軒					
37号住	古代	P 208	208	209	210	52						
38号住	時期不明	P 211	211				不明遺構					
39号住	時期不明	P 282	282				弥生時代	P 147	147	148	147 35	
40号住	時期不明	P 212	212				合計1軒					
41号住	古代	P 212	212	213	213							
42号住	古代	P 213	213	213	214		獨立柱遺物址					
43号住	時期不明	P 283	282				1号獨立	時期不明	P 285	284		59
44号住	古代	P 214	214	215	215	55	2号獨立	古代	P 250	249	249	249 59
45号住	古代	P 211	211	212	212		3号獨立	古代	P 251	252	252	251
46号住	古代	P 216	215	217	218	54	4号獨立	古代	P 252	253	253	253
47号住	弥生時代	P 127	126	127	127	30	5号獨立	時期不明	P 286	285		60
48号住	弥生時代	P 128	128	128	129	30	6号獨立	古代	P 254	253	253	253 60
49号住	弥生時代	P 130	129	130	131	32	7号獨立	古代	P 255	254	256	256
50号住	古代	P 222	222	222	223	55	8号獨立	時期不明	P 286	287		
51号住	古代	P 224	224	225	225	57	9号獨立	時期不明	P 287	287		
52号住	古代	P 226	226	226	226		柱穴列	時期不明	P 292	292		
53号住	弥生時代	P 132	132	132	132		合計10棟					
54号住	古代	P 223	223	223	223	53						
55号住	古代	P 227	226	228	229	53						
56号住	古代	P 227	227	228	229	53						
57号住	弥生時代	P 133	132	134	134	33						

雨壺遺跡遺構索引 (2)

ビット群						時代							
	時代	遺構図	本文	遺構図	観察表	写真		時代	遺構図	本文	遺構図	観察表	写真
1号ビット群	時期不明	P 120	121					25号土壇	時期不明	P 300	299		
2号ビット群	時期不明	P 292	292					26号土壇	時期不明	P 300	298		
合計2群								27号土壇	時期不明	P 130	129		
溝								28号土壇	縄文時代	P 122	122	122	122
1号溝	時期不明	P 293	294					29号土壇	時期不明	P 301	301		
2号溝	時期不明	P 293	294					30号土壇	時期不明	P 301	302		
3号溝	時期不明	P 296	297					31号土壇	時期不明	P 300	299		
4号溝	時期不明	P 154	155					32号土壇	時期不明	P 300	299		
5号溝	古墳時代	P 154	155	155	155			33号土壇	縄文時代	P 122	122	122	122
6号溝	時期不明	P 293	294					34号土壇	時期不明	P 301	302		
7号溝	古代	P 154	155	155	155			35号土壇	古代	P 276	277	278	278
8号溝	時期不明	P 296	297			64		36号土壇	時期不明	P 276	277		
9号溝	古代	P 257	258	259	260	66		37号土壇	古代	P 276	277	278	278
10号溝	古代	P 257	258	262	263	61		38号土壇	古代	P 276	277	278	278
11号溝	時期不明	P 257	259					39号土壇	時期不明	P 270	271		
12号溝	時期不明	P 295	294					40号土壇	時期不明	P 300	300		
13号溝	古代	P 265	266	267	268	65		41号土壇	時期不明	P 272	273		
14号溝	縄文時代	P 120	120	121	121			42号土壇	古代	P	245		
15号溝	時期不明	P 120	121					43号土壇	縄文時代	P 119	119	119	119
16号溝	古代	P 265	267	267	268			45号土壇	時期不明	P 191	191		
17号溝	時期不明	P 298	299			64		46号土壇	時期不明	P 303	303		
18号溝	時期不明	P 270	270					47号土壇	時期不明	P 296	297		
19号溝	時期不明	P 302	302					48号土壇	時期不明	P 300	299		
20号溝	古代	P 272	273	274	275	66		合計46基					
21号溝	古代	P 272	273	274	275	63		焼土					
23号溝	古代	P 270	270	271	271	66		1号焼土	古代	P 256	256	256	256
24号溝	古代	P 272	273	274	275	63		2号焼土	時期不明	P 169	168		
25号溝	時期不明	P 270	271					3号焼土	時期不明	P 295	295		
合計24条								合計3箇所					
土壇								壘穴状遺構					
1号土壇	時期不明	P 303	303					1号壘穴	時期不明	P 303	303		
2号土壇	時期不明	P 293	294					2号壘穴	縄文時代	P 119	119	119	119
3号土壇	時期不明	P 303	303					3号壘穴	弥生時代	P 135	136	135	136
4号土壇	時期不明	P 296	297					合計3基					
5号土壇	時期不明	P 296	297					井戸					
6号土壇	時期不明	P 296	297					1号井戸	時期不明	P 257	259		
7号土壇	時期不明	P 162	163					合計1基					
8号土壇	時期不明	P 164	165					道路状遺構					
9号土壇	時期不明	P 169	170					古代	P 272	271	274	275	63
10号土壇	時期不明	P 169	170					合計1本					
11号土壇	時期不明	P 250	251					配石遺構					
12号土壇	古代	P 176	176	177	178			時期不明	P 304	304		65	
13号土壇	時期不明	P 281	282					合計1基					
14号土壇	時期不明	P 120	121										
15号土壇	時期不明	P 197	197										
16号土壇	時期不明	P 265	268										
17号土壇	時期不明	P 265	267										
18号土壇	古代	P 265	268	269	269	65							
19号土壇	時期不明	P 301	301										
20号土壇	時期不明	P 276	277										
21号土壇	古代	P 276	277	278	278	66							
22号土壇	時期不明	P 211	212										
24号土壇	古代	P 230	230	230	231	57							

写真図版

熊野堂遺跡第Ⅲ地区 図版 1～21
雨壺遺跡 図版22～68



調査範囲西端より井野川低地を臨む



中央部東張り上がり状況



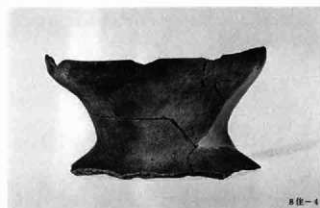
4・5・7号住居址重複状態（西より）



21号住居址掘り方（南より）



5号住居址出土遺物



8号住居址出土遺物



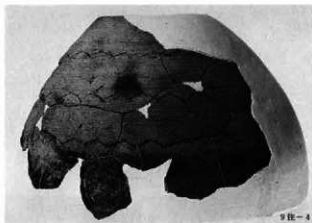
21号住居址出土遺物



9号住居址全景（東より）



9号住居址遺物出土状態



9号住居址出土遺物



6号住居址(西より)



3号住居址遺物出土状態



1位-9



2位-5



2位-6



2位-4

2号住居址出土遺物



6位-1



6位-2



6位-4



6位-5



6位-10



6位-15



6位-16

6号住居址出土遺物



3位-1



3位-7



3位-2



3位-6



3位-4



3位-8



3位-5



3位-9

3号住居址出土遺物



3位-12



5



19位-6

19号住居址出土遺物



4号住居址遺物出土状態(西より)



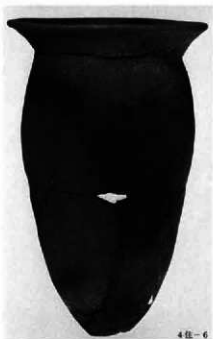
4号住居址南より遺物出土状態



13号住居址遺物出土状態



15号住居址カマド土層断面



4住-6



13住-4



16住-7



4住-3

4号住居址出土遺物



11住-1

11号住居址出土遺物



14住-2



14住-3



14住-1

14号住居址出土遺物



15住-5



15住-1



15住-3



15住-9



15住-4

15号住居址出土遺物



15住-8

16号住居址出土遺物



9・10号住居址重複状態（東より）

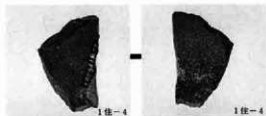


10号住居址カマド遺物出土状態



1号住居址出土遺物

1住-1



1住-4

1住-4



10住-1



10住-2



10住-3



10住-5

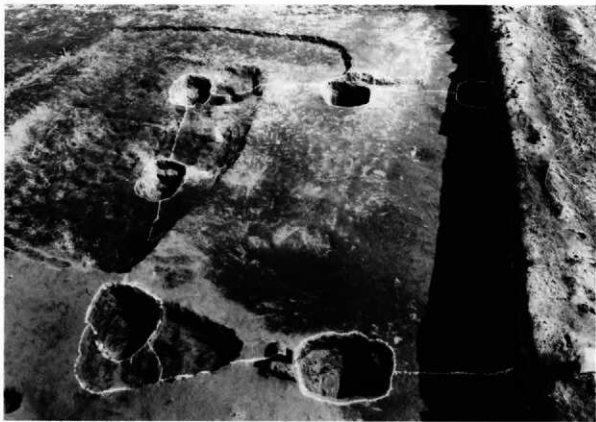
10号住居址出土遺物



浅間B軽石下水田址（北東より）



5・6号掘立柱建物址、柱穴列（南より）



7号掘立柱建物址（西より）



12住-4



12住-2



12住-2



12住-3



12住-1



12住-5



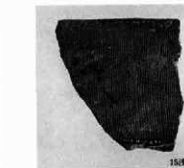
12住-7

12号住居址出土遺物

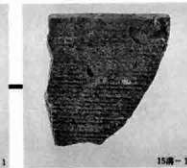


7号-2

7号掘立出土遺物



15号-1



15号-1

15号溝出土遺物



館址状遺構群（西より）



館址状遺構群（東より、手前は唐沢川）



5号溝と1号整穴状遺構(南より)



5号溝(北より)



2号ピット群と4号整穴状遺構（南東より）



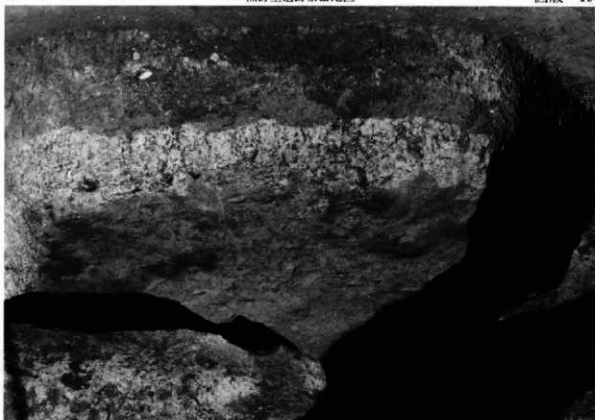
3号ピット群と3号整穴状遺構（南西より）



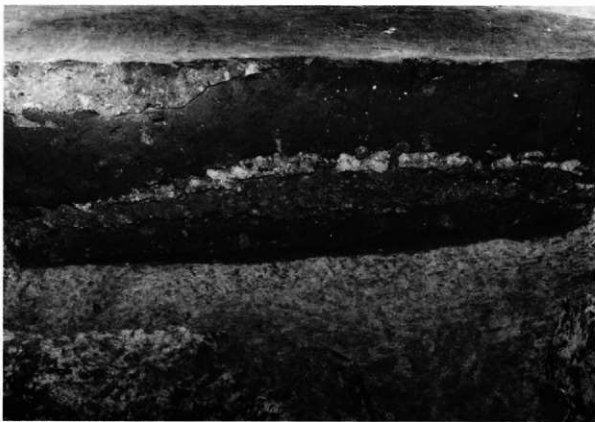
6号溝屈曲部（北西より、左は2号竪穴状遺構）



1号井戸址（西より）



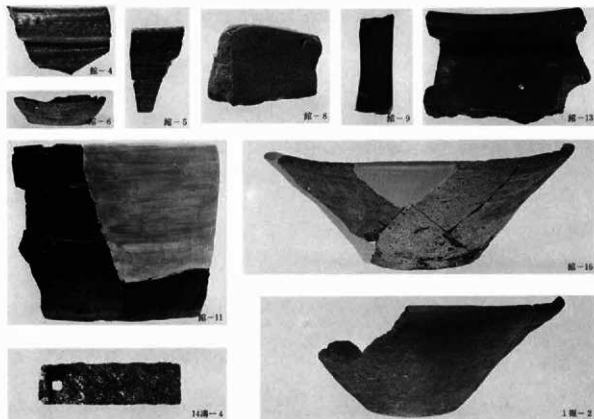
2号竪穴状遺構



2号竪穴状遺構土層堆積状態



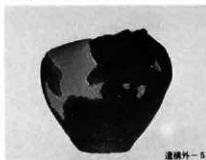
14号溝 (南より)



館址状遺構群及び中程遺構出土遺物



遺構外-9



遺構外-5



遺構外-8



遺構外-50



遺構外-19



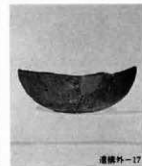
遺構外-3



遺構外-25



遺構外-24



遺構外-17



遺構外-37



遺構外-31



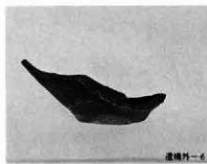
遺構外-42



遺構外-42



遺構外-48



遺構外-6



遺外-47



遺構外-38



熊野堂遺跡館址状遺構群（西）から臨む雨壺遺跡



III・IV区より西を臨む



I区全景（東より）



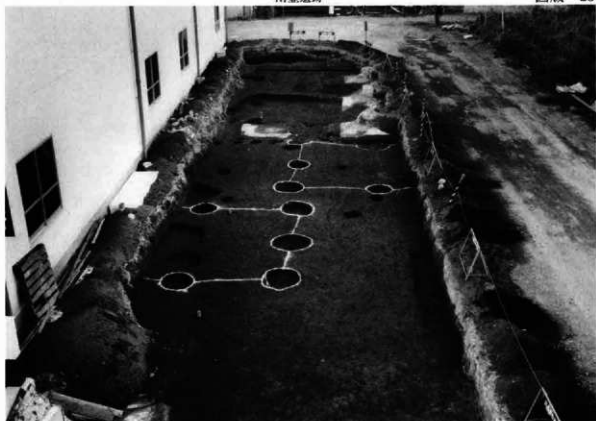
II区全景（西より）



Ⅲ～Ⅴ区全景（西より）



Ⅳ区全景（東より）



V区全貌 (東より)



調査風景



22号住居址全景



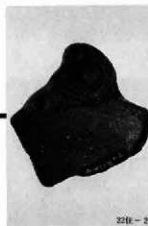
22号住居址遺物出土狀態



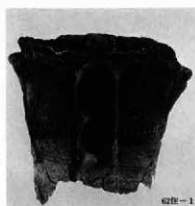
62号住居址全景（南東より）



62号住居址遺物出土状態



22号住居址出土遺物



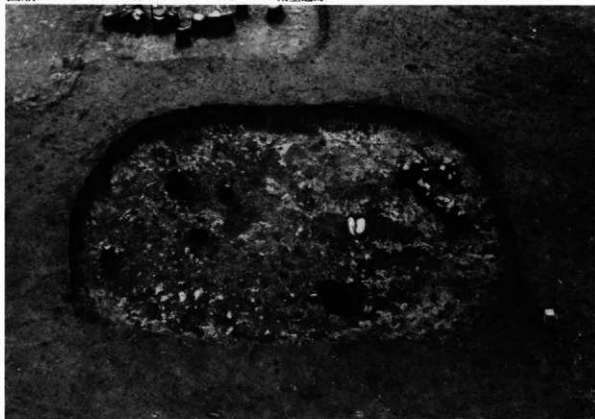
62号住居址出土遺物



67号住居址遺物出土状態（北東より）



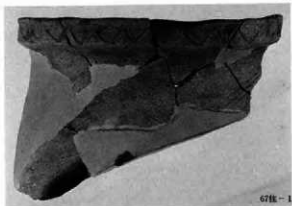
67号住居址遺物出土状態



47号住居址遺物出土状態（東より）



48号住居址遺物出土状態



67号住居址出土遺物



48号住居址出土遺物



49号住居址遺物出土状態（東より）



49号住居址 壺址



57号住居址（東より）



71号住居址全景（東より）



84号住居址全景(南より)



84号住居址遺物出土状態



49住-1



49住-3

49号住居址出土遺物



71住-3



69住-1



69住-2

69号住居址出土遺物



71住-1

71号住居址出土遺物



84住-1



84住-3



84住-5

84号住居址出土遺物



86住-1



86住-3



86住-5

86号住居址出土遺物



不明-1

不明遺構出土遺物



90号住居址全景（南西より）



90号住居址遺物出土状態



90号住居址遺物出土状態

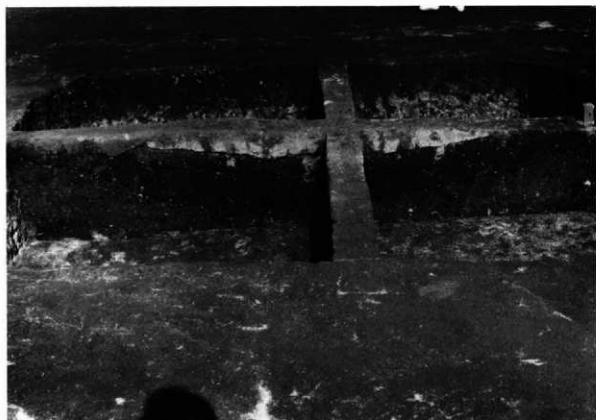


不明遺構遺物出土状態(第十四)





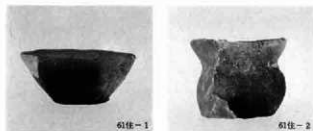
61号住居址全景（南より）



61号住居址土層横状態



85号住居址全景（北より）



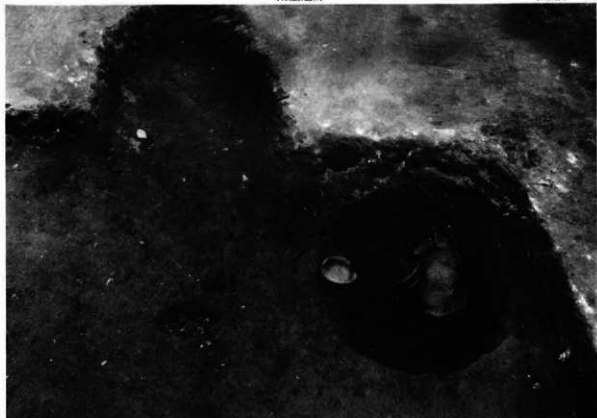
61号住居址出土遺物



85号住居址出土遺物



80号住居址出土遺物



1号住居址カマド附近



2号住居址遺物出土状態



1号住居址出土遺物

4号住居址出土遺物



2号住居址出土遺物



7号住居址出土遺物



10号住居址出土遺物



13号住居址遺物出土状態（西より）



13号住居址カマド及び貯蔵穴



34住-1



34住-1

34号住居址出土遺物



34住-3



14住-8

14住-9

14号住居址出土遺物



13住-1



13住-2



13住-3



13住-4



13住-6



13住-8

13号住居址出土遺物



19住-1



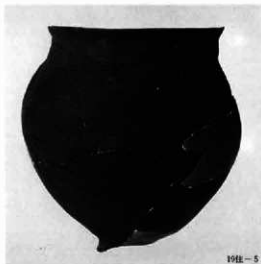
19住-1



19住-3



19住-2



19住-5

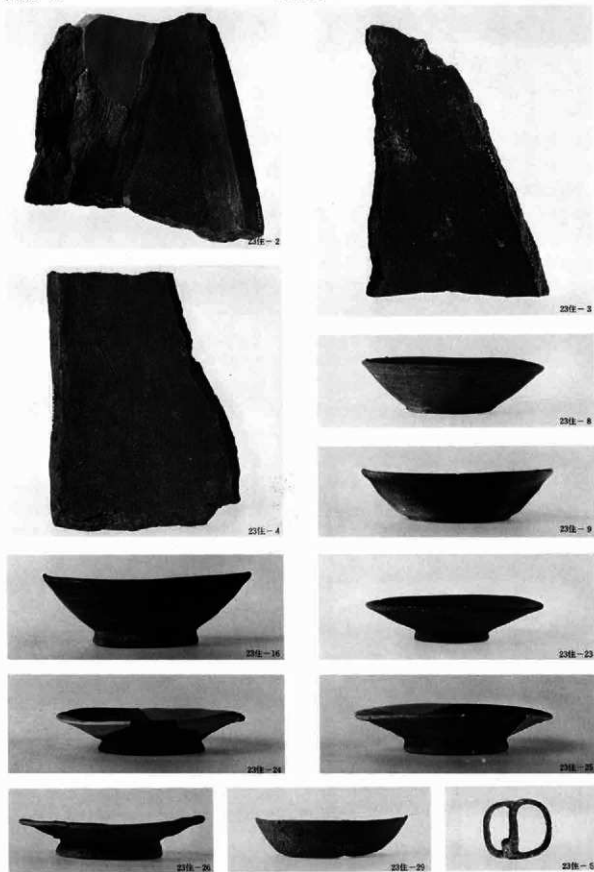
19号住居址出土遺物



23号住居址遺物出土状態(西より)



23号住居址カマド



23号住居址出土遺物



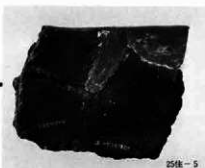
25・26号住居址遺物出土状態（西より）



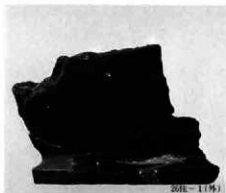
25号住居址カマド



24号住居址出土遺物



25号住居址出土遺物



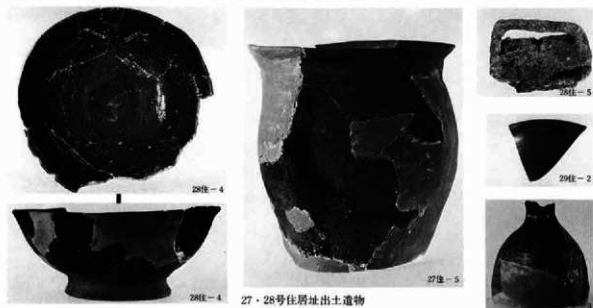
26号住居址出土遺物



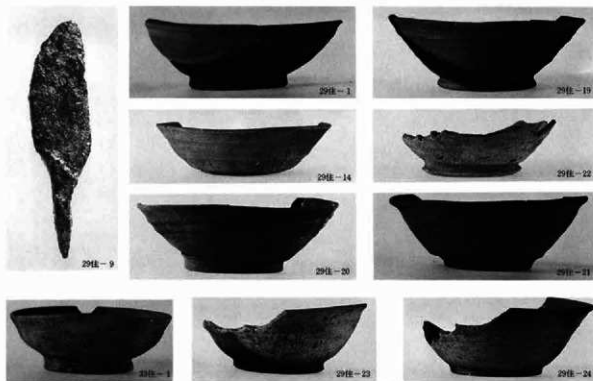
29・30号住居址遺物出土状態（西より）



29号住居址カマド



27・28号住居址出土遺物



33号住居址出土遺物

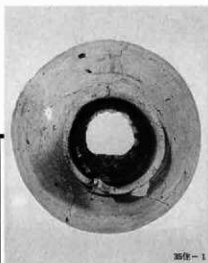
29号住居址出土遺物



35号住居址カマド



35住-1



35住-1



35住-4



35住-1



35住-2

35号住居址出土遺物



36号住居址カマド



37号住居址カマド



37住-1



37住-2



37住-3



37住-5



37住-4



37住-9



37住-12



37住-13



37住-12



37住-14

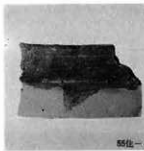
37号住居址出土遺物



54住-1



55住-1



55住-4

54号住居址出土遺物

55号住居址出土遺物



56住-1



56住-3



56住-4

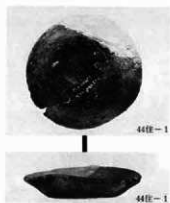
56号住居址出土遺物



46号住居址カマド



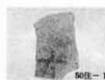
46号住居址貯蔵穴



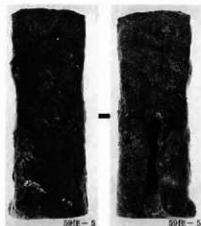
44号住居址出土遺物



46号住居址出土遺物



50号住居址出土遺物



59号住居址出土遺物



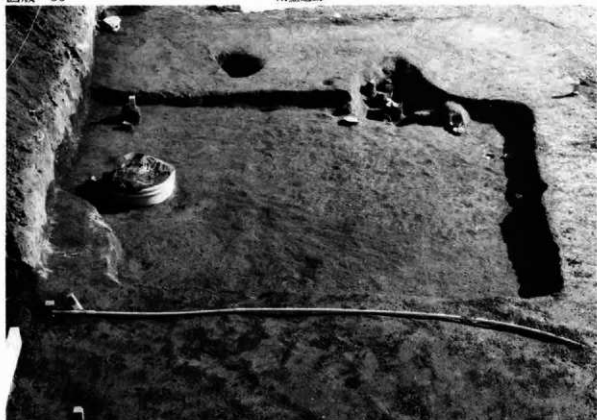
63号住居址出土遺物



58号住居址出土遺物



64号住居址出土遺物



74・78号住居址



74号住居址カマド



81住-1

51号住居址出土遺物



81住-2



24住-2



24住-1

24号土城出土遺物



60住-1

60号住居址出土遺物



66住-4



66住-1

66号住居址出土遺物



68住-1



68住-5



68住-7



68住-1

88号住居址出土遺物



74住-3



74住-4



68住-6

68号住居址出土遺物



74住-2



74住-8



81住-1



74住-1



74住-9



81住-2



74住-1



74住-10

81号住居址出土遺物

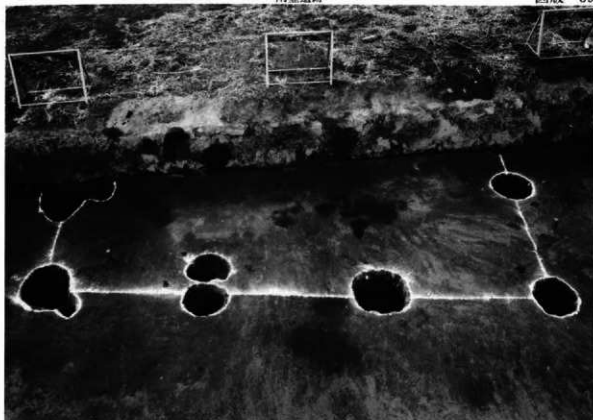
74号住居址出土遺物



77号住居址（西より）



77号住居址出土遺物



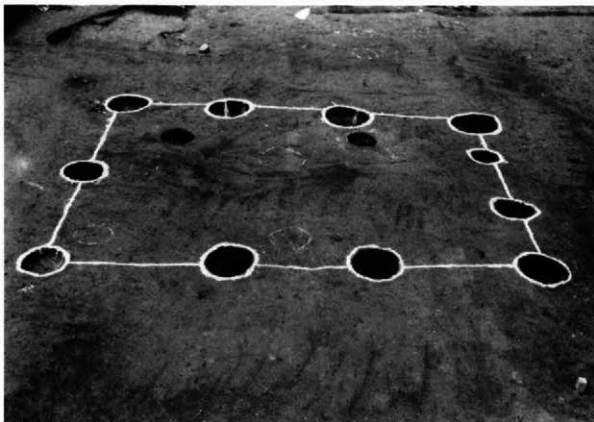
1号獨立柱建物址



2号獨立柱建物址



5号獨立柱建物址（西より）



6号獨立柱建物址（東より）



日守山古墳出土状態(南49)



10号溝遺物出土状態(南側)



10号溝出土遺物



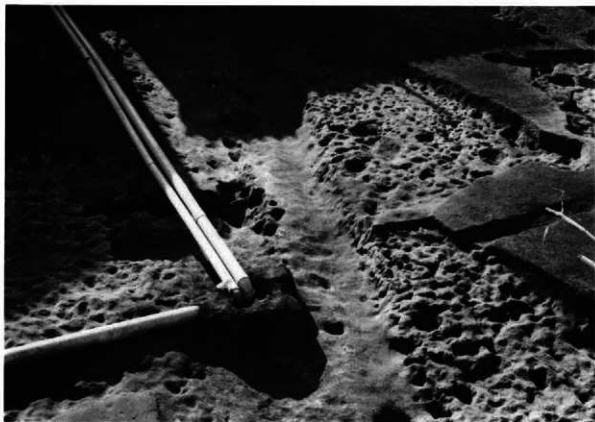
道路状遺構、21・24号溝（南より）



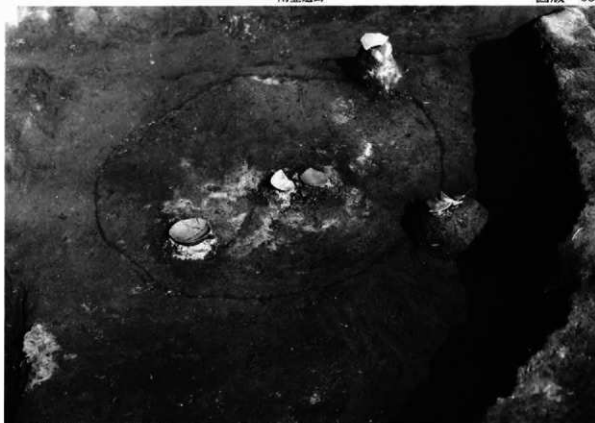
道路状遺構土層断面



8号溝北側土層断面



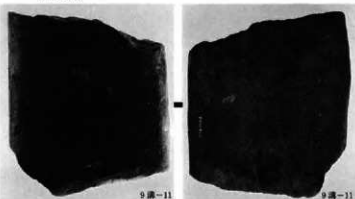
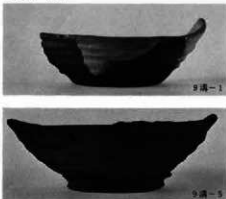
17号溝（北より）



18号土塚遺物出土状態（西より）



配石遺構（南より）



9号溝出土遺物



13号溝出土遺物



23号溝出土遺物



道坎状遺物出土遺物



1号坑出土遺物



20溝-2



20溝-2



18坑-1



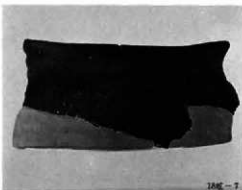
37坑-1



20号溝出土遺物



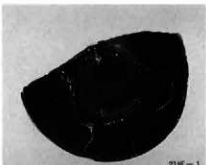
18坑-2



18号土坑出土遺物



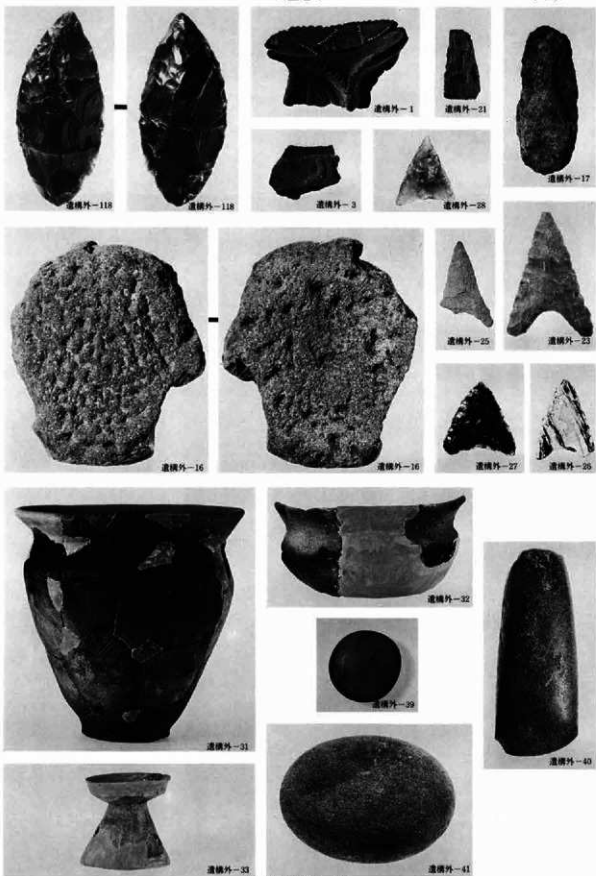
37坑-3



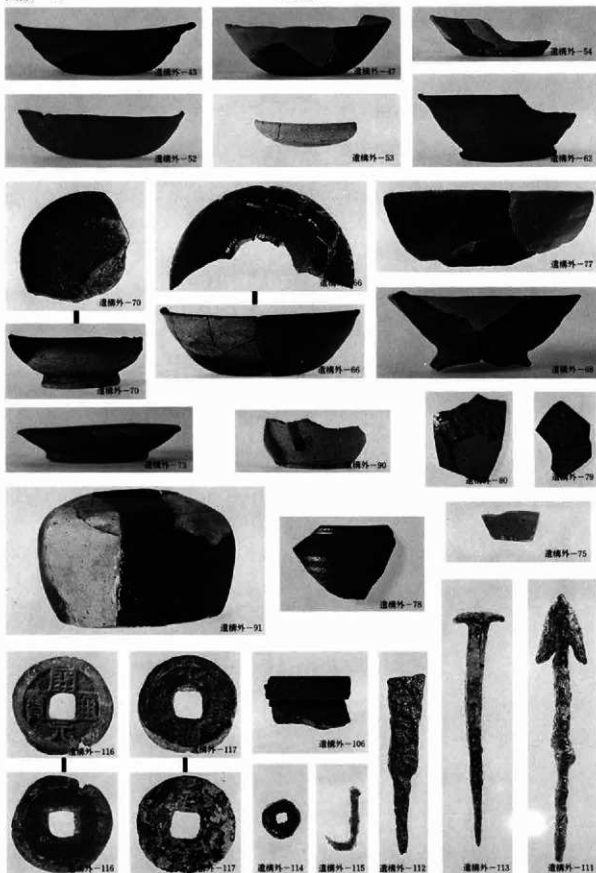
21坑-1



21号土坑出土遺物



遺構外出土遺物 (1)



遺構外出土遺物(2)

熊野堂遺跡 第三地区 雨壺遺跡

遺跡地本沢・高崎線改良に伴う
埋蔵文化財発見調査報告書

印刷 昭和59年2月20日

発行 昭和59年2月29日

編 集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下筋田784番地の2
電 話 (0279) 52-2511 (代表)

発 行 群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
勢多郡北橋村大字下筋田784番地の2
電 話 (0279) 52-2511 (代表)

印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社

柏木沢線(熊野堂Ⅲ、雨壺)正誤表

頁・行・種類	誤	正	頁・行・種類	誤	正
挿図目次第293図	金属器遺構外出土遺物図	遺構外出土金属器図	161頁 第68表	2住-2欄 器種成	器種成
同上 第294図	銅銭遺構外出土遺物図	遺構外出土銅銭図	189頁 第168図	断面図A・A'	土層番号1
表目次 第33表	竪穴住居址表	竪穴住居址遺構表	195頁 5行目	土師質土器、埴(2)	土師質土器埴(2)
同上 第34表	竪立柱建物址表	竪立柱建物址遺構表	215頁 第99表	44住-1欄 回転へう切り	回転糸切り後一部へうナデ
3頁 4行目	果土木部道路建設課は	果土木部道路建設課より	217頁 2行目	70号住	3号竪穴
6頁 第1図	なし	赤色部分は畑地・集落	231頁 第108表	58住-1欄 備考	外面2次焼成
13頁 第4図	(青字)芦田貝戸遺跡	左へ1cm移動	245頁 第118表	77住-2欄 備考	内面煤付着
17頁 18行目	推定堆積状況は、次頁	推定堆積状況は、前頁	261頁 第129表	9溝-10欄 備考	内外面自然釉
47頁 第32図	熊野堂Ⅱ1号濠井	熊野堂Ⅱ1号濠用井戸	同上	9溝-12欄 備考	外面2次焼成
96頁 第33表	竪穴住居址表	竪穴住居址遺構表	同上	9溝-15欄 備考	外面煤付着
99頁 最下行	北面側	北面側	292頁 第274図	46・66号住、3号竪穴	46・66号住、3号竪穴
100頁 第34表	竪立柱建物址表	竪立柱建物址遺構表	304頁 第284図	土層説明1	暗茶褐色砂質土：B軽石及び
101頁 第81図	1号濠濠用井戸状遺跡	1号濠濠用井戸状遺構			暗青褐色粘質土塊含む
127頁 第103図	平面図の中央数字3	5	307頁 第296図	遺構外-30	遺構外-30-実
132頁 2・3行目	南側で66・70号住	南側で66号住、3号竪穴	315頁 第148表	遺構外57欄 1号不明	不明遺構
134頁 第114図	数字2	3	317頁 第150表	遺構外85欄 備考	内面口縁煤付着
同上	数字3	2	同上	遺構外88欄 備考	外面煤付着
135頁 第115図	69住-2	69住-3	同上	遺構外89欄 備考	内外面煤付着
同上	69住-3-1/4	69住-2-1/4	321頁下より2行目	本遺跡出土の黒曜石は	本遺跡出土の黒曜石製尖頭器は
150頁 第131図	断面図A・A' 第1層	スクリントーン誤り	326頁下より16行目	低地部分に全体	低地部分の全体
152頁 第134図	断面図E・E'・F・F'	別添図参照	図版14最下段中央	15溝-1	15溝-1
152頁 第134図	断面図E・E' 土層番号	線引き出し左より7・9・8	図版17 上	4号竪穴状遺構	1・4号竪穴状遺構
同上	断面図F・F' 土層番号	線引き出し左より8・9	同上 下	3号竪穴状遺構	2・3号竪穴状遺構
158頁 5行目	7~13cm	上層左6、右5	図版30 下	出土状態	出土状態(東より)
同上	土師質土器環(3)	6~12cm	図版32 下	49号住居址炉址	49号住居址炉址遺物出土状態
同頁 6行目	(1・2・4)	土師質土器環(2・3)	図版59 上	竪立柱建物址	竪立柱建物址(北より)
同頁 第67表	1住-2欄 器種埴	(1・4)	同上 下	竪立柱建物址	竪立柱建物址(西より)
159頁 13行目	回転糸切りをもつ同埴(1)	器種埴	付図1 上段左端	水田跡	水田址
		回転糸切りをもつ同埴(1・2)	同上 下段No.25	No.25字の上	柱穴列